大阪府埋蔵文化財調査報告2011－1

蔀屋北遺跡Ⅱ

ーなわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査ー

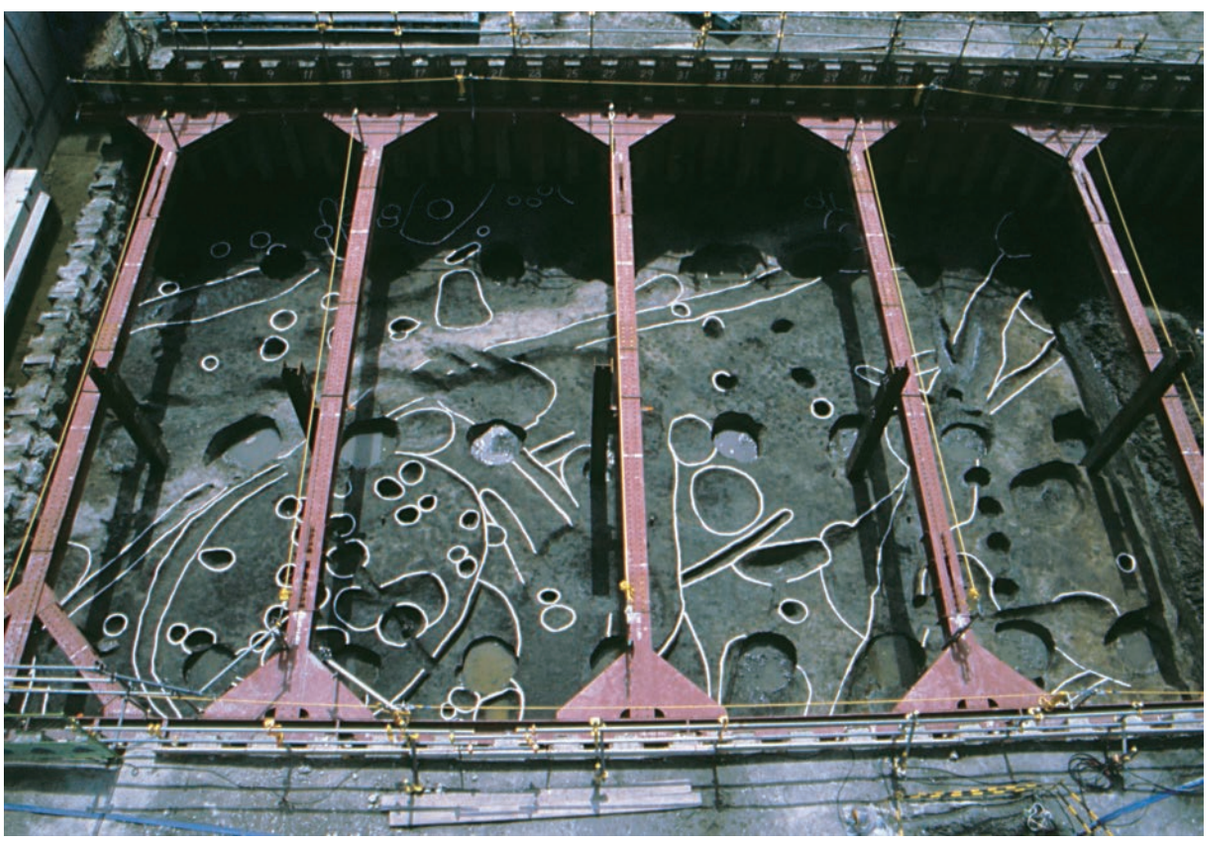
大阪府教育委員会

蔀屋北遺跡Ⅱ

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一一―一

大阪府教育委員会

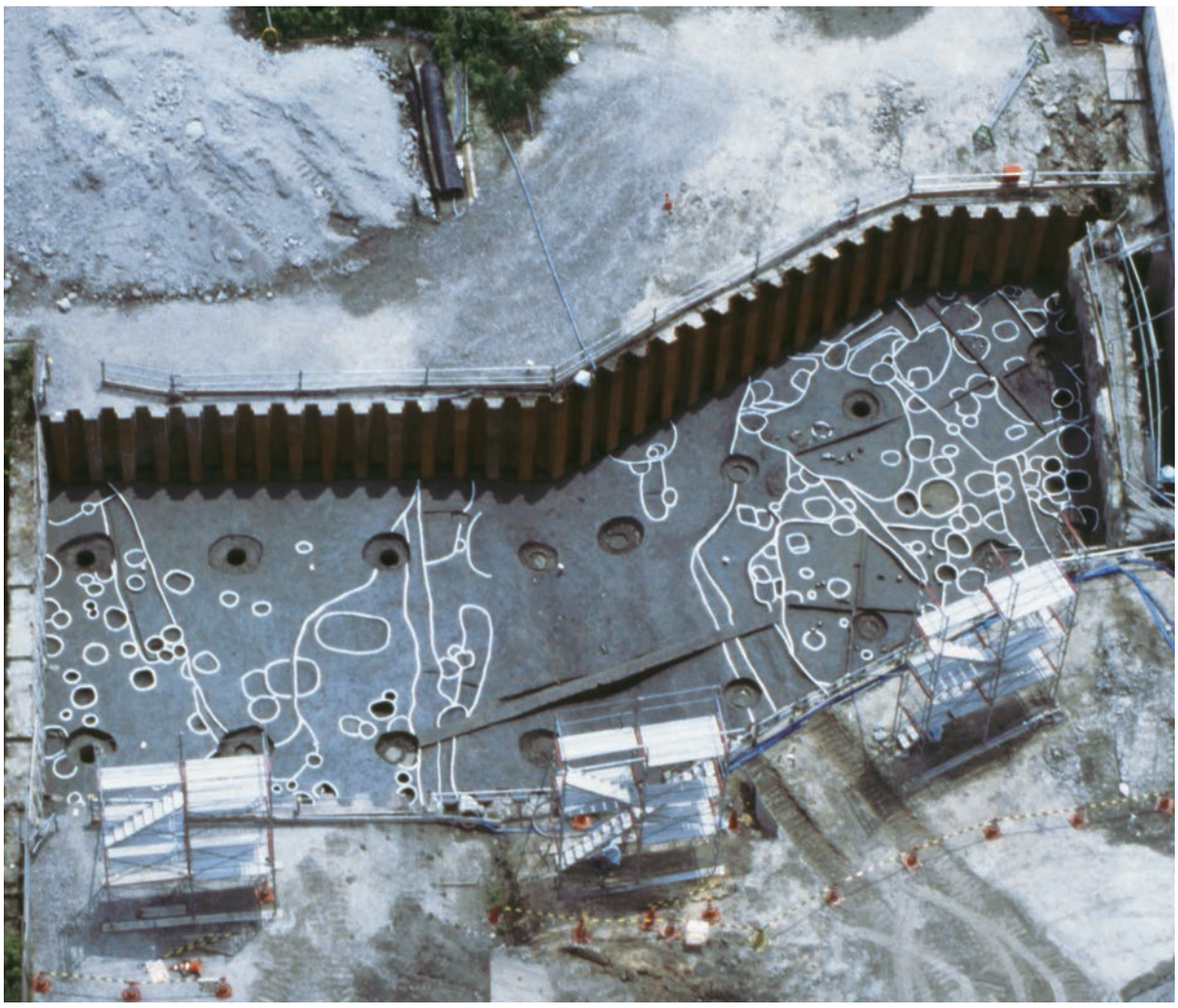
調査地遠景（西より）



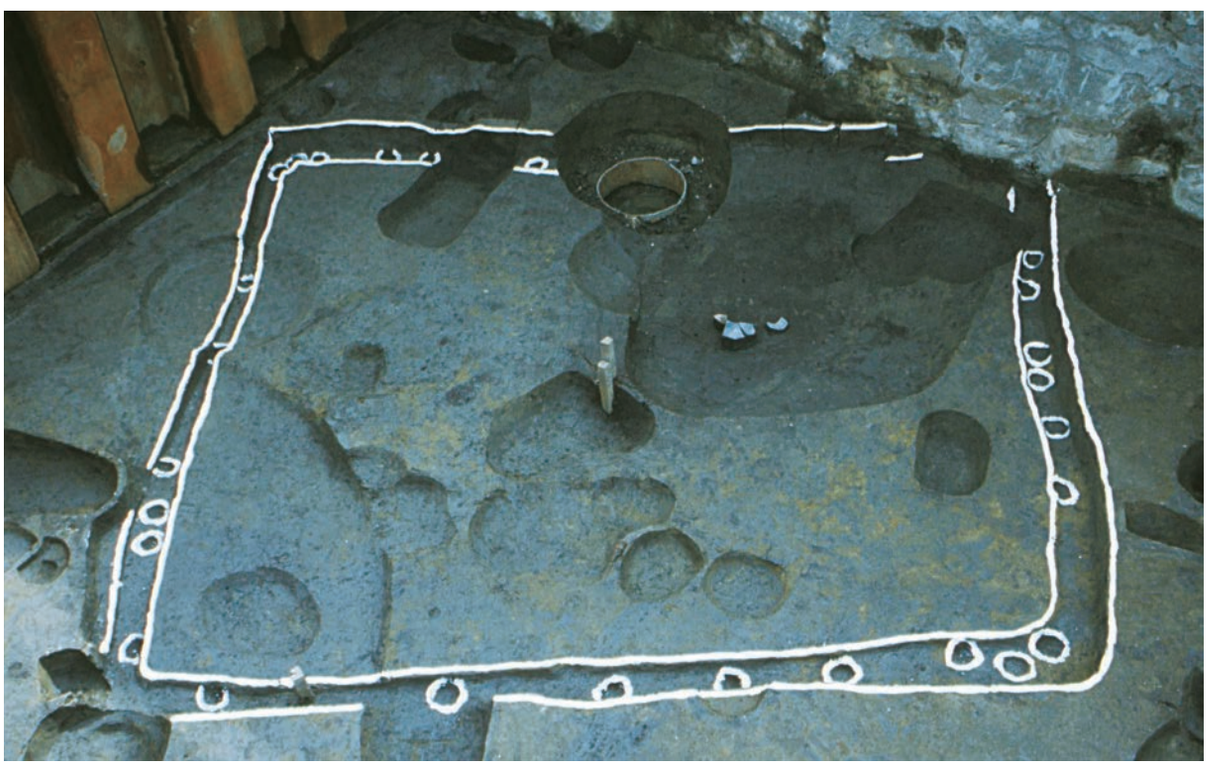
Ｋ１調査区第12面全景（北より）

Ｋ１調査区第10面全景（南より）

Ｋ２調査区第12面全景（南より）



Ｋ３調査区第９面全景（北より）



Ｋ３調査区第９面大壁建物Ｋ３－１（北東より）

竈屋北１期の韓式系土器（手前の２点は土坑Ｋ２－１２０９６出土資料）

竈屋北１期の土師器（井戸Ｋ３－０９１９２出土資料）

蔀屋北３期の土器・土製品（土坑Ｋ１－１０１４４出土資料）

蔀屋北５期の土器・石製品他（溝ＨＴ１－０６００１出土資料）

製塩土器

U字形板状土製品

蔀屋北遺跡Ⅱ

ーなわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査ー

大阪府教育委員会

序　　文

大阪府教育委員会が平成13年度より実施してまいりましたなわて水みらいセンター建設に伴う蔀屋北遺跡の発掘調査は、当初の予想を上回る多大な成果を得つつ、平成21年度を以って完了するに至りました。

平成13年度から平成18年度までの期間で行いました、各主要施設建設予定地の発掘調査につきましては、平成21年度末にその集大成を刊行しましたが、この度は各施設を繋ぐ管廊部分の調査成果を公表する運びとなりました。

これら一連の調査結果から、古墳時代中期から後期にかけての一大集落跡の存在が明らかとなり、検出された多数の遺構や出土した大量の遺物にみられる特徴などから、この集落は朝鮮半島から移り住んだ馬飼い集団が営んだものであることが判りました。

なわて水みらいセンター第一期建設に伴う蔀屋北遺跡の発掘調査も、本報告書の刊行を持ちましてすべての作業が完了することになります。ここまで一定の成果を得られたものと考えていますが、今後、周辺の調査成果を加えることによって、日本書紀などに記述がみられる「河内の牧」の実態が、さらに明確なものになっていくでしょう。

最後になりましたが、調査に際しまして地元住民の方々および関係各位に、多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成24年３月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　野口　雅昭

例　　言

1．本書は、寝屋川流域下水道事業水みらいセンター建設に先立って大阪府教育委員会が実施した、四條畷市砂・蔀屋に所在する蔀屋北遺跡（管廊地区）の発掘調査報告書である。

2．調査は、大阪府都市整備部の依頼を受けた大阪府教育委員会が、文化財保護課調査第一グループの担当で、各施設を繋ぐ管廊部分を対象として平成18年度から平成21年度まで実施した。

遺物整理作業は文化財保護課調査管理グループ三宅正浩・藤田道子が担当して実施した。

各年度の調査対象地、調査担当は以下の通りである。

平成18年度

管廊５地区（平成18年11月24日～ 12月21日）、岡田　賢

平成19年度

管廊４地区（平成19年８月20日～ 10月30日）、岩瀬　透

放流渠地区（平成19年８月20日～ 10月30日）、岩瀬　透

平成19年度～ 20年度

管廊２地区（平成20年３月17日～ ７月17日）、岩瀬　透

管廊３地区（平成20年３月17日～ ７月29日）、岩瀬　透

平成20年度

発進竪坑１地区（平成20年８月７日～ ９月12日）、岩瀬　透

管廊１地区（平成20年10月１日～平成21年３月31日）、岩瀬　透

雨水管竪坑地区（平成21年１月13日～ ２月９日）、岩瀬　透

平成21年度

発進竪坑２地区（平成21年９月８日～ 10月21日）、横田　明

放流溝地区（平成21年11月16日～平成22年３月24日）、横田　明

3．調査の実施にあたっては、大阪府都市整備部下水道室、大阪府東部流域下水道事務所をはじめ、四條畷市教育委員会、地元の砂・蔀屋自治会など、多くの方々のご協力を得た。

4．一部の調査区において写真測量を実施した。その業務は株式会社アイシーに委託して実施し、撮影フィルムは同社が保管している。

また、年度ごとに下記の事業を委託して実施した。

19年度	基準点測量	エムズ
	写真測量（その８）	アイシー
20年度	ガラス玉蛍光X線分析	パレオ・ラボ
	木製品・鉄製品保存処理（その９）	吉田生物研究所
	製塩土器付着物の珪藻分析	パレオ・ラボ
21年度	木製品保存処理(その10)	吉田生物研究所
	基準点測量	大阪測量
	花粉・植物珪藻体分析	古環境研究所
	堆積物微細堆積相分析	パリノ・サーヴェイ
22年度	骨処理委託	スタジオ三十三
	馬骨保存処理委託	スタジオ三十三

５．本書に掲載した現場写真は主に調査担当者が撮影したが、遺物写真の撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。

６．本調査の調査番号は、06038（平成18年度）、07019（平成19年度）、08001（平成20年度）、09001（平成21年度）である。

７．本書の編集は岩瀬が行い、執筆は各地区の調査担当者および宮崎泰史、藤田道子が行った。さらに須恵器の胎土分析については三辻利一氏に担当頂いた。

８．なわて水みらいセンター建設工事に伴う発掘調査・遺物整理、および本書作成に要した経費は、全額を大阪府都市整備部下水道室が負担した。

９．本報告書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は2,973円である。

凡　　例

1．本書で用いた座標値は日本測地系（平面直角座標第Ⅵ系）であるが、遺構全体図には世界測地系座標値も併記している。また、標高は東京湾準潮位（T.P.）で示した。北は座標北を示す。なお、X・Y座標値の単位はmで表示している。

2．遺構の検出地区を表す際に、例えば、本来の正式な地区名が I6－12－A18－j5 の場合、全調査区に共通する部分を省略し、A18j5というように記述している。

3．検出遺構の表記方法は、遺構番号の前に調査区表示を付した。また、複数の遺構で構成されている竪穴住居や掘立柱建物などの場合は、構成する柱穴ごとに番号を付すとともに、竪穴住居Ｋ１－１あるいは掘立建物Ｋ２－２などのように、建物単位で新たに簡素化した番号を付している。

4．古墳時代中・後期の遺構については、調査成果を基に設定した居住域ごとに説明している。

5．挿図（図面）の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致しているが、図版にのみ掲載しているものは、この限りではない。

6．木製品の木取りについては、断面図内に木目を模式的に図示している。

7．須恵器の型式編年は、大阪府教育委員会『陶邑Ⅲ』によっている。

8．土器実測図の断面については、須恵器は黒塗り、韓式系土器、須恵器系土器、土師器は白抜きとした。

目　　次

序　文

例　言

凡　例

第１章　調査の経過と方法……岩瀬　透……1

第１節　調査の経過……1

第２節　調査の方法……2

第２章　調査の成果……岩瀬・岡田　賢・横田　明……4

第１節　層序……岩瀬……4

第１項　Ｋ５調査区……4

第２項　Ｋ４調査区……5

第３項　Ｋ２調査区……9

第４項　Ｋ３調査区……9

第５項　ＨＴ１調査区……11

第６項　Ｋ１調査区……13

第７項　ＵＫ調査区……15

第８項　ＨＴ２調査区……16

第９項　ＨＫ・ＨＭ調査区……18

第２節　弥生時代前期の遺構……岩瀬……19

第１項　Ｋ１調査区……19

第３節　弥生時代中期の遺構……岩瀬……25

第１項　ＨＴ１調査区……25

第２項　Ｋ１調査区……25

第４節　古墳時代中期～後期の遺構……岩瀬・岡田・横田……38

第１項　Ｋ５調査区……岡田……38

1. 北西居住域……41

2. 北西居住域と西居住域を区画する溝……46

第２項　Ｋ４調査区……岩瀬……46

1. 西居住域……46

2. 南西居住域……48

3. 西居住域と南西居住域を区画する溝……48

第３項　Ｋ２調査区……岩瀬……52

1. 北東居住域 …… 53
2. 北東居住域を区画する溝 …… 71
3. 古墳時代後期の生産域 …… 74
第４項　Ｋ３調査区 …… 岩瀬 …… 75
1. 南西居住域 …… 75
第５項　ＨＴ１調査区 …… 岩瀬 …… 88
1. 集落域縁辺部 …… 88
第６項　Ｋ１調査区 …… 岩瀬 …… 89
1. 北東居住域 …… 90
第７項　ＵＫ調査区 …… 岩瀬 …… 104
第８項　ＨＴ２調査区 …… 岩瀬・横田 …… 104
第５節　飛鳥時代以降の遺構 …… 岩瀬・横田 …… 105
第１項　Ｋ２調査区 …… 岩瀬 …… 105
1. 平安時代後期の遺構 …… 105
第２項　Ｋ３調査区 …… 岩瀬 …… 113
1. 八丁堤道 …… 114
第３項　ＨＴ１調査区 …… 岩瀬 …… 114
1. 平安時代の遺構 …… 114
第４項　Ｋ１調査区 …… 岩瀬 …… 116
1. 奈良時代の流路 …… 116
2. 平安時代の流路 …… 116
第５項　ＵＫ調査区 …… 岩瀬 …… 117
1. 平安時代の遺構 …… 117
第６項　ＨＫ・ＨＭ調査区 …… 横田 …… 118
1. 八丁堤道 …… 118
第６節　弥生時代前期の遺物 …… 岩瀬 …… 119
第１項　Ｋ１調査区 …… 119
第７節　弥生時代中期の遺物 …… 岩瀬 …… 121
第１項　Ｋ１調査区 …… 121
第８節　古墳時代中期～後期の遺物 …… 岩瀬 …… 133
第１項　Ｋ４調査区 …… 133
1. 南西居住域 …… 133
2. 西居住域と南西居住域を区画する溝 …… 133
3. Ｋ４調査区包含層出土遺物 …… 134

第２項　Ｋ２調査区 …… 134
1. 北東居住域 …… 134
2. 北東居住域を区画する溝 …… 136
3. Ｋ２調査区包含層出土遺物 …… 137
第３項　Ｋ３調査区 …… 137
1. 南西居住域 …… 137
2. Ｋ３調査区包含層出土遺物 …… 140
第４項　ＨＴ１調査区 …… 140
1. 集落域縁辺部 …… 140
第５項　Ｋ１調査区 …… 141
1. 北東居住域 …… 141
2. Ｋ１調査区包含層出土遺物 …… 144
第６項　ＵＫ調査区 …… 174
1. 集落を西限する大溝 …… 174
第７項　ＨＴ２調査区 …… 174
1. 集落を西限する大溝 …… 174
第９節　飛鳥時代以降の遺物 …… 岩瀬 …… 174
第１項　Ｋ２調査区 …… 174
第２項　Ｋ１調査区 …… 176
第３項　ＵＫ調査区 …… 176
第４項　Ｋ４調査区 …… 178
第５項　ＨＴ２調査区 …… 178
第３章　総括 …… 179
第１節　遺構の変遷 …… 岩瀬 …… 179
第２節　古墳時代中・後期の土器・土製品 …… 藤田道子 …… 187
第３節　動物遺存体 …… 宮崎泰史 …… 219
第４節　管廊地区出土の木製品 …… 岡田 …… 221
第５節　蔀屋北遺跡出土の準構造船 …… 岩瀬 …… 225
第６節　大溝出土の初期騎乗用馬具 …… 岩瀬 …… 239
第７節　蔀屋北遺跡出土古墳時代木製品について …… 岡田 …… 264
第４章　分析 …… 281
１．蔀屋北遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析 …… 三辻利一 …… 281
付章　観察表 …… 285

挿　図　目　次

第１図　蔀屋北遺跡の位置 …… 1
第２図　調査区位置図 …… 3
第３図　Ｋ５調査区東壁土層断面図 …… 4
第４図　Ｋ４調査区西壁土層断面図 …… 6
第５図　Ｋ２調査区南壁土層断面図 …… 8
第６図　Ｋ３調査区南壁土層断面図 …… 10
第７図　ＨＴ１調査区南壁土層断面図 …… 12
第８図　Ｋ１調査区南壁土層断面図 …… 14
第９図　ＵＫ調査区中央畦土層断面図 …… 16
第10図　ＨＴ２調査区東壁土層断面図 …… 17
第11図　ＨＫ調査区北壁土層断面図 …… 18
第12図　Ｋ１調査区弥生時代前期前葉遺構面（第15面）全体平面図 …… 20
第13図　流路Ｋ１－１５００１平面図・土層断面図 …… 21
第14図　Ｋ１調査区弥生時代前期遺構面（第13面）全体平面図 …… 22
第15図　流路Ｋ１－１３００１平面図・土層断面図 …… 23
第16図　ＨＴ１調査区弥生時代中期遺構面（第12面）全体平面図 …… 24
第17図　Ｋ１調査区弥生時代中期前葉遺構面（第12面）全体平面図 …… 26
第18図　竪穴住居Ｋ１－１２１２２平面図・土層断面図 …… 27
第19図　土坑Ｋ１－１２１０５平面図・土層断面図 …… 28
第20図　土坑Ｋ１－１２１０５遺物出土状況平面図・断面図 …… 29
第21図　Ｋ１調査区弥生時代中期中葉遺構面（第11面）全体平面図 …… 30
第22図　竪穴住居Ｋ１－１１０３４平面図・土層断面図 …… 31
第23図　土坑Ｋ１－１１０３１平面図・土層断面図 …… 32
第24図　土坑Ｋ１－１１０３１遺物出土状況平面図・断面図 …… 33
第25図　土坑Ｋ１－１１０５１平面図・土層断面図 …… 34
第26図　土坑Ｋ１－１１０５１遺物出土状況平面図・断面図 …… 34
第27図　土坑Ｋ１－１１０５２平面図・土層断面図 …… 35
第28図　土坑Ｋ１－１１０５２遺物出土状況平面図・断面図 …… 36
第29図　溝Ｋ１－１１０１３平面図・土層断面図 …… 37
第30図　溝Ｋ１－１１０１３遺物出土状況平面図・断面図 …… 38
第31図　Ｋ５調査区古墳時代中期～後期遺構面（第12面）全体平面図 …… 39･40

第32図　掘立柱建物Ｋ５－１平面図・断面図 …… 41
第33図　掘立柱建物Ｋ５－２平面図・断面図 …… 42
第34図　土坑Ｋ５－１２０６１・溝Ｋ５－１２０４０平面図・土層断面図 …… 42
第35図　Ｋ４調査区古墳時代中期～後期遺構面（第９面）全体平面図…… 43･44
第36図　掘立柱建物Ｋ４－１平面図・土層断面図…… 45
第37図　溝Ｋ４－０９０３０平面図・土層断面図…… 46
第38図　溝Ｋ４－０９０００２平面図・土層断面図…… 46
第39図　区画溝Ｋ４－０９０００１・Ｋ４－０９０００３平面図・土層断面図 …… 47
第40図　区画溝Ｋ４－０９０００３遺物出土状況平面図・断面図…… 47
第41図　Ｋ２調査区古墳時代中期～後期遺構面（第12面）全体平面図…… 49･50
第42図　竪穴住居Ｋ２－１（１２０９７）平面図…… 51
第43図　竪穴住居Ｋ２－１（１２０９７）Ｃ調査区との接合図…… 51
第44図　竪穴住居Ｋ２－１（１２０９７）カマド検出状況平面図・土層断面図
・完掘状況平面図 …… 52
第45図　竪穴住居Ｋ２－２（１２０８７）平面図・土層断面図…… 53
第46図　竪穴住居Ｋ２－２（１２０８７）カマド検出状況平面図・土層断面図
・炭層検出状況平面図・完掘状況平面図…… 54
第47図　竪穴住居Ｋ２－２（１２０８７）遺物出土状況平面図・断面図 …… 55
第48図　竪穴住居Ｋ２－３（１２１９２）平面図・土層断面図…… 56
第49図　竪穴住居Ｋ２－３（１２１９２）カマド検出状況平面図・土層断面図
・完掘状況平面図 …… 57
第50図　掘立柱建物Ｋ２－１平面図・土層断面図…… 58
第51図　掘立柱建物Ｋ２－１Ｃ調査区との接合図…… 59
第52図　掘立柱建物Ｋ２－２平面図・土層断面図…… 60
第53図　掘立柱建物Ｋ２－３平面図・断面図 …… 60
第54図　掘立柱建物Ｋ２－４平面図・断面図 …… 61
第55図　掘立柱建物Ｋ２－５平面図・断面図 …… 61
第56図　土坑Ｋ２－１２０９６平面図・土層断面図 …… 62
第57図　土坑Ｋ２－１２０９６遺物出土状況平面図・断面図 …… 63
第58図　土坑Ｋ２－１２１３０平面図・土層断面図 …… 64
第59図　溝Ｋ２－１２０１１平面図・土層断面図…… 65
第60図　溝Ｋ２－１２０１８平面図・土層断面図…… 66
第61図　溝Ｋ２－１２０２３平面図・土層断面図…… 66
第62図　溝Ｋ２－１２０２４平面図・土層断面図…… 67

第63図　溝Ｋ２－１２０２９平面図・土層断面図…… 68
第64図　溝Ｋ２－１２０６６平面図・土層断面図…… 68
第65図　溝Ｋ２－１２０８８平面図・土層断面図…… 69
第66図　区画溝Ｋ２－１２００９平面図・土層断面図 …… 70
第67図　区画溝Ｋ２－１２０１０平面図・土層断面図 …… 71
第68図　Ｋ３調査区古墳時代中期～後期遺構面（第９面）全体平面図…… 72
第69図　大壁建物Ｋ３－１（Ｋ３－０９１３３）平面図・断面図・土層断面図 …… 73
第70図　竪穴住居Ｋ３－２（Ｋ３－０９１０８）平面図・土層断面図…… 74
第71図　竪穴住居Ｋ３－２（Ｋ３－０９１０８）遺物出土状況平面図・断面図 …… 75
第72図　竪穴住居Ｋ３－３（Ｋ３－０９０３９）平面図・断面図 …… 76
第73図　掘立柱建物Ｋ３－１平面図・土層断面図・Ｂ調査区との接合図 …… 77
第74図　掘立柱建物Ｋ３－２平面図・土層断面図・Ｅ調査区との接合図 …… 78
第75図　掘立柱建物Ｋ３－３平面図・断面図 …… 79
第76図　井戸Ｋ３－０９１９２平面図・土層断面図 …… 80
第77図　井戸Ｋ３－０９１９２遺物出土状況平面図・断面図 …… 81
第78図　落ち込みＫ３－０９０５０平面図・土層断面図…… 83･84
第79図　落ち込みＫ３－０９０５０遺物出土状況平面図・断面図 …… 85
第80図　土坑Ｋ３－０９０９１平面図・土層断面図・遺物出土状況平面図・断面図…… 86
第81図　土坑Ｋ３－０９１５０平面図・土層断面図・遺物出土状況平面図・断面図…… 87
第82図　溝Ｋ３－０９１００平面図・土層断面図…… 88
第83図　溝Ｋ３－０９１３６平面図・土層断面図…… 89
第84図　ＨＴ１調査区古墳時代中期遺構面（第７面）全体平面図 …… 90
第85図　ＨＴ１調査区古墳時代後期遺構面（第６面）全体平面図 …… 91
第86図　溝ＨＴ１－０６００１平面図・土層断面図 …… 92
第87図　溝ＨＴ１－０６００１出土状況平面図・断面図…… 93
第88図　Ｋ１調査区古墳時代中期～後期遺構面（第10面）全体平面図…… 94
第89図　竪穴住居Ｋ１－１（Ｋ１－１０００１）平面図・土層断面図…… 95
第90図　竪穴住居Ｋ１－１（Ｋ１－１０００１）カマド検出状況平面図・土層断面図
・完掘状況平面図 …… 95
第91図　竪穴住居Ｋ１－２（Ｋ１－１０００２）平面図・土層断面図…… 96
第92図　掘立柱建物Ｋ１－１平面図・土層断面図・Ｃ調査区との接合図 …… 97
第93図　掘立柱建物Ｋ１－２平面図・土層断面図…… 98
第94図　掘立柱建物Ｋ１－２Ｃ調査区との接合図…… 99
第95図　掘立柱建物Ｋ１－３平面図・断面図 …… 100

第96図　掘立柱建物Ｋ１－４平面図・断面図 …… 101
第97図　掘立柱建物Ｋ１－５平面図・土層断面図・Ｄ調査区との接合図 …… 102
第98図　井戸Ｋ１－１０１４８遺物出土状況平面図・断面図 …… 103
第99図　土坑Ｋ１－１０１４４平面図・土層断面図 …… 104
第100図　土坑Ｋ１－１０１４４遺物出土状況平面図・断面図 …… 105
第101図　土坑Ｋ１－１０１３８平面図・土層断面図 …… 106
第102図　土坑Ｋ１－１０００３平面図・土層断面図 …… 107
第103図　土坑Ｋ１－１０００３遺物出土状況平面図・断面図 …… 108
第104図　Ｋ１調査区古墳時代後期遺構面（第９面）全体平面図 …… 109
第105図　竪穴住居Ｋ１－３（Ｋ１－０９０６０）平面図・土層断面図 …… 110
第106図　Ｋ１調査区古墳時代後期～終末期遺構面（第８面）全体平面図 …… 111
第107図　流路Ｋ１－０８０１３平面図・土層断面図 …… 112
第108図　ＵＫ調査区古墳時代中・後期遺構面（第８面）全体平面図 …… 113
第109図　ＨＴ２調査区大溝ＨＴ２平面図・土層断面図 …… 114
第110図　Ｋ２調査区平安時代後期遺構面（第４面）全体平面図 …… 115
第111図　Ｋ２調査区鎌倉時代前期遺構面（第３面）全体平面図 …… 115
第112図　土坑Ｋ２－０４０４８平面図・土層断面図 …… 116
第113図　土坑Ｋ２－０４０５５平面図・土層断面図 …… 116
第114図　土坑Ｋ２－０４０５０平面図・土層断面図 …… 116
第115図　掘立柱建物Ｋ２－０３００１平面図・土層断面図 …… 117
第116図　土坑Ｋ２－０３０３９平面図・土層断面図 …… 117
第117図　Ｋ３調査区八丁堤道平面図・土層断面図 …… 118
第118図　ＨＴ１調査区平安時代後期遺構面（第３面）全体平面図 …… 119
第119図　Ｋ１調査区平安時代遺構面（第４面）全体平面図 …… 120
第120図　ＵＫ調査区平安時代遺構面（第３面）全体平面図 …… 121
第121図　弥生時代出土遺物（１）　Ｋ１調査区 …… 127
第122図　弥生時代出土遺物（２）　Ｋ１調査区 …… 128
第123図　弥生時代出土遺物（３）　Ｋ１調査区 …… 129
第124図　弥生時代出土遺物（４）　Ｋ１調査区 …… 130
第125図　弥生時代出土遺物（５）　Ｋ１調査区 …… 131
第126図　弥生時代出土遺物（６）　Ｋ１調査区 …… 132
第127図　古墳時代出土遺物（１）　Ｋ４調査区 …… 145
第128図　古墳時代出土遺物（２）　Ｋ２調査区 …… 146
第129図　古墳時代出土遺物（３）　Ｋ２調査区 …… 147

第130図　古墳時代出土遺物（４）　Ｋ２調査区…… 148
第131図　古墳時代出土遺物（５）　Ｋ２調査区…… 149
第132図　古墳時代出土遺物（６）　Ｋ３調査区…… 150
第133図　古墳時代出土遺物（７）　Ｋ３調査区…… 151
第134図　古墳時代出土遺物（８）　Ｋ３調査区…… 152
第135図　古墳時代出土遺物（９）　Ｋ３調査区…… 153
第136図　古墳時代出土遺物（10）　Ｋ３調査区…… 154
第137図　古墳時代出土遺物（11）　ＨＴ１調査区 …… 155
第138図　古墳時代出土遺物（12）　Ｋ１調査区…… 156
第139図　古墳時代出土遺物（13）　Ｋ１調査区…… 157
第140図　古墳時代出土遺物（14）　Ｋ１調査区…… 158
第141図　古墳時代出土遺物（15）　Ｋ１調査区…… 159
第142図　古墳時代出土遺物（16）　Ｋ１調査区…… 160
第143図　古墳時代出土遺物（17）　Ｋ１調査区…… 161
第144図　古墳時代出土遺物（18）　Ｋ１調査区…… 162
第145図　古墳時代出土遺物（19）　Ｋ１調査区…… 163
第146図　古墳時代出土遺物（20）　Ｋ１調査区…… 164
第147図　古墳時代出土遺物（21）　Ｋ１調査区…… 165
第148図　古墳時代出土遺物（22）　Ｋ１調査区…… 166
第149図　古墳時代出土遺物（23）　Ｋ１調査区…… 167
第150図　古墳時代出土遺物（24）　Ｋ３・ＨＴ２・ＵＫ調査区 …… 168
第151図　古墳時代出土遺物（25）　Ｕ字形板状土製品…… 169
第152図　古墳時代出土遺物（26）　Ｕ字形板状土製品…… 170
第153図　古墳時代出土遺物（27）　石製品 …… 171
第154図　古墳時代出土遺物（28）　木製品 …… 172
第155図　古墳時代出土遺物（29）　木製品 …… 173
第156図　飛鳥時代以降出土遺物　　Ｋ１・Ｋ２・Ｋ４・ＨＴ２調査区 …… 177
第157図　蔀屋北遺跡弥生時代中期遺構全体図 …… 181･182
第158図　蔀屋北遺跡古墳時代中・後期遺構全体図…… 185･186
第159図　韓式系土器（壺・甕、平底鉢、甑、鍋）細部の形状の分類 …… 190
第160図　韓式系土器・土製品（羽釜、移動式カマド、Ｕ字形板状土製品）
　　細部の形状の分類 …… 191
第161図　土師器甕口縁部の形状の分類 …… 195
第162図　土師器高坏の型式の代表例…… 196

第163図　小型製塩土器の代表例 …… 196
第164図　土師器鉢の型式の代表例 …… 197
第165図　須恵器系土器の代表例 …… 197
第166図　１期と３期の韓式系土器群の比較…… 211
第167図　木の本遺跡出土Ｕ字形板状土製品…… 213
第168図　３期と５期の須恵器系土器…… 214
第169図　各土坑における小型製塩土器の組み合わせ …… 214
第170図　船１船材実測図 …… 229
第171図　船２船材実測図 …… 230
第172図　船３船材実測図 …… 231
第173図　船５船材実測図 …… 232
第174図　船６船材実測図（1）…… 233
第175図　船６船材実測図（2）…… 234
第176図　舷側板、櫂、アカ取り、竜骨実測図 …… 235
第177図　木製輪鐙の類例 …… 240
第178図　蔀屋北遺跡出土の鉄製鑣轡…… 242
第179図　蔀屋北遺跡大溝０９０００１鉄製鑣轡出土状況…… 242
第180図　鉄製鑣轡の類例（１）…… 245
第181図　鉄製鑣轡の類例（２）…… 246
第182図　鉄製鑣轡の類例（３）…… 247
第183図　木製鞍の類例（１）…… 248
第184図　木製鞍の類例（２）…… 249
第185図　木製鞍の類例（３）…… 250
第186図　蔀屋北遺跡出土木製品（補足１）…… 272
第187図　蔀屋北遺跡出土木製品（補足２）…… 273
第188図　蔀屋北１期の木製品…… 274
第189図　蔀屋北２期の木製品…… 275
第190図　蔀屋北３期の木製品・1…… 276
第191図　蔀屋北３期の木製品・2…… 277
第192図　蔀屋北４期の木製品…… 278
第193図　蔀屋北５期の木製品・1…… 289
第194図　土蔀屋北５期の木製品・2 …… 280
第195図　蔀屋北遺跡出土須恵器の両分布図…… 282
第196図　蔀屋北遺跡出土須恵器の産地推定（K、Ca、Rb、Sr）…… 283

表　目　次

表１　蔀屋北集落編年時期区分及び須恵器編年対照表…… 180
表２　韓式系土器の分類項目 …… 188･189
表３　土師器鉢型式分類 …… 192
表４　土師器高坏の型式分類 …… 194
表５　高坏脚部の接合技法…… 195
表６　甕の分類項目…… 195
表７　須恵器系土器の器種分類 …… 195
表８　製塩土器の器種分類…… 195
表９　遺構時期区分表 …… 209
表10　Ｕ字形板状土製品観察表 …… 217
表11　小型製塩土器集計表…… 218
表12　管廊地区出土動物遺存体同定結果一覧 …… 220
表13　ウマ下顎骨の計測値…… 220
表14　木製品観察表…… 220
表15　蔀屋北遺跡出土の準構造船一覧 …… 237
表16　列島出土の初期騎乗用馬具…… 255
表17　木製品（補足）観察表 …… 265
表18　蔀屋北遺跡出土須恵器の分析データ …… 284

図　版　目　次

巻頭図版１　調査地遠景（西より）　Ｋ１調査区第12面全景（北より）
巻頭図版２　Ｋ１調査区第10面全景（南より）　Ｋ２調査区第12面全景（南より）
巻頭図版３　Ｋ３調査区第９面全景（北より）　Ｋ３調査区第９面大壁建物Ｋ３－１（北東より）
巻頭図版４　蔀屋北１期の韓式系土器　蔀屋北１期の土師器
巻頭図版５　蔀屋北３期の土器・土製品　蔀屋北５期の土器・石製品他
巻頭図版６　製塩土器　Ｕ字形板状土製品

図版 １　蔀屋北遺跡全景航空写真
図版 ２　調査区遠景（南より）　調査区遠景（西より）
図版 ３　弥生時代　　第15面調査区全景（北より）　流路Ｋ１－１５００１遺物出土状況（東

Ｋ１調査区　より）　第14面調査区全景（北より）　流路Ｋ１－１４００１断面（西より）第13面調査区全景（北より）　第13面調査区北東半部（北西より）　第13面調査区南東半部（北西より）　ピットＫ１－１３０５８石鏃出土状況　第13面調査区北西端部足跡検出状況（南東より）

図版 4　Ｋ１調査区　第12面調査区全景（北より）　竪穴住居Ｋ１－１２１２２全景（南西より）・遺物出土状況　土坑Ｋ１－１２１０５遺物出土状況（東より）・同　部分拡大　ピットＫ１－１２０５２断面・柱根検出状況（東より）　ピットＫ１－１２０６５断面・柱根検出状況(南より）　ピットＫ１－１２０４８断面・柱根検出状況（南東より）

図版 5　Ｋ１調査区　第11面調査区全景（北より）　竪穴住居Ｋ１－１１０３４全景（北より）　方形周溝墓Ｋ１－１１０１０全景（北より）　土坑Ｋ１－１１０３１遺物出土状況（南より）　土坑Ｋ１－１１０５１遺物出土状況（北西より）　土坑Ｋ１－１１０５２全景（南より）・遺物出土状況（南より）・断面（南より・西より）

図版 6　Ｋ１調査区　溝Ｋ１－１１０１３全景（北より）・断面（西より）・木製品出土状況（西より）・同　拡大・石包丁出土状況・木製品出土状況　溝Ｋ１－１１０５６石斧出土状況　土坑Ｋ１－１１０５８遺物出土状況（北より）　土坑Ｋ１－１１０３７石鏃出土状況　ピットＫ１－１１０４５礎板検出状況　第11面調査区南東部包含層甕蓋出土状況

図版 7　古墳時代中～後期　Ｋ５調査区　第12面調査区全景（西より）　掘立柱建物Ｋ５－１全景（西より）　掘立柱建物Ｋ５－２全景(北東より）　南東部区画溝Ｋ５－１２０４０全景(北東より）

図版 8　Ｋ４調査区　第９面調査区全景（東より）　掘立柱建物Ｋ４－１全景（西より）

図版 9　Ｋ４調査区　区画溝Ｋ４－０９００１・０９００３全景（東より）　区画溝Ｋ４－０９００３遺物出土状況　区画溝Ｋ４－０９００１埴輪片出土状況・遺物出土状況　溝Ｋ４－０９０３０全景（東より）　溝Ｋ４－０９００２全景(北より）

図版 10　Ｋ２調査区　第12面調査区全景（南より）　第12面調査区全景（西より）

図版 11　Ｋ２調査区　竪穴住居Ｋ２－１完掘（北より）・遺物出土状況（北東より）・カマド検出状況（北西より）　竪穴住居Ｋ２－２完掘（北西より）・主柱穴Ｋ２－１２１６９・１２１７０遺物出土状況

図版 12　Ｋ２調査区　竪穴住居Ｋ２－２カマド遺物出土状況・炭層検出状況・支脚検出状況　竪穴住居Ｋ２－２炭層検出状況（北西より）・遺物出土状況　竪穴住居Ｋ２－３完掘（南より）・カマド遺物出土状況・支脚検出状況

図版13　Ｋ２調査区　掘立柱建物Ｋ２－１完掘（西より）・柱穴Ｋ２－１２０７７・１２１２１・１２１２２柱根・礎板検出状況　掘立柱建物Ｋ２－２完掘（南東より）・柱穴Ｋ２－１２０５０・１２０９９・１２０９４・１２１０８断面

図版14　Ｋ２調査区　掘立柱建物Ｋ２－３完掘（南東より）・柱穴Ｋ２－１２１１６礎板検出状況・柱穴Ｋ２－１２０４７・１２０４９断面　掘立柱建物Ｋ２－４完掘（北より）・柱穴Ｋ２－１２１９４・１２０７４・１２０７０・１２０７１・１２１５１礎板検出状況

図版15　Ｋ２調査区　掘立柱建物Ｋ２－５完掘（南東より）・柱穴Ｋ２－１２１１４・１２０３６柱根検出状況・柱穴Ｋ２－１２０４２断面　柵列Ｋ２－１全景（北より）・柱穴Ｋ２－１２１７６柱根検出状況　柱穴Ｋ２－１２０２２・１２０１７・１２０１９断面

図版16　Ｋ２調査区　土坑Ｋ２－１２０９６遺物出土状況（北より）・同　部分拡大・断面（南東より）　土坑Ｋ２－１２１３０東西断面・南北断面・遺物出土状況

図版17　Ｋ２調査区　ピットＫ２－１２０６１・１２１５７柱根検出状況　ピットＫ２－１２１１７・１２０８４礎板検出状況　溝Ｋ２－１２０２４全景（北より）・断面（北東より）

図版18　Ｋ２調査区　区画溝Ｋ２－１２００９完掘（北より）・断面・遺物出土状況　区画溝Ｋ２－１２０１０完掘（北より）・樹皮出土状況（南より）・樹皮付近出土遺物（製塩土器・木製品・馬歯）・樹皮下出土遺物（木製品・土器）

図版19　Ｋ３調査区　第９面調査区全景（南より）　第９面調査区全景（東より）

図版20　Ｋ３調査区　大壁建物Ｋ３－１全景（北東より）・柱痕検出状況（西より）・住居内遺物出土状況（東より）　竪穴住居Ｋ３－２全景（南より）・住居内遺物出土状況（南より）・同　部分拡大

図版21　Ｋ３調査区　竪穴住居Ｋ３－３全景（北より）　掘立柱建物Ｋ３－１全景（西より）・柱穴Ｋ３－０９００６・０９００７・０９００９断面

図版22　Ｋ３調査区　掘立柱建物Ｋ３－２全景（東より）・柱穴Ｋ３－０９１２４・０９１２３・０９１２２・０９１３１断面　掘立柱建物Ｋ３－３全景（南より）・柱穴Ｋ３－０９２１５・０９０７９・０９２１４・０９２１６・０９０３７・０９０３０・０９０３１・０９２００・０９０３５・０９２１７断面

図版23　Ｋ３調査区　井戸Ｋ３－０９１９２完掘（東より）・取り上げ２回目遺物出土状況・同部分拡大・取り上げ４－１回目遺物出土状況・同　部分拡大（馬歯）・取り上げ４－３回目遺物出土状況・取り上げ６回目遺物出土状況・取り上げ７回目遺物出土状況・取り上げ８回目遺物出土状況

図版24　Ｋ３調査区　落ち込みＫ３－０９０５０完掘（北より）・遺物出土状況（北より）・南西端部遺物出土状況（北西より）・断面（南東より）・南半部（最下層）遺物出土状況（北より）・同　部分拡大（Ｕ字形板状土製品・種子溜まり・石製品・木製品）・北半部（最下層）遺物出土状況（北より）・同　部分拡大（土器・木製品・須恵器）

図版25　Ｋ３調査区　土坑Ｋ３－０９０９１全景（東より）・遺物出土状況　土坑Ｋ３－０９１４９遺物出土状況　土坑Ｋ３－０９１５０遺物出土状況　土坑Ｋ３－０９１５７遺物出土状況　土坑Ｋ３－０９１９７遺物出土状況

ＨＴ1調査区　第７面調査区全景（南より）

図版26　ＨＴ1調査区　土坑ＨＴ１－０７００７遺物出土状況（東より）・同　西半部拡大・同　東半部拡大　調査区南壁内遺物出土状況　第６面調査区全景（南より）

図版27　ＨＴ1調査区　溝ＨＴ１－０６００１遺物出土状況・同　部分拡大（土玉）　土坑ＨＴ１－０６００３遺物出土状況（東より・北より）・同　部分拡大（瓊・甑）

Ｋ１調査区　第10面調査区全景

図版28　Ｋ１調査区　竪穴住居Ｋ１－１・Ｋ１－２全景（北西より）　竪穴住居Ｋ１－１カマド検出状況（北西より）　掘立柱建物Ｋ１－１全景（南西より）・柱穴Ｋ１－１０２６８・１０２２５・１０１６３・１０１７３・１０２２３・１００６４・１０１６８・１０２４３礎板検出状況

図版29　Ｋ１調査区　掘立柱建物Ｋ１－２全景（南西より）掘立柱建物Ｋ１－３全景（南より）・柱穴Ｋ１－１００４４・１０２０４・１０２４１柱根検出状況・柱穴Ｋ１－１００８３断面　掘立柱建物Ｋ１－４全景（南東より）・柱穴Ｋ１－１０１４５・１００２３柱根検出状況・柱穴Ｋ１－１００４１断面

図版30　Ｋ１調査区　掘立柱建物Ｋ１－５全景（南東より）・柱穴Ｋ１－１０２６４・１００１６・１００２１柱根検出状況　井戸Ｋ１－１０１４８全景（西より）・遺物出土状況　土坑Ｋ１－１０００３遺物出土状況（北より）・同　部分拡大　土坑Ｋ１－１０１３８全景（北西より）　土坑Ｋ１－１００４２Ｕ字形板状土製品出土状況

図版31　Ｋ１調査区　土坑Ｋ１－１０１４４全景（南より）・遺物出土状況・同　部分拡大 建物Ｋ１－５柱穴Ｋ１－１００３３柱根検出状況　ピットＫ１－１００７６・１０１５８・１０１６６・１０１７０・１０１８８柱根検出状況

図版32　Ｋ１調査区　ピットＫ１－１０１４３・１０２４７柱根検出状況　第９面調査区全景（北より）　竪穴住居Ｋ１－３・Ｋ１－４全景（北より）

ＵＫ調査区　第８面大溝ＵＫ－００１ 全景（北東より）・遺物出土状況（北東より・北より）・同　部分拡大・木製品出土状況

図版 33　飛鳥時代以降　第４面調査区東部（北より）・中央部（北より）　土坑Ｋ２－０４０５０断面・遺物出土状況・同　部分拡大　土坑Ｋ２－０４０５７全景・遺物出土状況　第３面調査区西端部（北より）　掘立柱建物Ｋ２－０３００１全景（北より）
Ｋ２調査区
Ｋ３調査区　八丁堤道東半部・西半部（北より）

図版 34　弥生時代出土遺物（１）　Ｋ１調査区

図版 35　弥生時代出土遺物（２）　Ｋ１調査区

図版 36　弥生時代出土遺物（３）　Ｋ１調査区

図版 37　弥生時代出土遺物（４）　Ｋ１調査区

図版 38　古墳時代出土遺物（１）　Ｋ４調査区

図版 39　古墳時代出土遺物（２）　Ｋ２調査区

図版 40　古墳時代出土遺物（３）　Ｋ２調査区

図版 41　古墳時代出土遺物（４）　Ｋ２調査区

図版 42　古墳時代（５）・平安時代出土遺物　Ｋ２調査区

図版 43　古墳時代出土遺物（６）　Ｋ３調査区

図版 44　古墳時代出土遺物（７）　Ｋ３調査区

図版 45　古墳時代出土遺物（８）　Ｋ３調査区

図版 46　古墳時代出土遺物（９）　Ｋ３調査区

図版 47　古墳時代出土遺物（10）　Ｋ３調査区

図版 48　古墳時代出土遺物（11）　Ｋ３調査区

図版 49　古墳時代出土遺物（12）　ＨＴ１調査区

図版 50　古墳時代出土遺物（13）　ＨＴ１調査区

図版 51　古墳時代出土遺物（14）　ＨＴ１調査区

図版 52　古墳時代出土遺物（15）　Ｋ１調査区

図版 53　古墳時代出土遺物（16）　Ｋ１調査区

図版 54　古墳時代出土遺物（17）　Ｋ１調査区

図版 55　古墳時代出土遺物（18）　Ｋ１調査区

図版 56　古墳時代出土遺物（19）　Ｋ１調査区

図版 57　古墳時代（20）・奈良時代出土遺物　Ｋ１調査区

図版 58　古墳時代出土遺物（21）　Ｋ１調査区

図版 59　古墳時代出土遺物（22）　ＵＫ・Ｋ１調査区

図版 60　古墳時代出土遺物（23）

図版 61　古墳時代出土遺物（24）

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査の経過

平成18年度上半期をもって主要施設建設予定地の発掘調査が終了したが、それに引き続いて、各施設間を連結する管廊等関連施設を対象とした発掘調査が、平成21年度まで実施された。各年度の調査地区等は以下の通りである。

平成18年度

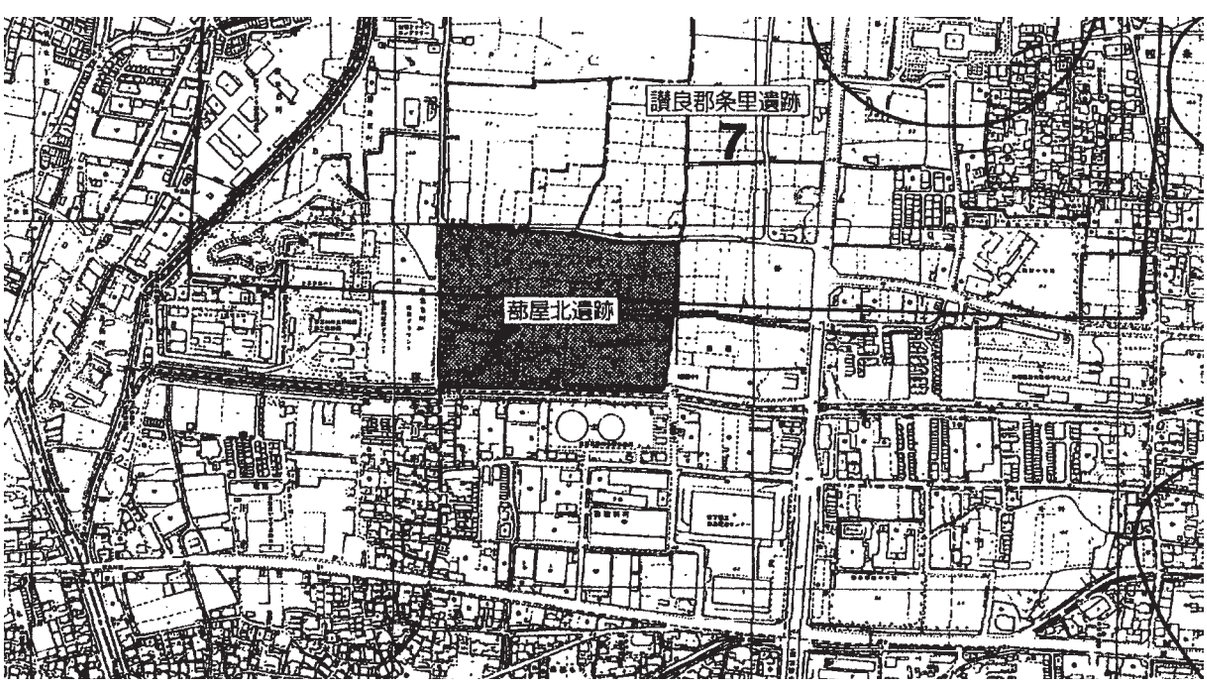
平成18年度は、平成18年９月15日に完了したＦ調査区の調査に引き続き、１箇所の調査が実施された。

Ｆ調査区とＤ調査区を繋ぐ管廊５地区（Ｋ５調査区・約70㎡）で、調査第一グループ技師岡田賢を現地担当者として、平成18年11月24日から同年12月21日までの期間を費やして実施した。

平成19年度

平成19年度は、４箇所の調査を実施した。

Ｆ調査区とＥ調査区を繋ぐ管廊４地区（Ｋ４調査区・60㎡）および、Ｅ調査区から岡部川に処理水を放流するための管渠である放流渠（ＨＫ調査区・200㎡）の調査を、平成19年８月20日から同年10月30日まで、調査第一グループ技師岩瀬　透を現地担当者として実施した。さらにＥ調査区とＢ調査区を繋ぐ管廊３地区（Ｋ３調査区・310㎡）の調査を、平成20年３月17日から同年７月17日まで、Ｆ調査区とＣ調査区を繋ぐ管廊２地区（Ｋ２調査区・350㎡）の調査を、平成20年３月17日から同年７月29日まで、平成20年度までの債務負担事業で、岩瀬　透を現地担当者として実施した。



第１図　蔀屋北遺跡の位置

平成20年度

平成20年度は、平成19年度からの債務負担事業としての２箇所と、その他に３箇所の計５箇所の調査を実施した。

平成19年度からの債務負担事業として実施されたＫ３調査区とＫ２調査区の調査は、Ｋ３調査区が平成20年７月20日、Ｋ２調査区が同年７月29日に完了した。その後は、下水管の発進竪坑である発進竪坑１地区（ＨＴ１調査区・54㎡）の調査を、平成20年８月７日から同年９月12日まで、Ｄ調査区とＣ調査区を繋ぐ管廊１地区（Ｋ１調査区・440㎡）の調査を、平成20年10月１日から平成21年３月31日まで、場内の雨水を排水する管渠である雨水管渠地区（ＵＫ調査区・89㎡）の調査を、平成21年１月13日から同年２月９日までの期間を費やして、岩瀬　透を現地担当者として実施した。

平成21年度

平成21年度は、３箇所の調査を実施するとともに、それと平行して遺物整理も実施した。

下水管の発進竪坑である発進竪坑２地区（ＨＴ２調査区・56㎡）の調査を、平成21年９月８日から同年10月21日まで、放流渠から岡部川への放流溝である放流溝地区（ＨＭ調査区・300㎡）の調査を、北半部を平成21年11月16日から同年12月４日まで、南半部を平成22年３月11日から同年３月24日までの期間を費やして、調査第一グループ副主査横田　明を現地担当者として実施した。ＨＭ調査区の調査をもって、なわて水みらいセンター建設に係る蔀屋北遺跡の発掘調査はすべて完了するに至った。遺物整理は調査管理グループ主査三宅正浩、同副主査藤田道子を担当者として、平成21年９月８日から平成22年３月31日まで実施した。

平成22年度

平成22年度は昨年度から引き続き、遺物整理を三宅正浩、藤田道子を担当者として、平成22年４月１日から実施するとともに、岩瀬　透を主担当として報告書作成作業を実施した。

平成23年度

平成23年度は昨年度から引き続き、遺物整理を三宅正浩、藤田道子を担当者として平成23年４月１日から実施するとともに、並行して報告書作成作業を実施し、報告書の刊行をもってすべての作業を完了した。

第２節　調査の方法

なわて水みらいセンター管廊建設予定地地区の発掘調査は、主要各地区の調査に引き続いて実施されている施設建設工事の進捗状況を鑑み、順次工事と平行して実施された。

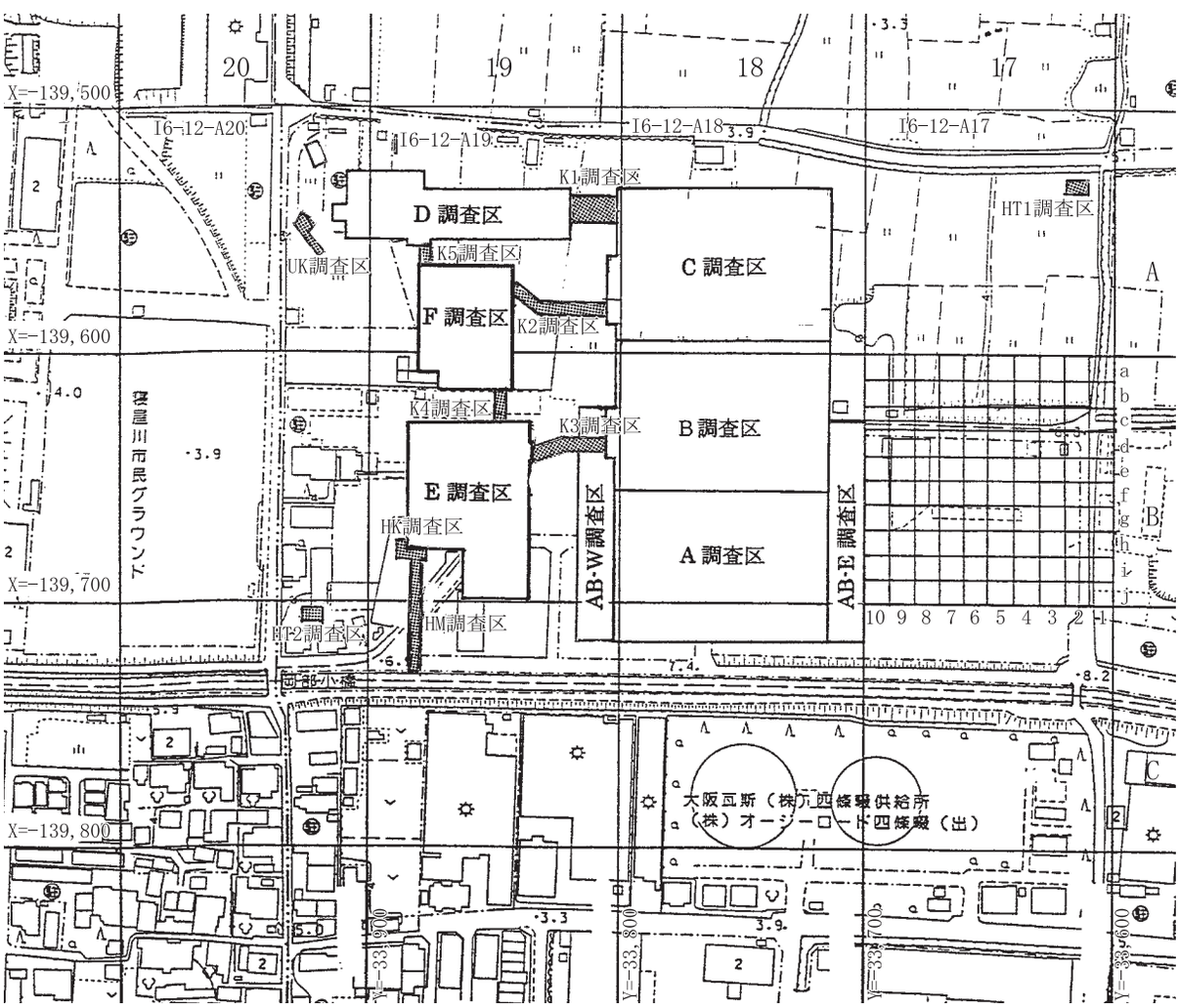
調査区の地区割りは、1/2500地形図（都市計画図）を基本（東西２㎞、南北1.5㎞）として、この地図を300等分し、100ｍ四方の区画を設定した。この区画は南北方向のアルファベット大文字と東西方向のアラビア数字で表現し、南北に北から南へＡ～Ｏの15列、東西に東から西へ１～

20の20列あり、区画を表す場合は縦方向を優先して記載する。さらに100m四方の区画を100等分して10m四方の区画を設定する。この区画はアルファベット小文字（ａ～ｊ）とアラビア数字（１～10）で表現し、区画を表す場合は縦方向を優先している。また、遺物取り上げの際の地区名はこの区画名を記入している。

検出した遺構には各調査区の遺構面単位で検出順に番号を付している。例えば管廊４地区の第８面で検出した溝３の場合は溝Ｋ４－０８００１と表現する。但し、掘立柱建物のように複数の遺構の組み合わせで形成される遺構の場合は、個々の遺構に付した通し番号とは別に、掘立柱建物跡Ｋ４－１などと表現した。そして各柱穴には固有の通し番号が付されており、必要に応じて両者を併記することにした。

掘削に際しては、整地土をバックホウで機械掘削し、その下層については１層ずつ人力で掘削したうえで、精査・遺構検出、遺構掘削を行った。

検出した遺構面の実測については、主要な遺構面の遺構全体図については写真測量を実施し、その他の遺構面および個々の遺構、遺物出土状況等の実測については、必要に応じて５m四方に設定した地区杭を基準にして実測図を作成した。また、調査区および各遺構の断面図は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準として作成した。



第２図　調査区位置図

第２章　調査の成果

第１節　層序

第１項　Ｋ５調査区

Ｋ５調査区は、地表面（T. P. 4.1m付近）より管廊床付け面（T. P. 1.1m）までの深度4.0mを調査対象として掘削し、計13面の遺構面を検出した。

調査区北端部付近のT. P. 1.1mで遺構面を検出した。この面が第13遺構面で、青灰色の粘土ないしはシルトが基本的にベースとなる。

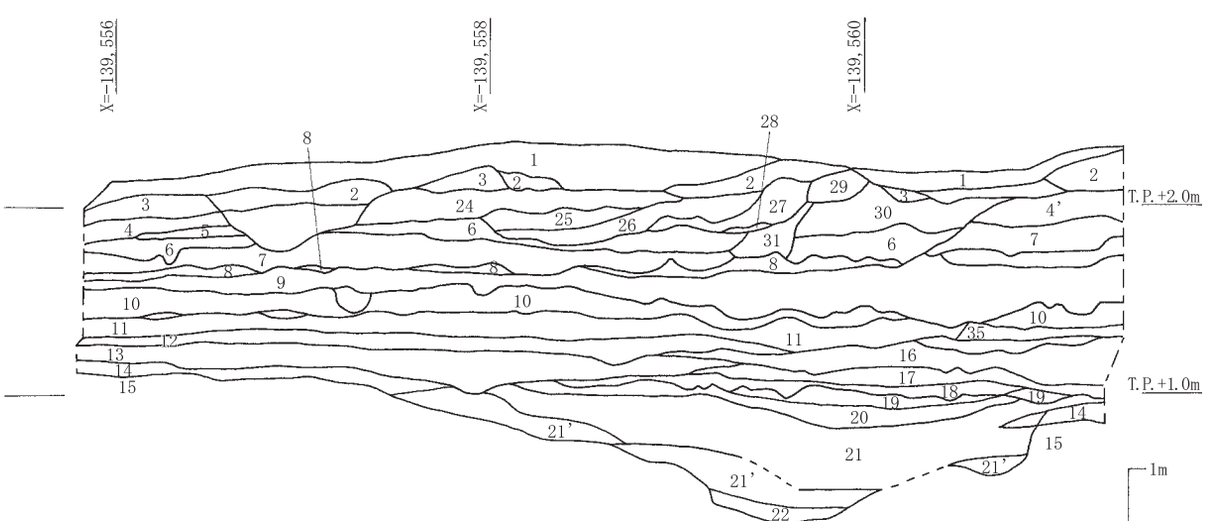
その上には、第14層の青灰色のブロックが混入した暗灰色粘土が部分的に堆積し、この層は５世紀の遺物包含層である。

その上には、第13層の灰色粘質シルトが堆積し、この層は６世紀の遺物包含層である。

北端部で認められた谷状地形には、灰色ないしは灰白色の粘質と砂質のシルトが堆積し、その上層に第12層のオリーブ灰色系の粘質シルトが堆積する。その上面が第12遺構面で、水田が検出された。

その上には、第11層オリーブ黒色粘質シルトが堆積し、その上面が第11遺構面で、奈良時代の水田を検出した。

その上には、調査区北東半部にのみ第10層灰色粘質シルト、第９層灰色～緑灰色シルトが堆積し、それぞれの上面が第10遺構面、第９遺構面となっている。いずれも水田面である。



1 灰色～灰オリーブ色砂質シルト
2 灰黄色粗～中粒砂
3 灰白色砂質シルト
3'灰黄褐色粘質土
4 灰白色粗～中粒砂
4'オリーブ黒色粘質シルト
5 灰黄色砂礫層
6 オリーブ灰色砂質シルト
7 黒色粘質シルト
8 オリーブ黒色粘質シルト
9 灰色～緑灰色シルト
10 灰色粘質シルト
11 オリーブ黒色粘質シルト
12 オリーブ灰色系の粘質シルト
13 灰色粘質シルト
14 青灰色混じり暗灰色粘土
15 青灰色粘土～シルト
16 オリーブ色粗～中粒砂
17 灰色細粒砂
18～22 古墳時代区画溝埋土
23～31 中世水田に関わる遺構埋土

第３図　Ｋ５調査区東壁土層断面図

その上には、第８層オリーブ黒色粘質シルトが調査区全域で堆積し、その上面が第８遺構面となっている。平安時代後期の水田面で、讃良郡条里の施行時期と合致するものである。

その上層には、調査区北半に第７層黒色粘質シルトが堆積し、その上面が第７遺構面で、水田が検出された。

その上には、第６層オリーブ灰色砂質シルトが調査区全域に堆積し、その上面が第６遺構面で、水田が検出された。

その上には、北半部には灰黄色砂礫層が、南半部にはオリーブ黒色粘質シルトが堆積し、その上面が第５遺構面で、北半部では中世の集落域が、南半部では水田が検出された。

その上には、第４層灰白色粗～中粒砂と灰黄褐色粘質土が堆積し、その上面が第４遺構面で、北半部では中世（12世紀末～ 13世紀）の集落域が、南半部では水田が検出された。

その上には、第３層灰白色砂質シルトが堆積し、その上面が第３遺構面で、中世の水田が検出された。

その上には、第２層灰黄色粗～中粒砂からなる洪水砂が堆積し、その上面が第２遺構面で、近世の島畠が検出された。

その上には、第１層灰色～灰オリーブ色砂質シルトが堆積し、その上面が第１遺構面で、近世の耕作地が検出された。

第２項　Ｋ４調査区

Ｋ４調査区は、地表面（T. P. 4.1m付近）より管廊床付け面（T. P. 0.2m）までの深度3.9mを調査対象として掘削し、計９面の遺構面を検出した。

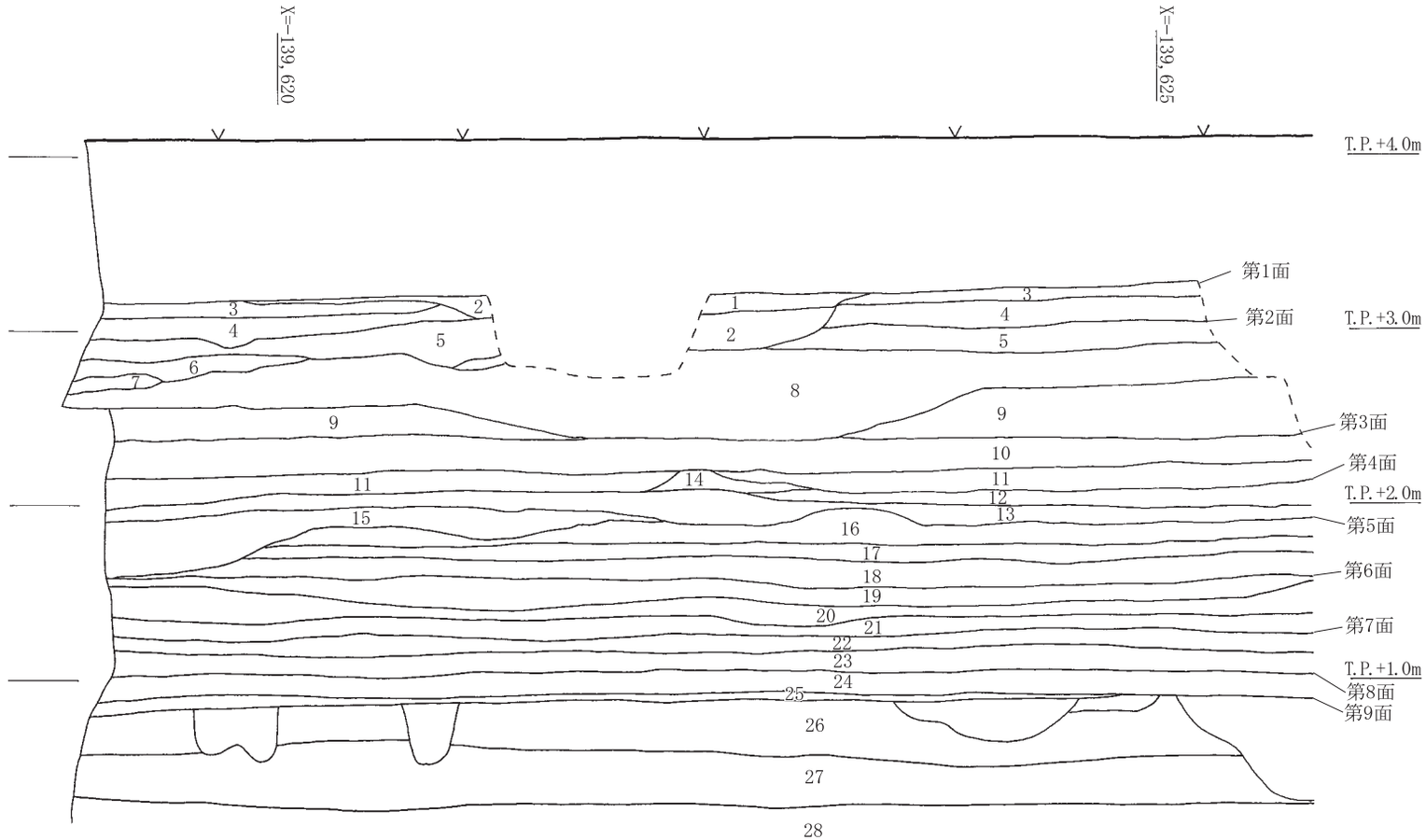
調査によって確認した最も前出の遺構面は、第26層緑灰色粘土上面（T. P. 0.8m～ 0.9m）で検出した第９遺構面で、古墳時代中・後期の遺構が検出された。

緑灰色粘土上には、第25層黒灰色粘土と第24層暗茶褐色粘土が堆積しており、これらは５世紀～６世紀の遺物包含層となっている。

暗茶褐色粘土上面（T. P. 1.0m）が第８遺構面で、人および牛馬のものと考えられる足跡を検出した。畦畔などは認められなかったが、耕作地と考えられる。直上に堆積する第23層と第22層から７世紀～８世紀の土器が出土しており、第８面は飛鳥時代～奈良時代に比定できるものと考える。

第８面の上には、第23層暗茶褐色粘質シルトと第22層暗緑灰色粘土が堆積しており、これらは７世紀～８世紀の遺物包含層となっている。

暗緑灰色粘土上面（T. P. 1.2m～ 1.3m）が第７遺構面で、第８面と同様に畦畔などは認められなかったが、第７面も耕作地と考えられる。直上に堆積する第21層と第20層から９世紀の土器が出土しており、第７面は平安時代前期に比定できるものと考える。



管廊4土色
1 灰黒色土
2 灰緑色土
3 青灰色土（鉄分沈着多い）
4 黄灰色混じりの灰色青色土
5 黄灰色砂質土
6 淡灰黄色微砂
7 暗灰色粘質土
8 淡灰黄色粗砂（礫・灰色粘質土ブロック含む）
9 灰白色砂
10 暗灰色粘土
11 暗灰色砂質土
12 暗灰色砂混じり粘土
13 黄灰色砂と暗灰色粘土の互層
14 暗灰色粘土
15 灰白色砂
16 暗灰色砂混じり粘質土
17 暗灰褐色砂混じり粘質土
18 暗灰色砂質土
19 暗緑灰色砂混じり粘土
20 暗灰黄色砂（暗灰色砂質土ブロック含む）
21 暗灰褐色粘土
22 暗緑灰色粘土（Ca多く含む）
23 暗茶褐色粘質シルト
24 暗茶褐色粘土
25 黒灰色粘土
26 緑灰色粘土
27 緑灰色シルト
28 茶褐色粘土

0 1 2m

第４図　Ｋ４調査区西壁土層断面図

暗緑灰色粘土上には、第21層暗灰褐色粘土、第20層暗灰色砂質土ブロックを含む暗灰黄色砂、第19層暗緑灰色砂混じり粘土が堆積しており、そのうち第19層が10世紀の遺物包含層となっている。

暗緑灰色砂混じり粘土上面（T. P. 1.6m付近）が第６遺構面で、畦畔などは認められなかったが、第６面も耕作地と考えられる。遺構面精査時および直上に堆積する第18層、第17層、第16層から10世紀の土器が出土しており、第６面は平安時代中期に比定できるものと考える。

暗緑灰色砂混じり粘土の上には、第18層暗灰色砂質土、第17層暗灰褐色砂混じり粘質土、第16層暗灰色砂混じり粘質土などが堆積しており、これらの層は10世紀の遺物包含層となっている。

暗灰色砂混じり粘質土上面（T. P. 1.6m～ 1.9m）が第５遺構面で、調査区中央南寄りに東西方向の畦畔が認められ、その北側は北方向への傾斜面となっている。南側は耕作地であったと考えられる。直上に堆積する第15層、第13層、第12層から12世紀の土器が出土しており、第５面は平安時代後期に比定できるものと考える。

暗灰色砂混じり粘質土上には、まず北側傾斜面に第15層灰白色砂が堆積し、T. P. 1.9m付近でフラットになった段階で第13層黄灰色砂と暗灰色粘土の互層が全面に、その後第12層暗灰色砂混じり粘土が南半部に堆積する。これらは12世紀の遺物包含層になっている。

北半部の黄灰色砂と暗灰色粘土の互層および南半部の暗灰色砂混じり粘土上面（T. P. 2.1m付近）が第４遺構面で、東西方向および南北方向の畦畔が検出された。遺構面精査時および直上に堆積する第11層、第10層から13世紀～ 14世紀の土器が出土しており、第４面は鎌倉時代に比定できるものと考える。

北半部の黄灰色砂と暗灰色粘土の互層および南半部の暗灰色砂混じり粘土上には、第11層暗灰色砂質土、第10層暗灰色粘土が堆積しており、これらは13世紀～ 14世紀の遺物包含層になっている。

暗灰色粘土上面（T. P. 2.4m付近）が第３遺構面で、畦畔などは認められなかったが、耕作地と考えられる。直上に堆積する第８層から15世紀の土器が出土しており、第３面は鎌倉時代～室町時代に比定できるものと考える。

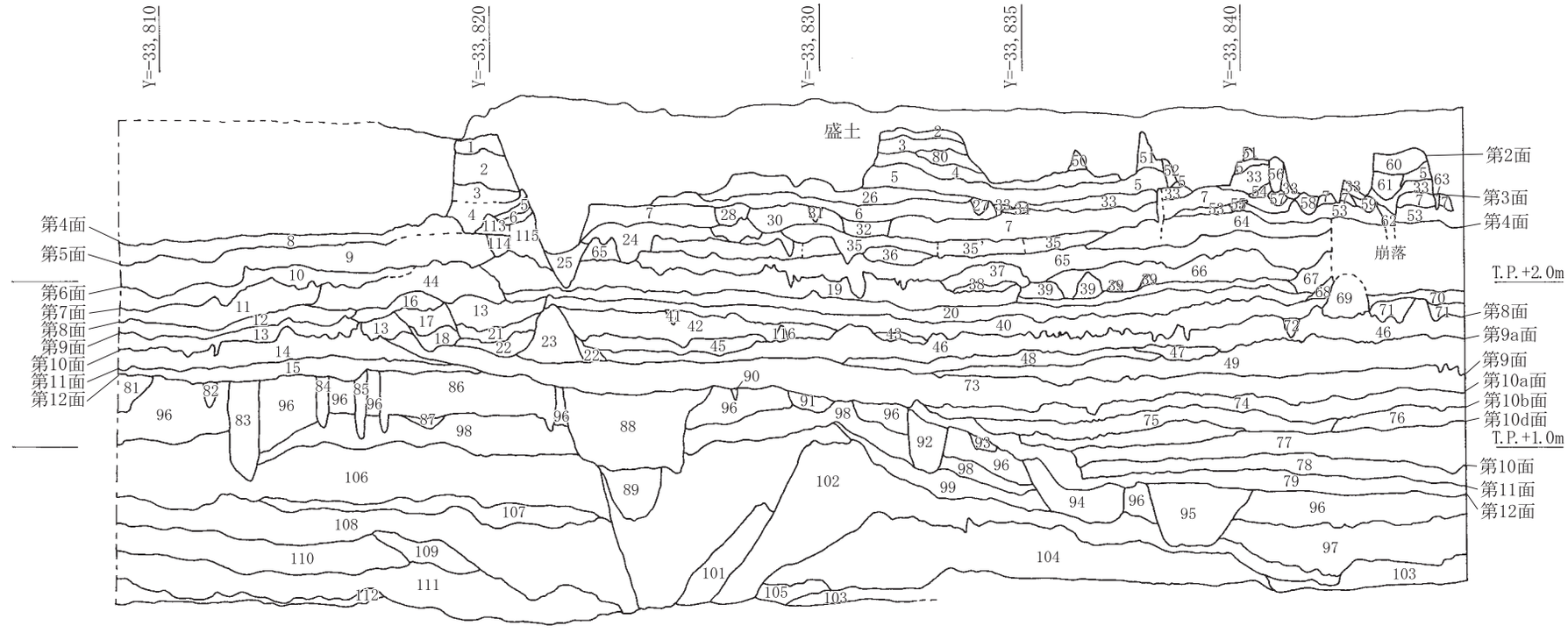
暗灰色粘土上には、中央部を除く南北両端部に第９層灰白色砂が堆積し、その後全面に第８層淡灰黄色粗砂、第５層黄灰色砂質土が堆積しており、第８層が15世紀の遺物包含層になっている。

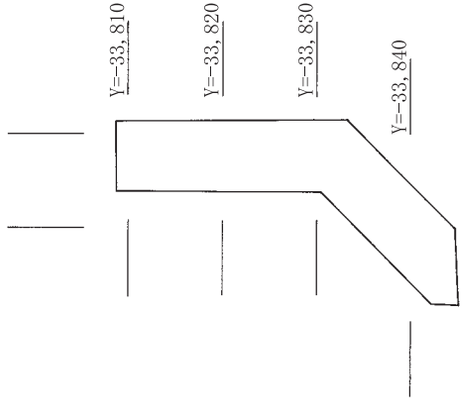
黄灰色砂質土上面（T. P. 3.0m付近）が第２遺構面で、溝が検出された。第２面は室町時代に比定できるものと思われる。

黄灰色砂質土上には、第４層黄灰色混じりの灰青色土、第３層青灰色土が堆積しており、第４層が16世紀の遺物包含層になっている。

青灰色土上面（T. P. 3.3m付近）が第１遺構面で、溝が検出された。

第１面上は、近世以降の整地土が0.8m程の層厚で、現地表面まで認められる。





1 表土
2 黄灰色粗砂～シルト（床土）
3 灰色シルト～粗砂
4 明青灰色細砂に黄褐色粗砂ブロック混入
5 灰色細砂～シルトに褐色細砂混入
6 暗灰色シルト～細砂　粗砂微量混入
7 暗青緑灰色シルトに細砂少量混入
67 灰白色粗砂
68 暗灰色砂質土
69 灰白色粗砂
70 暗褐色シルト
71 灰白色粗砂
72 薄灰褐色細砂
73 暗褐色粘質土（粘質強い）
74 暗灰色砂混じり粘質土
75 灰色粘土と明灰色シルトの互層
（上部に黄灰色粗砂）
76 灰白色粗砂・灰色シルト混じり
77 暗灰色粘質土に黄灰色砂ブロック

17 暗灰色シルト混じり灰色砂
18 暗灰色粘土　砂混じり
19 暗灰色粘質土（やや黒味強い）
20 灰褐色砂
21 薄灰褐色砂混じりシルト
22 暗灰色砂混じりシルト
23 暗灰色シルト
82 溝０６６
83 ピット０７０
84 ピット１６４
85 ピット１６６
86 竪穴０８７
87 土坑１８１
88 溝０２４
89 土坑０９６
90 溝０２５
91 溝０１８
92 溝０１１
93 溝０１２

33 黒灰色粘質細砂（包含層）
34 黄灰色粗砂
35 暗灰色粘質細砂（鉄分多い）
35'灰色粘質土（砂少量混入）
36 灰色粘質土に黄灰色粗砂混入
36'暗灰色粘質土
37 暗灰色シルト～粘質土
98 暗灰色砂混じりシルト
100 灰色砂質シルト、黄灰色極細砂、
薄灰色砂の互層（ラミナ状）
101 灰色粗砂と暗褐色シルトの互層
（ラミナ状）植物遺体多く含む
102 灰色粗砂、暗灰色シルト、
黄灰色粗砂の互層（ラミナ状）
103 暗灰色粘質シルト　植物遺体含む
104 灰色細砂、暗灰色シルト、
灰色粗砂の互層（ラミナ状）
105 灰色極細砂　植物遺体少量含む
106 暗灰色シルト　黄灰色極細砂を少量含む

47 暗褐色シルト（砂混じり）
48 暗灰色粘質シルト
49 灰褐色シルト混じり灰白色粗砂
50 黄灰色シルト（粗砂ブロック含む）
51 明灰黄色粗砂
52 灰色シルト～細砂
53 暗灰色シルト～細砂
106 暗灰色シルト　黄灰色極細砂を少量含む
111 黒灰色粘質シルト　極細礫を少量含む
112 黄灰色粗砂
113 青灰色粘質土　黄色粗砂ブロック混入
114 明青灰色粘質土　粗砂少量混入
115 暗青灰色粘質土
116 暗灰褐色砂混じりシルト

第５図　Ｋ２調査区南壁土層断面図

第３項　Ｋ２調査区

Ｋ２調査区は、地表面（T. P. 3.2m付近）より管廊床付け面（T. P. 0.2m）までの深度３ｍを調査対象として掘削し、計13面の遺構面を検出した。

調査によって確認した最も前出の遺構面は、暗褐色粘質シルト上面（T. P. 0.2m）で検出した第13遺構面で、調査区内に遺構はみられなかったが、北方に隣接するＤ調査区で検出された弥生時代中期前葉（畿内第Ⅱ様式から第Ⅲ様式古段階）の遺構面に対応する面と考えられ、西に隣接するＦ調査区と同じ様相を呈しているものといえる。

第12遺構面は第69層の緑灰色粘土ないしはシルト上面で検出した面であるが、調査区の中央付近に東が高く（T. P. 1.4m付近）西が低い（T. P. 0.8m付近）0.6m程の段が存在し、東側の段上に古墳時代中・後期の遺構が多数検出された。これらは北東居住域に属する遺構である。段の直下には区画溝が２条認められ、その西側には、隣接するＦ調査区から続く古墳時代後期の水田跡であったと考えられる。

西半部の第12面の上には、第11遺構面（T. P. 0.9m付近）と第10遺構面（T. P. 1.0m付近）の２つの遺構面を含む６つの層が堆積しており、その最上面で東半部とほぼフラットになる（T. P. 1.4m付近）。第10面には小区画の水田が認められた。７世紀～８世紀のものと考えられる。

その上には、調査区の全面に粘質の強い暗灰色粘土が堆積し、その上面（T. P. 1.6m付近）が第９遺構面となる。

第９面の上には、第８遺構面（T. P. 1.7m付近）、第７遺構面（T. P. 2.0m付近）、第６遺構面（T. P. 2.2m付近）、第５遺構面（T. P. 2.3m付近）の４つの遺構面が確認できた。畦畔等が検出されなかった面もあるが、いずれも耕作地となっていたと考えられ、９世紀～ 11世紀に比定されるものと考える。

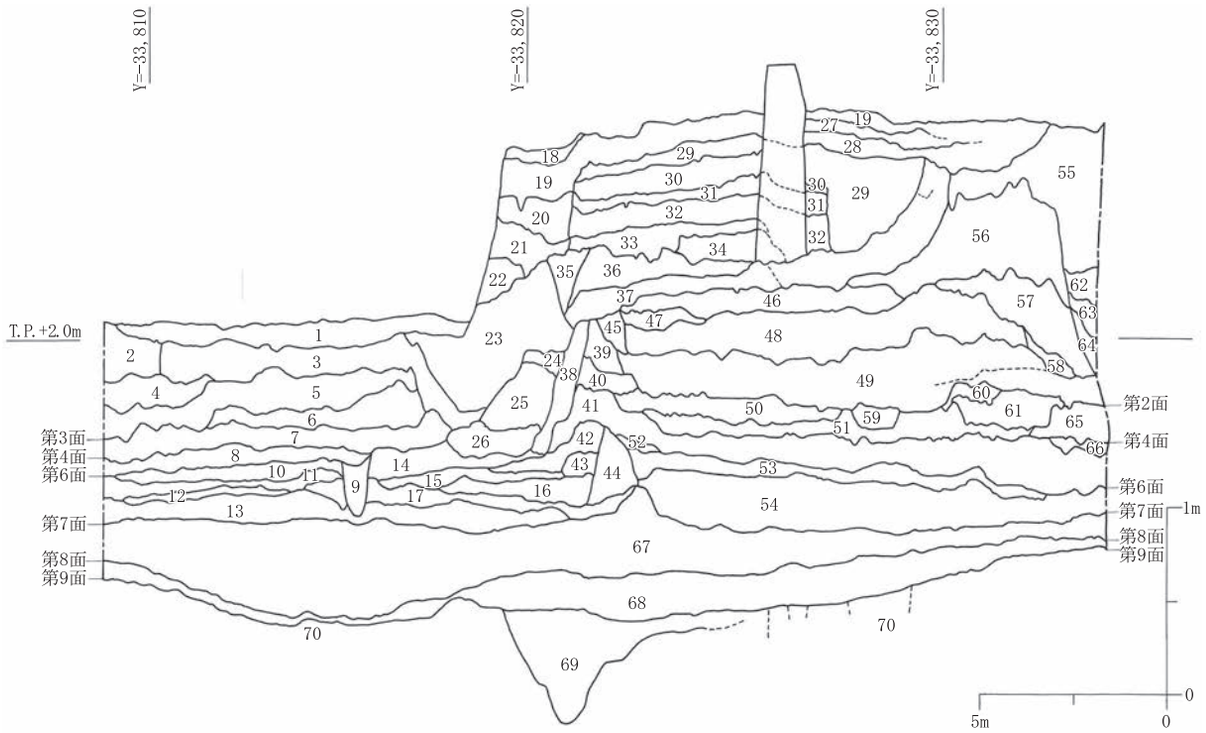
第５面の上には、粗砂を含む暗青灰色と青灰色の粘質土が堆積し、その上面（T. P. 2.4m付近）が第４遺構面となる。この面では土坑や溝などが検出され、12世紀のものと考えられる黒色土器Ｂ類や土師器などが多数出土した。

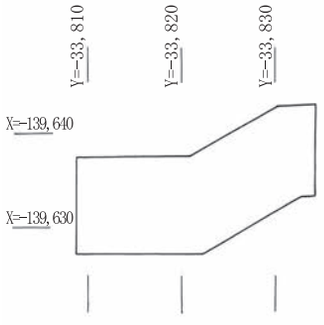
第４面の上には、暗灰色シルトと暗緑灰色シルトが堆積し、その上面（T. P. 2.5m付近）が第３遺構面で、この面では掘立柱建物が検出された。

第３面より上には、第２遺構面、第１遺構面の、２面の遺構面が認められた。どちらも耕作地として利用されていたと思われるが、著しく撹乱を受けているため部分的に残るのみで、時期を特定できる遺物も出土しなかった。

第４項　Ｋ３調査区

Ｋ３調査区は、地表面（T. P. 3.5m付近）より最終遺構面（T. P. 0.5m）までの深度３ｍを調





1 暗灰色粘質土
2 黄灰色粗砂
3 青灰色粘土
4 暗灰色粘質土（細砂少量混入）
5 暗灰色粘質土（明青灰色微砂ブロック混入）
6 黄灰色砂
7 暗灰色粘土～シルト
8 灰色粗砂
9 黒灰色砂質土
10 暗灰色砂質土
11 暗黄灰色粗砂
12 明灰色微砂～シルト
13 灰色粘土～シルト
14 明灰色砂
15 黄灰色粗砂～細砂に青灰色シルトブロック混入
16 暗青灰色粘質土に黄灰色砂ブロック混入
17 明灰色微砂～シルト
18 灰色シルトと灰白色微砂の互層
19 暗灰色シルト
20 灰黄色粗砂
21 暗灰色シルト～微砂と灰白色細砂～粗砂の互層
22 青灰色シルトと黄灰色粗砂の互層
23 青灰色シルトに黄灰色粗砂ブロック少量混入
24 青灰色シルトと暗灰色細砂の互層
25 青灰色シルトに黄白色粗砂多量混入
26 黄灰色砂
27 暗灰色シルト　植物遺体混入
28 暗灰色シルト
29 灰黄色粗砂～小礫
30 暗灰色シルトに灰白色粗砂ブロック混入
31 灰白色粗砂
32 暗灰色シルトに細砂少量混入
33 灰色粗砂の暗灰色シルトブロック混入
34 暗灰色シルトに灰色粗砂ブロック
35 明青灰色シルト
36 灰色シルト
37 灰色シルトに細砂少量混入
38 灰色シルトと黄灰色粗砂の互層
39 灰色シルト　細砂混入
40 暗灰色粘土に灰白色砂混入
41 暗褐色砂質土　やや粘質を帯びる
42 暗青灰色微砂～細砂に青灰色シルトブロック混入
43 明青灰色砂質土に黄灰色砂ブロック混入
44 暗灰色砂質土に黄灰色粗砂混入
45 灰色シルトに黄灰色粗砂ブロック混入
46 暗灰色粘質土
47 黄灰色粗砂
48 灰色シルトに黄灰色粗砂ブロック混入
49 暗灰色シルトに灰色粗砂ブロック混入
50 黄灰色粗砂
51 暗灰色粘土～シルト
52 灰白色粗砂
53 青灰色微砂に黄灰色粗砂混入
54 暗青灰色粘土に細砂少量混入
55 黄灰色粗砂～礫
56 暗青灰色細砂混じり粘質土
57 暗灰色シルトに灰色粗砂ブロック
58 灰白色粗砂
59 黄灰色粗砂
60 暗灰色粘質土
61 灰色シルトに黄灰色粗砂混入
62 青灰色シルト
63 灰色粗砂
64 青灰色シルトに灰色粗砂ブロック混入
65 暗灰色粘土～シルト
66 暗褐灰色シルト（炭混じり）
67 暗青灰色粘土
68 暗青灰色粘土に緑灰色粘土ブロック混入
69 落ち込み５０
70 緑灰色粘土

第６図　Ｋ３調査区南壁土層断面図

査対象として掘削し、計９面の遺構面を検出した。

Ｋ３調査区の東端部は、ＡＢ－Ｗ調査区の調査の際にT. P. 2.2mまで掘削しており、その調査結果から、Ｋ３調査区の全域が八丁堤道の範囲内にあたることが予想されたが、予想通り地表面からT. P. 1.8m付近まで、八丁堤道を構成する堤状の堆積が認められた。

調査によって確認した最も前出の遺構面は、緑灰色粘土ないしはシルト上面（T. P. 0.5m～0.8m）で検出した第９遺構面で、古墳時代中・後期の遺構が検出された。

第９面の上には、緑灰色シルトをブロック状に含む暗灰色粘質シルトの堆積がみられ、この層は５世紀～６世紀の遺物包含層である。その上面（T. P. 0.6m～0.9m）を第８遺構面として精査したが、明瞭な遺構は確認できなかった。

第８面の上には、暗青灰色粘土の堆積がみられ、この層は古墳時代後期の遺物包含層である。その上面（T. P.1.0m～1.2m）が第７遺構面で、中央付近を南北方向に延びる畦畔が検出された。

直上の堆積土から８世紀の土器が出土しており、第７面は奈良時代に比定できるものと考える。

第７面の直上には、暗青灰色粘土と青灰色シルトの堆積がみられ、青灰色シルトの上面（T. P. 1.2m～1.5m）が第６遺構面で、第７面とほぼ同じ位置に南北方向に延びる畦畔が検出された。直上の堆積土から９世紀の土器が出土しており、第６面は平安時代前期に比定できるものと考える。

第６面の直上には、暗灰色粘土と灰色粗砂を含む暗灰色シルトの堆積がみられ、灰色粗砂を含む暗灰色シルトの上面（T. P. 1.6m～2.0m）が第４遺構面で、第４面は八丁堤道の基底面である。平安時代後期に比定されるものと考える。

この上層は地表面（T. P. 3.5m付近）まで八丁堤道となっているが、中世（T. P. 2.4m付近）と近世（T. P. 2.8m付近）に八丁堤道の嵩上げを行っていることが確認できた。そして道の周辺は耕作地となっていた。

第５項　ＨＴ１調査区

ＨＴ１調査区は、地表面（T. P. 3.6m付近）より発進竪坑床付け面（T. P. －0.2m）までの深度3.8mを調査対象として掘削し、計13面の遺構面を検出した。

調査によって検出した最も前出の遺構面は、第45層灰白色粘土上面（T. P. －0.1m付近）で検出した第13遺構面である。検出された遺構は浅い落ち込みで、内部から遺物は出土しなかったが、直上に堆積した黒灰色粘土が弥生時代前期の遺物を含む層であり、この面は弥生時代前期に相当する遺構面と考えられる。

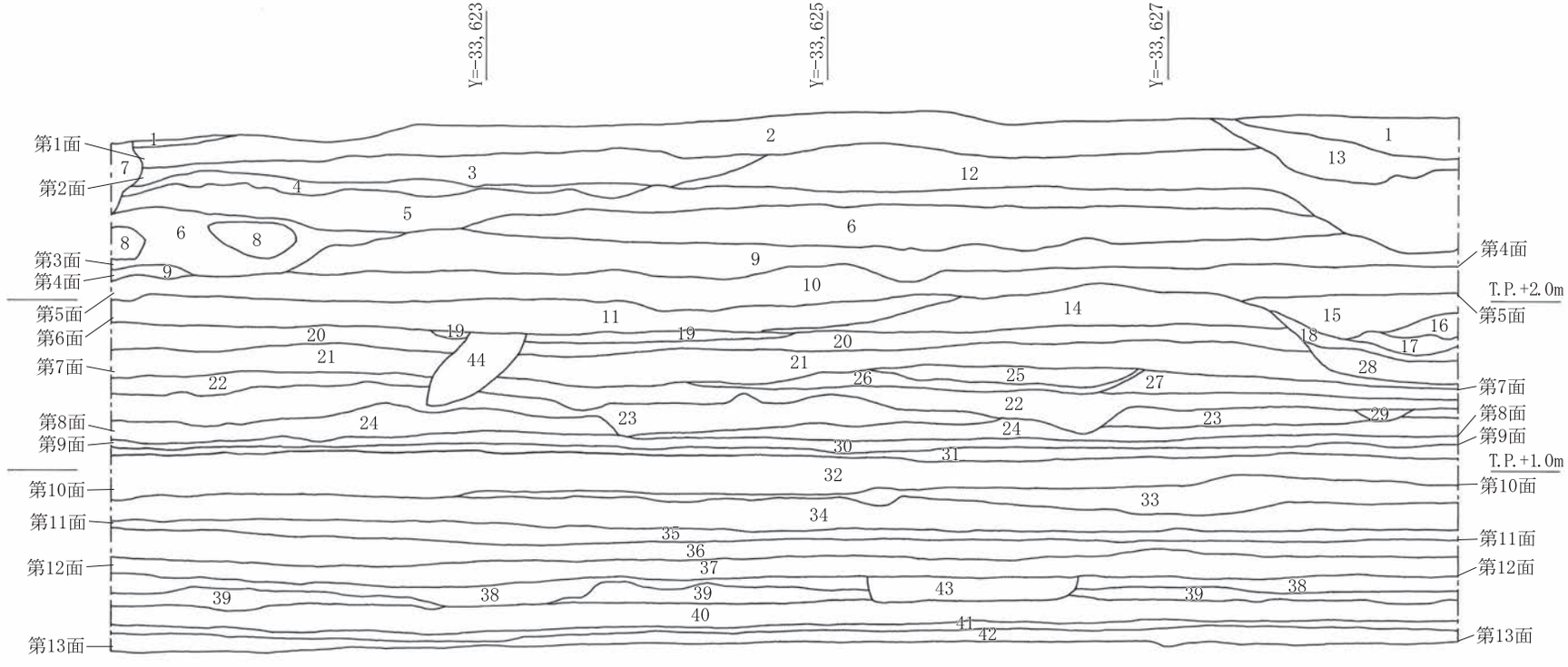
第40層緑灰色砂混じり粘土上面（T. P. 0.4m付近）が第12遺構面で、土坑が検出された。土坑内から出土した土器より、この面は弥生時代中期に相当する遺構面と考えられる。

その上には、第38層緑灰色粘土上面（T. P. 0.6m付近）に第11遺構面、第36層褐灰色粘土上面（T. P. 0.8m付近）に第10遺構面、第33層暗灰褐色粘土上面（T. P. 1.1m付近）に第９遺構面、第32層灰褐色粘土上面（T. P. 1.2m付近）で第８遺構面が検出された。いずれも遺物は出土しなかったが、弥生時代中期から古墳時代前期に相当する遺構面と思われる。

第25層灰色シルトのブロックを含む暗灰色粘土上面（T. P. 1.6m付近）が第７遺構面で、土坑を検出した。古墳時代中期に相当する遺構面である。

第22層暗灰色粘質土上面（T. P. 1.8m付近）が第６遺構面で、溝が検出された。溝内から出土した土器より、この面は古墳時代後期に相当する遺構面と考えられる。遺構の検出状況からみて、集落の縁辺ないしは集落域外にあたる可能性が高い。

第６面の上には、第13層灰黄色粘土のブロックを含む暗褐灰色粘質土上面（T. P. 2.0m付近）に第５遺構面、第12層暗褐灰色砂混じり粘質土上面（T. P. 2.2m付近）で第４遺構面、第11層暗灰色砂混じり粘質土上面（T. P. 2.3m付近）で第３遺構面が検出された。第５面と第４面では人および牛馬のものと考えられる足跡を検出した。畦畔などは認められなかったが、耕作地と考え



第７図　ＨＴＩ調査区南壁土層断面図

1 緑灰色砂質土
2 緑灰色砂混じり粘質土
3 緑灰色粘質土
4 灰色砂
5 褐灰色砂混じり粘質土
6 灰色砂質土に白色砂ブロック混入
7 暗緑灰色粘土（撹乱）
8 暗褐灰色粘質土に灰黄色粘土ブロック混入
9 暗灰色砂混じり粘質土
10 暗灰色砂混じり粘質土
（９よりやや淡色）－上面で足跡
11 暗灰色砂混じり粘質土
（９よりやや淡色）－上面で足跡
12 緑灰色粘土（砂を少量含む）
13 緑灰色粘土と灰白色砂の互層
14 黒灰色砂質土（６面の土に砂を多く含む）堤状
15 黒灰色砂質土に灰白色砂混入
16 灰白色砂
17 灰色粘土
18 灰白色砂
19 暗緑灰色砂混じり粘質土（６面の溝１）
20 暗灰色粘質土
21 22より粘質が強くなる
22 灰色粘質土に灰白色シルト
23 黄灰色シルトと灰白色砂の互層
24 灰白色に青灰色シルトが少量混入
25 黒灰色粘質土（砂混じり）
26 暗灰色粘質土（砂混じり）
27 灰色砂質土
28 暗灰色砂混じり粘質土と灰白色砂の互層
29 暗灰色砂混じり砂質土と灰白色砂の互層
30 灰褐色粘土
31 暗灰褐色粘土
32 青灰色粘土（炭混じり）－植物遺体を多く含む
33 灰色シルトと灰白色砂の互層
34 灰褐色粘土（炭混じり）－植物遺体を多く含む
35 黒灰色粘土－植物遺体を多く含む
36 緑灰色粘土
37 黒灰色砂混じり粘土
38 緑灰色砂混じり粘土
39 暗灰黄色砂
40 黒灰色粘土
41 暗灰緑色粘土
42 黒色粘土
43 暗灰色粘土（砂を少量含む）
44 灰白色砂

られる。第３面では畦畔が検出された。

第３面より上の第２面および第１面については、後世の撹乱が著しいため平面的に面を捉えることができなかった。

第６項　Ｋ１調査区

Ｋ１調査区は、地表面（T. P. 3.4m付近）より最終遺構面（T. P. －１ｍ）までの深度4.4ｍを調査対象として掘削し、計15面の遺構面を検出した。

調査によって確認した最も前出の遺構面は、第87層淡黄灰色粘土上面（T. P. －0.7m付近）で検出した第15遺構面で、流路と溝状の遺構を検出した。流路内から縄文土器の長原式土器と畿内第Ⅰ様式古段階（弥生時代前期前葉）の弥生式土器が供伴して出土しており、第15面は弥生時代前期前葉に相当する遺構面である。

第15面の上には、第86層黒色粘土と第85層黒灰色粘土が堆積する。なお、第15面で検出した流路の底には黒灰色粘土が認められるため、流路は第86層の堆積時に埋まり始め、流路の埋没後に第84層灰色シルトと第85層暗灰色粘質シルトが堆積した。第85層上面が第14遺構面で、調査区北東端部付近でピットを検出した。遺物は出土しなかったが、上下の遺構面との兼ね合いで弥生時代前期に相当するものと考えられた。第15面で検出した流路は、この段階には完全に埋没している。

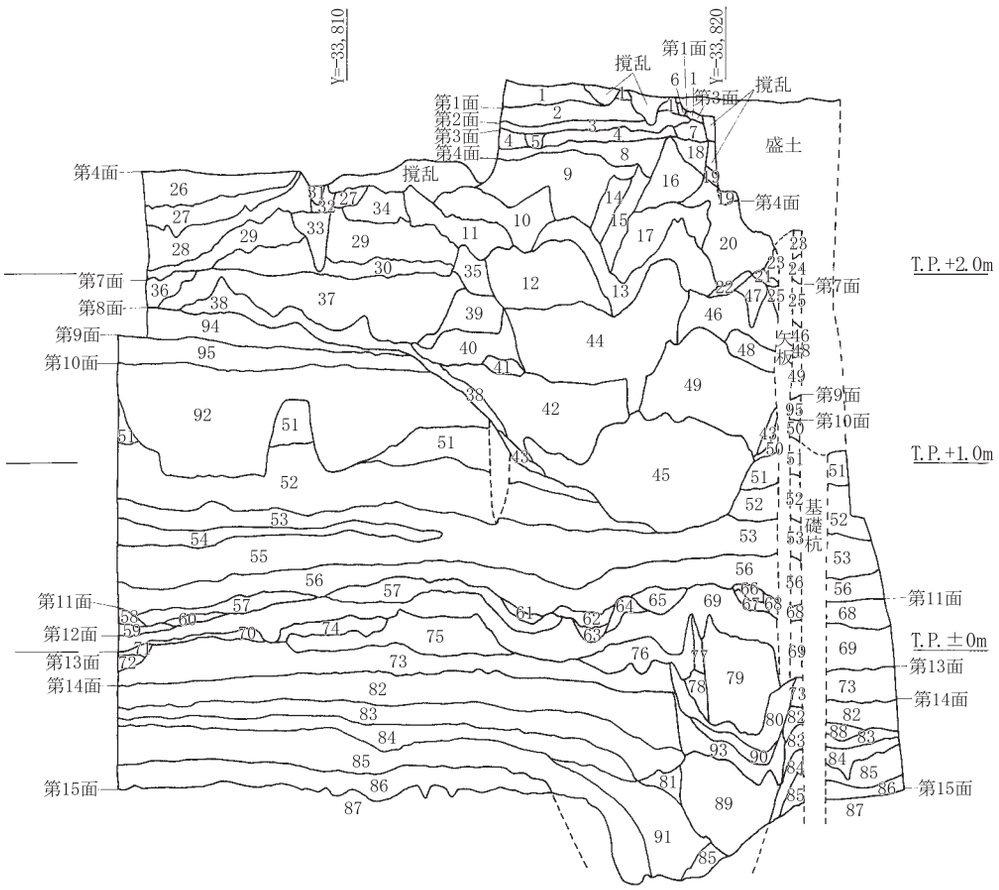
第14面の上には、第76層暗灰色砂質土が堆積し、その上面が第13遺構面（T. P. ± ０ｍ付近）で、第15面の流路のほぼ真上で流路が検出され、流路の両岸付近で多数のピット、そして調査区北西半部で人間の足跡を検出した。流路内から弥生時代前期の土器が少量出土しており、第13面は弥生時代前期に相当する遺構面と考えられる。

第13面の上には、第70層黒灰色砂質シルト、第75層黄灰色砂、第74層黒灰色砂質土などが部分的に堆積するとともに流路が埋没し、その上に第69層黒灰色砂質土が堆積する。その上面が第12遺構面（T. P. 0.1 ～ 0.3m付近）で、弥生時代中期前葉の遺構が多数検出された。

第12面の上には、第58層黒灰色粘土および第57層黒灰色砂質土が堆積し、その上面が第11遺構面（T. P. 0.2 ～ 0.3m付近）で、弥生時代中期中葉の遺構が多数検出された。なお、第12面は調査区北東付近を中心に微高地が存在し、その部分では第58層と第57層は堆積が認められず、第12面の遺構と重複した状態で第11面の遺構が検出されている。

第11面の上には、第56層灰黒色粘土、第55層灰褐色粘土、第54層灰白色シルト、第53層灰褐色粘土、第52層暗緑灰色粘土、第51層青灰色シルト、第50層緑灰色シルトなどが堆積し、第51層および第50層上面が第10遺構面（T. P. 1.2 ～ 1.3m付近）で、古墳時代中期～後期の遺構が多数検出された。

第10面の上には、第95層暗灰色粘土（５世紀の遺物包含層）が堆積し、その上面が第９遺構



1 灰褐色粗砂混じり粘質土（マンガン粒多く含む）
2 明灰オリーブ色粘質土（マンガン粒少量含む）　粗砂微量混入
3 灰褐色粗砂混じり砂質土
4 灰白色中～粗砂
5 灰黄褐色細砂
6 灰白色粗砂
7 暗灰色シルトに粗砂少量混入
8 灰白色粗砂と灰色シルトの互層
9 灰白色粗砂に鉄分沈着の多い灰色シルトブロックが混入
10 明オリーブ灰色細砂～粗砂
11 灰色シルトと黄灰色粗砂
12 青灰色シルトと灰白色細～粗砂の互層（木片多く含む）
13 青灰色シルトと灰色シルト～細砂の互層（木片多く含む）
14 青灰色シルトに黄灰色粗砂ブロックが混入
15 灰黄白色粗砂
16 灰白色粗砂～礫
17 灰白色細砂と黄灰色シルトの互層
18 青灰色シルト
19 灰白色微砂
20 灰黄色粗砂
21 暗青灰色粗砂混じりシルト
22 暗青灰色シルト
23 灰色シルトと灰白色粗砂の互層
24 明青灰色シルト
25 灰黄色細～粗砂
26 灰黄色粗砂
27 暗灰色砂混じり粘質土
28 灰白色粗砂に暗灰色砂混じり粘質土のブロック混入
29 黄灰色粗砂に暗灰色シルトのブロック混入
30 明灰色粗砂
31 灰色粗砂
32 灰色微砂と灰白色粗砂の互層
33 青灰色粗砂混じりシルト
34 灰黄色粗砂
35 青灰色シルトに灰黄色粗砂～礫混入
36 暗灰色粘質土
37 黄灰色～灰白色粗砂に灰色シルトのブロック混入
38 暗灰色粘土に少量の細砂混入
39 暗青灰色粘土に少量の細砂混入
40 暗灰色シルトと明灰色シルトの互層
41 灰白色砂
42 灰白色砂と灰白色粗砂の互層
43 暗灰色強粘性粘土
44 灰白色粗砂～礫に灰色シルトブロック混入（平安時代流路埋土）
45 灰白色粗砂（古代流路最終埋土）
46 暗青灰色粘質土
47 明黄褐色粗砂
48 暗灰色粘質土に灰白色粗砂ブロック少量混入
49 暗灰色シルトと灰白色微砂の互層
50 緑灰色シルト
51 青灰色シルト
52 暗緑灰色粘土
53 灰褐色粘土（植物遺体含む）
54 灰白色シルト
55 灰褐色粘土
56 灰黒色粘土
57 黒灰色砂質土
58 黒灰色粘土
59 灰色粘土に明緑灰色粘土ブロック少量混入
60 暗灰色砂混じり粘土
61 黒灰色粘土（炭混じり）
62 暗灰色粘土
63 明灰色粘土
64 黒灰色砂混じり粘土
65 暗灰色粘土（土坑１００５９埋土）
66 灰色砂質土
67 暗灰色砂混じり粘土
68 灰色砂質土（66よりやや暗い）
69 灰黒色砂質土
70 黒灰色砂質土～シルト（炭多く含む）
71 黒灰色粘質シルト
72 黄灰色砂
73 黒灰色粘質シルト
74 黒灰色砂質土
75 黄灰色砂
76 暗灰色砂質土
77 暗灰色シルト
78 灰黄色砂
79 灰黄白色砂
80 黒灰色粘土（炭多く含む）
81 暗灰色シルト
82 緑灰色粘質土
83 暗灰色粘質シルト
84 灰色シルト
85 黒灰色粘土
86 黒色粘土
87 淡黄灰色粘土
88 灰色シルト
89 灰黄白色砂と灰色シルトの互層（ラミナ状）
90 黒灰色粘土（炭多く含む）
91 灰白色シルトと灰色シルトの互層（ラミナ状）
92 暗灰色粘土に緑灰色粘土ブロック少量混入（土坑１０１３８および１０１４４埋土）
93 緑灰色粘質土（少量の植物遺体含む）
94 灰色強粘性粘土（6世紀包含層）
95 暗灰色粘土（5世紀包含層）

1m
0
5m
0

第８図　Ｋ１調査区南壁土層断面図

面（T. P. 1.6m付近）で、古墳時代後期の遺構が検出された。

第９面の上には、第94層灰色強粘性粘土（６世紀の遺物包含層）が堆積し、第94層上面が第８遺構面（T. P. 1.8m付近）で、古墳時代後期から奈良時代の流路が検出された。

第８面の上には、第38層暗灰色粘土（少量の細砂混入）、第37層黄灰色～灰白色粗砂（灰色シルト混入）が堆積する。第37層が堆積した段階ですでに流路は埋没しているが、第37層上面（第

７遺構面T. P. 2.0m付近）をベースとした奈良時代の流路と、その両岸に堤状の遺構が検出されている。

第７面の上には、堤の外側に第28層灰白色粗砂が堆積し、第28層上面が第６遺構面で平安時代の水田遺構が検出された。

第６面の上には、堤の外側に第27層暗灰色砂混じり粘質土が堆積し、第27層上面が第５遺構面で平安時代の水田遺構が検出された。

第５面の上には、堤の外側に第26層灰黄色粗砂が堆積し、第26層上面が第４遺構面（T. P. 2.5m付近）で中世の耕作地が検出された。第７面で認められた流路はこの面でもほぼ同位置で認められた。

第４面以上は調査区の東半部が土壌改良によって撹乱されており、遺構面が確認できたのは西半部に限られたが、第４層灰白色中～粗砂上面で第３遺構面が、第３層灰褐色砂質土上面で第２遺構面が、第２層明灰オリーブ色粘質土上面で第1遺構面が検出された。いずれも耕作地で中世に相当する面である。

第７項　ＵＫ調査区

ＵＫ調査区は、当初は旧地表面（T. P. 2.5m付近）より最終遺構面（T. P. １m）までの深度1.5mを調査対象として掘削したが、最終面で検出した遺構の床面のT. P. －0.2mまで調査し、計８面の遺構面を検出するに至った。

第21層暗灰色シルト（炭混じり）、第20層暗灰色粘質シルト、第19層淡灰黄色土は遺構（大溝）の埋土で、遺構（第８遺構面）の北肩部は緑灰色シルト（T. P. １m付近）上面にあった。

第８面の上には、第18層暗灰色粘土（灰色砂まじり）、第17層暗緑灰色粘質土、第16層暗緑灰色シルト（灰色微砂混じり）が堆積し、第16層上面が第７遺構面で、畦畔が検出されており耕作地と考えられるが、遺物が出土しなかったため時期等詳細は不明である。

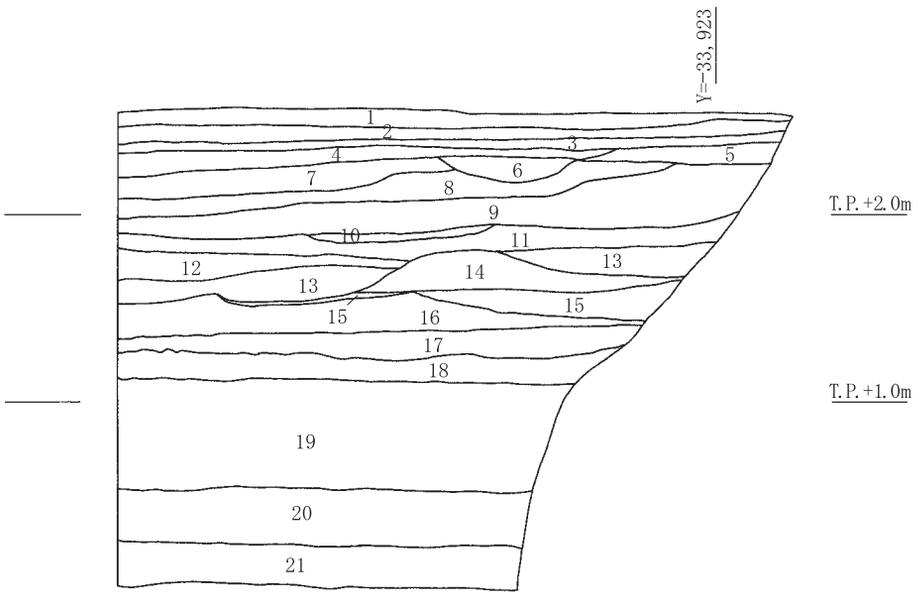
第７面の上には、第13層暗灰色粘土（砂混じり）と第12層灰色粘質土が堆積する。その上面を第６遺構面としたが、調査区内では明確な遺構は認められなかった。

第６面の上には、第11層灰色粘土（砂混じり）が堆積し、その上面が第５遺構面（T. P. 2.0m付近）で、土坑、溝などの遺構が検出された。遺構から出土した遺物から、平安時代に相当する面と考えられる。

第５面の上には、第９層暗灰色粘質土（炭混じり）、第８層暗褐色粘質土、第７層暗青灰色粘質土などが堆積し、その上面が第４遺構面（T. P. 1.6m付近）で、溝などの遺構が検出された。

第４面の上には、第４層灰褐色砂質土が堆積し、その上面を第３遺構面としたが、調査区内では明確な遺構は認められなかった。

第３面の上には、第３層灰褐色砂質土（鉄分含む）が堆積し、その上面を第２遺構面としたが、



1 褐灰色砂質土
2 暗灰色砂質土
3 灰褐色砂質土（鉄分含む）
4 灰褐色砂質土
5 黄褐色砂質土
6 灰黄色砂質土（炭混じり）
7 暗青灰色粘土
8 暗褐色粘質土
9 暗灰色粘質土（炭混じり）
10 暗灰色粘土
11 灰色粘土（砂混じり）
12 灰色粘質土
13 暗灰色砂混じり粘土
14 灰黄色砂と灰緑色シルトの互層
15 灰黄色微砂
16 暗緑灰色シルトに灰色微砂混入
17 暗緑灰色粘質土
18 暗灰色粘土に灰色砂混入
19 淡灰黄色土
20 暗灰色粘質シルト（炭・木片混入）
21 暗灰色シルト（炭混じり）

第９図　ＵＫ調査区中央畦土層断面図

調査区内では明確な遺構は認められなかった。

第２面の上には、第２層暗灰色砂質土が堆積し、その上面を第１遺構面としたが、調査区内では明確な遺構は認められなかった。

第８項　ＨＴ２調査区

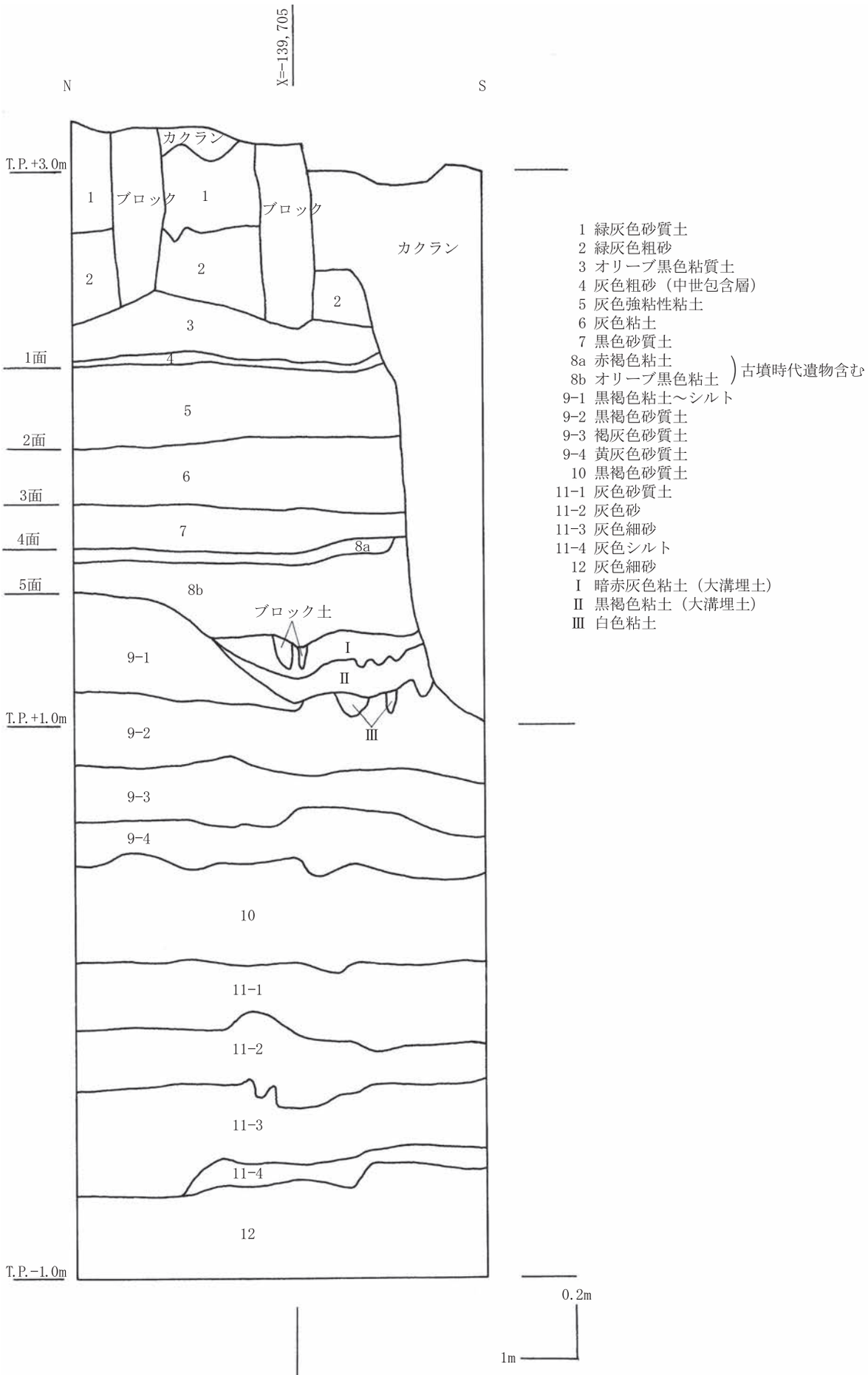
ＨＴ２調査区は、地表面（T. P. 3.2m付近）よりT. P. －1.0mまでの深度4.2mを調査対象として掘削し、計５面の遺構面を検出した。

第18層灰色細砂（T. P. －0.7m）から上に、第15層灰色砂（T. P. －0.1m）まで灰色系の砂ないしはシルトが堆積している。遺構・遺物は検出されなかった。その上には、第13層黒褐色砂質土がT. P. 0.5mまで堆積している。遺物は出土しなかったが、周辺の調査区との比較から弥生時代の堆積層と考えられる。

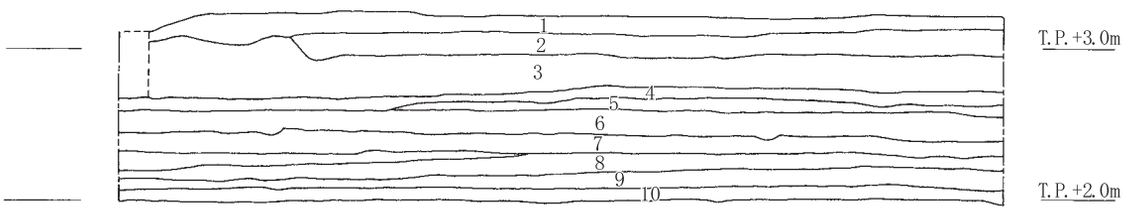
第13層の上には、第12層黄灰色砂質土と第11層褐灰色砂質土が堆積しており、ともに遺物は出土しなかった。

第11層の上には、第10層の青灰色砂質土と第９層青灰色粘土ないしはシルトが堆積し、第９層上面が第５遺構面（T. P. 1.5m）で、古墳時代中・後期の大溝が検出された。

第９層の上には、第８層オリーブ黒色粘土が堆積し、この層は古墳時代中･後期の包含層となっている。また、第８層上面が第4遺構面で、調査区では遺構は検出されなかったが、周辺の調査



第10図　ＨＴ２調査区東壁土層断面図



1 暗緑灰色砂質土
2 緑灰色砂質土
3 黄褐色砂と灰黄色微砂と黒灰色粗砂の互層
4 青灰色シルト（鉄分沈着）
5 暗黄色粗砂と暗灰色シルトの互層
6 青灰色粘質土
7 暗灰色粘質土
8 改正色粘質土
9 青灰色粘質土
10 灰青色砂
11 青灰色粘土（粘性強く、下半に砂混じる）

第11図　ＨＫ調査区北壁土層断面図

区との比較から飛鳥時代の耕作地と考えられる。

第８層の上には、第７層黒色砂質土が堆積し、第７層上面が第３遺構面で、調査区では遺構は検出されなかったが、周辺の調査区との比較から奈良時代の耕作地と考えられる。

第７層の上には、第６層黒色砂質土が堆積し、第６層上面が第２遺構面で、調査区では遺構は検出されなかったが、周辺の調査区との比較から平安時代前期の耕作地と考えられる。

第６層の上には、第５層黒色砂質土が堆積し、第５層上面が第１遺構面で、調査区では遺構は検出されなかったが、周辺の調査区との比較から平安時代後期の耕作地と考えられる。

第９項　ＨＫ・ＨＭ調査区

ＨＫ調査区は、 地表面（T. P. 4.1m付近）より放流渠・溝床付け面（T. P. 2.0m）までの深度2.1mを調査対象として掘削し、計２面の遺構面を検出した。

調査によって確認した最も前出の遺構面は、第10層青灰色粘質土上面（T. P. 2.2m付近）で検出した第２面で、人および牛馬のものと考えられる足跡を検出した。畦畔などは認められなかったが、耕作地と考えられる。遺構面精査時および直上に堆積する第９層から13世紀～ 14世紀の土器が出土しており、第２面は鎌倉時代に比定できるものと考える。

青灰色粘質土の上には、第９層青灰色粘質土、第８層暗灰色粘質土、第７層青灰色粘質土が堆積している。これらの層から遺物は出土しなかった。

青灰色粘質土上面（T. P. 2.6m付近）が第１遺構面である。畦畔などは認められなかったが、耕作地と考えられる。遺物が出土しておらず、遺構面の年代を確定することはできないが、周辺の調査結果から室町時代あたりに相当する面と思われる。

青灰色粘質土上には、第６層暗黄色粗砂、第５層青灰色シルト、第４層黄褐色砂、灰黄色微砂、黒灰色粗砂の互層、第３層緑灰色砂質土、第１層暗緑灰色砂質土、第１層整地土の堆積がみられた。

ＨＫ調査区の南側に続くＨＭ調査区は、南北端部はＨＫ調査区と同じ状況で、計２面の遺構面を検出した。

調査によって確認した最も前出の遺構面は、第10層青灰色粘質土上面（T. P. 2.2m付近）で検出した第２遺構面で、耕作地と考えられる。第２面は鎌倉時代に比定できるものと考える。

青灰色粘質土の上には、第９層青灰色粘質土、第８層暗灰色粘質土、第７層青灰色粘質土が堆積している。

青灰色粘質土上面（T. P. 2.6m付近）が第１遺構面である。耕作地と考えられる。周辺の調査結果から室町時代あたりに相当する面と思われる。

青灰色粘質土上には、第６層暗黄色粗砂、第５層青灰色シルト、第４層黄褐色砂、灰黄色微砂、黒灰色粗砂の互層、第３層緑灰色砂質土、第１層暗緑灰色砂質土、第１層整地土の堆積がみられた。

ＨＭ調査区の中央部は北東から南西方向に延びる八丁堤道が認められた。

第２節　弥生時代前期の遺構

第１項　Ｋ１調査区

Ｋ１調査区では、第87層淡黄灰色粘土上面（T. P. －0.7m付近）で検出した第15遺構面で弥生時代前期前葉の流路と溝状遺構を、第76層暗灰色砂質土上面（T. P. ± ０ｍ付近）で検出した第13遺構面で、弥生時代前期の流路と多数のピット、人間の足跡などを検出した。

第15遺構面の遺構（第12図、図版３）

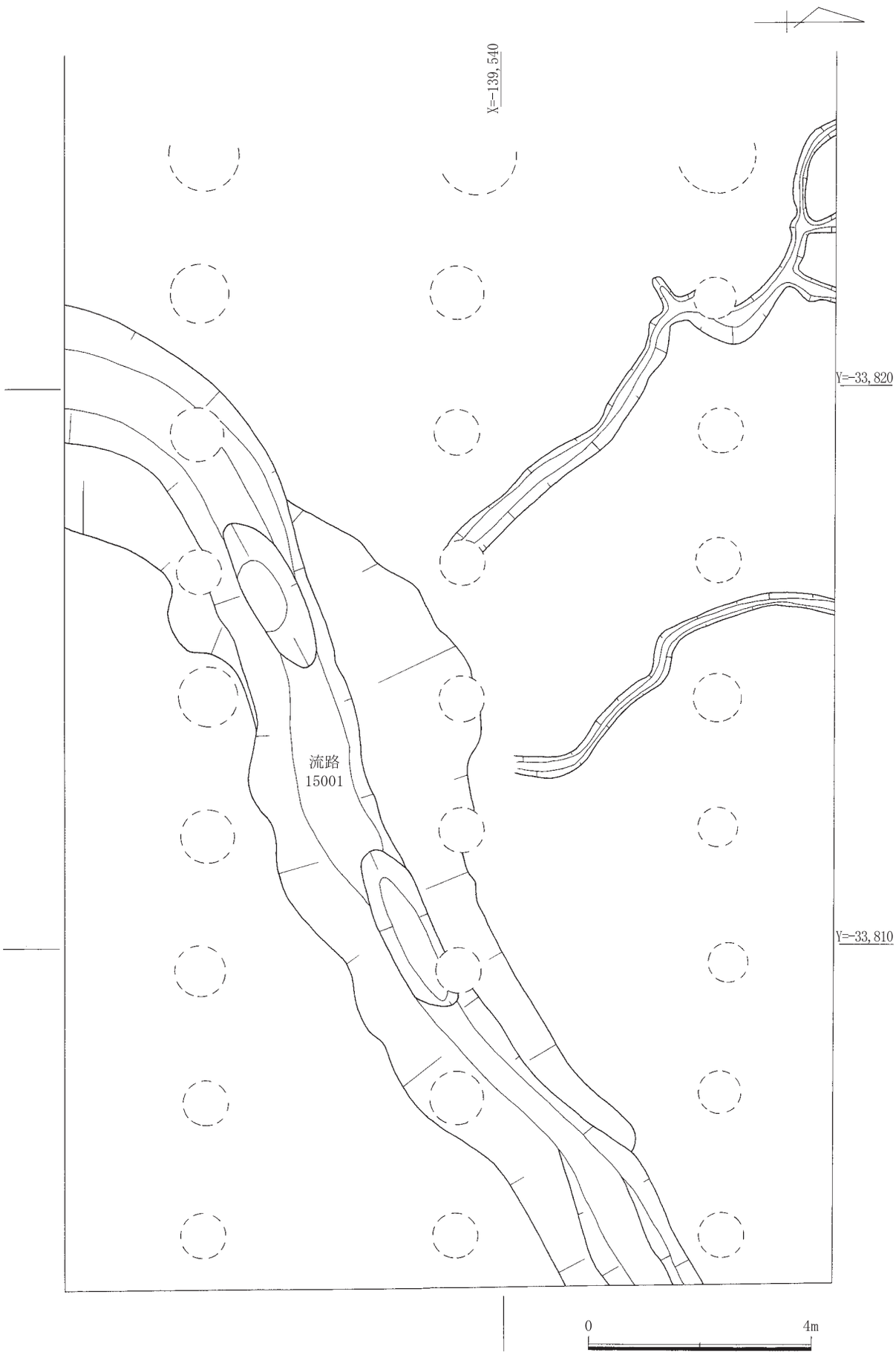
第15遺構面で検出した遺構には、自然流路、溝などがある。

流路Ｋ１－１５００１（第13図、図版３）

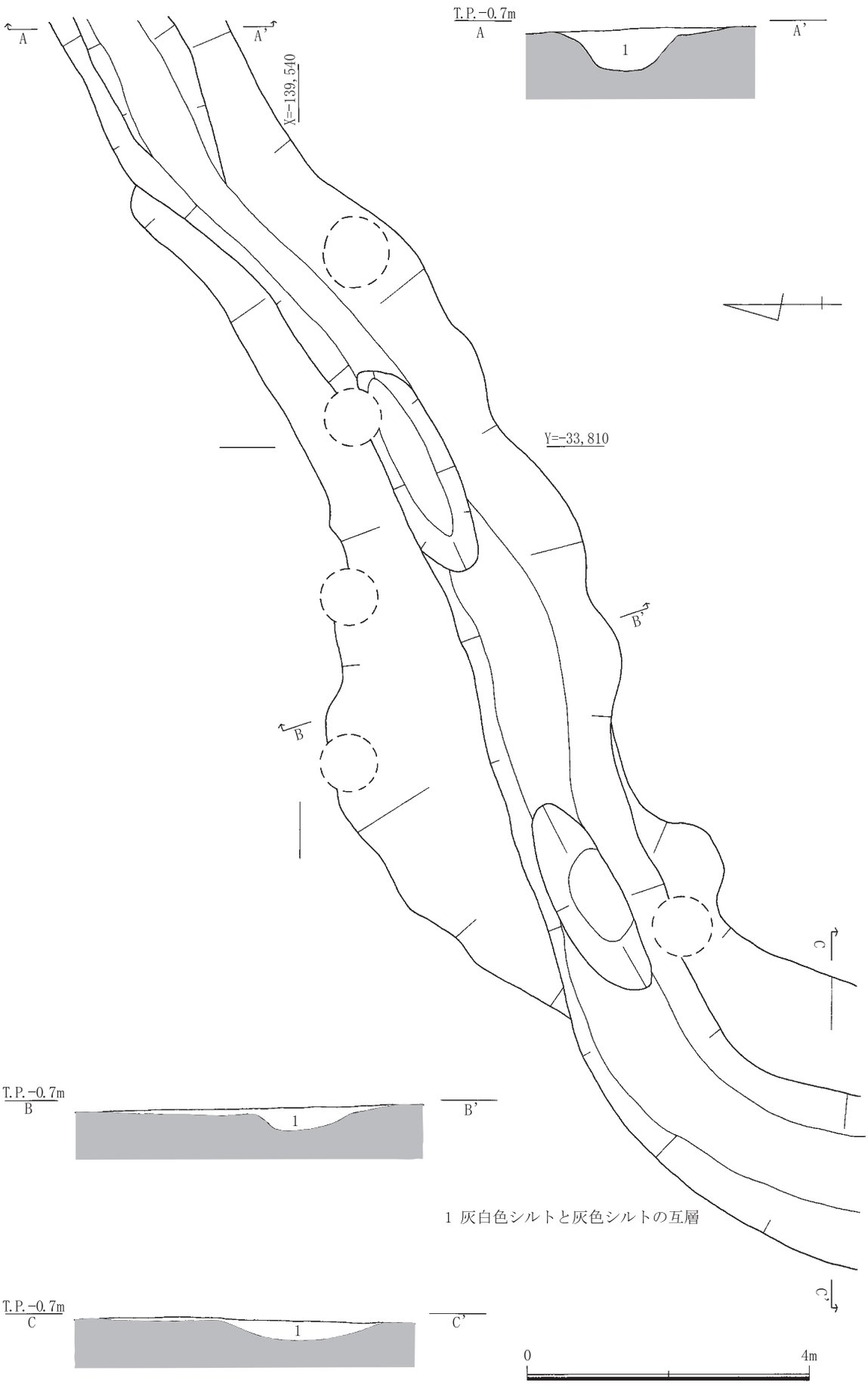
Ｋ１調査区の南東半部のA19d1・e1・d2・e2・e3区で検出した。調査区の北東端部から南西端部にかけて緩く蛇行しつつ走る。幅2.5 ～ 4.0m、深さ0.6mを測った。埋土は１層で、灰白色シルトと灰色シルトの互層である。埋土内から縄文土器（突帯文土器）、弥生土器（遠賀川式土器）などが出土した。出土した土器は弥生時代前期中段階に属するものである。

第14遺構面の遺構（図版３）

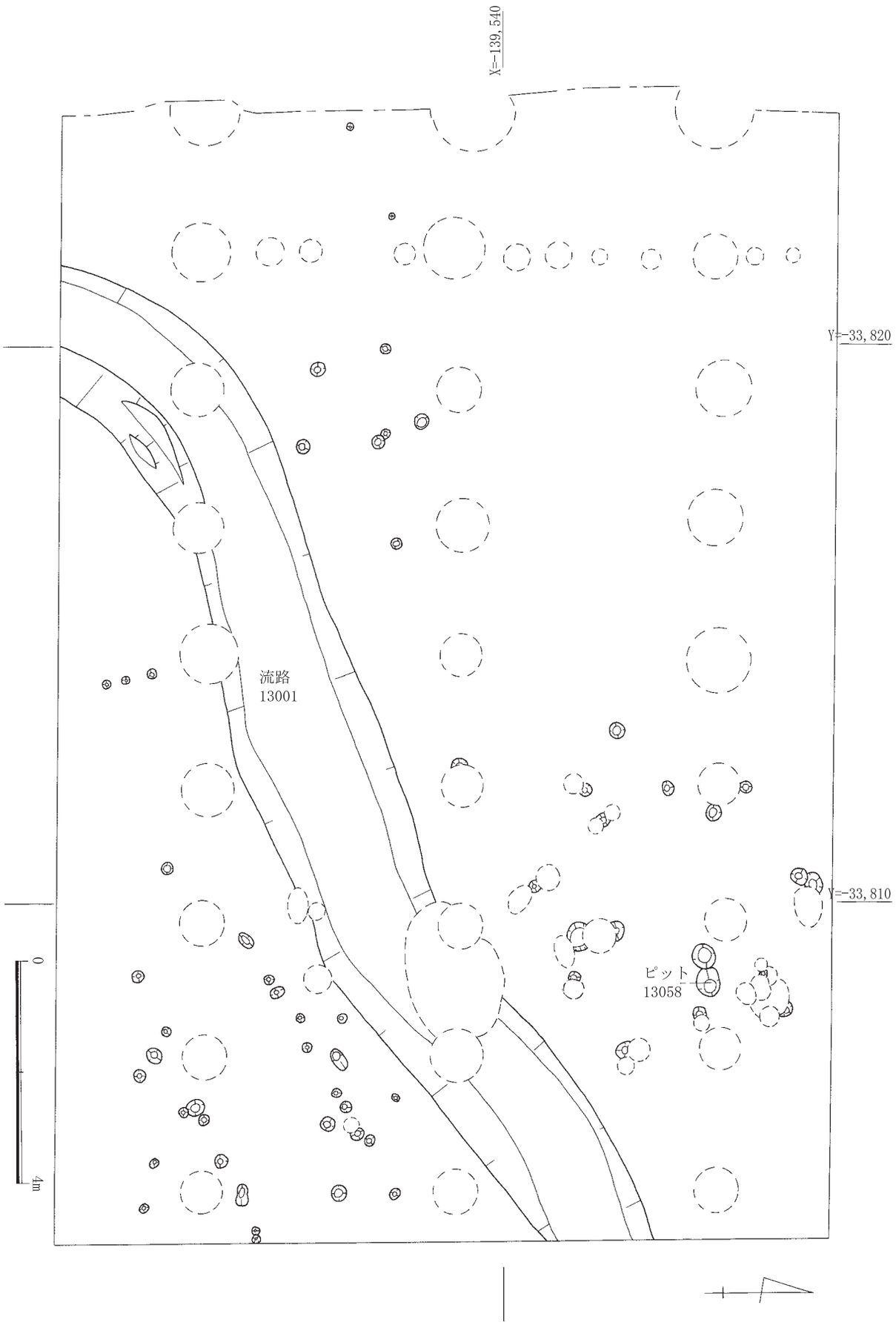
第14面で検出した遺構には、自然流路がある。



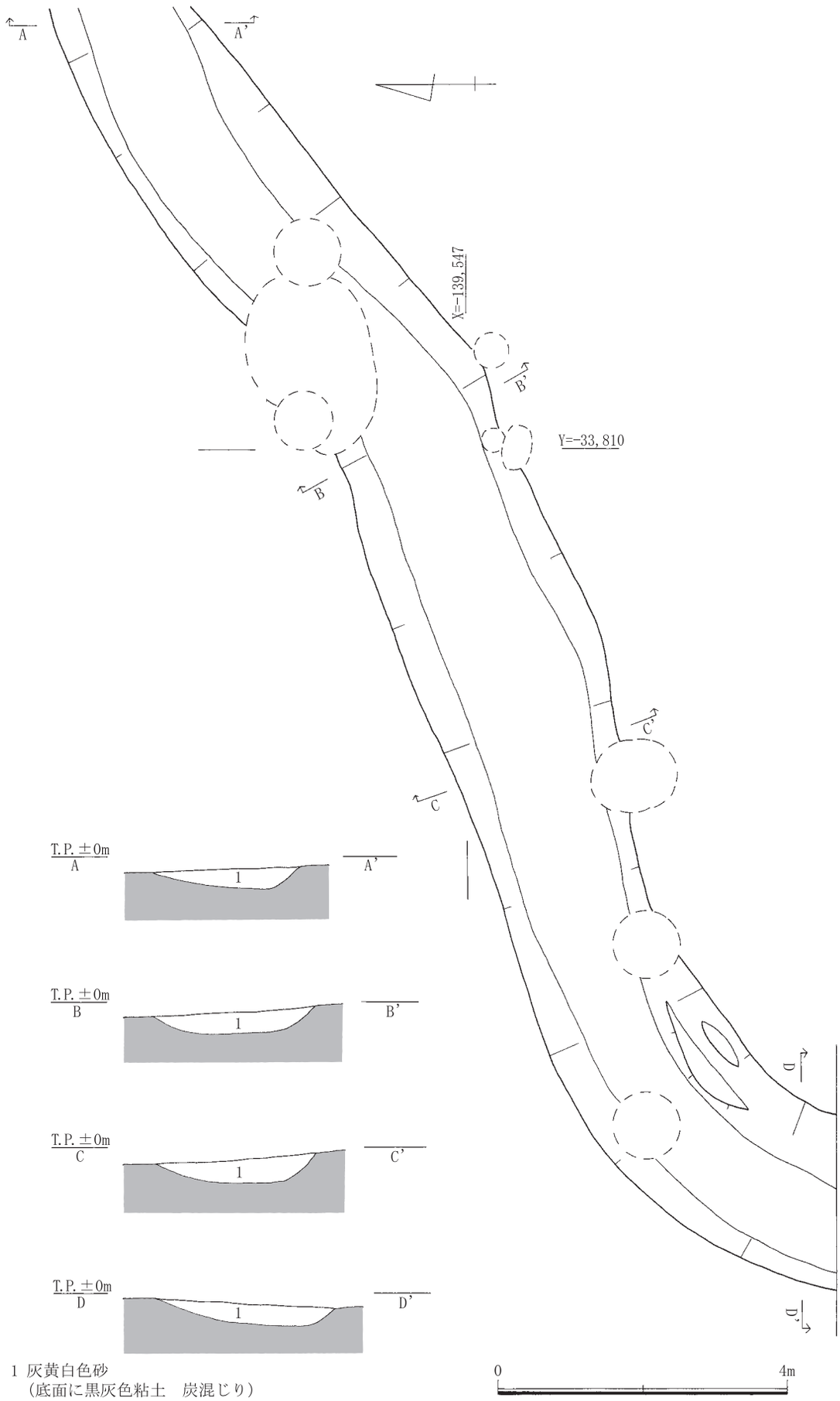
第12図　Ｋ１調査区弥生時代前期前葉遺構面（第15面）全体平面図



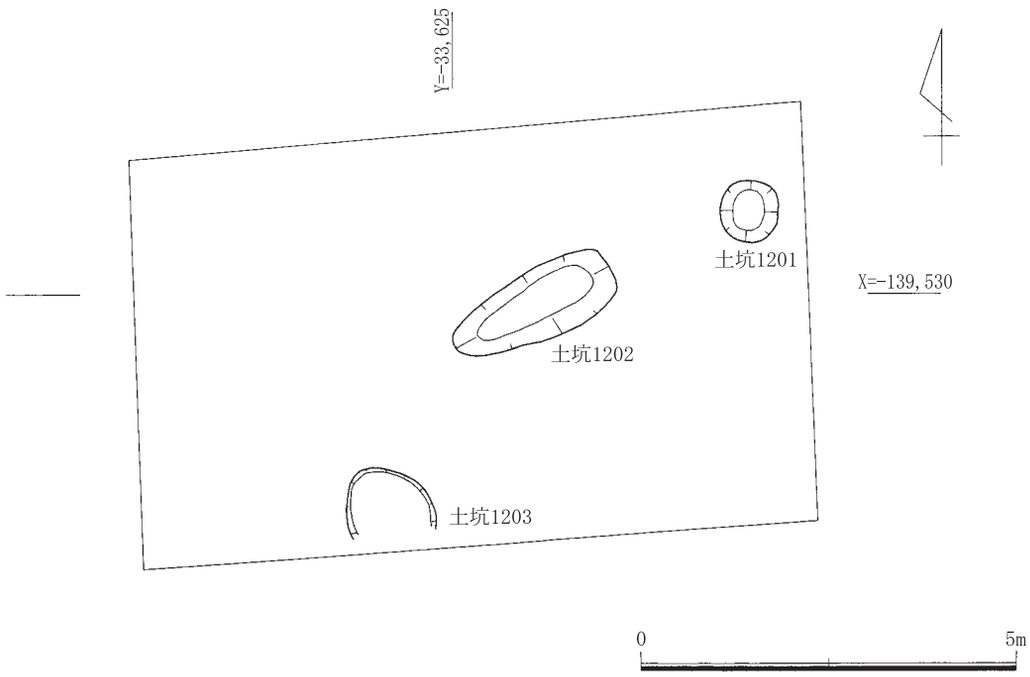
第13図　流路Ｋ１－１５００１平面図・土層断面図



第14図　Ｋ１調査区弥生時代前期遺構面（第13面）全体平面図



第15図　流路Ｋ１－１３００１平面図・土層断面図



第16図　ＨＴ１調査区弥生時代中期遺構面全体（第12面）平面図

流路Ｋ１－１４００１（図版３）

Ｋ１調査区の南東半部のA19d1・e1・d2・e2・e3区で検出した。調査区の北東端部から南西端部にかけて緩く蛇行しつつ走る。幅３～4.0m、深さ0.5mを測った。埋土は１層で、灰白色微砂である。埋土内から遺物は出土しなかった。第13面を掘り下げた時点で検出し、ベースとなる面が安定していたため14面とした。 上面で検出した流路の掘り残しの可能性も排除できないが、ここでは独立した面の遺構とした。

第13遺構面の遺構（第14図、図版３）

第13遺構面で検出した遺構には、自然流路、ピットなどがある。また、調査区北西半部で人のものと思われる足跡を検出した（図版３）。

流路Ｋ１－１３００１（第15図）

Ｋ１調査区の南東半部のA19d1・e1・d2・e2・e3区で検出した。第15面の流路Ｋ１－１５００１のほぼ真上に位置し、調査区の北東端部から南西端部にかけて緩く蛇行しつつ走る。幅2.0～2.6m、深さ0.4mを測った。埋土は１層で、灰黄白色砂である。埋土内から弥生土器が出土した。出土した土器は弥生時代前期新段階に属するものであるが、図示し得るものはなかった。

ピットＫ１－１３０５８（第14図、図版３）

Ｋ１調査区の南東半部のA19d1区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.24m、短軸0.18m、深さ0.2mを測った。埋土は１層で、黒灰色粗砂混じり砂質土である。内部から石鏃が出土した（図版３）。

第３節　弥生時代中期の遺構

第１項　ＨＴ１調査区

ＨＴ１調査区では、第40層緑灰色砂混じり粘土上面（T. P. 0.4m付近）の第12遺構面で、弥生時代中期の遺構を検出した（第16図）。土坑が３基ある。

土坑ＨＴ１－１２０１（第16図）

ＨＴ１調査区の北東端部付近のA17c3区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.85m、短軸0.8m、深さ0.15mを測った。埋土は１層で、暗灰色粘土である。埋土内から弥生土器が出土したが、図示し得るものはなかった。出土した土器は、いずれも弥生時代中期に属するものである。

土坑ＨＴ１－１２０２（第16図）

ＨＴ１調査区の中央部付近のA17c3・d3区で検出した。不整楕円形状を呈し、長軸2.3m、短軸0.95m、深さ0.1mを測った埋土は１層で、暗灰色粘土である。埋土内から弥生土器が出土したが、図示し得るものはなかった。出土した土器は、いずれも弥生時代中期に属するものである。

土坑ＨＴ１－１２０３（第16図）

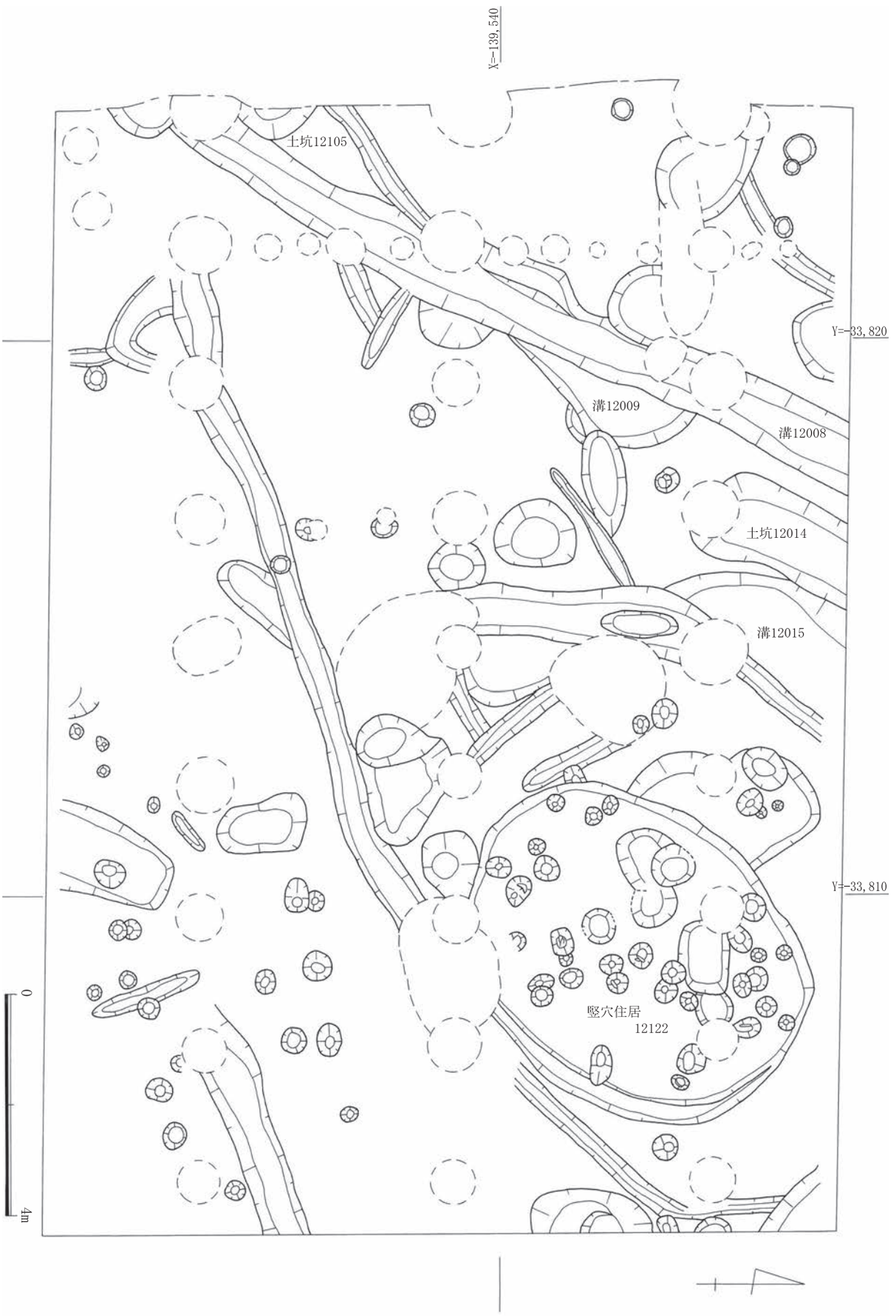
ＨＴ１調査区の南端部付近のA17d3区で検出した。南端部は調査区南壁外にある。不整楕円形状を呈し、長軸1.2m以上、短軸1.15m、深さ0.11mを測った。埋土は１層で、暗灰色粘土である。埋土内から遺物は出土しなかった。

第２項　Ｋ１調査区

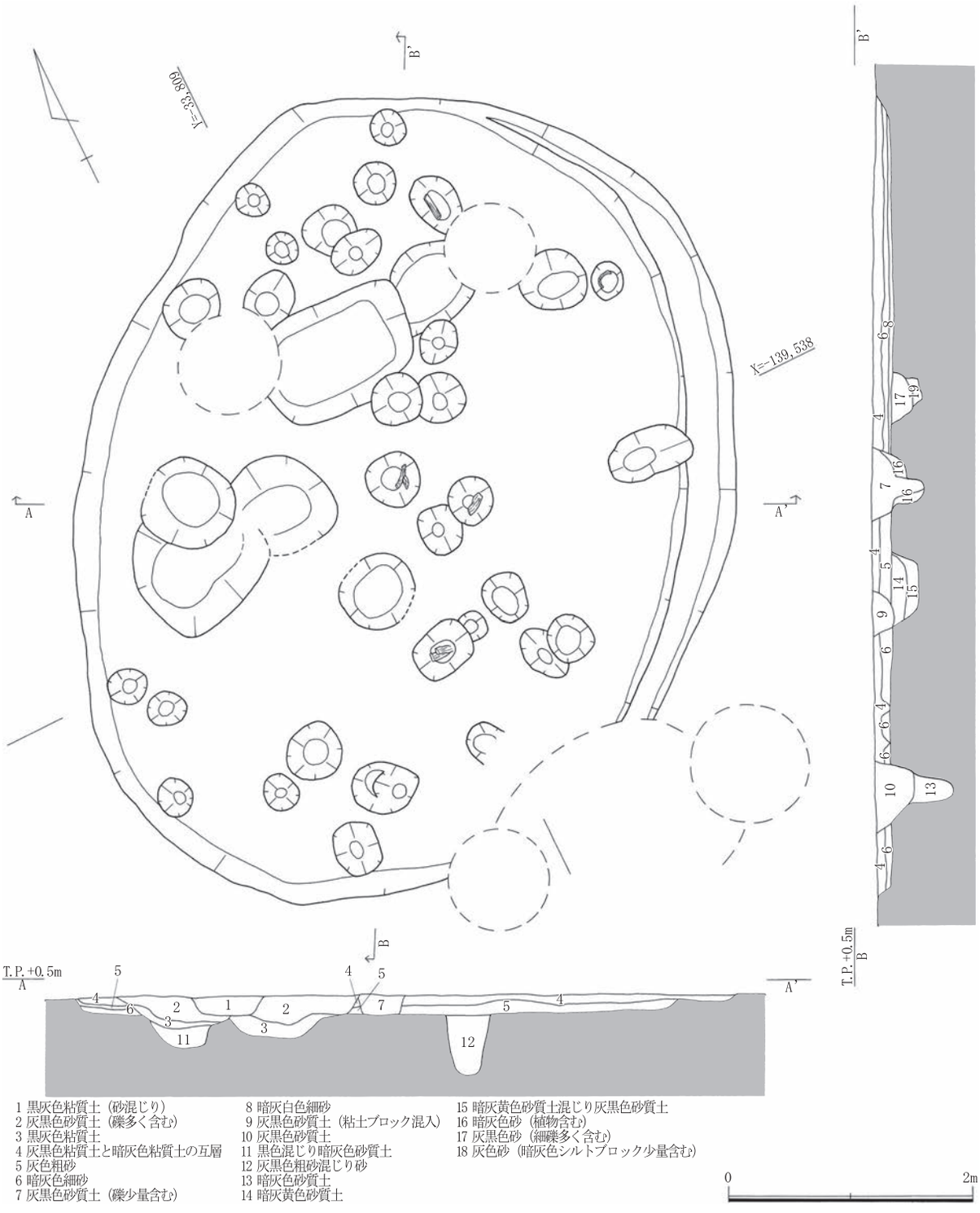
Ｋ１調査区では、第69層黒灰色砂質土上面の第12遺構面（T. P. 0.1 ～ 0.3m付近）で弥生時代中期前葉の遺構（第17図、図版４）が、第58層黒灰色粘土および第57層黒灰色砂質土上面の第11遺構面（T. P. 0.2 ～ 0.3m付近）で中期中葉の遺構（第21図、図版５・６）が検出された。

第12遺構面検出の遺構

第12面は調査区北東半部がT. P. 0.3mと高位置にあり、そこから全方位に約0.2mの比高差を持つ傾斜面となっている。調査区全域で竪穴住居、土坑、溝、ピットなどの遺構が多数検出された（第17図）。



第17図　Ｋ１調査区弥生時代中期前葉遺構面（第12面）全体平面図



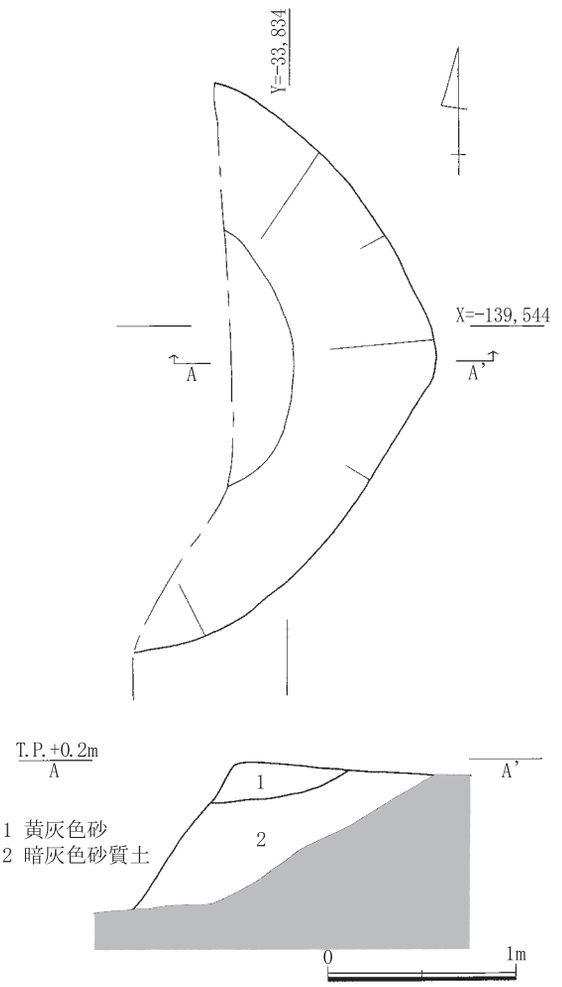
第18図　竪穴住居Ｋ１－１２１２２平面図・土層断面図

竪穴住居Ｋ１－１２１２２（第18図、図版４）

Ｋ1調査区の北東端部付近のA19d1・d2・e1・e2地区で検出した。楕円形状の平面形を呈し、長軸6.5m、短軸5.1m、深さ0.16mを測った。覆土は３層で、上より灰黒色粘質土と暗灰色粘質土の互層、灰色粗砂、暗灰色細砂である。プラン内には柱穴の可能性があるピットが多数検出されたが、主柱穴は特定できなかった。また、炉穴と考えられる土坑が中央西寄りで認められた。覆土および炉穴内から遺物が出土した。畿内第Ⅱ様式に属すものである。

土坑Ｋ１-１２１０５（第19図、図版４）

Ｋ１調査区の南西端部付近のA19e3地区で検出した。今回検出できたのは全体のごく一部であったため、形状は不明である。残存部の規模は1.35ｍ×0.55ｍ以上で、深さ0.4ｍを測った。埋土は２層で、上より黄灰色砂、暗灰色砂質土である。内部から弥生土器が出土した（第20図）。畿内第Ⅱ様式に属するものである。



第19図　土坑Ｋ１－１２１０５平面図・土層断面図

土坑Ｋ１－１２０１４（第17図）

Ｋ１調査区の中央部付近のA19d2地区で検出した。遺構の北半部は調査区の北壁外に広がっているため、形状および規模は不明であるが、検出部分1.47ｍ×2.6ｍ以上で、深さは0.27ｍを測った。埋土は３層で､上より灰黒色砂混じり砂質シルト、灰白色粗砂、灰黒色粘質シルトである。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅱ様式に属するものである。

溝Ｋ１－１２００８（第17図）

Ｋ１調査区の中央部付近のA19d2地区で検出した。前述の土坑Ｋ１－１２０１４のすぐ西側を、北北東から南南西方向に走る。幅1.14ｍで、深さは0.31ｍを測った。埋土は３層で、上より灰白色粗砂、暗灰褐色砂混じり粘質土、暗灰色シルトである。

内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅱ様式に属するものである。

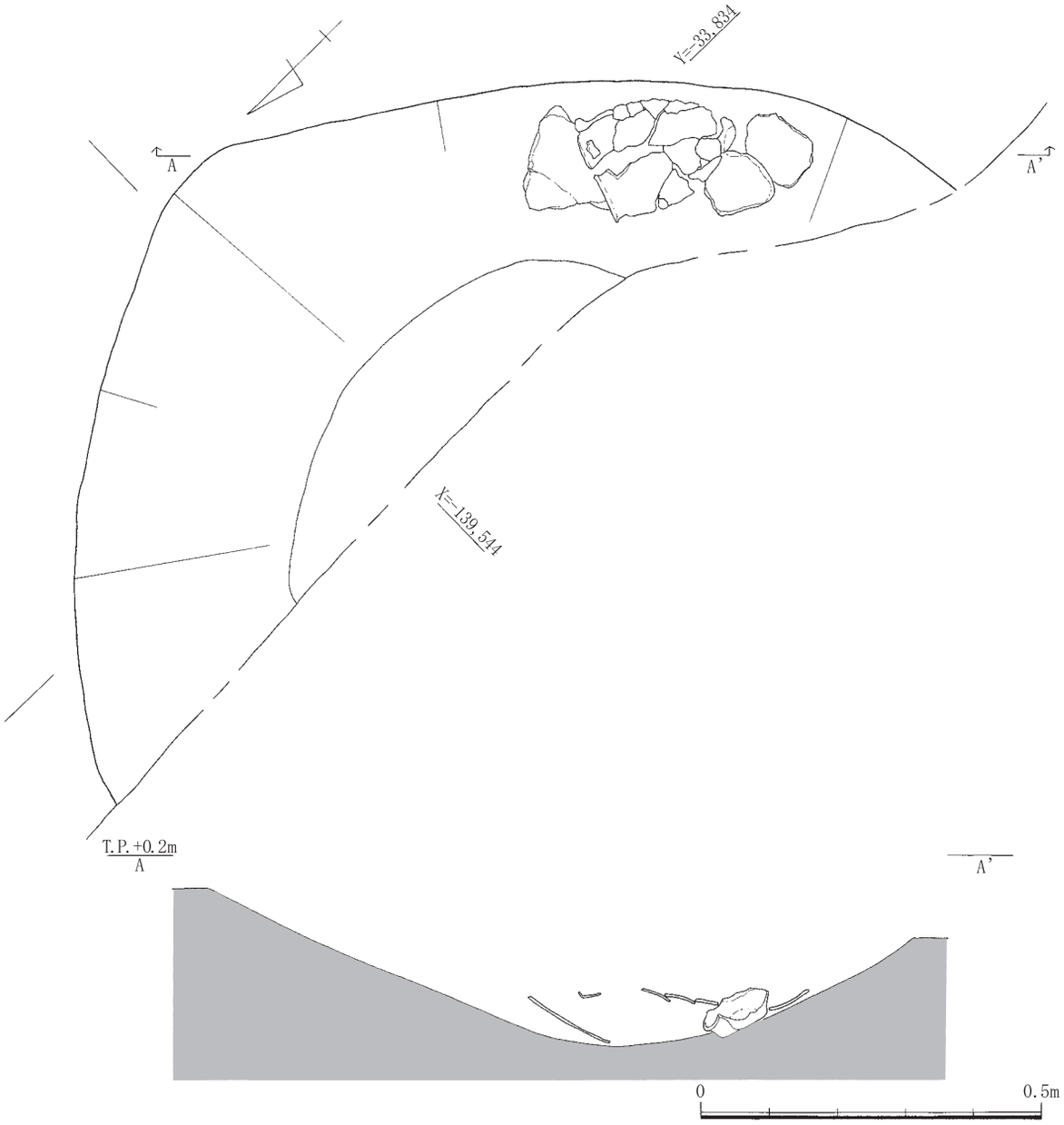
溝Ｋ１－１２００９（第17図）

Ｋ１調査区の中央部付近のA19d2地区で検出した。溝Ｋ１－１２００８の東側を、東北東から西南西方向に走り、溝Ｋ１－１２００８に切られて終わる。幅3.0ｍで、深さは0.12ｍを測った。埋土は２層で、上より黒灰色砂混じり粘質土、緑灰色砂混じり砂質シルトである。

内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅱ様式に属するものである。

溝Ｋ１－１２０１５（第17図）

Ｋ１調査区の中央部付近のA19d2地区で検出した。北壁から３ｍほど南へ走り、溝Ｋ１－１２０３０に切られて終わる。幅1.5ｍで、深さは0.11ｍを測った。埋土は３層で、上より灰黒



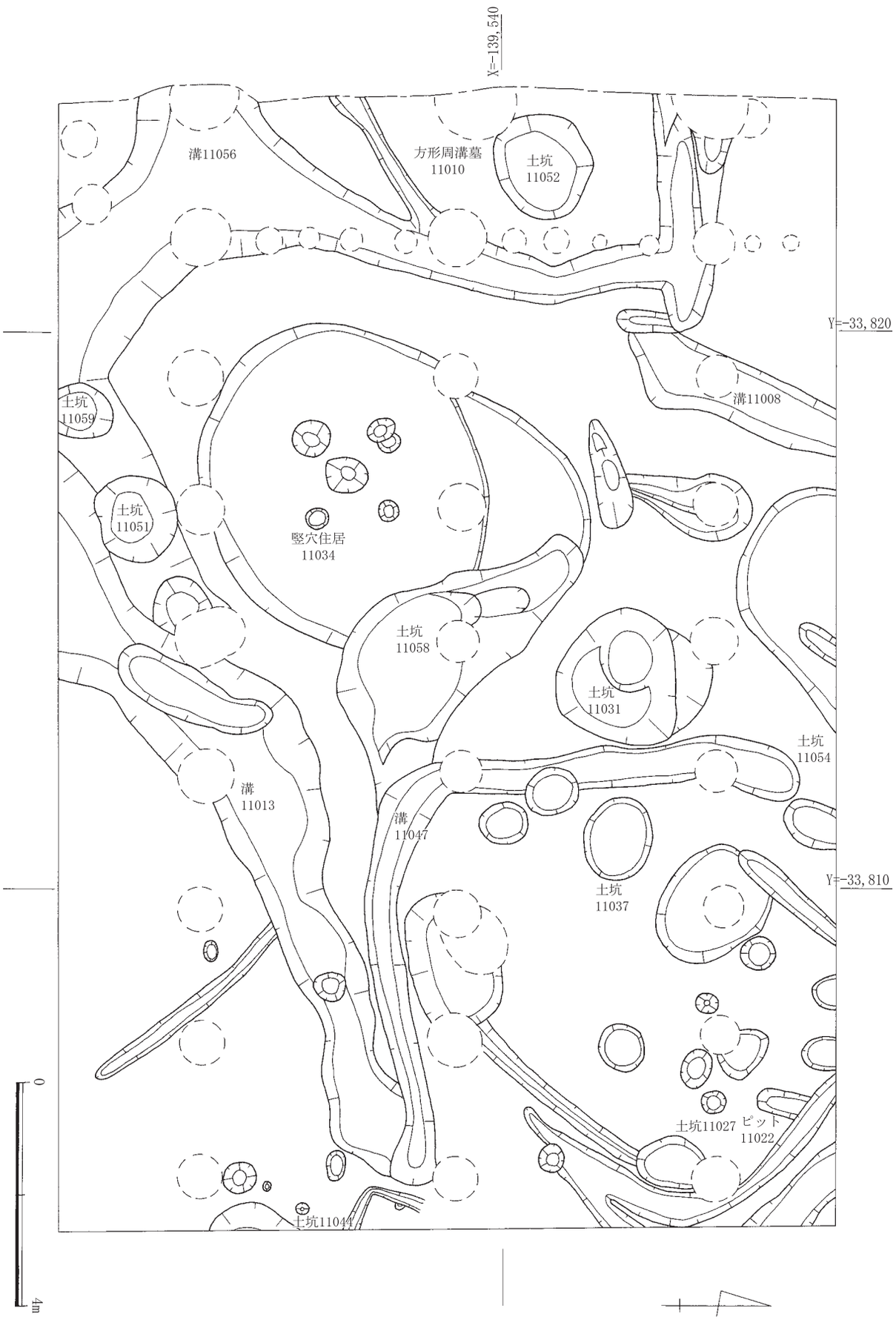
第20図　土坑Ｋ１－１２１０５遺物出土状況平面図・断面図

色砂混じり砂質シルト、灰褐色粗砂、黒色粘質土である。

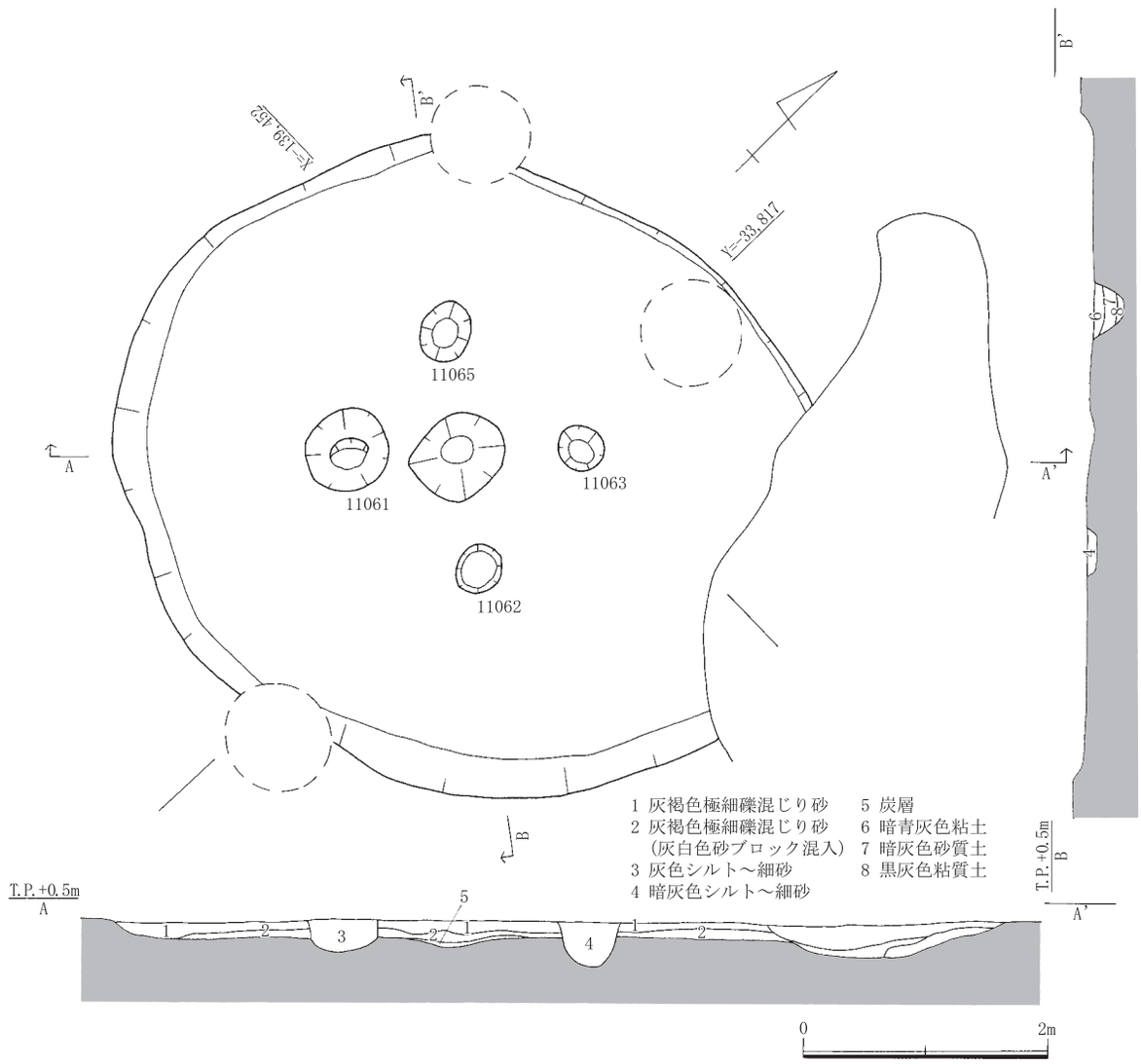
内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅱ様式に属するものである。

第11遺構面検出の遺構

第11面では、第12面で認められた傾斜面の低い地点に、第58層ないしは第57層が約10㎝堆積した上面に形成された面で、北東半部の高位置では第58層と第57層の堆積がほとんど認められないため、第11面と第12面の遺構がほぼ同一レベルで重複して検出されている。調査区全域で竪穴住居、方形周溝墓、土坑、溝、ピットなどの遺構（第21図、図版５・６）が多数検出された。



第21図　Ｋ１調査区弥生時代中期中葉遺構面（第11面）全体平面図



第22図　竪穴住居Ｋ１－１１０３４平面図・土層断面図

竪穴住居Ｋ１－１１０３４（第24図、図版５）

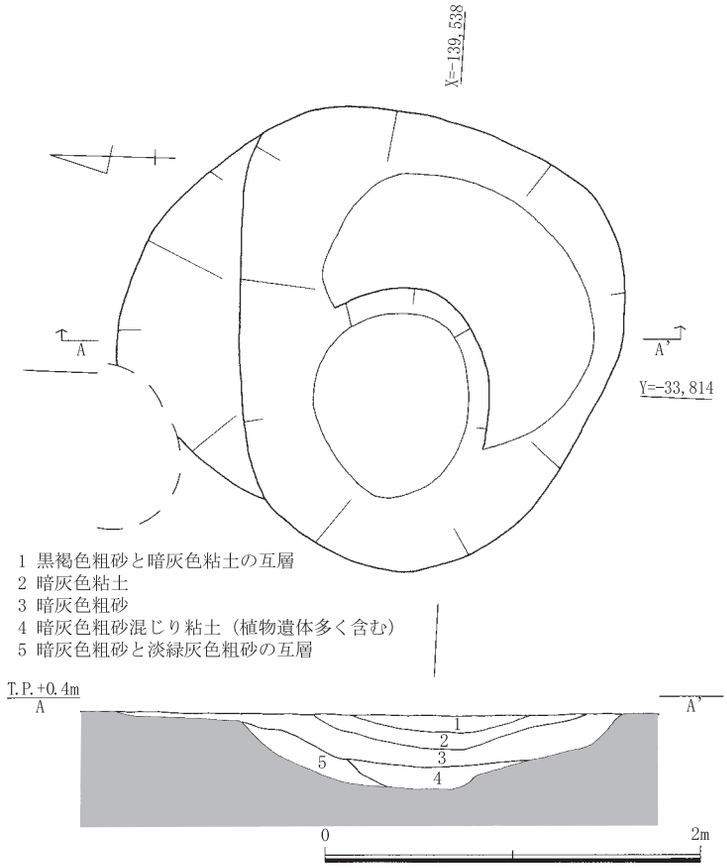
Ｋ１調査区の南西半部付近のA19e2・e3地区で検出した。楕円形状の平面形を呈し、長軸5.6ｍ、短軸5.4ｍ、深さ0.11ｍを測った。覆土は２層で、上より灰褐色極細礫混じり砂、灰白色砂ブロックを含む灰褐色極細礫混じり砂である。プラン内には主柱穴４箇所が検出され、炉穴と考えられる土坑が中央部に認められた。覆土から遺物が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

方形周溝墓Ｋ１－１１０１０（第21図、図版５）

Ｋ１調査区の西端部付近のA19d3・e3地区で検出した。Ｄ－２調査区で検出された方形周溝墓17と同一の遺構で、南北全長4.33m、周溝幅1.0m、深度0.3m内外を測った。主体部が存在したと思われる部分には後出の土坑Ｋ１－１１０５２があり、そのため主体部は削平されたものと思われる。周溝内南西および南東コーナー付近から弥生時代中期に比定される土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

土坑Ｋ１－１１０３１（第23図、図版５）

Ｋ１調査区の中央部北寄りのA19d2地区で検出した。不整楕円形状の平面形を呈し、長軸2.7m、短軸2.4m、深さ0.42mを測った。埋土は５層で、上より黒灰色粗砂と暗灰色粘土の互層、暗灰色粘土、暗灰色粗砂、暗灰色粗砂混じり粘土、暗灰色粗砂と淡緑灰色粗砂の互層である。内部から弥生土器が出土した（第24図、図版５）。畿内第Ⅲ様式に属するものである。



第23図　土坑Ｋ１－１１０３１平面図・土層断面図

土坑Ｋ１－１１０５１（第25図、図版５）

Ｋ１調査区の南西半部のA19e2地区で検出した。楕円形状の平面形を呈し、長軸1.6m、短軸1.4m、深さ0.3mを測った。埋土は１層で、暗灰色粘土である。内部から弥生土器が出土した（第26図、図版５）。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

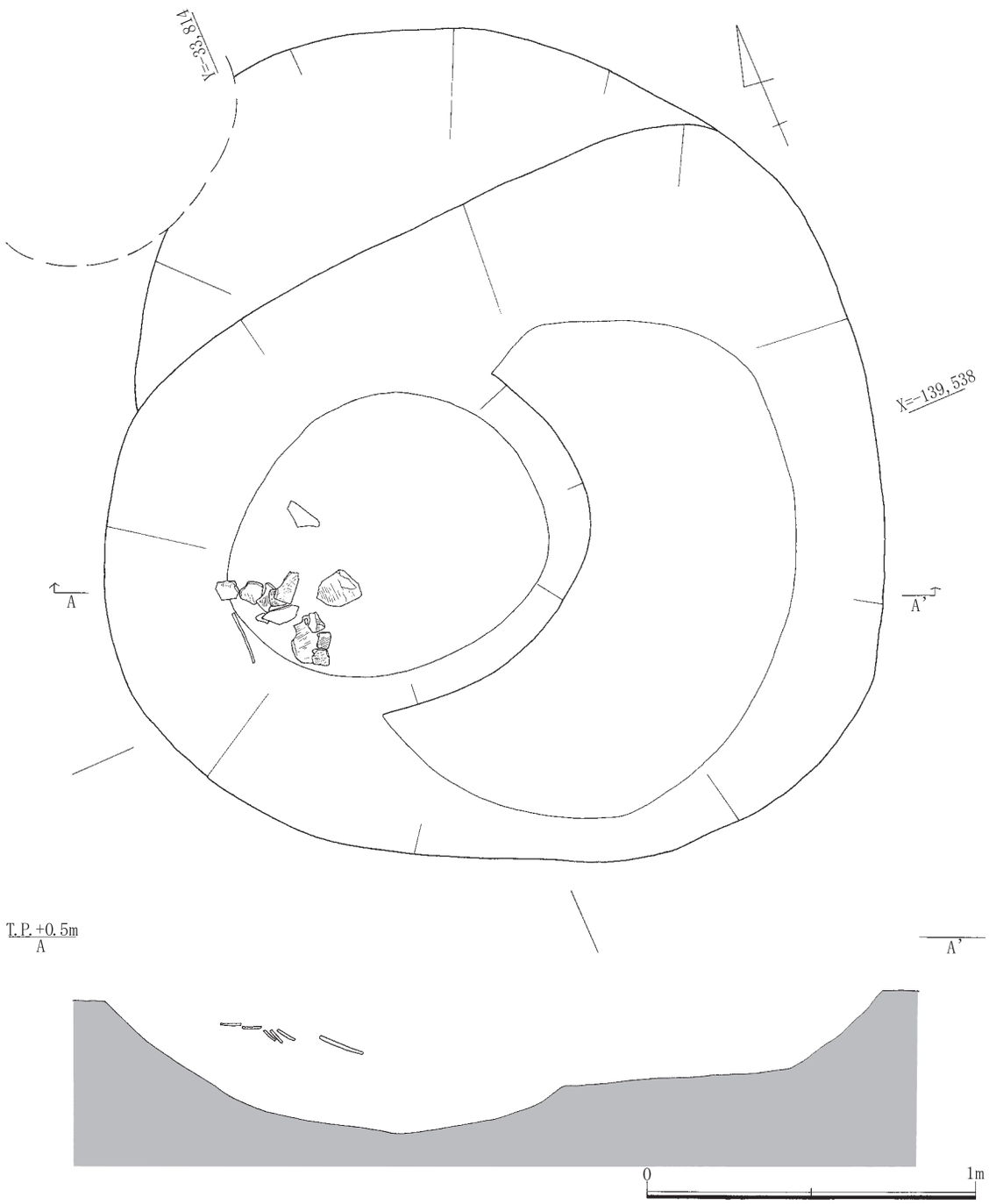
土坑Ｋ１－１１０５２（第27図、図版５）

Ｋ１調査区の西端部のA19d3・e2地区で検出した。不整楕円形状の平面形を呈し、長軸1.9m、短軸1.7m、深さ0.48mを測った。埋土は４層で、上より暗灰色粘土（粗砂を少量含む）、灰黒色極細礫混じり粘質土、灰褐色粗砂混じり砂（灰白色砂ブロックを含む）、暗灰色粗砂混じり砂質シルト（褐色粘土ブロックを含む）である。内部から弥生土器が出土した（第28図、図版５）。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

土坑Ｋ１－１１０５８（第21図、図版６）

Ｋ１調査区の中央部のA19d2・e2地区で検出した。不定形状の平面形を呈し、長軸5.2m、短軸2.25m、深さ0.28mを測った。竪穴住居Ｋ１－１１０３４を切って掘削されている。埋土は４層で、上より細礫・粗砂混じりの灰黒色粘質土、黒灰色シルト、粗砂混じり暗灰色砂、灰褐色シルトである。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

土坑Ｋ１－１１０５９（第21図）

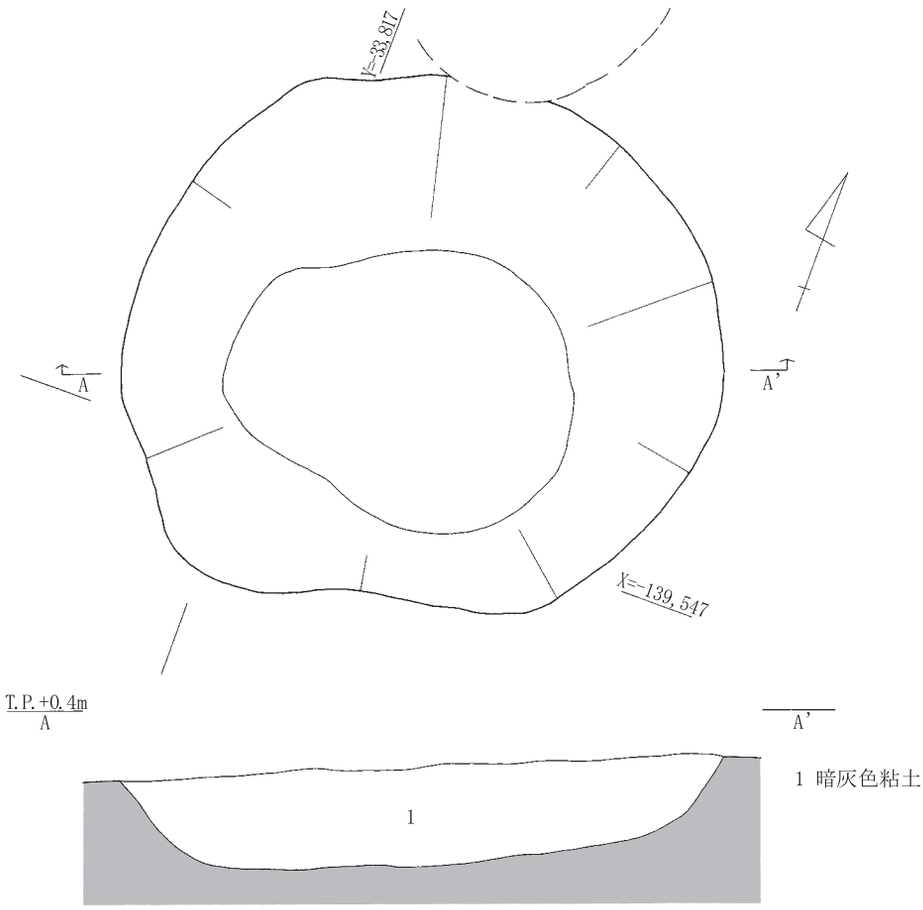


第24図　土坑Ｋ１－１１０３１遺物出土状況平面図・断面図

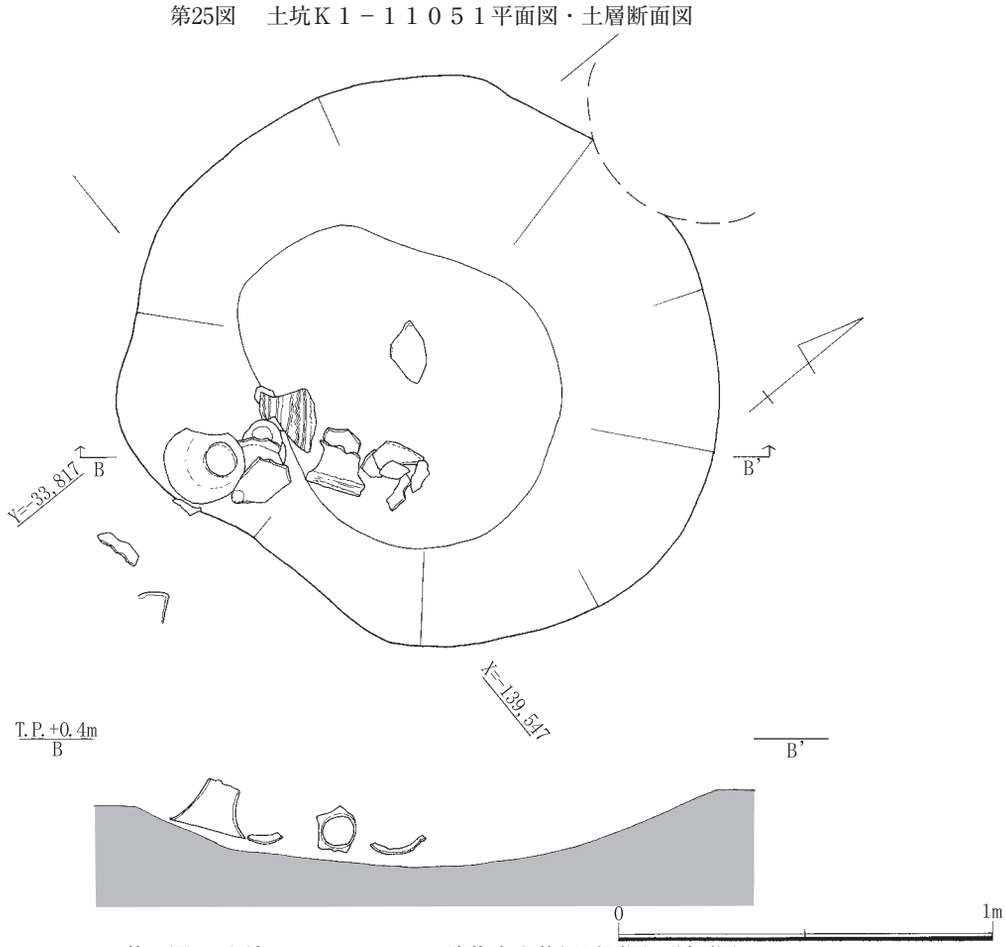
Ｋ１調査区の南半部のA19e2地区で検出した。不整楕円形状の平面形を呈し、長軸1.0m以上、短軸1.0mで、深さは0.14mを測った。南半部は調査区南壁外にある。埋土は１層で暗灰色粘土である。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

土坑Ｋ１－１１０２７（第21図）

Ｋ１調査区の東半部のA19ｄ1地区で検出した。不整楕円形状の平面形を呈し、長軸1.0m、短軸0.95mで、深さは0.08mを測った。埋土は１層で灰黒色粗砂混じり砂質シルトである。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。



第25図　土坑Ｋ１－１１０５１平面図・土層断面図



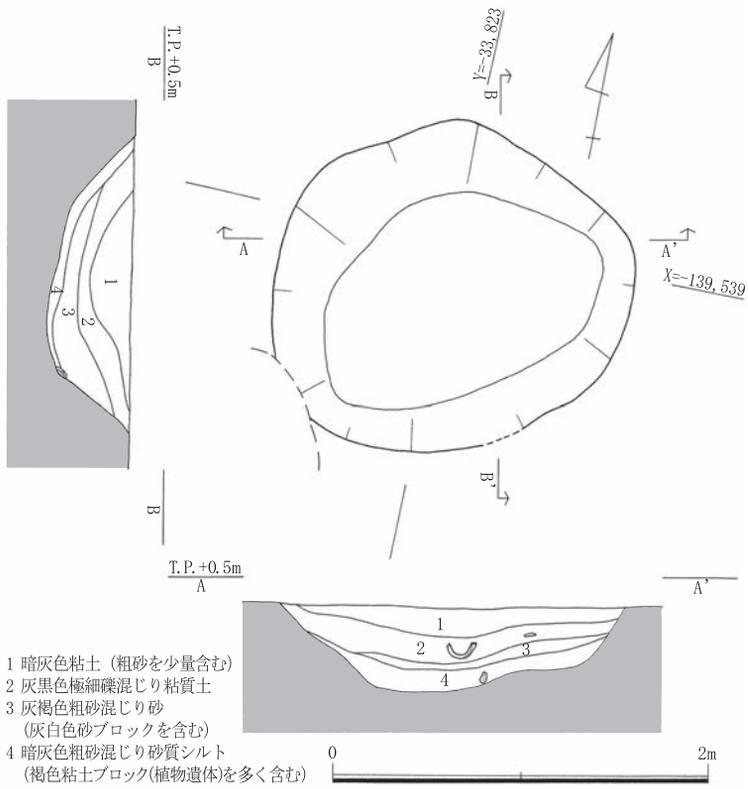
第26図　土坑Ｋ１－１１０５１遺物出土状況平面図・断面図

土坑Ｋ１－１１０５４（第21図）

Ｋ１調査区の中央部のA19d2地区で検出した。不定形状の平面形を呈し、1.0m×1.0m以上、深さ0.10mを測った。埋土は１層で灰黒色粗砂混じり砂質シルトである。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

土坑Ｋ１－１１０４４（第21図）

Ｋ１調査区の南東半部のA19e1地区で検出した。ほぼ半円形状の平面形を呈し、1.35m×0.9m、深さ0.16mを測った。埋土は１層で黒灰色砂質土である。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。



第27図　土坑Ｋ１－１１０５２平面図・土層断面図

土坑Ｋ１－１１０３７（第21図、図版６）

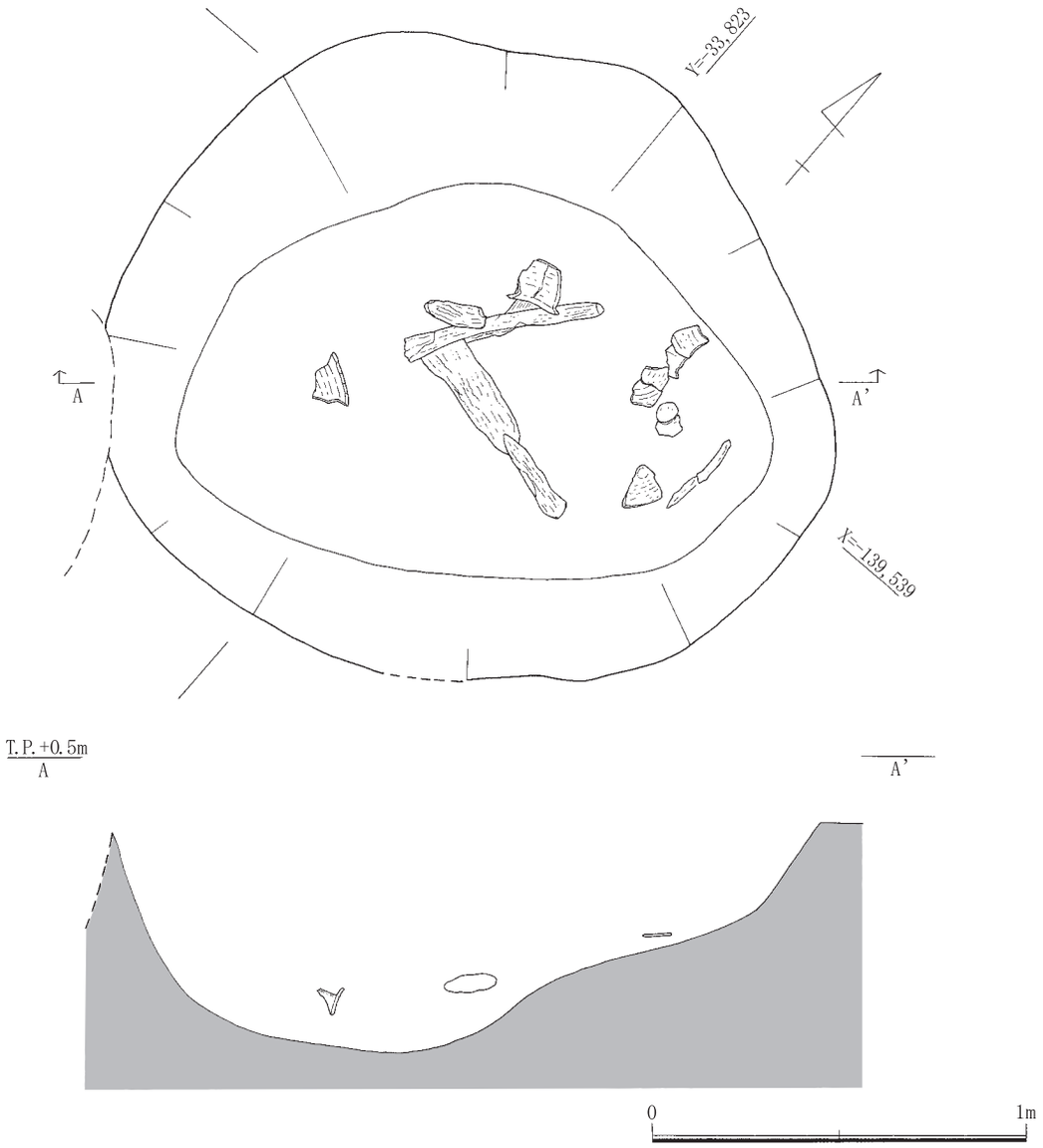
Ｋ１調査区の中央部北寄りのA19d2地区で検出した。楕円形状の平面形を呈し、長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.04mを測った。埋土は１層で灰黒色粗砂混じり砂質シルトである。内部から弥生土器、石鏃（図版６）などが出土した。出土した土器は畿内第Ⅲ様式に属するものである。

溝Ｋ１－１１０１３（第29図、図版６）

Ｋ１調査区の東端部中央付近から南端部中央にかけての、A19e1・e2地区で検出した。東北東から西南西方向に緩く弧を描きつつ延びる溝である。幅1.0m～3.0m、深さ0.52mを測った。埋土は１層から６層と所によって異なるが、黒灰色砂混じりシルトと粘土の互層、黒灰色砂混じりシルト、黒色粘質土、オリーブ灰色粘土、灰緑色砂混じり粘土、黒色粘質土などである。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。また、南壁付近に一部楕円形状の深まりが認められ、その内部から木製品が出土した（第30図、図版６）。

溝Ｋ１－１１０５４（第21図）

Ｋ１調査区の中央部のA19d2・e2地区で検出した。北端付近から南へ5.8m程走り、その後直角に折れて東へ向かい、調査区東壁付近で終わる。幅1.0m、深さ0.1mを測った。埋土は１層で



第28図　土坑Ｋ１－１１０５２遺物出土状況平面図・断面図

灰黒色粗砂混じりシルトである。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

溝Ｋ１－１１０５６（第21図、図版６）

Ｋ１調査区の南西端部のA19e3地区で検出した。北西から南東方向に走る溝で、方形周溝墓Ｋ１－１１０１０を切っている。幅2.0mで深さ0.14mを測った。埋土は３層で、上より灰褐色粗砂混じり粘質土、暗灰色粘質土、暗灰色粗砂混じり粘質土などである。内部から弥生土器、磨製石斧等が出土した。

溝Ｋ１－１１０４７（第21図）

Ｋ１調査区の中央部のA19e2地区で検出した。東西方向に緩く弧を描きつつ延びる溝である。東端部で溝Ｋ１－１１０１３に切られて消滅する。幅1.0mで深さ0.2mを測った。埋土は２層で、

上より暗灰色粘土、黒灰色粗砂混じりシルトである。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

溝Ｋ１－１１００８（第21図）

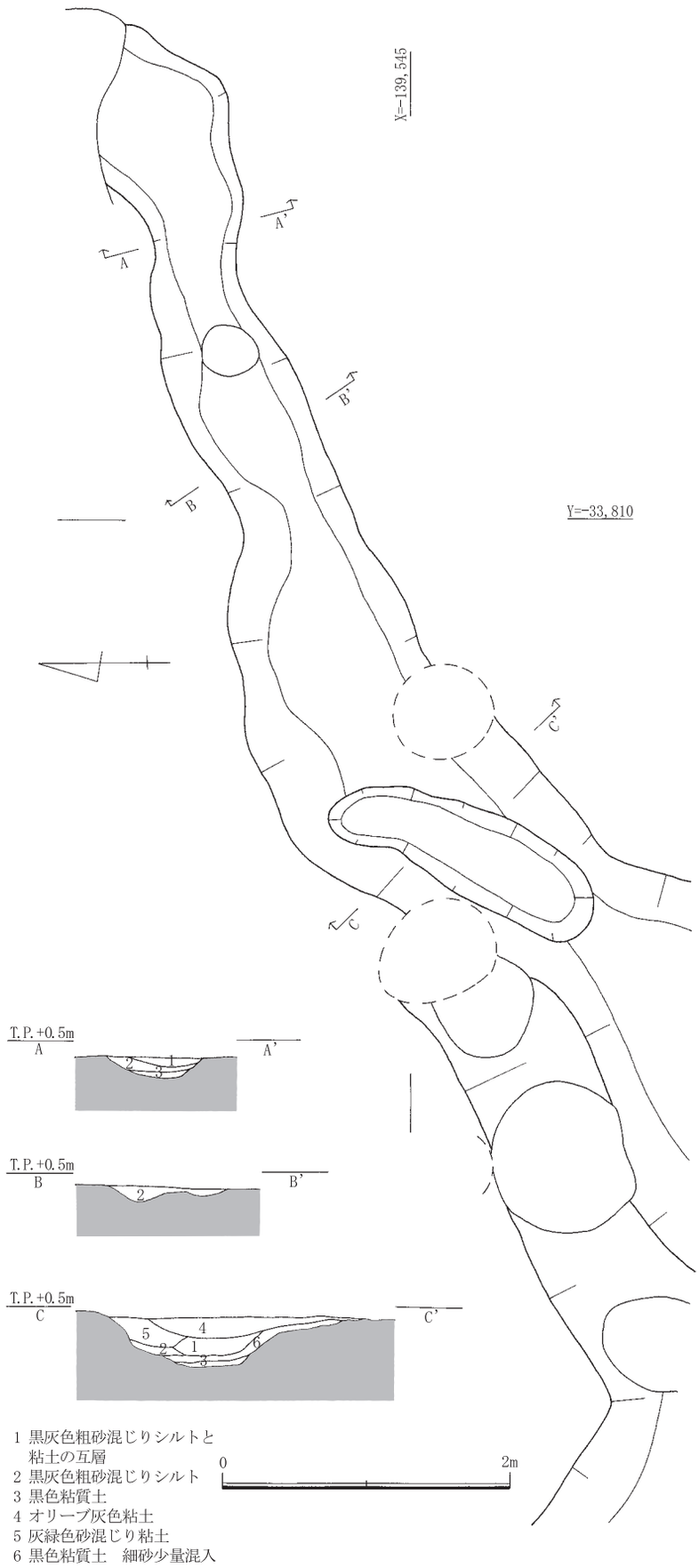
Ｋ１調査区の北西半部のA19ｄ2地区で検出した。南北方向に走る溝で、幅1.3m、深さ0.16mを測った。埋土は３層で、上より黒灰色粗砂混じり粘土、焼土、暗灰色粘土である。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

溝Ｋ１－１１００９（第21図）

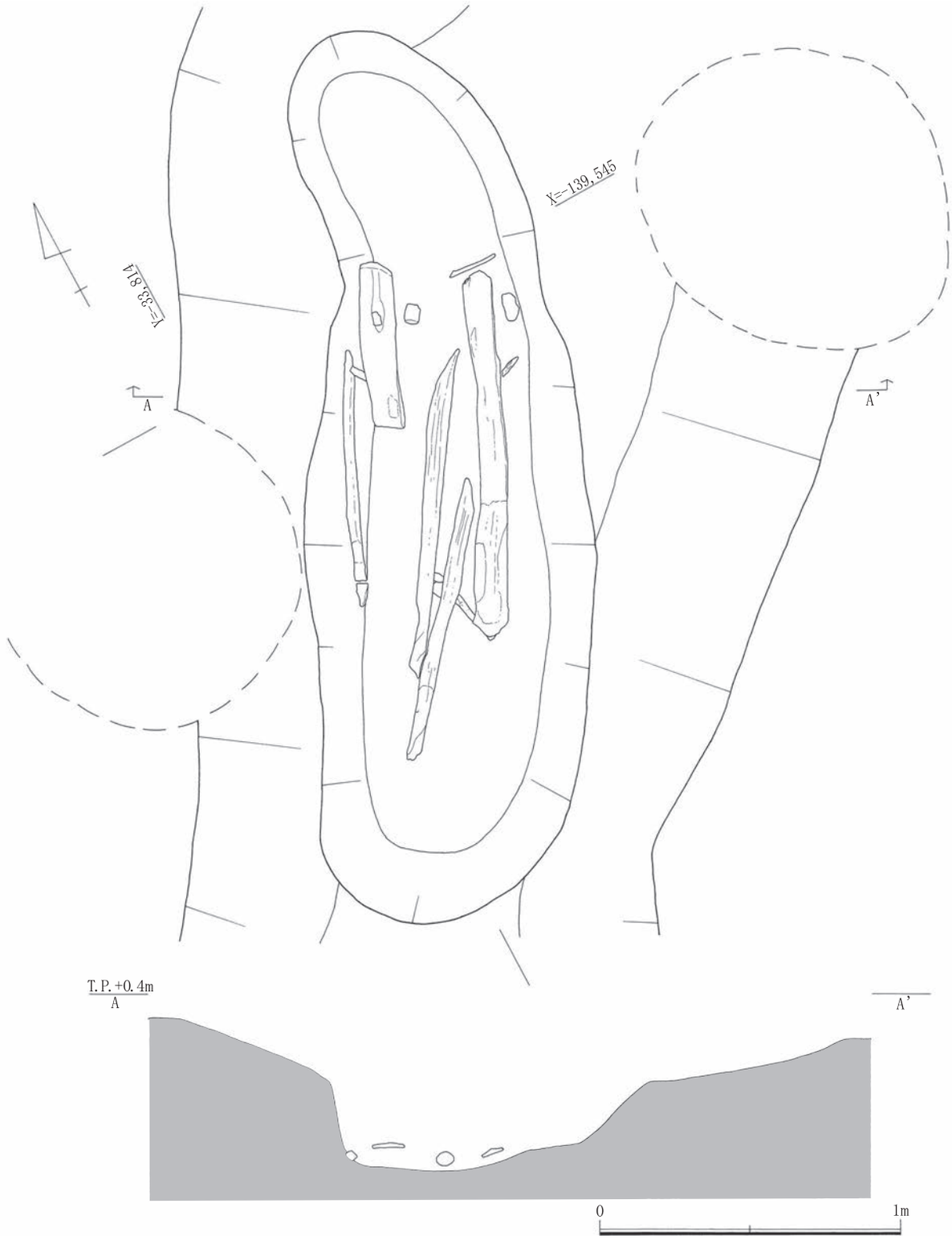
Ｋ１調査区の北東半部のA19ｄ2地区で検出した。東北東から西南西に走る溝で、幅0.4m、深さ0.04mを測った。埋土は１層で、灰黒色粘質土である。内部から弥生土器が出土した。畿内第Ⅲ様式に属するものである。

ピットＫ１－１１０２２（第21図）

Ｋ１調査区の北東半部のA19ｄ1地区で検出した。楕円形状の平面形で、長軸0.80m、短軸0.40m、深さ0.12mを測った。埋土は１層で、黒灰色粗砂混じりシルトである。内部から弥生土器が出土したが、図示し得るものはなかった。



第29図　溝Ｋ１－１１０１３平面図・土層断面図

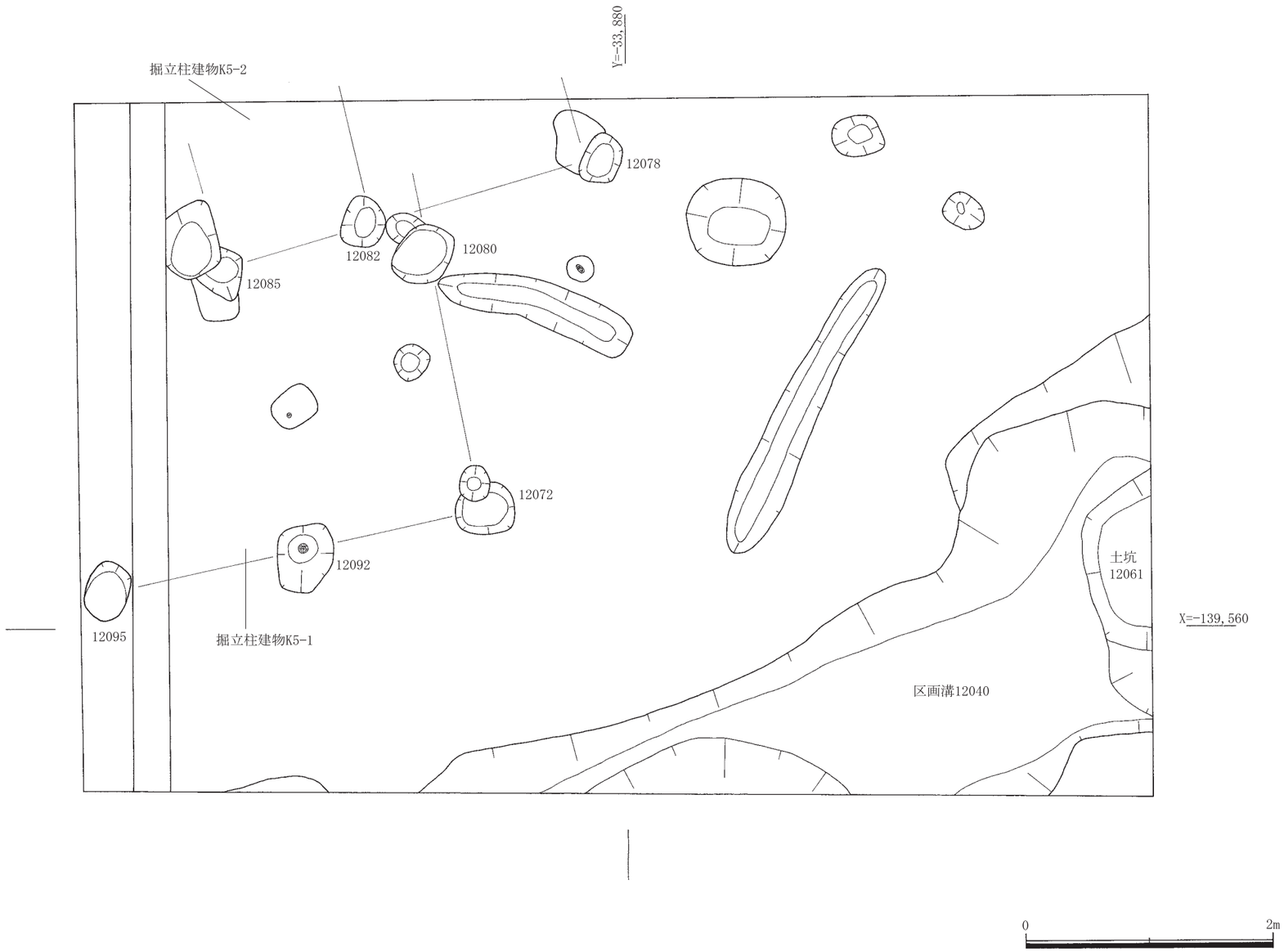


第30図　溝Ｋ１－１１０１３遺物出土状況平面図・断面図

第４節　古墳時代中期～後期の遺構

第１項 Ｋ５調査区

Ｋ５調査区では、緑灰色極細粒砂上面（T. P. 1.3m）の第12面で古墳時代中期～後期の遺構が検出された。



第31図　Ｋ５調査区古墳時代中期～後期遺構面（第12面）全体平面図

掘立柱建物、ピット、居住域を区画する溝などがある（第31図、図版７）。調査区の南東端部で検出された区画溝を境界として、その北西側が北西居住域となる。

１．北西居住域

北西居住域に属する遺構には、掘立柱建物、土坑、溝などがある。

掘立柱建物Ｋ５－１（第32図、図版７）

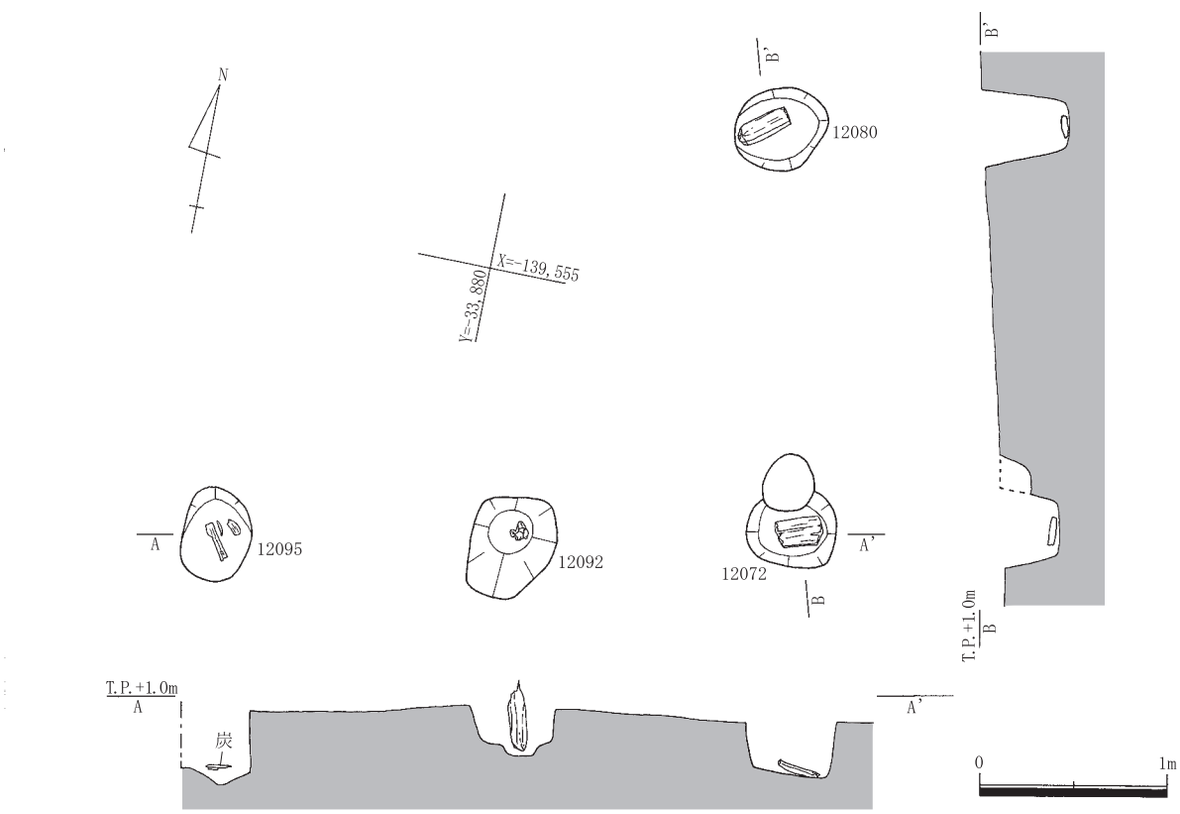
Ｋ５調査区の西半部のA19f9地区で検出した掘立柱建物である。北接するＤ－３調査区での検出部分を合わせると、２間×２間以上の建物となることがわかった。柱間は南北全長3.2m（２間）で、東西全長は2.2m（１間）以上である。建物の主軸はＮ－11°－Ｗを指す。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.35m、最大で0.5mを測った。深さは0.25m～0.5mである。

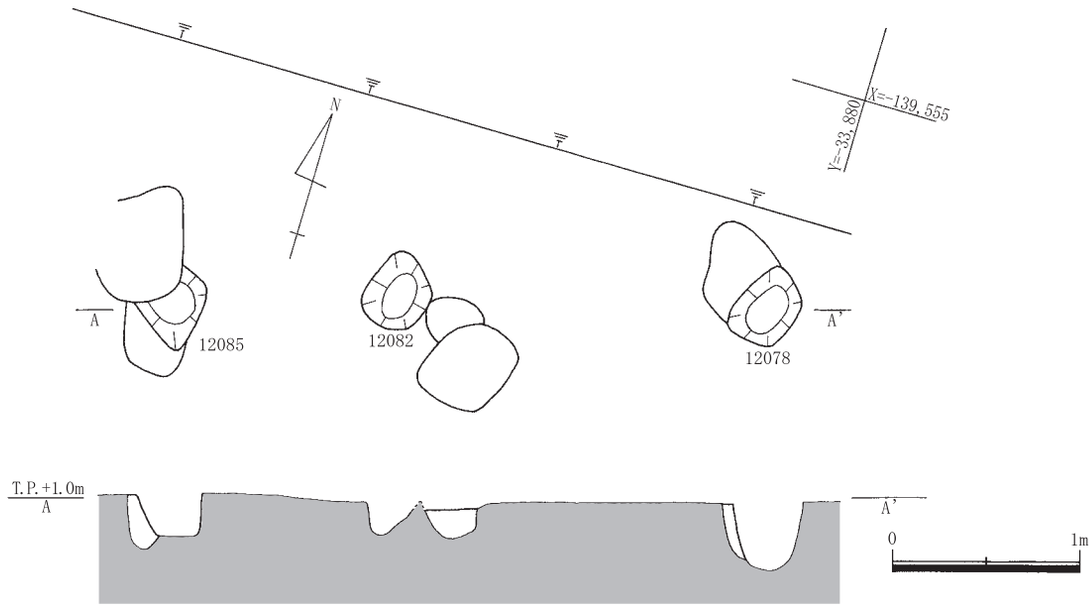
建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

掘立柱建物Ｋ５－２（第33図、図版７）

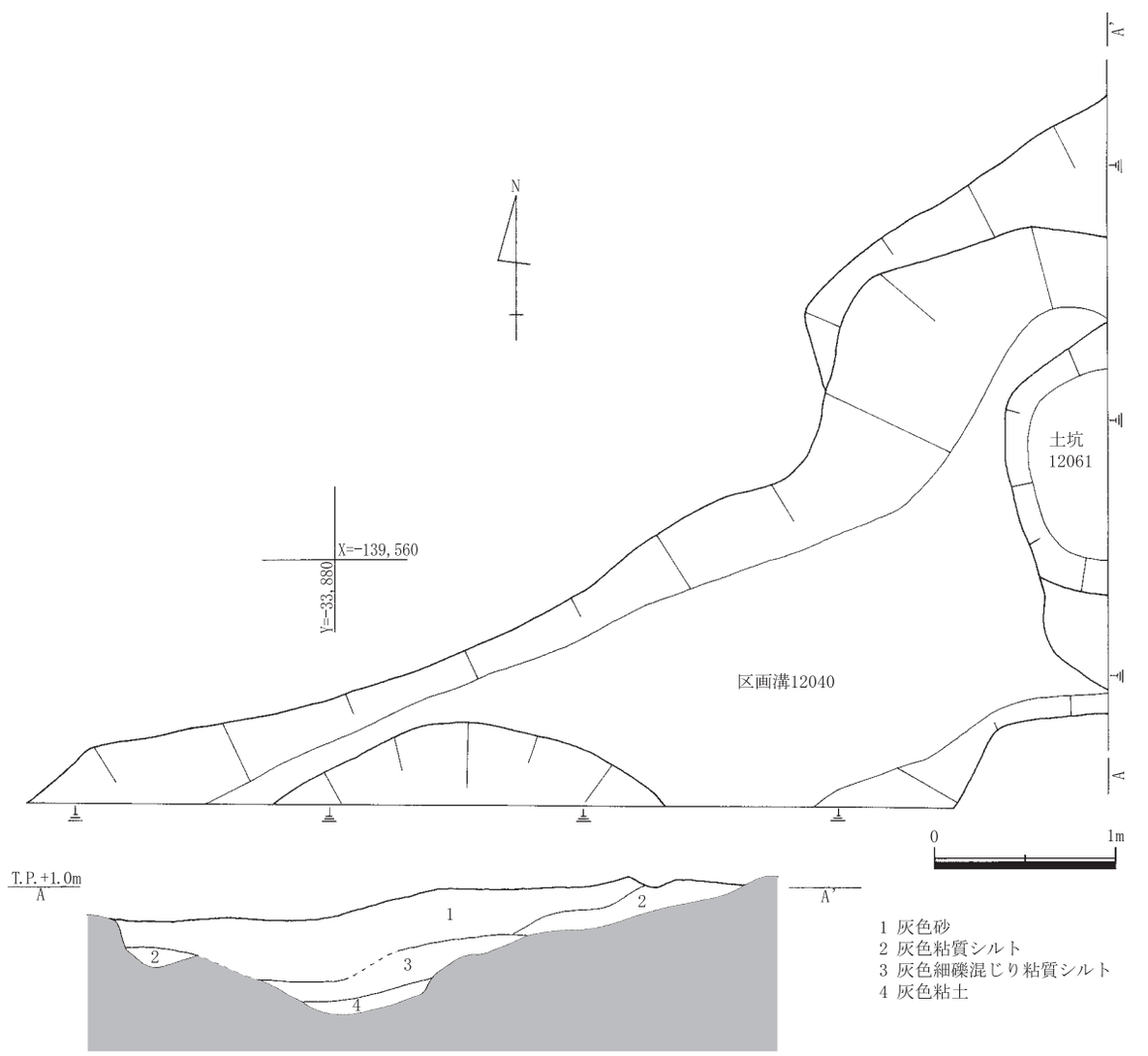
Ｋ５調査区の西半部のA19f9地区で検出した掘立柱建物である。Ｋ５調査区で検出したのは南側の柱穴３箇所のみであったが、北接するＤ－３調査区と、さらにその北側のＤ－１調査区で検出された部分を合わせると、２間×２間以上の総柱の建物となることがわかった。柱間は東西全長3.2m（２間）で、建物の主軸はＮ－14°－Ｗを指す。柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を



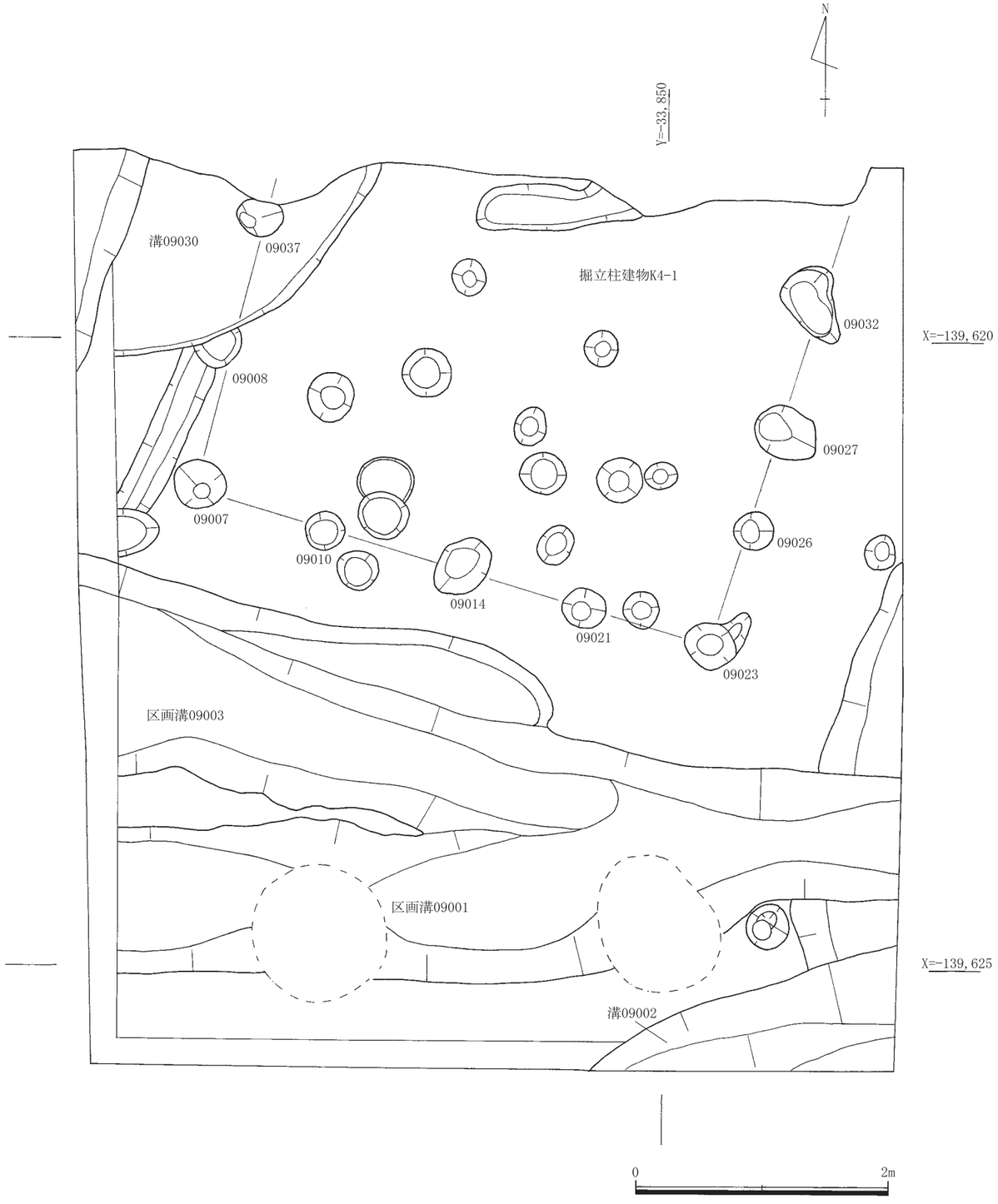
第32図　掘立柱建物Ｋ５－１平面図・断面図



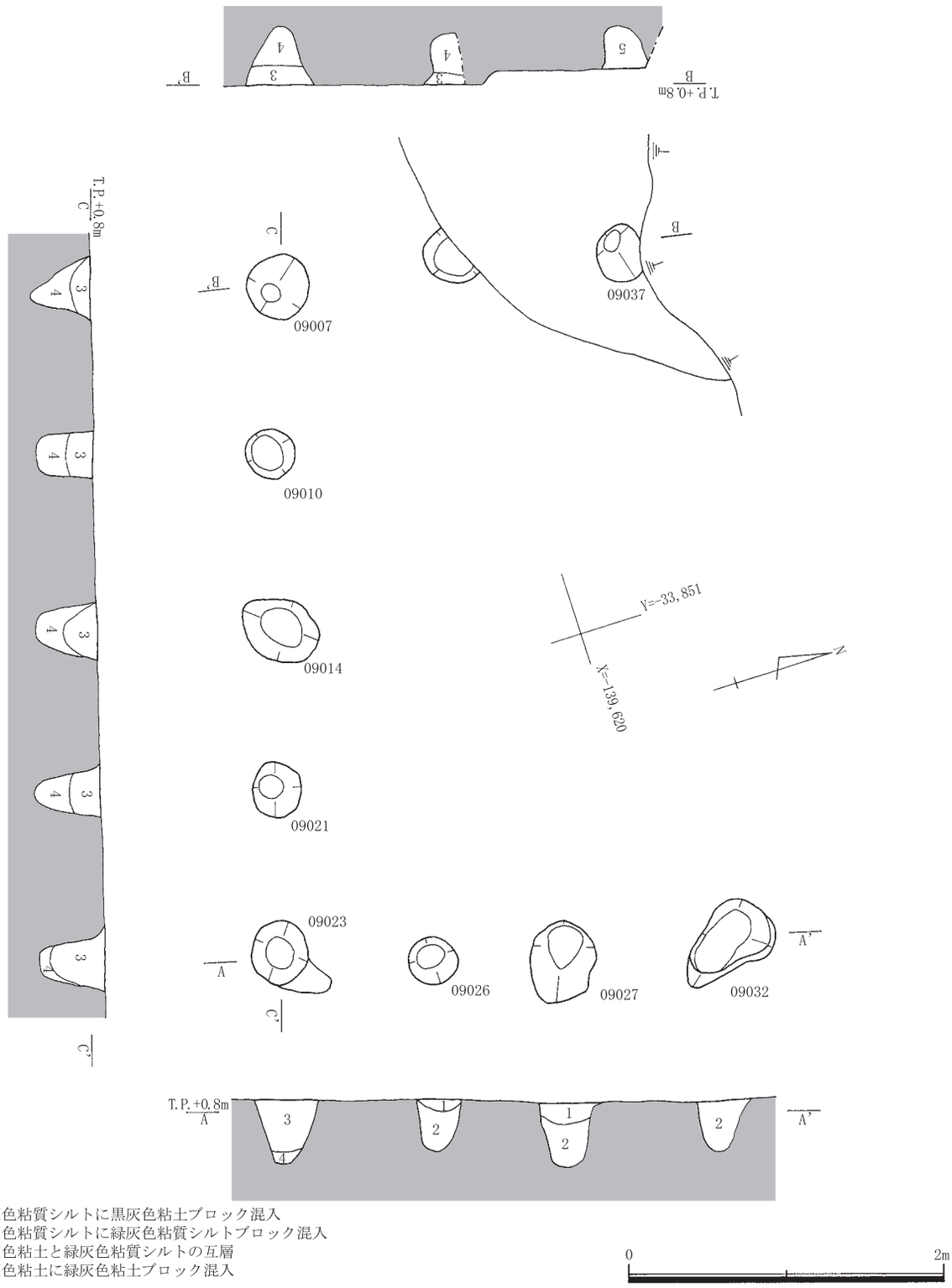
第33図　掘立柱建物Ｋ５－２平面図・断面図



第34図　土坑Ｋ５－１２０６１・区画溝Ｋ５－１２０４０平面図・土層断面図



第35図　Ｋ４調査区古墳時代中期～後期遺構面（第９面）全体平面図

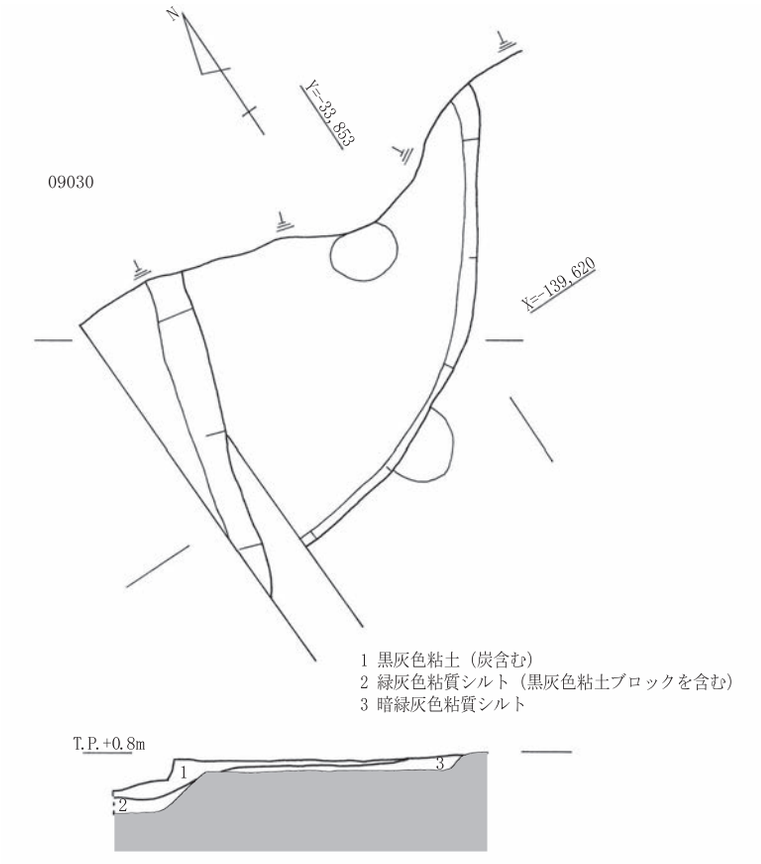


第36図　掘立柱建物Ｋ４－１平面図・土層断面図

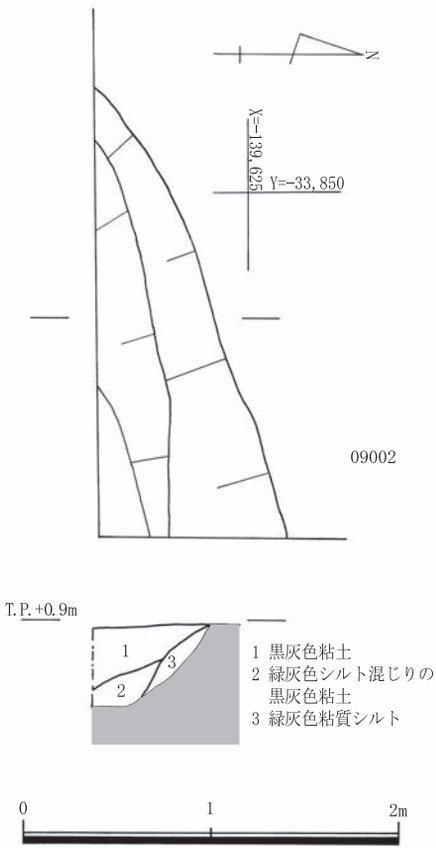
呈し、最小で径0.3m、最大で0.4mを測った。深さは0.15m～0.35mである。

束柱の２箇所の柱穴が、掘立柱建物Ｋ５－１の北側の柱穴２箇所をそれぞれ切っているため、Ｋ５－２はＫ５－１より後出といえる。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



第37図　溝Ｋ４－０９０３０平面図・土層断面図



第38図　溝Ｋ４－０９００２平面図・土層断面図

２．北西居住域と西居住域を区画する溝

区画溝Ｋ５－１２０４０（第34図、図版７）

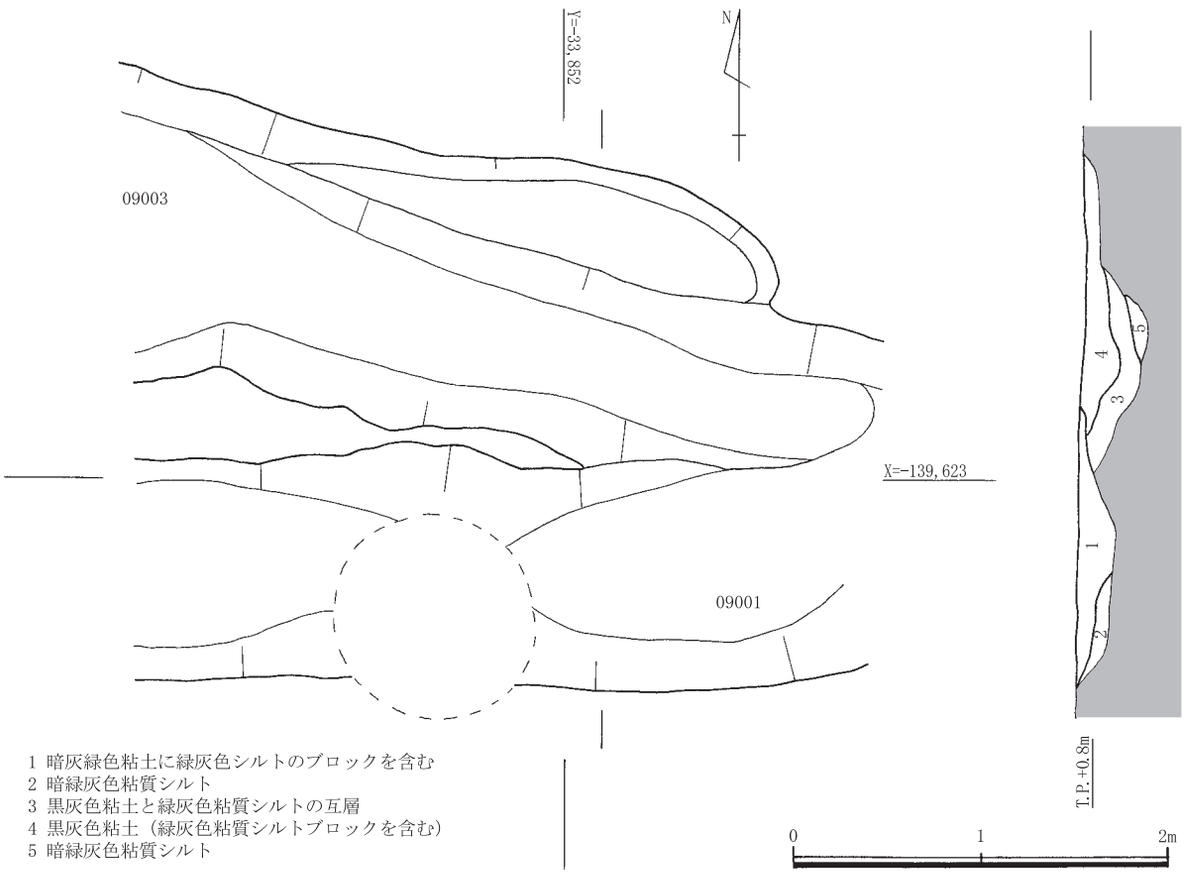
Ｋ５調査区の南東半部のA19f8・g8・g9地区で検出した。北東から南西方向へ走る溝である。幅2.1m～3.4m、深さは最深部で0.76mを測った。埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

第２項　Ｋ４調査区

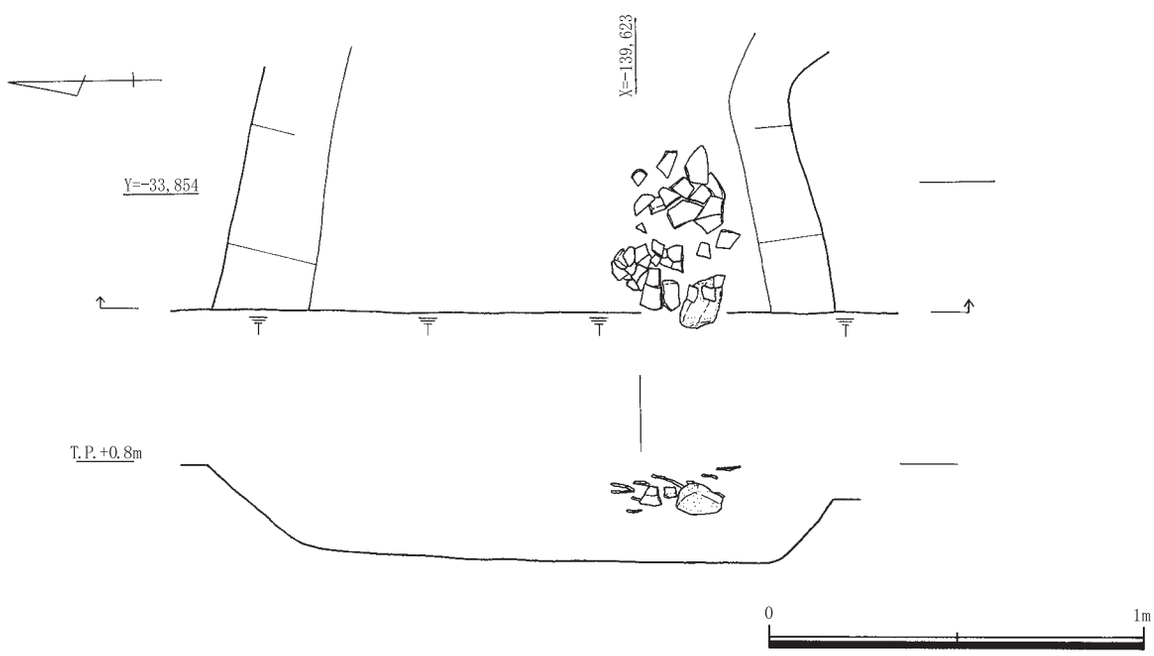
Ｋ４調査区では、緑灰色粘土上面（T. P. 0.8m～0.9m）の第９面で古墳時代中期～後期の遺構が検出された。掘立柱建物、土坑、ピット、溝、居住域を区画する溝などがある（第35図、図版８）。調査区の中央やや南寄りで検出された東西方向の溝を境界として、北側が西居住域、南側が南西居住域となる。

１．西居住域

西居住域に属する遺構には、掘立柱建物、土坑、ピット、溝などがある。



第39図　区画溝Ｋ４－０９００１・Ｋ４－０９００３平面図・土層断面図



第40図　区画溝Ｋ４－０９００３遺物出土状況平面図・断面図

掘立柱建物Ｋ４－１（第36図、図版８）

Ｋ４調査区の北半部のB19b5・b6・c5・c6地区で検出した４間×３間以上の掘立柱建物である。柱間は東西全長4.2m（４間）、南北残存長3.6m（３間以上）で、建物の主軸はＮ－15°－Ｅを指す。北端部はＦ調査区にある。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.3m、最大で0.40m×0.53mを測った。

深さはいずれも0.3m～0.4m内外である。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

溝Ｋ４－０９０３０（第37図、図版９）

Ｋ４調査区の北西端部のB19b6地区で検出した溝である。調査区内で検出したのが東側肩部のごく一部であり、詳細は不明と言わざるを得ないが、北北東から南南西方向へ走るものと考えられ、調査区西壁外およびＦ調査区へのびており、Ｆ調査区では溝Ｆ１０７５となる。埋土は３層に分層でき、上層より炭を含む黒灰色粘土、黒灰色粘土ブロックを含む緑灰色粘質シルト、暗緑灰色粘質シルトとなっている。埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

２．南西居住域

南西居住域に属する遺構には溝がある。

溝Ｋ４－０９００２（第38図、図版９）

Ｋ４調査区の南東端部のB19c5・c6地区で検出した溝である。調査区内で検出したのは北側肩部のごく一部で、東西方向へ走るものと考えられ、調査区東壁外およびＥ調査区へのびており、Ｅ調査区では溝Ｅ０９１００６と呼称される。埋土は３層に分層でき、上層より黒灰色粘土、緑灰色シルト混じりの黒灰色粘土、緑灰色粘質シルトとなっている。埋土内より土師器、須恵器などの遺物が比較的まとまった量出土した。本調査区では時期を判断する決め手となるものは出土しなかったが、Ｅ調査区部分から出土した須恵器はⅠ型式３段階に属するものであった。

３．西居住域と南西居住域を区画する溝

調査区の南半部で、西居住域と南西居住域を区画する溝を検出した。５世紀中葉のもの（溝Ｋ４－０９００３）と、５世紀後半～末のもの（溝Ｋ４－０９００１）がある。

区画溝Ｋ４－０９００３（第39図、図版９）

調査区の南半部で、調査区西壁からほぼ中央部で検出した。ほぼ東西方向に走る。東側は後出の溝Ｋ４－０９００１に切られて消滅している。幅1.54mで、深さは0.25m～0.34mを測った。

埋土は３層に分層でき、上層より黒灰色粘土と緑灰色粘質シルトの互層、緑灰色粘質シルトのブロックを含む黒灰色粘土、暗緑灰色粘質シルトとなっている。埋土内より須恵器、土師器などの遺物が比較的まとまった量出土した（第40図、図版９）。出土した須恵器はⅠ型式３段階に属するものである。

X=-139,560

X=-139,570

X=-139,580

Y=-33,840

Y=-33,830

Y=-33,820

Y=-33,810

ピット
12008

区画溝
12009

区画溝
12010

溝
12011

溝
12023

竪穴住居
K2-3

溝
12018

落ち込み
12178

ピット
12057

土坑
12096

ピット
12117

ピット
12084

ピット
12182

竪穴
住居
K2-2

ピット
12179

溝12024

掘立K2-5

掘立K2-3

掘立K2-2

溝12088

土坑12130

土坑
12131

溝
12066

ピット
12061

溝12029

掘立K2-1

掘立K2-4

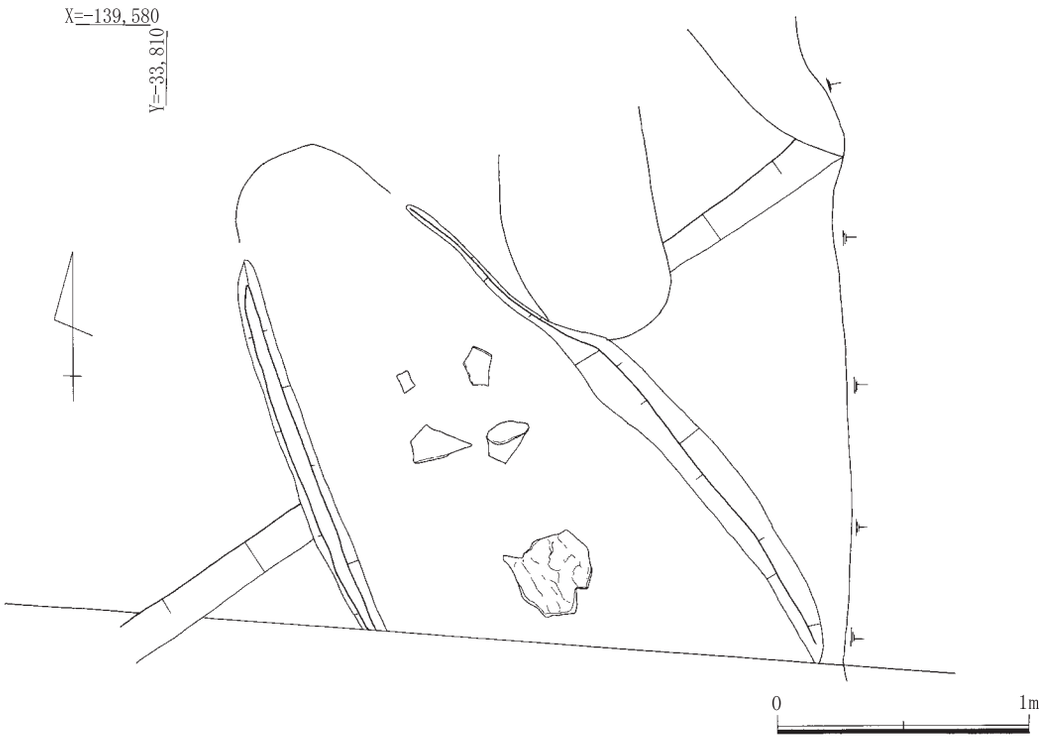
竪穴住居K2-1

棚列-1

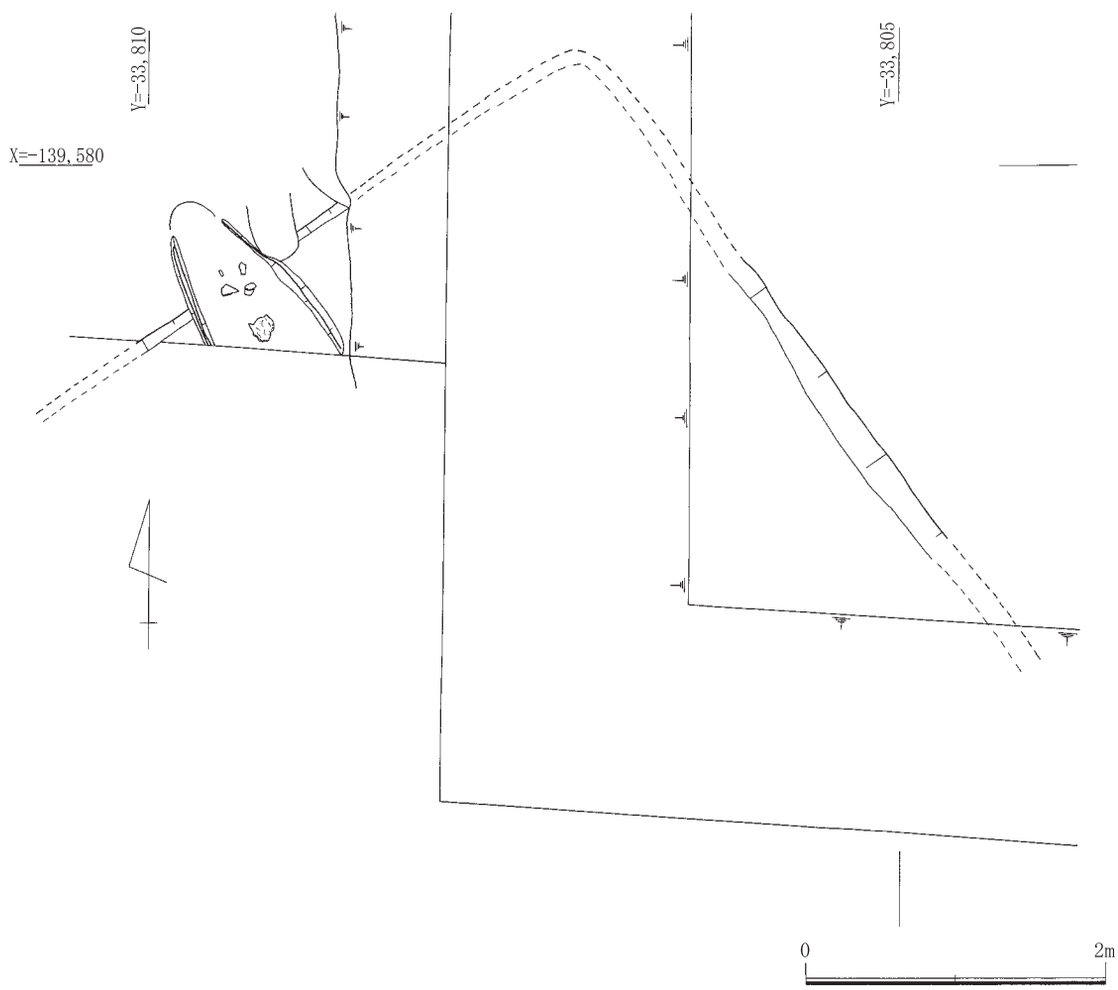
0

10m

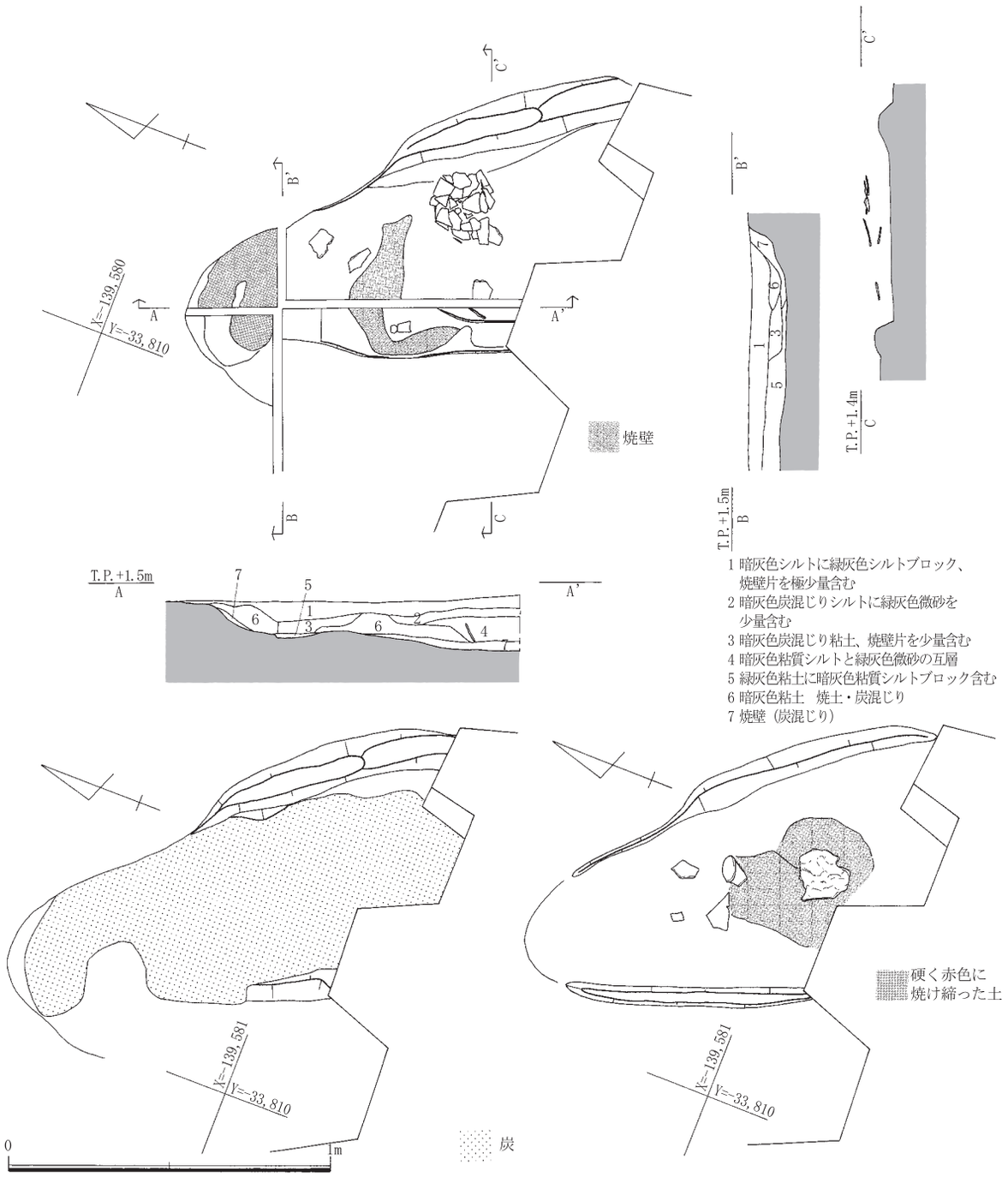
第41図　K２調査区古墳時代中期～後期遺構面（第12面）全体平面図



第42図　竪穴住居Ｋ２－１（１２０９７）平面図



第43図　竪穴住居Ｋ２－１（１２０９７）Ｃ調査区との接合図



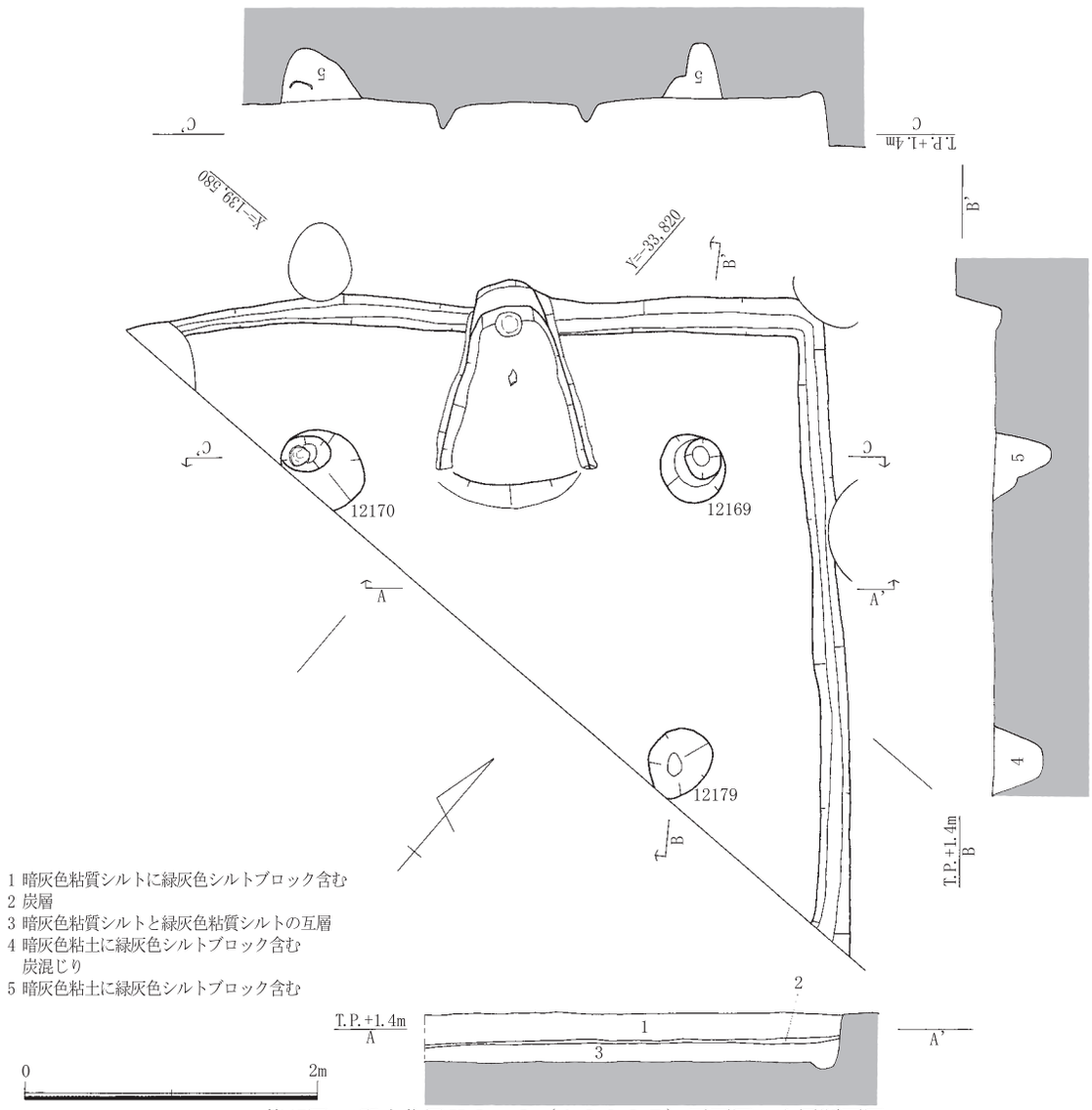
第44図　竪穴住居Ｋ２－１（１２０９７）カマド検出状況平面図・土層断面図・完掘状況平面図

区画溝Ｋ４－０９００１（第39図、図版９）

調査区の南半部の、溝Ｋ４－０９０００３の南側で検出した。ほぼ東西方向に走る。中央部やや東側で溝Ｋ４－０９０００３を切っている。幅0.96m～1.50mで、深さは0.17m～0.21mを測った。

埋土は２層に分層でき、上層より緑灰色シルトのブロックを含む暗灰緑色粘土、暗緑灰色粘質シルトとなっている。埋土内より土師器、須恵器、円筒埴輪などの遺物が比較的まとまった量出土した（図版９）。出土した須恵器はⅠ型式４段階～５段階に属するものである。

第３項　Ｋ２調査区



第45図　竪穴住居Ｋ２－２（１２０８７）平面図・土層断面図

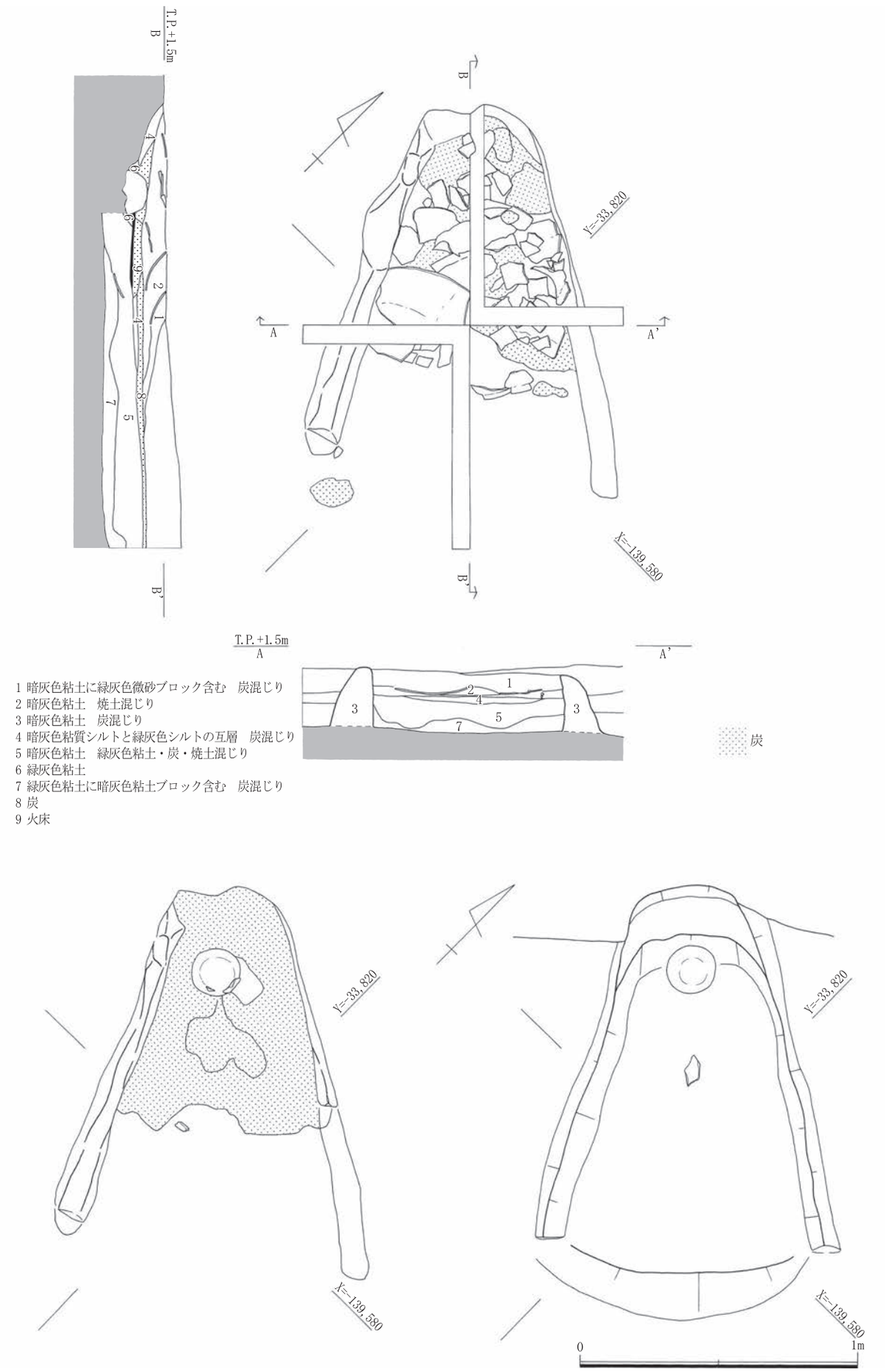
Ｋ２調査区では、緑灰色の粘土ないしはシルト上面（T. P. 0.8m～1.4m）の第12面で古墳時代中期～後期の遺構が検出された。竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピット、溝、区画溝などがある（第41図、図版10)。調査区中央部付近で検出された２条の区画溝を境界として、その東側が北東居住域に含まれる。

１．北東居住域

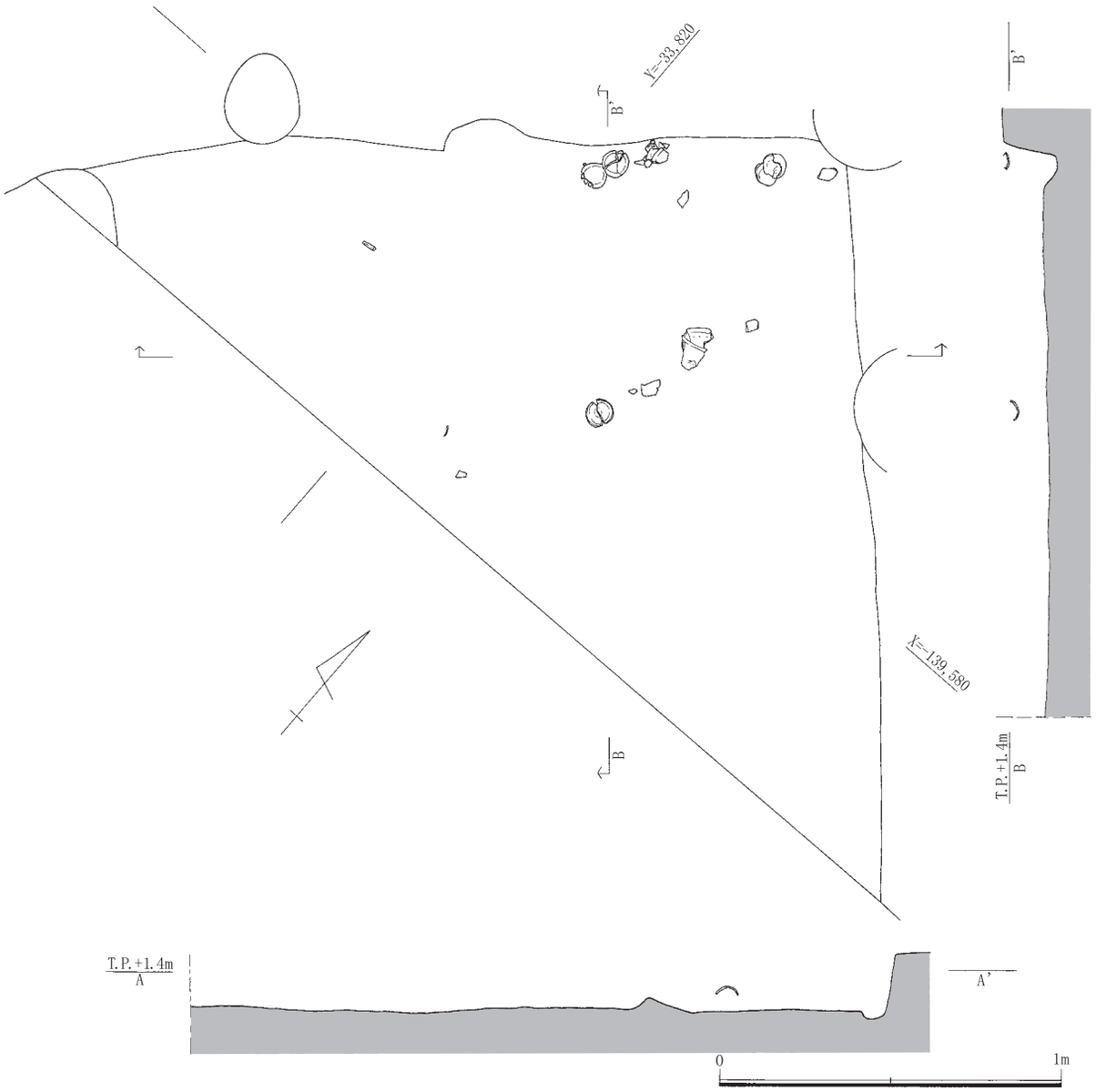
北東居住域に属する遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、柵列、土坑、ピット、溝などがある。

竪穴住居Ｋ２－１（Ｋ２－１２０９７）（第42・43図、図版11）

Ｋ２調査区の南東端部のA19i1地区で検出した。調査区内で検出したのは平面プランのごく一部であるが、造り付けのカマドを検出することができた。わずかに認められた平面プランとカマドの方向から、建物の主軸はＮ－37°－Ｗを指すものと考えられる。カマドは天井部を削平されているが、全体的に残存状況が良好である。袖はＵ字形状に残存し、カマド内には炭化物層や焼



第46図　竪穴住居Ｋ２－２（１２０８７）カマド検出状況平面図・土層断面図・炭層検出状況平面図



第47図　竪穴住居Ｋ２－２（１２０８７）遺物出土状況平面図・断面図

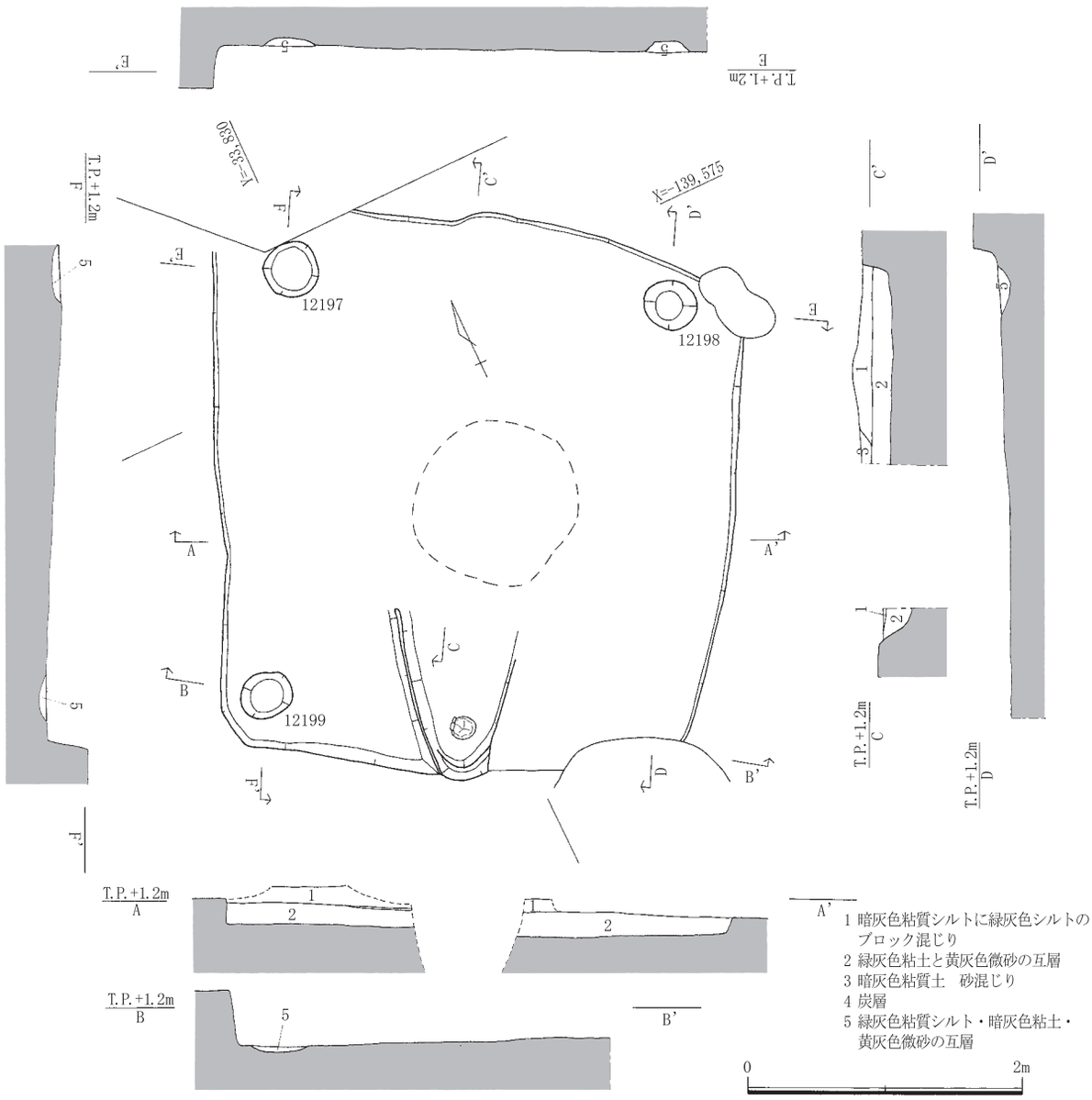
土が堆積していたが、焚き口の火床付近には炭化物層が特に明瞭に認められた。カマドの内部からは土師器が出土している（第44図、図版11）。堆積した炭化物層や焼土を除去すると、中央部付近に土師器甕を転用した支脚が認められた。

カマドの下から、掘立柱建物Ｋ２－４の柱穴Ｋ２－１２１９４が検出された。したがって、竪穴住居Ｋ２－１は掘立柱建物Ｋ２－４より後出といえる。

覆土およびカマド内から須恵器、土師器などが出土した（図版11）。出土した須恵器はⅠ型式５段階～Ⅱ型式１段階に属するものである。

竪穴住居Ｋ２－２（Ｋ２－１２０８７）（第45図、図版11）

Ｋ２調査区の南東半部のA19h2・h3・i2・i3地区で検出した。4.8m×4.3m以上の長方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ－40°－Ｗを指す。平面プランのうち南側の半分は調査区南壁外



第48図　竪穴住居Ｋ２－３（１２１９２）平面図・土層断面図

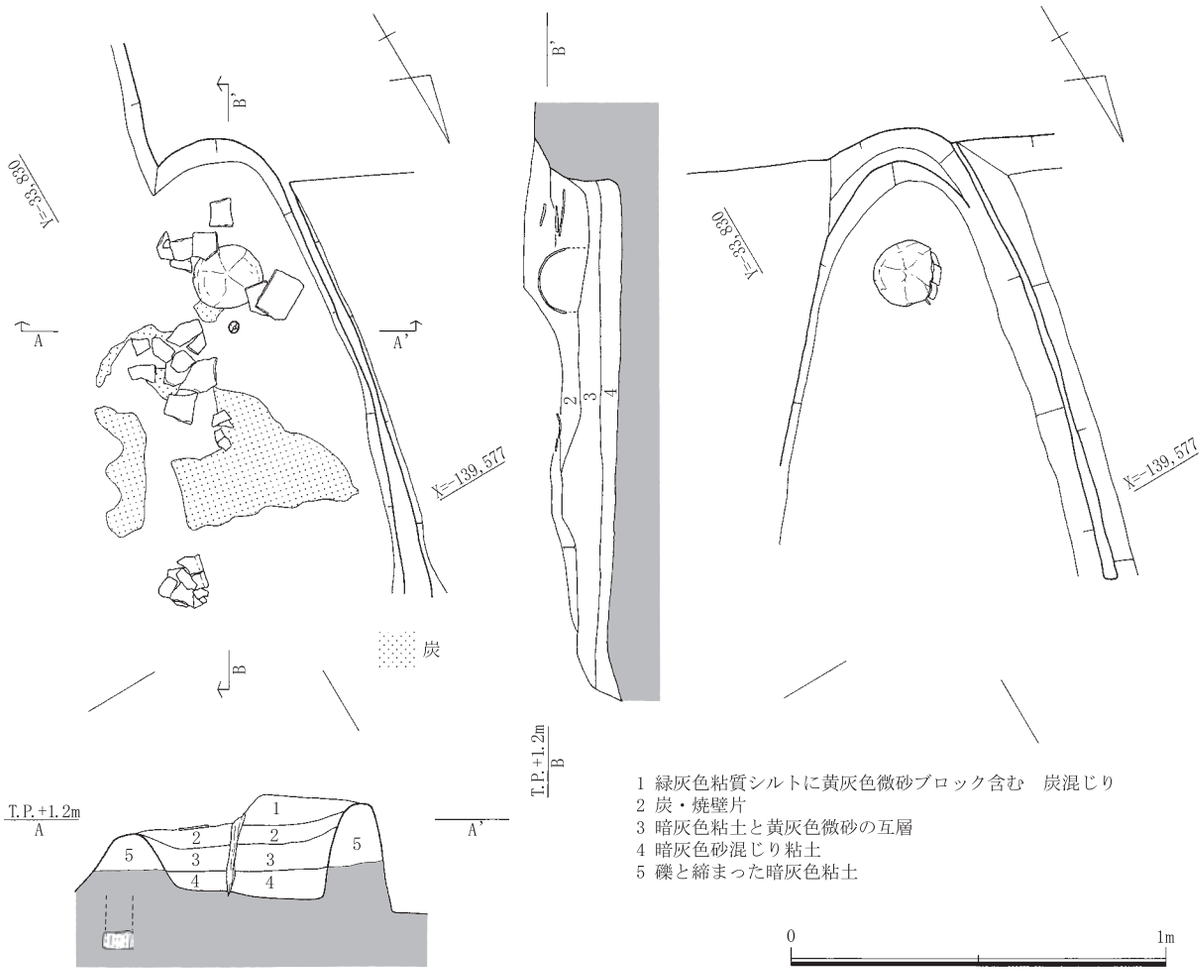
にある。主柱穴を３箇所検出した。周縁に幅0.1m、深さ0.18mの壁溝が巡らされる。北西側の中央やや北東寄りの位置で造り付けのカマドが検出された。カマドは天井部を削平されているが、全体的に残存状況が良好である。袖はＵ字形状に残存し、カマド内には土師器甕の破片が一面に覆いつくすような状態で検出され（第46図、図版12）、隙間には炭化物層や焼土が堆積していた。それらを除去すると、中央部付近の煙道側に土師器甕を転用した支脚が据えられていた。

覆土内より須恵器、土師器、韓式系土器、Ｕ字形板状土製品、獣歯（ウマの臼歯片）などが出土した（第47図、図版12）。出土した須恵器はⅡ型式２段階～４段階に属するものである。

Ｕ字形板状土製品（112）は小片のため、詳細は不明である。

竪穴住居Ｋ２－３（Ｋ２－１２１９２）（第48図、図版12）

Ｋ２調査区の中央部のA19h3・h4地区で検出した。4.0m×3.8mの歪な長方形状の平面形を



第49図　竪穴住居Ｋ２－３（１２１９２）カマド検出状況平面図・土層断面図・完掘状況平面図

呈し、建物の主軸はＮ－50°－Ｗを指す。主柱穴と考えられるピットを３箇所検出した。南西側の中央の位置で造り付けのカマドが検出された。平面プランは溝Ｋ２－１２０１８、溝Ｋ２－１２０２３、溝Ｋ２－１２０１１など複数の遺構に切られた状態で検出され、カマドも、袖部の東半部が溝Ｋ２－１２０１８に切られて欠損していた。カマド内には、土師器壺の胴部を転用した支脚が据えられていた（第49図、図版12）。

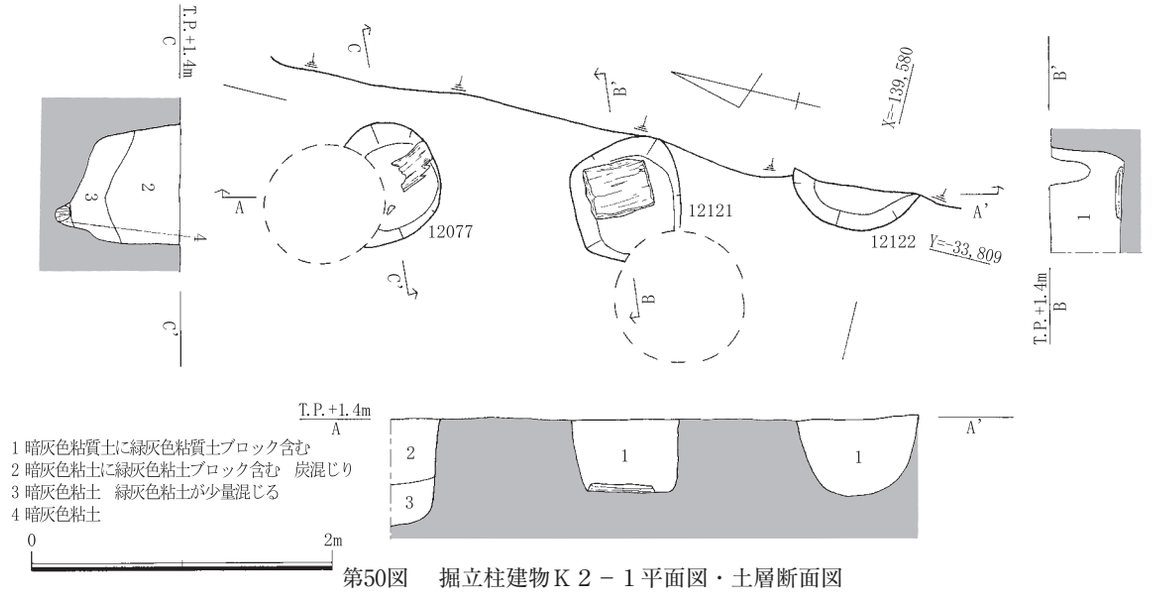
カマドや覆土内より土師器、韓式系土器、製塩土器、砥石などが出土した。

掘立柱建物Ｋ２－１（第50図、図版13）

Ｋ２調査区の東端部中央のA19h1・i1地区で検出した掘立柱建物である。調査区で検出された柱穴は西端部側の３箇所のみであるが、東接するＣ調査区で検出された部分を合わせると、２間×７間以上の細長い建物に復元できる可能性がある（第51図）。柱間は東西全長4.5m（２間）、南北全長10.5m（７間）で、建物の主軸はＮ－15°－Ｗを指す。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.7m、最大で0.8mを測った。深さは0.45m～0.8mである。調査区内の３箇所のうち２箇所の柱穴から礎板が検出された。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を



第50図　掘立柱建物Ｋ２－１平面図・土層断面図

判断する決め手となるものはなかった。

掘立柱建物Ｋ２－２（第52図、図版13）

Ｋ２調査区の北東半部のA19h2地区で検出した掘立柱建物である。調査区内で確認し得たのは１間以上×３間で、平面プランの大部分は調査区北壁外にある。柱間は東西全長が4.5m（３間）で、南北全長は不明である。建物の主軸はＮ－17°－Ｗを指す。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.45m、最大で0.65mを測った。深さは0.25m～0.55mである。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

掘立柱建物Ｋ２－３（第53図、図版14）

Ｋ２調査区の中央部やや東寄りのA19h2地区で検出した掘立柱建物である。調査区内で確認し得たのは１間以上×２間で、平面プランの大部分は調査区北壁外にある。柱間は東西全長が3.3m（２間）で、南北全長は不明である。建物の主軸はＮ－17°－Ｅを指す。柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.35m、最大で0.7mを測った。深さは0.1m～0.29mである。調査区内で検出された柱穴４箇所の内の３箇所で柱根が認められた。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

掘立柱建物Ｋ２－４（第54図、図版14）

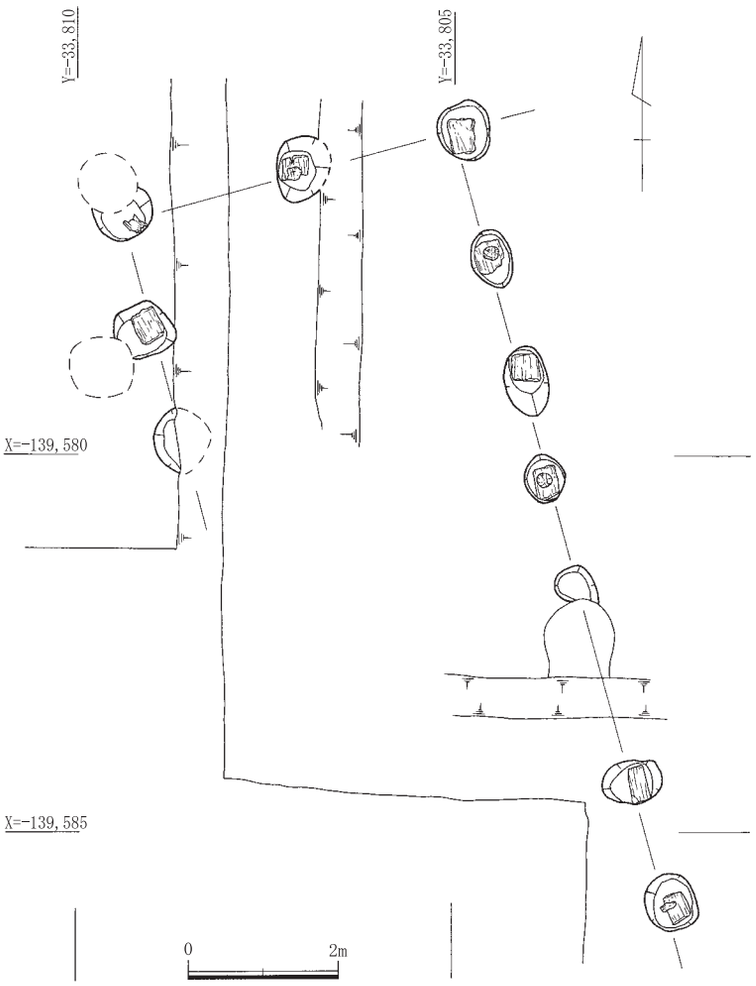
Ｋ２調査区の南東端部のA19h1・h2・i1・i2地区で検出した掘立柱建物である。調査区内で確認し得たのは１間以上×２間で、平面プランの大部分は調査区南壁外にある。

柱間は東西全長が4.9m（２間）で、南北全長は不明である。建物の主軸はＮ－26°－Ｗを指す。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.8m、最大で1.1ｍを測った。深さはいずれも0.8m内外である。調査区内で検出された柱穴４箇所のすべてで、準構造船の船材を転用した礎板が認められた。

柱穴のひとつのピットＫ２－１２１９４は、竪穴住居Ｋ２－１のカマドの下から検出された。したがって掘立柱建物Ｋ２－４は竪穴住居Ｋ２－１より前出のものといえる。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



第51図　掘立柱建物Ｋ２－１Ｃ調査区との接合図

掘立柱建物Ｋ２－５（第55図、図版15）

Ｋ２調査区の中央部北端のA19h3地区で検出した掘立柱建物である。調査区内で確認し得たのは１間以上×２間で、平面プランの大部分は調査区北壁外にある。柱間は東西全長が3.1ｍ（２間）で、南北全長は不明である。建物の主軸はＮ－18°－Ｅを指す。

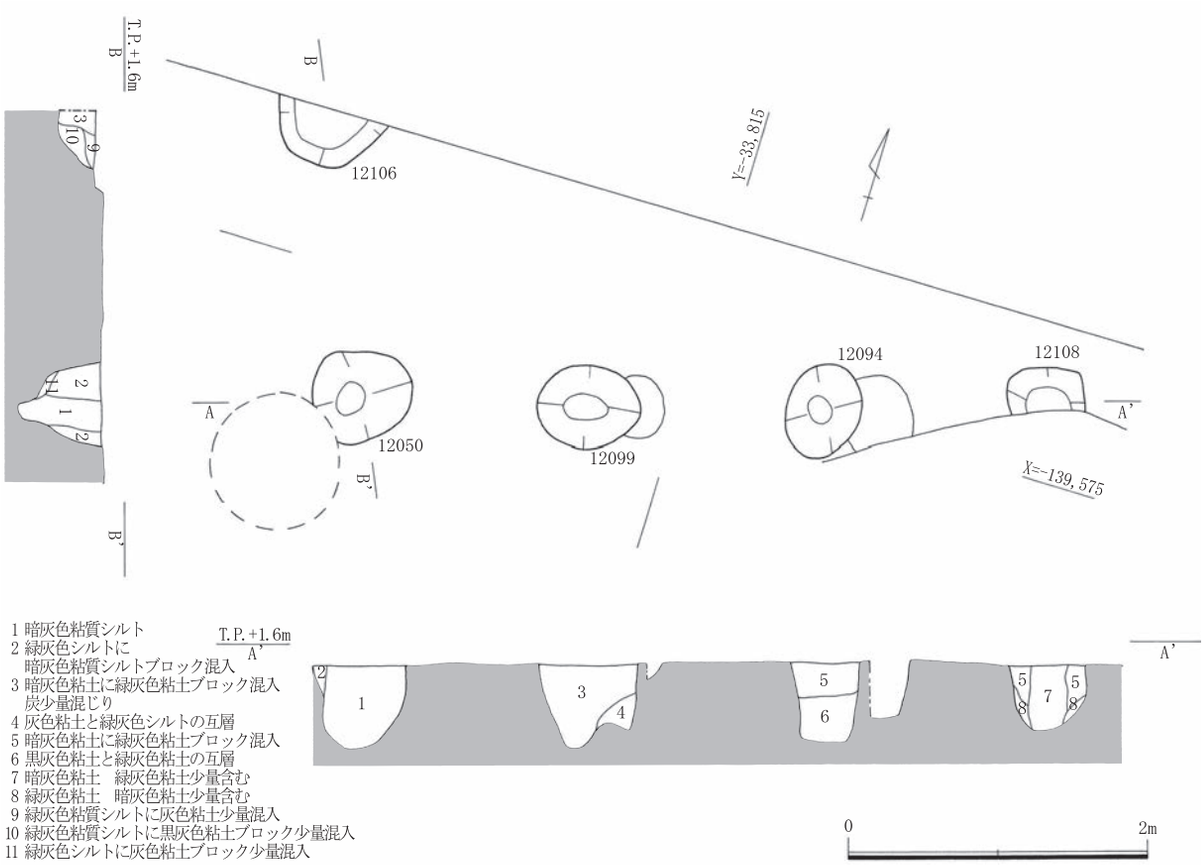
柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.4m、最大で0.65ｍを測った。深さは0.4m～0.63mである。調査区内で検出された柱穴４箇所のうち２箇所で柱根が認められた。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

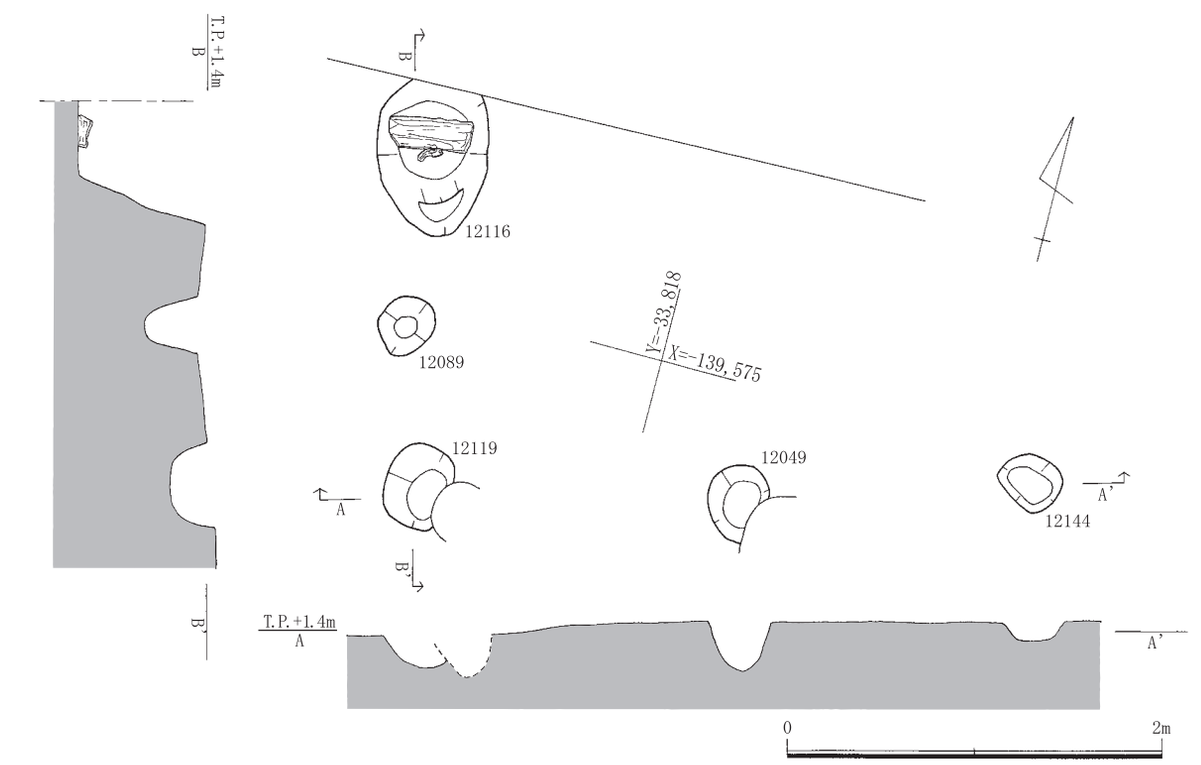
柵列Ｋ２－１（第41図、図版15）

Ｋ２調査区のほぼ中央部のA19h4・i4地区で検出した柵列である。北東居住域の西端部にあたる地点で南北方向に４箇所の柱穴を確認した。南端部の柱穴には柱根が残存していた（図版15）。

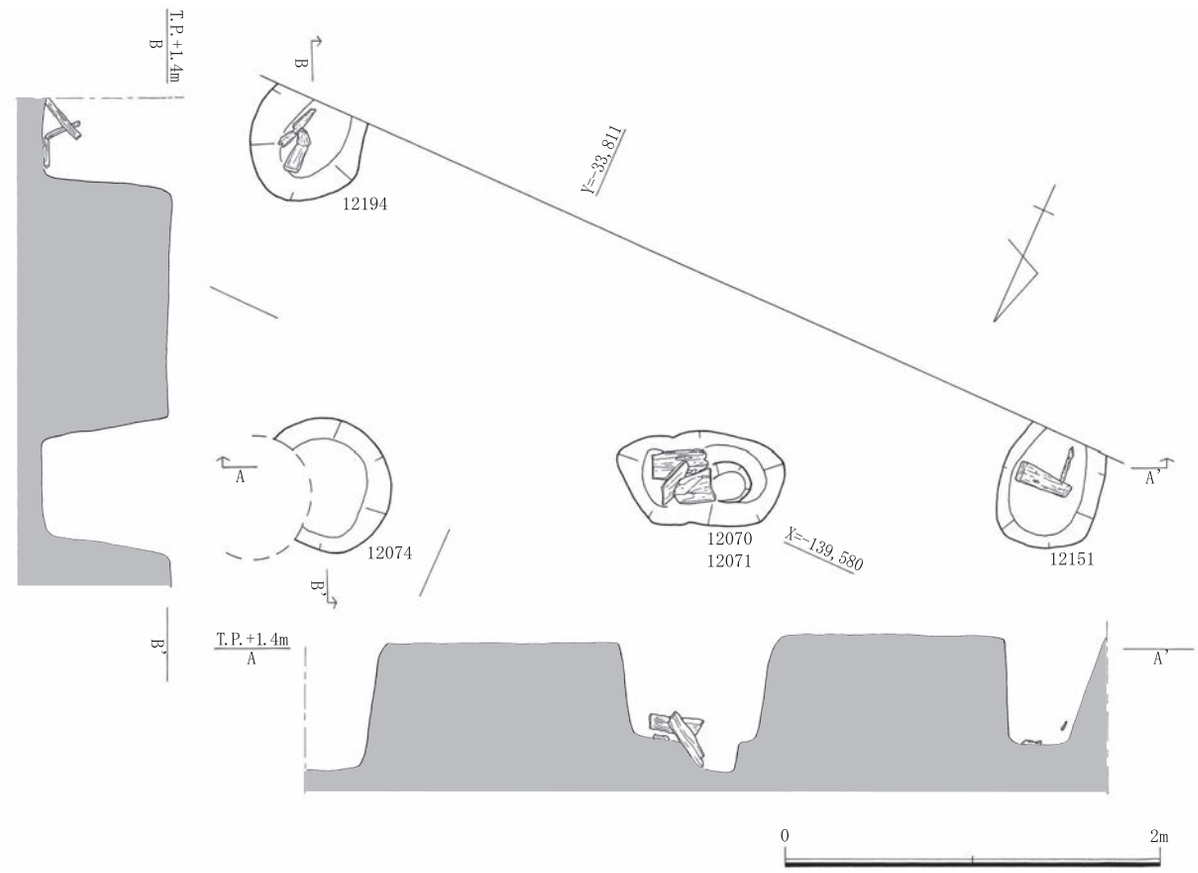
その西側は比高差0.8mの傾斜面となっている。柱穴のひとつのＫ２－１２０２２の埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土したが、出土した須恵器はⅠ型式４段階に属するものである。



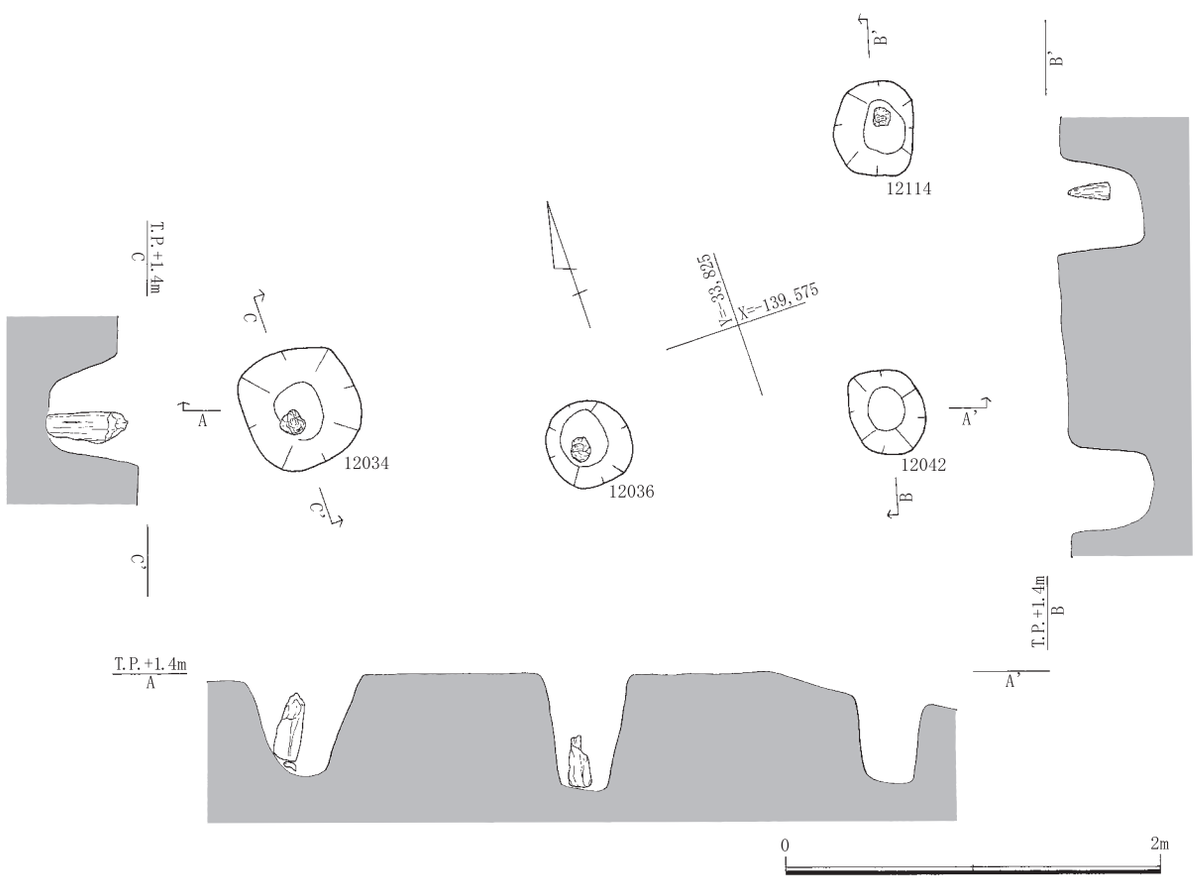
第52図　掘立柱建物Ｋ２－２平面図・土層断面図



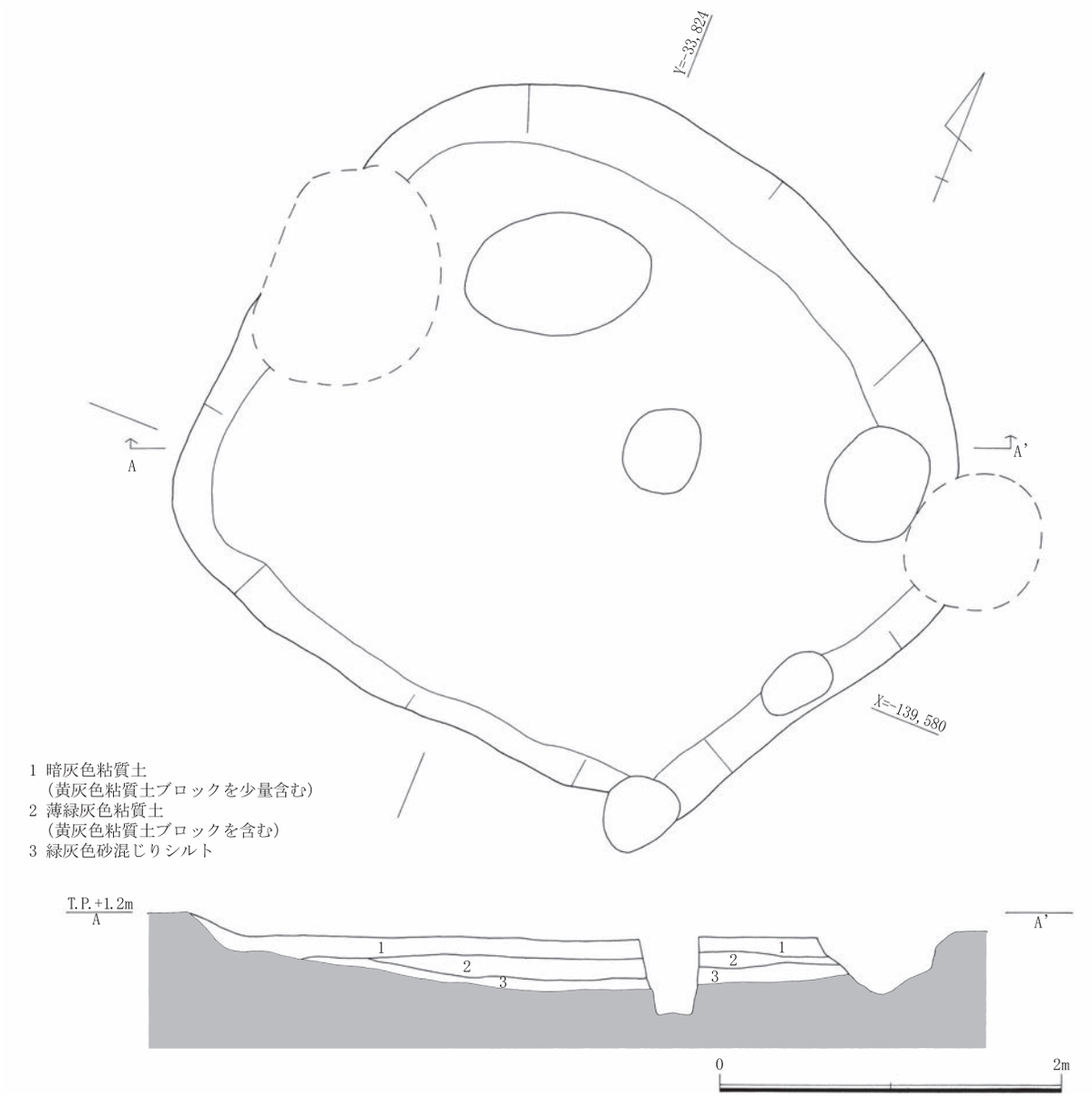
第53図　掘立柱建物Ｋ２－３平面図・断面図



第54図　掘立柱建物Ｋ２－４平面図・断面図



第55図　掘立柱建物Ｋ２－５平面図・断面図



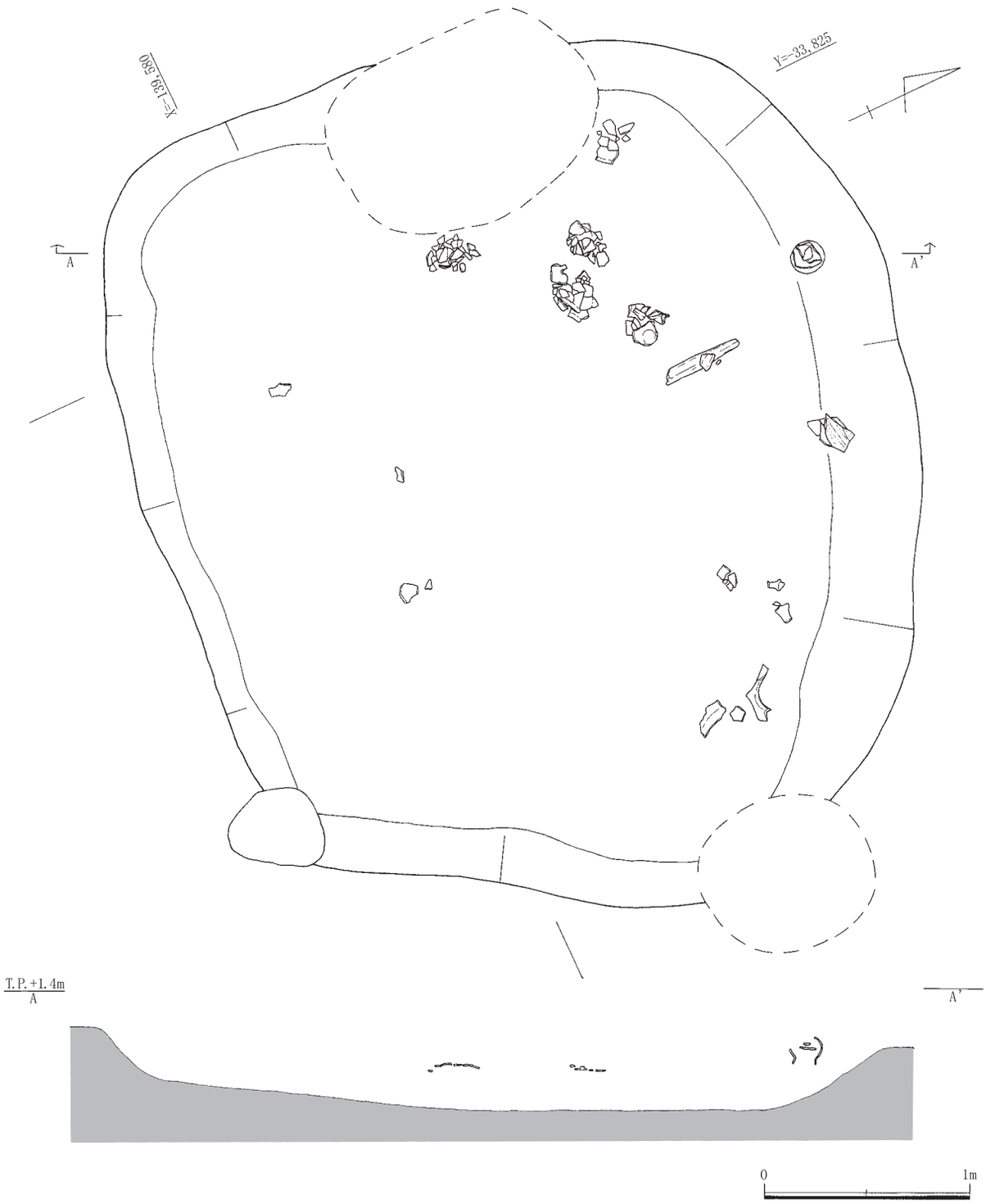
第56図　土坑Ｋ２－１２０９６平面図・土層断面図

土坑Ｋ２－１２０９６（第56図、図版16）

Ｋ２調査区の中央部東寄りのA19h3・i3地区で検出した土坑である。3.7m×4.0mの隅丸方形状の平面形を呈する。溝Ｋ２－１２０２４に上半部を削平されている。残存部の深さは0.46mを測った。埋土は上層、中層、下層の３層に分層でき、上より黄灰色粘質土のブロックを少量含む暗灰色粘質土、黄灰色粘質土のブロックを含む淡緑灰色粘質土、緑灰色砂混じりシルトとなっている。埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した（第57図）。出土した須恵器はⅠ型式１段階～２段階に属するものである。

土坑Ｋ２－１２１３０（第58図、図版16）

Ｋ２調査区の北東端部のA19h2地区で検出した土坑である。溝Ｋ２－１２０８８、溝Ｋ２－１２０６６、土坑Ｋ２－１２１３１など複数の遺構に切られており、形状や規格ははっきりしない。

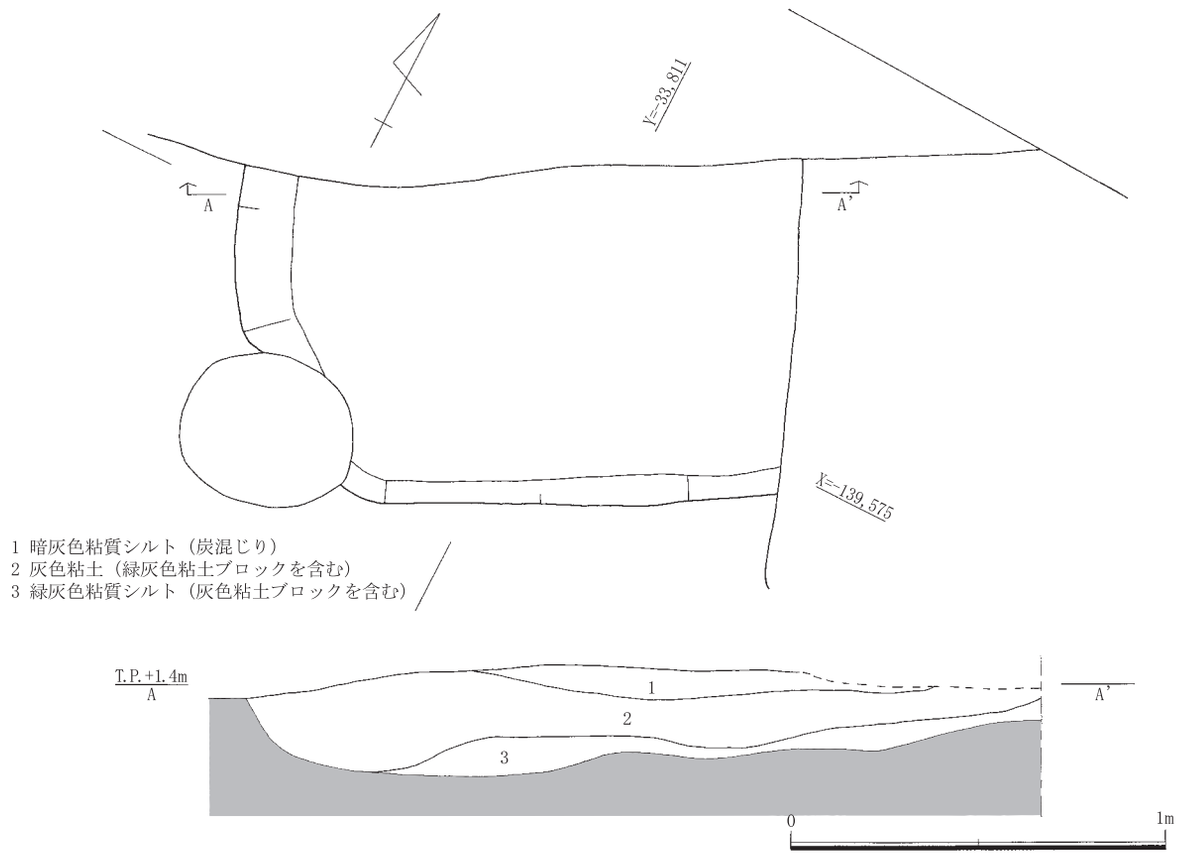


第57図　土坑Ｋ２－１２０９６遺物出土状況平面図・断面図

深さは最深部で0.30ｍを測った。埋土は炭混じりの暗灰色粘質シルト、緑灰色粘土のブロックを含む灰色粘土、灰色粘土のブロックを含む緑灰色粘質シルトの３層に分層でき、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はⅠ型式４段階～５段階に属するものである。

土坑Ｋ２－１２１３１（第41図）

Ｋ２調査区の北東端部のA19h1地区で検出した土坑である。土坑Ｋ２－１２１３０を切って掘削されており、溝Ｋ２－１２０８８などに切られている。内部から須恵器、土師器などが少量出



第58図　土坑Ｋ２－１２１３０平面図・土層断面図

土した。出土した須恵器はⅠ型式３段階に属するものである。

落ち込みＫ２－１２１７８（第41図）

Ｋ２調査区の中央部南端のA19i3i4地区で検出した落ち込みである。プランの大部分が調査区外にあり、さらに溝Ｋ２－１２０１１に切られているため、形状ははっきりしない。深さ0.32mを測った。埋土は暗灰色シルト、暗灰色シルトと緑灰色粘質土ブロックを含む暗灰色粘質土の互層、緑灰色粘質土ブロックを含む暗灰色粘質土、暗灰色砂質シルトの４層に分層でき、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。

溝Ｋ２－１２０１１（第59図）

Ｋ２調査区のほぼ中央部のA19h4i4地区で検出した。竪穴住居Ｋ２－３の西側を、プランの一部を切りつつ西接してほぼ南北方向に走る溝である。幅0.93m内外で、深さは0.34mを測った。埋土は黄灰色粗砂混じりの灰色シルト、灰色シルト、緑灰色粘質土のブロックを少量含む暗灰色粘質土、淡緑灰色砂質シルトの４層に分層でき、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はⅡ型式２段階～４段階に属するものである。

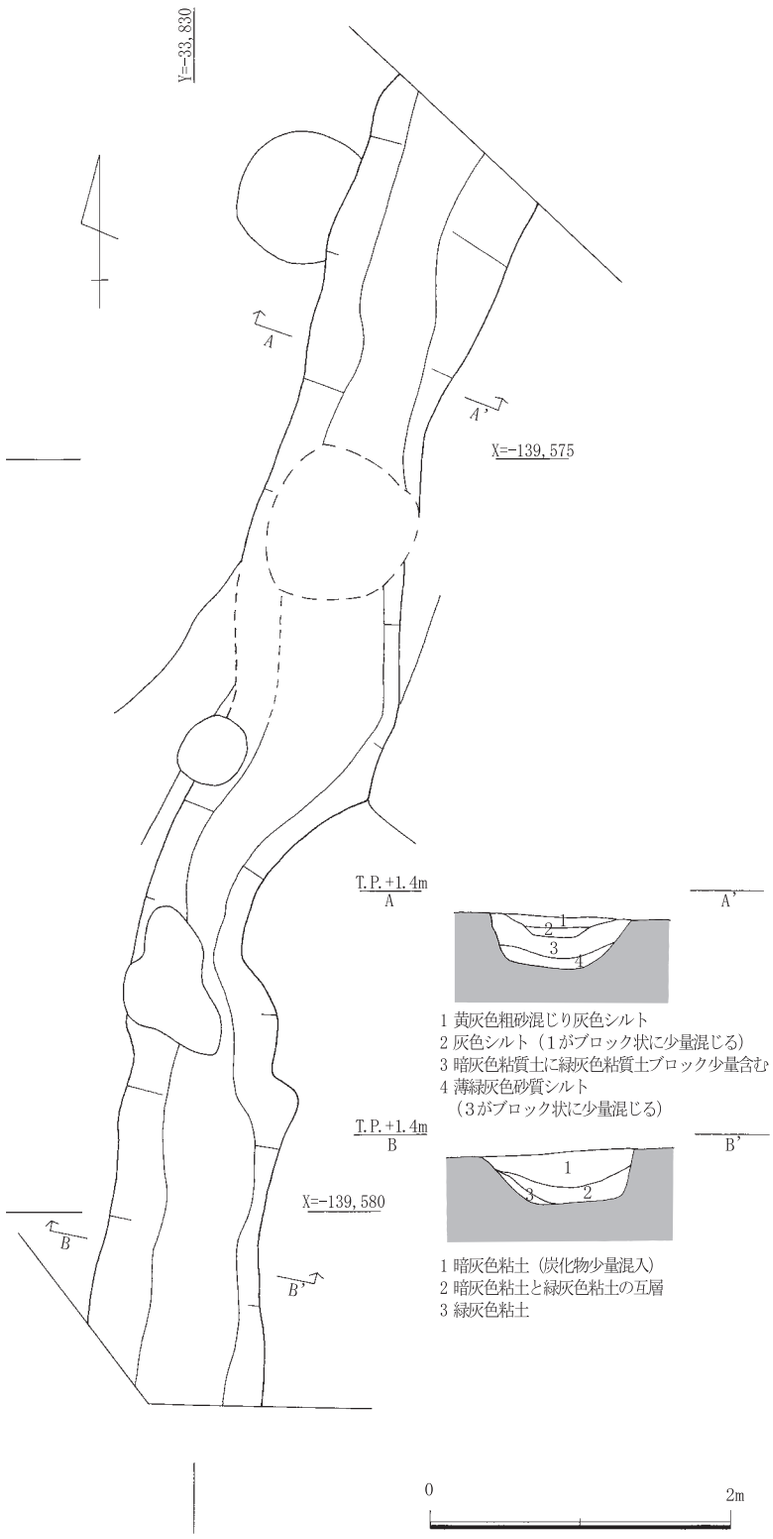
溝Ｋ２－１２０１１は溝Ｋ２－１２１７８、竪穴住居Ｋ２－３、柵列Ｋ２－１などの遺構を切って掘削されている。

溝Ｋ２－１２０１８（第60図）

Ｋ２調査区のほぼ中央部のA19h3・h4・i3・i4地区で検出した。竪穴住居Ｋ２－３上を、プランの中央部を切りつつほぼ南北方向に走る溝である。幅1.47ｍで、深さ0.17ｍを測った。

埋土は灰色砂混じりシルト、灰色シルトと緑灰色シルトの互層の２層に分層できた。埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

溝Ｋ２－１２０１８は竪穴住居Ｋ２－３と溝Ｋ２－１２１７８を切り、溝Ｋ２－１２０２３に切られている。



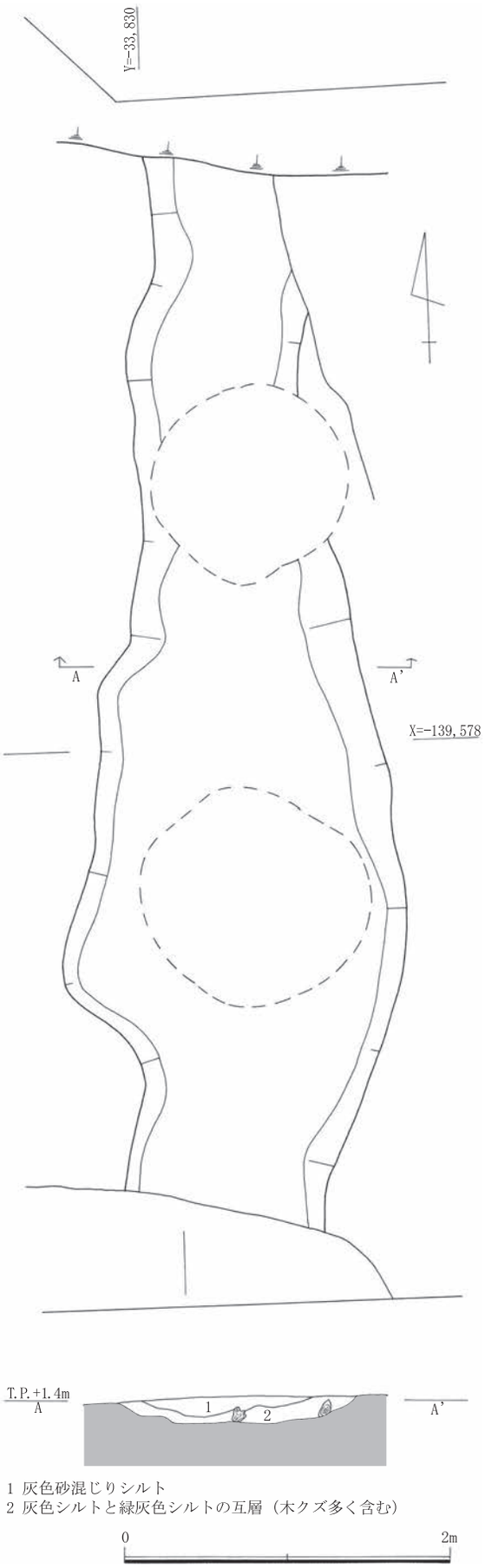
第59図　溝Ｋ２－１２０１１平面図・土層断面図

溝Ｋ２－１２０２３（第61図）

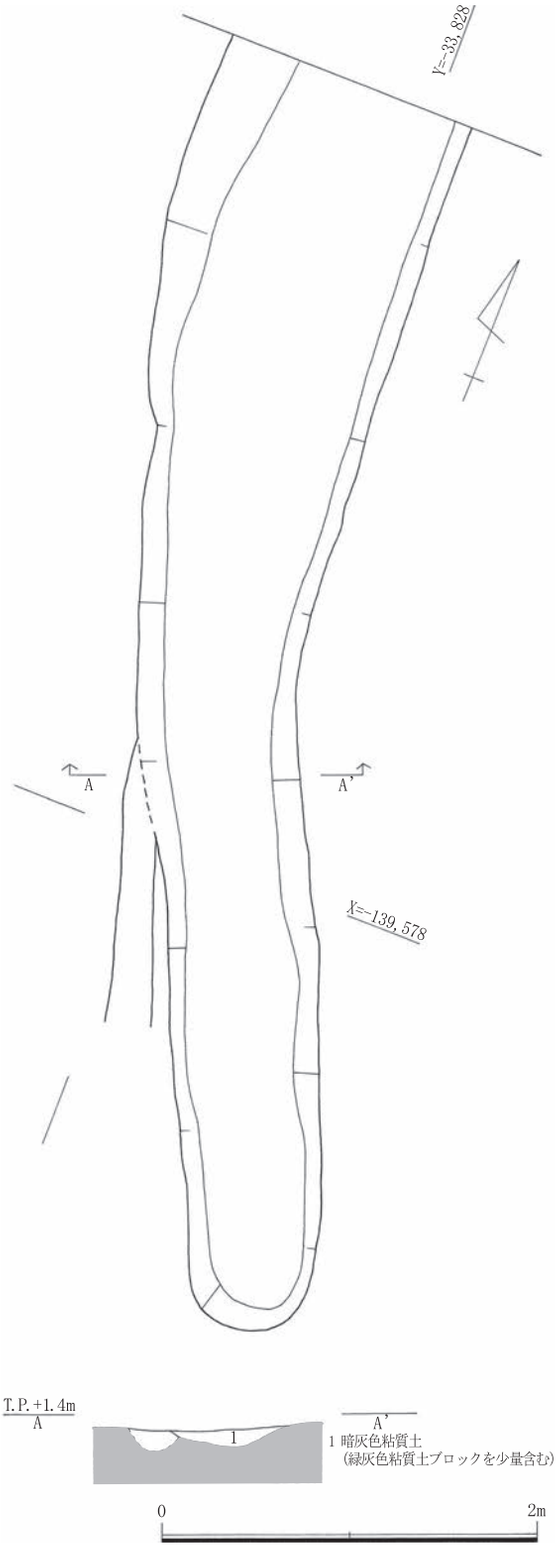
Ｋ２調査区のほぼ中央部のA19h3・i3地区で検出した。溝Ｋ２－１２０１８の東側を南北方向に走る溝である。調査区北壁付近で竪穴住居Ｋ２－１２１９２と溝Ｋ２－１２０１８を切っている。幅0.71ｍ、深さ0.09ｍを測った。埋土は緑灰色粘質土のブロックを少量含む暗灰色粘質土、緑灰色粘質土のブロックを多く含む暗灰色粘質土の２層に分層できた。埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

溝Ｋ２－１２０２３は、南端部で溝Ｋ２－１２０２４の西肩を切った状態で検出された。

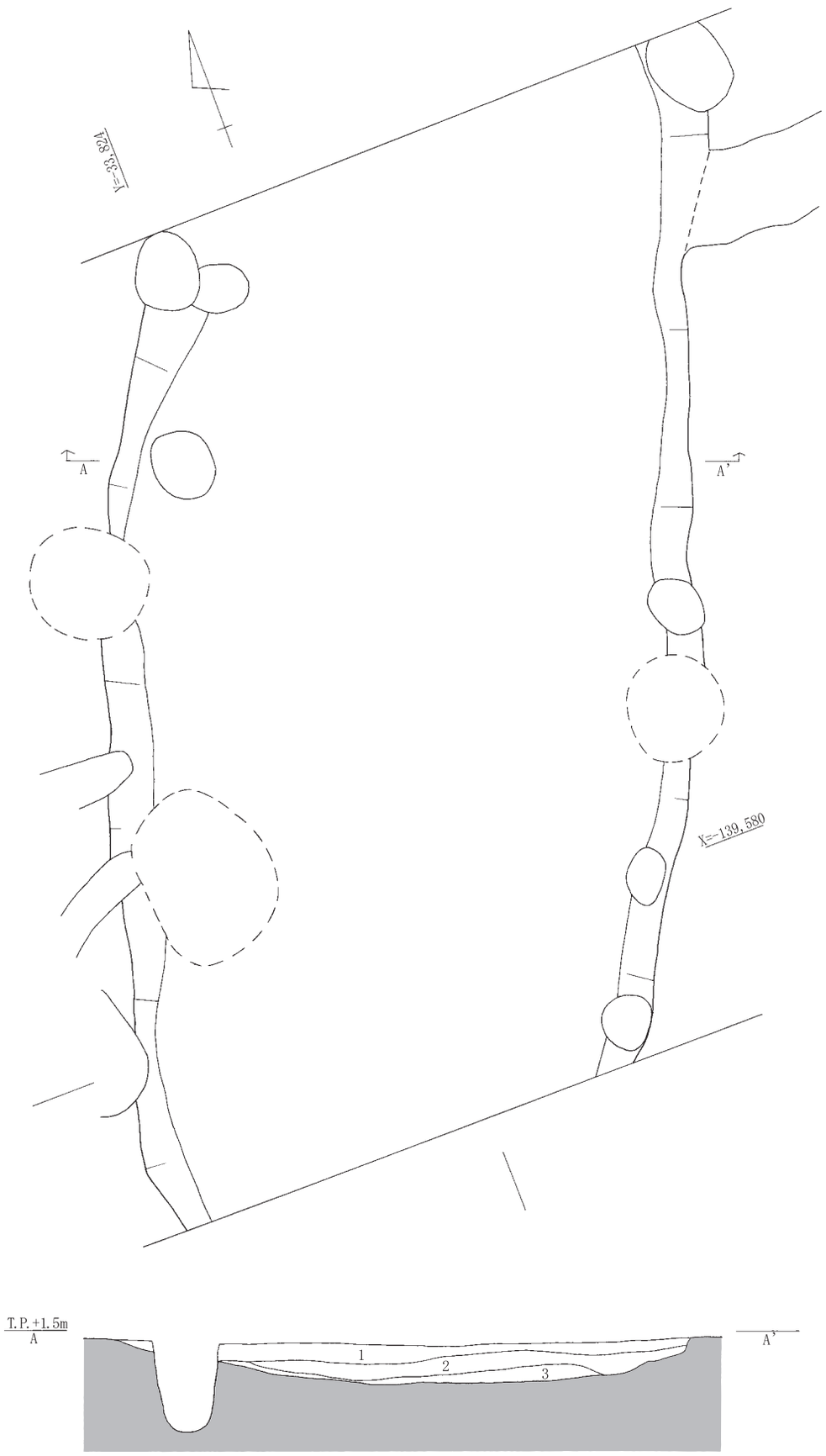
溝Ｋ２－１２０２４（第62図、図版17）



第60図　溝Ｋ２－１２０１８平面図・土層断面図



第61図　溝Ｋ２－１２０２３平面図・土層断面図



1 暗灰色粘土（黄灰色粘土ブロックを含む）
2 灰黒色粘土（黄灰色粘土ブロックを含む）
3 緑灰色粘質シルト（暗灰色粘土ブロックを含む）

第62図　溝Ｋ２－１２０２４平面図・土層断面図

Ｋ２調査区の中央部東寄りのA19h3・i3地区で検出した。北北東から南南西方向に走る溝である。

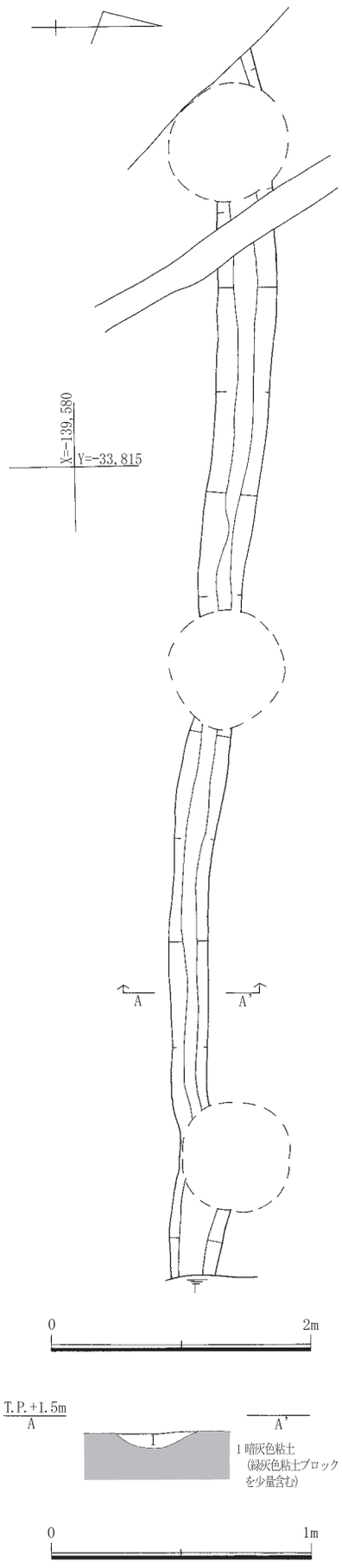
幅4.55m、深さ0.31ｍを測った。埋土は黄灰色粘土のブロックを含む暗灰色粘土、黄灰色粘土のブロックを含む灰黒色粘土、暗灰色粘土のブロックを含む緑灰色粘質シルト、暗灰色粘質シルトの４層に分層できた。埋土内より須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した。出土した須恵器はⅠ型式１段階～３段階に属するものである。

溝Ｋ２－１２０２４は溝Ｋ２－１２０２３に切られ、土坑Ｋ２－１２０９６、掘立柱建物Ｋ２－３を構成する柱穴の一部を切った状態で検出された。

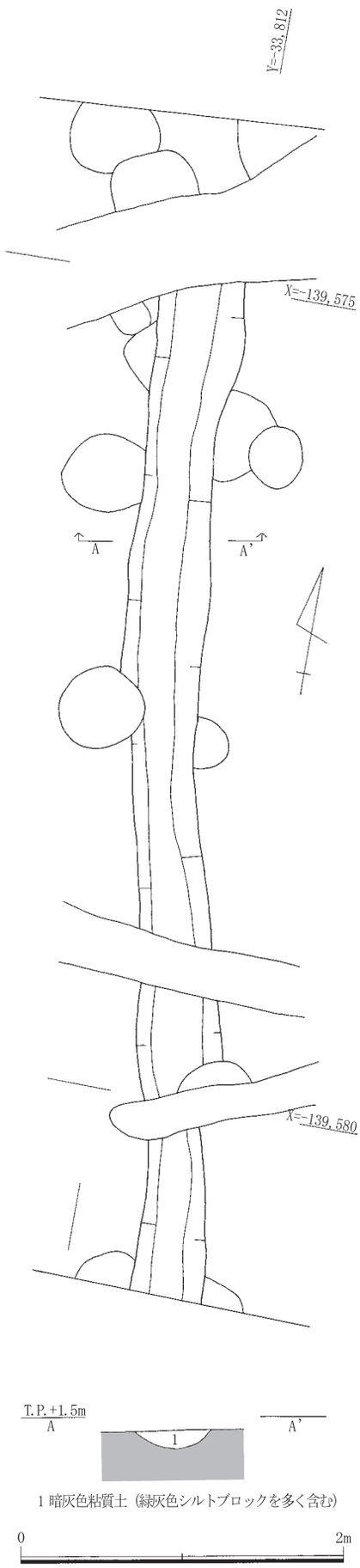
溝Ｋ２－１２０２９（第63図）

Ｋ２調査区の南東半部のA19h1･h2地区で検出した。ほぼ東西方向に走る溝である。幅0.28m、深さ0.06mを測った。埋土は緑灰色粘土のブロックを少量含む暗灰色粘土の１層である。

埋土内より土師器、須恵



第63図　溝Ｋ２－１２０２９
平面図・土層断面図



第64図　溝Ｋ２－１２０６６
平面図・土層断面図

器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

溝Ｋ２－１２０２９は竪穴住居Ｋ２－１２０８７、溝Ｋ２－１２０３０などに切られ、溝Ｋ２－１２０６６、掘立柱建物Ｋ２－４などを切った状態で検出された。

溝Ｋ２－１２０６６（第64図）

Ｋ２調査区の東半部のA19h2・i2地区で検出した。ほぼ南北方向に走る溝である。幅0.48m、深さ0.11mを測った。埋土は緑灰色シルトのブロックを多く含む暗灰色粘質土の１層である。埋土内より須恵器、土師器などが出土した。

溝Ｋ２－１２０６６は、北端部付近で溝Ｋ２－１２０８８に、南半部で溝Ｋ２－１２０２９と溝Ｋ２－１２０７３に切られた状態で検出された。

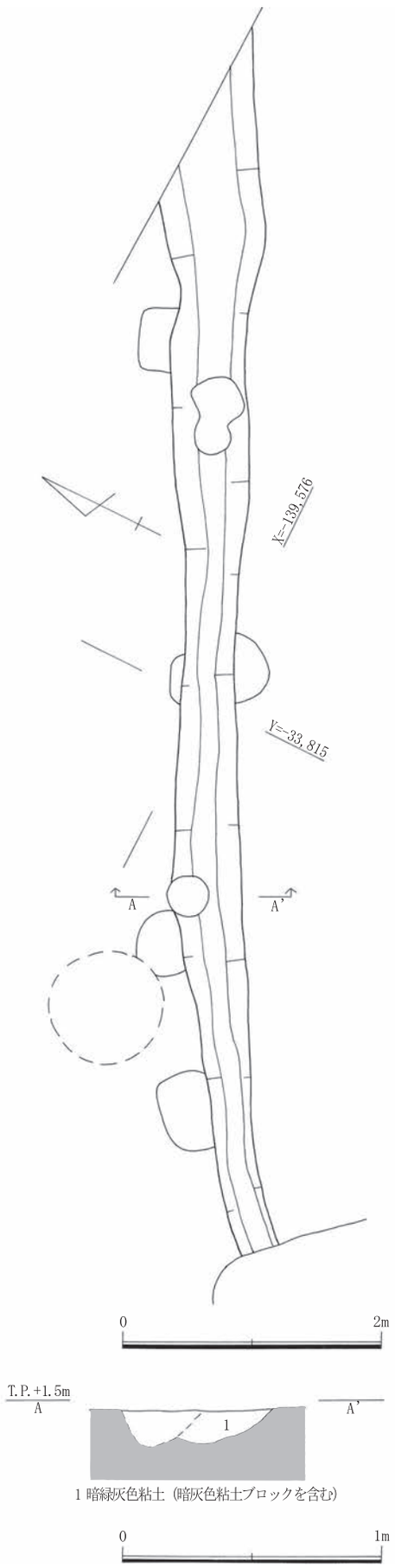
溝Ｋ２－１２０８８（第65図）

Ｋ２調査区の北東半部のA19h2地区で検出した。東北東から西南西方向に走る溝である。幅0.58m、深さ0.13mを測った。埋土は暗灰色粘土、暗灰色粘土のブロックを含む暗緑灰色粘土の２層に分層できた。埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

溝Ｋ２－１２０８８は竪穴住居Ｋ２－１２０８７に切られ、溝Ｋ２－１２０６６、土坑Ｋ２－１２１３０などを切った状態で検出された。

ピットＫ２－１２００８（第41図）

Ｋ２調査区の北西半部のA19h4・h5地区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.8m、短軸0.68m、深さ0.15mを測った。埋土は黄灰色シルトのブロックを多く含む黒灰色シルト、黒灰色シルトの２層に分層できた。埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土した。出土した須恵器はⅠ型式４段階に属するものである。



第65図　溝Ｋ２－１２０８８
平面図・土層断面図

ピットＫ２－１２１７９（第41図）

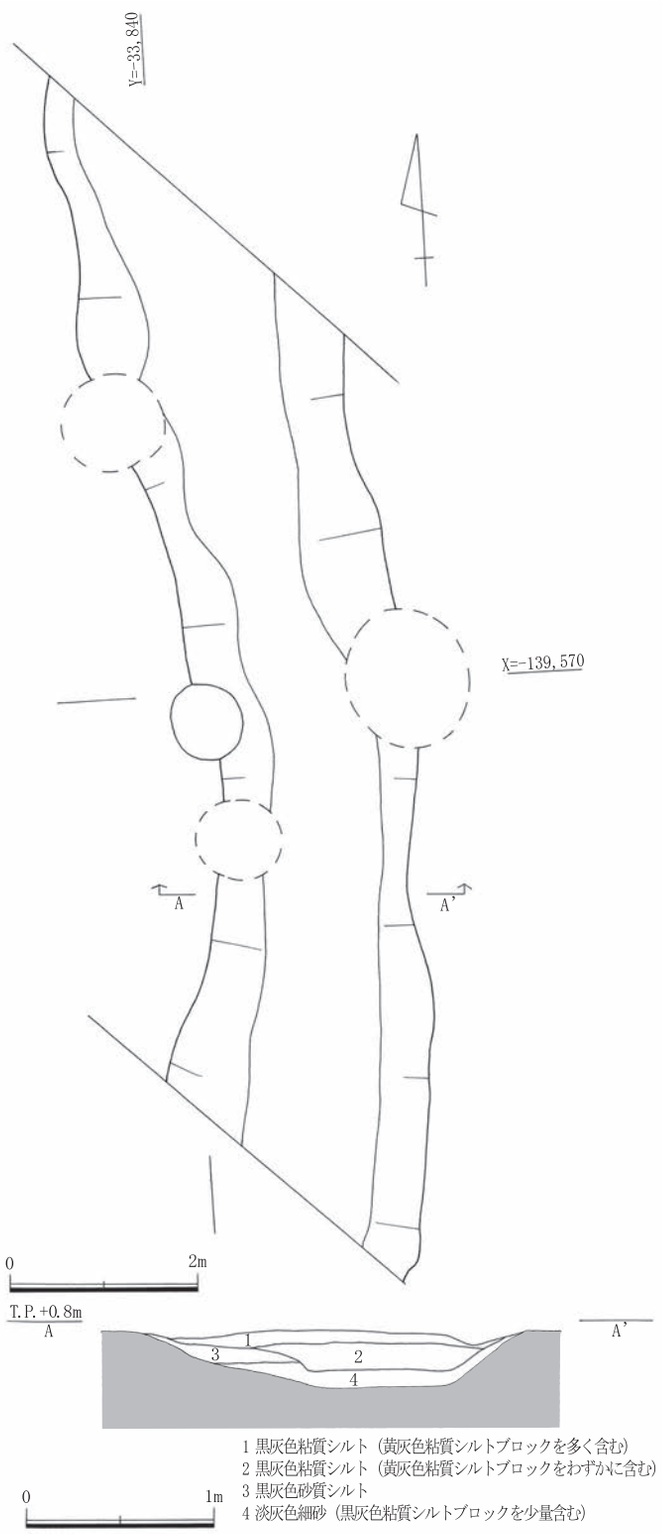
Ｋ２調査区の南東半部のA19i2地区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.49m、短軸0.39m、深さ0.37mを測った。埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

ピットＫ２－１２１８２（第41図）

Ｋ２調査区の南東半部のA19i2地区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.51m、短軸0.44m、深さ0.35mを測った。埋土は１層で、暗灰色シルトと緑灰色粘土の互層である。埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土した。出土した須恵器はⅡ型式３段階に属するものである。

ピットＫ２－１２０６１（第41図、図版17）

Ｋ２調査区の北東半部のA19h2地区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.55m、短軸0.40m、深さ0.43mを測った。埋土は３層で、上より緑灰色粘質シルトブロックを少量含む暗灰色粘質土、緑灰色粘質シルトブロックを少量含む黒灰色粘質土、緑灰色粘質シルトブロックを多く含む黒灰色粘質土である。埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



第66図　区画溝Ｋ２－１２００９平面図・土層断面図

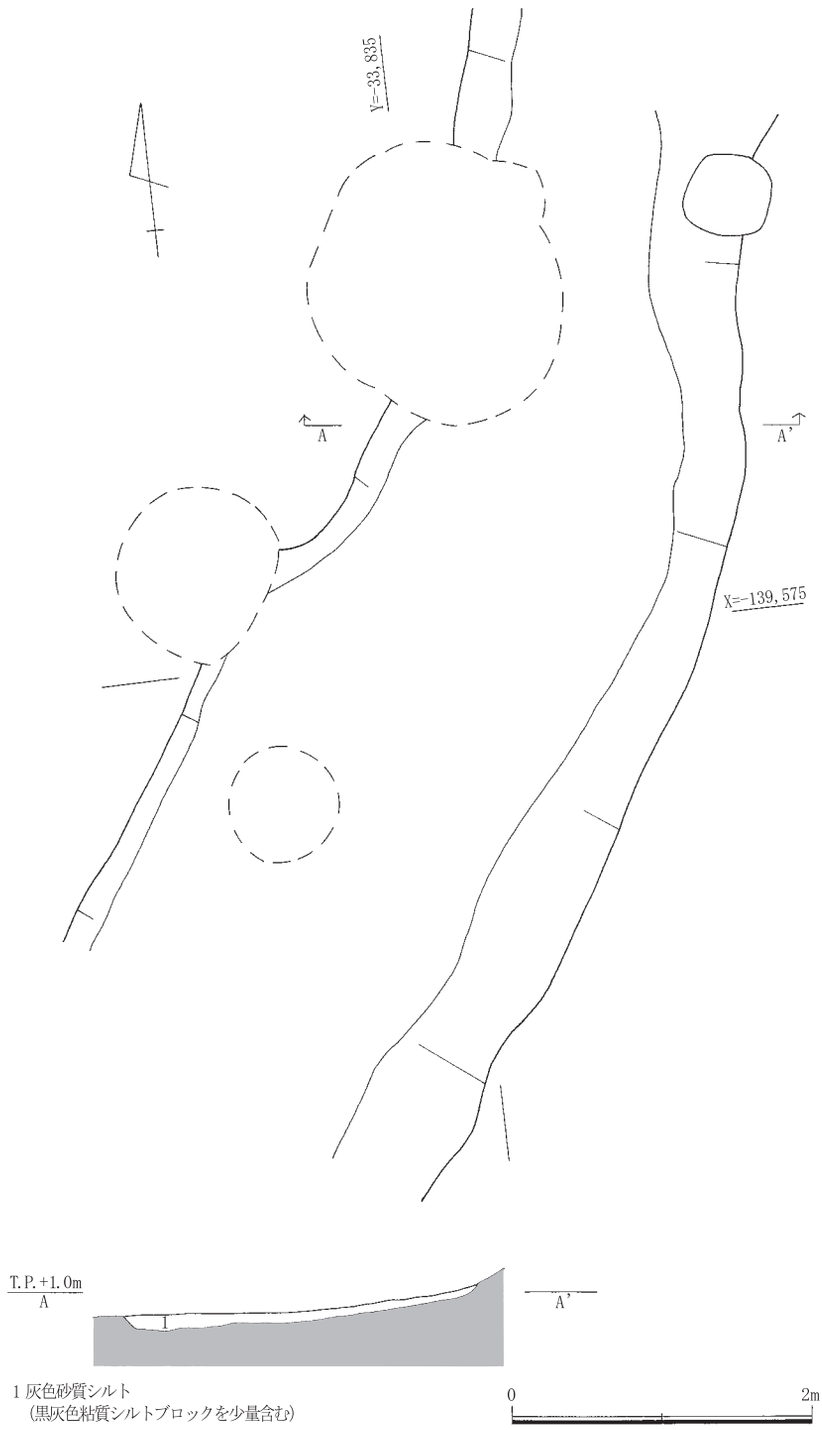
ピットＫ２－１２１５７（第41図、図版17）

Ｋ２調査区の南半部のA19h2地区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.50m、短軸0.40m、深さ0.24mを測った。埋土は２層で、上より黒灰色粘質土、黒灰色粘質土ブロックを少量含む暗緑

灰色砂質シルトである。埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

ピットＫ２－１２１１７
（第41図、図版17）

Ｋ２調査区の北半部のA19h3地区で検出した。土坑Ｋ２－１２０９６を掘削した後で、その床面で確認された。楕円形状を呈し、長軸0.50m、短軸0.40m、深さ0.24mを測った。埋土は２層で、上より黒灰色粘質土、黒灰色粘質土ブロックを少量含む暗緑灰色砂質シルトである。埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



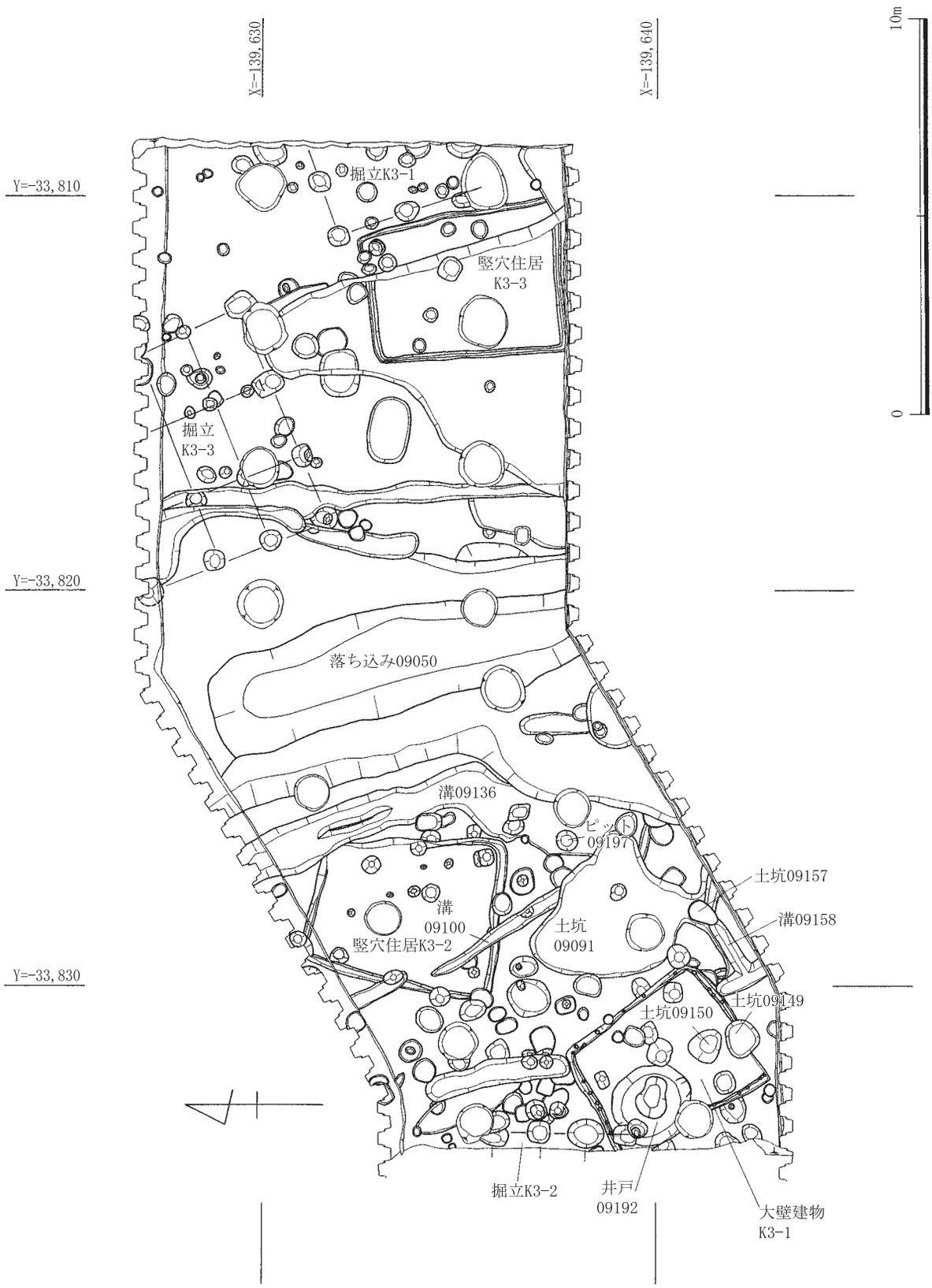
第67図　区画溝Ｋ２－１２０１０平面図・土層断面図

ピットＫ２－１２０８４
（第41図、図版17）

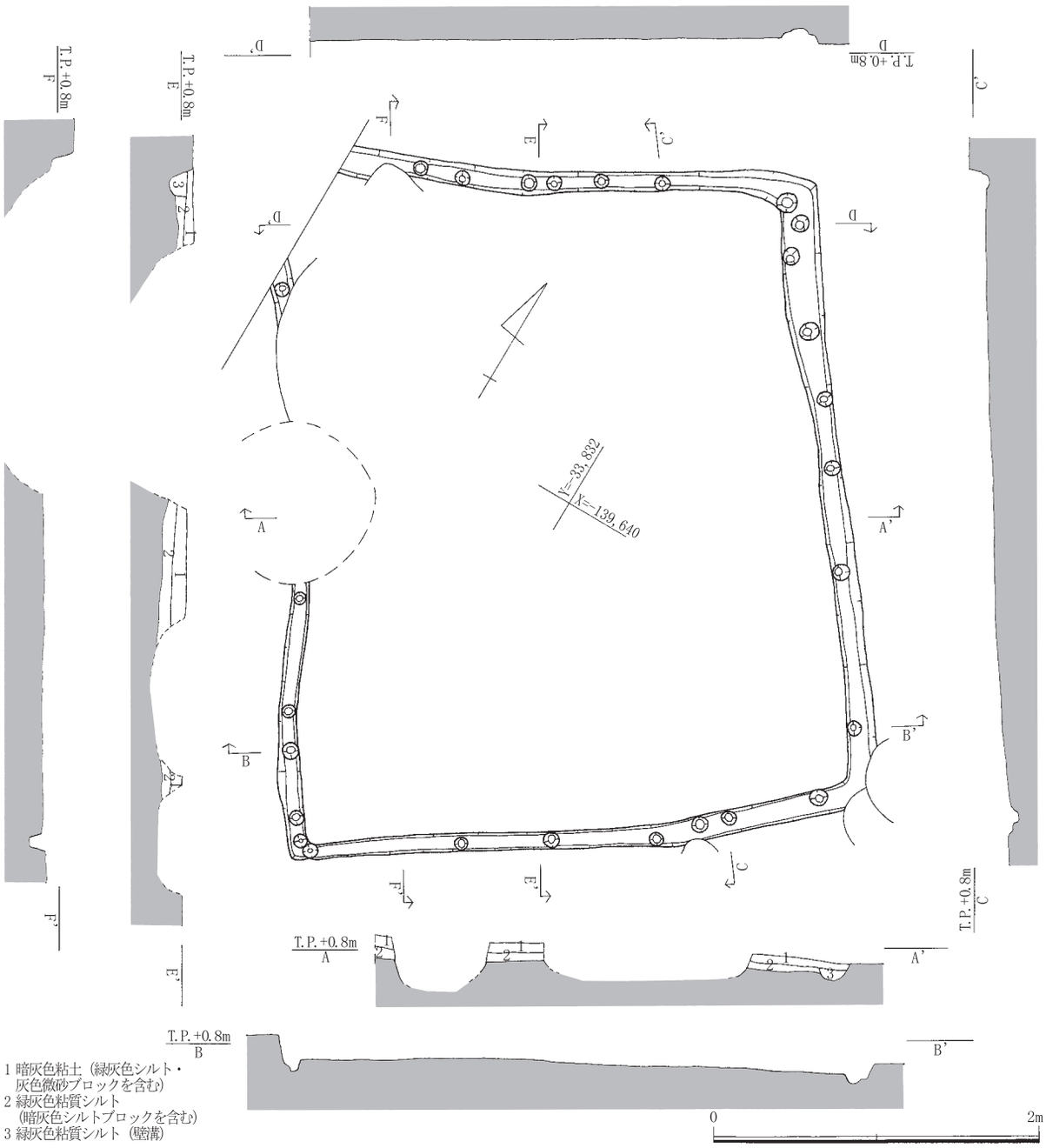
Ｋ２調査区の南半部のA19h2地区で検出した。楕円形状を呈し、長軸0.94m、短軸0.87m、深さ0.56mを測った。埋土は３層で、上より暗灰色粘質土、淡緑灰色砂質シルトブロックを多く含む灰褐色粘質土、淡緑灰色砂質シルトブロックと炭を少量含む黒灰色粘質土である。埋土内より土師器、須恵器などがごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

２．北東居住域を区画する溝

調査区の西半部で、北東居住域を区画する区画溝を２条検出した。



第68図　Ｋ３調査区古墳時代中期～後期遺構面（第９面）全体平面図

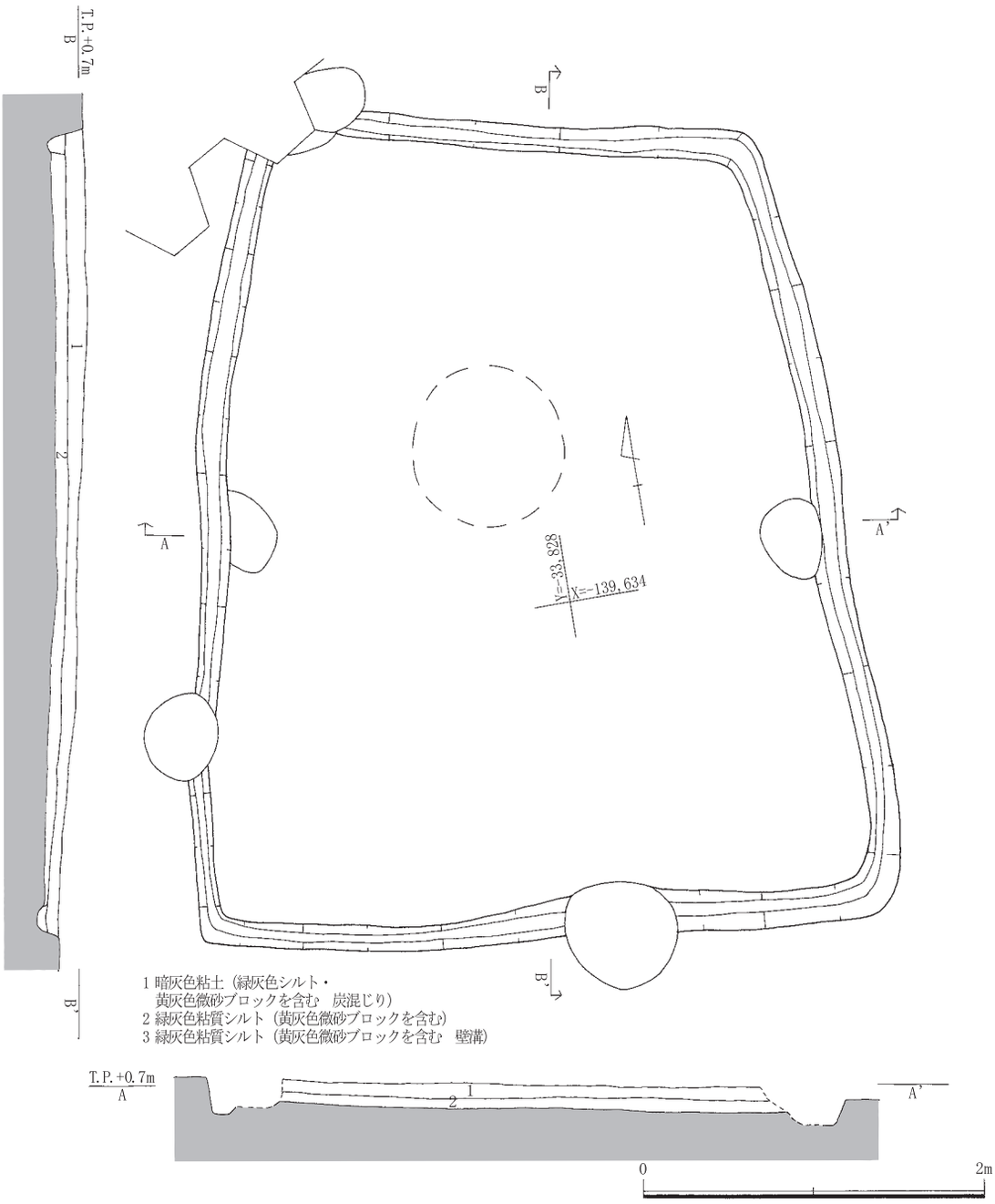


第69図　大壁建物Ｋ３－１（Ｋ３－０９１３３）平面図・断面図・土層断面図

区画溝Ｋ２－１２００９（第66図、図版18）

Ｋ２調査区の西半部のA19h4地区で検出した。ほぼ南北方向に走る溝である。幅2.06m、深さ0.28mを測った。埋土は黄灰色粘質シルトのブロックを多く含む黒灰色粘質シルト、黄灰色粘質シルトのブロックを僅かに含む黒灰色粘質シルト、黒灰色シルト、黒灰色粘質シルトのブロックを少量含む淡灰色細砂の４層に分層できた。埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。区画溝Ｋ２－１２００９はＢ調査区の区画溝１３０２４０と一連の溝で、Ｄ調査区に続いていくものと考えられる。

区画溝Ｋ２－１２０１０（第67図、図版18）

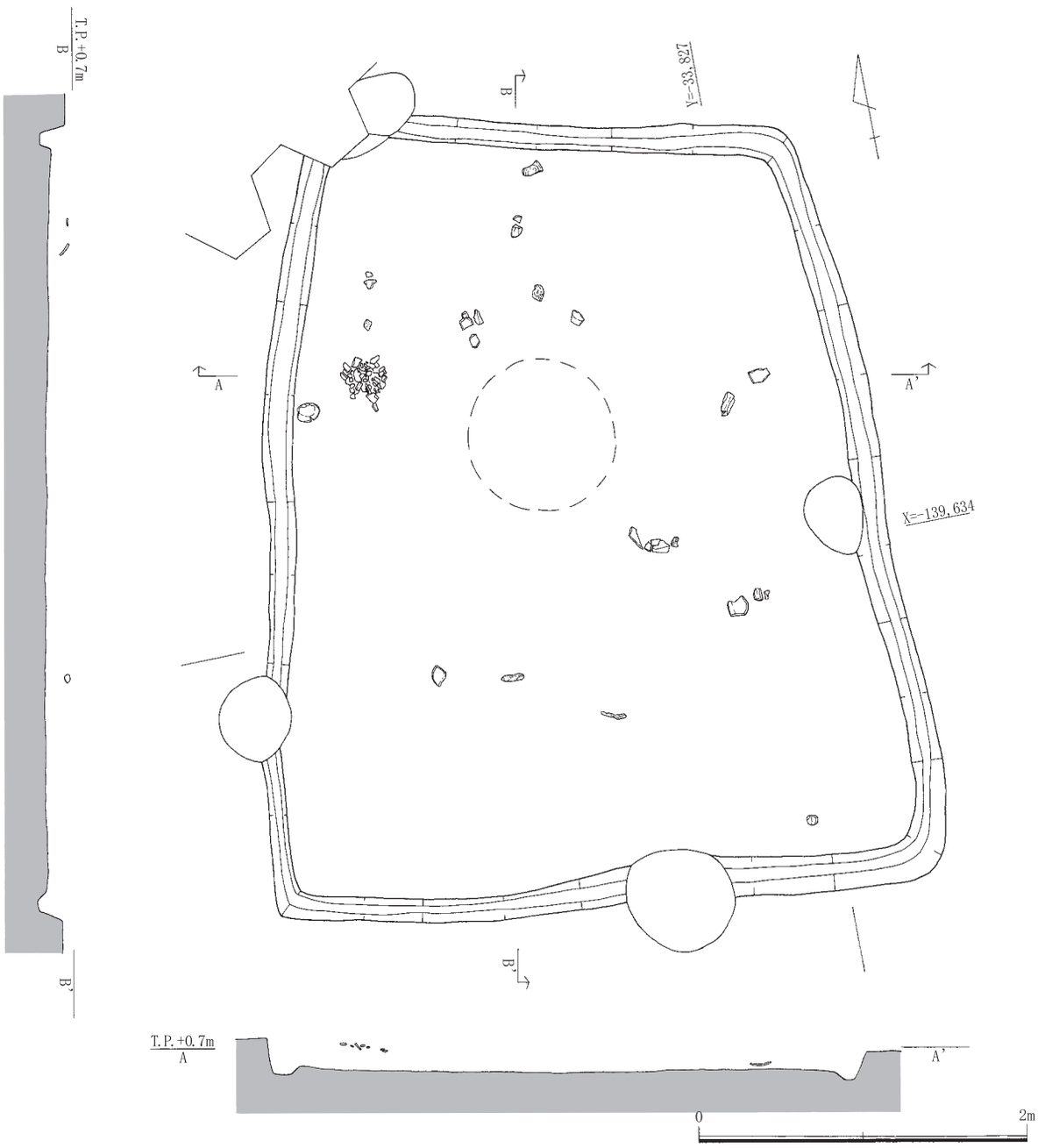


第70図　竪穴住居Ｋ３－２（Ｋ３－０９１０８）平面図・土層断面図

調査区の中央部やや西寄りのA19h4地区で検出した。斜面上を北北東から南南西方向に走る溝である。したがって溝肩は西側がT. P. 0.7m、東側がT. P. 1.5mにある。幅2.40m、深さ0.10mを測った。埋土は１層で、黒灰色粘質シルトのブロックを少量含む灰色砂質シルトである。埋土内より須恵器、土師器、製塩土器、獣歯（ウマの下顎臼歯・臼歯）などが出土した。出土した須恵器はⅡ型式２段階～３段階に属するものである。また、南半部で木皮、木製品などが出土した。

３．古墳時代後期の生産域

区画溝Ｋ２－１２００９の西側は居住域外で遺構が希薄であった。西のＦ調査区で古墳時代後



第71図　竪穴住居Ｋ３－２（Ｋ３－０９１０８）遺物出土状況平面図・断面図

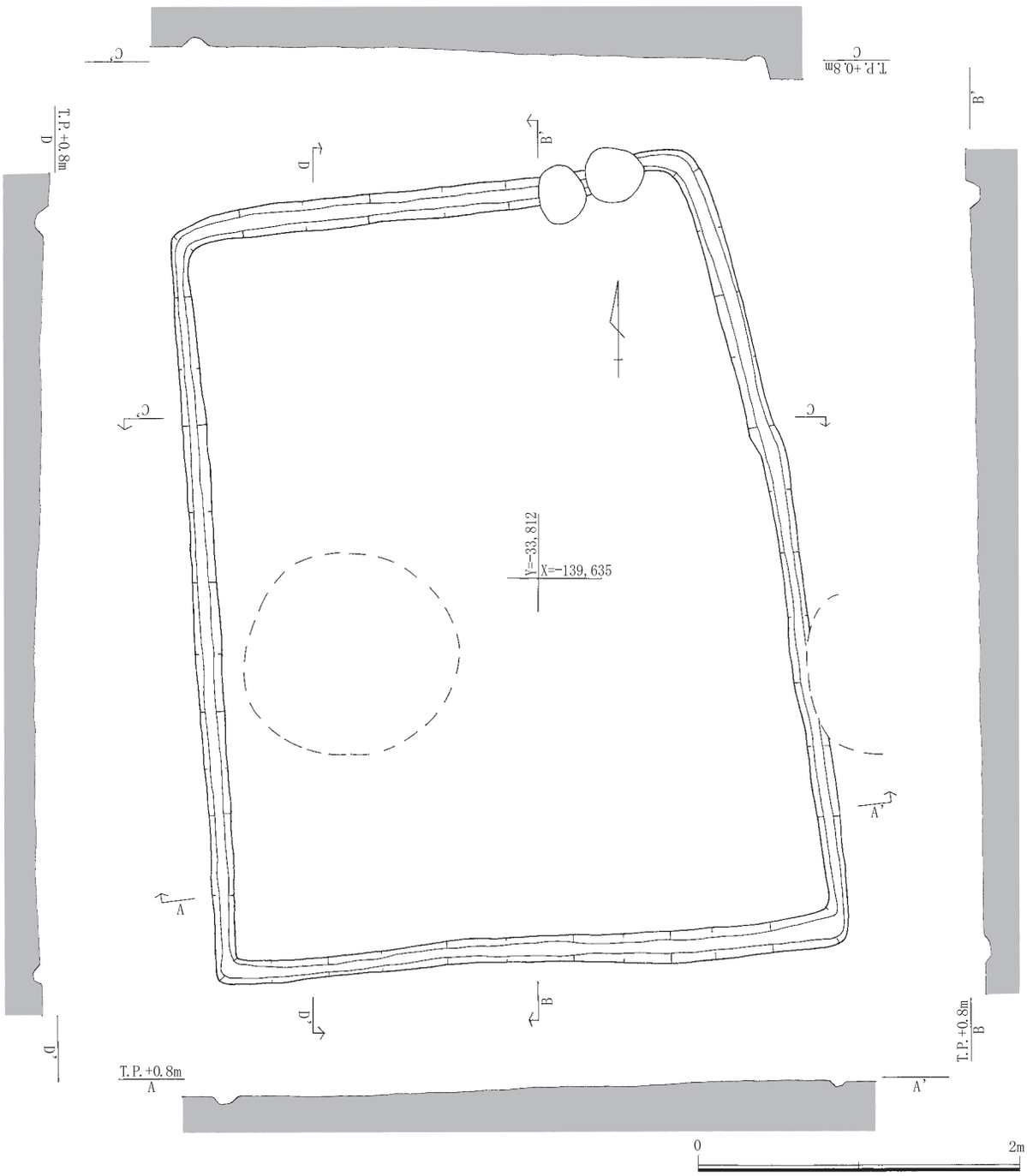
期の生産域が検出されており、この部分は東端部付近にあたる。

第４項　Ｋ３調査区

Ｋ３調査区では、緑灰色の粘土ないしはシルト上面（T. P. 0.5m～0.8m）の第９面で古墳時代中期～後期の遺構が検出された。調査区の全域が南西居住域に含まれる。

１．南西居住域

大壁建物、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、ピット、溝などがある（第68図、図版19）。

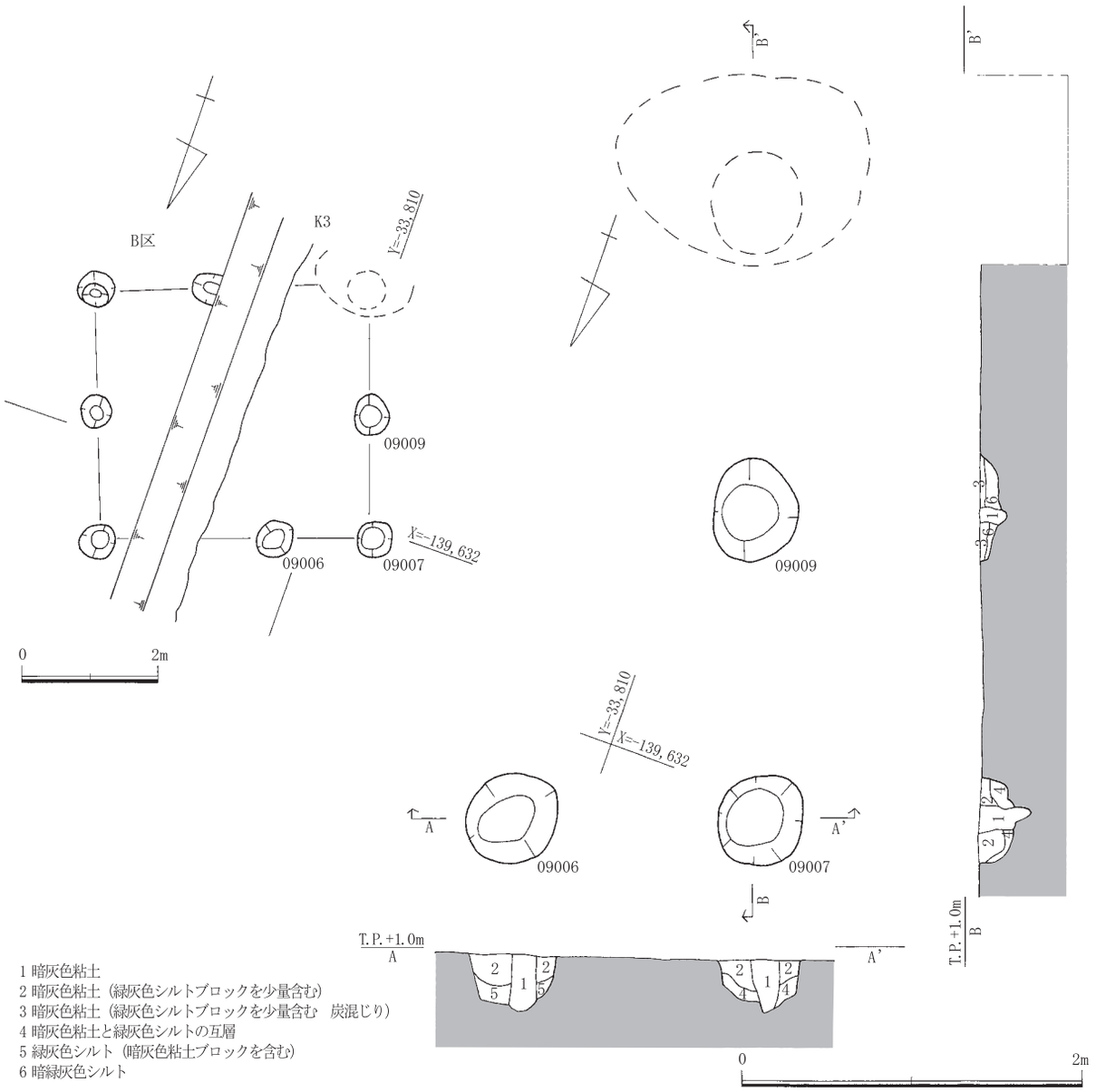


第72図　竪穴住居Ｋ３－３（Ｋ３－０９０３９）平面図・断面図

大壁建物Ｋ３－１（Ｋ３－０９１３３）（第69図、図版20）

Ｋ３調査区の南西端部付近のB19d4・e4地区で検出した。3.4m×4.1mの長方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ－30°－Ｗを指す。平面プランの周縁に幅0.1m～0.24m、深さ0.1mの壁溝が巡らされ、壁溝内に径0.1m程の柱痕が多数認められた。

覆土は壁溝部分を加えて３層に分層でき、上より緑灰色シルトと黄灰色微砂のブロックを含む暗灰色粘土、暗灰色シルトのブロックを含む緑灰色粘質シルト、緑灰色粘質シルト（壁溝）となっている。大壁建物Ｋ３－１は、後述する井戸Ｋ３－０９１９２を切った状態で、そして土坑Ｋ３－０９１４７、土坑Ｋ３－０９１４９、土坑Ｋ３－０９１５０などに切られた状態で検出された。



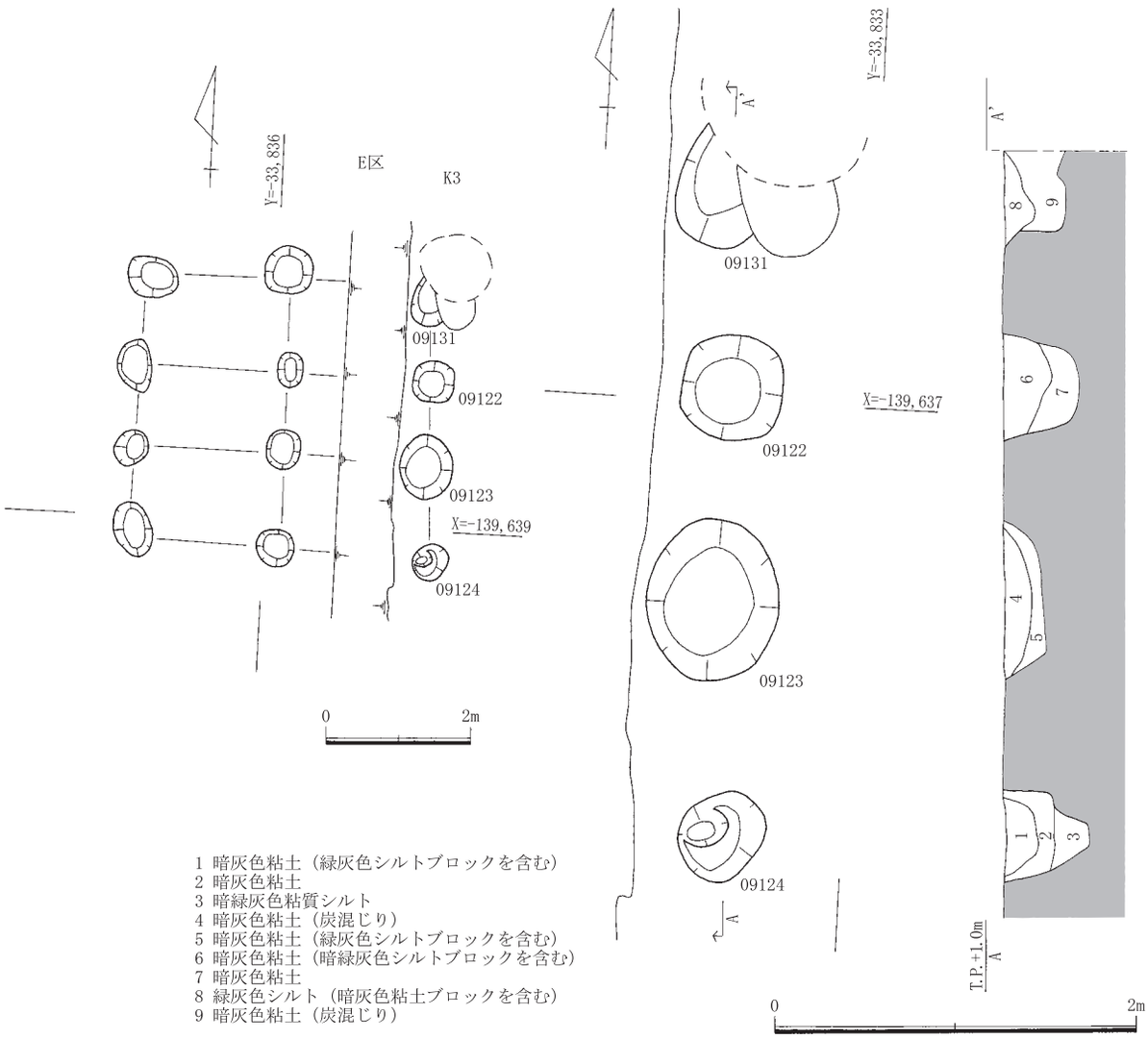
第73図　掘立柱建物Ｋ３－１平面図・土層断面図・Ｂ調査区との接合図

覆土内より須恵器、土師器、製塩土器、大型哺乳類の長骨片（図版60－４・５）などが出土した。出土した須恵器はⅠ型式３段階に属するものである。

竪穴住居Ｋ３－２（Ｋ３－０９１０８）（第70図、図版20）

Ｋ３調査区の中央やや西寄りのB19d3・d4地区で検出した。3.25m×4.70mの歪な長方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ－10°－Ｅを指す。住居内でピットがいくつか検出されたが、主柱穴を特定できなかった。また､住居内にカマドは認められなかった。周縁に幅0.11m～0.22m、深さ0.22mの壁溝が巡らされる。

覆土は壁溝部分を加えて３層に分層でき、上より緑灰色シルトと黄灰色微砂のブロックを含む炭混じりの暗灰色粘土、黄灰色微砂のブロックを含む緑灰色粘質シルト、黄灰色微砂のブロックを含む緑灰色粘質シルト（壁溝）となっている。



第74図　掘立柱建物Ｋ３－２平面図・土層断面図・Ｅ調査区との接合図

竪穴住居Ｋ３－２は、後述する溝Ｋ３－０９１００、溝Ｋ３－０９１３６に切られていた。

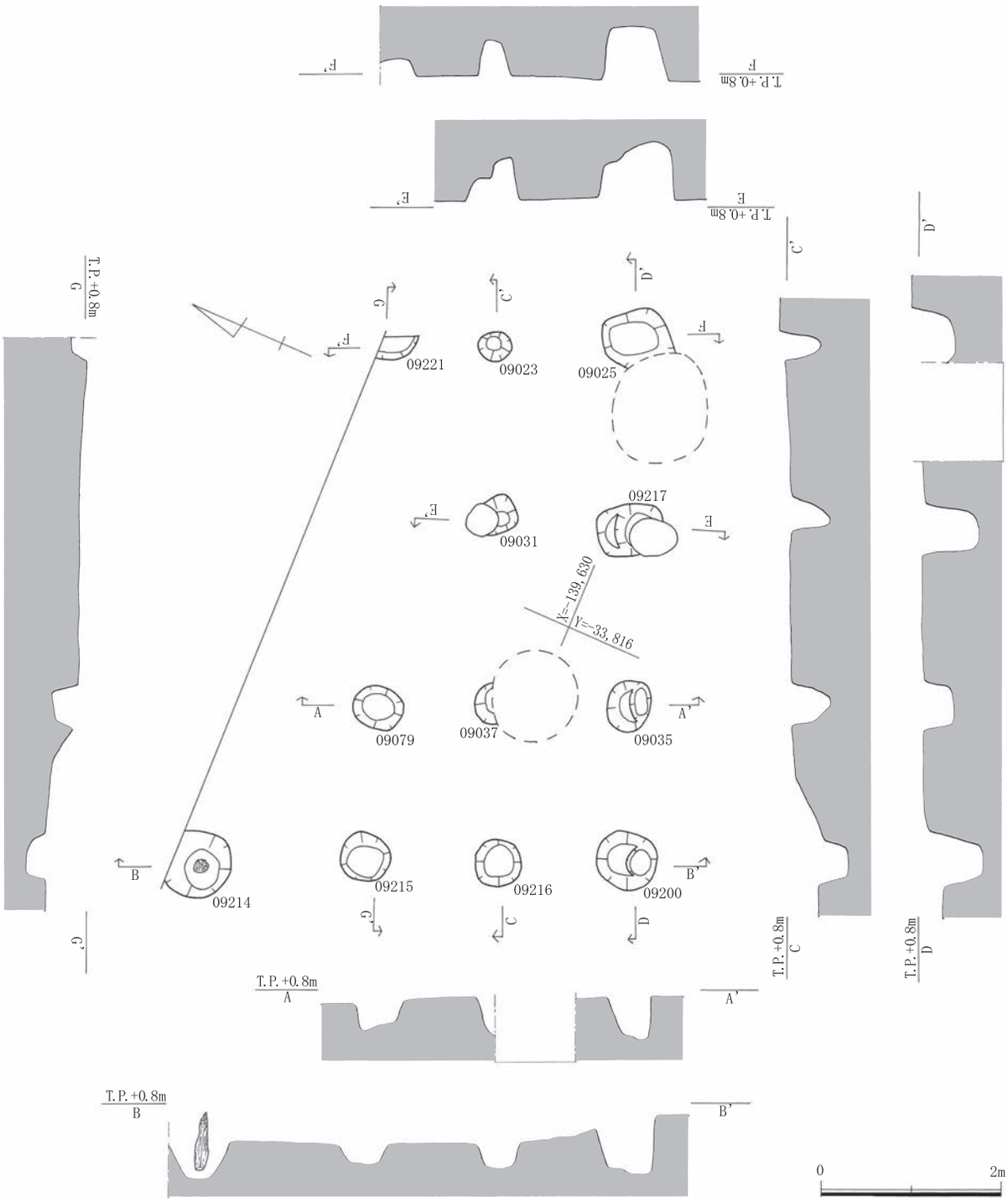
覆土内より須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器などが出土した（第71図、図版20）。出土した須恵器はⅠ型式３段階に属するものである。

竪穴住居Ｋ３－３（Ｋ３－０９０３９）（第72図、図版21）

Ｋ３調査区の東端部付近のB19d2地区で検出した。4.8m×3.8mの歪な長方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ－8°－Ｗを指す。落ち込みＫ３－０９０５０に切られており、東端部付近を除く平面プランの大部分では、壁溝が確認できたのみであった。残存部分の覆土は１層で、灰色粘土と緑灰色シルトの互層である。

住居内に主柱穴と考えられるピットやカマドなどは認められなかった。また、東端部付近でも掘立柱建物Ｋ３－１を構成するピットＫ３－０９００９に切られていた。

覆土内より須恵器・土師器などが少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



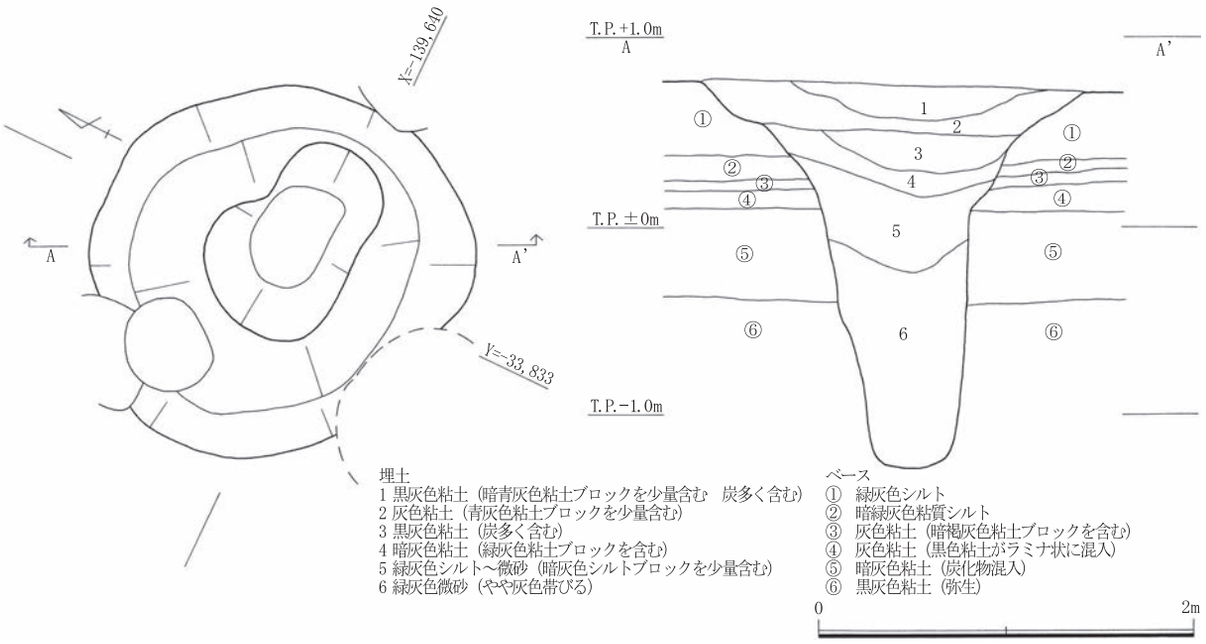
第75図　掘立柱建物Ｋ３－３平面図・断面図

掘立柱建物Ｋ３－１（第73図、図版21）

Ｋ３調査区の東端部付近のB19d1・d2地区で検出した掘立柱建物である。調査区では２間×１間分を検出したが、東接するＢ調査区での検出部分を合わせると、２間×３間の建物となる。柱間は東西全長4.1m（３間）、南北全長3.6m（２間）で、建物の主軸はＮ－15°－Ｅを指す。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.5m、最大で0.6mを測った。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



第76図　井戸Ｋ３－０９１９２平面図・土層断面図

掘立柱建物Ｋ３－２（第74図、図版22）

Ｋ３調査区の西端部付近のB19d4地区で検出した掘立柱建物である。３間×１間以上を検出したが、西接するＥ調査区での検出部分を合わせると、３間×３間の総柱の建物となる。柱間は東西全長4.1m（３間）、南北全長3.7m（３間）で、建物の主軸はほぼＮ－Ｓを指す。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.4m、最大で0.9mを測った。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。ただし、この建物はＥ調査区で検出した掘立柱建物Ｅ２であり、Ⅰ型式３段階よりは後出のものである。

掘立柱建物Ｋ３－３（第75図、図版22）

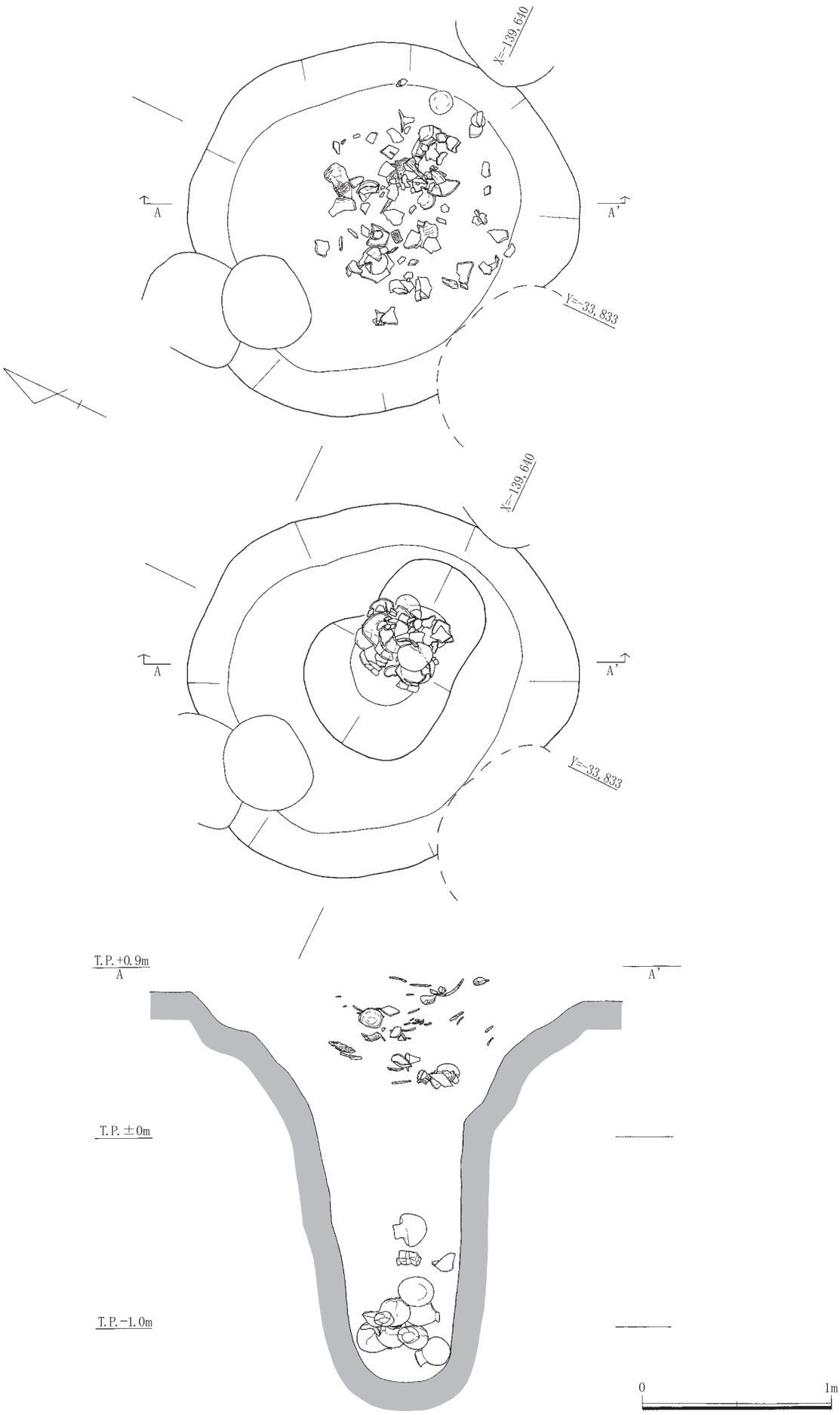
Ｋ３調査区の北端部中央東寄りのB19c2・d2地区で検出した掘立柱建物である。調査区で検出されたピットから、３間×３間の総柱の建物と考えられるが、北東側の３箇所は調査区北壁外にある。柱間は東西全長5.8m（３間）、南北全長4.8m（３間）で、建物の主軸はＮ－23°－Ｅを指す。

柱穴は不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.35m、最大で0.75mを測った。北西コーナー部の柱穴のピットＫ３－０９２１４から柱根が検出された。

建物を構成する柱穴のいくつかより土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

井戸Ｋ３－０９１９２（第76図、図版23）

Ｋ３調査区の西端部のB19d4・e4地区で検出した。長軸1.85m、短軸1.77mの楕円形状の平面形で、逆台形状の断面を呈する素掘り井戸である。検出面から井戸底までの深さ2.0mを測った。



第77図　井戸Ｋ３－０９１９２遺物出土状況平面図・断面図

井戸Ｋ３－０９１９２は大壁建物Ｋ３－１、掘立柱建物Ｋ３－２を構成する柱穴のひとつなどに切られていた。埋土は６層に分層でき、上より暗青灰色粘土のブロックを少量と炭を含む黒灰色粘土、青灰色粘土のブロックを少量含む灰色粘土、黒灰色粘土、緑灰色粘土のブロックを含む暗灰色粘土、暗灰色シルトのブロックを含む緑灰色シルトないしは微砂、灰色を帯びた緑灰色微砂となっている。

上層からは須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、砥石、ウマの左下顎骨などが、下層からは土師器が 出土した（第77図、図版23)。上層から出土した須恵器はⅠ型式２段階に属するものである。下層の出土遺物には須恵器が含まれず、したがって井戸が機能していた時期がⅠ型式１段階以前、埋没した時期がⅠ型式２段階と考えられる。

落ち込みＫ３－０９０５０（第79図、図版24）

Ｋ３調査区の中央部のB19c2・c3・d2・d3地区で検出した。長楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸10.50m以上、短軸8.76mで、深さは最深部で0.75mを測った。埋土は４層に分層でき、上より青灰色粘土のブロックを含む灰色粘土、青灰色粘土のブロックを微量含む暗灰色粘土、褐灰色粘土と青灰色シルトの互層、灰色粘土と青灰色シルトの互層となっている。

埋土の各層から遺物が大量に出土した（第78図、図版24)。須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器などの土器類、Ｕ字形板状土製品、木製品、種実類（モモ）などがある。出土した須恵器はⅠ型式３段階～５段階に属するものである。

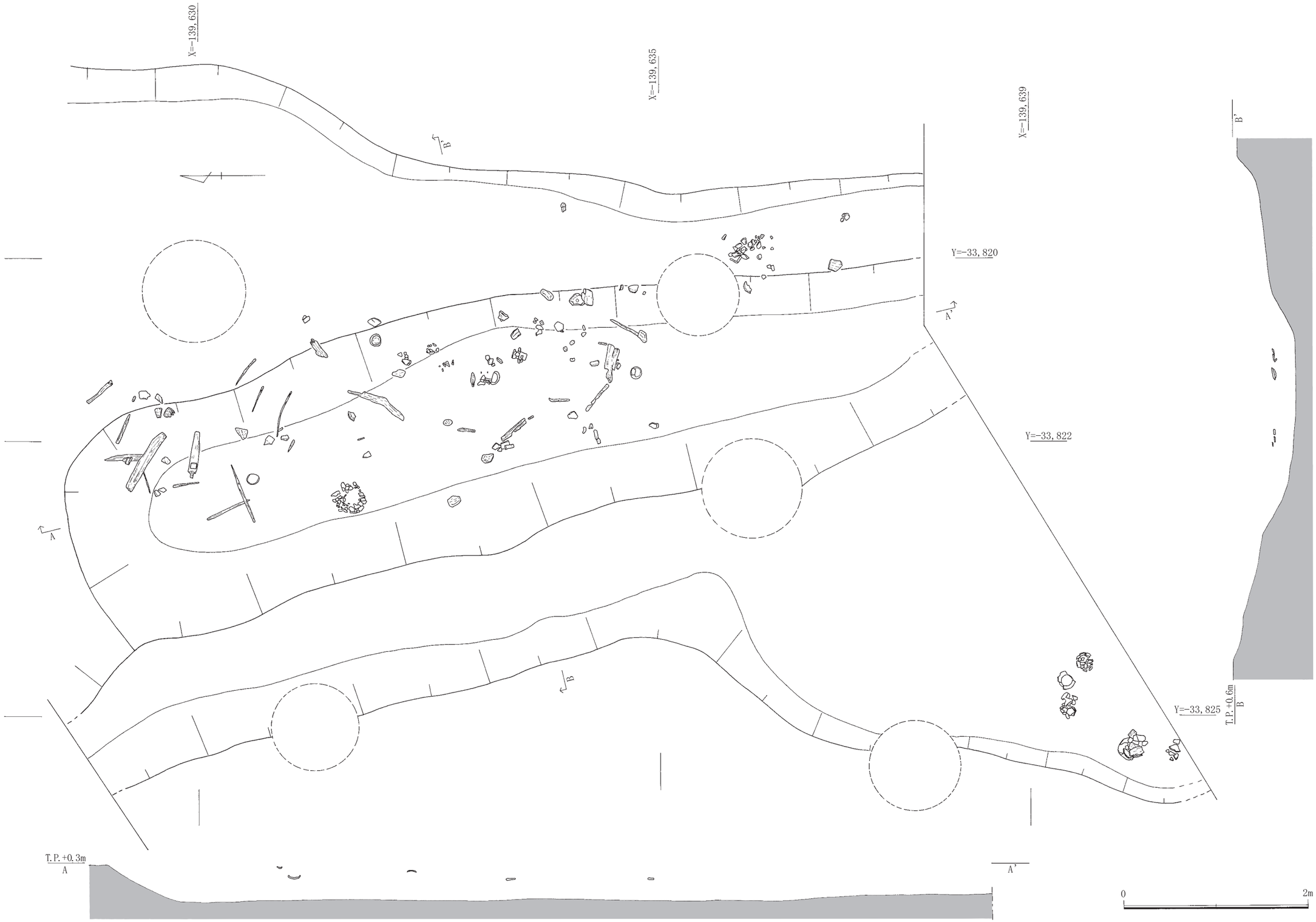
土坑Ｋ３－０９０９１（第80図、図版25）

Ｋ３調査区の南西半部のB19d3・e3地区で検出した。不定形状の平面形を呈する土坑である。長軸4.3m、短軸3.2mで、深さは最深部で0.26mを測った。埋土は青灰色シルトのブロックを含む暗灰色粘土、暗灰色粘土のブロックを含む青灰色シルト、黒灰色粘土のブロックを含む青灰色シルト、暗灰色粘土、青灰色シルトのブロックを含む黒灰色粘土の５層に分層でき、埋土内より土師器、Ｕ字形板状土製品、大型哺乳類の骨片などが出土した（第80図、図版25)。須恵器は出土しなかったが、土師器は５世紀後半～末に属するものと思われる。

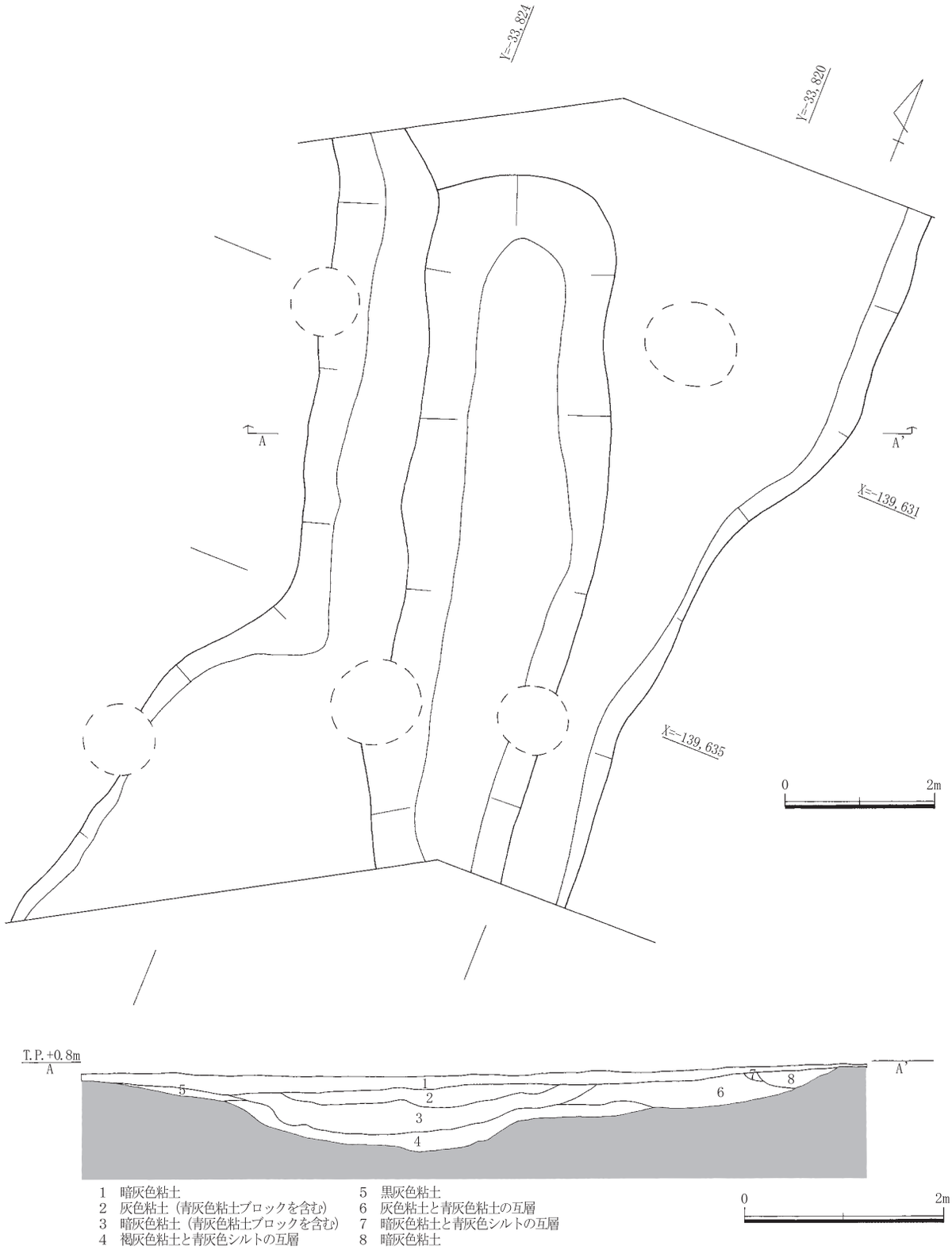
土坑Ｋ３－０９１４９（第68図、図版25）

Ｋ３調査区の南西端部のB19e4地区で検出した。不整楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸0.9m、短軸0.85mで、深さは最深部で0.05mを測った。埋土は緑灰色シルトのブロックを少量含む黒灰色粘土で、埋土内より須恵器、土師器などが出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

土坑Ｋ３－０９１５０（第81図、図版25）

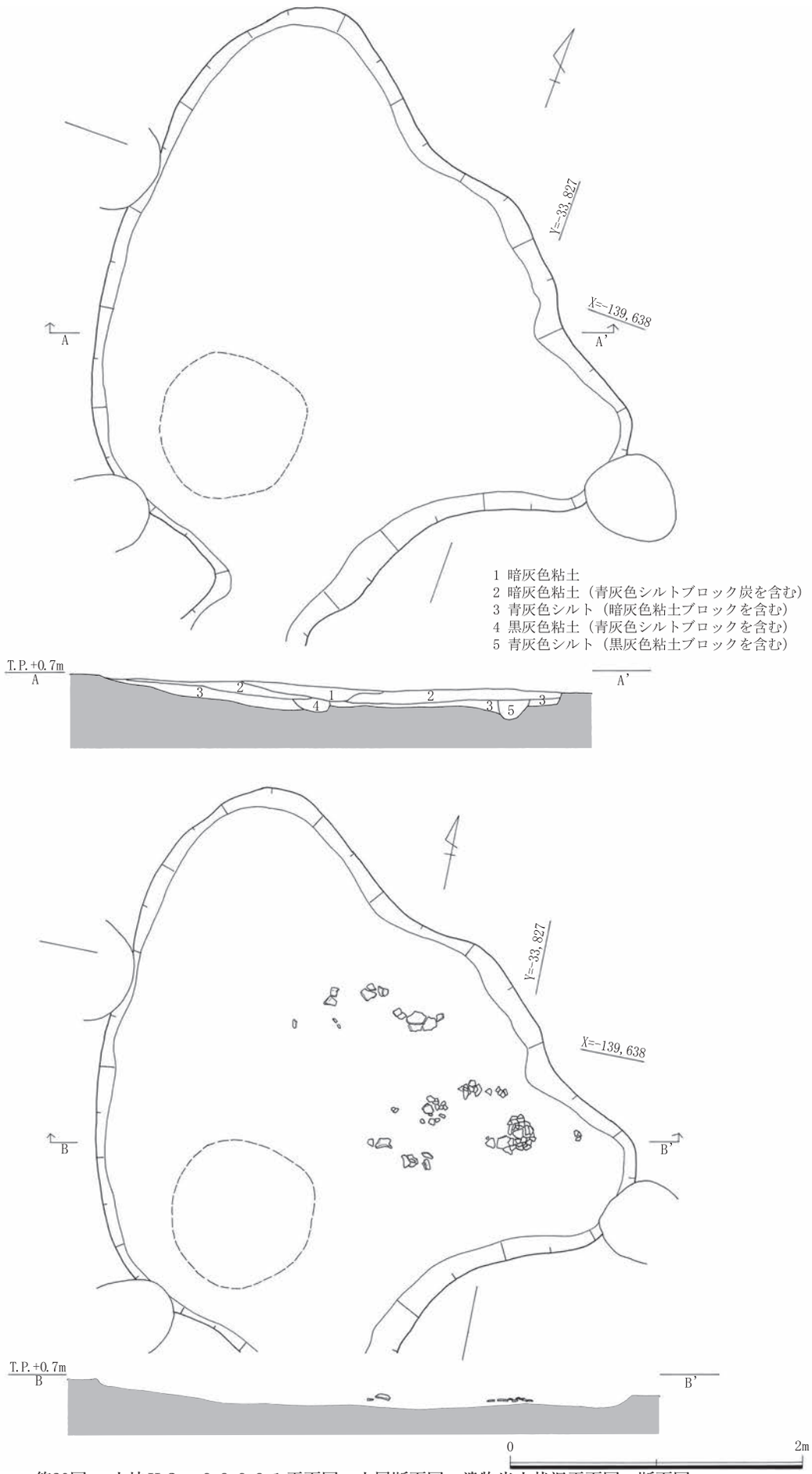


第78図　落ち込みＫ３－０９０５０平面図・土層断面図

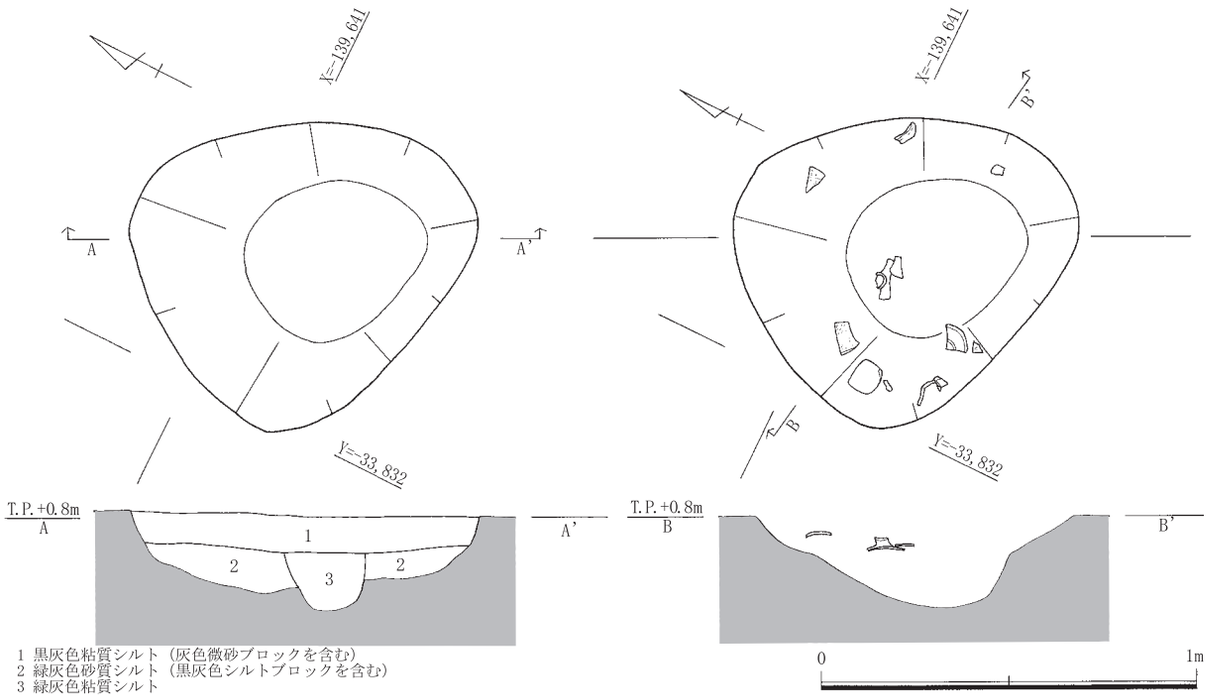


第79図　落ち込みＫ３－０９０５０遺物出土状況平面図・断面図

Ｋ３調査区の南西端部のB19e4地区で検出した。不整楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸0.9m以上、短軸0.8mで、深さは最深部で0.27mを測った。大壁建物Ｋ３－０９１３３を切って掘削されている。埋土は黄灰色微砂のブロックを少量含む黒灰色粘質シルト、黒灰色シルトのブロックを含む緑灰色砂質シルト、緑灰色粘質シルトの３層で、埋土内より須恵器、土師器などが出土した（第81図、図版25）が、時期を判断する決め手となるものはなかった。



第80図　土坑Ｋ３－０９０９１平面図・土層断面図・遺物出土状況平面図・断面図



第81図　土坑Ｋ３－０９１５０平面図・土層断面図・遺物出土状況平面図・断面図

土坑Ｋ３－０９１５７（第68図、図版25）

Ｋ３調査区の南西半部のB19e3地区で検出した。不整楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸0.8m、短軸0.5mで、深さは最深部で0.1mを測った。溝Ｋ３－０９１５８を切って掘削されている。埋土は１層で、暗灰色粘土と青灰色粘質シルトの互層である。埋土内より須恵器、土師器などが出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

土坑Ｋ３－０９１９７（第68図、図版25）

Ｋ３調査区の南西半部のB19d3地区で検出した。円形状の平面形を呈する土坑である。径0.5m、深さ0.33mを測った。埋土は５層で、黒灰色粘質シルト、緑灰色砂質シルト混じりの黒灰色粘質シルト、暗灰色粘土、暗灰色砂質シルト、暗灰褐色粘土である。埋土内より須恵器、土師器などが出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

溝Ｋ３－０９１００（第82図）

Ｋ３調査区の中央のやや西寄りのB19d3地区で検出した。北北西から南南東方向へ走る溝で、幅0.25m～ 0.4mで、深さは0.06mを測った。竪穴住居Ｋ３－０９１０８を切って掘られ、土坑Ｋ３－０９００９１に切られている。埋土は１層で、緑灰色粘土のブロックを含む暗灰色粘土である。

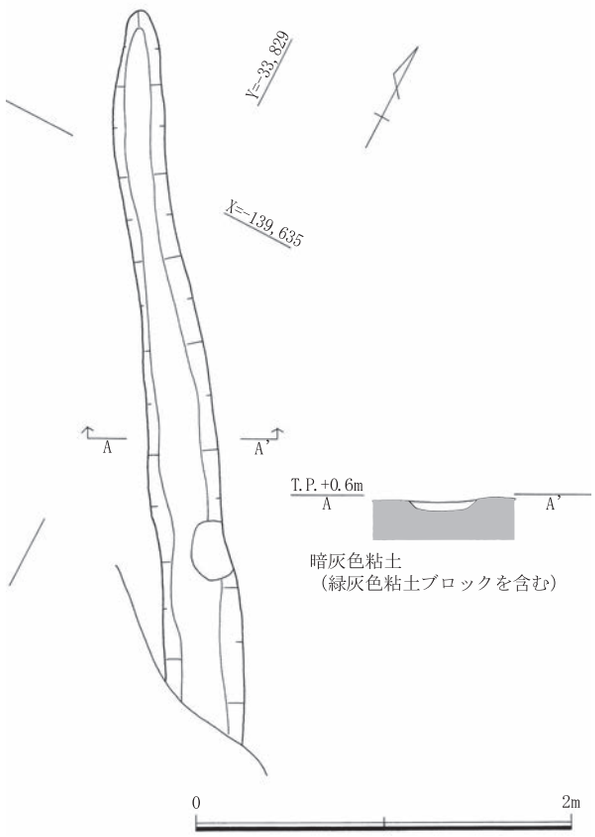
溝Ｋ３－０９１３６（第83図）

Ｋ３調査区の中央部のB19d3地区で検出した。土坑Ｋ３－０９０５０の西側をほぼ平行して走る溝である。幅0.95m～ 1.3mで、深さは0.12mを測った。南端部を土坑Ｋ３－０９０５０と土

坑Ｋ３－０９０９１に切られた状態で検出された。埋土は１層で、暗灰色粘土と青灰色粘土の互層である。埋土内より須恵器が出土した。出土した須恵器はⅠ型式２段階に属するものである。

溝Ｋ３－０９１５８（第68図）

Ｋ３調査区の南西半部のB19e3地区で検出した。幅0.5mで、深さは0.18mを測った。西端部分で南北方向の溝Ｋ３－０９１５９と合流し、また、土坑Ｋ３－０９１５７に切られた状態で検出された。埋土は暗灰色粘土と緑灰色粘土の互層、暗灰色粘土と緑灰色粘質シルトの互層の２層に分層できた。埋土内から遺物は出土しなかった。



第82図　溝Ｋ３－０９１００平面図・土層断面図

第５項　ＨＴ１調査区

ＨＴ１調査区では、第25層灰色シルトのブロックを含む暗灰色粘土上面（T. P. 1.6m付近）の第７面で古墳時代中期の遺構が、第22層暗灰色粘質土上面（T. P. 1.8m付近）の第６面で古墳時代後期の遺構が検出された。ここでは古墳時代中期と後期の遺構が異なる面で検出されているが、どちらも集落の縁辺部にあたるものと思われる。

１．集落域縁辺部

第７面

第25層上面で土坑が検出された（第84図、図版25）。

土坑ＨＴ１－０７００７（第84図、図版26）

ＨＴ１調査区の東端部のA17d3地区で検出した。長楕円形状の平面形を呈する土坑である。長軸2.1m、短軸1.0m、深さ0.12mを測った。埋土は１層で、暗灰色砂混じり粘質土である。内部から須恵器、土師器などが出土した（図版26）。

第６面

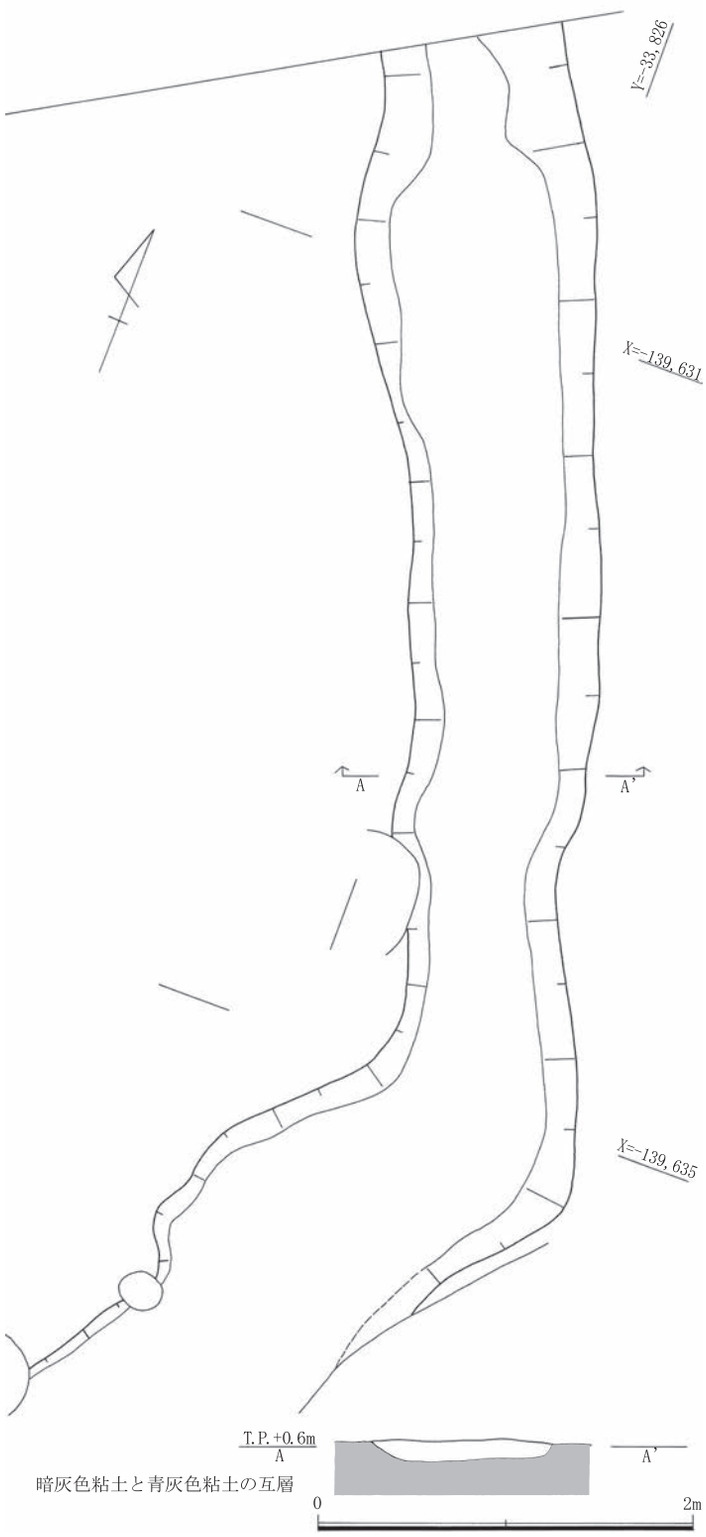
第22層上面で土坑、溝などが検出された（第85図、図版26）。

土坑ＨＴ１－０６００３（第85図、図版27）

ＨＴ１調査区の南西端部のA17c3・d3地区で検出した。不定形状を呈する土坑である。残存長2.1m×2.1m、深さ0.08mを測った。埋土は１層で、暗灰色砂混じり粘質土である。内部から須恵器、土師器などが出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

溝ＨＴ１－０６００１（第86図、図版26）

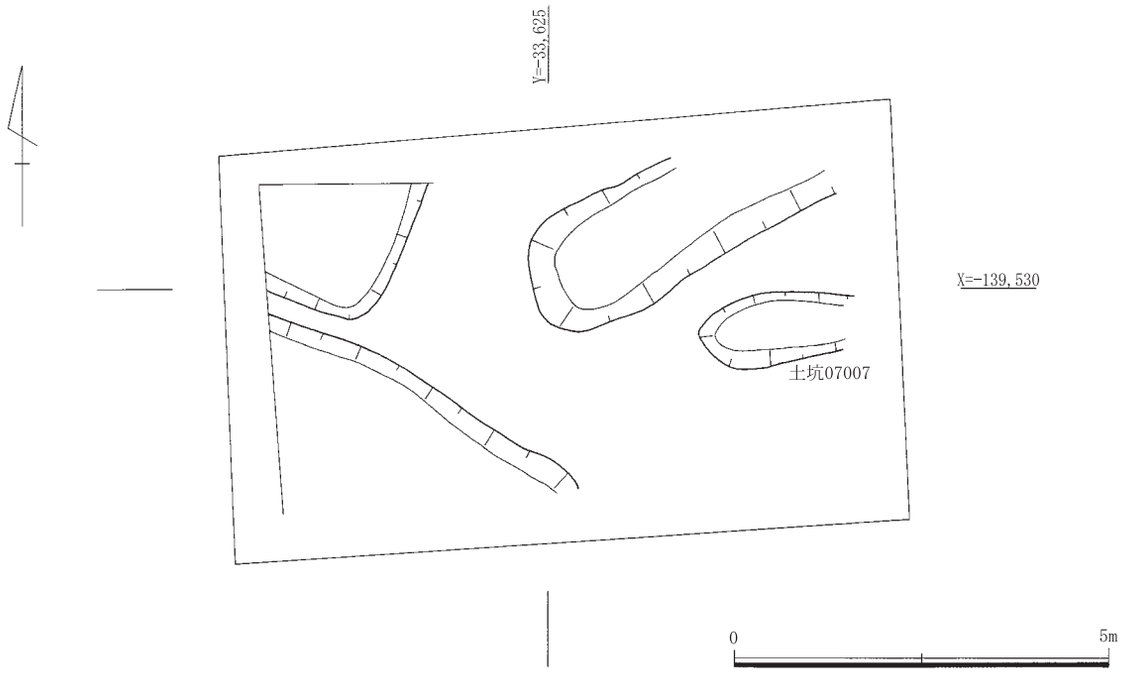
ＨＴ１調査区の中央部のA17c3・d3地区で検出した。ほぼ南北方向に延びる溝である。幅3.14m～4.66m、深さ0.15mを測った。埋土は１層で、暗灰色砂混じり粘質土である。埋土内から須恵器、土師器、土玉、臼玉などが大量に出土した（第87図、図版27）。出土した須恵器はⅡ型式１段階に属するものである。



第83図　溝Ｋ３－０９１３６平面図・土層断面図

第６項　Ｋ１調査区

Ｋ１調査区では、第51層青灰色シルトあるいは第50層緑灰色シルト上面の第10面（T. P. 1.2～1.3m付近）で古墳時代中期～後期の遺構が、第95層暗灰色粘土上面の第９面（T. P. 1.6m付近）で古墳時代後期の遺構が検出された。竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピット、溝などがある。全域が北東居住域となる。また、第94層灰色強粘性粘土上面の第８面（T. P. 1.8m付近）で、古墳時代後期の流路が検出された。



第84図　ＨＴ１調査区古墳時代中期遺構面（第７面）全体平面図

１．北東居住域

第10面

第51層と第50層上面で、竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピット、溝が検出された（第88図）。

竪穴住居Ｋ１－１（Ｋ１－１０００１）（第89図、図版28）

Ｋ１調査区の北端部のA19d2地区で検出した。5.1m×4.2mの歪な長方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ－57°－Ｗを指す。北縁の中央やや西寄りに造り付けのカマドを持つ（第90図、図版28）。住居内でピットがいくつか検出されたが、主柱穴を特定できなかった。覆土は１層で緑灰色粘土ブロックを含む暗灰色粘土である。

竪穴住居Ｋ１－１は竪穴住居Ｋ１－２を切っており、また土坑Ｋ１－０９１００、土坑Ｋ１－０９１３６に切られた状態で検出されている。覆土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

竪穴住居Ｋ１－２（Ｋ１－１０００２）（第91図、図版28）

Ｋ１調査区の北端部のA19d2地区で検出した。4.9m×4.35mの歪な長方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ－60°－Ｗを指す。住居内でピットがいくつか検出されたが、主柱穴を特定できなかった。覆土は１層で緑灰色粘土と暗灰色粘土の互層である。

Ｋ１－２は竪穴住居Ｋ１－１、土坑Ｋ１－０９１００、土坑Ｋ１－０９１３６などに切られた状態で検出されている。覆土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判

第85図　ＨＴ１調査区古墳時代後期遺構面（第６面）全体平面図

断する決め手となるものはなかった。

掘立柱建物Ｋ１－１（第92図、図版28）

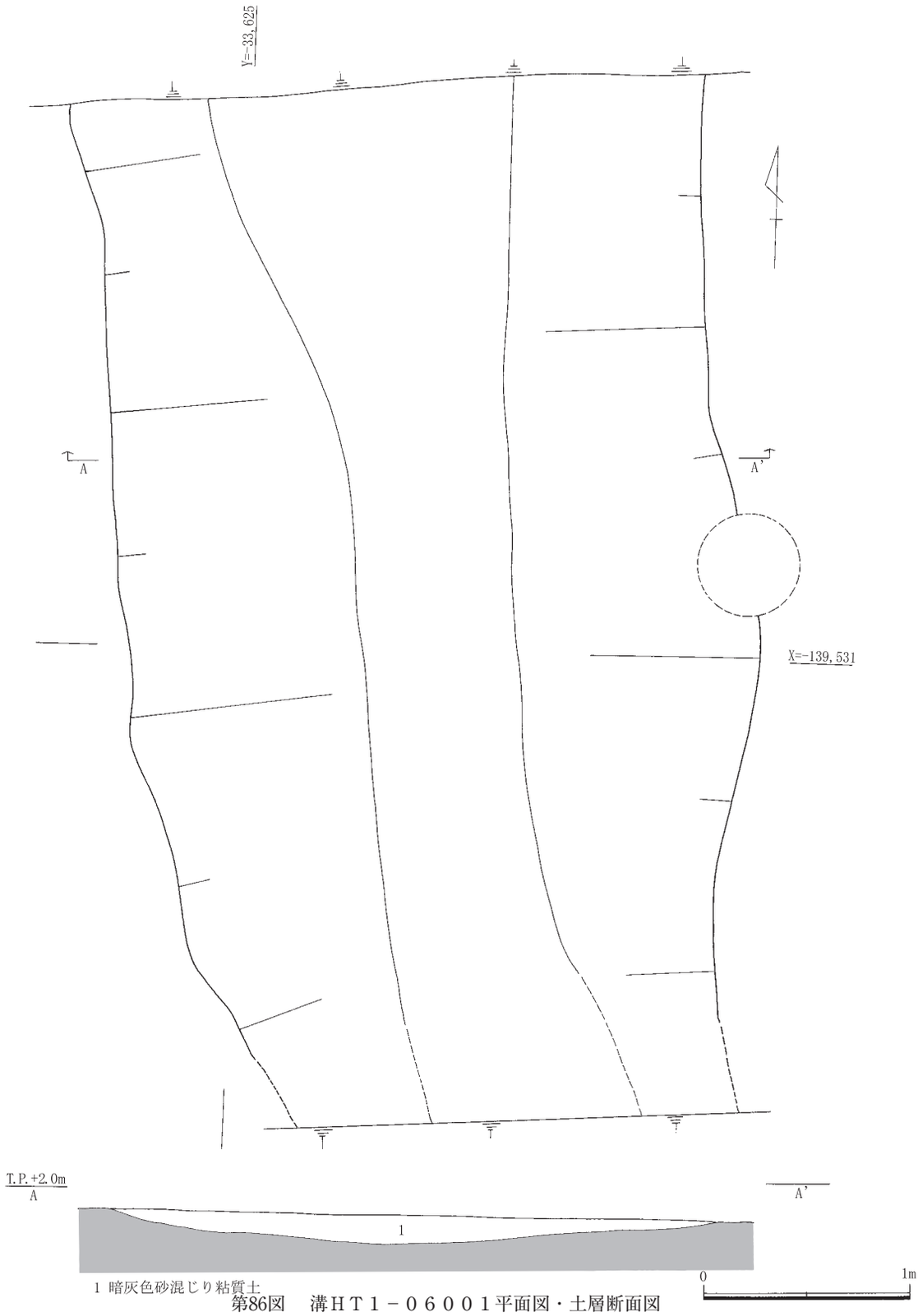
Ｋ１調査区の北東端部のA19d1地区で検出した掘立柱建物である。調査区では２間×４間を検出したが、東接するＣ調査区での検出部分を合わせると、４間×３間の総柱の建物となることがわかった。柱間は東西全長6.3m（４間）、南北全長5.0m（３間）で、建物の主軸はほぼＮ－60°－Ｗを指す。

柱穴は基礎杭と上面の流路によって６箇所が削平されている。残存するものは不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.45m、最大で0.75m、深さは0.3m～0.6mを測った。いくつかの柱穴から、礎板が検出された。柱穴内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

掘立柱建物Ｋ１－２（第93図、図版29）

Ｋ１調査区の南東端部のA19e1地区で検出した掘立柱建物である。調査区では３間×１間を検出したが、東接するＣ調査区での検出部分を合わせると、４間×３間の建物となることがわかった（第94図）。柱間は東西全長6.7m（４間）、南北全長5.5m（３間）で、建物の主軸はほぼＮ－43°－Ｗを指す。

柱穴は基礎杭によって１箇所が削平されている。残存するものは不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.5m、最大で0.55m、深さは0.18m～0.32mを測った。柱穴内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



第86図　溝ＨＴ１－０６００１平面図・土層断面図

掘立柱建物Ｋ１－３（第95図、図版29）

Ｋ１調査区の南東半部のA19e2地区で検出した掘立柱建物である。４間×３間の建物で、柱間は東西全長5.6m（４間）、南北全長5.3m（３間）を測り、建物の主軸はほぼＮ－15°－Ｅを指す。柱穴は上面の流路によって６箇所が削平されている。残存するものは不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.25m、最大で0.7m、深さは0.26m～0.48mを測った。柱穴のいくつか

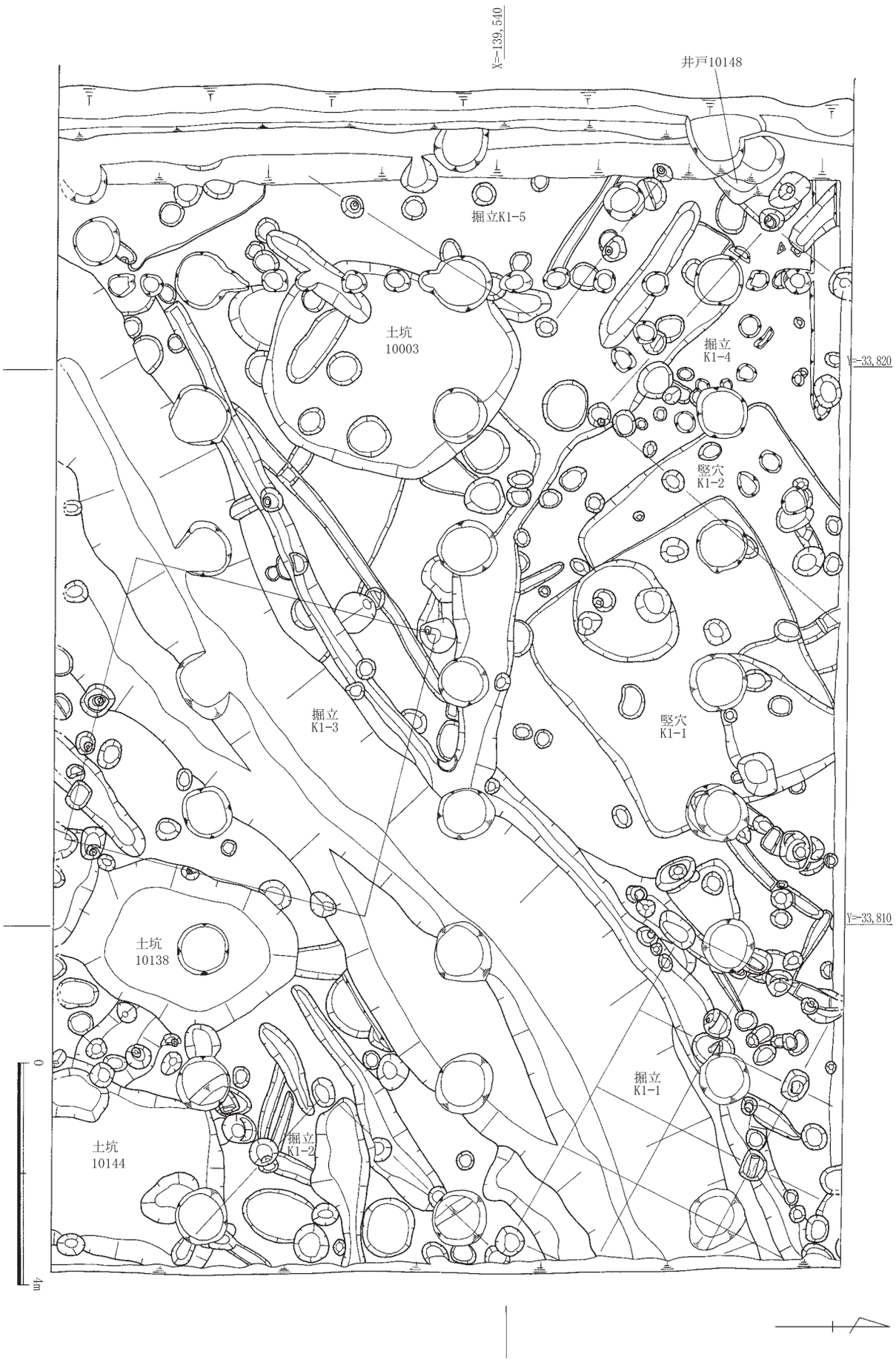
第87図　溝ＨＴ１－０６００１出土状況平面図・断面図

から、柱根が検出された。柱穴内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

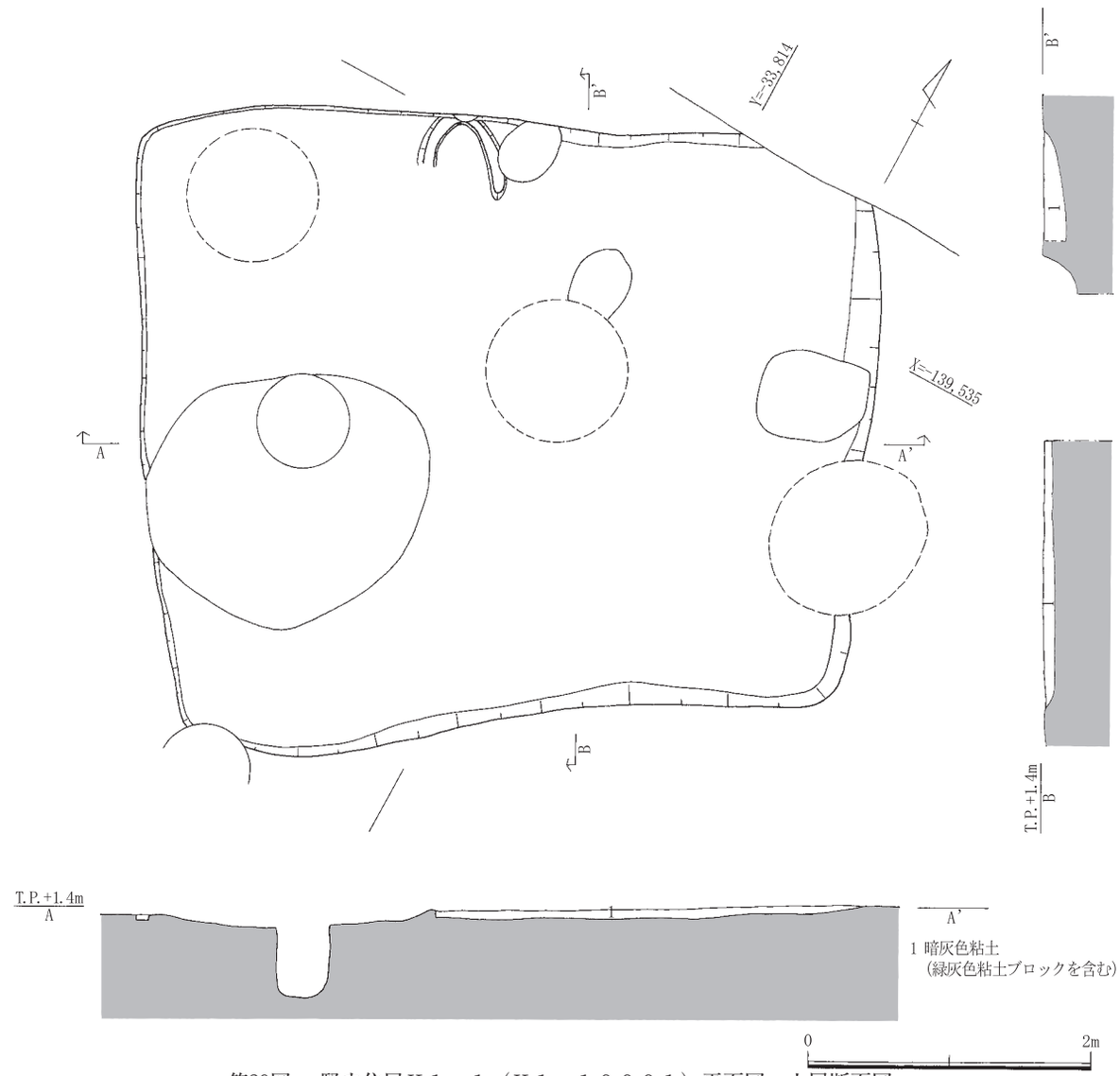
掘立柱建物Ｋ１－４（第96図、図版29）

Ｋ１調査区の北西半部のA19d2・d3地区で検出した掘立柱建物である。２間×３間の建物で、柱間は東西全長4.6m（３間）、南北全長3.5m（２間）を測り、建物の主軸はほぼＮ－49°－Ｗを指す。

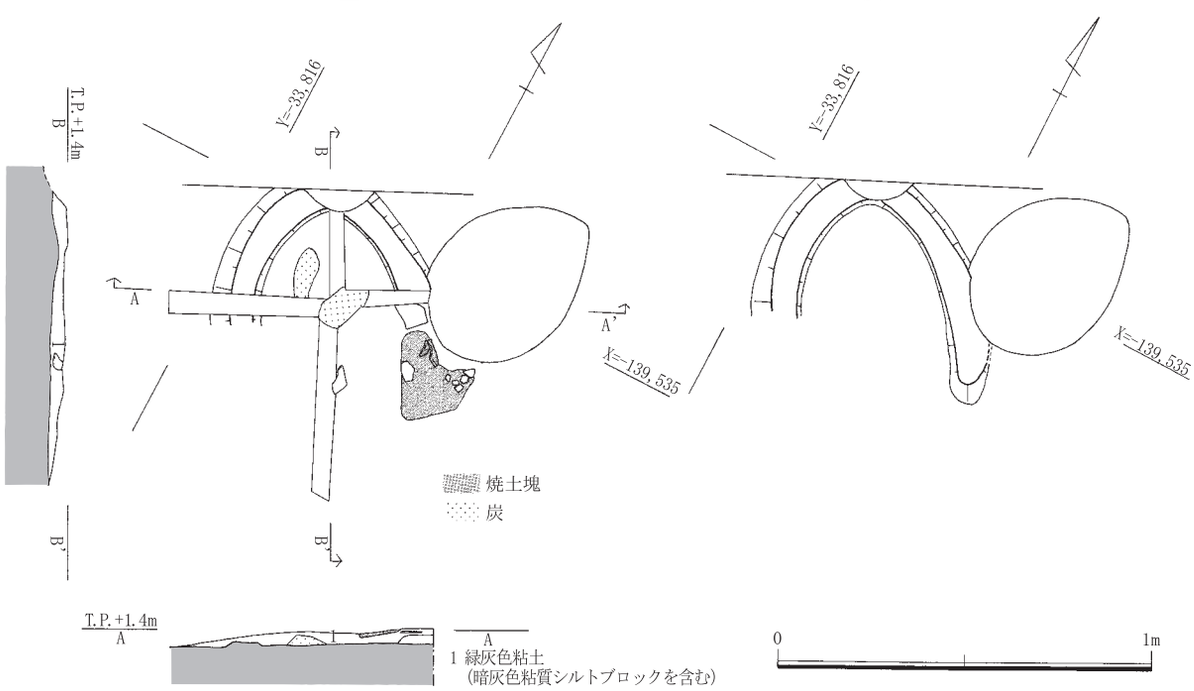
柱穴は基礎杭によって１箇所が削平されており、北コーナーとその南東隣の柱穴は調査区北壁外にある。残存するものは不整円形ないしは不整楕円形状を呈し、最小で径0.2m、最大で0.6m、深さは0.27m～0.78mを測った。柱穴のうちのいくつかから柱根および礎板が検出された。柱穴内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。



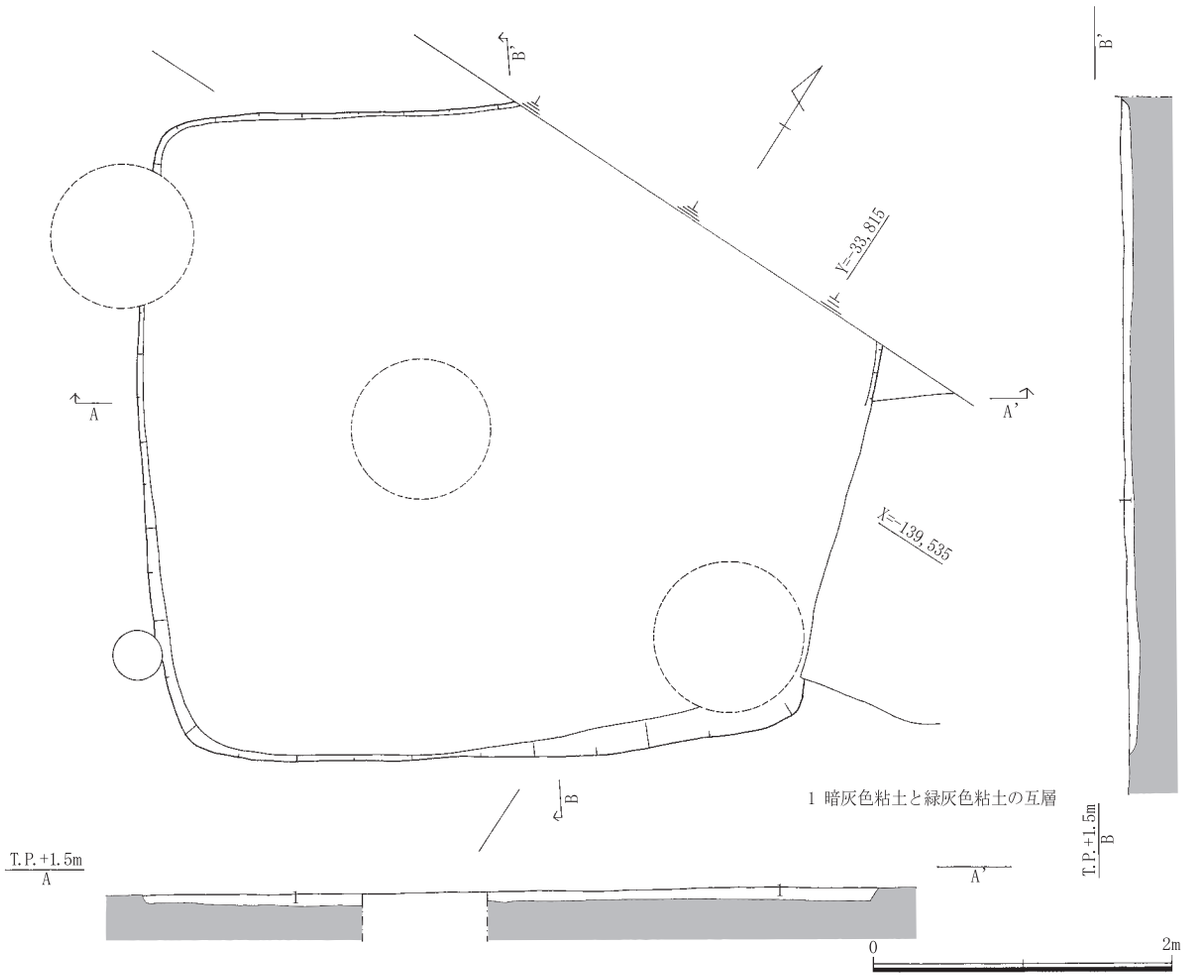
第88図　Ｋ１調査区古墳時代中期～後期遺構面（第10面）全体平面図



第89図　竪穴住居Ｋ１－１（Ｋ１－１０００１）平面図・土層断面図



第90図　竪穴住居Ｋ１－１（Ｋ１－１０００１）カマド検出状況平面図・土層断面図・完掘状況平面図



第91図　竪穴住居Ｋ１－２（Ｋ１－１０００２）平面図・土層断面図

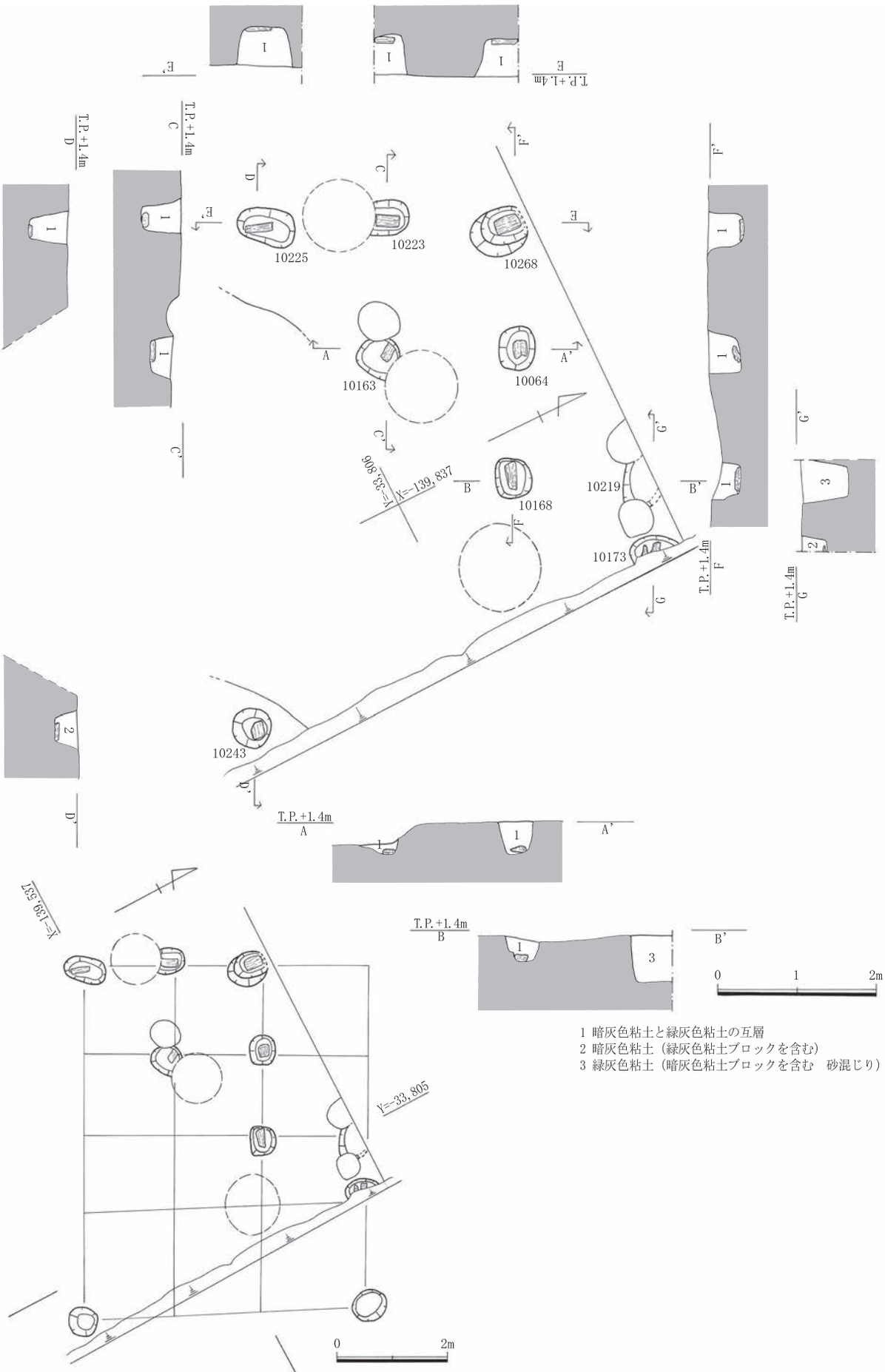
掘立柱建物Ｋ１－５（第97図、図版30）

Ｋ１調査区の西端部のA19d3・e3地区で検出した掘立柱建物である。調査区では２間×２間を検出したが、西接するＤ調査区での検出部分を合わせると、３間×３間の建物となることがわかった。柱間は東西全長5.3m（３間）、南北全長5.9m（３間）で、建物の主軸はほぼＮ－33°－Ｅを指す。

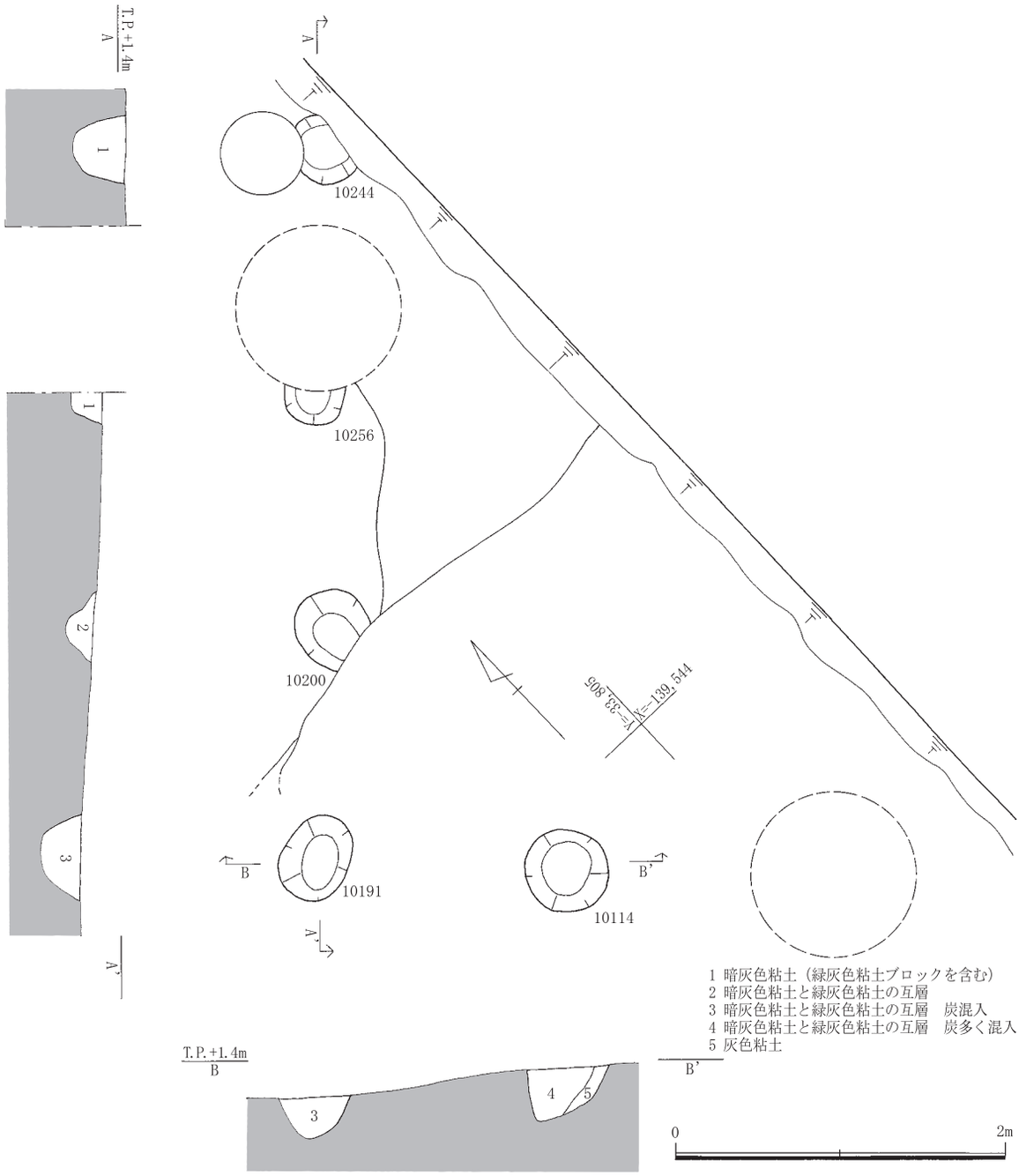
柱穴は基礎杭によって1箇所が削平されている。残存するものは不整楕円形状を呈し、最小で径0.25m、最大で0.45m、深さは0.26m～0.4mを測った。いくつかから柱根が検出された。柱穴内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土したが、時期を判断する決め手となるものはなかった。

井戸Ｋ１－１０１４８（第98図、図版30）

Ｋ１調査区の北西端部のA19d3地区で検出した井戸である。Ｄ調査区の調査の際に設けられた法面の部分で検出された。楕円形状の平面形を呈する素掘り井戸で、長軸1.3m、短軸0.9m（残存）、深さ1.18mを測った。内部から須恵器、土師器などがごく少量出土した。出土した須恵器はⅠ型式１段階に属するものである。



第92図　掘立柱建物Ｋ１－１平面図・土層断面図・Ｃ調査区との接合図



第93図　掘立柱建物Ｋ１－２平面図・土層断面図

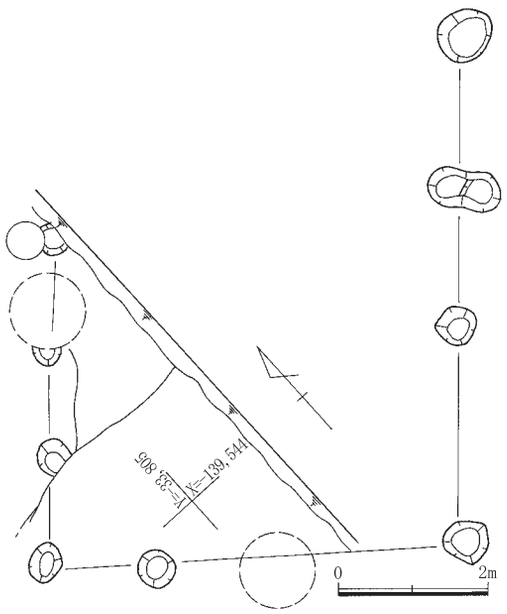
土坑Ｋ１－１０１４４（第99図、図版31）

Ｋ１調査区の南東端部のA19e1地区で検出した土坑である。やや歪な長方形状の平面形を呈する。平面プランの一部（南側）は調査区外にある。短軸３ｍ、長軸３ｍ以上で、深さは0.3mを測った。埋土は１層で緑灰色粘土ブロックを少量含む暗灰色粘土である。埋土内より須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、移動式カマド、Ｕ字形板状土製品などが大量に出土した（第100図）。出土した須恵器はⅠ型式４段階～５段階に属するものである。

土坑Ｋ１－１０１３８（第101図、図版30）

Ｋ１調査区の南東半部のA19e1・e2地区で検出した土坑である。歪な楕円形状の平面形を呈す

る。長軸4.0m、短軸2.6mで、深さは0.2mを測った。埋土は１層で緑灰色粘土ブロックを少量含む暗灰色粘土である。埋土内より須恵器、土師器、製塩土器、移動式カマドなどが出土した。出土した須恵器はⅠ型式４段階～５段階に属するものである。



第94図　掘立柱建物Ｋ１－２Ｃ調査区との接合図

土坑Ｋ１－１０００３（第102図、図版30）

Ｋ１調査区の西端部のA19e2・e3地区で検出した土坑である。不整楕円形状の平面形を呈する。長軸4.1m、短軸3.6mで、深さは0.23mを測った。埋土は３層で、緑灰色粘土ブロックを含む暗灰色粘土、緑灰色粘土ブロックと炭を含む暗灰色粘土、暗灰色粘土ブロックを含む緑灰色粘土である。埋土内より須恵器、須恵器系土器、土師器、韓式系土器などが出土した（第103図、図版30）。出土した須恵器はⅠ型式５段階に属するものである。

第９面

第95層暗灰色粘土上面で、竪穴住居、溝、ピットなどが検出された（第104図、図版32）。

竪穴住居Ｋ１－０９０６０（第105図、図版32）

Ｋ１調査区の南東端部のA19e1・e2地区で検出した竪穴住居である。プランの大半は調査区外にある。

5.5m×4.0m以上の長方形状の平面形を呈し建物の主軸はＮ－25°－Ｗを指す。住居内で主柱穴の可能性があるピットが１箇所検出された。覆土は１層で緑灰色粘土ブロック混じりの黒灰色粘土である。

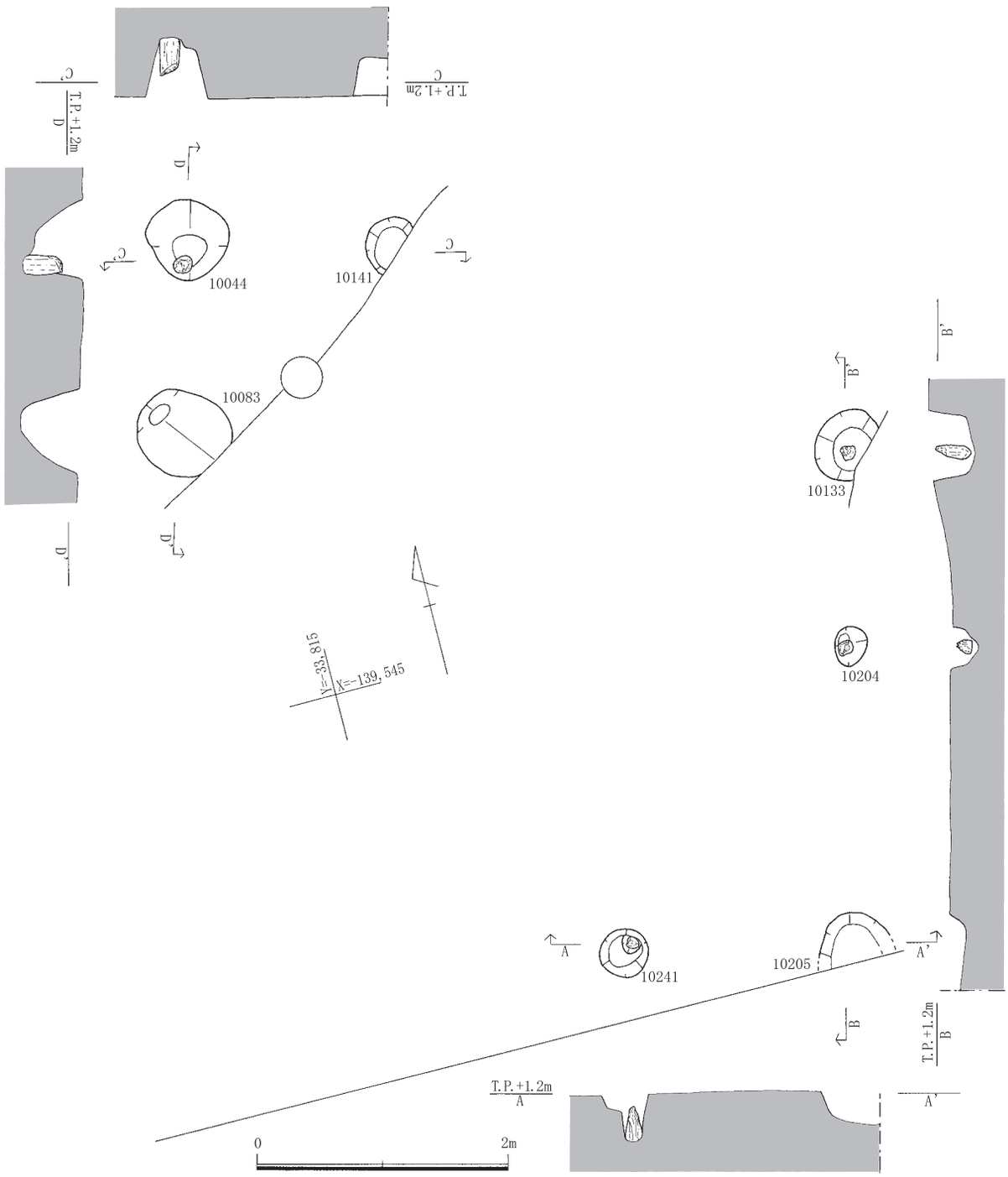
覆土内より須恵器、土師器などの遺物がごく少量出土した。出土した須恵器はⅡ型式２段階に属するものである。

竪穴住居Ｋ１－０９０６１（第104図、図版32）

Ｋ１調査区の南東端部のA19e1・e2地区で検出した竪穴住居である。プランの大半は調査区外にある。長方形状の平面形を呈し、建物の主軸はＮ－25°－Ｗを指す。覆土は1層で緑灰色粘土ブロック混じりの黒灰色粘土である。

溝Ｋ１－０９０６２（第104図、図版32）

Ｋ１調査区の南東半部のA19e1・e2地区で検出した溝である。竪穴住居Ｋ１－３の北側を東北

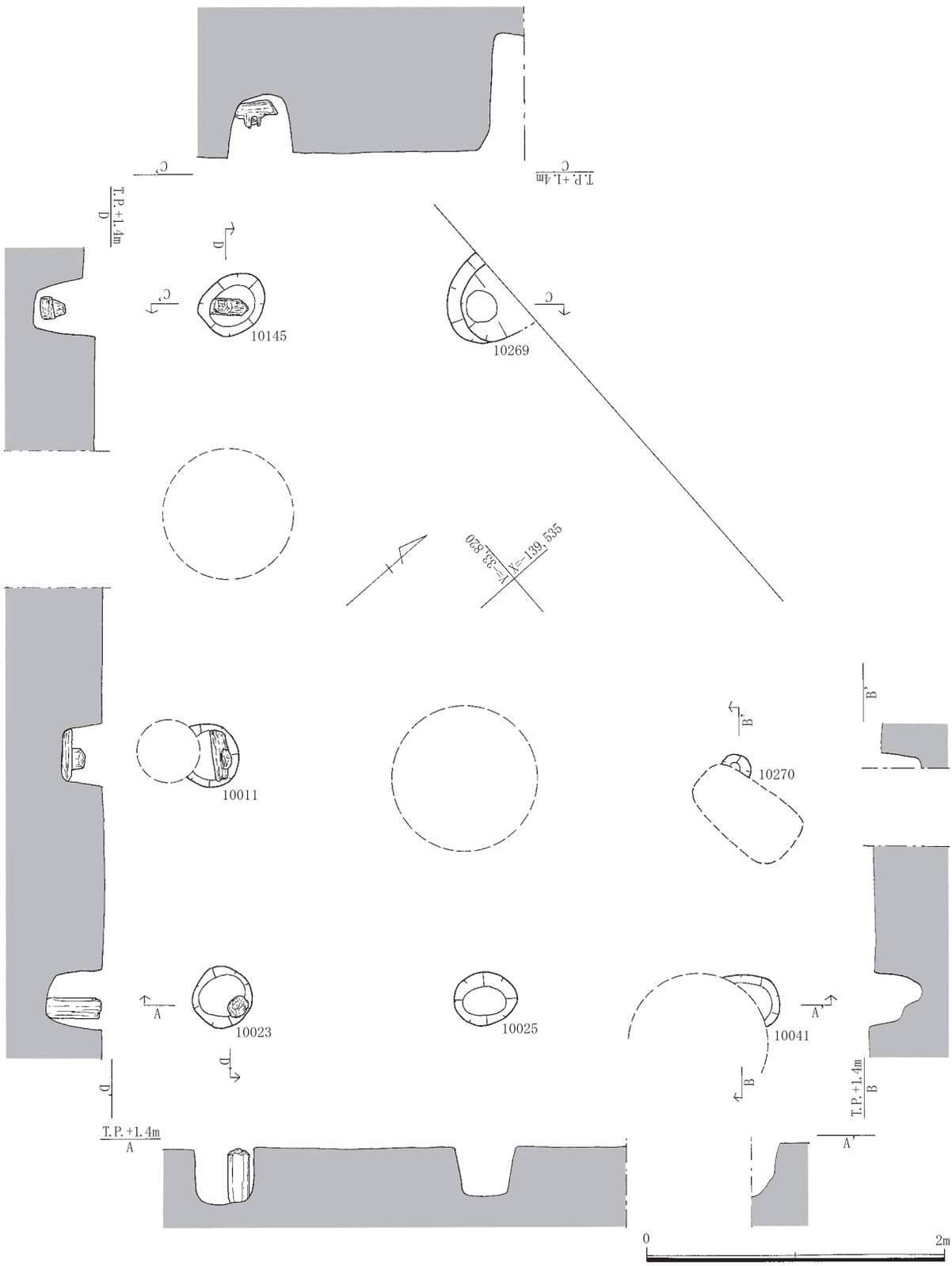


第95図　掘立柱建物Ｋ１－３平面図・断面図

東から西南西方向に延びる。幅1.0m～1.8mを測った。埋土は1層で緑灰色粘土ブロック混じりの黒灰色粘土である。埋土内より須恵器、Ｕ字形板状土製品などの遺物がごく少量出土した。出土した須恵器はⅡ型式２段階に属するものである。

溝Ｋ１－０９０３９（第104図、図版32）

Ｋ１調査区の南東半部のA19d1・d2地区で検出した溝である。幅0.55mで、深さ0.21mを測った。埋土は２層で、上より緑灰色粘土ブロック混じりの黒灰色粘土、黒褐色粘土ブロック混じりの緑灰色粘土である。埋土内より須恵器、土師器などの遺物がごく少量出土した。出土した須恵

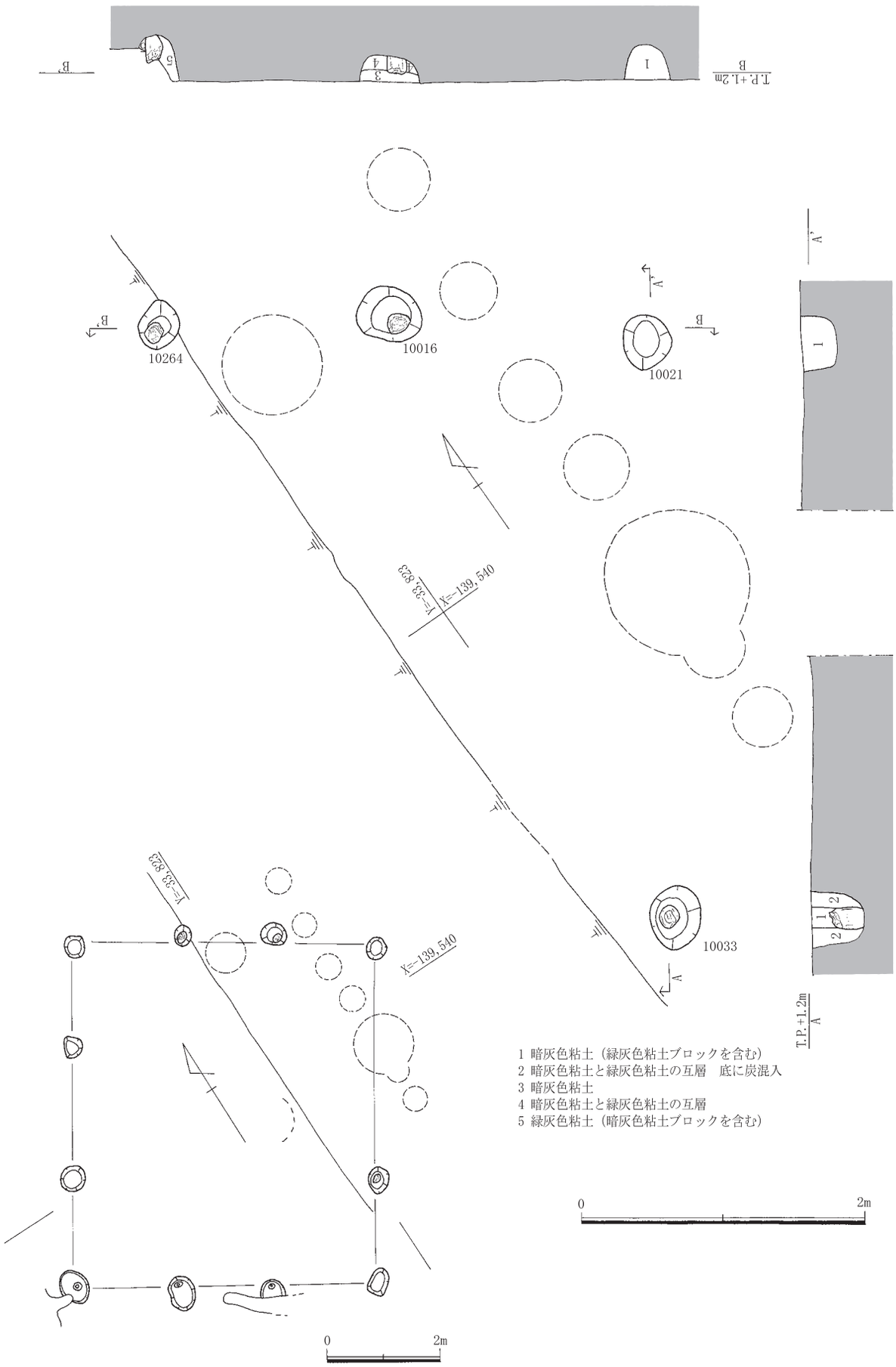


第96図　掘立柱建物Ｋ１－４平面図・断面図

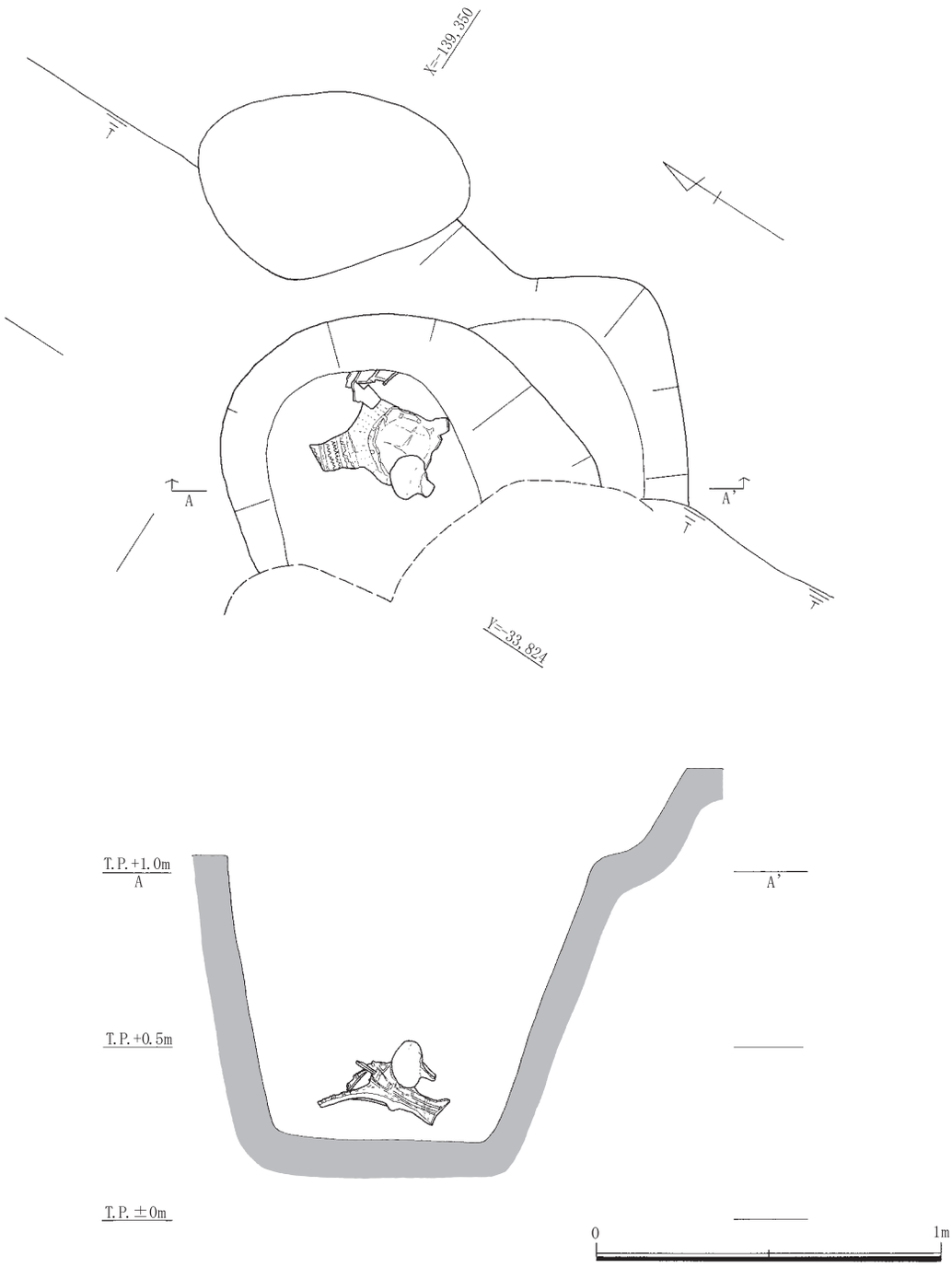
器はⅡ型式２段階に属するものである。

第８面

第94層上面で、古墳時代後期の流路が検出された（第106図）。



第97図　掘立柱建物Ｋ１－５平面図・土層断面図・Ｄ調査区との接合図



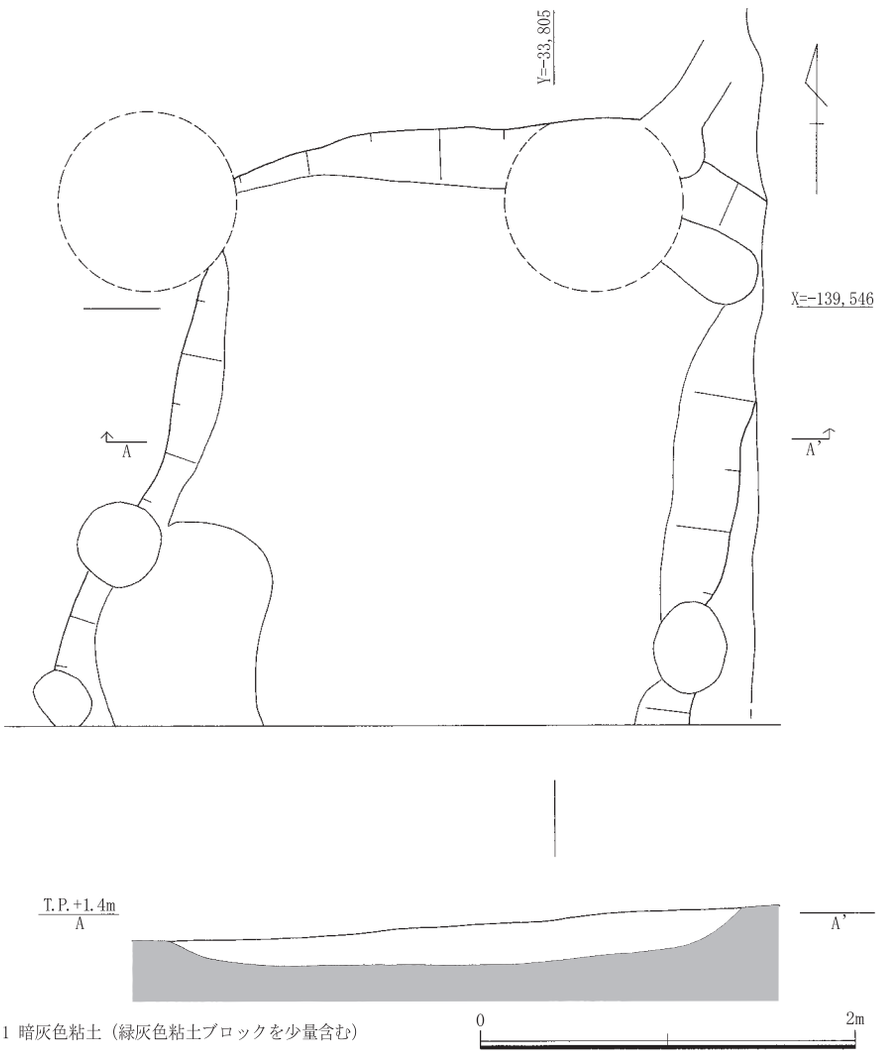
第98図　井戸Ｋ１－１０１４８遺物出土状況平面図・断面図

流路Ｋ１－０８０１３（第107図）

Ｋ１調査区の南東半部のA19d1・e1・d2・e2・e3地区で検出した。第15面で検出された流路Ｋ１－１５００１のほぼ真上の位置にあたる、調査区の北東端部から南西端部方向に緩く蛇行しつつ走る。幅12m～15、深さ0.9mを測った。埋土は８層で、暗灰色シルトと灰白色微砂の互層、青灰色シルト、青灰色シルトと灰白色シルトの互層、明黄灰色粗砂～礫、灰白色粗砂、黄灰色粗砂ブロック混じりの暗灰色シルト、青灰色シルト、明灰色粗砂である。埋土の最下層の明灰色粗砂から須恵器、土師器、製塩土器、鍛冶関連遺物（鞴羽口）、ウマの左下顎第1後臼歯（図版60－３）などが大量に出土した。出土した須恵器はⅡ型式２段階～４段階に属するものである。

第７項　ＵＫ調査区

緑灰色シルト上面の第８面で古墳時代中期～後期の遺構が検出された。大溝がある（第108図、図版32）。



第99図　土坑Ｋ１－１０１４４平面図・土層断面図

大溝ＵＫ－００１（第108図、図版32）

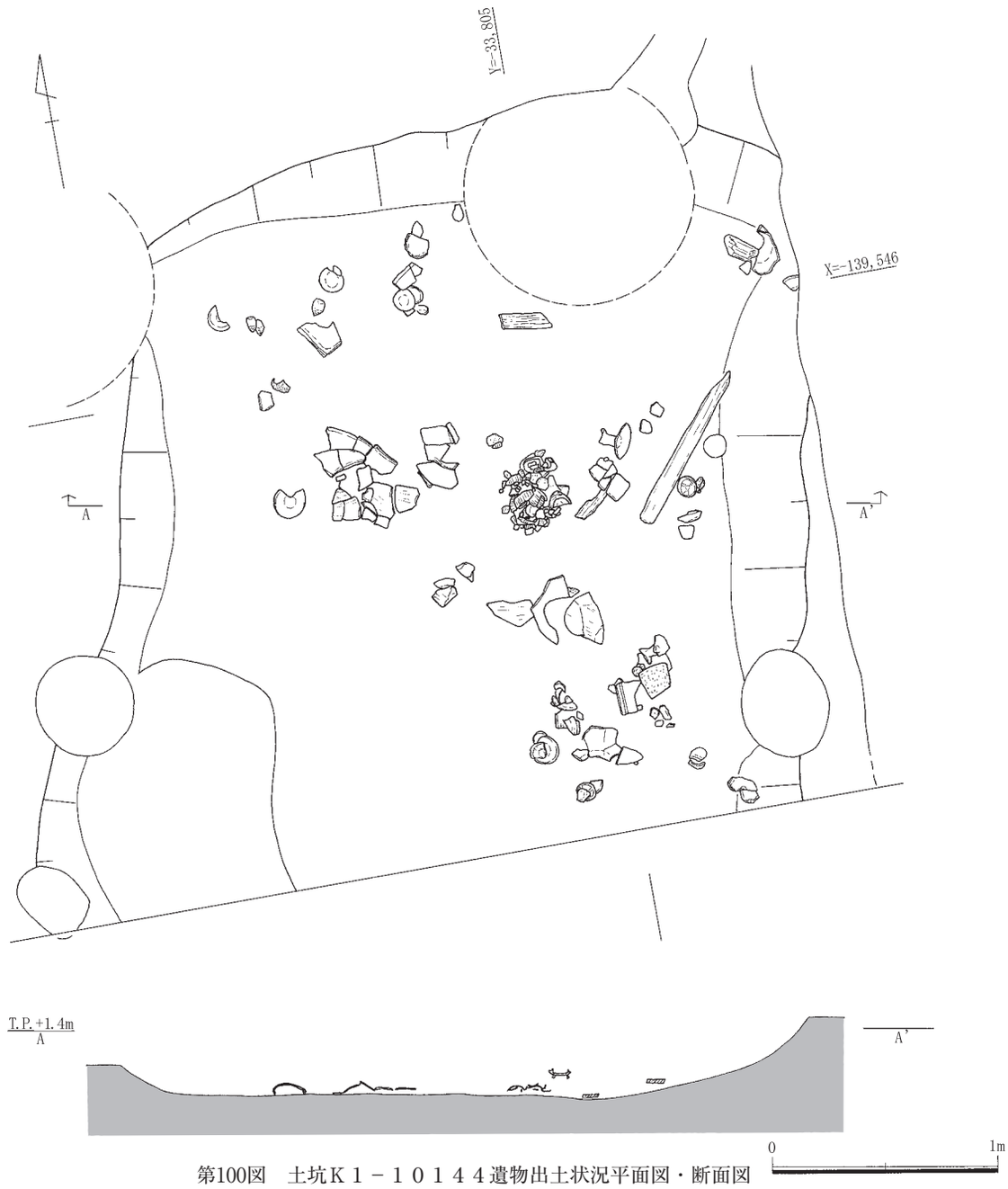
ＵＫ調査区の北西半部のA20e2・f2地区で検出した。調査範囲が狭小なため、検出したのが東西方向の溝の北側肩部付近のみであったため、詳細は把握できなかった。ここで確認できたのは溝の深さが1.0ｍを超えること、検出部分の埋土が淡灰黄色土、暗灰色粘質シルト、暗灰色シルト（炭混じり）の３層であること、須恵器、土師器、木製品が出土したことに限られる。出土した須恵器はＩ型式３段階に属するものである。

第８項　ＨＴ２調査区

青灰色粘土上面の第５面で古墳時代中期～後期の遺構が検出された。大溝がある。

大溝ＨＴ２（第109図、図版32）

ＨＴ２調査区の南東半部で検出した。調査区が狭小であるのに加えて、検出したのが東北東から西南西方向の溝の西北西の肩付近の一部であったため、全体の形状等は把握できなかった。把握できたのは、検出部分で幅0.4m、深さ0.5ｍを測ったこと、埋土が３層で、上よりオリーブ黒色粘土、暗褐灰色粘土、黒褐色粘土であること、埋土内より須恵器、土師器などが出土したことである。出土した須恵器はＩ型式３段階に属するものである。



第100図　土坑Ｋ１－１０１４４遺物出土状況平面図・断面図

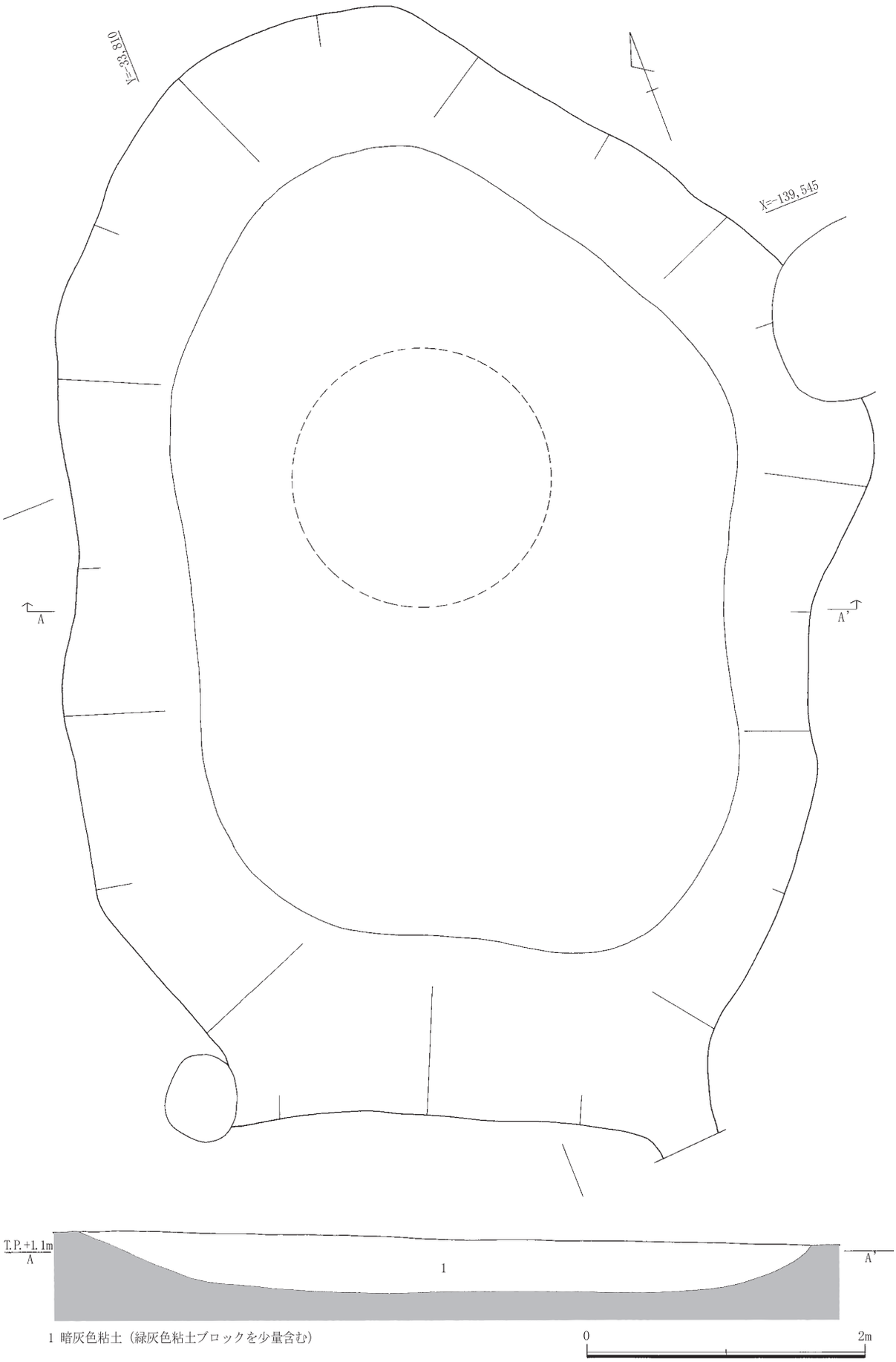
第５節　飛鳥時代以降の遺構

すべての調査区で飛鳥・奈良時代以降に属する遺構が検出されている。

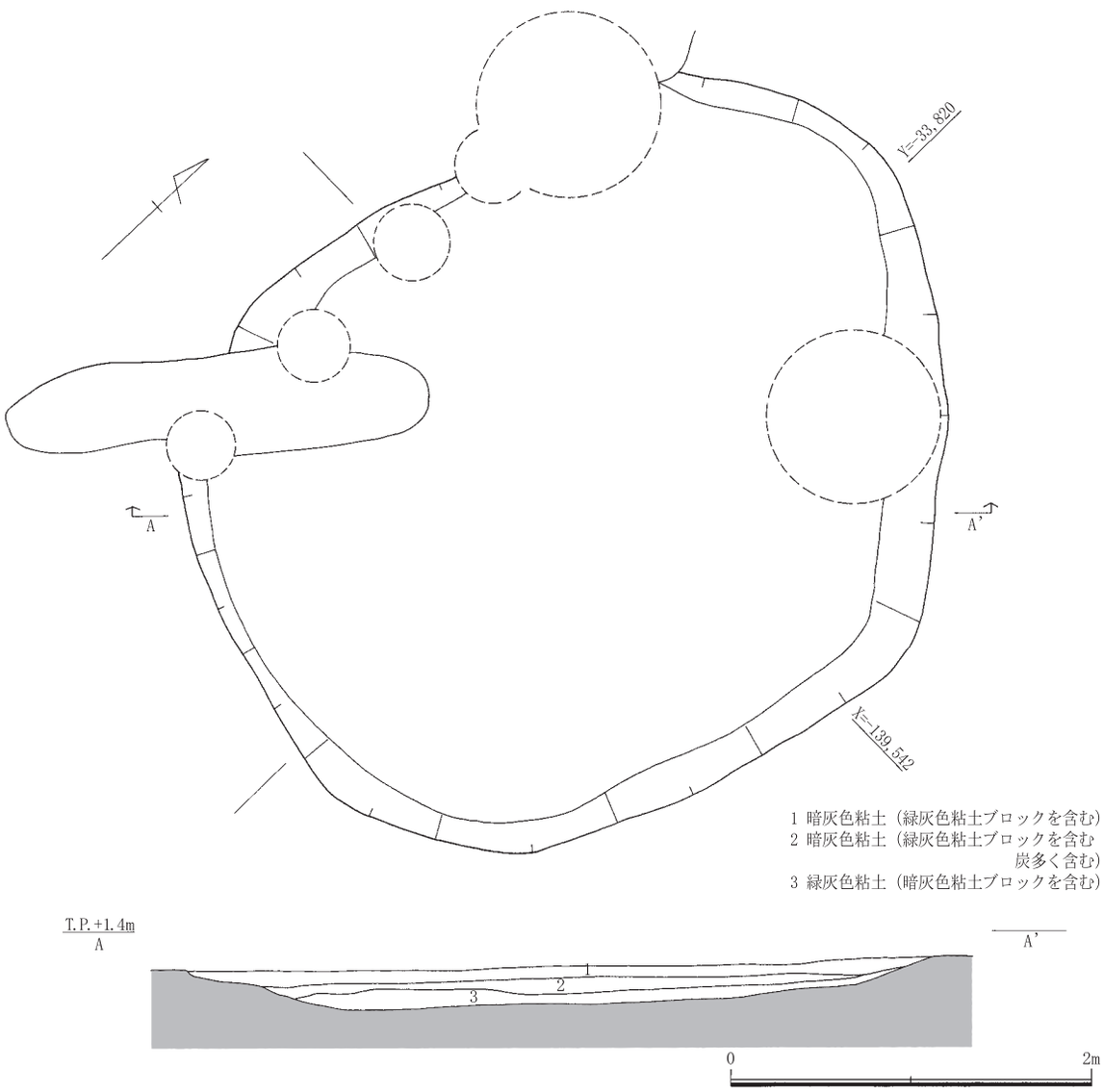
第１項　Ｋ２調査区

１．平安時代後期の遺構

Ｋ２調査区では、粗砂を含む暗青灰色と青灰色の粘質土上面（T. P. 2.4m付近）の第４面で土坑や溝などが検出され、12世紀の黒色土器Ｂ類や土師器などが多数出土した。さらに暗灰色シルトと暗緑灰色シルト上面（T. P. 2.5m付近）の第３面で、掘立柱建物、土坑などが検出された。



第101図　土坑Ｋ１－１０１３８平面図・土層断面図



第102図　土坑Ｋ１－１０００３平面図・土層断面図

第４面

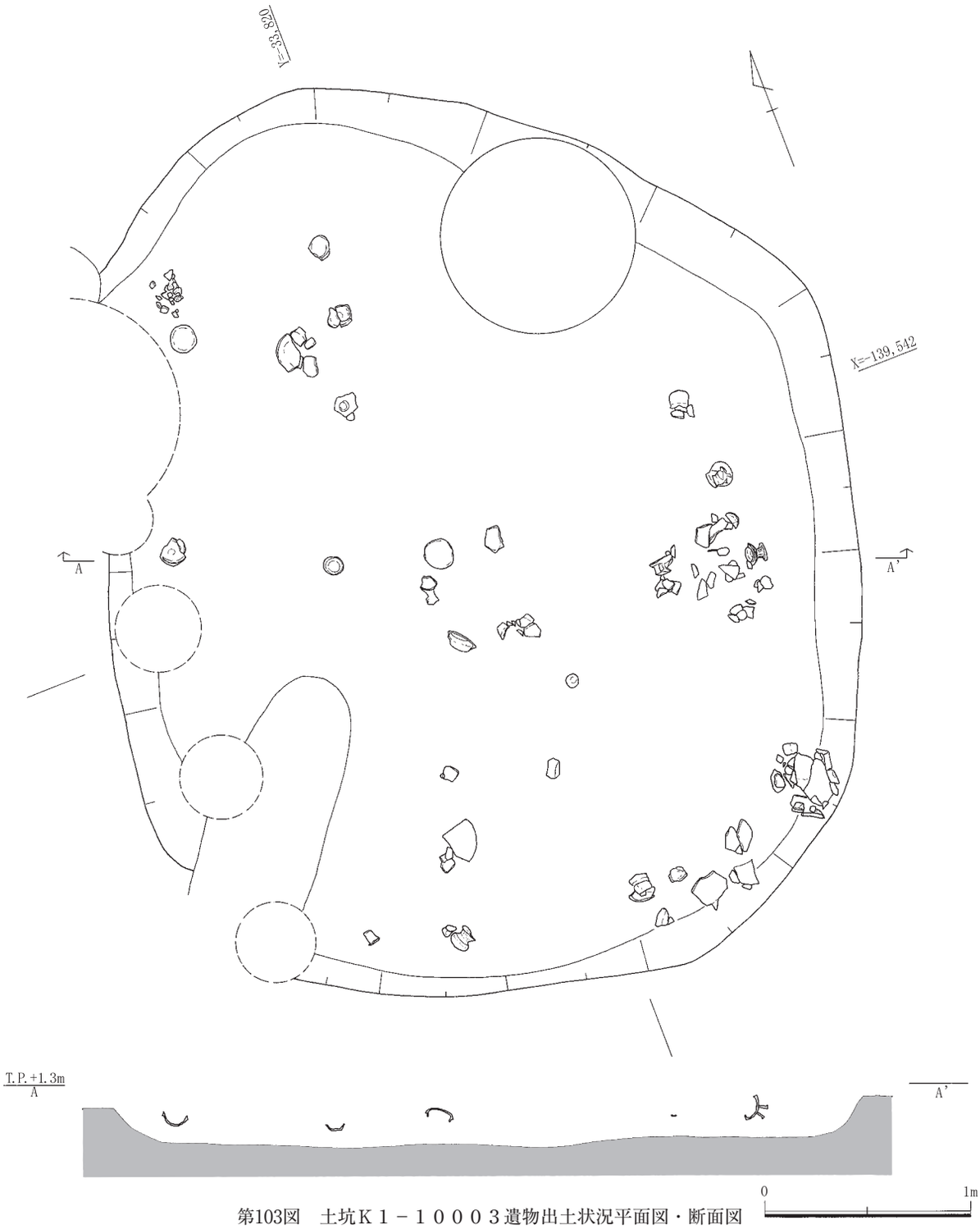
第４面では土坑、溝、ピットなどが多数検出された。（第110図、図版33）

土坑Ｋ２－０４０４８（第112図、図版33）

Ｋ２調査区の中央部やや東寄りのA19h3地区で検出した土坑である。楕円形状の平面形を呈し、長軸1.8m、短軸1.45m、深さ0.44mを測った。埋土は３層で、上より黄灰色砂混じり暗灰色粘土、灰色粘質土混じり暗灰色砂、灰色粘土である。埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。

土坑Ｋ２－０４０４９（第110図、図版33）

Ｋ２調査区の東端部付近のA19h3地区で検出した土坑である。楕円形状の平面形を呈するが、

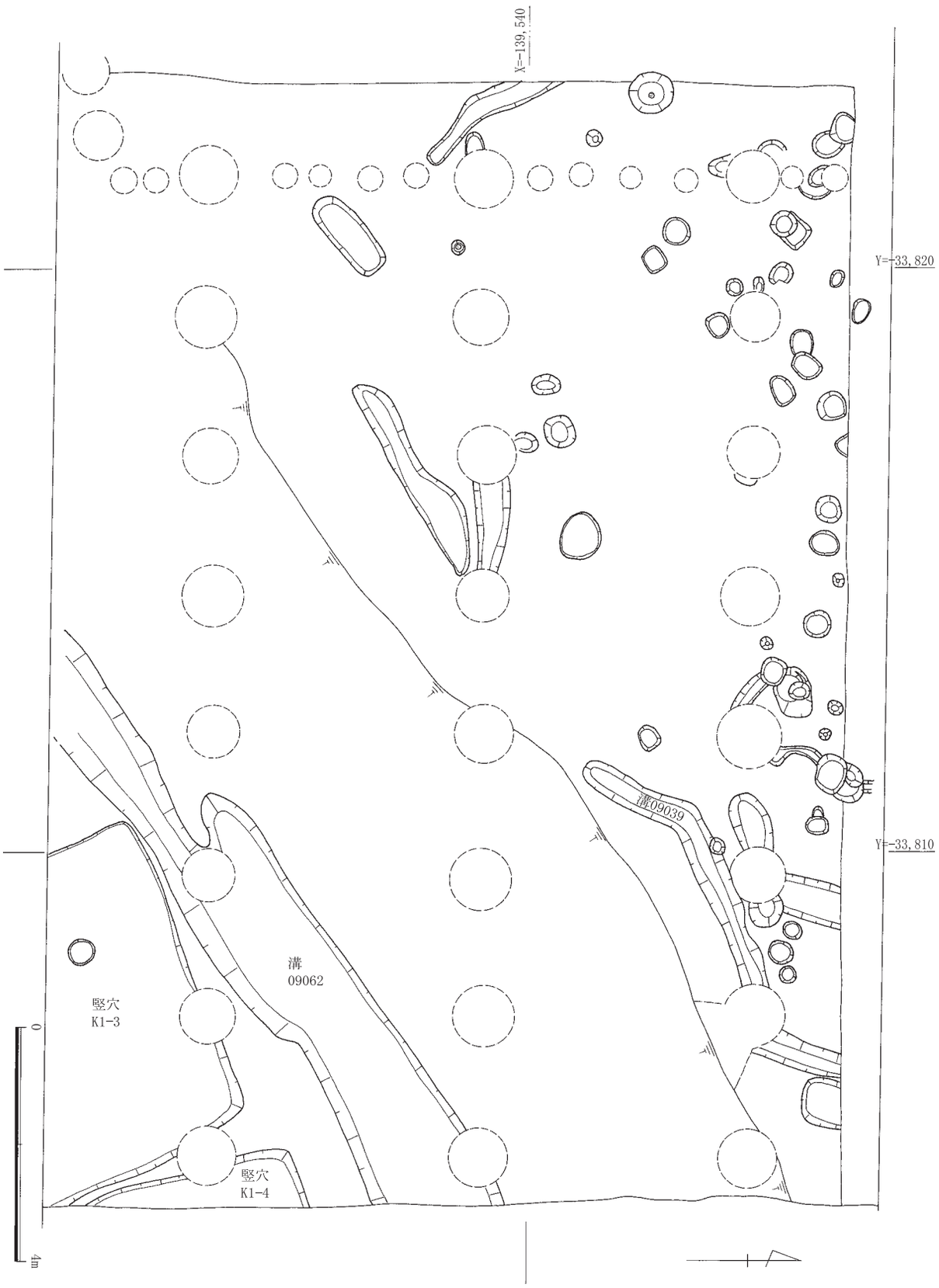


第103図　土坑Ｋ１－１０００３遺物出土状況平面図・断面図

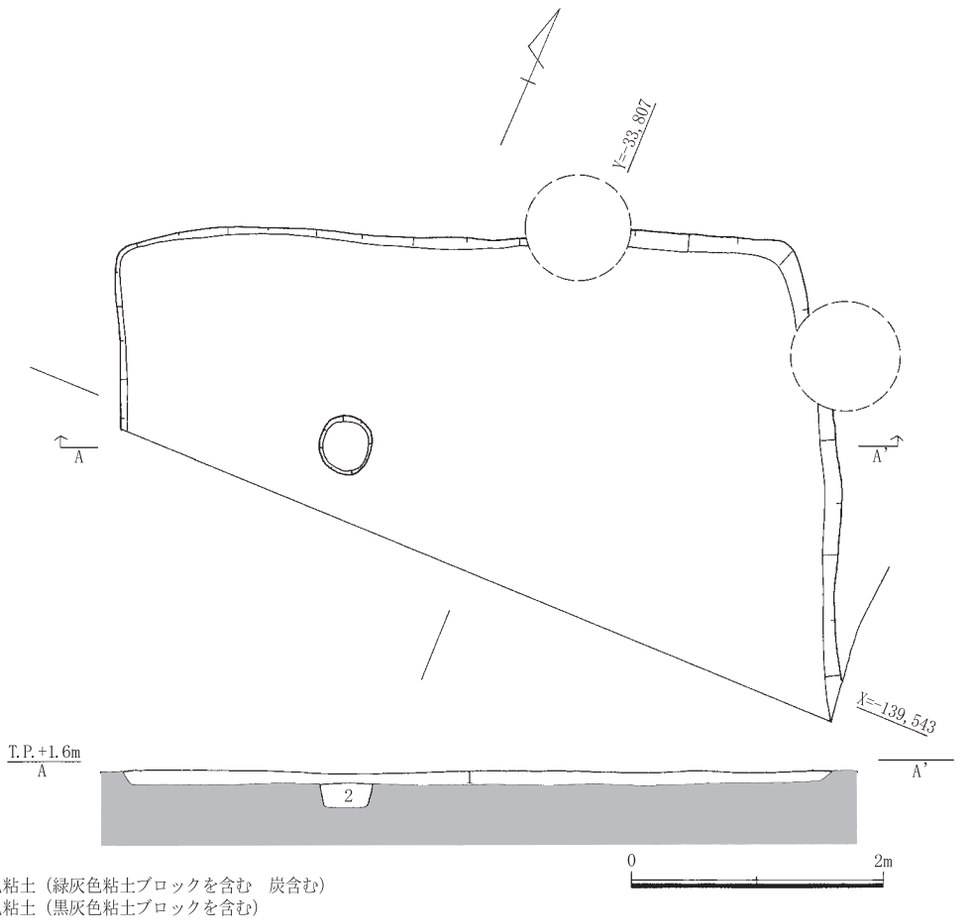
土坑Ｋ２－０４０４７や土坑Ｋ２－０４０５０に切られており、全体の形状は不明である。深さ0.15mを測った。埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。

土坑Ｋ２－０４０５０（第114図、図版33）

Ｋ２調査区の中央部やや東寄りのA19h3地区で検出した土坑である。不定形状の平面形を呈し、長軸5.4m、短軸1.1m、深さ0.14mを測った。埋土は３層で、上より黄灰色砂混じり暗灰色土、暗灰色粘土、暗灰色粘土と黄灰色砂の互層である。埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土



第104図　Ｋ１調査区古墳時代後期遺構面（第９面）全体平面図



第105図　竪穴住居Ｋ１－３（Ｋ１－０９０６０）平面図・土層断面図

した。

土坑Ｋ２－０４０５５（第113図、図版33）

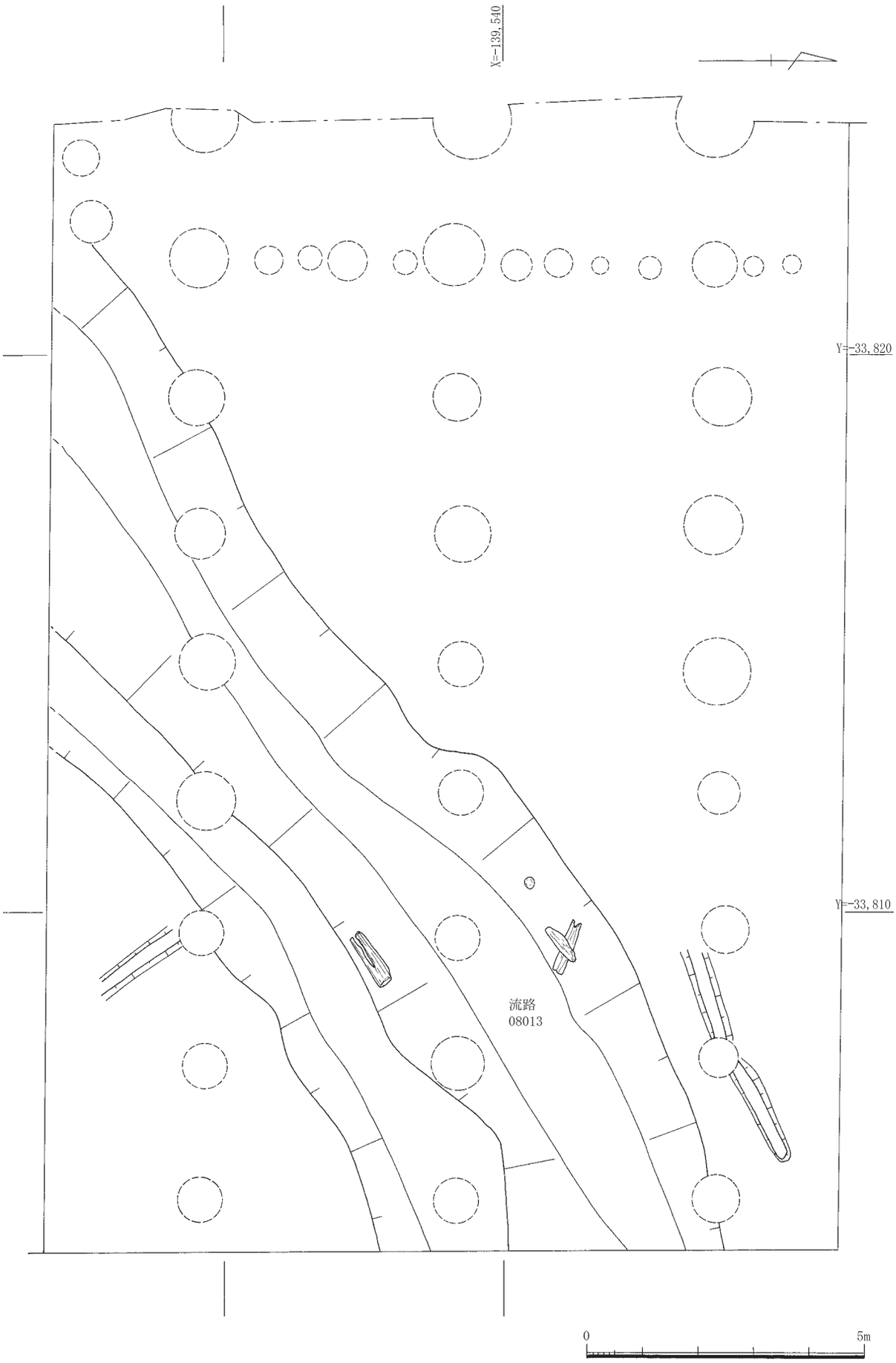
Ｋ２調査区の中央部やや東寄りのA19h3地区で検出した土坑である。やや歪な楕円形状の平面形を呈し、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.26mを測った。埋土は３層で、上より黄灰色砂と暗灰色粘質土の互層、黄灰色砂と灰黒色粘土混じりの暗灰色粘質土、暗灰色土と黄灰色砂の互層である。埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。

土坑Ｋ２－０４０５７（第110図、図版33）

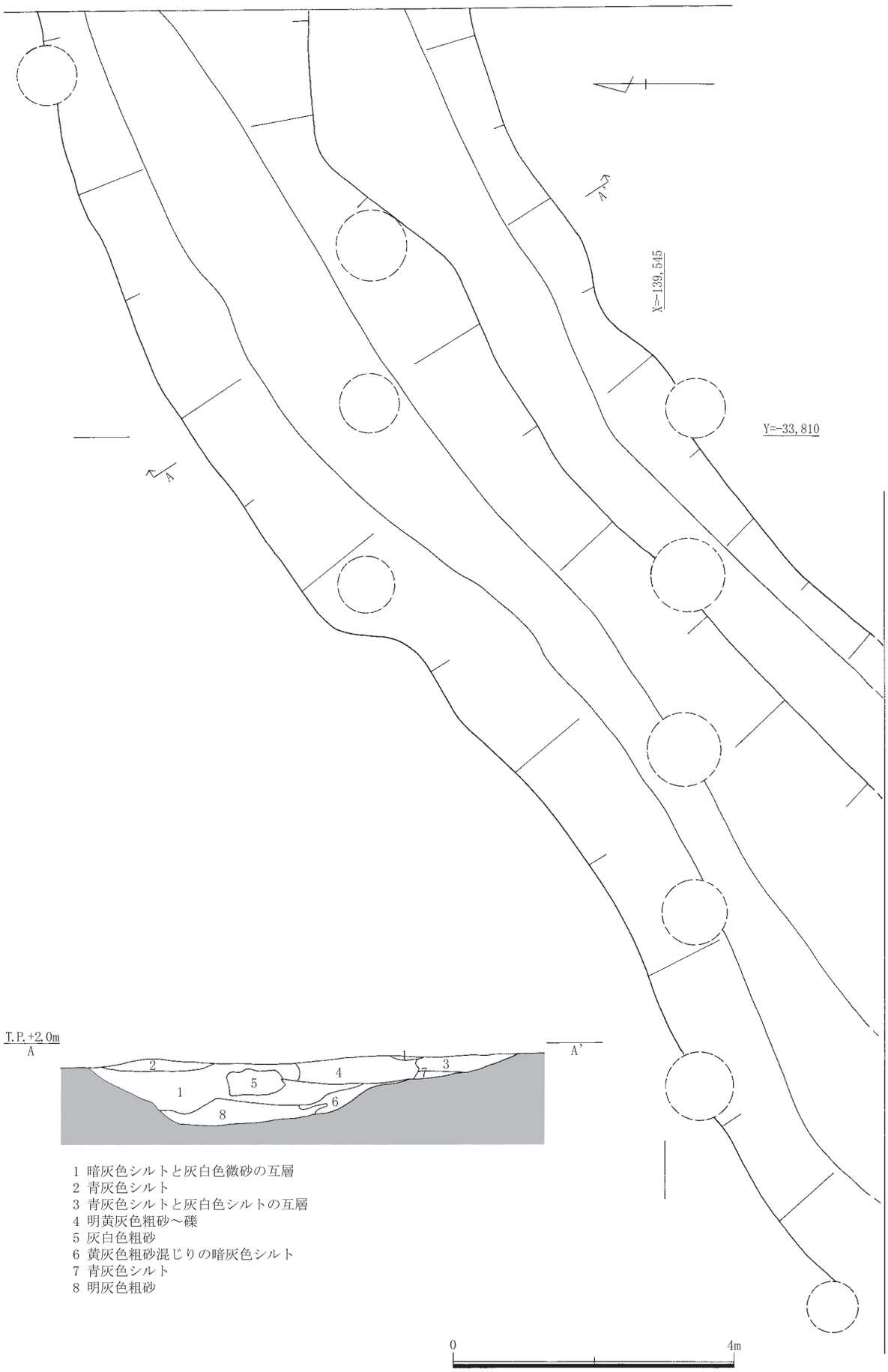
Ｋ２調査区の中央部北端のA19h3・h4地区で検出した土坑である。楕円形状の平面形を呈し、長軸2.3m、短軸2.0m、深さ0.54mを測った。埋土は５層で、上より暗灰色砂混じり粘土、黄灰色砂混じり暗灰色土、暗茶褐色土、緑灰色粘質土混じり暗茶褐色粘土、黄灰色砂混じり褐色土である。埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。

土坑Ｋ２－０４０５９（第110図、図版33）

Ｋ２調査区の中央部北端のA19h4地区で検出した土坑である。不定形状の平面形を呈し、長軸

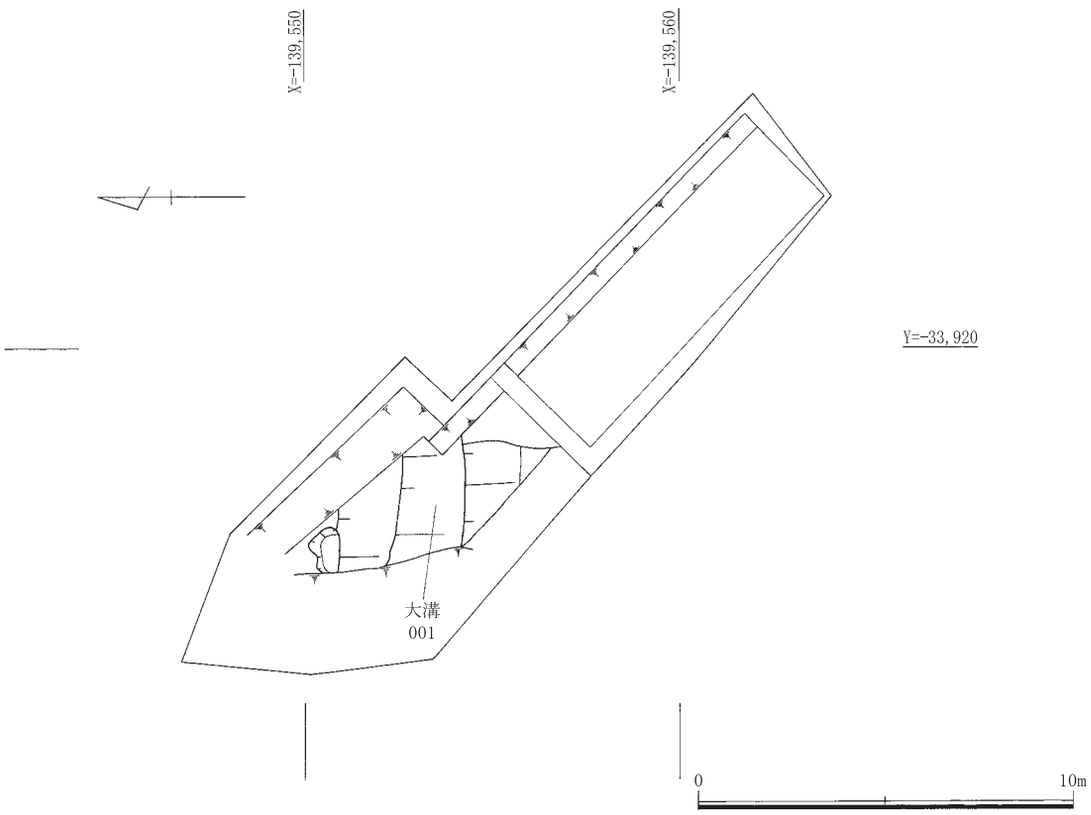


第106図　Ｋ１調査区古墳時代後期～終末期遺構面（第８面）全体平面図



1 暗灰色シルトと灰白色微砂の互層
2 青灰色シルト
3 青灰色シルトと灰白色シルトの互層
4 明黄灰色粗砂～礫
5 灰白色粗砂
6 黄灰色粗砂混じりの暗灰色シルト
7 青灰色シルト
8 明灰色粗砂

第107図　流路Ｋ１－０８０１３平面図・土層断面図



第108図　ＵＫ調査区古墳時代中・後期遺構面（第８面）全体平面図

2.1m以上、短軸2.1m、深さ0.4mを測った。埋土は４層で、上より灰黒色粘質土と暗緑灰色粘土と黄灰色砂の互層、灰黒色粘質土と緑灰色砂の互層、暗灰色粘土である。埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。

第３面

第３面では掘立柱建物、土坑などが検出された。（第111図、図版33）

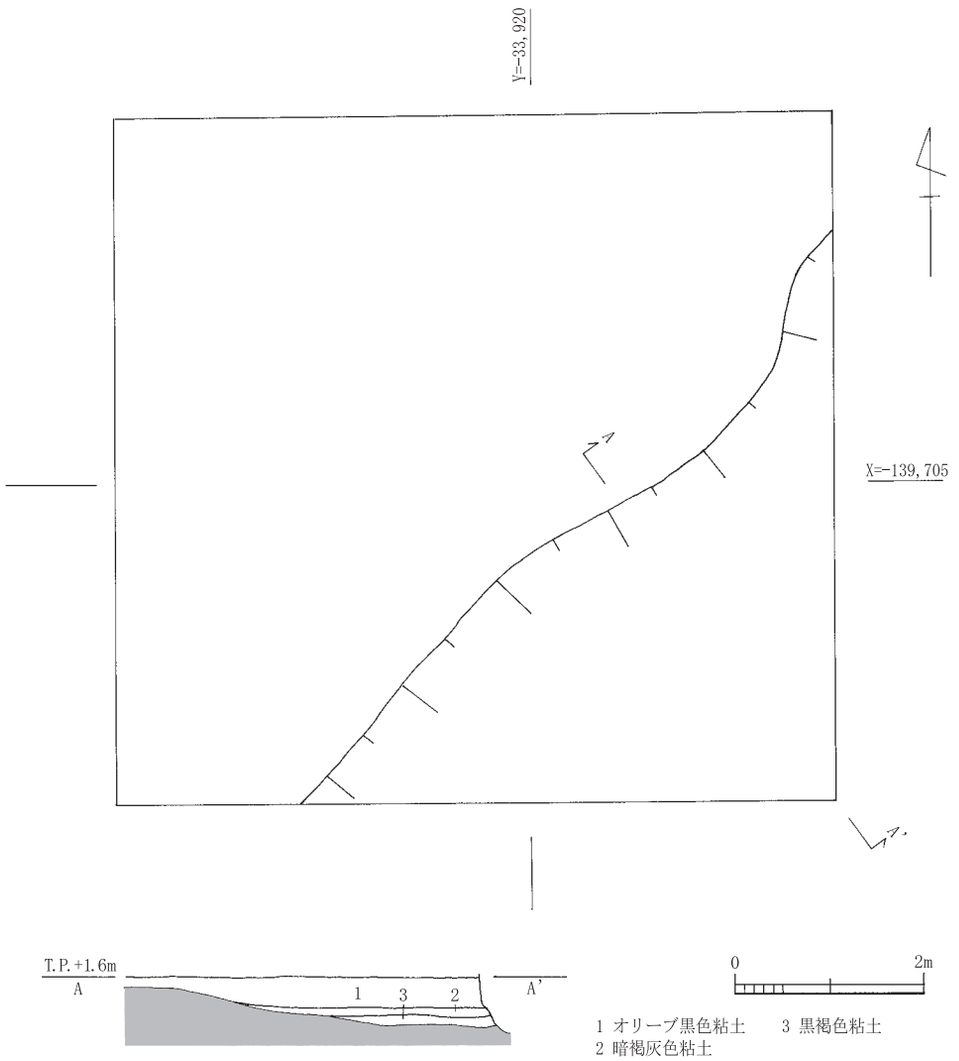
掘立柱建物Ｋ２－０３００１（第115図、図版33）

Ｋ２調査区の西半部のA19g4･h4地区で検出した。２間×１間の掘立柱建物で、柱間は2.1m（２間）×1.7m（１間）を測った。柱穴内から遺物は出土しなかった。

土坑Ｋ２－０３０３９（第116図、図版33）

Ｋ２調査区の西半部のA19h4・h5地区で検出した。長方形状の平面形を呈し、長軸1.8m、短軸1.45m、深さ0.44mを測った。埋土は３層で、上より暗灰色シルトのブロックを含む黄褐色砂質土、暗灰色シルトブロックを含む淡青灰色砂質土、淡青灰色粗砂である。埋土内より土師器、瓦器などが少量出土した。

第２項　Ｋ３調査区



第109図　ＨＴ２調査区大溝ＨＴ２平面図・土層断面図

１．八丁堤道（第117図、図版33）

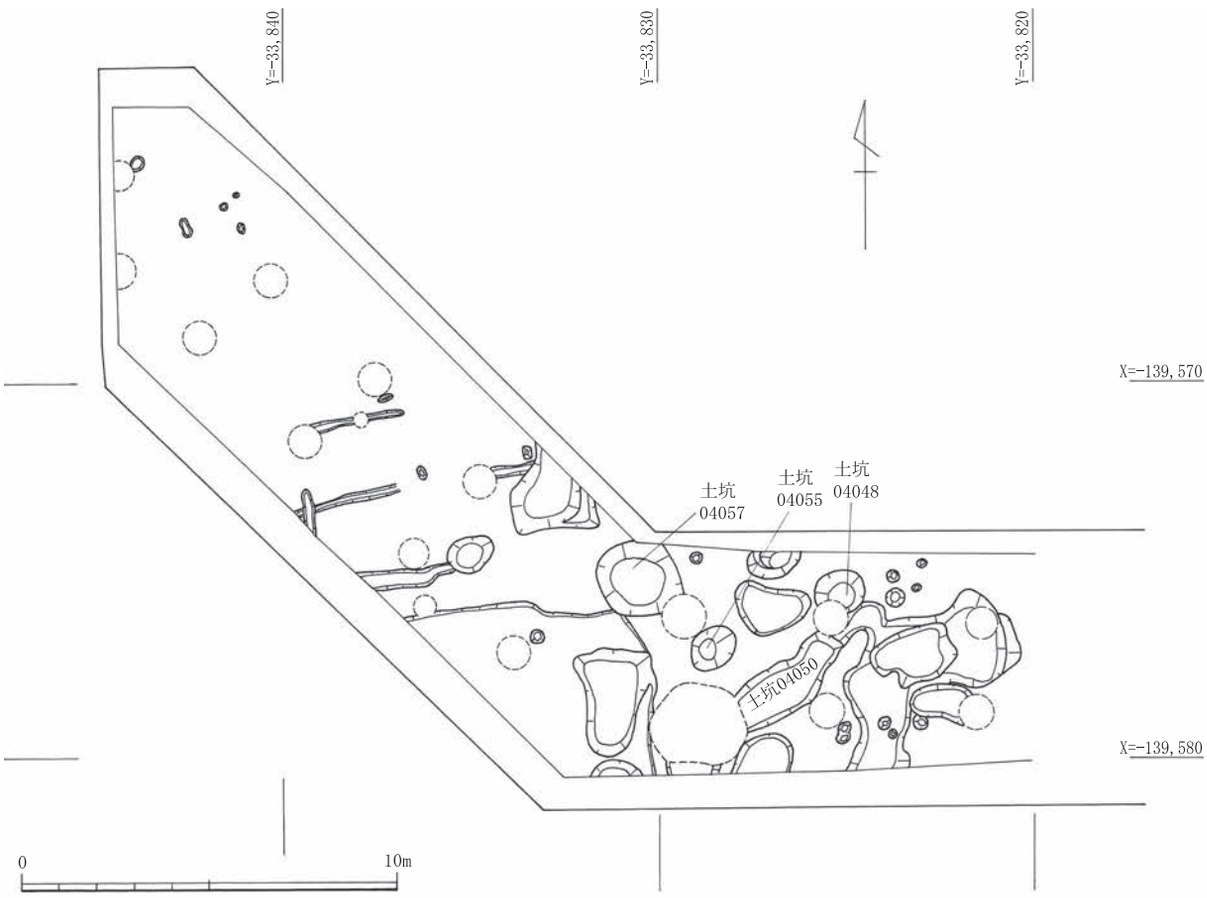
灰色粗砂を含む暗灰色シルトの上面（T. P. 1.6m～2.0m）が第４遺構面で、畦畔が検出されているが、その上面は八丁堤の基底面でもある。隣接するＢ調査区およびＥ調査区の調査結果では八丁堤が築かれたのはこの面からで、平安時代後期が初現であること、そして八丁堤は中世と近世の２度に亘って嵩上げを行い、その都度拡大していることなどが判明している。

Ｋ３調査区では調査区の全域が八丁堤道の範囲内にあたっているため、堤の形状を平面的に捉えることはできなかった。

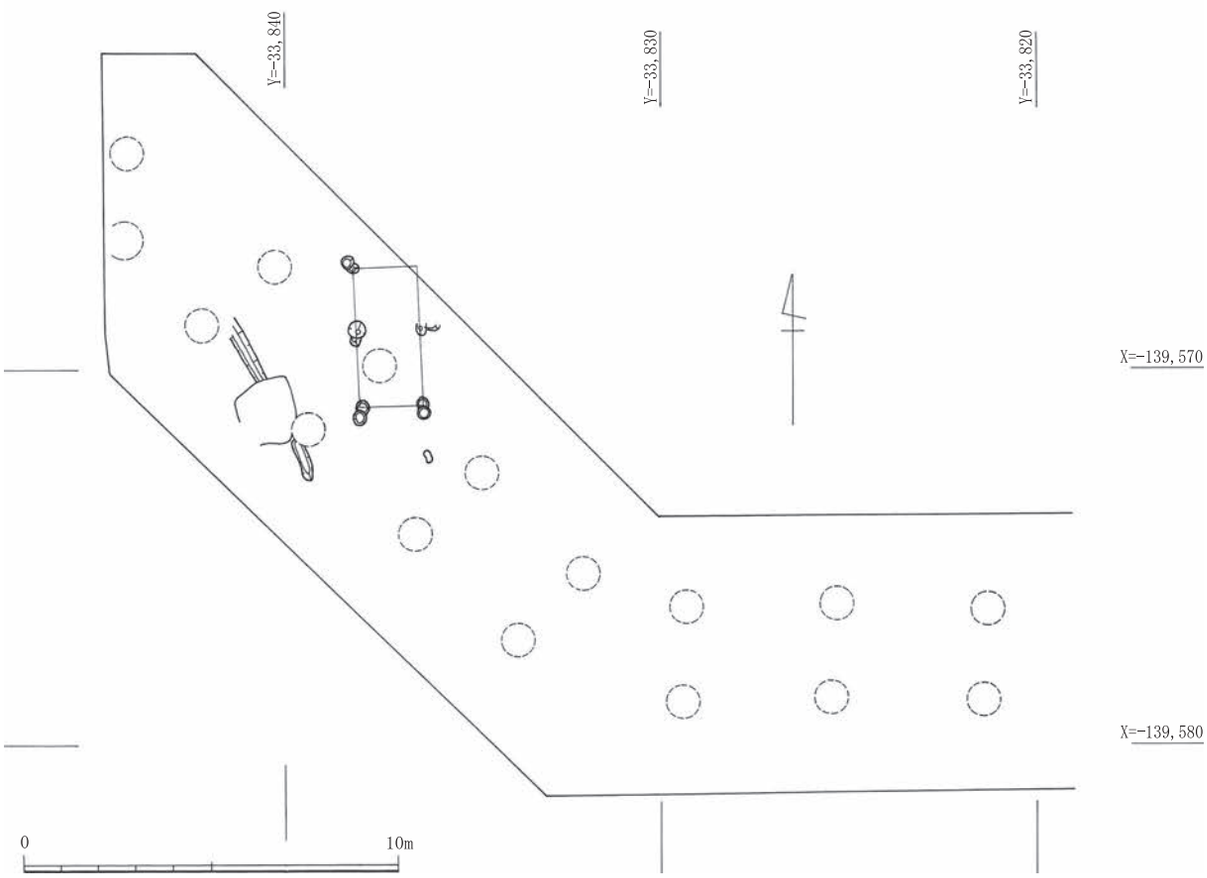
第３項　ＨＴ１調査区

１．平安時代の遺構

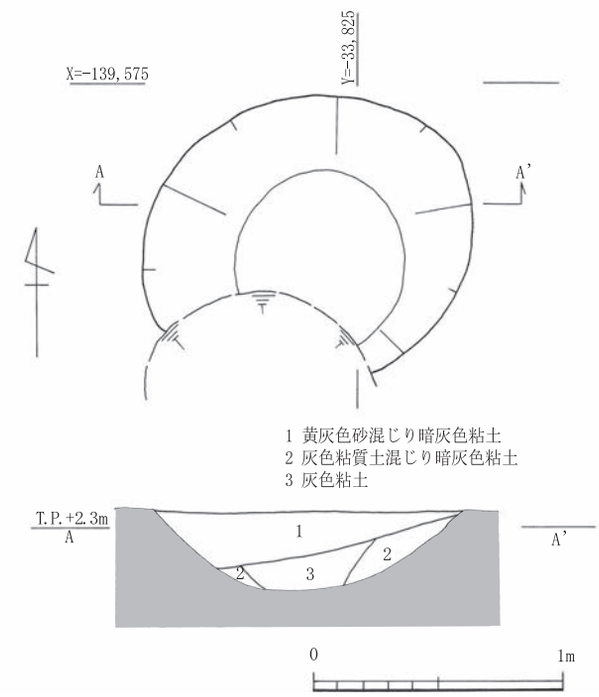
ＨＴ１調査区では、第11層暗灰色砂混じり粘質土上面（T. P. 2.3m付近）の第３面で水田面が検出され、畦畔が検出されている（第118図）。この畦畔は讃良郡条里の施行以前のものと考えられる。



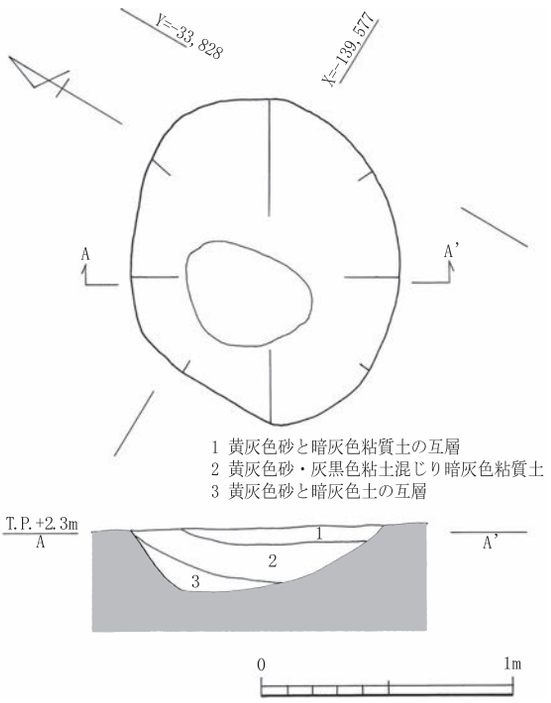
第110図　Ｋ２調査区平安時代後期遺構面（第４面）全体平面図



第111図　Ｋ２調査区鎌倉時代前期遺構面（第３面）全体平面図



第112図　土坑Ｋ２－０４０４８平面図・土層断面図



第113図　土坑Ｋ２－０４０５５平面図・土層断面図

第４項　Ｋ１調査区

１．奈良時代の流路

古墳時代後期の流路Ｋ１－０８０１３とほぼ同じ位置の第７面で流路が検出された。

流路Ｋ１－０７００１

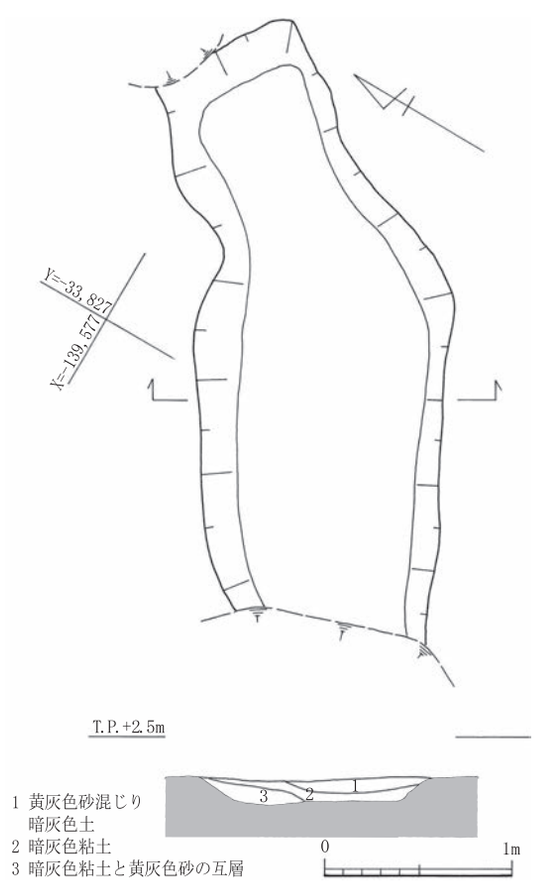
古墳時代後期の流路Ｋ１－０８０１３が大量の砂によって埋没した後、上面の第７面で同位置に浅い流路が認められ、流路を埋没せしめた砂から須恵器が出土した。この須恵器は奈良時代に属するものである。

２．平安時代の流路（第119図）

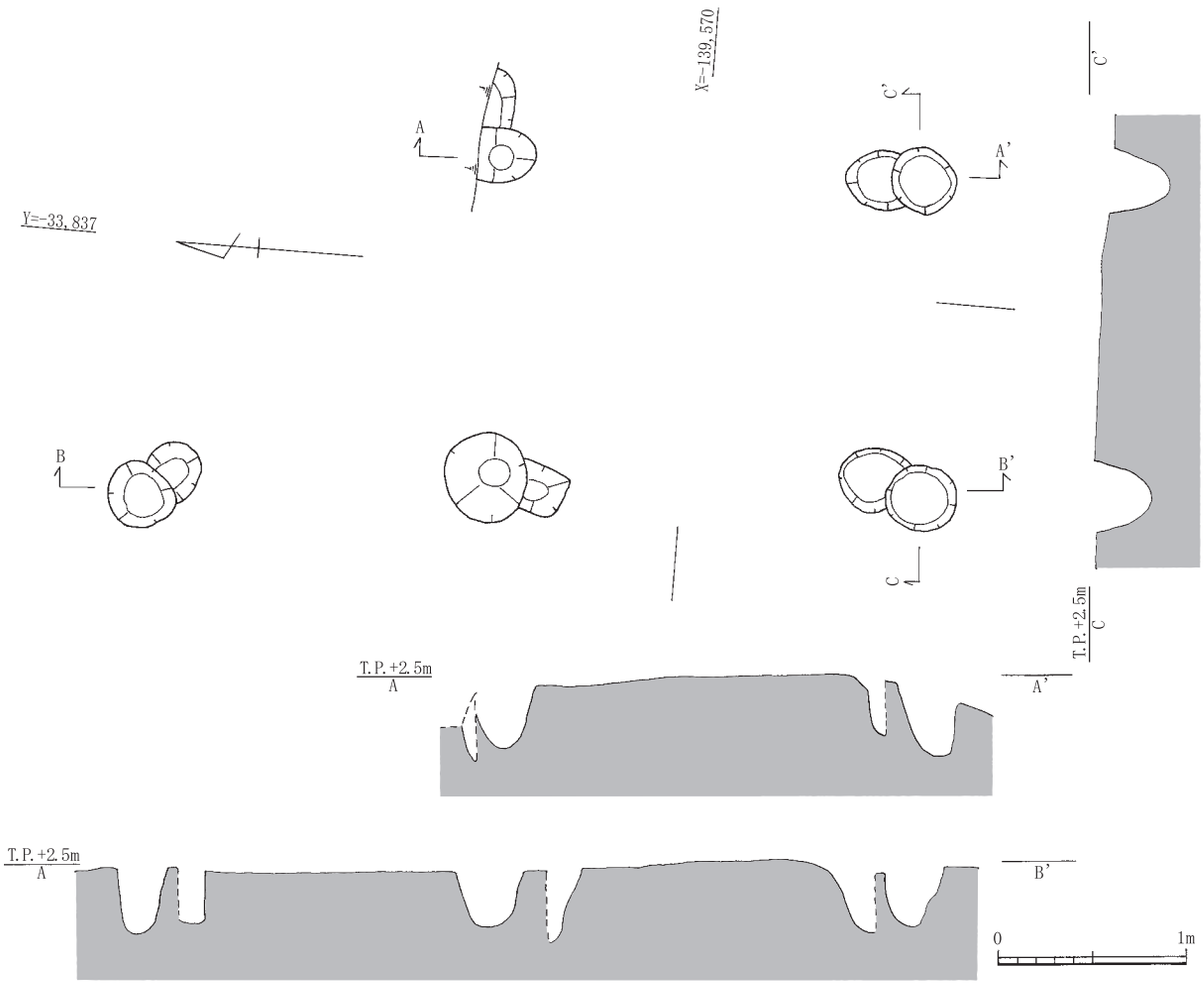
古墳時代後期の流路Ｋ１－０８０１３、奈良時代の流路とほぼ同じ位置の第４面で流路を検出した。

流路Ｋ１－０４０１１（第119図）

Ｋ１調査区の南東半部のA19d1・e1・d2・e2・e3地区で検出した。東北東から西南西方向に流れる流路で、両岸に低い堤を伴う。北側の堤は全域で認められたが、南側は下流側には認められず、その部分

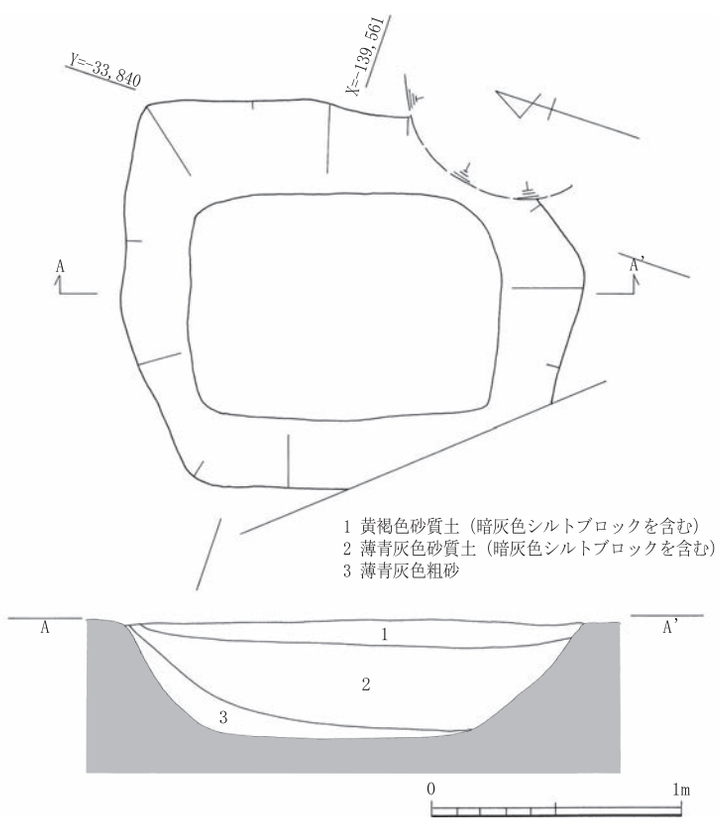


第114図　土坑Ｋ２－０４０５０平面図・土層断面図



第115図　掘立柱建物Ｋ２－０３００１平面図・土層断面図

には大量の杭を打ち込んで補強している（第119図）。最深部で深さ約0.8mを測った。流路を埋没せしめた砂から土師器、黒色土器Ａ類などが少量出土した。



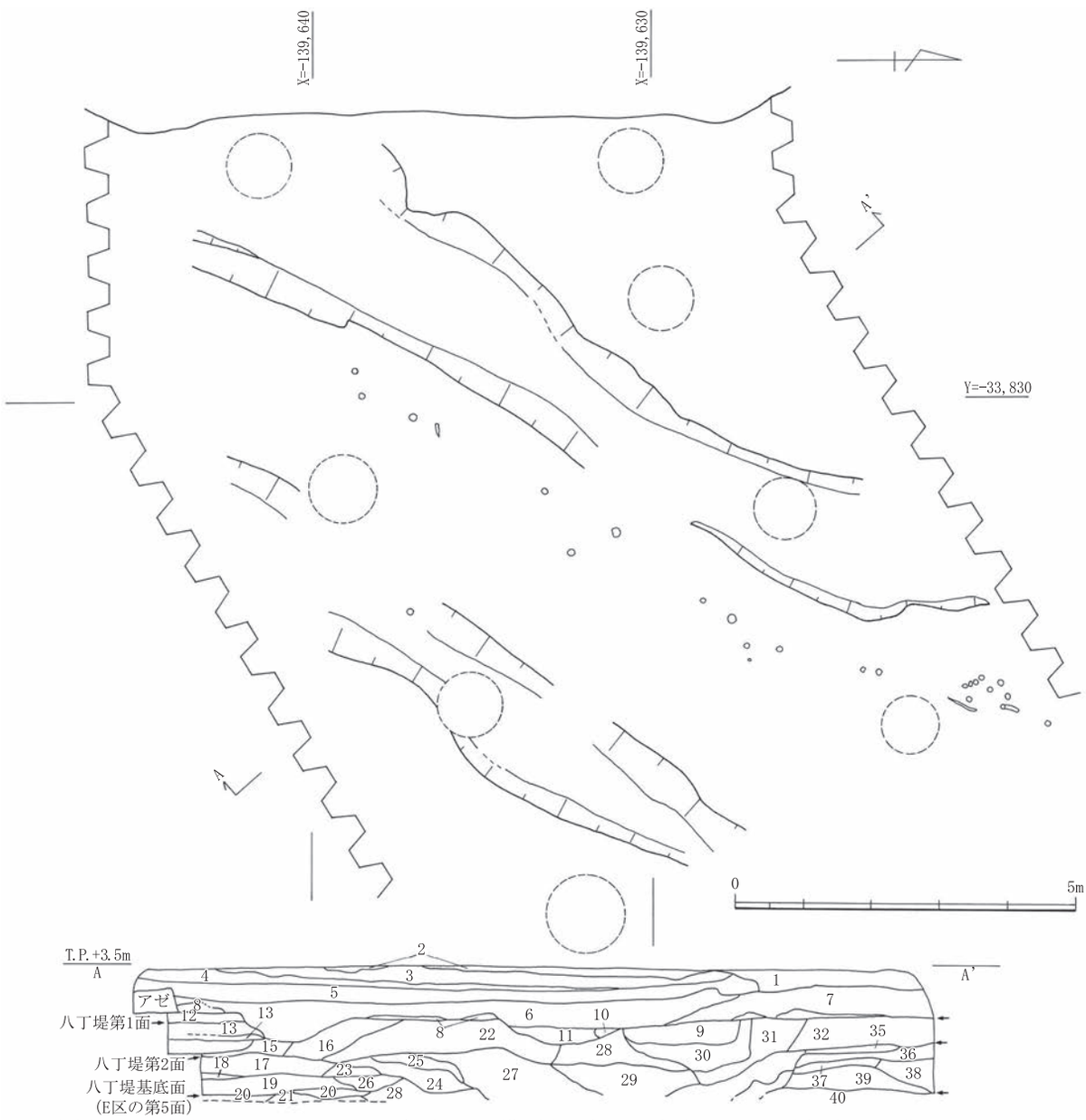
第116図　土坑Ｋ２－０３０３９平面図・土層断面図

第５項　ＵＫ調査区

１．平安時代の遺構

第７層暗青灰色粘質土上面の第３面（T. P. 1.6m付近）で、溝、土坑などの遺構が検出された（第120図）。

調査区の南東半部を平行して東西方向に走る３条の溝と、その北西側で土坑を４基検出した。いず



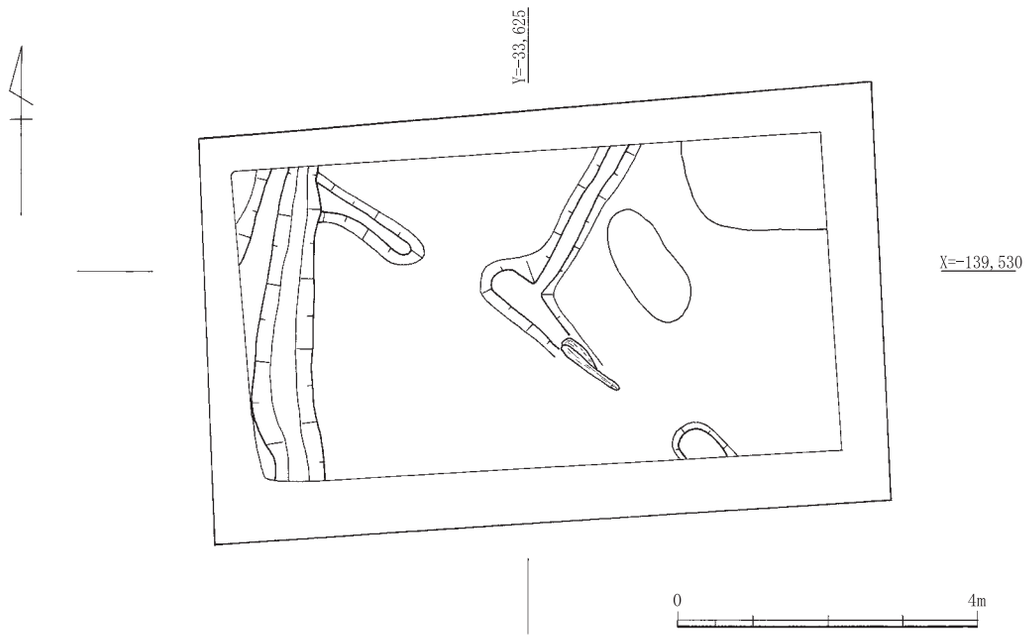
第117図　K３調査区八丁堤道平面図・土層断面図

れも埋土は１層で、暗褐色粘質土である。埋土内から土師器、黒色土器A類などが出土した。

第６項　HK・HM調査区

１．八丁堤道

HK・HM調査区は、E調査区に隣接するHK地区とその南側に隣接するHM地区からなり、工事深度がT. P. 2.5mまででであったため、それ以下については調査の対象にならなかった。



第118図　ＨＴ１調査区平安時代後期遺構面（第３面）全体平面図

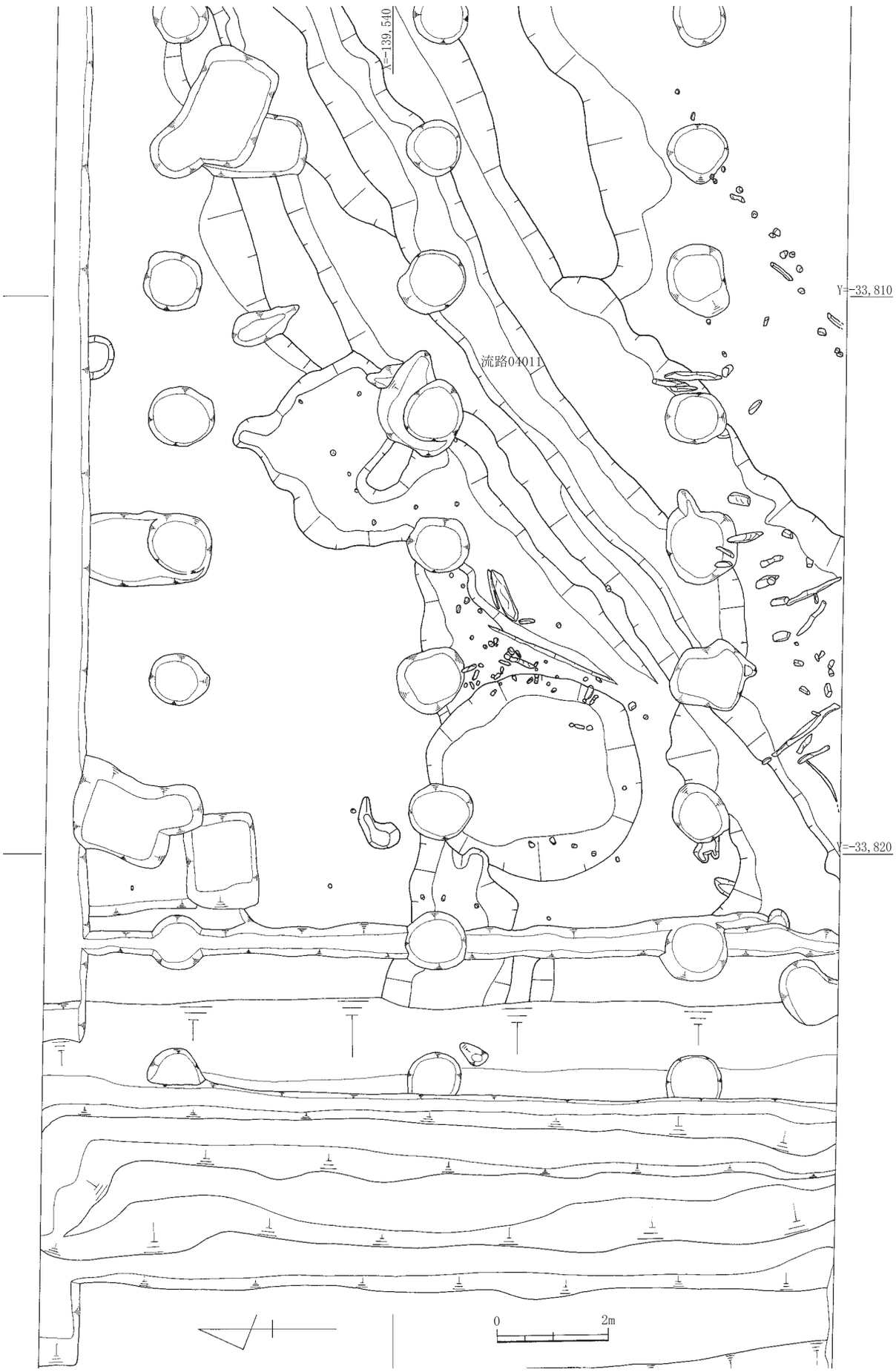
ＨＫ・ＨＭ調査区のうちのＨＭ調査区で検出された。なわて水みらいセンターの本体部分の調査でも、この道に関連する堤防状遺構は確認されている。Ｂ調査区で調査地を東西方向に横断し、Ｅ調査区付近で南西に向かうことが確認されている。堤は砂やシルトを盛り上げて形成され、杭を打ち込んで補強してある。坪境の里道を推定され、平安時代後期以降、同じ位置で徐々に規模を広げながら存在したようである。

ＨＭ調査区で検出された部分は、南西に屈曲しやがて岡部川の方向に向かおうとする部分であり、堤を斜めに横切るように堤の北端から南端にかけての部分が検出された。堤の北端は粘土で被覆し杭を打って補強されているが、堤の内面は砂でのみ形成されていた。堤道の盛砂は、調査区内で確認できる一番新しい段階で厚さ約1.5m、幅約20mになったものと推定される。

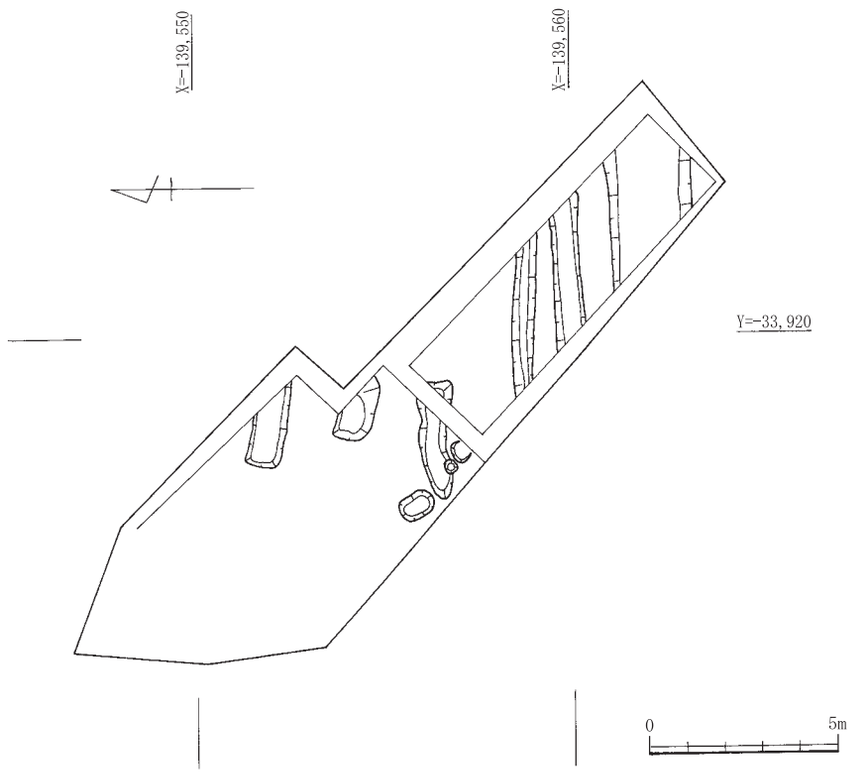
堤形成層の中央部には、堤の基底部にあたる７層の上に盛り上げるかのように、東西方向に粘土が帯状に堆積している。この粘土塊部分は幅4.5m、高さ0.8mであり、堤の構成要素の中では一番古い要素である。この粘土塊を中心にしながら、北へ南へと砂やシルトが補充され、堤が広げられた可能性がある。この堤から出土した遺物はきわめて少量で、それもかなり摩滅した細片ばかりである。過去の調査ではＢ・Ｅ調査区で平安時代後期に比定される層順をベースに八丁堤が確認されている。しかし今回の調査区の検出部分は、中世以降に堤の崩落などにより何度も補充されている可能性が認められた。

第６節　弥生時代前期の遺物

第１項　Ｋ１調査区



第119図　Ｋ１調査区平安時代遺構面（第４面）全体平面図



第120図　ＵＫ調査区平安時代遺構面（第３面）全体平面図

流路Ｋ１－１５００１出土遺物（第121図１～９、図版34）

埋土内から縄文土器（突帯文土器）、弥生土器などが出土した。

121－１～６は突帯文土器で、いずれも口縁部のみの小片のため、全体の形状は不明である。口縁端部付近の外面に、刻目文を施した貼付突帯を付す。

121－７～９は弥生土器で、壺（7）、鉢（8）、甕（9）などがある。

121－７は短く外反する口縁部で、頸部外面に上下端に沈線を巡らすことで形成した突帯が認められる。121－８は口縁部付近の小片で、ごく短く外反して終わる口縁を呈する。外面に沈線が１条認められる。121－９は甕の底部および体部下半の破片と思われるが、小片のため詳細は不明である。

第７節　弥生時代中期の遺物

第１項　Ｋ１調査区

竪穴住居Ｋ１－１２１２２出土遺物（第121図10～14、図版34）

竪穴住居Ｋ１－１２１２２では、覆土および炉穴内から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは５点である。壺、甕などがある。

121－10は広口壺の口縁部と思われる。厚手で内外ともにヘラミガキしており、また口縁端部下端に刻目文を施すなど、古手の要素が認められる。

121－11 ～ 14は甕で、比較的大きく外反する口縁部を呈し、最大径が口径となるもの（121－11）と、低く短く外側に折れて終わる口縁部で、最大径が体部にあるもの（121－12）とがある。121－13・14はともに底部の小片のため、詳細は不明である。

土坑Ｋ１－１２１０５出土遺物（第121図15）

土坑Ｋ１－１２１０５では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

121－15は壺で、体部上端から口縁部を欠損している。胴の張った腰高の体部で、上半外面に櫛描の波状文が１列認められる。

土坑Ｋ１－１２０１４出土遺物（第121図16 ～ 19）

土坑Ｋ１－１２０１４では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは４点である。

121－16 ～ 18は甕で、短く外反する口縁部を呈し、最大径が体部にあるもの（121－16）と、低く外側に折れて終わる口縁部で、口径が最大径となるもの（121－17）とがある。

121－18・19は体部中位以下の破片で、そのうち121－18には、底部に焼成後に穿孔された円孔が認められる。甑として使用されていたものと思われる。

溝Ｋ１－１２００８出土遺物（第121図20 ～ 22、図版35）

溝Ｋ１－１２００８では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは３点である。壺、甕などがある。

121－20は長頸の広口壺で、頸部以上の破片である。頸部外面に10条単位の櫛描の直線文が３段、口縁端部外面に波状文が認められる。121－21は壺の体部上半の破片で、外面に櫛描きの流水文、刺突文、直線文などの文様が施される。121－22は甕で、底部および体部下端の破片である。

溝Ｋ１－１２００９出土遺物（第121図23）

溝Ｋ１－１２００９では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

121－23は鉢で、口縁部の小片である。外上方へまっすぐ開くもので、端部を内側に極軽く摘み出して終わる。端部外面に刻目文を施す。

溝Ｋ１－１２０１５出土遺物（第121図24）

溝Ｋ１－１２０１５では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

121－24は甕で、体部中位以上の破片である。大きく外反する口縁部で、最大径は口径にある。

ピットＫ１－１２０５０出土遺物（第125図2、図版34）

ピットＫ１－１２０５０では、内部から磨製石器が１点出土した。

125－2は打製石器で、有頸石鏃である。長さ5.3㎝、幅2.3㎝、厚み１㎝を測った。

竪穴住居Ｋ１－１１０３４出土遺物（第122図１～４、図版35）

竪穴住居Ｋ１－１１０３４では、覆土内から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは４点である。壺、甕などがある。

122－１は長頸の広口壺で、頸部以上の破片である。頸部外面に７条単位の櫛描の直線文が、口縁端部上端に刻目文が認められる。122－２は壺の底部で、外面中央部に凹みが認められる。122－３は小型の甕で、口縁部のみの小片である。口縁の立ち上がりは外上方へ開く。122－４は大型の甕で、口縁部および体部上端付近の破片である。口縁の立ち上がりは短く外上方へ外反する。

竪穴住居Ｋ１－１１０６０出土遺物（第122図５、図版35）

穴住居Ｋ１－１１０６０では、覆土内から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

122－５は甕で、短く外反する口縁部と比較的肩の張る体部からなるもので、最大径は体部上半にある。

方形周溝墓Ｋ１－１１０１０出土遺物（第122図６・７、図版35）

方形周溝墓Ｋ１－１１０１０では、周溝内から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

122－６・７は壺で、そのうち122－６は口縁部の小片である。端部が上下に肥厚して外側に面をなすもので、外面に斜格子状の刻目文を施す。122－７は底部から体部下端の小片で、体部の立ち上がりは比較的高い。

土坑Ｋ１－１１０３１出土遺物（第122図8～10、第126図１、図版35、図版37）

土坑Ｋ１－１１０３１では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは３点である。壺、甕、甕蓋などがある。

122－８は壺で、底部および体部下端付近の小片である。小さく低い底部から体部が低く外方に開く。122－９は甕で、口縁部および体部上端付近の破片である。口縁の立ち上がりは短く外反して終わる。端部外面に刻目文を施す。122－10は甕蓋で、底部および天井部下端の破片である。

これらのほかに木製品が１点出土している。

126－１は直柄鍬で、刃先部分の破片と思われる。柄を差し込むための円孔が認められる。現存長21.5㎝、現存幅6.3㎝、厚み1.4㎝を測った。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

土坑Ｋ１－１１０５１出土遺物（第122図11～16）

土坑Ｋ１－１１０５１では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは６点である。壺、水差形土器、甕などがある。

122－11・12は壺で、そのうち122－11は複合口縁を呈するもので、頸部以上が完存する。頸部はわずかに外反しつつ直立気味にのび、口縁部はごく短く外方へ屈曲したあと、わずかに内傾して上方へのびる。端部は上端に面を持つ。上下端の外面に刻目文と、その間に波状文が認められる。122－12は長頸の広口壺で、頸部以上が完存する。頸部から口縁部にかけて大きく外反し、口縁端部は緩い波形状を呈する。122－13は水差形土器で、把手部の下側の一部を欠損するが、全体の形状が把握できた。外面の口縁部から体部上半にかけてに、上から２段の波状文、４段の櫛描直線文、波状文と直線文が交互に２段認められた。

122－14～16は甕で、短く外反する口縁部と張り出す体部からなる。最大径が体部中位にあるもの（122－14）、体部中位から上がほぼ直立し、口縁部が短く外反するもので、口径が最大径となるもの（122－15）などがある。

土坑Ｋ１－１１０５２出土遺物（第123図１～８、第126図３、図版36、図版37）

土坑Ｋ１－１１０５２では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは８点である。壺、甕、鉢などがある。

123－１は長頸壺で、頸部以上の破片である。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部はごく短く外側に折れて終わる。

123－２～６は甕で、体部上半が内傾するもの（123－２・５）と、比較的丸みを持った体部を呈するもの（123－３・４・６）とがある。

123－７・８は鉢で、体部が丸みを持たず、わずかに内弯する程度で外上方へ立ち上がるもの（123－７）と、体部が丸みを持ち、内弯しつつ低く外上方へ立ち上がるもの（123－８）とがある。

これらのほかに木製品が１点出土している。

126－３は二股鍬で、一方の刃先部分の破片と思われる。現存長16.1㎝、最大幅5.8㎝、厚み1.9㎝を測った。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

土坑Ｋ１－１１０５８出土遺物（第123図９～17、第125図１、図版34、図版36）

土坑Ｋ１－１１０５８では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは９点である。甕蓋、甕、台付鉢などがある。

123－９は甕蓋で、底部のみの小片である。天井部は欠損しているが、残存部の形状からみて比較的低いものと思われる。底端部の外側に面をなし、その下端には右上から左下方向の刻目文が認められる。

123－10～16は甕で、小型（123－10～12）と大型（123－13～15）のものに区別できる。そ

して小型のものには、口縁が水平方向に短く折れて終わり体部が丸みを持つもの（123－10・11）と、口縁が短く外上方に立ち上がり体部上半が直立するもの（123－12）とがある。123－11の口縁端部外面には波状文が認められる。また大型のものには、口縁がごく短く外反するもの（123－13・14）と、口縁が水平方向に短く折れて終わるもの（123－15）とがある。

123－17は台付鉢で、半球形の体部とごく短く外反して終わる口縁部からなる鉢に、低い脚部と小径の底部からなる台（脚）が付く。

これらのほかに打製石器が１点出土している。

125－１は打製石器で、無頚石鏃である。長さ3.5㎝、幅1.5㎝、厚み0.35㎝を測った。

土坑Ｋ１－１１０５９出土遺物（第123図18～22）

土坑Ｋ１－１１０５９では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは５点である。壺、甕蓋、甕などがある。

123－18は壺で、頸部以上の破片である。わずかに内傾する頸部で、口縁部は外上方にまっすぐ立ち上がり終わる。

123－19は甕蓋で、底部および天井部下半の破片である。

123－20～22は甕で、そのうち123－20は体部上半以上の破片である。丸みを持った体部で口縁部はごく短く外反して終わる。123－21～22は底部のみの破片である。

土坑Ｋ１－１１０２７出土遺物（第123図23）

土坑Ｋ１－１１０２７では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

123－23は小型の甕で、口縁部がごく短く外上方に折れ、体部には張りが認められない。最大径は口径にある。

土坑Ｋ１－１１０５４出土遺物（第123図24）

土坑Ｋ１－１１０５４では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

123－24は甕で、体部上半以上の破片である。丸みを持った体部で、口縁部はごく短く外上方に外反して終わる。最大径は体部中位にある。

土坑Ｋ１－１１０４４出土遺物（第123図25）

土坑Ｋ１－１１０４４では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

123－25は甕で、底部および体部下半の破片である。

溝Ｋ１－１１０１３出土遺物（第124図１～５、第125図７、第126図２・５、図版34、図版37）

溝Ｋ１－１１０１３では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは５点である。壺、甕などがある。

124－１は壺で、口縁部の小片である。大きく外反して外側に開く口縁で、端部が上下に肥厚する。端部外面上端に刻目文、内面上端に櫛描円弧文が施される。

124－２～５は甕で、いずれも口縁部および体部上半の破片である。そのうち124－２は大型で、口縁部がごく短く外上方に折れて終わる。端部は外側に面を成し、上下に肥厚する。外面の下端に刻目文を施す。124－３～５は比較的小型で、口縁部が短く外反しつつ外上方に立ち上がるもの（124－３・４）と、ごく短く外反して終わるもの（124－５）がある。

これらのほかに磨製石器が１点出土した。

125－５は石包丁の破片である。残存長9.7㎝、幅3.9㎝、厚み0.46㎝を測った。

南壁付近の楕円形状の深まりから木製品が出土した。ここではそのうち２点を図示した。

126－２は棒状木製品で、径2.9㎝、長さ12.7㎝を測った。樹種はブナ科シイ属である。126－５は匙の未成品で、長さ29.2㎝、最大幅5.1㎝、最大厚2.7㎝を測った。樹種はクワ科クワ属である。

溝Ｋ１－１１０４７出土遺物（第124図６）

溝Ｋ１－１１０４７では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

124－６は壺で、広口壺の口縁部である。端部が下方に肥厚し、外面に面を成す。外面に波状文が施される。

溝Ｋ１－１１００８出土遺物（第124図７・８）

溝Ｋ１－１１００８では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

124－７は壺で、長頸壺の体部上半の破片である。外面に櫛描直線文が６段認められる。

124－８は甕で、口縁部のみの小片である。

溝Ｋ１－１１００９出土遺物（第124図９）

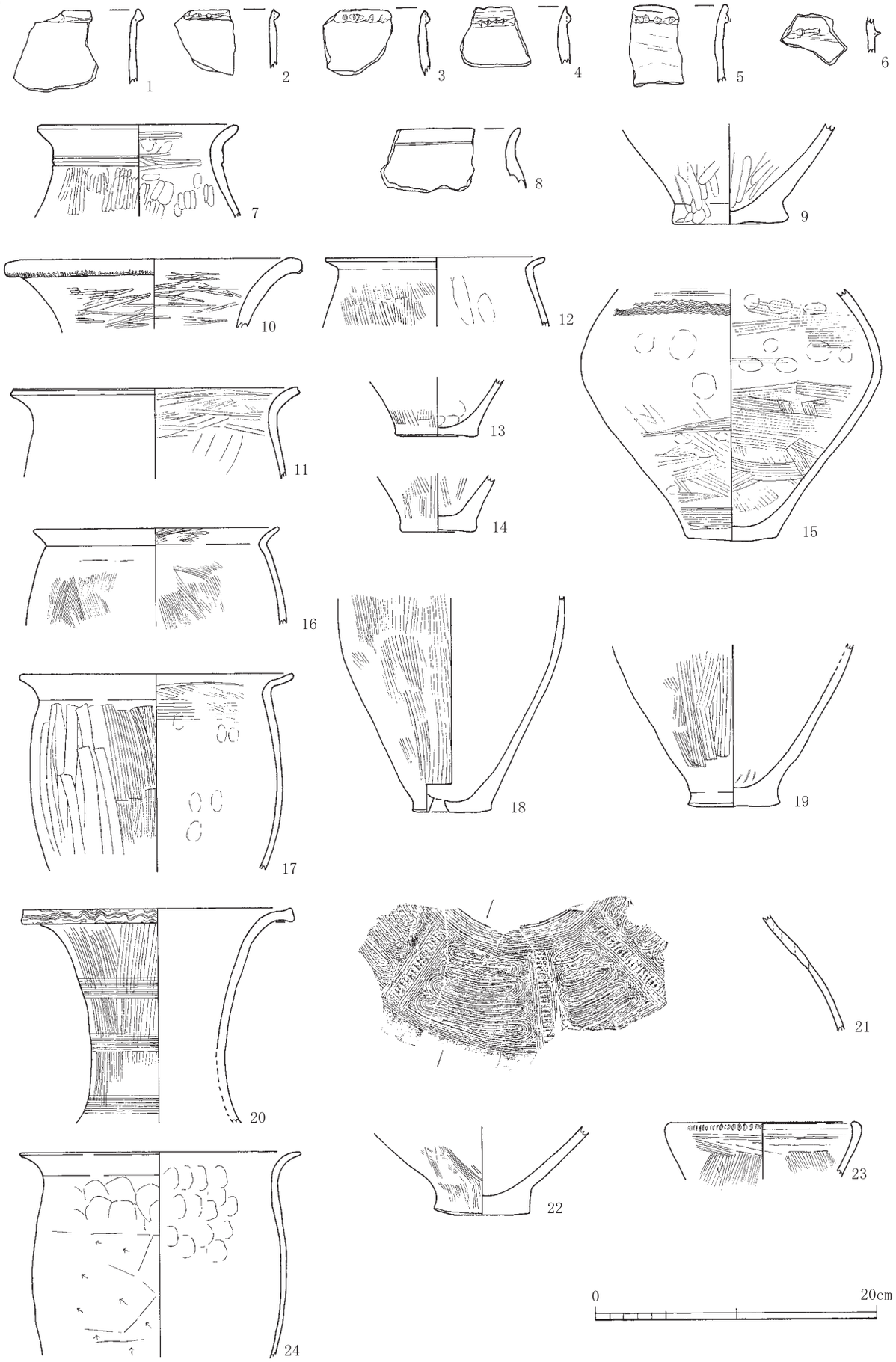
溝Ｋ１－１１００９では、内部から弥生土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

124－９は甑で、底部のみの破片である。底部中央に円形の蒸気孔が認められる。

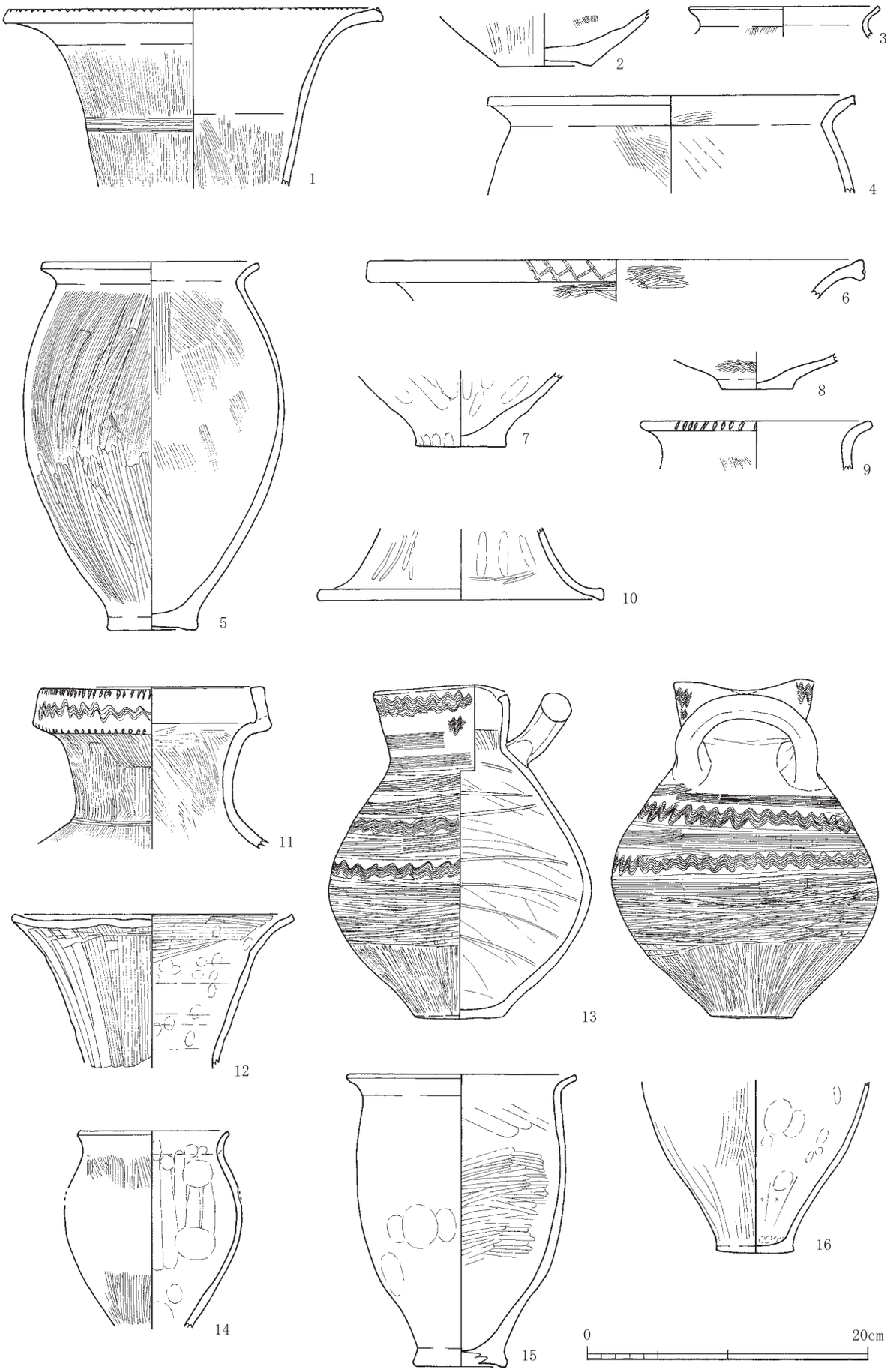
溝Ｋ１－１１０５６出土遺物（第125図５、図版36）

溝Ｋ１－１１０５６では、内部から磨製石器が出土した。

125－４は磨製石器で、石斧である。長さ7.5㎝、幅5.9㎝、厚み1.65㎝を測った。

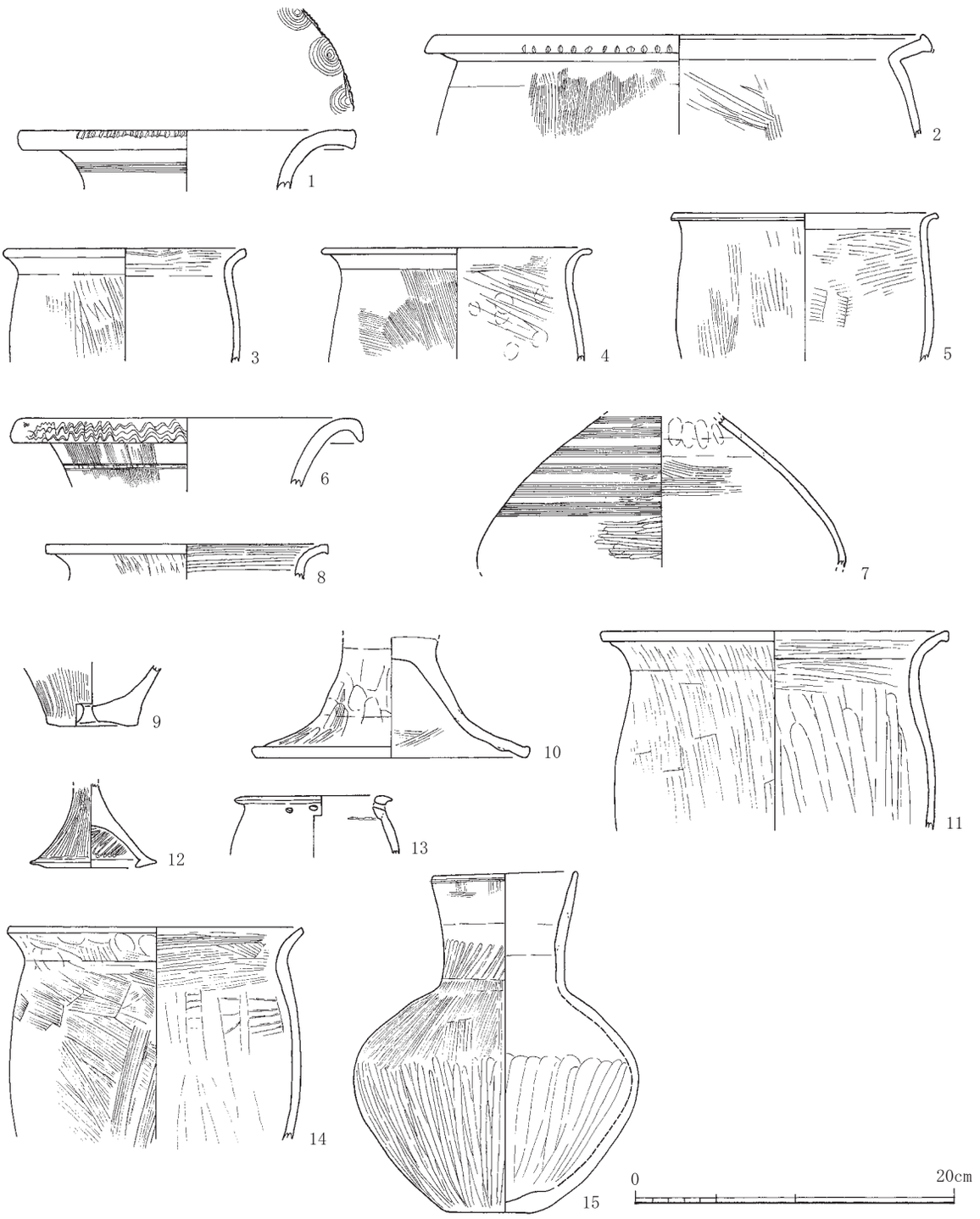


第121図　弥生時代出土遺物（1）　K 1 調査区

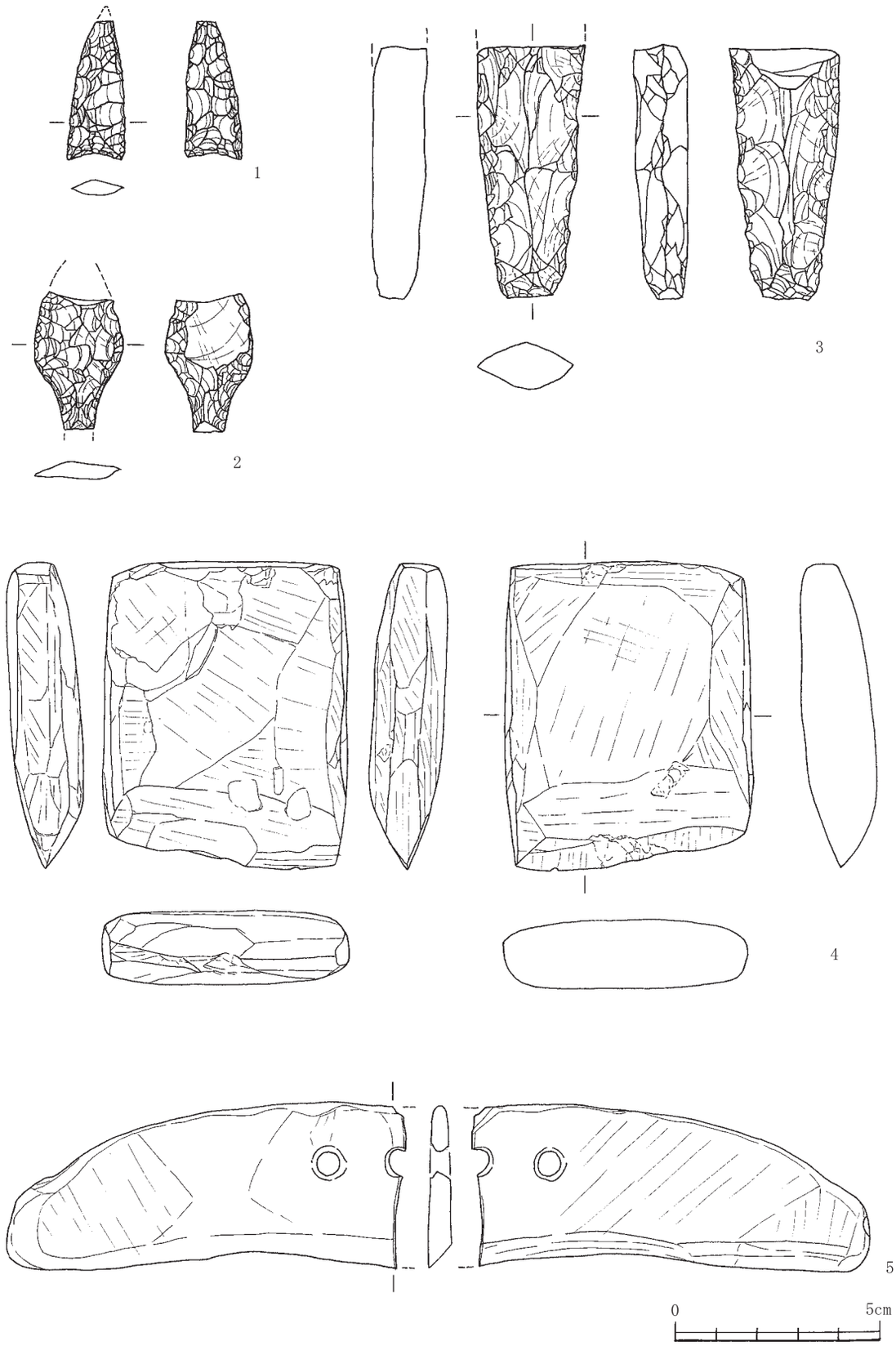


第122図　弥生時代出土遺物（２）　Ｋ１調査区

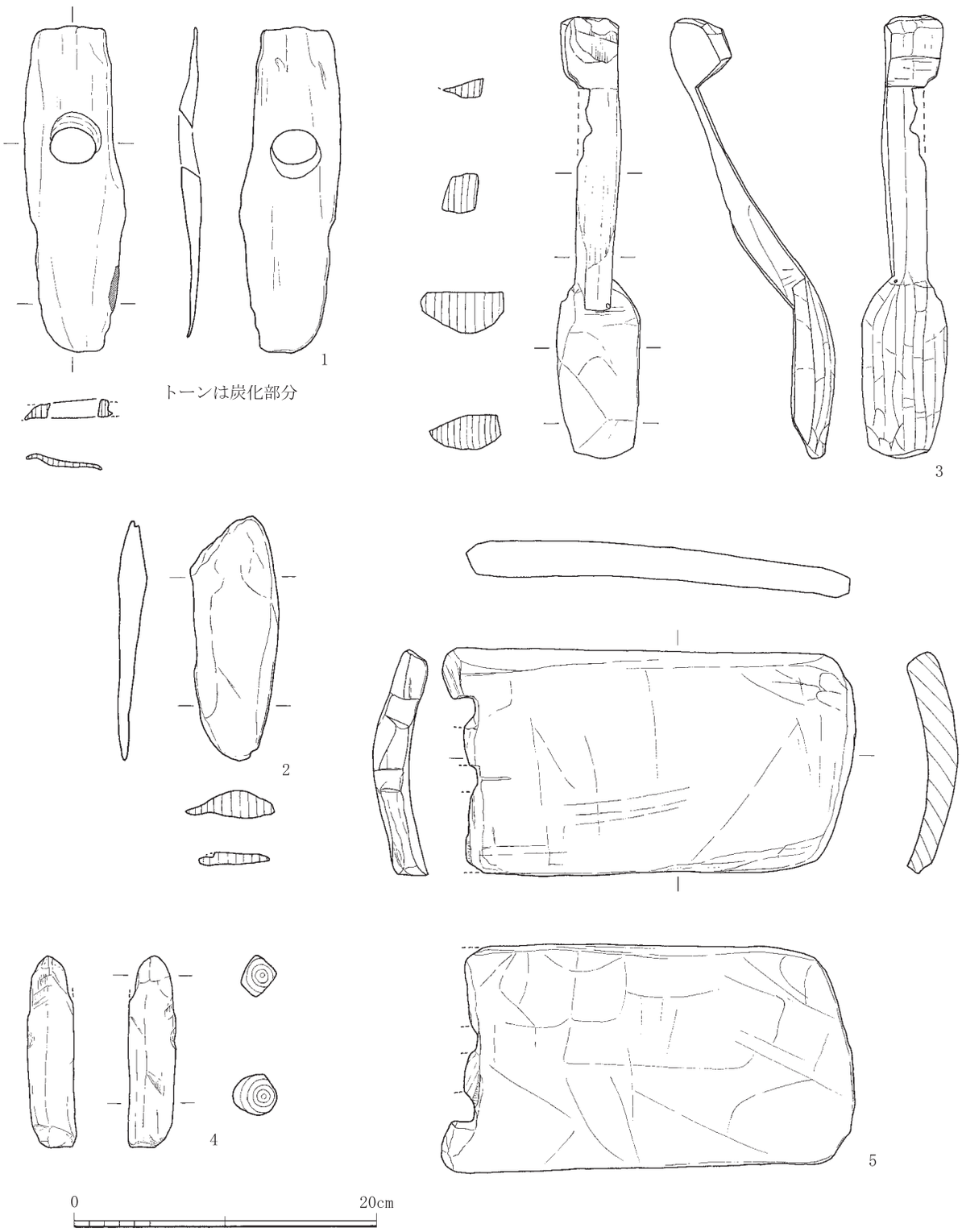
第123図　弥生時代出土遺物（３）　Ｋ１調査区



第124図　弥生時代出土遺物（４）　Ｋ１調査区



第125図　弥生時代出土遺物（５）　Ｋ１調査区



第126図　弥生時代出土遺物（６）　Ｋ１調査区

包含層出土遺物（第124図10 ～ 15、第125図３、図版34、図版36）

第12面上の包含層と第11面上の包含層から弥生土器が出土している。そのうち図示し得たのは６点である。甕蓋、甕、壺などがある。

124－10・11は甕蓋である。そのうち124－10は比較的大型の蓋で、平坦な天井部から外下方に開き、口縁部付近で大きく外側に屈曲して終わる。124－11は小型で、尖った天井部から外下方に開いて終わる。

124－11 ～ 14は甕で、小型（13）と大型（14・15）がある。13の体部上端には、蓋を括り付けるための円孔が２個一対で２箇所認められる。

124－15は壺で、完形品である。中位で大きく張り出す体部に、直立する口縁部が付くものである。

包含層からは、土器のほかに石器が１点出土した。

125－３は打製石器である。石槍で、先端部を欠損している。残存長6.2㎝、幅2.6㎝、厚み1.3㎝を測った。

第８節　古墳時代中期～後期の遺物

第１項　Ｋ４調査区

１．南西居住域

溝Ｋ４－０９００２出土遺物（第127図6）

須恵器、土師器などが少量出土したが、そのうち図示し得たのは１点である。

127－６は須恵器で、甕の口縁部である。

２．西居住域と南西居住域を区画する溝

区画溝Ｋ４－０９００３出土遺物（第127図７～９・11 ～ 13、図版38）

須恵器、土師器などが比較的まとまった量出土したが、そのうち図示し得たのは６点である。

127－７・８・12・13は須恵器で、坏身（127－７）、蓋（127－８）、甕（127－12・13）などがある。

127－９・11は土師器で、坏（127－９）、甕（127－11）などがある。

区画溝Ｋ４－０９００１出土遺物（第127図１～５、図版38）

埋土内より須恵器、土師器、円筒埴輪などの遺物が比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは５点である。

127－１は須恵器で、坏蓋である。

127－２・３は土師器で、ともに甕である。

127－４・５は円筒埴輪で、そのうち５は、２段目以上の破片である。円孔の一部と最上段のタガが認められる。タガは低い台形状の断面を呈するもので、外面にタテハケが顕著に残る。内面はヘラ削りによる。

3. Ｋ４調査区包含層出土遺物（第127図14～22）

Ｋ４調査区の包含層からは、須恵器、土師器などが少量出土したが、そのうち図示し得たのは９点である。

127－14～16・19～22は須恵器で、坏蓋（127－14）、坏身（127－15・16・20）、高坏蓋（127－19）、甕（127－21・22）、などがある。

127－17・18は土師器で、ともに甕の破片である。

第２項　Ｋ２調査区

１．北東居住域

竪穴住居Ｋ２－１出土遺物（第129図１）

竪穴住居Ｋ２－１からは、覆土およびカマド内から須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

129－１は土師器で、甕である。

竪穴住居Ｋ２－２出土遺物（第128－図１～22、図版39、図版40）

竪穴住居Ｋ２－２からは、覆土内より比較的まとまった量の須恵器、土師器、韓式系土器、Ｕ字形板状土製品、馬歯などが出土した。そのうち図示し得たのは22点である。

128－６～15は須恵器で、坏蓋（128－６～10・15）、坏身（128－11・12）、壺（128－13・14）などがある。

128－１～５・16～18・21・22は土師器で、甕（128－１～５・16）、坏（128－18）、把手付鍋（128－19）、長胴甕（128－21・22）などがある。

128－19・20は韓式系土器で、ともに甕の破片である。

Ｕ字形板状土製品相欠き部の小片が出土した。

竪穴住居Ｋ２－３出土遺物（第129図２～６、図版40、41）

竪穴住居Ｋ２－３からは、カマドおよび覆土内より土師器、韓式系土器、製塩土器、砥石など

が出土した。そのうち図示し得たのは５点である。

129－２～６は土師器で、壺（129－５）、甕（129－２・３・６）、甑（129－４）などがある。

土坑Ｋ２－１２０９６出土遺物（第129図７～19、第130図１、図版41）

土坑Ｋ２－１２０９６からは、須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した。そのうち図示し得たのは14点である。

129－14は須恵器で、甕である。

129－７～13・17～19は土師器で、甕（129－７・11～13）、壺（129－８・９）、鉢（129－10）、高坏（129－17～19）などがある。

129－15・16、130－１は韓式系土器で、平底鉢（129－15・16）、甑（130－１）などがある。

土坑Ｋ２－１２１３０出土遺物（第130図３～６）

土坑Ｋ２－１２１３０では、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは４点である。

130－３・４は須恵器で、坏蓋（130－３）、壺（130－４）などがある。

130－５・６は土師器で、甕（130－５）、高坏（130－６）などがある。

土坑Ｋ２－１２１３１出土遺物（第130図２）

土坑Ｋ２－１２１３１では、埋土内から須恵器、土師器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

130－２は須恵器で、坏蓋である。

土坑Ｋ２－１２０５２出土遺物（第130図20）

土坑Ｋ２－１２１３１では、埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

130－20は韓式系土器で、甕である。

落ち込みＫ２－１２１７８出土遺物（第130図18）

落ち込みＫ２－１２１７８からは、埋土内より須恵器、土師器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

130－18は土師器で、鉢である。

溝Ｋ２－１２０１１出土遺物（第130図７～９、図版42）

溝Ｋ２－１２０１１では、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たの

は３点である。

130－７・９は須恵器で、高坏蓋（130－７）、甕（130－９）などがある。

130－８は土師器で、甕である。

溝Ｋ２－１２０２４出土遺物（第131図１～14、第153図３、図版42）

溝Ｋ２－１２０２４では、埋土内より須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した。そのうち図示し得たのは14点である。

131－１～５は須恵器で、坏蓋（131－３）、坏身（131－１）、高坏（131－４）、壺ないしは 瓶（131－２）、甕（131－５）などがある。

131－６・７・11～14は土師器で、高坏（131－６・７）、甕（131－11・12）、大型球胴甕（131－13）、長胴甕（131－14）などがある。

131－８～10は韓式系土器で、平底鉢である。

これらのほかに砥石（153－３）がある。使用痕が著しい。

溝Ｋ２－１２０６６出土遺物（第130図10）

溝Ｋ２－１２０６６では、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

130－10は土師器で、鉢ないしは高坏の坏部である。

ピットＫ２－１２００８出土遺物（第130図16・17）

ピットＫ２－１２００８からは、埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

130－16・17はともに須恵器で、坏蓋（130－17）、高坏（130－16）などがある。

ピットＫ２－１２０２２出土遺物（第130図19）

ピットＫ２－１２０２２からは、埋土内より土師器、須恵器などの遺物がごく少量出土した。

そのうち図示し得たのは１点である。

130－19は須恵器で、坏身である。

２．北東居住域を区画する溝

区画溝Ｋ２－１２０１０出土遺物（第130図11～15、154－３・４、図版41）

区画溝Ｋ２－１２０１０からは、埋土内より須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、馬歯などが出土した。そのうち図示し得たのは５点である。

130－11・12は須恵器で、坏身（130－11）、高坏（130－12）などがある。

130－13は土師器で、甑の破片と思われる。

130－14は製塩土器で、コップ形である。

130－15は韓式系土器で、甑の把手でと思われる。

これらのほかに木製品が２点出土している。

154－３は有孔棒状木製品、154－４は有柄棒状木製品で、ともに建築部材と思われる。

３．Ｋ２調査区包含層出土遺物（第130図21～24）

Ｋ４調査区の包含層からは、須恵器、土師器、韓式系土器などが出土したが、そのうち４点を図示した。

130－21・22・24は韓式系土器で、甕（130－21）、平底鉢（130－22・24）などがある。

130－23は須恵器で、壺の口縁部である。

第３項　Ｋ３調査区

１．南西居住域

大壁建物Ｋ３－１出土遺物（第132図１～６）

大壁建物Ｋ３－１からは、覆土内より須恵器、土師器、製塩土器、馬骨などが出土した。そのうち図示し得たのは６点である。

132－１～３は須恵器で、坏蓋（132－１）、高坏（132－２）、𤭯（132－３）などがある。

132－４・５は土師器で、ともに甕である。

132－６は製塩土器で、コップ形である。

竪穴住居Ｋ３－２出土遺物（第134図１～18）

竪穴住居Ｋ３－２からは、覆土内より須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器などが出土した。そのうち図示し得たのは18点である。

134－１～９は須恵器で、坏蓋（134－１～４）、坏身（134－５・６）、高坏（134－８・９）、𤭯（134－７）などがある。

134－10・11・15～18は土師器で、甕（134－10・16・17）、甑（134－15・18）などがある。

134－11～13は製塩土器で、いずれもコップ形である。

井戸Ｋ３－０９１９２出土遺物（第132図７～31、第133図１～５、第153図６、図版60）

井戸Ｋ３－０９１９２からは、埋土の上･下層から須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、砥石、馬歯などが出土した。そのうち図示し得たのは40点である。

上層出土遺物（第132図７～31、第133図１～５、第153図６）

上層からは須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器などが多数出土した。そのうち図示し得たのは30点である。

132－８～14、133－１は須恵器で、坏蓋（132－９・10）、坏身（132－11・12・14）、高坏（132－８・13）、甕（133－１）などがある。

132－７・15～18・20・22・23・25～31、133－２・４・５は土師器で、高坏（132－７・16～18・22・23、133－４・５）、鉢（132－15）、甕（132－20・26～31）などがある。

132－19・21、133－３は韓式系土器で、平底鉢（132－19・21）、甕（133－３）などがある。

132－24は製塩土器で、コップ形である。

これらのほかに砥石（153－６）、馬歯などが上層から出土した。

下層出土遺物（第133図－６～15）

下層からは土師器が出土した。甕（133－６・７・14・15）、壺（133－８～13）などがある。

落ち込みＫ３－０９０５０出土遺物（第135図１～31、第136図１～18、第151図４、第153図２・７）

落ち込みＫ３－０９０５０からは、埋土の各層から須恵器、土師器、韓式系土器、製塩土器、Ｕ字形板状土製品、種実類（モモ）などの遺物が大量に出土した。そのうち図示し得たのは49点である。

135－１～31は須恵器で、高坏蓋（135－１）、坏蓋（135－２～12）、坏身（135－13～22）、器台（135－23）、把手付鉢（135－24・25）、高坏（135－26）、甕（135－27～28）、提瓶（135－29）、壺（135－30・31）などがある。

136－１～11・13～16は土師器で、高坏（136－５・６）、鉢（136－１～４）、甕（136－７～11・13）、鍋（136－15）移動式カマド（136－16）などがある。

136－８は土師器で、甕である。

136－12は製塩土器で、コップ形である。

これらのほかにＵ字形板状土製品（151－４）、有孔石製品（153－２）、砥石（153－７）などがある。

土坑Ｋ３－０９０９１出土遺物（第134図19～26）

土坑Ｋ３－０９０９１からは、埋土内より須恵器、土師器、獣骨などが出土した。そのうち図示し得たのは９点である。

133－19～26は土師器で、高坏（133－19・20）、鉢（133－21）、壺（133－23）、ミニチュア壺（133－22）、甕（133－24～26）などがある。

これらのほかにU字形板状土製品（133－24）がある。

土坑Ｋ３－０９１９７出土遺物（第150図12）

土坑Ｋ３－０９１９７からは、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

150－12は土師器で、甕である。

溝Ｋ３－０９１３６出土遺物（第150図３・４）

溝Ｋ３－０９１３６からは、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

150－３は須恵器で、𤭯である。

150－４は土師器で、坏である。

土坑Ｋ３－０９１５０出土遺物（第150図１・２）

土坑Ｋ３－０９１５０からは、埋土内より土師器が出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

150－１・２は土師器で、ともに坏である。

土坑Ｋ３－０９１４９出土遺物（第150図５）

土坑Ｋ３－０９１４９からは、埋土内より土師器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

150－５は土師器で、高坏である。

土坑Ｋ３－０９０８１出土遺物（第150図10）

土坑Ｋ３－０９０８１からは、埋土内より土師器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

150－10は土師器で、甕である。

土坑Ｋ３－０９１５７出土遺物（第150図11）

土坑Ｋ３－０９１５７からは、埋土内より土師器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

150－11は土師器で、甕である。

溝Ｋ３－０９１３４出土遺物（第150図６）

溝Ｋ３－０９１３４からは、埋土内より韓式系土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点

である。

150－６は韓式系土器で、平底鉢である。

ピットＫ３－０９１０７出土遺物（第150図７）

ピットＫ３－０９１０７からは、埋土内より韓式系土器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

150－７は韓式系土器で、平底鉢である。

ピットＫ３－０９１６３出土遺物（第150図９）

ピットＫ３－０９１６３からは、埋土内より土師器が出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

150－９は土師器で、鉢である。

２．Ｋ３調査区包含層出土遺物（第150図８・13・14）

Ｋ３調査区の包含層からは、須恵器、土師器、韓式系土器などが出土したが、そのうち４点を図示した。

150－８は韓式系土器で、平底鉢である。

150－13・14は土師器で、坏（150－13）、甕（150－14）などがある。

第４項　ＨＴ１調査区

１．集落域縁辺部

土坑ＨＴ１－０７００６出土遺物（第137図25、図版49）

土坑ＨＴ１－０７００６からは、埋土内より土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

137－25は土師器で、高坏である。

土坑ＨＴ１－０６００３出土遺物（第137図26、図版49）

土坑ＨＴ１－０６００３からは、埋土内より須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

137－２は須恵器で、瓶である。

溝ＨＴ１－０６００１出土遺物（第137図１～24、第153図１、図版50、図版51）

溝ＨＴ１－０６００１からは、埋土内より須恵器、土師器、土製品、石製品などが大量に出土した。そのうち図示し得たのは26点である。

137－1 ～ 14は須恵器で、坏蓋（137－ 1 ～ 4 ）、坏身（137－ 5 ～ 12)、高坏（137－13・14）などがある。

137－15 ～ 24は土師器で、高坏（137－23)、鉢（137－15 ～ 22)、甑（137－24）などがある。

これらのほかに滑石製紡錘車（153－ 1)、土玉16点、滑石製臼玉多数などが出土した。

第５項　Ｋ１調査区

１．北東居住域

井戸Ｋ１－１０１４８出土遺物（第138図１・２、図版52）

井戸Ｋ１－１０１４８からは須恵器、土師器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

138－１は須恵器で、大型器台である。受部口縁部を欠損する。

138－２は土師器で、壺である。

土坑Ｋ１－１０１４４出土遺物（第138図３～24、第139図１～41、第140図１・２、第151図３、図版52～図版54）

土坑Ｋ１－１０１４４からは須恵器系土器、須恵器、韓式系土器、陶質土器、製塩土器、土師器、移動式カマド、Ｕ字形板状土製品などが大量に出土した。そのうち図示し得たのは63点である。

138－３・４は須恵器系土器で、高坏の坏部（138－３)、脚部（138－４）などがある。

138－５～ 21は須恵器で、高坏蓋（138－５)、坏蓋（138－６～９)、坏身（138－９～ 12)、直口壺（138－13)、高坏（138－14 ～ 17)、甕（138－18 ～ 21）などがある。

138－22は陶質土器で、甕である。

138－23・24は韓式系土器で、甑（138－23)、鉢（138－24）などがある。

139－１～ 32は製塩土器で、コップ形（139－１～ 24）と浅椀形（139－25 ～ 32）とがある。

139－33 ～ 41は土師器で、甕（139－33 ～ 35・41)、甑（139－36)、高坏（139－37・38・40)、壺（139－39）などがある。

140－１・２は移動式カマドである。３点図示した。

151－３はＵ字形板状土製品である。

土坑Ｋ１－１０１３８出土遺物（第141図１～24、第142図1～27、図版54）

土坑Ｋ１－１０１３８からは、須恵器、土師器、須恵器系土器、移動式カマド、韓式系土器、製塩土器などが大量に出土した。そのうち図示し得たのは51点である。

141－１～11は須恵器で、高坏蓋（141－１）、坏蓋（141－２～５）、坏身（141－６～８）、高坏（141－９～11）などがある。

141－12～16・21～24、142 - 22～27は土師器で、甕（141－12、142－22～24・26・27）、高坏（141－14～16）、甑（141－21～24）、鉢（142－25）などがある。

141－17は須恵器系土器で、高坏の破片である。

141－18は移動式カマドである。

141－19・20は韓式系土器で、鍋（141－19）、甑（141－20）などがある。

142－１～21は製塩土器で、コップ形（142－１～12）と浅椀形（142－13～21）とがある。

土坑Ｋ１－１０００３出土遺物（第142図28～46、第143図１～22、図版55、図版58）

土坑Ｋ１－１０００３からは、須恵器、土師器、須恵器系土器、製塩土器などが大量に出土した。そのうち図示し得たのは41点である。

142－28～46は須恵器で、高坏蓋（142－28・29・33）、坏蓋（142－30・34）、坏身（142－32・35～38）、高坏（142－39～43）、壺（142－44・45）、甕（142－46）などがある。

143－１～８は製塩土器で、平底バケツ形（143－１～３）、浅鉢形（143－４～８）などがある。

143－９・10は須恵器系土器で、ともに高坏の脚部である。

143－11～22は土師器で、甕（143－11～20）、長胴甕（143－21）、甑（143－22）などがある。

土坑Ｋ１－１０１１８出土遺物（第148図１・２）

土坑Ｋ１－１０１１８からは、土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

148－１は土師器で甑、148－２は製塩土器である。

土坑Ｋ１－１００４６出土遺物（第148図３）

土坑Ｋ１－１００４６からは、土師器、鞴の羽口などが少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

148－３は鞴の羽口の小片である。

土坑Ｋ１－１０１３２出土遺物（第148図４）

土坑Ｋ１－１０１３２からは、土師器、鞴の羽口などが少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

148－４は鞴の羽口の小片である。

土坑Ｋ１－１０１３６出土遺物（第148図６）

土坑Ｋ１－１０１３６からは、須恵器、土師器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

148－６は須恵器で、高坏蓋である。

竪穴住居Ｋ１－０９０６０出土遺物（第148図７～19）

竪穴住居Ｋ１－０９０６０からは、須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した。そのうち図示し得たのは13点である。

148－７～13は須恵器で、坏蓋（148－７～９）、坏身（148－10～12）、高坏（148－13）などがある。

148－14～17・19は土師器で、鉢（148－14・15・17）、甕（148－16）、甑（148－17）などがある。

148－18は韓式系土器で、甑である。

竪穴住居Ｋ１－０９０６１出土遺物（第148図22～24、図版58）

竪穴住居Ｋ１－０９０６１からは、須恵器、土師器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは３点である。

148－22～24は須恵器で、瓶（148－22）、高坏（148－23・24）などがある。

溝Ｋ１－０９０６２出土遺物（第149図１～15）

溝Ｋ１－０９０６２からは、須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した。そのうち図示し得たのは15点である。

149－１～８は須恵器で、坏蓋（149－１～３・５）、坏身（149－４）、壺（149－６）、甕（149－７・８）などがある。

149－９～13・15は土師器で、甕（149－９～13）、甑（149－15）などがある。

149－14は韓式系土器で、鍋の口縁部と思われる。

溝Ｋ１－０９０３９出土遺物（第148図20・21・25）

溝Ｋ１－０９０３９からは、須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは３点である。

148－20は須恵器で、坏身である。

148－21・25は土師器で、甕（148－21）、甑（148－25）などがある。

ピットＫ１－０９０３４出土遺物（第148図５）

ピットＫ１－０９０３４からは、土師器、鞴の羽口などが少量出土した。そのうち図示し得た

のは１点である。

148－５は鞴の羽口の小片である。

ピットＫ１－０９００１出土遺物（第148図26）

ピットＫ１－０９００１からは、土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

148－26は土師器で、甕である。

流路Ｋ１－０８０１３出土遺物（第144図１～32、第145図１～15、第146図１～８、第147図１～22、第154図１・２、第155図４、図版56～図版58）

流路Ｋ１－０８０１３からは、須恵器、須恵器系土器、土師器、移動式カマド、Ｕ字形板状土製品、馬歯などが大量に出土した。そのうち図示し得たのは78点である。

144－１～32、145－１～９は須恵器で、坏蓋（144－１～15）、坏身（144－16～26）、鉢（144－27）、壺（144－28･29）、器台（144－30）、高坏（144－31･32）、甕（145－１～８）、横瓶（145－９）などがある。

145－10～15は須恵器系土器で、いずれも高坏である。

146－１～８、146－１～20は土師器で、甑（146－１・３・６）、甕（146－２～６・９～13）、長胴甕（146－５・７・８）、短頸壺（147－１・２）、無頸壺（147－３）、壺（147－７）、小甕（147－８）、羽釜（147－19）、円筒状土製品（147－14～16）、支脚（147－20）などがある。

147－１・22は移動式カマドである。

これらのほかに木製品が３点出土している。

154－１は容器、154－２は建築部材、155－４は用途不明の二股状木製品である。

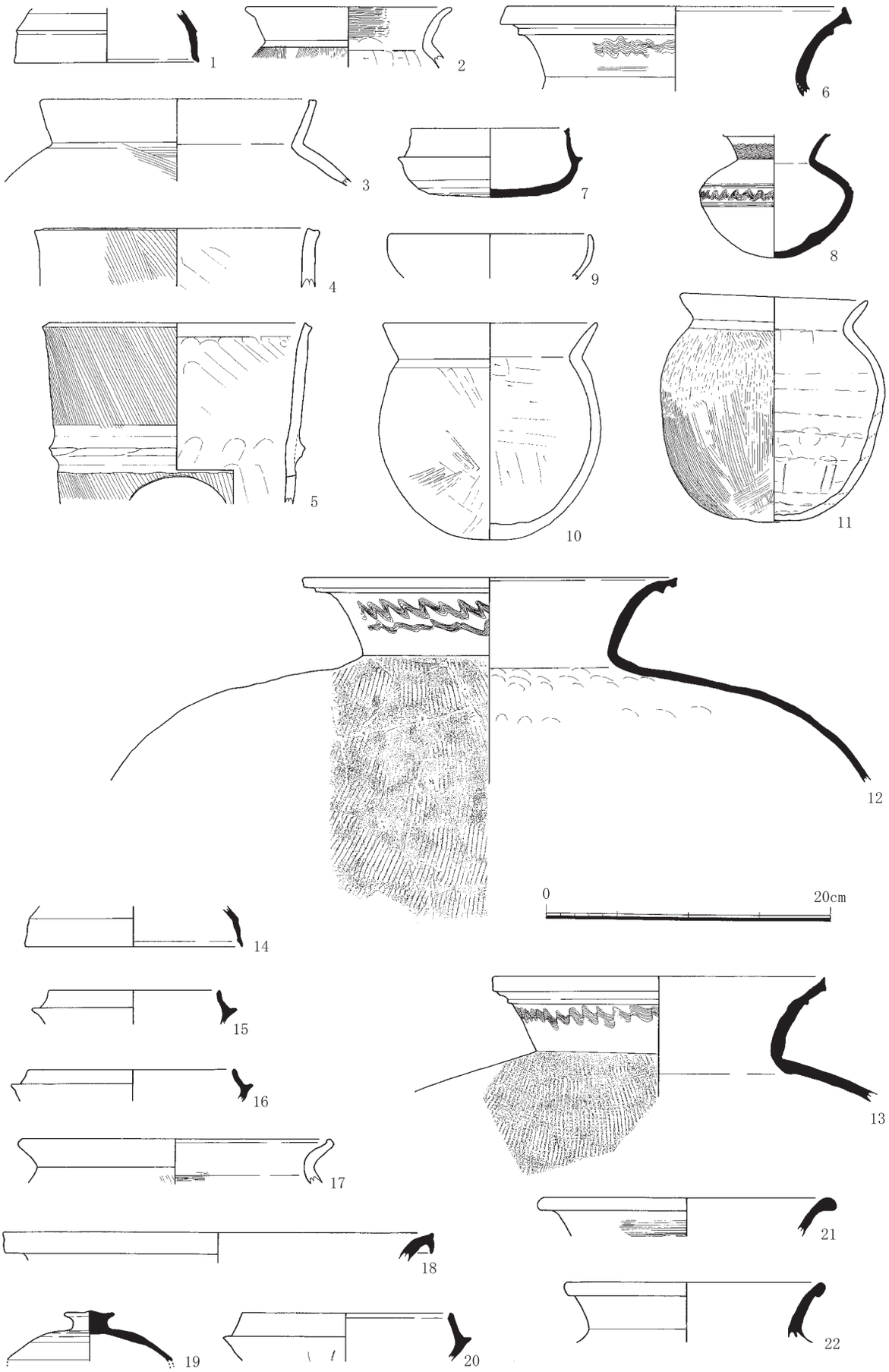
２．K1調査区包含層出土遺物（第149図16～21）

Ｋ1調査区の包含層からは、須恵器、土師器、韓式系土器などが出土したが、そのうち６点を図示した。

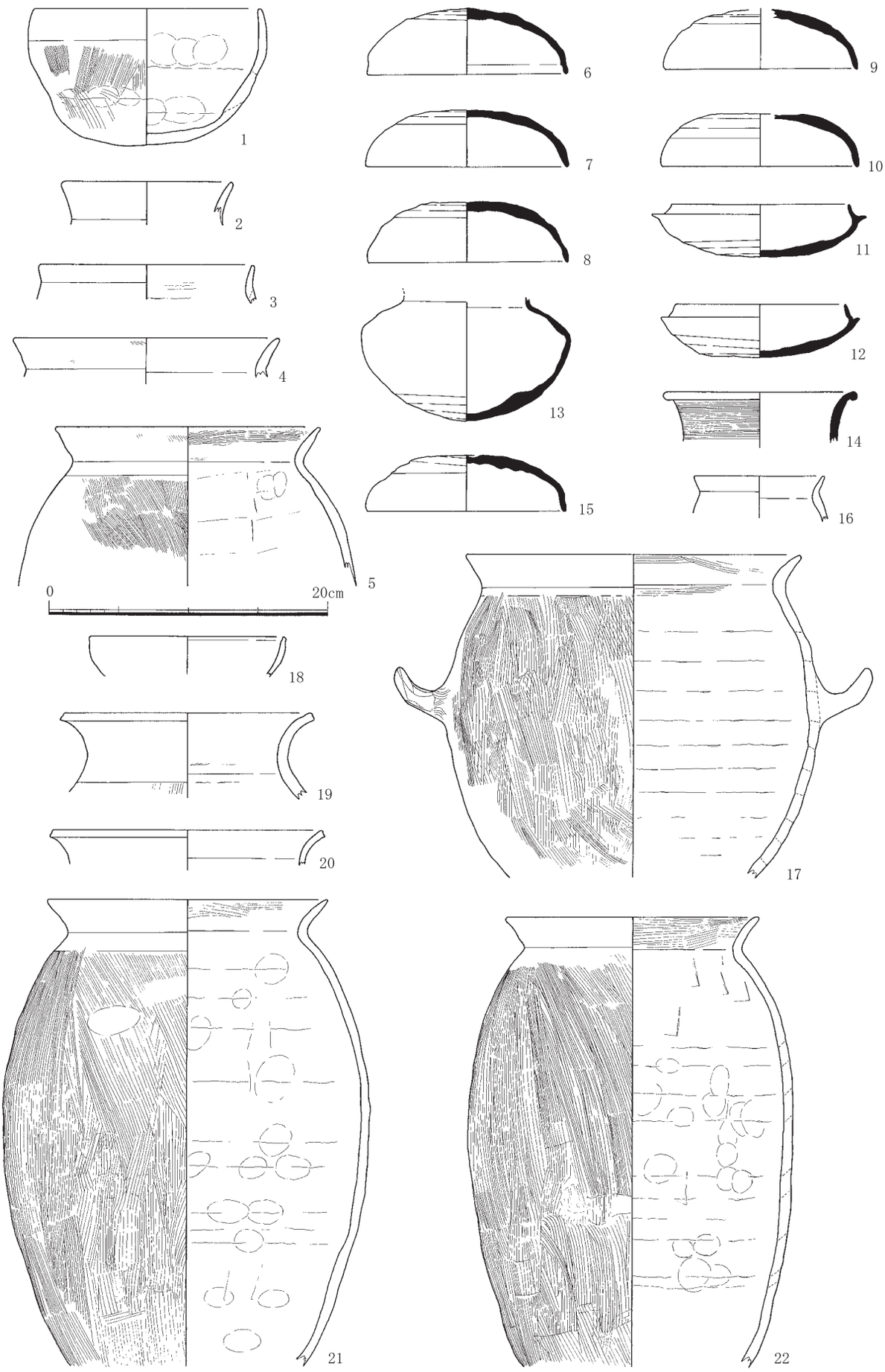
149－16～18は須恵器で、坏蓋（149－16）、坏身（149－17・18）などがある。

149－19・21は土師器で、甕（149－19）、鉢（149－21）などがある。

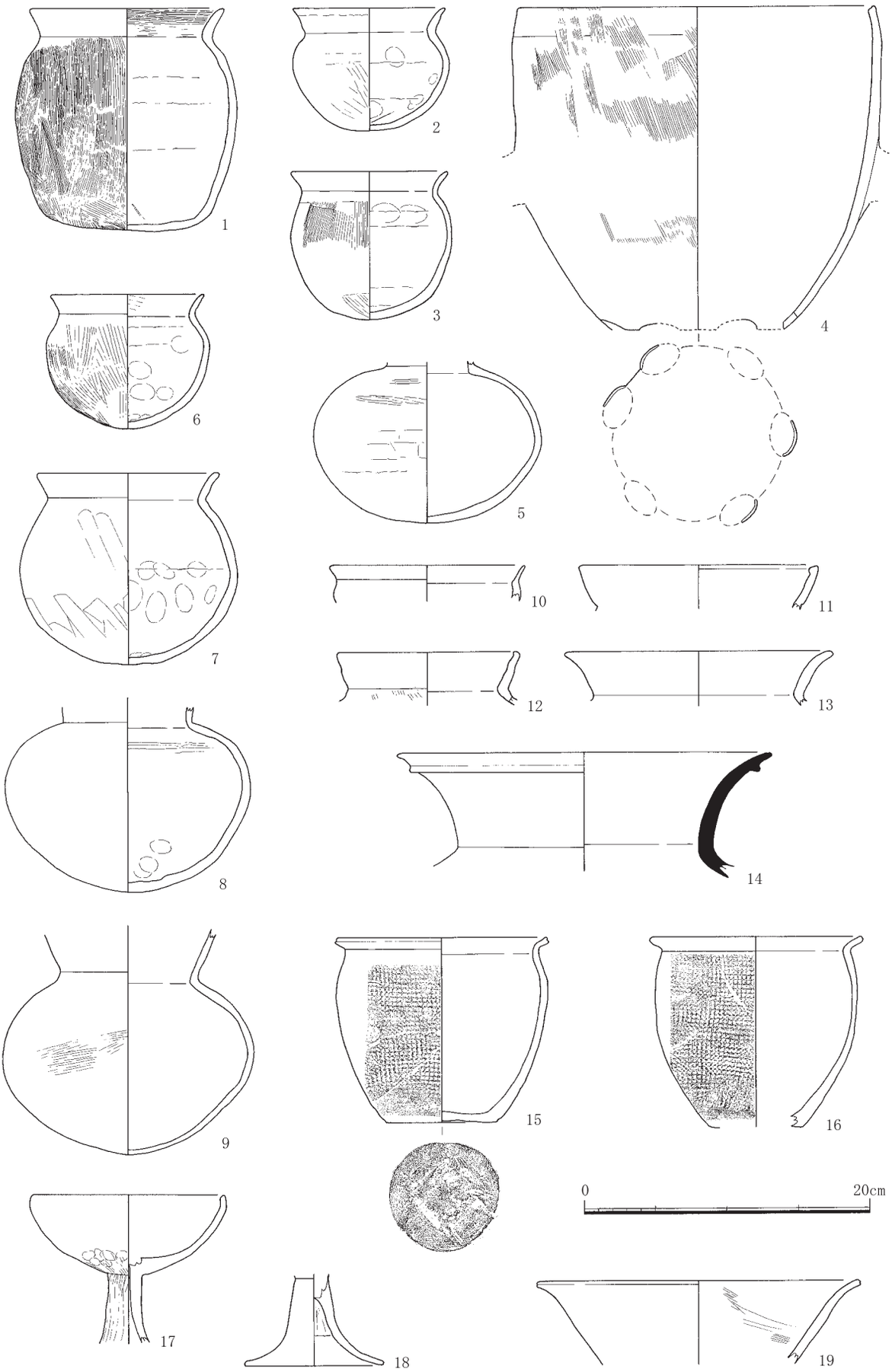
149－20は韓式系土器で、鉢である。



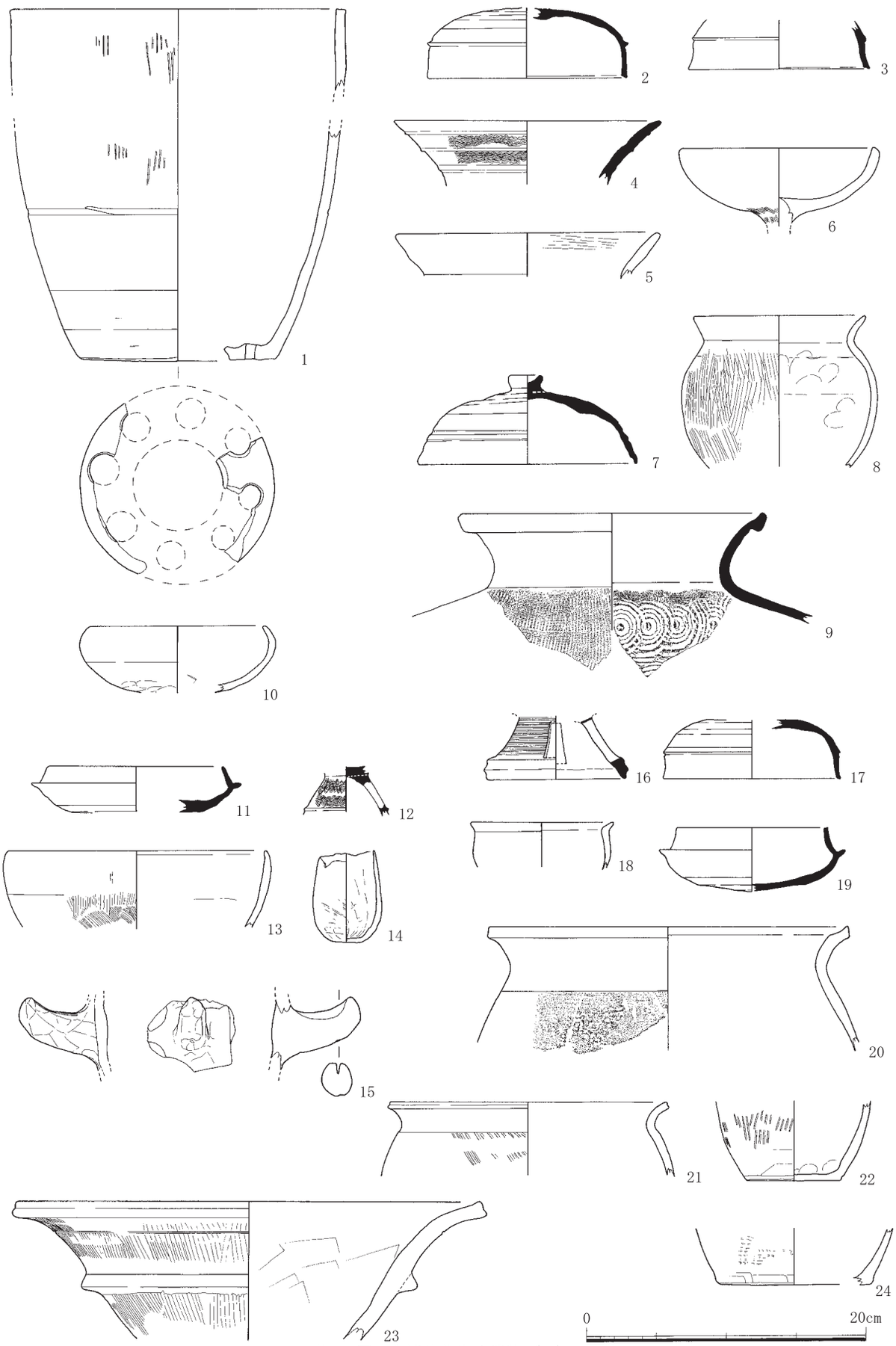
第127図　古墳時代出土遺物（１）
Ｋ４調査区　区画溝09001（１～５）、溝09002（６）、区画溝09003（７～13）、包含層出土（14～22）



第128図　古墳時代出土遺物（２）　Ｋ２調査区　竪穴２（１～22）

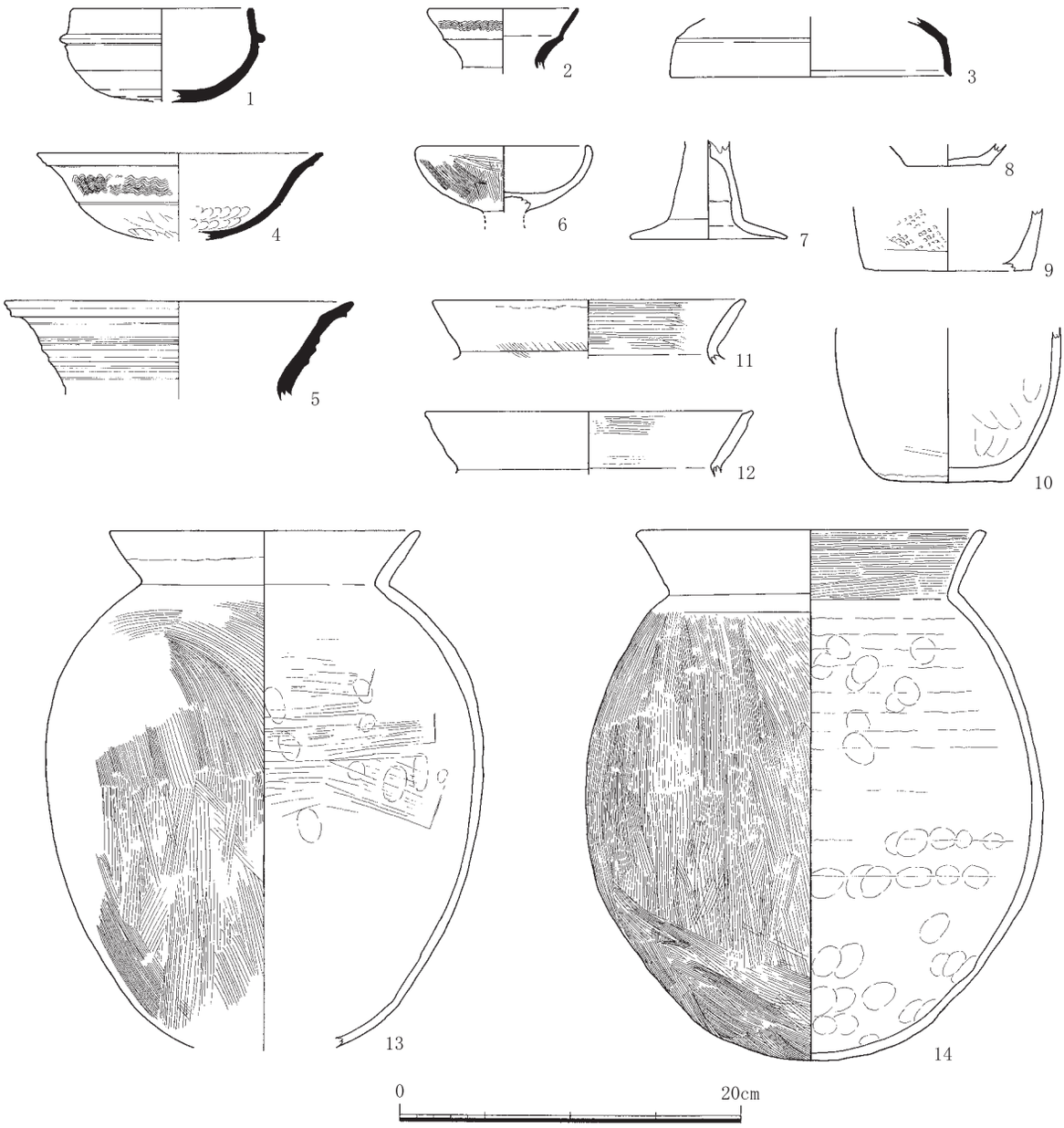


第129図　古墳時代出土遺物（３）
Ｋ２調査区　竪穴１（１）、竪穴３（２～６）、土坑12096（７～19）

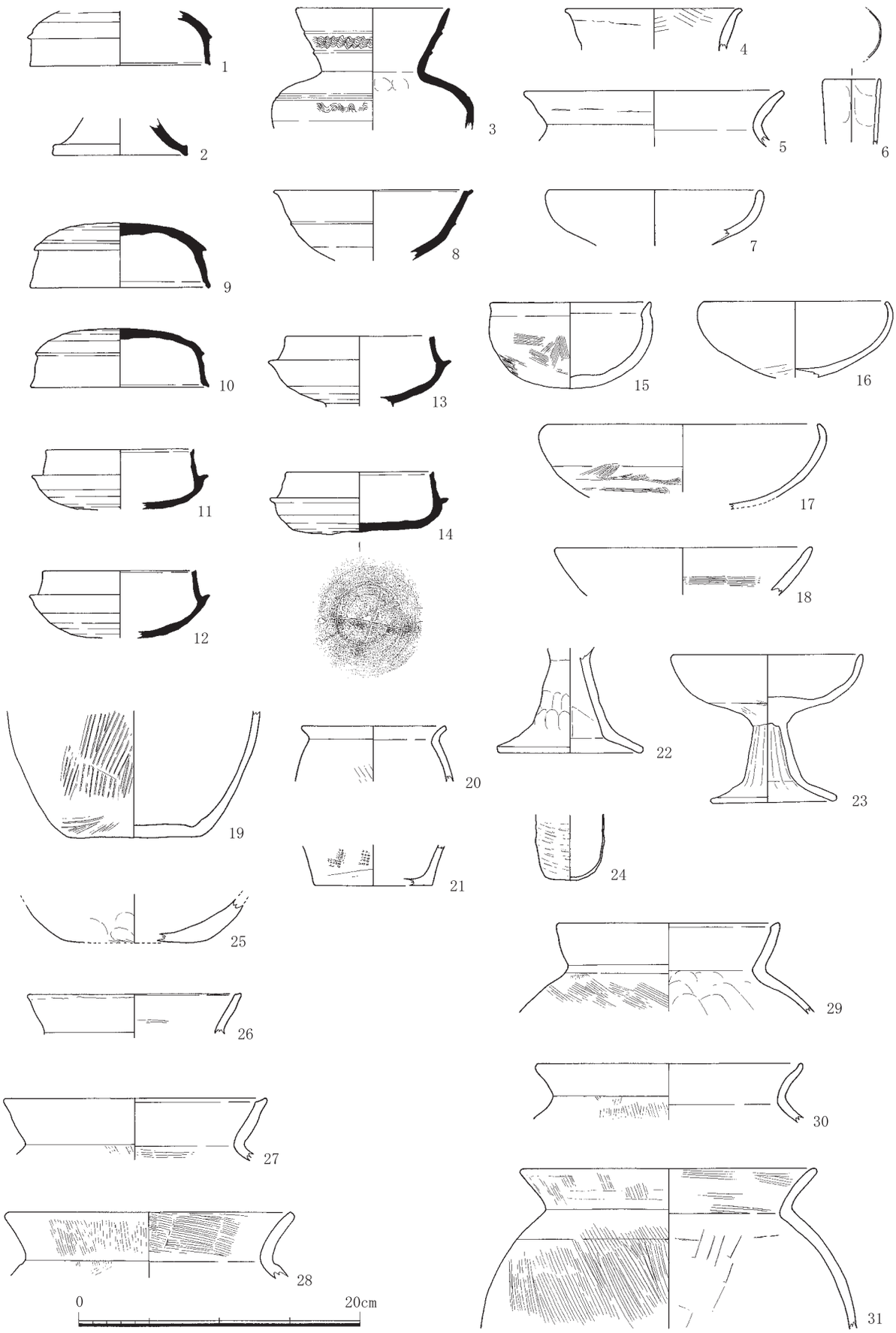


第130図　古墳時代出土遺物（４）

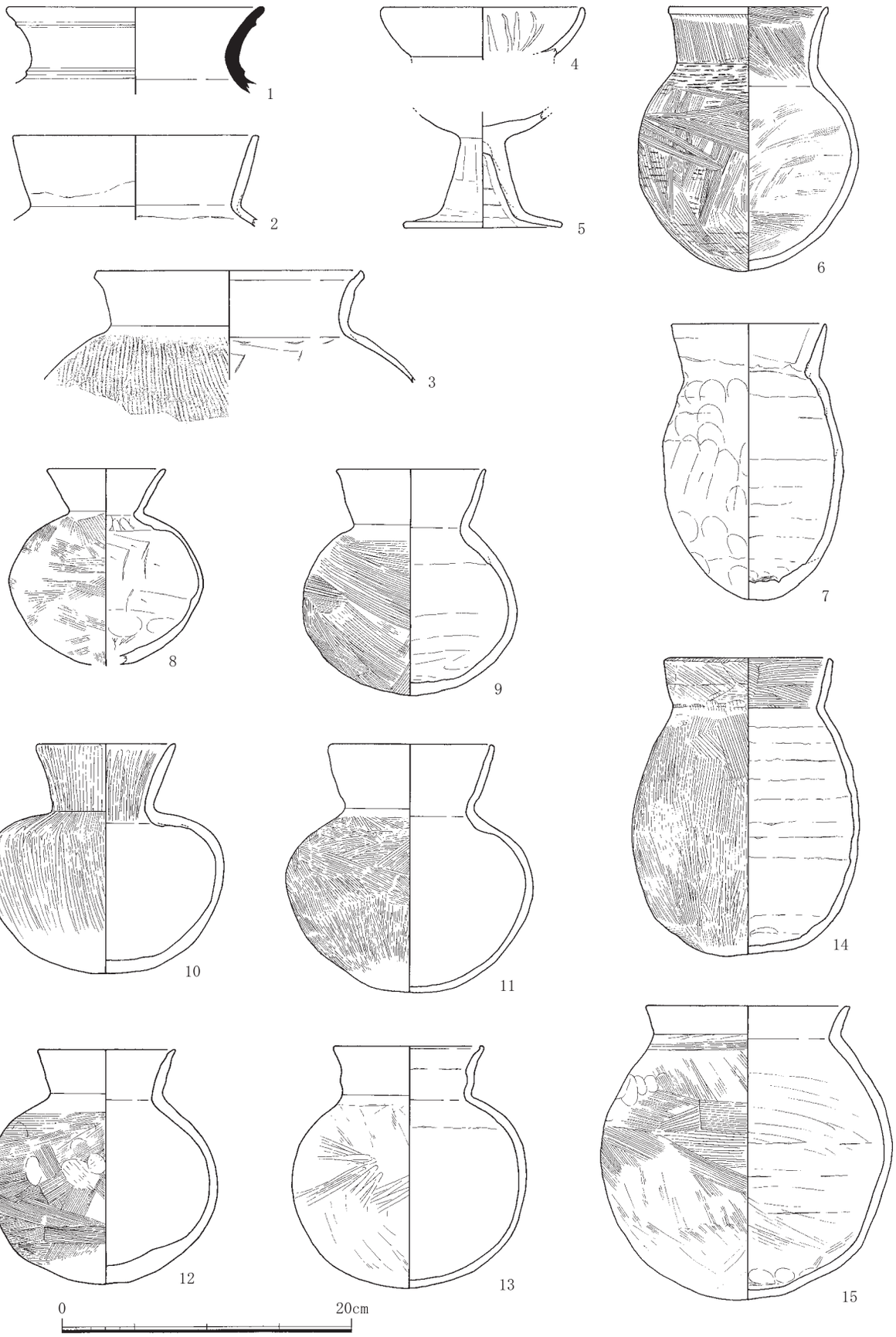
Ｋ２調査区　土坑12096（１）、土坑12131（２）、土坑12130（３～６）、溝12011（７～９）、溝12066（10）、溝12010（11～15）、ピット12008（16・17）、落込み12178（18）、ピット12022（19）、土坑12052（20）、包含層出土（21～24）



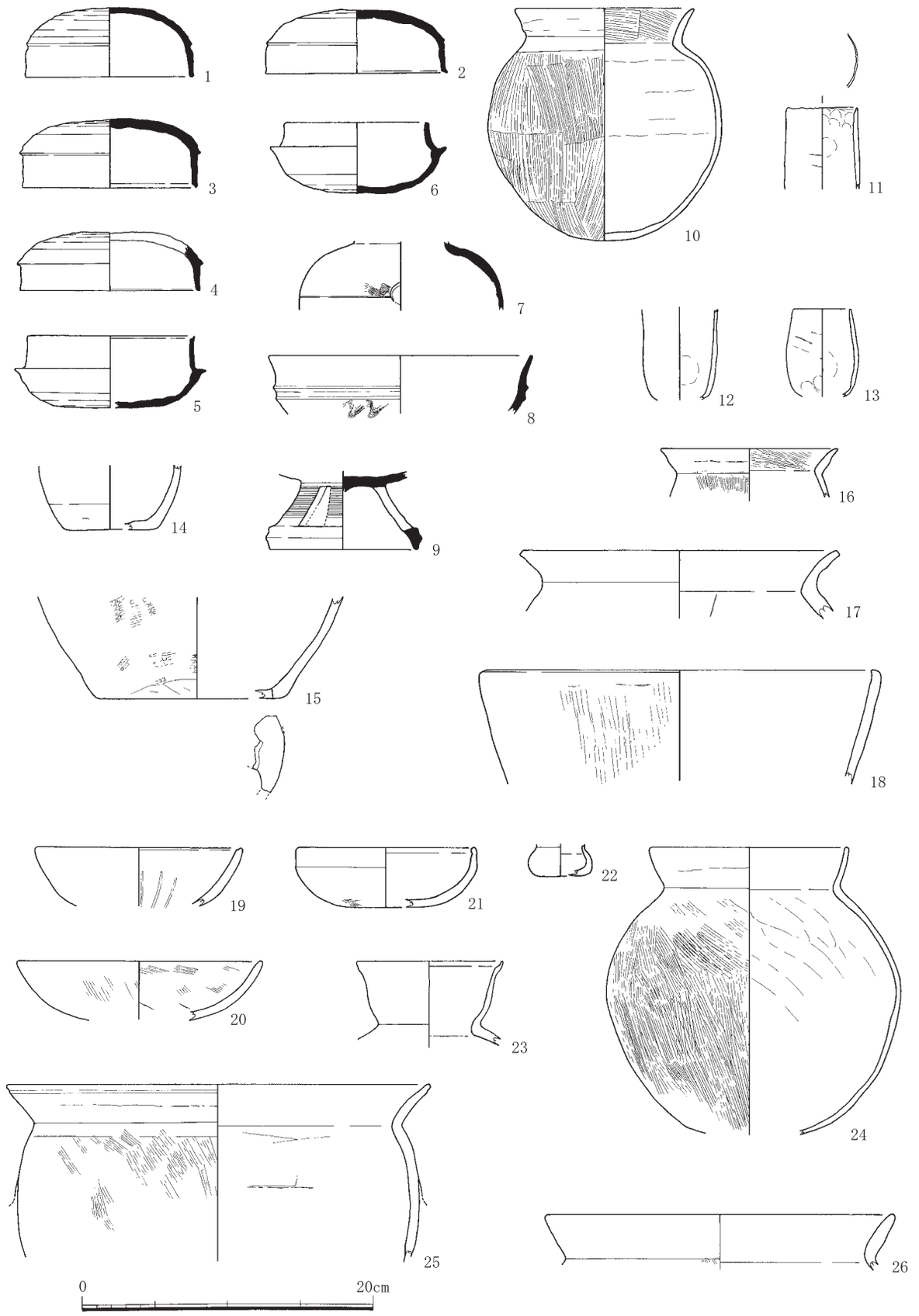
第131図　古墳時代出土遺物（５）　Ｋ２調査区　溝12024（１～14）



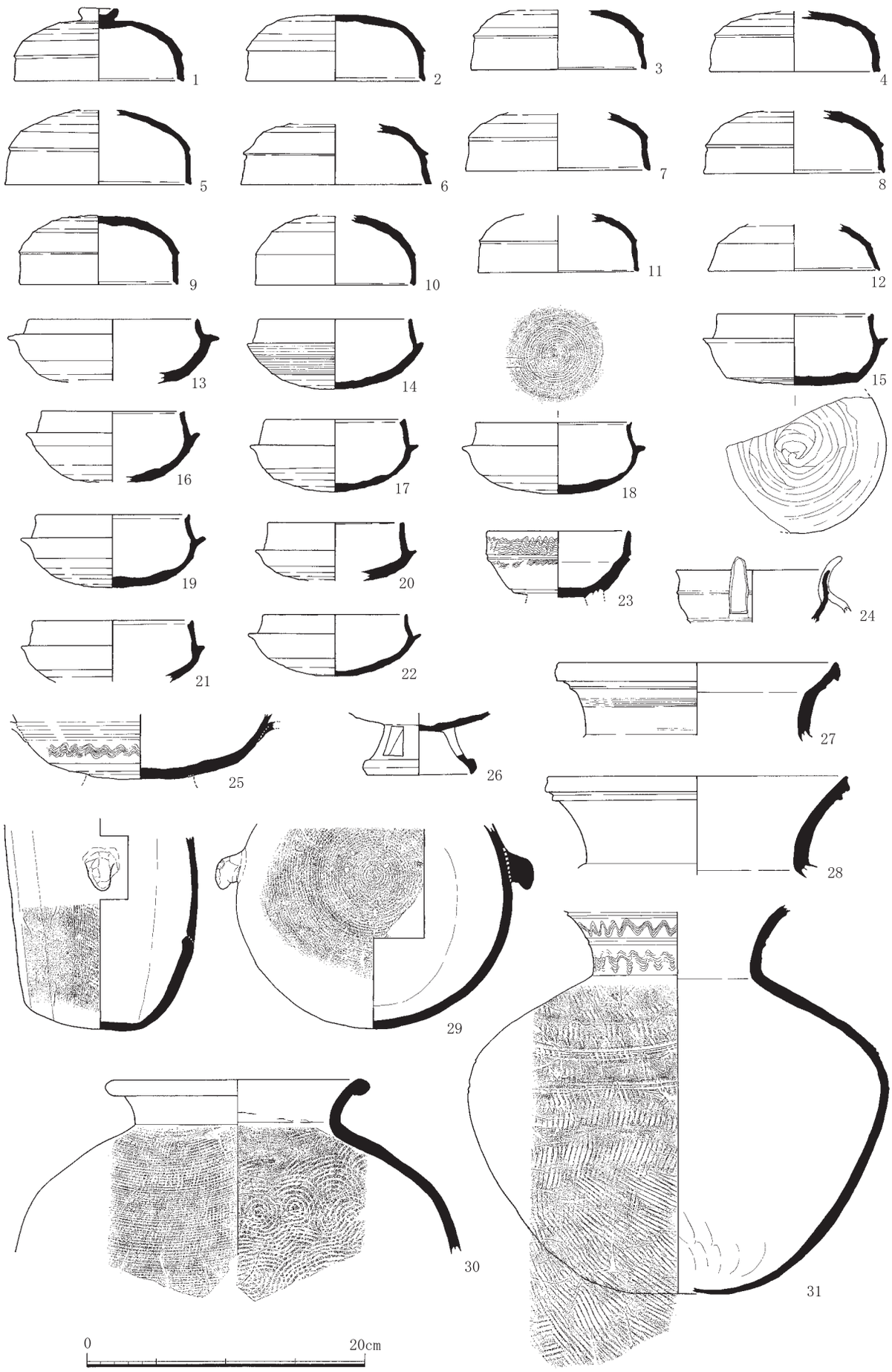
第132図　古墳時代出土遺物（６）　Ｋ３調査区　竪穴１（１～６）、竪穴１（井戸上部層）（７～31）



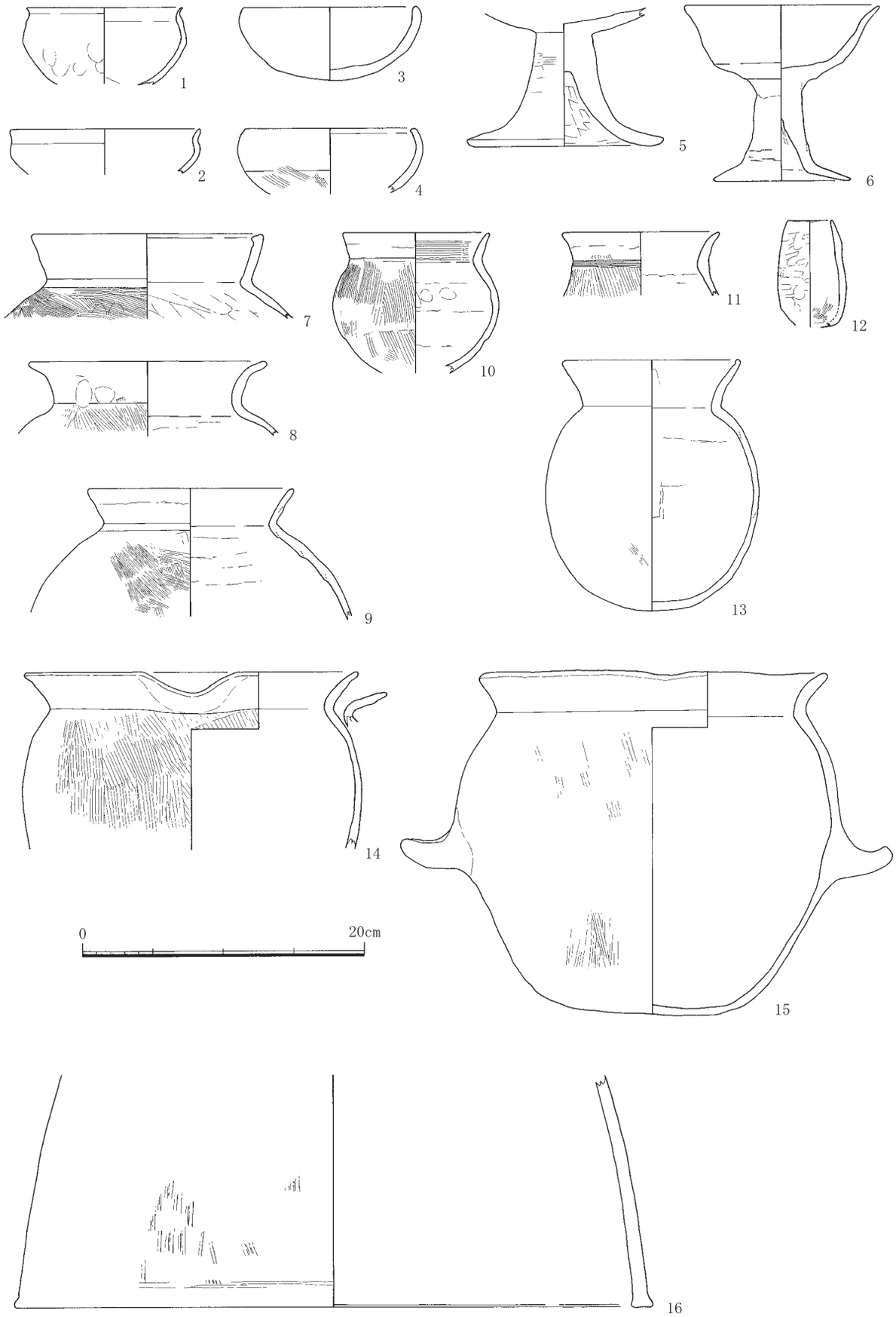
第133図　古墳時代出土遺物（７）　Ｋ３調査区　井戸192上層（１～５）、井戸192下層（６～15）



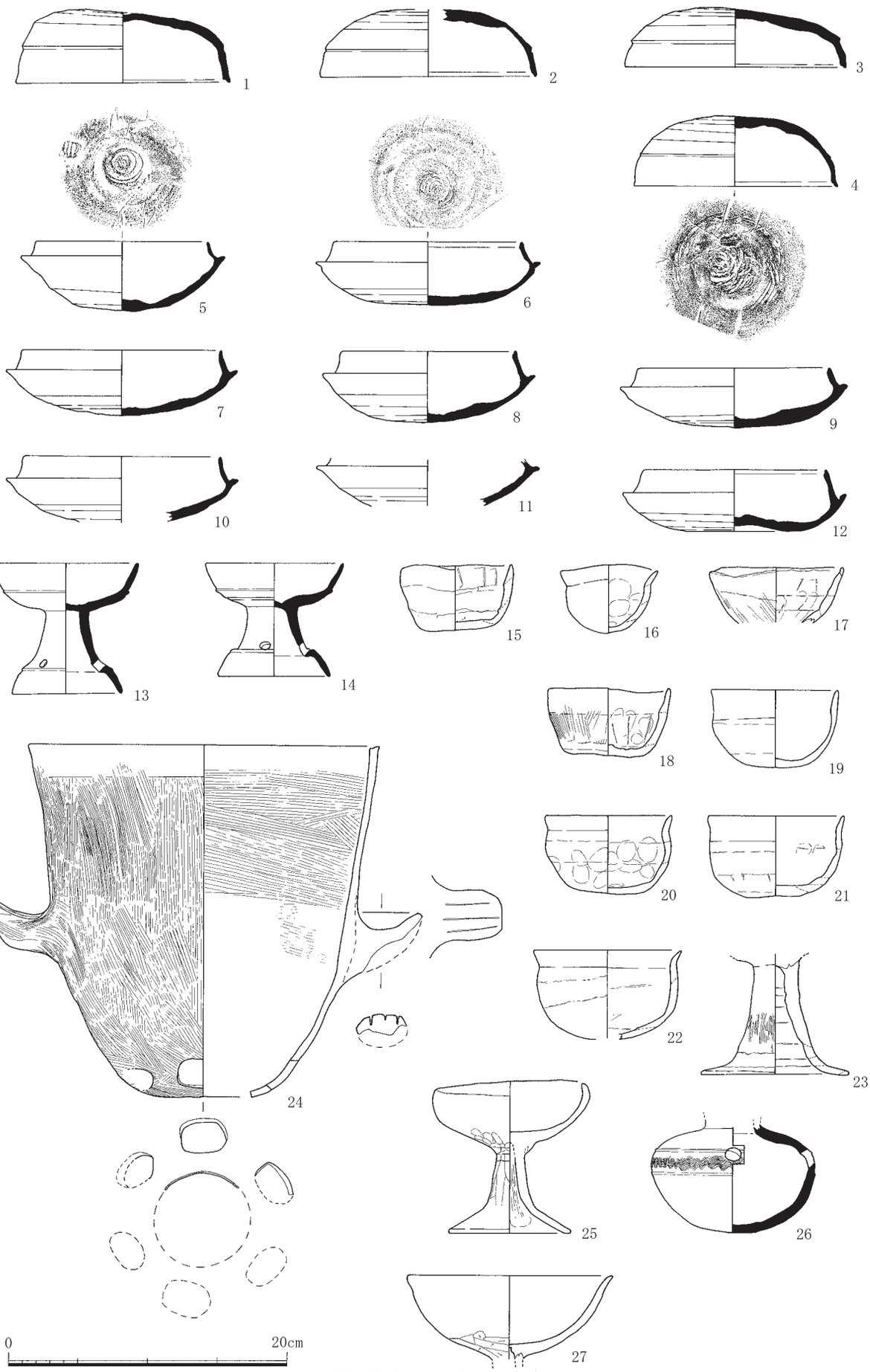
第134図　古墳時代出土遺物（８）　Ｋ３調査区　竪穴２（１～18）、土坑09091（19～26）



第135図　古墳時代出土遺物（９）　Ｋ３調査区　落込み09050（１～31）

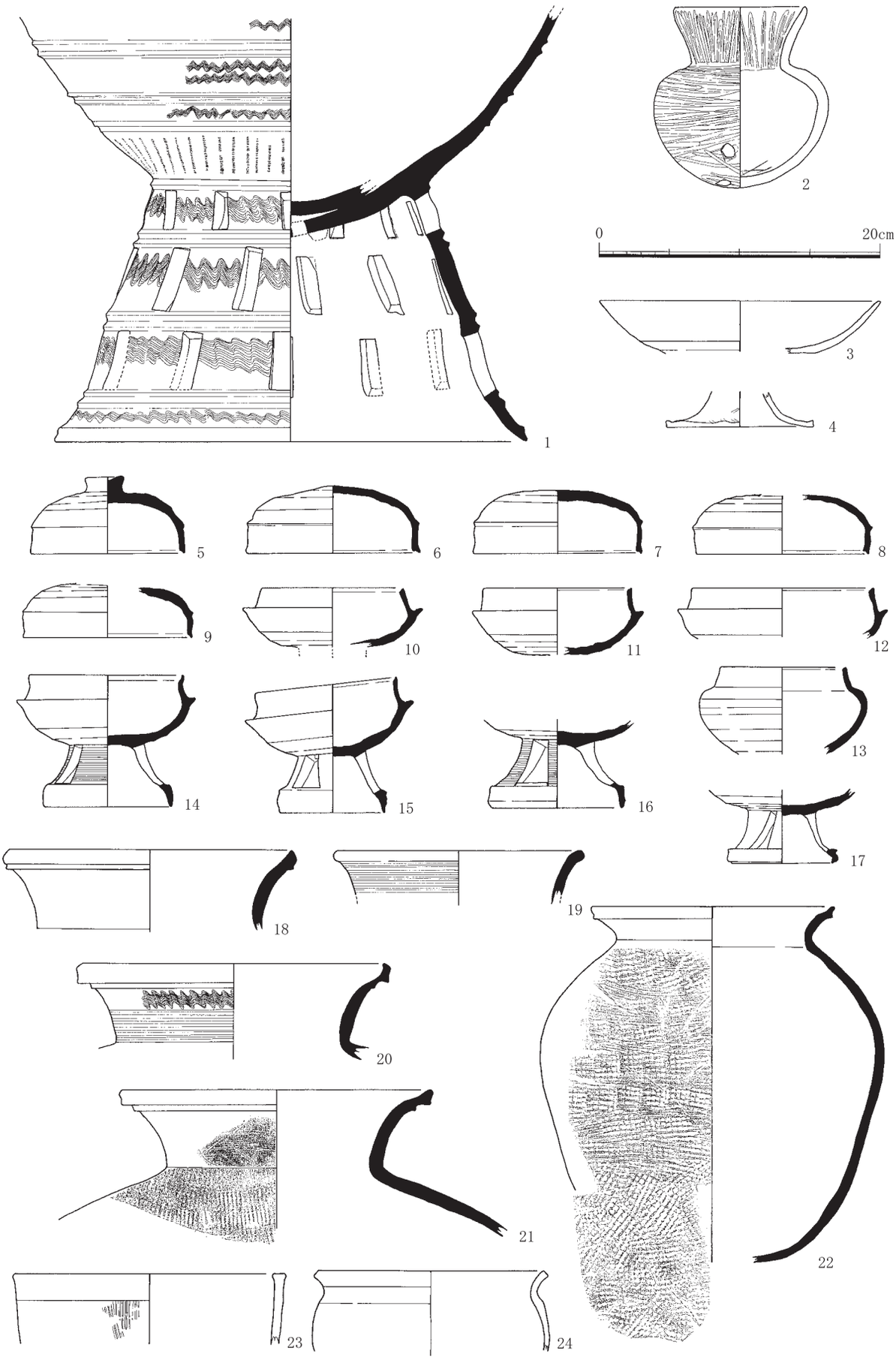


第136図　古墳時代出土遺物（10）　K３調査区　落込み09050（１～16）

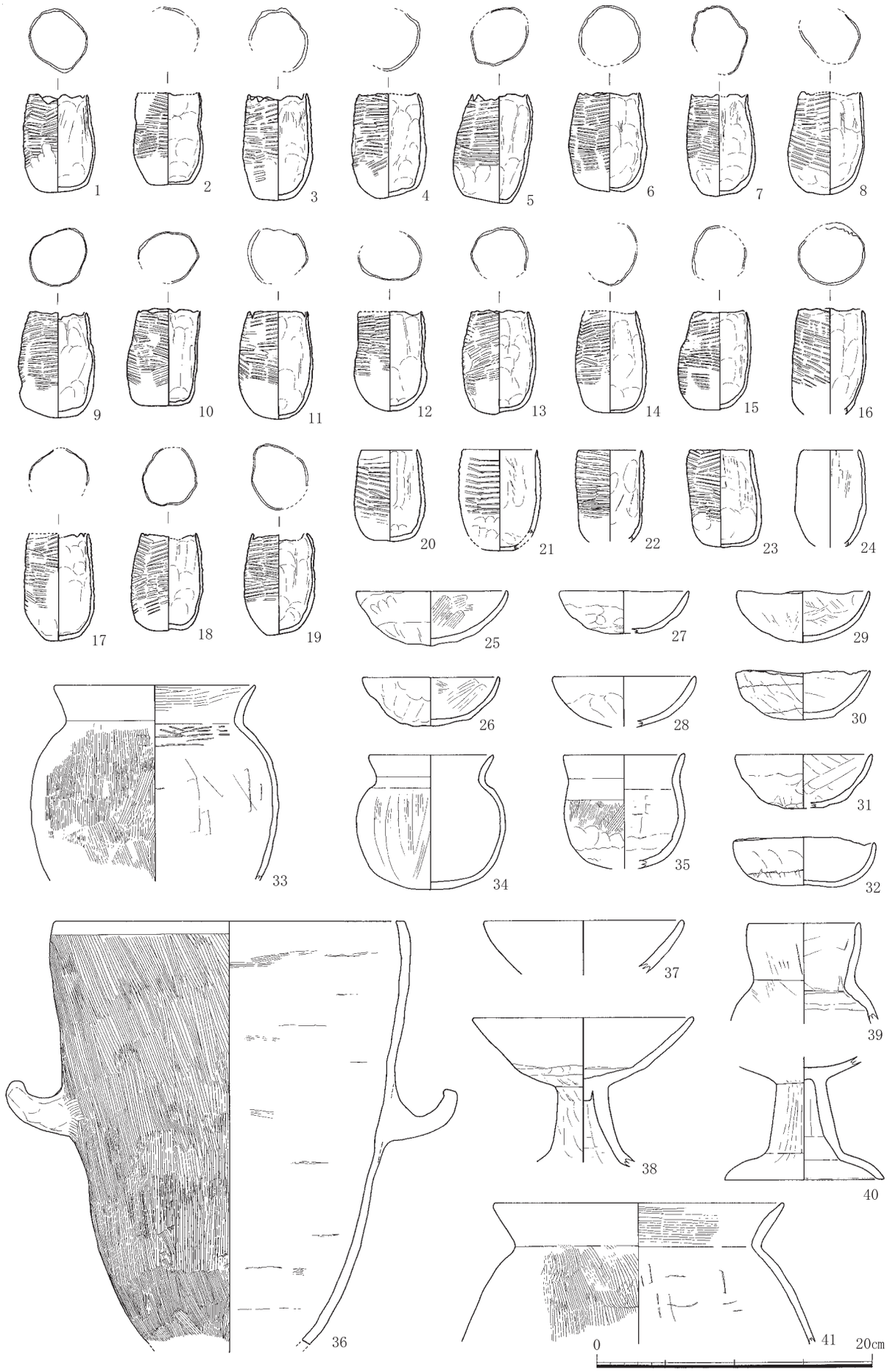


第137図　古墳時代出土遺物（11）

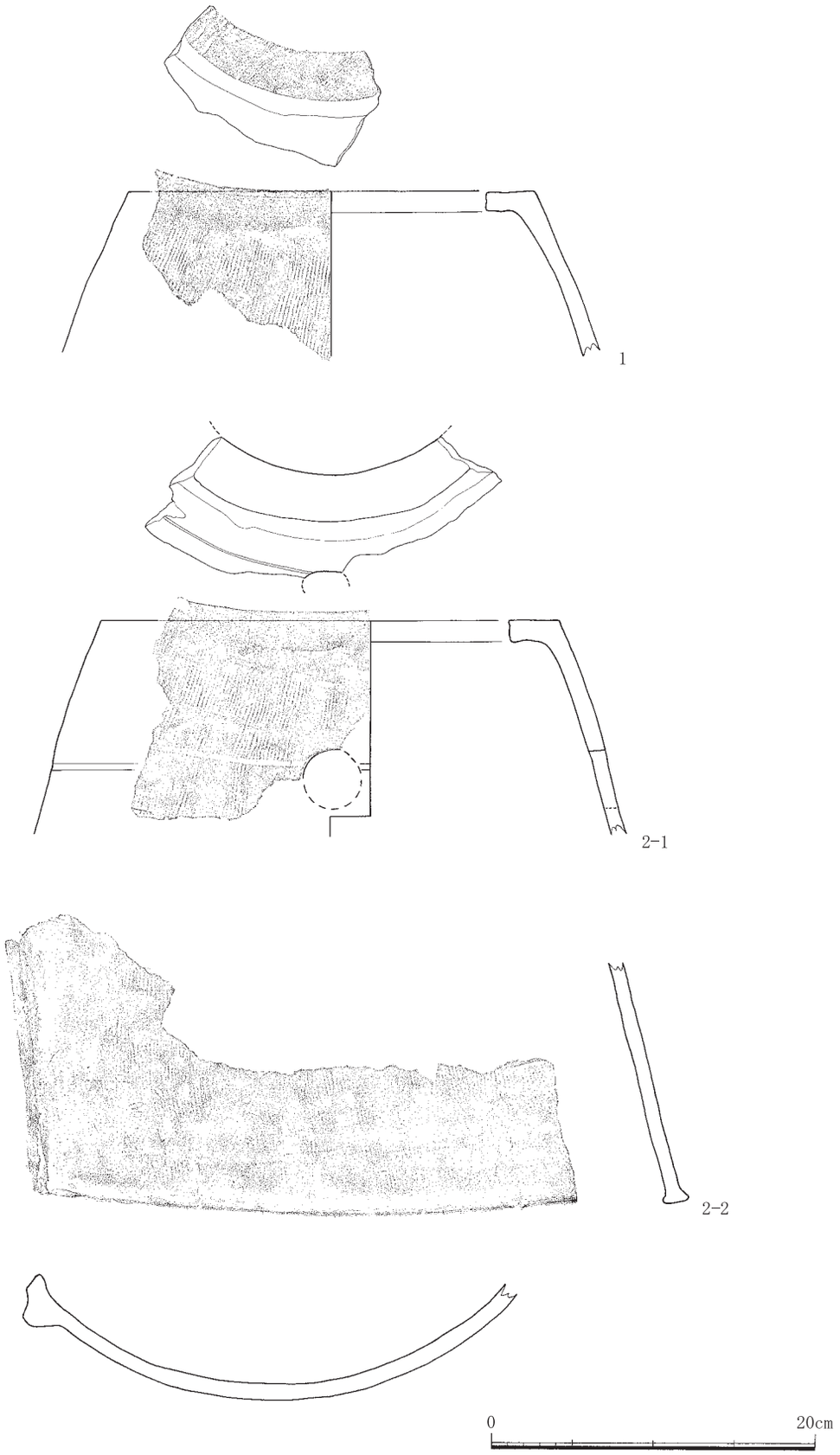
ＨＴ１調査区　溝06001（１～24）、土坑06006（25）、土坑06003（26）、包含層出土（27）



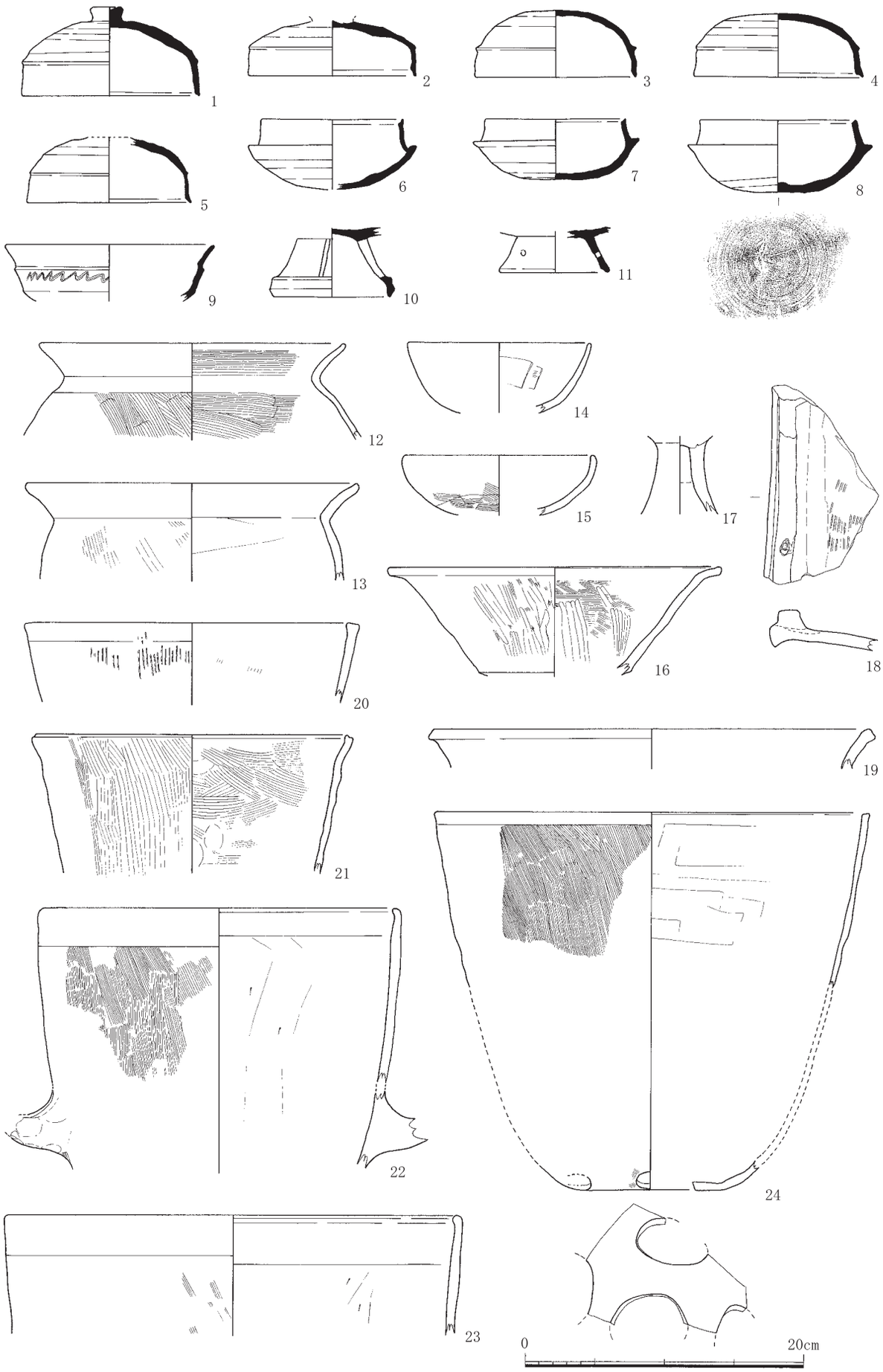
第138図　古墳時代出土遺物（12）　Ｋ１調査区　井戸10148（１・２）、土坑10144（３～24）



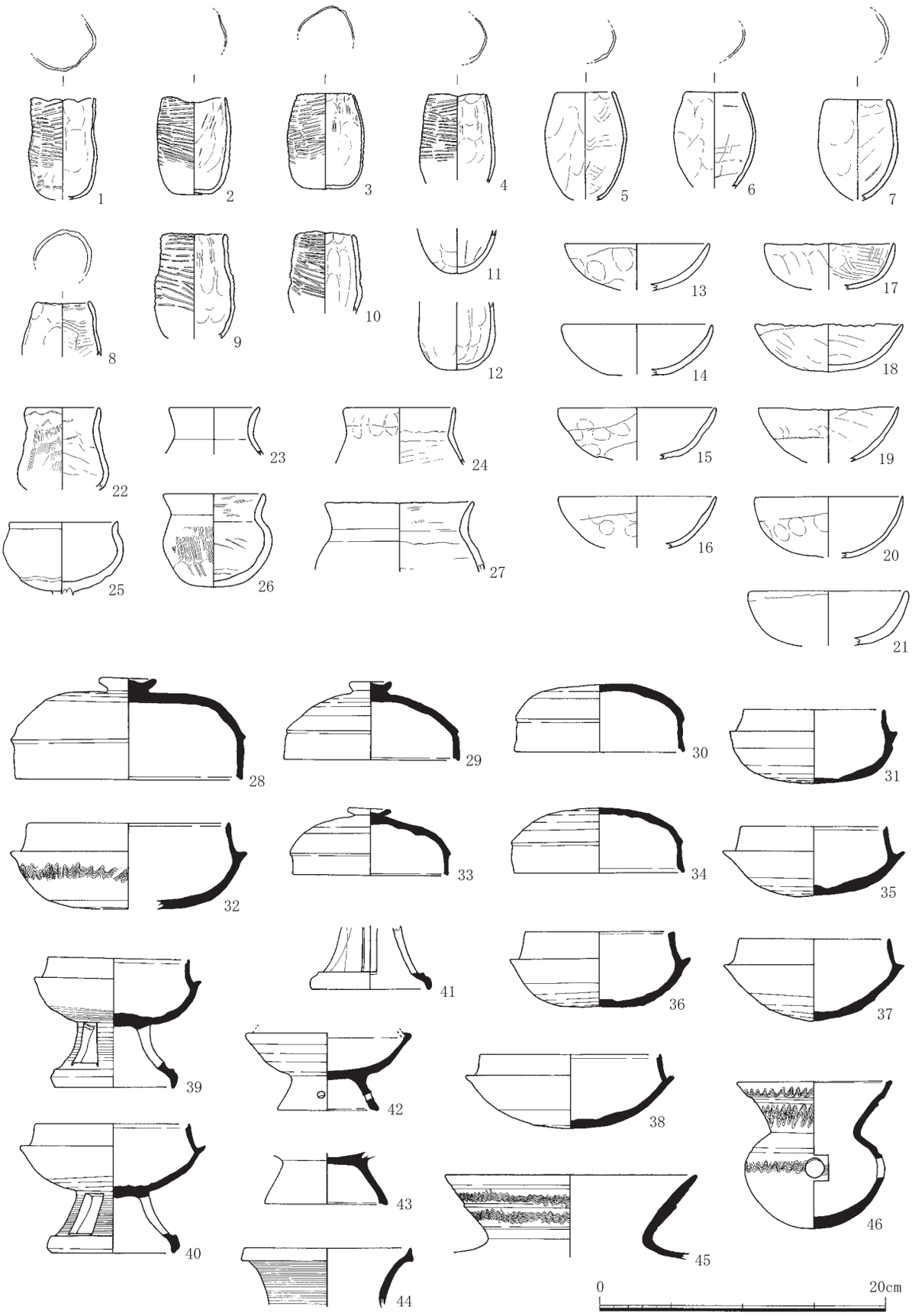
第139図　古墳時代出土遺物（13）　K１調査区　土坑10144（１～41）



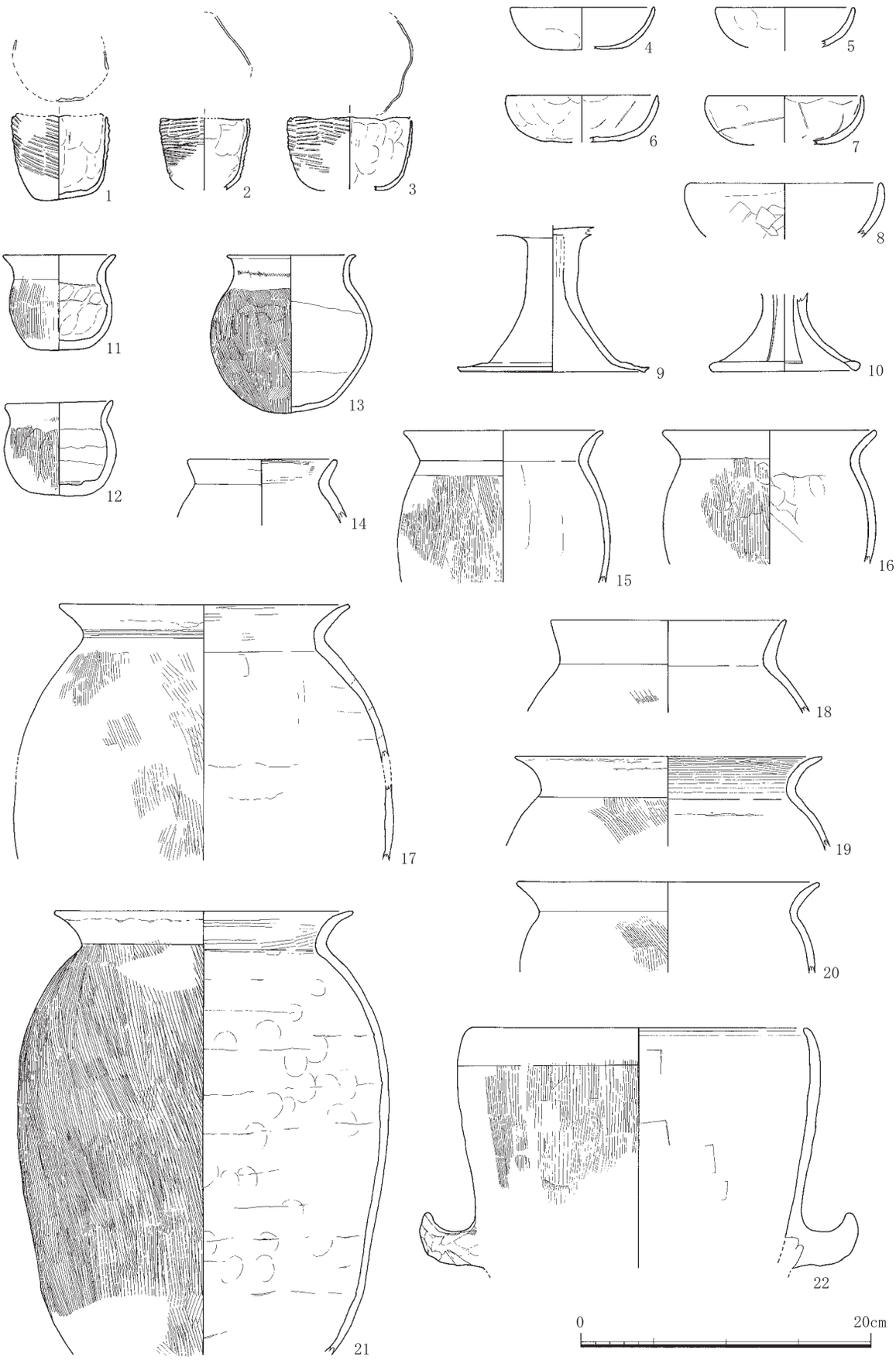
第140図　古墳時代出土遺物（14）　Ｋ１調査区　土坑10144（１・２）



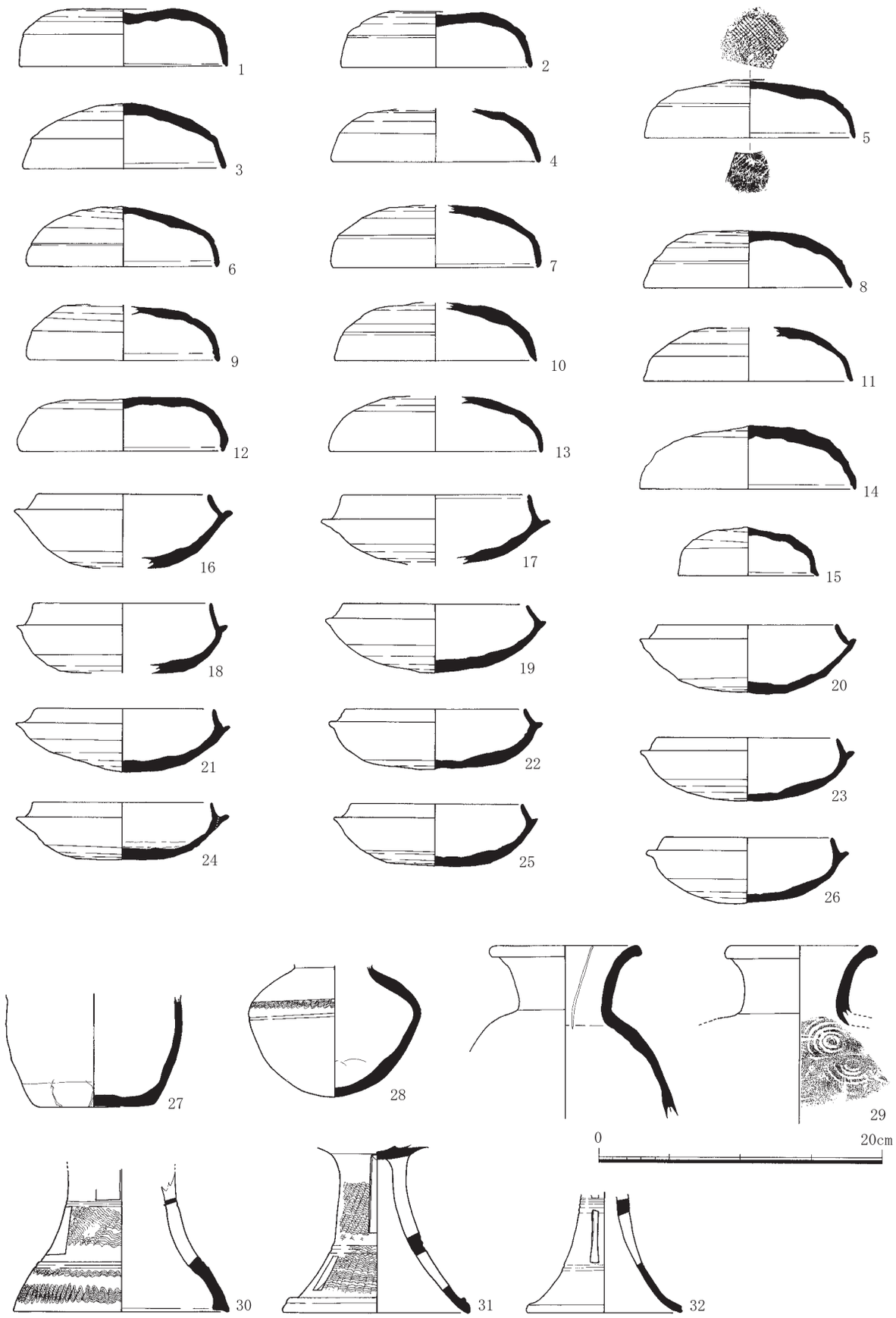
第141図　古墳時代出土遺物（15）　K１調査区　土坑10138（１～24）



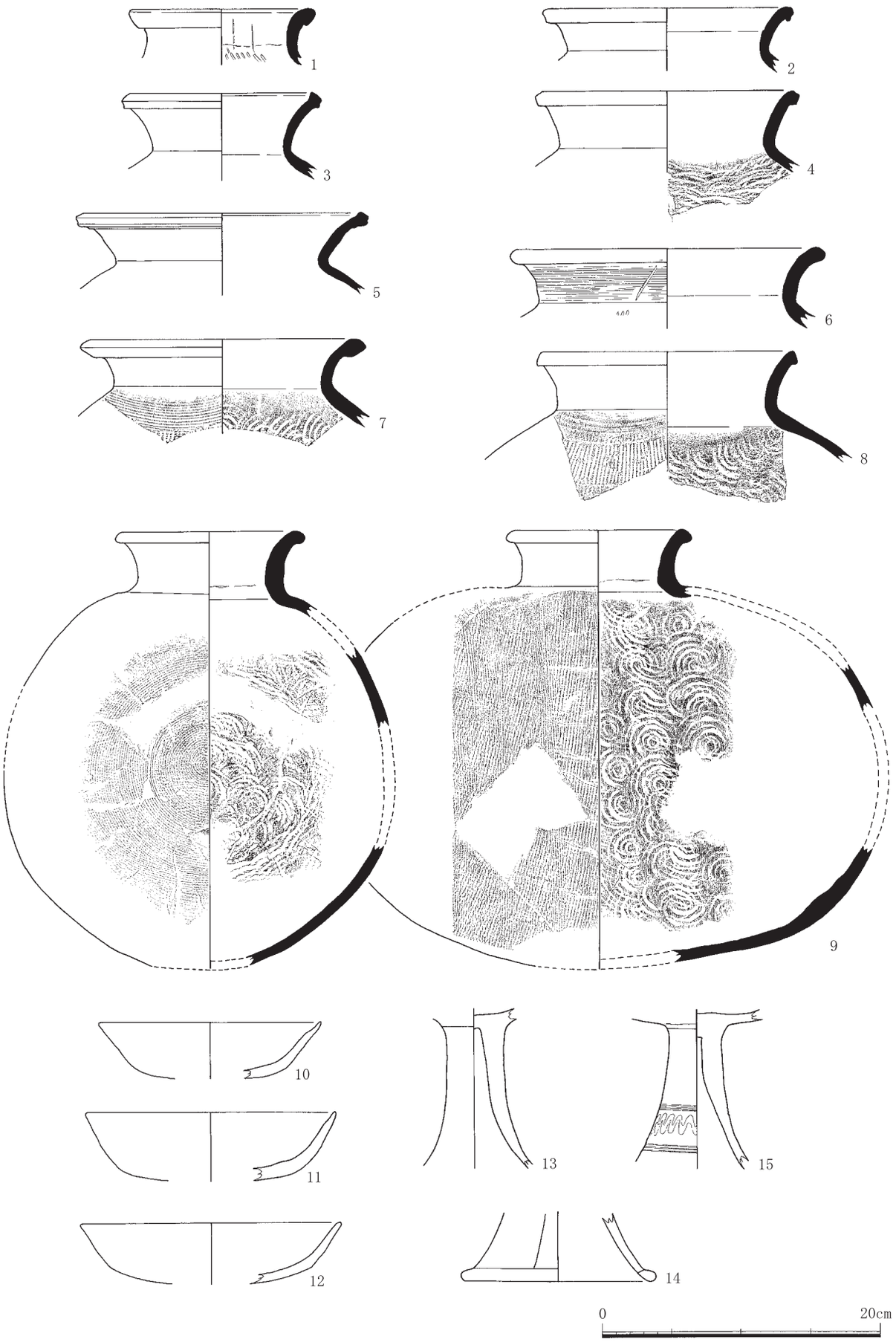
第142図　古墳時代出土遺物（16）　K１調査区　土坑10138（１～27）、土坑10003（28～46）



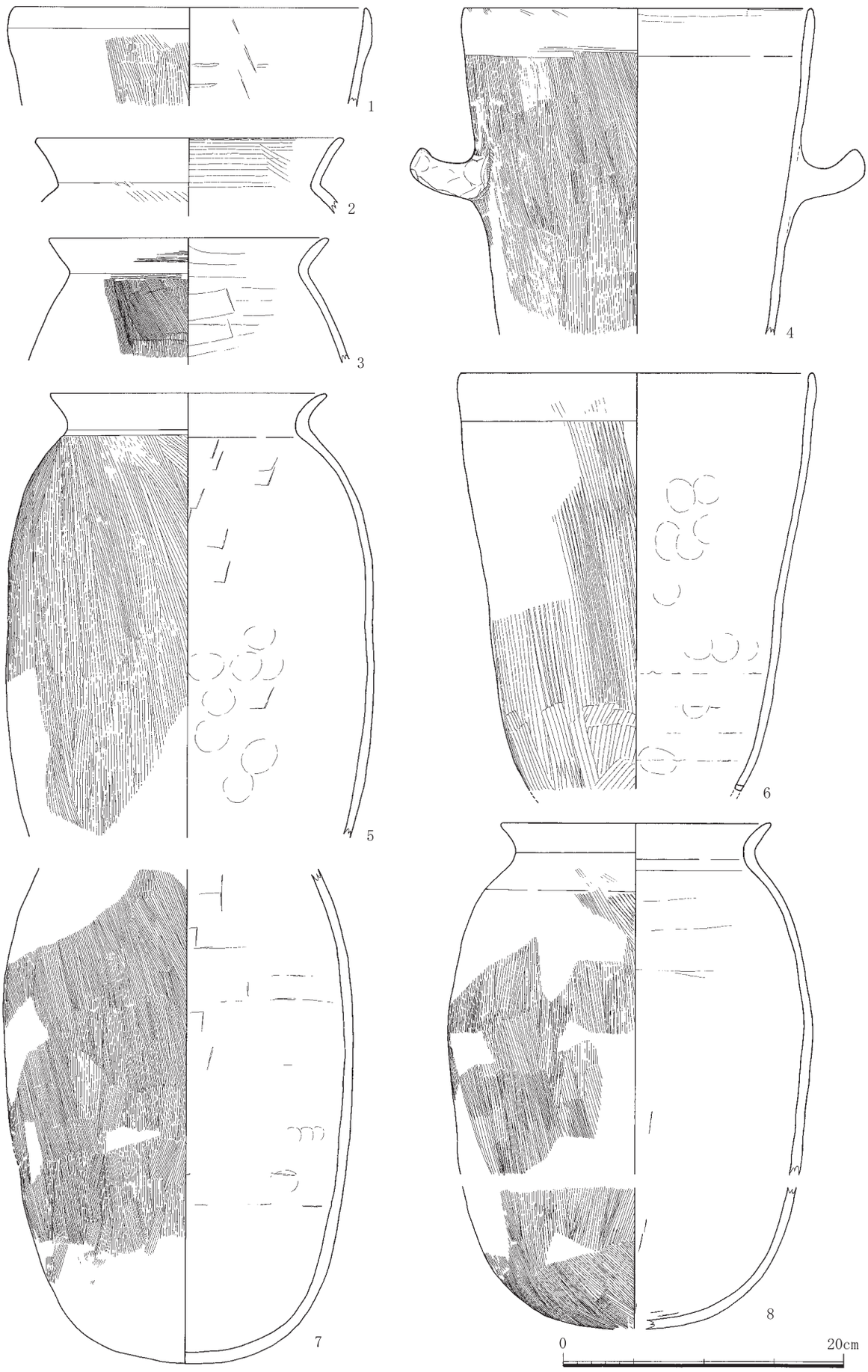
第143図　古墳時代出土遺物（17）　Ｋ１調査区　土坑10003（１～22）



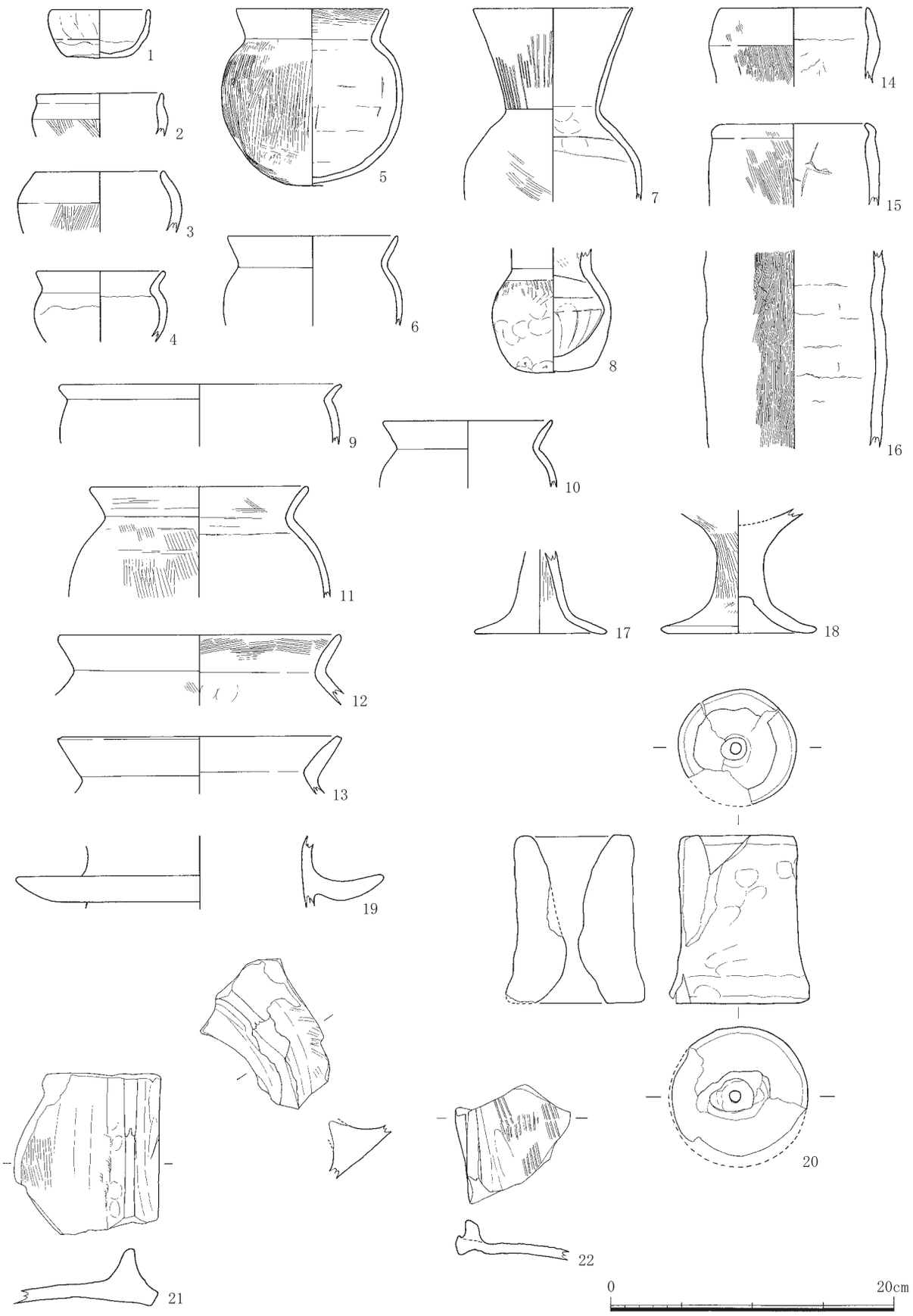
第144図　古墳時代出土遺物（18）Ｋ１調査区　流路08013（１～32）



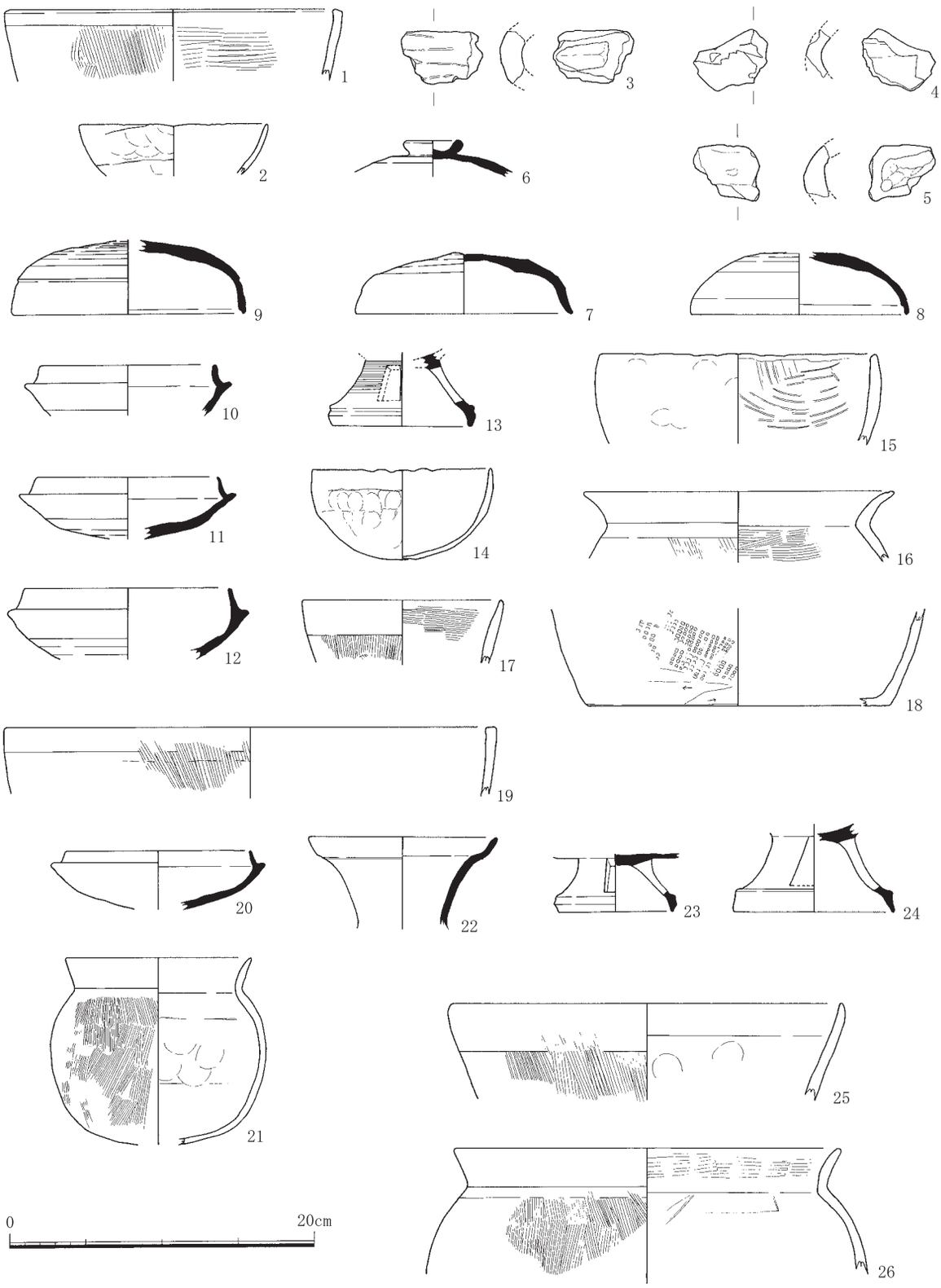
第145図　古墳時代出土遺物（19）　K１調査区　流路08013（１～14）



第146図　古墳時代出土遺物（20）　Ｋ１調査区　流路08013（１～８）

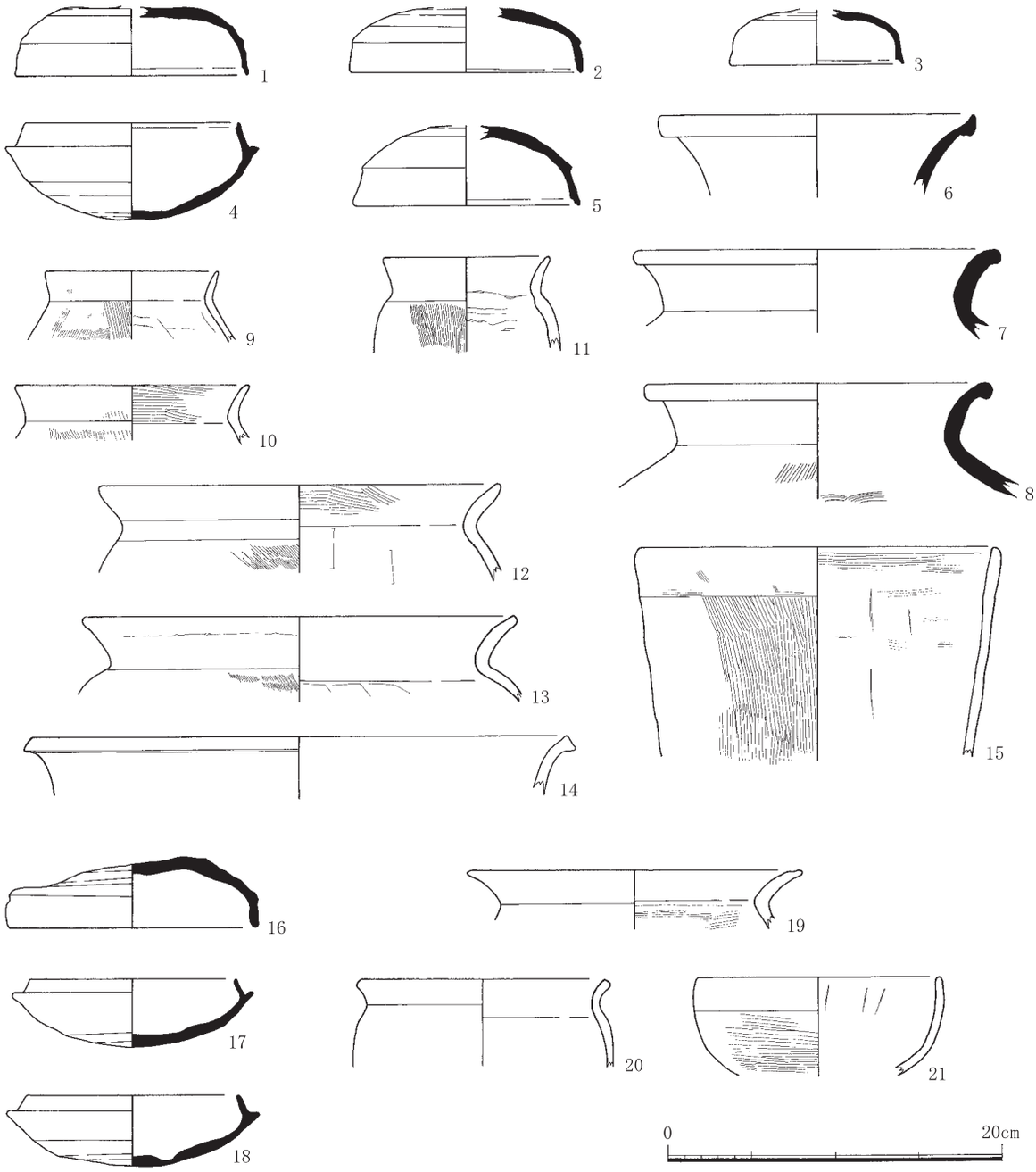


第147図　古墳時代出土遺物（21）　Ｋ１調査区　流路08013（１～22）

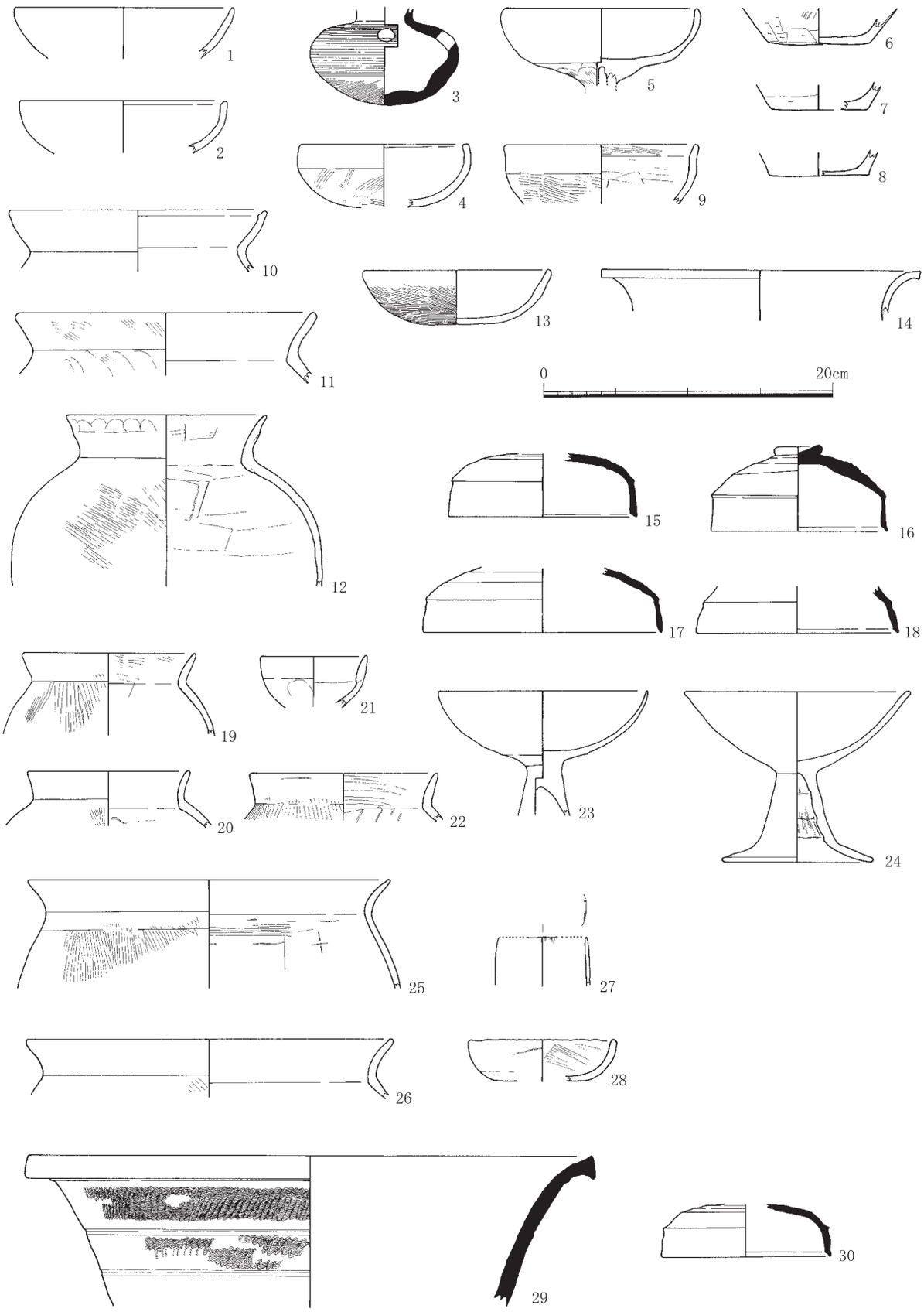


第148図　古墳時代出土遺物（22）

Ｋ１調査区　ピット10118（１・２）、10136（６）、竪穴10046（３）、溝10132（４）、ピット09001（26）、竪穴09060（９～19）、09061（22～24）、溝09034（5）、09039（20・21・25）

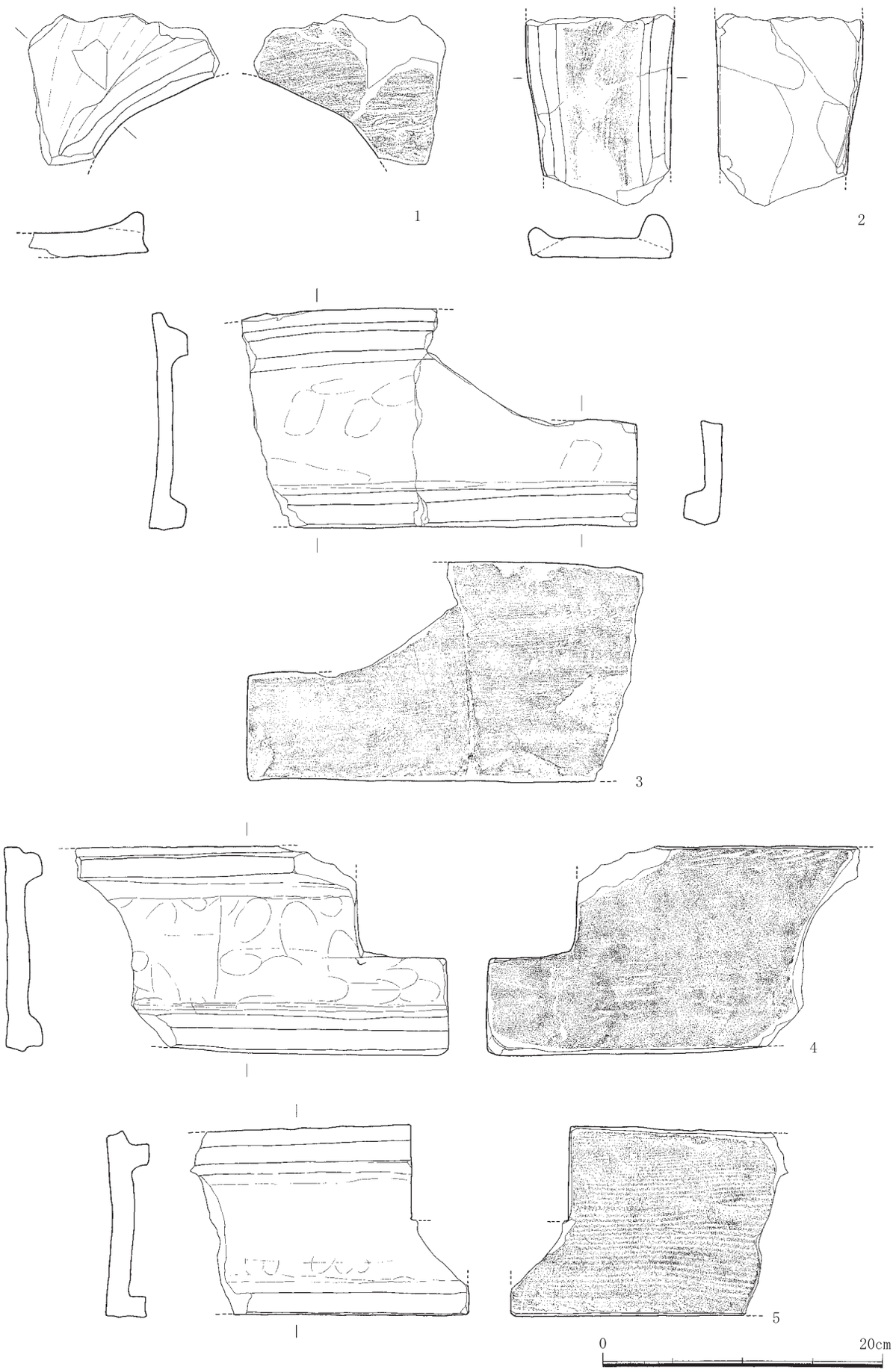


第149図　古墳時代出土遺物（23）　K１調査区　溝09062（１～15）包含層出土（16～21）

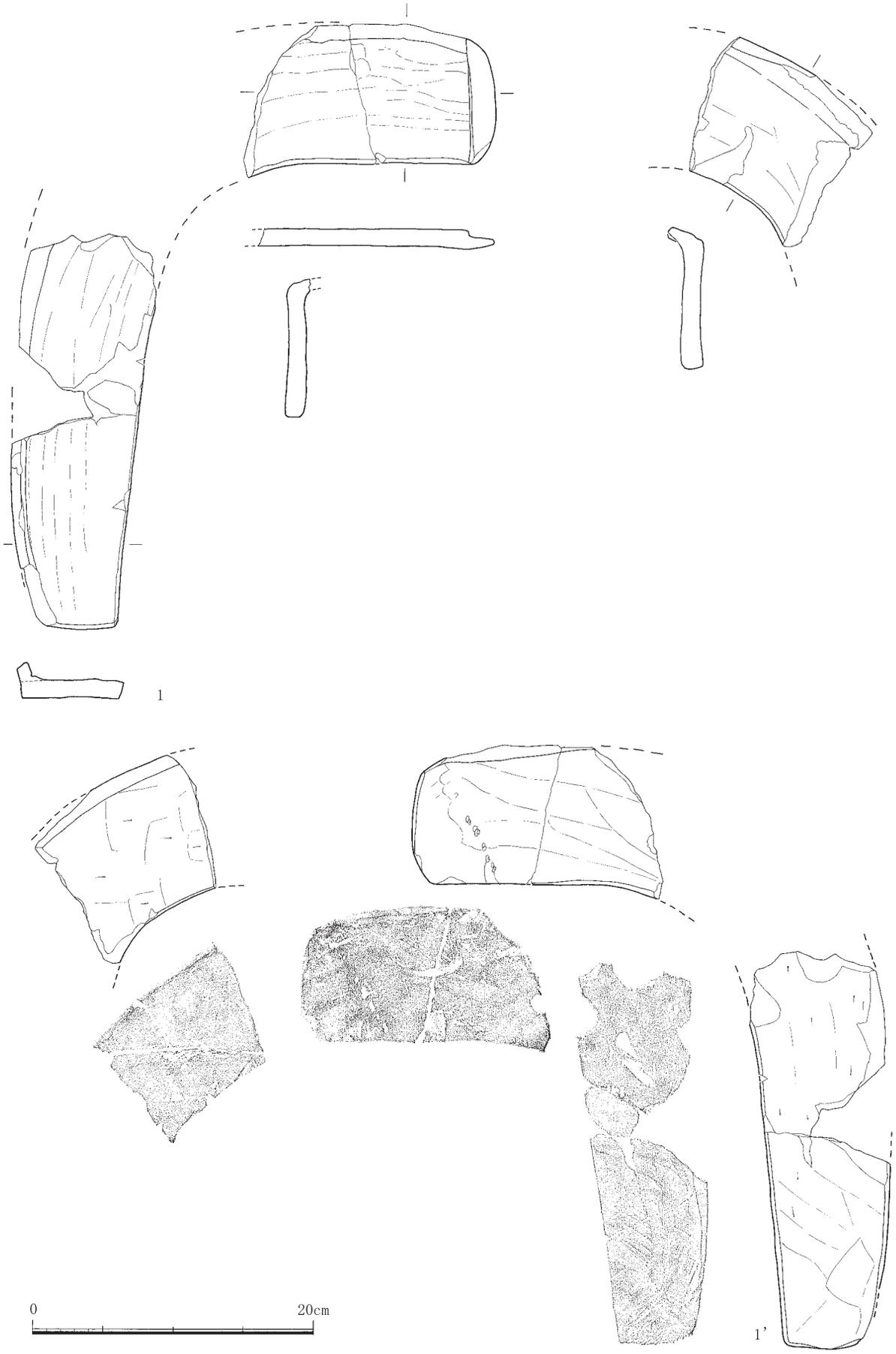


第150図　古墳時代出土遺物（24）

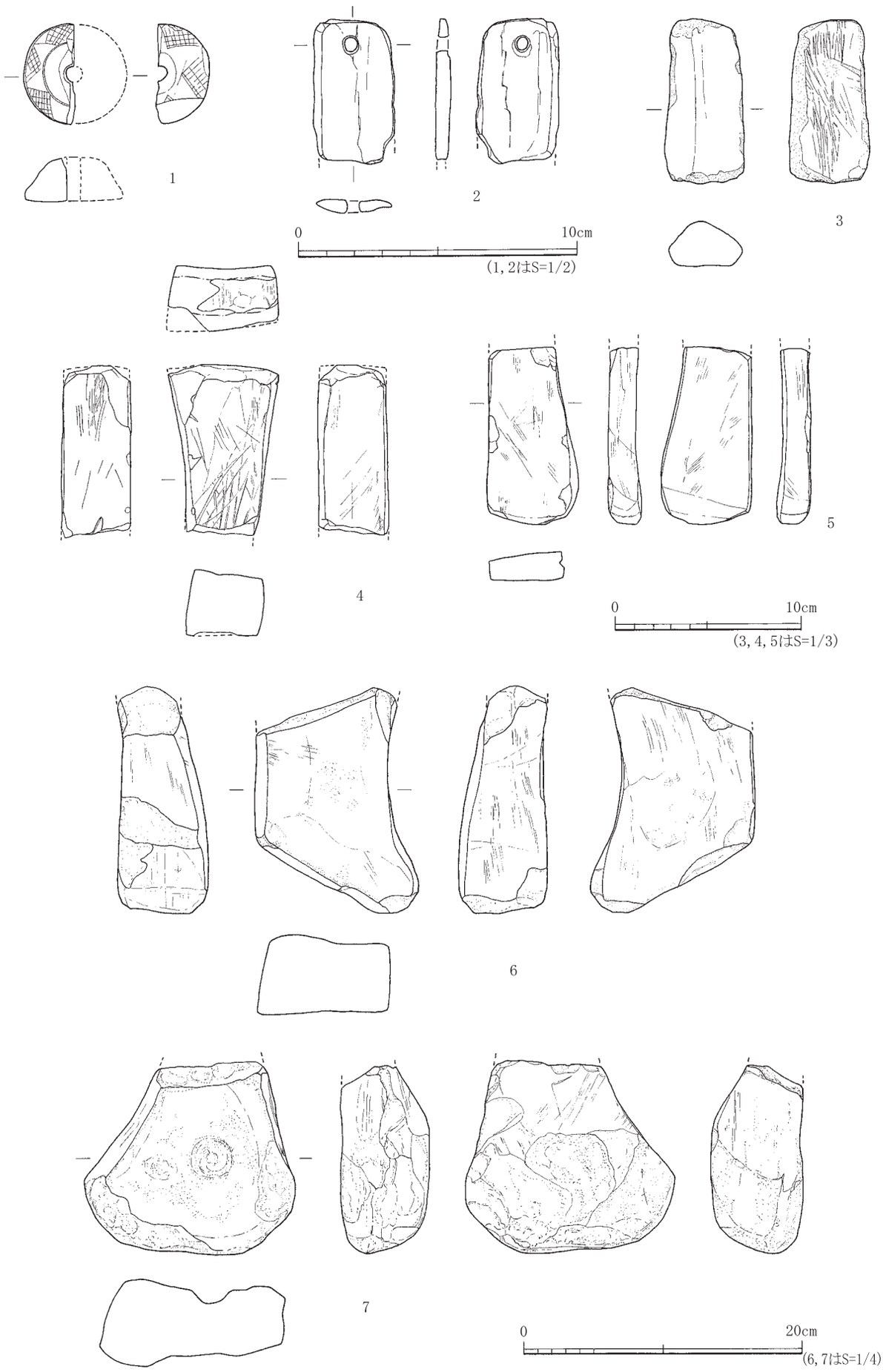
Ｋ３調査区　土坑09150（１・２）、09149（５）、09089（10）、09157（11）、溝09136（３・４）、09134（６）、ピット09107（７）、09163（９）、09197（12）包含層出土（８・13・14）　　ＨＴ２調査区　大溝（15～28）
ＵＫ調査区　大溝001（29・30）



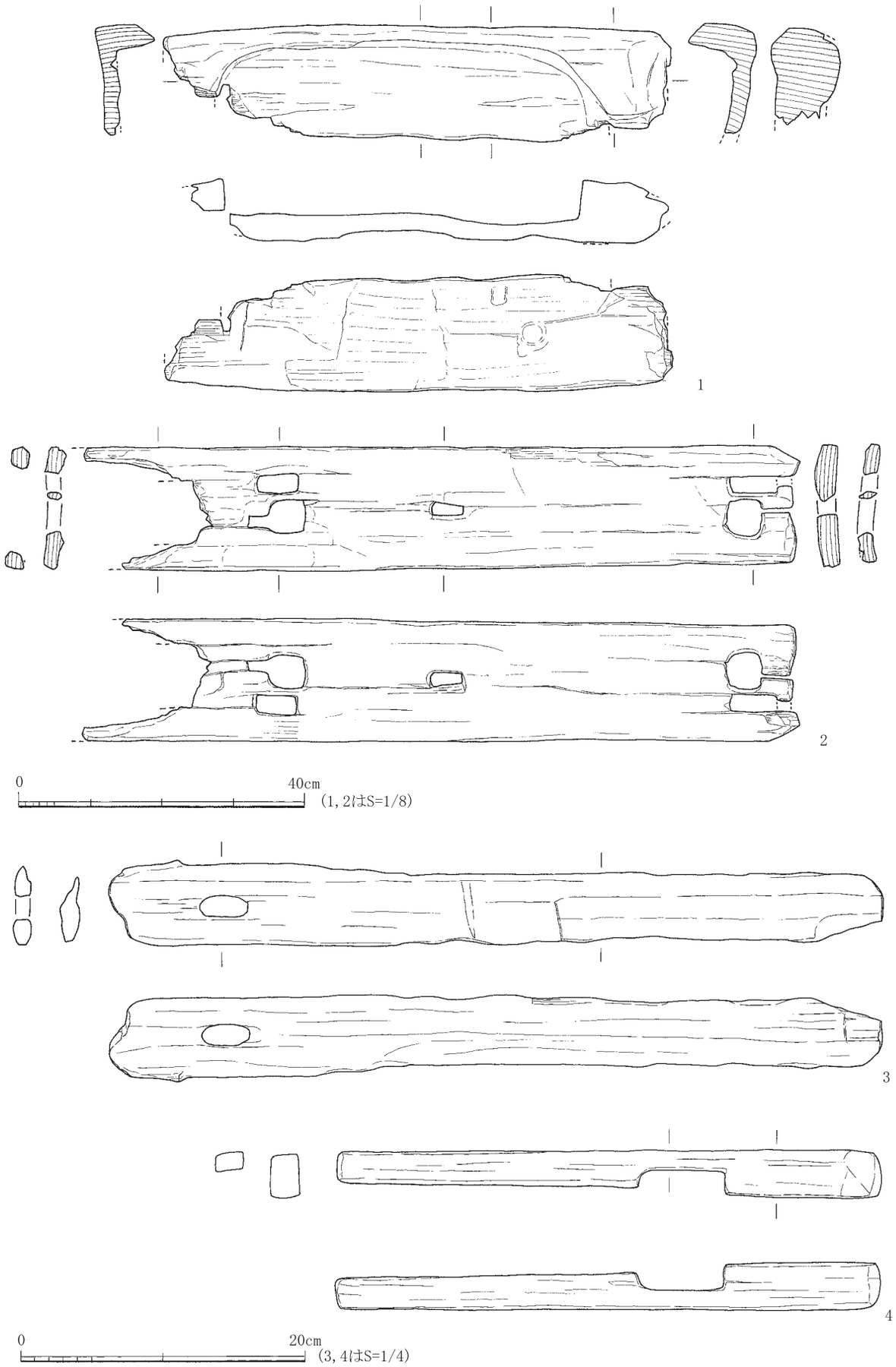
第151図　古墳時代出土遺物（25）　U字形板状土製品



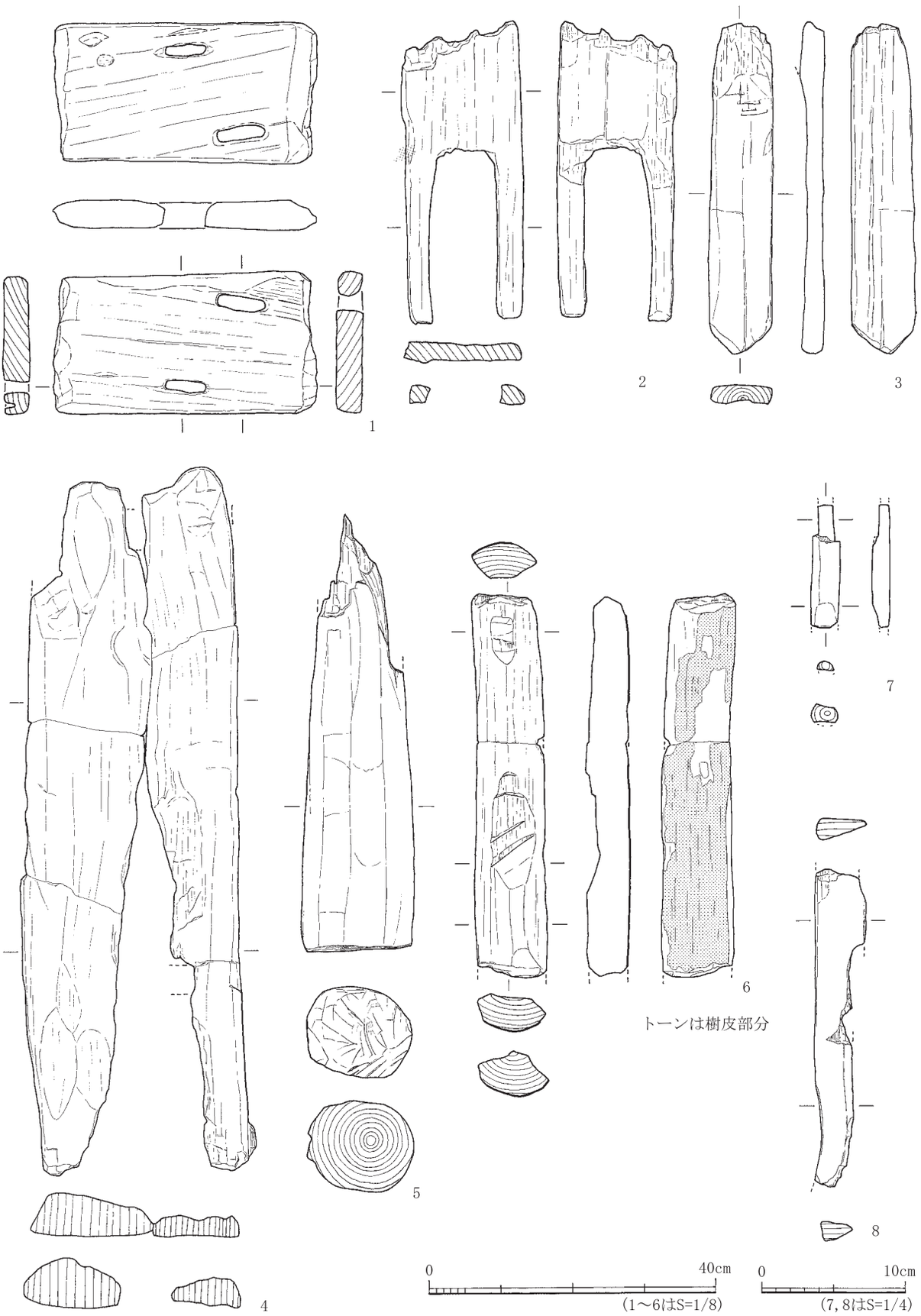
第152図　古墳時代出土遺物（26）　U字形板状土製品



第153図　古墳時代出土遺物（27）　石製品



第154図　古墳時代出土遺物（28）　木製品



第155図　古墳時代出土遺物（29）　木製品

第６項 ＵＫ調査区

１．集落を西限する大溝

大溝ＵＫ－００１出土遺物（第150図29・30、第155図２・７・８）

大溝ＵＫ－００１からは、須恵器、土師器などが出土した。そのうち図示し得たのは２点である。

150－29・30は須恵器で、甕（150－29）、坏蓋（150－30）などがある。

これらのほかに木製品が３点出土している。

155－２は建築部材、155－７・８は用途不明である。

第７項　ＨＴ２調査区

１．集落を西限する大溝

大溝ＨＴ２出土遺物（第150図15 ～ 28）

大溝ＨＴ２からは、須恵器、土師器、製塩土器などが出土した。そのうち図示し得たのは14点である。

150－15 ～ 18は須恵器で、坏蓋（150－15・17・18）、高坏蓋（150－16）などがある。

150－19 ～ 26は土師器で、甕（150－19・20・22・25・26）、坏（150－21）、高坏（150－23・24）などがある。

150－27・28は製塩土器で、27はコップ形、28は浅鉢形である。

第９節　飛鳥時代以降の遺物

第１項　Ｋ２調査区

土坑Ｋ２－０４０４９出土遺物（第156図６）

埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

156－６は土師器で、皿の破片と思われる。底部は大部分を欠損しているが平坦な広い底部で、口縁の立ち上がりは低く外上方に開いて終わる。口縁端部は丸く収める。

土坑Ｋ２－０４０５０出土遺物（第156図１、図版42）

埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

156－１は黒色土器Ｂ類で、椀である。比較的平坦な狭い底部から、口縁部が内弯しつつ外上方に立ち上がるもので、全体的に丸みを帯びた形状を呈する。底部外面周縁に、三角形状の断面を呈する貼り付け高台が認められる。見込みには３条線単位で十字形状に描いた暗文を施しており、体部内面には円周に沿った状態で、外面には４分割した密なヘラミガキを施している。

土坑Ｋ２－０４０５５出土遺物（第156図２、図版42）

埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。そのうち図示し得たのは３点である。

いずれも黒色土器Ｂ類で、椀および椀の破片である。

156－２はほぼ完全な形状に復元可能な椀である。比較的平坦な狭い底部から、口縁部が内弯しつつ外上方に立ち上がるもので、全体的に丸みを帯びた形状を呈する。底部外面周縁に、低い逆台形状の断面を呈する貼り付け高台が認められる。見込みには３条線単位で、中心で交わる３方向の、放射状の暗文を施しており、体部内面には円周に沿った状態で、外面には４分割した密なヘラミガキを施している。

土坑Ｋ２－０４０５７出土遺物（第156図３～５、図版42）

埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。そのうち図示し得たのは３点である。

156－３は黒色土器Ｂ類で、椀である。口縁部のごく一部を欠損する。比較的平坦な狭い底部から、口縁部が内弯しつつ外上方に立ち上がるもので、全体的に丸みを帯びた形状を呈する。底部外面周縁に、三角形状の断面を呈する貼り付け高台が認められる。見込みには平行線状の暗文を施しており、体部内面には円周に沿った状態で、外面には４分割した密なヘラミガキを施している。

156－４は体部以上の破片で、156－５は底部の破片である。両者を合体すると、３に似通った形状に復元できる。同一固体の可能性もある。

土坑Ｋ２－０４０５９出土遺物（第156図８）

埋土内より土師器、黒色土器Ｂ類などが出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

156－８は土師器で、坏の破片である。平坦な広い底部で、口縁の立ち上がりは低く外上方に開いて終わる。口縁端部を丸く収める。

溝Ｋ２－０４０１０出土遺物（第156図７、図版42）

埋土内より土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

156－7は土師器で、坏の破片である。平坦な底部で、口縁の立ち上がりは、わずかに内弯しつつ、低く外上方に開いて終わる。口縁端部はわずかに外側に摘み出す。

第２項　Ｋ１調査区

流路Ｋ１－０７００１出土遺物（第156図12、図版57）

流路Ｋ１－０７００１からは須恵器、土師器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

156－12は須恵器で、長頸壺である。口縁部を欠損するが、それ以外はほぼ完形である。平坦な底部で、体部は直線的に高く外上方に立ち上がる。体部上位は大きく低く内弯して終わる。頸部は細長く、直立した後わずかに外反する。頸部上半外面に２条の沈線が認められる。底部外面の周縁付近に高い貼り付け高台が認められる。

流路Ｋ１－０４００１出土遺物（第156図11、図版57）

流路Ｋ１－０４００１からは須恵器、土師器、黒色土器Ａ類などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは１点である。

156－11は須恵器で、長頸壺である。頸部以上を欠損するが、それ以外はほぼ完形である。平坦な底部で、体部は直線的に高く外上方に立ち上がる。体部上位は大きく低く内弯して終わる。底部外面の周縁付近に高い貼り付け高台が認められる。

Ｋ１調査区包含層出土遺物（第156図10）

Ｋ１調査区では、飛鳥時代以降に比定される包含層から、わずかではあるが遺物が出土している。ここではそのうち１点を図示した。

156－10は須恵器で、坏蓋である。扁平な円板状の天井部で、周縁がごくわずかに一段下がり、口縁端部をわずかに下方に摘み出しているため、外側に面を成す。天井部外面中央に擬宝珠つまみを有する。

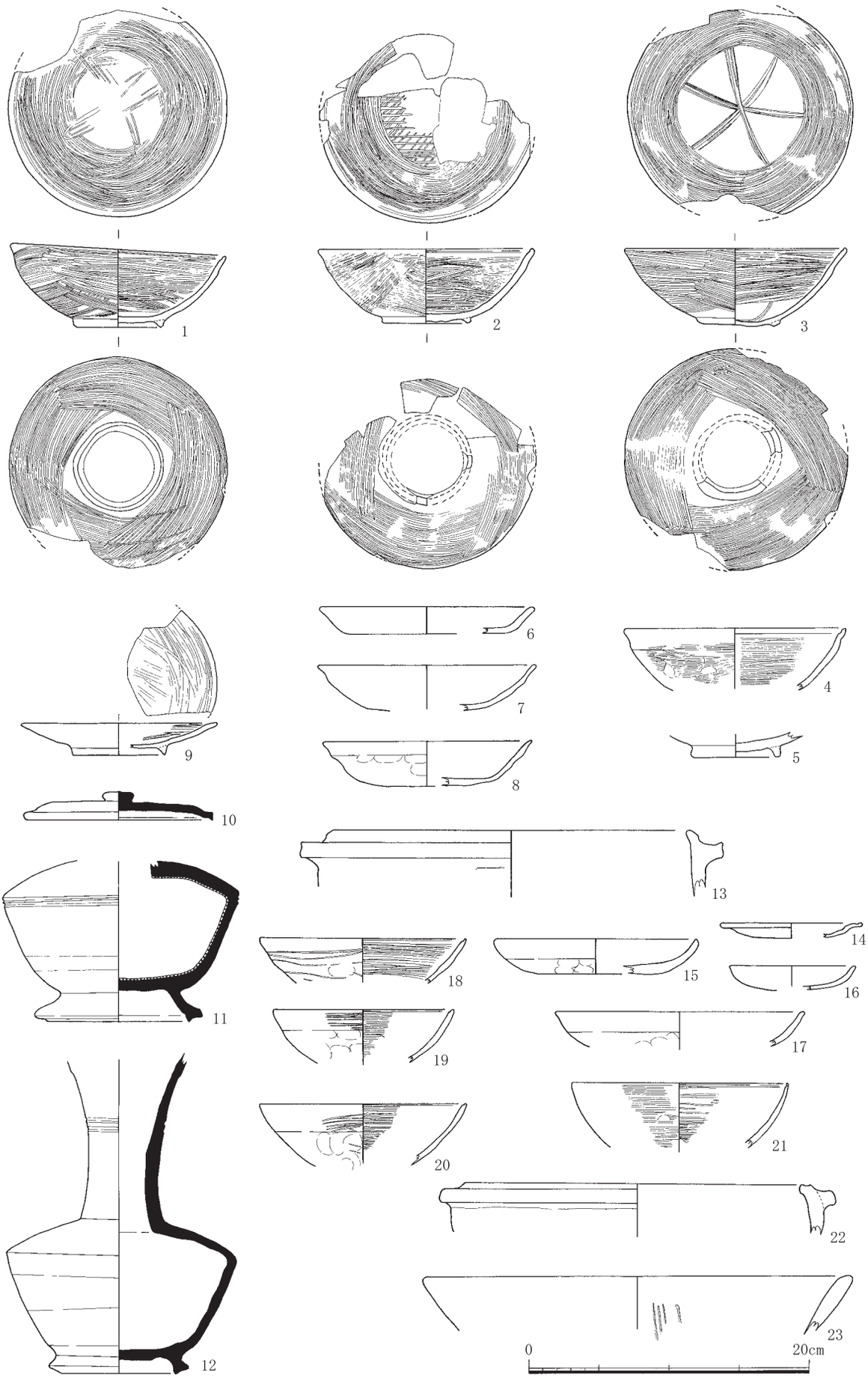
第３項　ＵＫ調査区

平安時代の遺構出土遺物（第156図９）

平安時代の遺構からは、土師器、黒色土器Ａ類などが出土した。図示し得たのは１点である。

156－９は土師器で、高台付の小皿である。平坦な底部で、口縁の立ち上がりはごく低く外側に開いて終わる。端部は外側に摘み出している。底部外面周縁付近に三角形状の断面を呈する貼り付け高台が認められる。内面にヘラミガキが認められる。

調査区の南東半部を平行して東西方向に走る溝からの出土である。



第156図　飛鳥時代以降出土遺物　　Ｋ１・Ｋ２・Ｋ４・ＨＴ２調査区

第4項　K４調査区

K４調査区包含層出土遺物（第156図14 ～ 23）

K４調査区では、飛鳥時代以降に比定される包含層から、わずかではあるが遺物が出土している。ここではそのうち10点を図示した。

156－14 ～ 17・22は土師器で、小皿（156－14・16）、皿（156－15・17）、羽釜（156－22）などがある。小皿には、口縁部が低く短く外反し、端部を外上方に摘み出したあと丸く収めるもので、いわゆる「ての字」状を呈するもの（156－14）と、口縁の立ち上がりが、内弯しつつ外上方へ低く開くもの（156－16）とがある。

皿（15･17）は、口縁端部付近に微妙な差異がみられるものの、小皿16と同様の形状を呈する。

羽釜（156－22）は体部上端と口縁部の小片であるが、口縁部は体部上端を内上方へ軽く摘み出すことで形成される特異なものである。体部上端外面に低いタガが貼り付けられる。

156－18 ～ 21は瓦器で、いずれも椀の破片である。口縁が、内弯しつつ外上方へ立ち上がる丸みを帯びた形状を呈するもの（156－21）と､口縁が比較的直線的に外上方へ立ち上がるもの（156－18 ～ 20）とがある。前者には内・外面ともに密なヘラミガキがみられるが、後者は、内面のヘラミガキは密であるが、外面は粗く簡略化した感がある。

156－23は陶器で、すり鉢の小片である。内面に３条単位の条線がわずかに残る。

第５項　ＨＴ２調査区

ＨＴ２調査区包含層出土遺物（第156図13）

ＨＴ２調査区では、飛鳥時代以降に比定される包含層から、わずかではあるが遺物が出土している。ここではそのうち１点を図示した。

156－13は土師器で、羽釜の破片である。体部上端と口縁部の小片であるが、口縁部は体部上端を内上方へ軽く摘み出すことで形成される特異なものである。体部上端外面に低いタガが貼り付けられる。

第３章　総括

第１節　遺構の変遷

弥生時代

管廊部分の調査からは、主要施設部分の調査成果を追補する成果に加えて、新たな知見をも得ることができた。

検出された遺構のうち、最も前出と考えられるのはＫ１調査区の流路である。川底付近に埋積した砂から縄文土器と弥生土器が供伴して出土しており、この流路は弥生時代前期のものと考えられる。主要施設部分の調査では、弥生時代前期に属する遺構は認められなかったため、この流路が一連の調査で検出された遺構のうち、最も前出のものと言える。

次に遺構が認められたのは、弥生時代中期である。

平成18年度に実施されたＤ－２調査区（Ｄ調査区東半部）の調査で、北から南へ舌状にのびる微高地（T. P. 0.4ｍからT. P. ±０ｍの地点）が確認された。この微高地の上面で遺構が認められたが、これらの遺構は出土した土器から弥生時代中期に属するものと判明した。微高地は緩く傾斜しながら東方および南方へ広がる様相を呈していたが、南方約10ｍのＦ調査区では対応する面に遺構が存在しなかったため、舌状微高地の南西端部付近と考えられた。一方、Ｋ１調査区ではほぼ全域で遺構が検出されたが、平成16年度に実施したＣ調査区の断ち割り調査では同時代の遺構は確認されておらず、したがって集落の広がりはＣ調査区の北西端部付近にまで及んでいたものと考えられ、一連の調査によって、集落の南半部が確認できたことになる。

検出された遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、土坑、溝、ピットなどがあり、これらの遺構は第12面と第11面の２面の遺構面でみつかっている。

第12面には竪穴住居１棟、土坑、溝、ピットなど、第11面には竪穴住居２棟、掘立柱建物１棟、方形周溝墓１基、土坑、溝、ピットなどが多数認められた。

各遺構からは弥生土器、石器、木器などが出土した。これらの出土遺物を検討した結果、第12面の遺構は弥生時代中期前葉（第Ⅱ様式）、第11面の遺構は弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式古段階）に属するものと考えられた。今回の一連の調査では弥生時代集落の一端を把握したに過ぎず、この集落は北方に広く展開するものと考えられる。

古墳時代

古墳時代に属する遺構は、主要施設部分の調査で検出された古墳時代中期から後期の集落と一連のもので、掘削深度が同時期の対応面が存在すると予想されるところまで及ばなかったＨＫ調

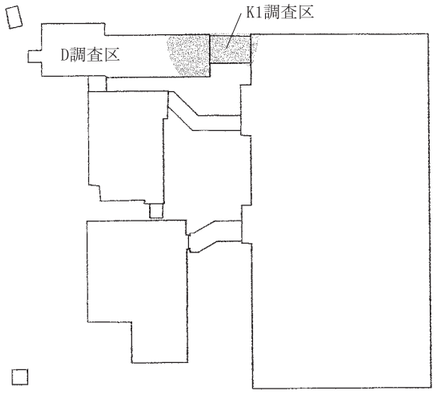
表１　蔀屋北集落編年時期区分及び須恵器編年対照表

『陶邑』 III 中村 浩氏案 1978・2001			田辺昭三氏 旧案 1968		田辺昭三氏 新案 1981			森 浩一氏案 1958 1962		山田邦和氏案 1998			西 弘海氏 飛鳥編年 1986	暦年代（参考）	蔀屋北編年時期区分
I型式	第1段階	前期								I期	前期	古段階（大庭寺窯式）		5世紀前半	1期
		後期	I期	TK73型式	I期	TK73型式	一須賀2号窯段階	I期	前半						
							TK73号窯段階					新段階（高蔵寺73号窯式）		412年	
	第２段階		I期	TK216型式	I期	TK216型式		I期	前半		中期	古段階（高蔵寺216号窯式）			
	第３段階			TK208型式		TK208型式	ON16号窯段階					新段階（高蔵寺208号窯式）		5世紀中頃	2期
							TK208号窯段階								
	第４段階			TK23型式		TK23型式		I期	後半		後期	古段階（高蔵寺23号窯式）		471年	3期
	第５段階					TK47型式						新段階（高蔵寺47号窯式）		5世紀後半	
				TK47型式											
II型式	第１段階		II期	MT15型式	II期	MT15型式		II期		I期	前期	古段階（陶器山15号窯式）		6世紀前半	4期
	第２段階			TK10型式		TK10型式	TK10号窯段階					新段階（高蔵寺10号窯式）		6世紀中頃	5期前半
	第３段階			（　　）			MT85号窯段階	III型式	前半	II期	後期	古段階（陶器山85号窯式）		6世紀後半	5期後半
	第４段階			TK43型式		TK43型式			後半			中段階（高蔵寺43号窯式）		588年	
	第５段階			TK209型式		TK209型式						新段階（高蔵寺209号窯式）			
	第６段階		III期	（　　）	III期	TK217型式			末		初期（高蔵寺217号窯式古段階）		飛鳥Ⅰ 590年代～640年代	616年前後	
														641年	
														645年	
III型式	第１段階			TK217型式				IV期	前半	III期	前期	古段階（高蔵寺217号窯式新段階）	飛鳥Ⅱ 640年代～660年代	648年	
														660年	
	第２段階												飛鳥Ⅲ 660年代後半～670年代		
				（　　）		TK46型式						新段階（高蔵寺46号窯式新段階）		682～685年	
	第３段階			（　　）		TK48型式			後半		後期	古段階（高蔵寺48号窯式）	飛鳥Ⅳ 680～690年代		
														694～710年	
IV型式	第１段階		IV期	MT21型式		MT21型式		V期	前半	IV期	前期	陶器山21号窯式	飛鳥Ⅴ 690～700年代	701～710年	
	第２段階			（　　）		（　　）								716～725年	
				（　　）										749年	
				（　　）		（　　）			後半						
	第３段階			TK7型式	IV期	TK7型式					後期	高蔵寺7号窯式		753年 781～784年	
	第４段階													8世紀末	
V型式	第１段階		V期	TK122型式		MT83型式		VI期		V期				824年	
	第２段階			MT5型式											

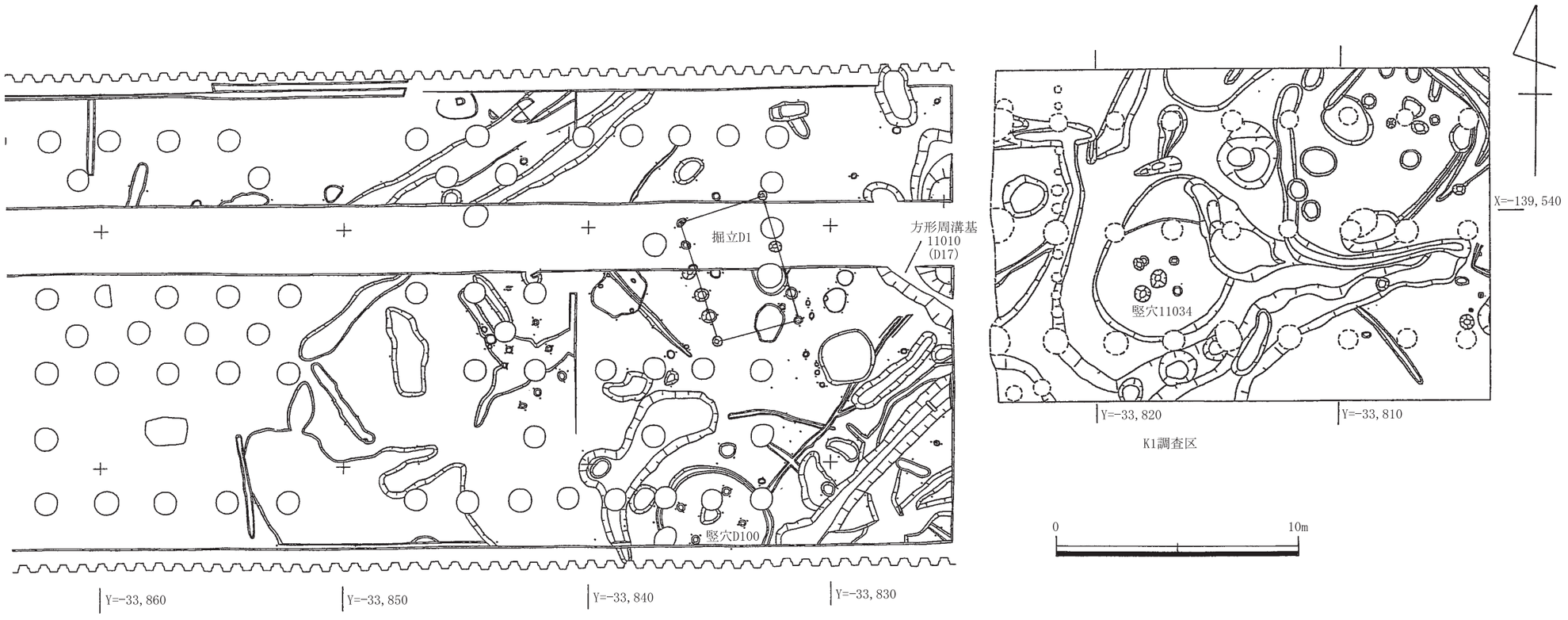
査区とＨＭ調査区以外の、すべての調査区で認められ、さらにＫ１調査区とＨＴ１調査区では、古墳時代後期中葉の遺構面が確認された。

主要施設部分の調査では、古墳時代中期から後期の集落で北東・南東・北西・西・南西の５つの居住域を設定したが、今回の調査範囲で新たな居住域を想定できるような知見は得られず、前回の成果に追認するものであった。

まずＫ５調査区では、北西居住域の南端部の一部と、その南側に北西居住域と西居住域を区画する溝を検出した。主要な遺構としては北西居住域に属する掘立柱建物２棟､区画溝１条がある。



調査区全体図



第157図　蔀屋北遺跡弥生時代中期遺構全体図

２棟の掘立柱建物には、柱穴の切り合い関係から時期差が認められたが、ともに時期を確定することはできなかった。また区画溝は、Ｆ調査区の区画溝Ｆ６２５につながるもので、そちらからの出土遺物によってⅠ型式４段階～５段階（蔀屋北３期）に属するものと考えられる。

次にＫ４調査区では、西居住域の南端部の一部と南西居住域の北端部に一部、その間に西居住域と南西居住域を区画する溝を２条検出した。主要な遺構としては西居住域に属する掘立柱建物１棟、南西居住域に属する溝１条がある。

掘立柱建物からは、時期を特定できるような遺物が出土しなかった。溝は南側に接するＥ調査区に繋がるもので、Ⅰ型式３段階（蔀屋北２期）に属するものである。２条の区画溝は切り合い関係にあり、前出の溝Ｋ４－０９００３はⅠ型式３段階（蔀屋北２期）、後出の溝Ｋ４－０９００１はⅠ型式４段階（蔀屋北３期）に属する。

Ｋ１調査区では、調査区の全域が北東居住域内に含まれており、第10面で古墳時代中・後期の遺構を検出した。主要な遺構としては竪穴住居２棟、掘立柱建物５棟、井戸１基などがある。竪穴住居、掘立柱建物などからは、時期を特定できるような遺物が出土しなかった。井戸Ｋ１－１０１４８は、出土した須恵器からⅠ型式１段階（蔀屋北１期）に属するものと考えられ、古墳時代中・後期集落にかかわる遺構のうち、最も前出の遺構に含まれるものである。

また、Ｋ１調査区では調査区の南東端部付近にのみ認められた第９面で、竪穴住居２棟が検出された。出土した須恵器から、Ⅱ型式２段階（蔀屋北５期）に属するものと考えられた。

さらに、第８面で調査区のほぼ中央で北東から南西方向に流れる流路が検出された。出土した須恵器から、Ⅱ型式２段階～４段階（蔀屋北５期）に属するものと考えられた。この流路の影響は、第９面および第10面にまでおよんでいた。

Ｋ２調査区では北東居住域の西端部および２条の区画溝を確認し、その西側では、Ｆ調査区で検出された古墳時代後期の耕作地を確認した。

区画溝の東側では、北東居住域に属する古墳時代中・後期の遺構が多数検出された。主要な遺構としては竪穴住居３棟、掘立柱建物５棟、柵列１列、土坑などがある。

竪穴住居は中期のものが２棟と後期のものが１棟認められた。５棟の掘立柱建物からは時期を特定できるような遺物が出土しなかったが、掘立柱建物Ｋ２－４は、柱穴のひとつがⅠ型式５段階（蔀屋北３期）に属する竪穴住居Ｋ２－１のカマドの下から検出されたため、Ⅰ型式４段階以前と考えられる。

北東居住域を区画する２条の溝のうち、外側の区画溝Ｋ２－１２００９はＢ調査区の区画溝１３０２４０から続くもの、内側の区画溝Ｋ２－１２０１０はＢ調査区の区画溝１３０６７０から続くものと考えられる。

区画溝Ｋ２－１２００９の西側は、調査区では畦畔などは検出されなかったが、西に隣接するＦ調査区の北東端部から続く、古墳時代後期の小規模な生産地と考えられる。

Ｋ３調査区では、全域が南西居住域に含まれる。主要な遺構としては大壁建物１棟、竪穴住居

２棟、掘立柱建物３棟、井戸１基、落ち込み１基などのほかに、土坑、ピット、溝などが多数検出された。

大壁建物Ｋ３－１は、出土した須恵器からＩ型式３段階（蔀屋北２期）に属するものと考えられた。また、この建物は、蔀屋北1期に属する井戸０９１９２の埋没後に、完全に重複した状態で建てられている。蔀屋北遺跡では、これまで大壁建物はみつかっておらず、唯一の類例となる。

大壁建物Ｋ３－１の北東側で検出された竪穴住居Ｋ３－２は、Ｋ３－１と同様に、出土した須恵器からＩ型式３段階（蔀屋北２期）に属するものと考えられた。

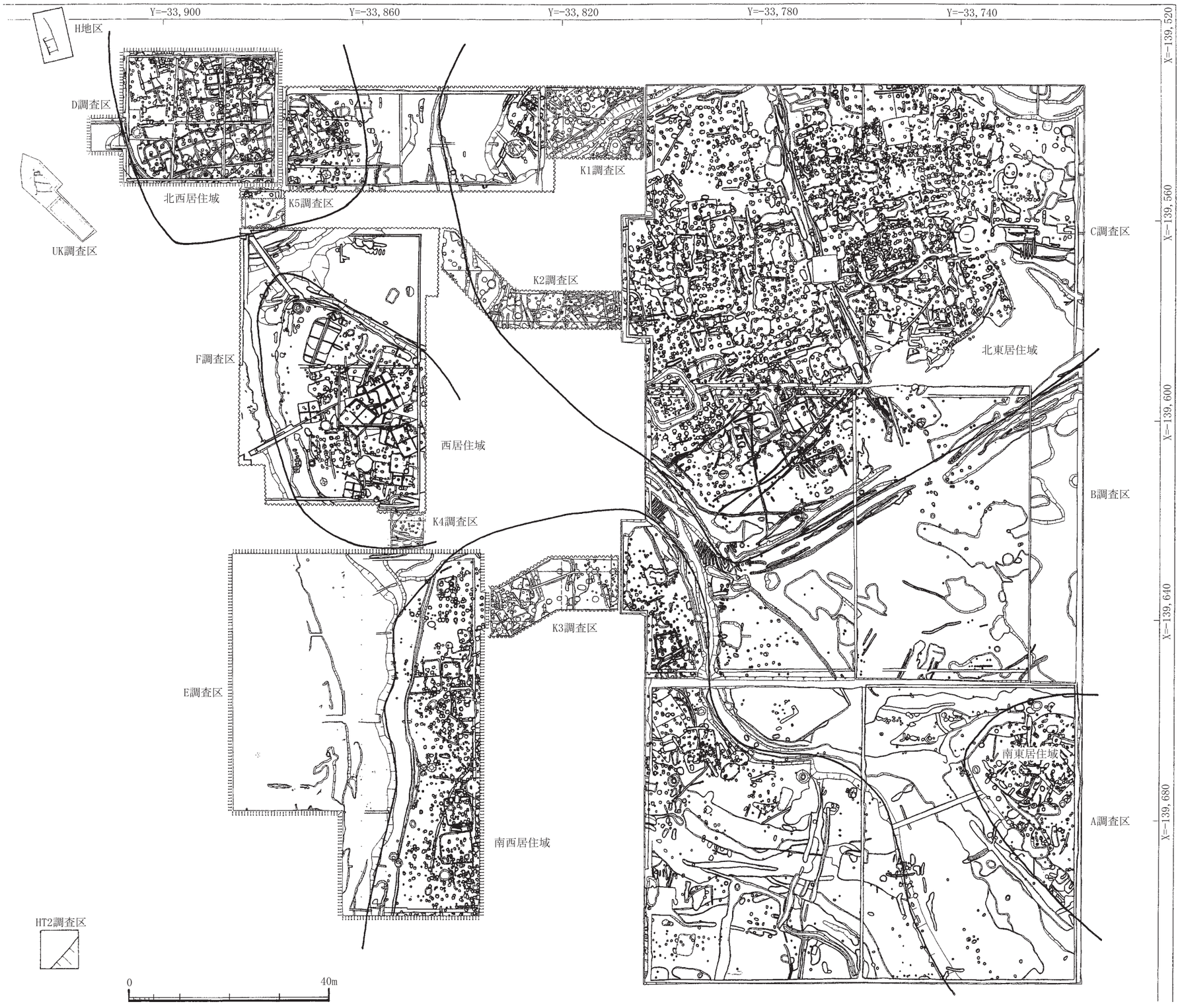
遺物が出土せず、所属時期不明の竪穴住居Ｋ３－３を加えた３棟は、大壁建物と竪穴住居の違いはあるが、平面形態が歪な長方形という似通った形状を呈している。この形状の住居は、南西居住域を含めたほかの居住域では認められない。また、この３棟が、検出された建物の中では初現期に属していることが注目される。

ＵＫ調査区とＨＴ２調査区では、大溝が検出された。ともに調査区が狭小なため、検出できたのがＵＫ調査区では北側肩部付近、ＨＴ２調査区では北西側肩部付近のごく一部に限られたため、溝幅等は確認できなかったが、特にＨＴ２調査区で大溝が検出されたことは、大溝がＥ調査区からＨＴ２調査区にかけて東北東―西南西の方向に向かい、その後河内湖へと繋がってゆくことを想定させるものである。

ＨＴ１調査区は、古墳時代中期と後期の遺構検出面が異なるなど、他とは違う状況を呈しておる。特に古墳時代中期の面では、遺構密度の希薄さなど集落外の様相を呈していると考えられたが、調査区が最も近いＣ調査区から東へ100m隔てた地点にあり、その間は未調査地であることから、集落の東限を把握することは今後の課題のひとつである。

飛鳥時代以降

古墳時代後期に集落が廃絶するが、その頃には北端部に概ね東から西へ流れる自然流路が存在していた。この流路は、Ｃ調査区の北西端部からＦ調査区の北端部にかけて認められていたもので、平安時代までほぼ同じ位置に存在していた。飛鳥時代から平安時代中期にかけては、周辺には小規模な区画の水田や畑などが認められ、付近一帯は耕作地となっていた。この間の集落遺構は、Ｅ調査区の南東端部で検出されている。平安時代後期以降は讃良郡にも条里制が施行されており、条里水田が八丁堤道より北側で認められている。集落遺構は平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものがＣ調査区、Ｆ調査区、Ｄ調査区などで検出されており、Ｋ２調査区、ＵＫ調査区で検出された遺構も、これらと一連のものと考えられる。



第158図　蔀屋北遺跡古墳時代中・後期遺構全体図

第２節　古墳時代中・後期の土器・土製品

はじめに

蔀屋北遺跡の古墳時代の出土土器については、先に刊行した『蔀屋北遺跡Ⅰ』（以下報告書Ⅰと呼称する）において、蔀屋北１～５期の編年をおこなった。今回報告する土器群も、報告書Ⅰと同様、土器の器種分類、形態分類をおこない、土器群の特徴を分析し、蔀屋北１～５期に編年していきたい。

報告書Ⅰ及び本報告で分類の対象にしたのは須恵器、土師器、韓式系土器（土製品も含む）、須恵器系土器、製塩土器である。各土器の定義を概念図にすると次のとおりになる。

土師器

韓式系土器　→（硬質）→（舶載品）陶質土器

→（国産）初期須恵器 ⟶ **須恵器**

→　瓦質土器・黒色研磨土器

（軟質）→（国産）韓式系（軟質）土器

→ **須恵器系土器**

第１項　蔀屋北編年の概要

第１項では、報告書Ⅰで記述した各土器の型式、及び分類の項目と、蔀屋北１～５期の編年の特徴についてその概略を説明する。須恵器の器種分類、編年は報告書Ⅰと同様中村浩氏の設定した陶邑編年[(註1)]に従って記述している。分類の基準項目は韓式系土器（土製品）、土師器、須恵器系土器、製塩土器の順に記述する。

（１）韓式系土器の分類

硬質の韓式系土器、すなわち陶質土器・瓦質土器・黒色研磨土器については、出土点数が少ないので、器種の特定にとどめている。

軟質の韓式系土器（土製品）については、壺・甕、平底鉢、甑、鍋、羽釜、移動式カマド、U字形板状土製品のそれぞれの器種で形状や調整等の要素を分類した。器種ごとの分類要素は表２にまとめた。また細部の形状の分類は第159・160図にまとめた。

①壺・甕

分類の要素は２項目で、口縁部の形状で６タイプ、体部外面に残るタタキの種類で４タイプに分類した（表２－（１）、第159図）。

②平底鉢

分類の要素は３項目で、全体の形状で４タイプ、口縁部の形状で３タイプ、外面調整で６タイ

表２　韓式系土器の分類項目

（１）壺・甕

・口縁部の形状の分類
ａ－口縁部は頸部から外反し、口縁端部下に稜線が巡り、端部は丸く終わる
ｂ－口縁部は頸部からくの字形に外方に屈曲し、端部は丸く終わる
ｃ－口縁部は頸部からくの字形に外方に屈曲し、端部は面を成す
ｄ－口縁部は頸部から上方に直立して外反し、端部は面をなす
ｅ－口縁部は頸部から上方に直立して外反し、端部は幅広い面をなす
ｆ－口縁部は頸部から上方に直立し、端部は面を成す
・外面に残るタタキの種類の分類
1－縄蓆文タタキ
2－斜格子文タタキ
3－格子タタキ
4－平行タタキ

（３）甑

・口縁部の形状の分類
Ａ－口縁端部が外反する
Ｂ－口縁部は直立し、端部は面をなす
Ｃ－口縁部は直立し、端部は内面に肥厚する
Ｄ－口縁部は直立し、端部は丸く終わる
・底部の形状の分類
ｘ－平底で底体部の境に稜がある
ｙ－平底で底体部の境に稜がない
・蒸気孔の形状の分類
ａ－底部中央に１個とその周囲に直径2.5㎝程度の円孔をめぐらす
ｂ－底部中央に１個とその周囲にａよりやや大きめの円孔をめぐらす
ｃ－底部中央に円孔を１個と周囲に4個の円弧状の孔を穿つ
ｄ－底部中央に円孔を１個、周囲に3～4個の円弧状の孔を底体部にかけて穿つ
・外面に残るタタキの種類・外面調整の分類
1－縄蓆文タタキ
2－斜格子文タタキ
3－格子タタキ
4－平行タタキ
5－ナデ・工具ナデ
6－ハケ

（５）羽釜

・口縁部の形状
Ａ－頸部から内湾しつつ外方に屈曲し、端部は内傾斜面をもつ
Ｂ－頸部からやや直立したのち外反し端部は面をなす
Ｃ－頸部からくの字型に外反し端部は丸く終わる
・鍔の形態
ａ－横方向に水平に伸び、端部は面をなす
ｂ－下外方にのび、端部は丸くおわる
ｃ－上外方にのび、端部は丸くおわる
・外面鍔から下のタタキの種類・調整
1－平行タタキ
2－ハケ

（７）Ｕ字形板状土製品

・突帯の形状
Ⅰ－粘土を両側からつまみあげなでて成形しており、断面三角形で先端はまるいタイプ
Ⅱ－粘土板の内縁に沿って断面Ｌ字型に折り返して突帯をつくるタイプ
Ⅲ－粘土板の内外縁に沿って断面台形状の突帯がはりつけられるタイプ
Ⅳ－粘土板の外縁に沿って断面Ｌ字型に折り返して突帯をつくるタイプ
Ⅴ－突帯が無いタイプ
・コーナー部の曲がり方
ａ－コーナーが角ばって曲がる
ｂ－コーナーが円弧状にまがる

（2）平底鉢

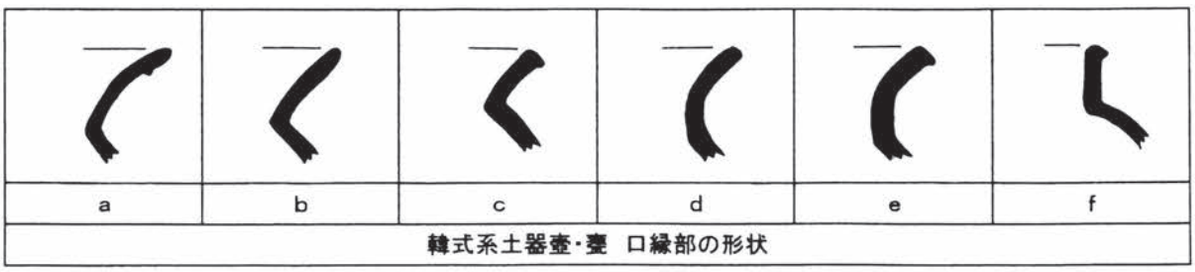
・全体の形状の分類
A－底部と体部の境にヘラケズリによる稜があり、口径が体部径より大きい
B－底部と体部の境にヘラケズリによる稜があり、口径より体部径が大きい
C－底部と体部の境にヘラケズリによる稜がなく、口径が体部径より大きい
D－底部と体部の境にヘラケズリによる稜がなく、口径より体部径が大きい
・口縁部の形状の分類
a－頸部から屈曲して外反し、端部に面を成す。
b－頸部から短く上外方に折れる
c－頸部からやや立ち上がり外反する。
・外面に残るタタキの種類・調整の分類
1－鳥足文タタキ
2－縄蓆文タタキ
3－格子タタキ
4－平行タタキ
5－ヘラナデ、ナデ
6－ハケ

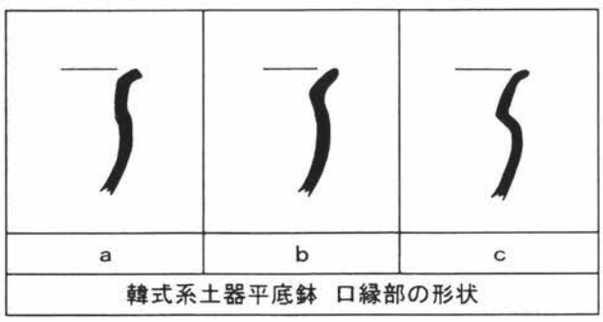
（4）鍋

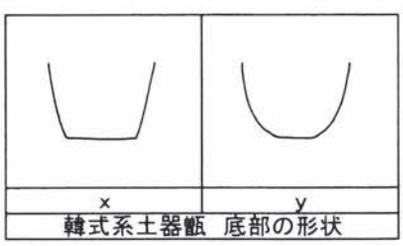
・口縁部の形状
A－口縁部は頸部からやや直立したあと外反し端部は面をなす
B－口縁部は頸部からくの字型に外反し端部は丸く終わる
・底部の形状
x－丸底
y－丸みを帯びた平底
・把手の形状
a－円柱状の把手で先端に平坦面をもつ
b－円柱状の把手で先端は丸い
c－舌状の把手
d－把手がつかない
・外面に残るタタキの種類・外面調整
1-平行タタキ
2-ハケ

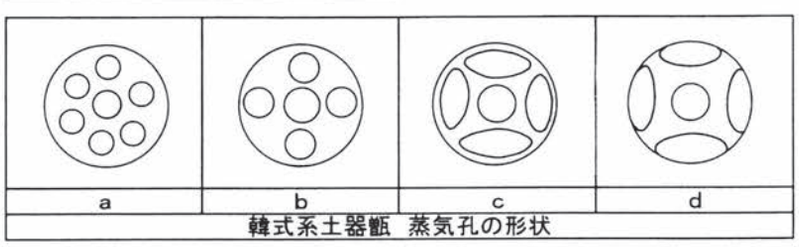
（6）移動式カマド

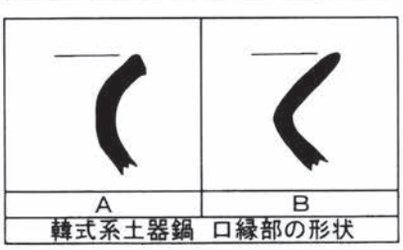
・掛け口の形状
A－内外面とも体部から屈曲し、掛け口は平坦面をなす
B－外面は体部から屈曲し、内面は体部から屈曲せず上内方にのびかけ口に平坦面をなす
C－外反して上内方にのび、端部は面をなす
D－内湾して上内方にのび、端部は面をなす
・庇の形状
x－付け庇
y－曲げ庇
・焚き口左右の凸帯の形状
a－外面に断面方形の凸帯が付く
b－外面に断面三角形の凸帯がつく
c－凸帯が無い
・外面調整
1－平行タタキ痕が残る
2－ナデ
3－ハケ調整

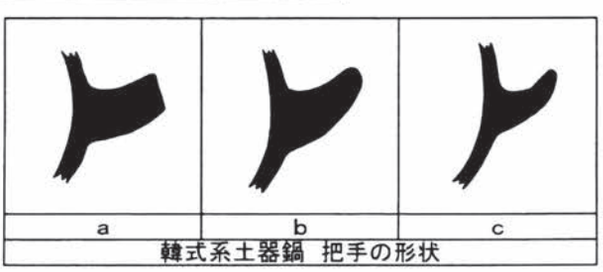


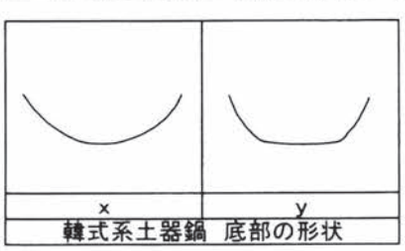




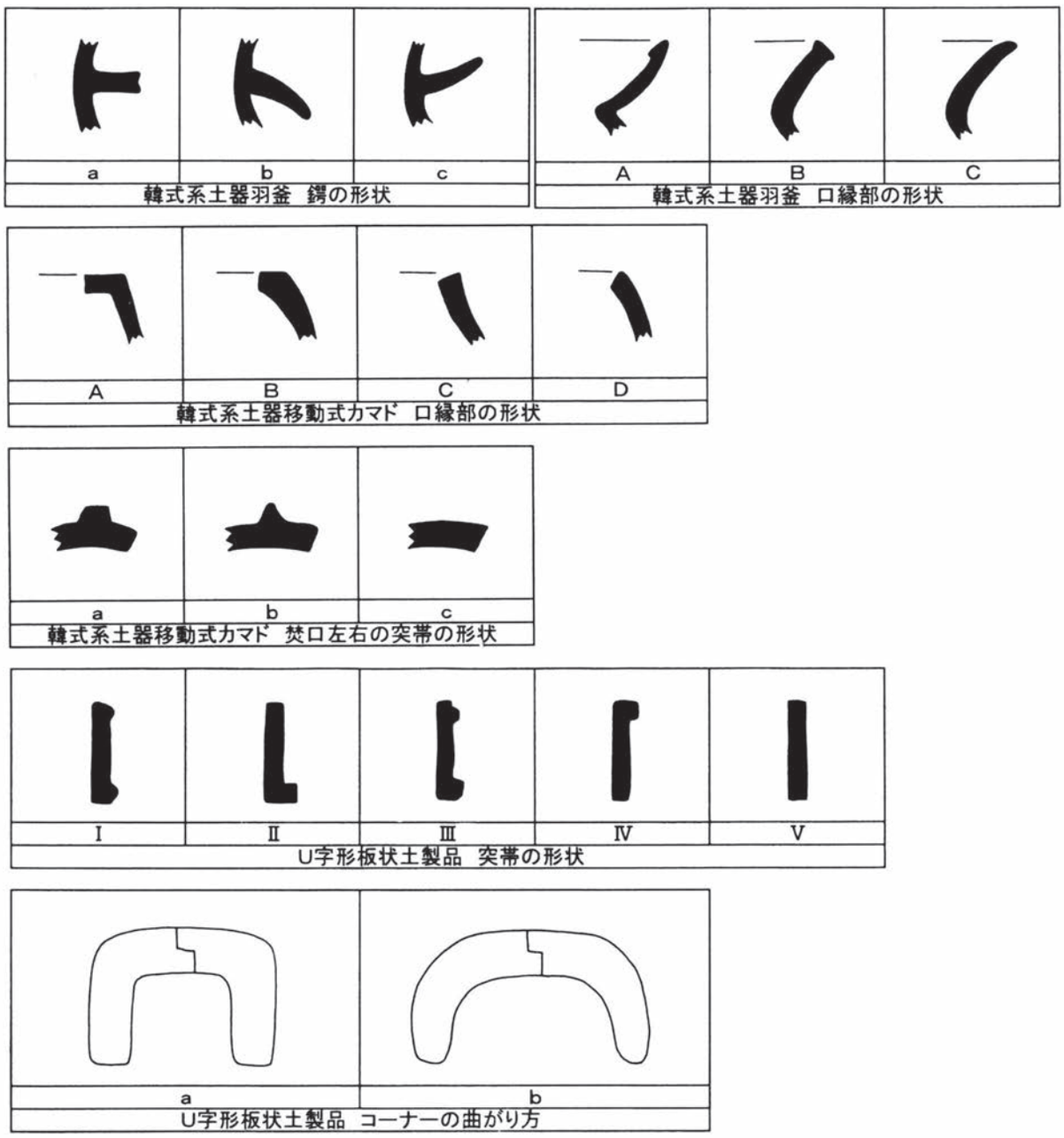








第159図　韓式系土器（壺・甕、平底鉢、甑、鍋）細部の形状の分類



第160図　韓式系土器・土製品（羽釜、移動式カマド、U字形板状土製品）細部の形状の分類

プに分類した（表２－（２）、第159図）。

③甑

甑の分類の要素は４項目で、口縁部の形状でＡ～Ｄの4タイプ、底部の形状で２タイプ、蒸気孔のタイプで４タイプ、外面調整で６タイプに分類した（表２－（３）、第159図）。

④鍋

分類の要素は４項目で、口縁部の形状でＡ、Ｂの２タイプ、底部の形状でｘ、ｙの２タイプ、把手の形状でａ～ｄの４タイプ、外面調整で１、２の２タイプに分類した（表２－（４）、第159図）。

⑤羽釜

分類の要素は３項目で、口縁部の形状でＡ～Ｃの３タイプに、鍔の形態をａ～ｃの３タイプ、外面鍔から下の調整を１、２の２タイプに分類した（表２－（５）、第160図）。

⑥移動式カマド

分類の対象とするのは掛け口が一つの移動式カマドである。分類の要素は４項目で、掛け口の形状でＡ～Ｄの４タイプ、庇の形状でｘ、ｙの２タイプ、焚き口左右の凸帯の形状をａ～ｃの３タイプ、外面調整を１～３の３タイプに分類した（表２－（６）、第160図）。

⑦Ｕ字形板状土製品

分類の要素は２点あり、板の表面に付けられている突帯の形状でⅠ～Ⅴ、全体の形状の判明する資料はコーナー部の曲がり方でａ、ｂに分類した（表２－（７）、第160図）。

表３　土師器鉢型式分類

浅鉢形１－ａ　口径12cm前後、底部は丸底、口縁部は内湾し端部に面をもつ
浅鉢形１－ｂ　底部は丸底、口縁部は内湾し端部は丸くおわる １－口径20cm前後 ２－口径13cm前後
浅鉢形１－ｃ　口径12cm前後、底部は丸底、口縁部は内湾しつつ直口し端部は丸くおわる
浅鉢形２－ａ　口径13cm前後、底部は平底、口縁部は内湾しつつ直口し端部は丸くおわる
浅鉢形２－ｂ　口径13cm前後、２－ａより器高が低い　底部は平底、口縁部は内湾しつつ直口する
椀形３－ａ　口径12cm前後、底部は平底、口縁部は上外方に開く
椀形３－ｂ　口径12cm前後、底部は丸底、口縁部は上外方に開く
鉢形４　底部平底、口縁部は内湾し端部は短く外方に屈曲する １－口径17cm前後 ２－15cm以下
鍋型５　口径20cm前後、底部は丸底、口縁部は内湾し端部は短く外方に屈曲する
鍋型６　底部ほぼ丸底、扁球状の体部で口縁部は外反する １―口径20cm前後 ２－15cm未満
深鉢形７－ａ　底部平底、口縁部は内湾しつつ上方にのびる １―口径15cm以上 ２－15cm未満
深鉢形７－ｂ　底部丸底、口縁部は内湾しつつ上方にのびる １―口径15cm以上 ２－15cm未満
深鉢形７－ｃ　底部平底、口縁部は上外方にのび、器高が口径を凌駕する　体部中位に把手を持つ
深鉢形７－ｄ　底部は丸底に近い、口縁部は上外方にのび、器高が口径を凌駕する
深鉢形７－ｅ　底部は丸底に近い、体部は上外方にのび、口縁部は外反する　器高が口径を凌駕する

（２）土師器の分類

土師器については、高坏、鉢、甕の器種において型式設定、分類をおこなっている。

①高坏

坏部の形態から５タイプの型式に大別、そのうち有稜高坏と無稜直口高坏については口縁部の形状でそれぞれ３種に細分した。またそれぞれの類型について口径、坏部の深さ等の法量による細分をおこなった。また、坏部と脚部の接合技法を７タイプに分類した（表４・５、第162図）。

②鉢

全体の形状から各型式を分類し、類型をまとめた（表３、第164図）。

③甕

すべての甕を口縁部の形態で、７タイプに分類した。また相対的に大きさを比較するために、口径×器高＝大きさ指数１～９を設定した。大きさ指数８以上の大型の甕は、口縁部の形態、大きさ指数のほかに、外面調整を分類の要素として加えた。また頸部径×器高を測定し、この数値が470を超える大型甕は長胴甕と呼称した（表６、第161図）。

（３）須恵器系土器の分類

須恵器系土器は須恵器の影響を受け、その技法を取り入れて製作された土器を呼称する。製作技法や器形、装飾デザインにおいて須恵器の影響を受けているが、焼成状況や細部の形状で須恵器と異なる点がある。当遺跡では、５世紀後半から６世紀にかけて連続して出土しており、出土点数は100点以上になる。ほとんどの器種が高坏であるが、出土例を検討した結果、高坏について、坏部の形態で３タイプ、脚部の形態で３タイプに分類した（表６、第165図）。

（４）製塩土器の分類

当遺跡では形状や調整がさまざまな小型製塩土器が大量に出土した。形状により分類、次に外面調整により細分可能なものは細分し分類した（表８、第163図）。

（５）蔀屋北編年の概要

報告書Ⅰでは一括性の高い資料をとりあげ、器種分類した土器の組成の変化を調べ、消長表を作成し、蔀屋北１期～５期の５段階の土器群を区分した。以下各時期の特徴を概観しておく。

蔀屋北１期

蔀屋北１期の特徴は軟質の韓式系土器と土師器高坏に多様なタイプが存在することがあげられる。土器群の器種構成をみると、韓式系（硬質）土器では船載の陶質土器に鉢、甕、壺がある。鉢、甕は百済系の特徴をもつものが出土している。黒色研磨土器には高坏・壺がある。

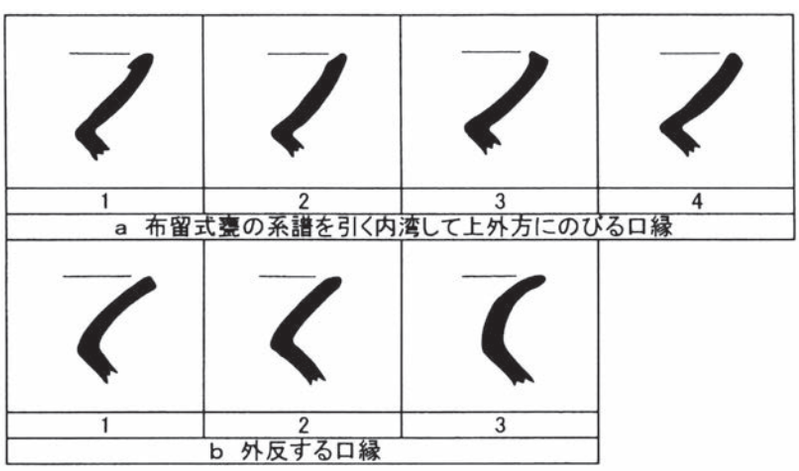
軟質の韓式系土器では壺・甕、平底鉢、甑がある。軟質の韓式系土器の特徴は、その形状と外

表４　土師器高坏の型式分類

１．大型有段高坏 ― 坏部口径が20cm以上のもので、坏底部から稜を形成して屈曲し口縁部がのびる
２．有稜高坏 ― 坏底部から稜を形成して屈曲し口縁部がのびる
ａ．口縁部がまっすぐ上外方にひらく
１　口径が20cm未満15cm以上
２　口径が15cm未満
ｂ．口縁部がやや内湾しつつ上外方にひらく
１　口径が20cm未満15cm以上
２　口径が15cm未満
ｃ．口縁部が上外方にひらき端部が外反するもの
１　口径が20cm未満15cm以上
２　口径が15cm未満
３．無稜外反高坏 ― 坏底部から内湾しつつたちあがり、口縁部は上外方にのび、端部は外反する
４．無稜直口高坏 ― 坏底部から口縁部が上外方にのびる
ａ．口縁部は坏底部から屈曲してたちあがり上外方に伸びる
１　口径が20cm未満15cm以上
２　口径が15cm未満
ｂ．口縁部は坏底部から直線状に上外方にのびる
１　口径が20cm未満15cm以上
２　口径が15cm未満
ｃ．口縁部は坏底部から内湾してたちあがり上外方にのびる
１　口径が20cm未満15cm以上
２　口径が15cm未満
５．椀形高坏 ― 坏底部から内湾してたちあがり口縁端部も内湾しつつおわる
ａ．坏部深さが4cm以上を測るもの
１　口径が15cm以上
２　口径が15cm未満
ｂ．坏部深さが4cm未満のもの
１　口径が15cm以上
２　口径が15cm未満

表５　高坏脚部の接合技法

ａ	中空の脚柱部を坏部に接合する、脚柱部に補充された粘土痕が明瞭に残るもの
ａ＋	ａで刺突が施されるもの
ｂ	中空の脚柱部を坏部に接合する、脚柱部内面が丁寧にナデ､又は削られて補充粘土の痕跡は残っていない
ｂ＋	ｂで刺突が施されるも
ｃ	中実の脚部を坏部に接合するもの
ｃ＋	cに刺突が施されるもの
ｄ	各々が完成した脚部と坏部を接合する、須恵器的な接合法　ａ～ｃとは異なり、脚上部外面をとりまくように付加される粘土はほとんど見られない



第161図　土師器甕口縁部の形状の分類

表６　甕の分類項目

・口縁部の形状
a －布留式甕の系譜をひく、内湾して上外方にのびる口縁をもつ
1　口縁端部は内面に肥厚する
2　口縁端部は内傾斜面をもつ
3　口縁端部内面をつまみあげる
4　口縁端部は外傾する面をもつ
b －外反する口縁をもつ
1　口縁端部は面をもつ
2　口縁端部は丸くおわる
3　口縁部は短く外反し端部は丸くおわる
・大型甕の外面の調整
1－肩部ヨコハケ他はタテ、ナナメハケ
2－肩部ヨコハケ上からナデ、ヨコナデ、他はタテ、ナナメハケ
3－タテハケ
4－ナデ

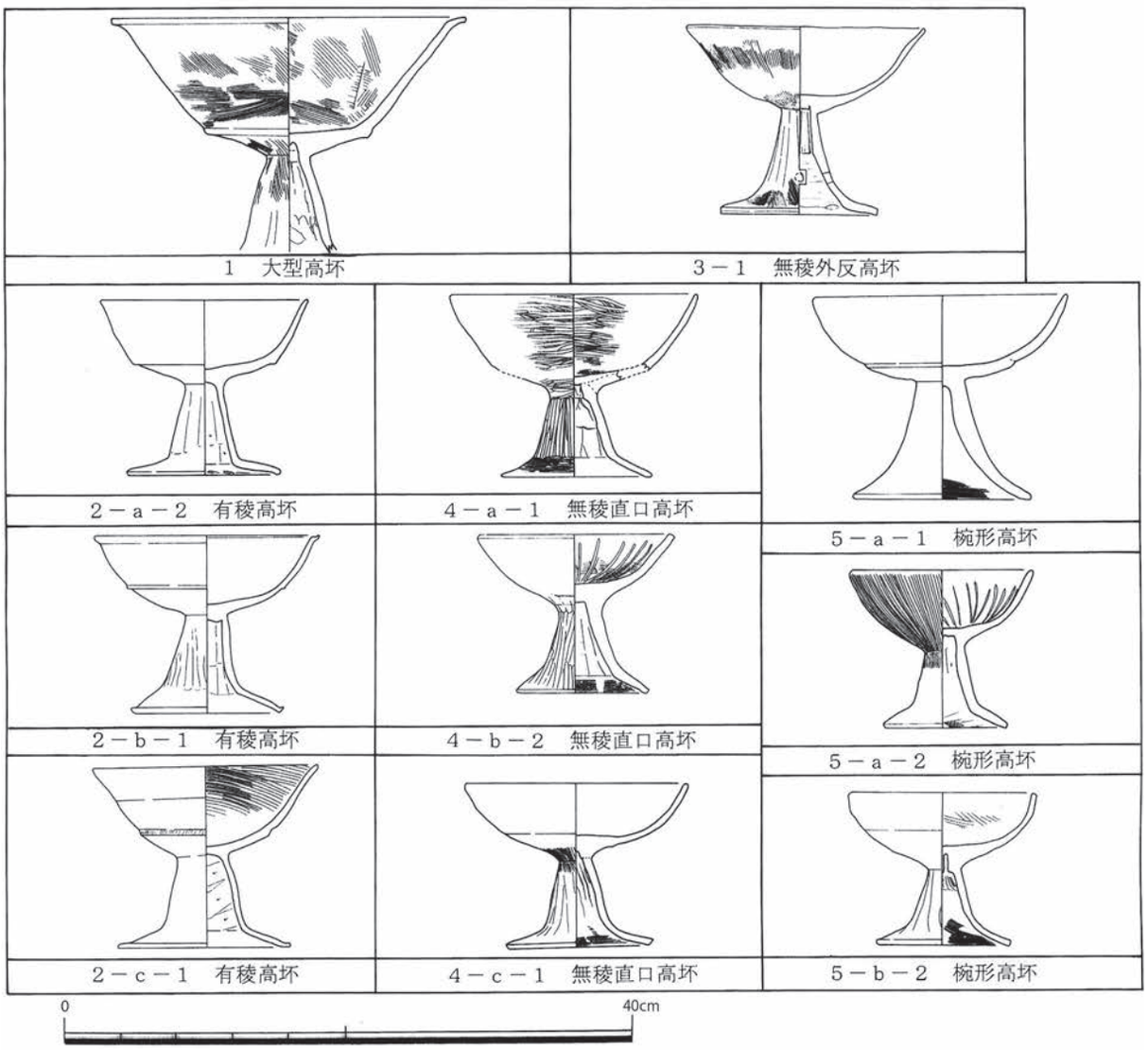
・大きさ指数＝口径×器高
1－50以上100未満
2－100以上150未満
3－150以上200未満
4－200以上250未満
5－250以上300未満
6－300以上350未満
7－350以上400未満
8－400以上450未満
9－450以上

表７　須恵器系土器の器種分類

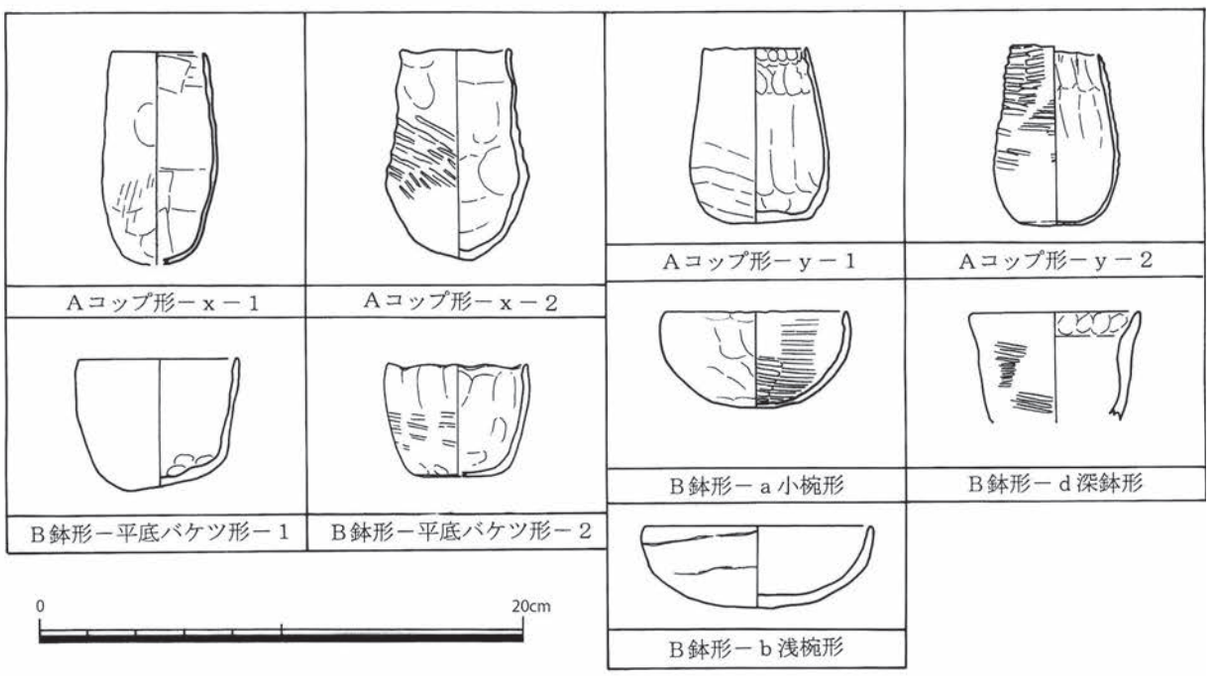
・坏部の形態による分類
A－外面に稜線を施したり、装飾的な把手をつけているもの
同時期に存在した須恵器無蓋高坏の形状をより多く取り入れていると思われる
B－口縁部は底部から内湾しつつ上外方にのび、端部はまるくおわる
C－平坦で器壁が厚い坏底部から口縁部は屈曲して上外方にのび、端部はまるくおわる
・脚部の形状による分類
a －スカシ孔を持ち同時期に存在した須恵器高坏の形状をより多く取り入れていると思われる
b －中空の脚部で脚頂部からラッパ状に下外方にひらく
c －脚柱部が長く、内部が中実、もしくは中実に近いもの

表８　製塩土器の器種分類

A－コップ形－口径5cm以内の筒状のコップ形を呈する	
x －丸底 ― 1－ナデ・オサエ	
x －丸底 ― 2－タタキ	
y －平底 ― 1－ナデ・オサエ	
y －平底 ― 2－タタキ	
B－鉢形	
a 小椀形	口径8cm前後、半球状の体部をもち、口縁部は内湾しつつ上方にのびる。口縁端部は強く内湾するものもある。器壁は薄く、内外面ともナデ調整で仕上げられているが、内面は二枚貝条痕を残すものが多い
b 浅椀形	口径10cm前後、器高が低く椀形を呈す。器壁は厚く、外面は未調整、粘土接合痕を残し、内面は工具ナデで滑らかに仕上げられている。
c 平底バケツ型 1－ナデ・オサエ 2－タタキ	口径5～8cmの鉢形、ほぼ平底のバケツ型を呈す
d 深鉢形	口径8cm前後、器壁は厚く、体部は内湾して上方にのび口縁端部は外方に屈曲する
C－大型化したボール形	口径15cm前後のボール形を呈する

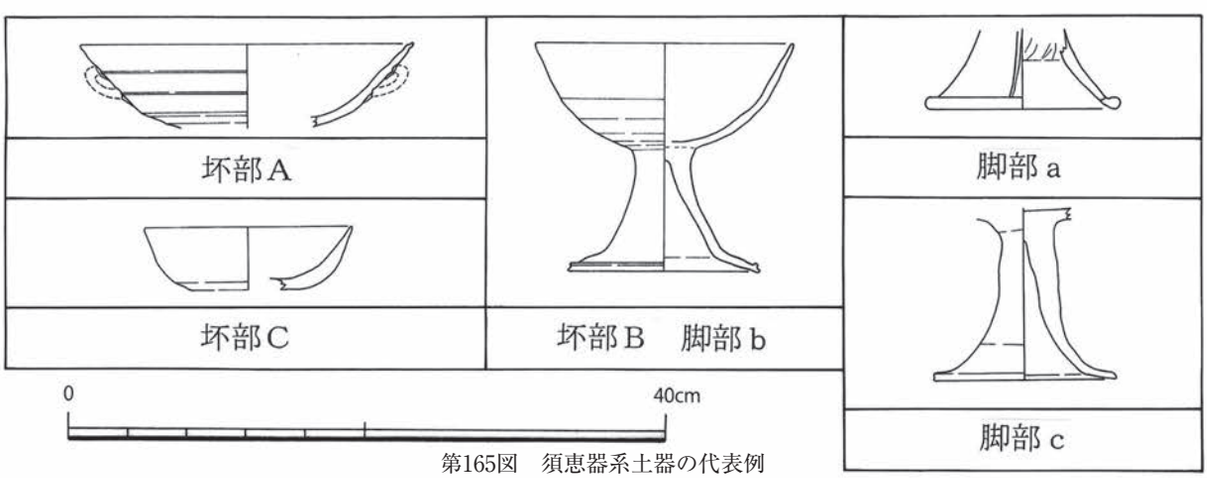


第162図　土師器高坏の型式の代表例



第163図　小型製塩土器の代表例

第164図　土師器鉢の型式の代表例



第165図　須恵器系土器の代表例

面に残るタタキの種類が多様なことである。具体的に器種別にみると壺･甕は口縁部の形状がａ、ｃ～ｅまで４タイプ、タタキの種類も１の縄蓆文タタキ～３格子タタキまで３種類あり、多様なタイプのものが使用されていたことがうかがえる。甑についても同様の傾向があてはまり、口縁部の形状がＡ、Ｃの２タイプ、タタキの種類は２の斜格子タタキ～４平行タタキまで３種類ある。平底鉢は外面に鳥足文タタキ、平行タタキを残す個体、また外面をヘラナデで仕上げたものもある。

土師器高坏は大型有段高坏、無稜外反高坏、無稜直口高坏、有稜高坏、椀形高坏すべてのタイプがそろい、全期を通して最も多様で出土量も多い。坏部と脚部の接合方法は、中空の脚柱部を坏部に接合し脚部内面に円盤充填の後がはっきり残るａタイプが最も多く、その他の接合方法では中実の脚柱部を坏部に接合するｃタイプで刺突を施さないもの以外はすべて存在する。土師器鉢は浅鉢形１、２、鍋型６がある。

土師器の甕は、中小甕、大型球胴甕ともに布留系の口縁部を持つものが存在する。

須恵器系土器は高坏で坏部形状Ｂタイプのみ出土している。

製塩土器は甕形のみで、形状、法量はさまざまである。

須恵器はⅠ型式２段階以前のものが共伴する。

蔀屋北２期

蔀屋北２期の特徴は、軟質韓式系土器の外面調整にハケ調整を施した個体が出現することである。また新たな器種として鍋が加わる。土師器でも、中小の土師器甕に外反する口縁を持つものや、長胴甕が新たに出現する。製塩土器では小型器種が出現する。

土器群の器種構成をみる。舶載の陶質土器は蓋・瓶がある。共に百済（栄山江流域）に系譜を持つものである。黒色研磨土器は高坏がある。

軟質の韓式系土器では壺・甕、平底鉢、甑に、新たな器種として鍋が加わる。

軟質の韓式系土器の形態の特徴を器種別にみる。２期の壺･甕は口縁部の形態がｂ、ｃ、ｄの３タイプ、タタキの種類は２の斜格子タタキと４の平行タタキのみで１期に比べると、種類・出土数が減少する。平底鉢も出土数は減少し、全体の形状がＡ、Ｃ、Ｄタイプ、タタキの種類は平行タタキの１種類である他、タタキを施さずハケ調整で仕上げたものが出現している。

甑は口縁部の形状がＣタイプと新たに出現したＢタイプの２種類で、外面調整もタタキが施された個体に加えて新たにハケで仕上げた個体が出現する。

鍋は２期から新たに出現した器種で、口縁部の形状Ａで、先端に平坦面を持つ円柱状の把手をもつ。外面調整は平行タタキである。

土師器高坏は１期に比べ資料数は減少し、全体の７割以上が椀形高坏である。坏部と脚部の接合方法は中空の脚柱部を坏部に接合し、脚柱部内面が丁寧に調整されているｂタイプと、中実の脚柱部を坏部に接合して刺突を施すｃ＋タイプが同数出土している。鉢は１期から存在する浅鉢

形１、２は出土数が増加している。さらに浅鉢形１、２に加えて新たに鉢４が出現する。

土師器甕は大きな変化が現れた。第一の変化は大きさ指数が７までの中小甕において、新たに外反する形状ｂタイプが出現したことである。第二の変化は長胴甕の出現である。初現期の長胴甕は、口縁部の形状が布留系の口縁部形状ａタイプで、外面調整は肩部にヨコハケが施されている１タイプである。長胴甕のほか球胴の大型甕では、１期から引き続き存在する端部に内傾斜面をもつ布留系の口縁ａタイプの大型甕と、新たに外反する口縁部形状ｂタイプの大型甕が出現し、並存する。

製塩土器は小型器種のコップ形Ａ、鉢形Ｂ－ａの小椀形タイプが出現した。

須恵器はⅠ型式２、３段階おもにⅠ型式３段階のものが共伴する。

蔀屋北３期

この段階は蔀屋北遺跡でもっとも大量で多様な遺物が出土した時期である。３期の特徴は羽釜・移動式カマド、Ｕ字形板状土製品の出現、生駒西麓産の胎土を有する韓式系土器群の出現である。

韓式系土器は、壺・甕、平底鉢、甑、鍋に新しい器種として羽釜と移動式カマド、Ｕ字形板状土製品が加わる。壺･甕は口縁部がｄ、ｅ、ｆの３種類のタイプがあり、ｅタイプがもっとも多い。口縁タイプｅ、ｆの資料はすべて生駒西麓産の胎土を有している。

平底鉢は出土数量が減少し、全体の形状が底部と体部の境にヘラケズリを施さない丸みを帯びた形状のＣのみになる。外面調整もヘラなで、ハケ調整で仕上げられており、タタキ痕が残る資料はない。

甑は口縁タイプＣのみで、蒸気孔の形状は底部中央に円孔を１個、周囲に３～４個の円弧状の孔を底体部にかけて穿つｄタイプのものが新たに出現する。外面調整は平行タタキとハケ調整の資料が並存する。外面平行タタキの資料はすべて生駒西麓産の胎土である。

鍋は２期から存在した口縁の形状Ａタイプに、外反する口縁をもつＢタイプが新たに加わって並存する。口縁Ｂタイプは把手が付かないものもあり、外面調整はすべてハケ調整である。

羽釜は３期から新たに出現した器種である。口縁の形状はＡタイプとＢタイプがあるが、鍔の形状はどちらもａタイプである。外面鍔から下の調整はすべて平行タタキで、タタキの上からナデをおこなっている資料もある。口縁Ｂタイプの羽釜はすべて生駒西麓産の胎土である。

移動式カマドは羽釜と同じく３期から新たに出現した器種である。３期の移動式カマドは掛け口の形状がすべて上面に平坦面を持つＡタイプで、庇はすべてｘタイプの付け庇である。３期のカマドは、ほぼすべての資料の外面に平行タタキが残るが、タタキの上からナデをおこなっている資料もある。

Ｕ字形板状土製品は、破片総数約600点の９割以上の個体が３期に出現する[註９]。突帯の形状はすべてがⅢタイプで生駒西麓産の胎土を持つもののみである。全体の形状がわかる資料をみる

と、コーナー部が角張って曲がるタイプａの個体は２点のみ、残りはすべて円弧状に曲がるタイプｂである。

３期の韓式系土器・土製品をみると、甕・壺、甑、鍋、羽釜、移動式カマドの炊飯具の器種において１－口縁端部に面を持つなど細部の形態に共通性がある、２－遺跡近隣の生駒西麓の粘土を使用している、３－外面に平行タタキを施す等の共通点があり、同じ技法により製作された斉一性のある韓式系土器のまとまりが存在するという大きな特徴があることが判明した。Ｕ字形板状土製品も同じ生駒西麓産の粘土を使用して製作されており、このまとまりの土器群に含めて考えることが可能である。

３期の土師器の特徴は高坏の出土数の減少、外反する口縁を持つ中小甕の出土量の増加、長胴甕の定着などがあげられる。

高坏の出土数は２期よりさらに減少する。種類は無稜直口高坏、有稜高坏、椀形高坏があり、無稜直口高坏が半数以上をしめる。坏部と脚部の接合方法は中実の脚柱部を坏部に接合するｃタイプで刺突を施すｃ＋が最も多い。鉢は椀形３、鍋型５が新たに出現した。浅鉢形１ｂタイプは２期から継続して出土し、ほぼ同じ出土数を保っている。

中小甕は口縁部が外反するタイプｂのみになり、出土数が増加、大きさ指数は１～５までがまんべんなく出土している。大型甕では２期まで存在していた布留系の口縁部をもつ大型球胴甕は出土数が減少し、新たに外反する口縁部形態ｂタイプで外面調整タテハケ３タイプの長胴甕が多数出現する。

須恵器系土器は出土数が増加し、高坏では坏部の形態Ａ、Ｂ、脚部の形態ａ、ｂタイプがある。

製塩土器は出土数量が増大する。２期に比較するとコップ形Ａは全体の出土量は増大し、外面調整２のタタキありが圧倒的に多く出土している。小型製塩土器はコップ形の他に、鉢形タイプＢ－ａ～ｄのすべてのタイプが出現する。

須恵器はＩ型式３、４、５段階、主としてＩ型式４、５段階のものが共伴する。

<u>蔀屋北４期</u>

４期は３期に比べると出土量、器種ともに減少する。

韓式系土器は出土量、器種ともに減少し、壺･甕では口縁形状ｃタイプとｅタイプの資料があるが、ともに外面調整は平行タタキの上からナデをほどこしている。平底鉢の出土は途絶える。

甑は口縁部の形状Ｃに加え、新たに口縁部が直立し、端部は丸く終わる形状Ｄが出現する。底部の形状は底体部境に稜がないｙ、蒸気孔の形状はｄ、外面は６のハケ調整で仕上げられたもののみとなる。鍋も、外面調整タタキを残すものはなくなり、３期から継続して存在する口縁部形態Ｂで底部の形状ｙ、外面ハケ調整で仕上げられたもののみとなる。外面調整にタタキ痕を残すものを狭義の韓式系土器とするならば、甑、鍋はもはや韓式系土器とは言えず、土師器の器種となったといえよう。

羽釜はこの時期良好な資料は出土していない。

移動式カマドは３期に比べて出土数が減少するが、細部の形状や調整においてさまざまなタイプが存在する。掛け口は平坦面を持つＡ、Ｂと平坦面をもたないＣタイプの３種類、庇の形状がｘ、ｙタイプの２種類、外面調整も平行タタキがのこるもの、ハケ調整のものと、さまざまなタイプのものがある。

Ｕ字形板状土製品は３期と同様、突帯の形状Ⅲタイプが出土しているが、出土点数は激減し、点数全体の１割にもならない。

土師器高坏は３期よりさらに出土数が減少する。種類は有稜高坏と無稜直口高坏のみである。接合技法はａ、ｃ＋に加えて、新たにｃの中実の脚部を坏部に接合して刺突を加えないタイプが出現する。坏部と脚部の接合は技法の省略が進んだと想定できる。鉢は、浅鉢形１、２、椀形３、鉢形４は３期から継続して存在する。鍋型５、６は出土が途絶える。

中小甕は３期に比べ全体の出土数が減少する。４期になると出土するのは大きさ区分４までで、区分２の甕の出土数が多い。長胴甕は口縁部の形態ｂで外面調整３のタテハケのものが３期から継続して存在する。

須恵器系土器は３期と同じく高坏で脚部の形態ａ、ｂタイプが出土している。

製塩土器は３期から継続してコップ形Ａが出土しているが、出土量は３期に比べ激減する。鉢形タイプＢはａタイプ～ｃタイプまでが３期から継続して出土している。

４期に共伴する須恵器の年代はⅠ型式５段階、Ⅱ型式１段階が中心である。

蔀屋北５期

５期はそれぞれの器種において形や大きさのバリエーションが減少し、土器群の構成が単純化していく。

外面にタタキをほどこした土器は５期にはみられない。甑は口縁部形状Ｄタイプのみになり、蒸気孔はｄ、外面はハケ調整で仕上げられている。鍋は４期から継続して出土している口縁部形状Ｂタイプのみで、把手の付くものと付かないものがある。

羽釜は口縁部の形状Ｃで外面鍔から下の調整がハケのものが新たに出現する。移動式カマドは口縁部形状Ｄ、付け庇、外面ハケ調整のものが新たに出現する。他のタイプは存在しない。羽釜、カマドともに外面にタタキをほどこした土器はみられず、完全に土師器の器種となったといえよう。

４期ではわずかながら出土していたＵ字形板状土製品の出土は５期に完全に途絶える。

土師器高坏は、４期とほぼ同量の出土数で、大型有段高坏、有稜高坏、無稜直口高坏がある。接合方法はすべて中実の脚柱部を坏部に接合し、刺突を施さないｃタイプである。

鉢は１期から４期まで継続して出土していた浅鉢形１、２の出土が途絶え、新たに深鉢形７が出現する。

中小甕は出土量が減少し、大きさのバリエーションが少なくなり、大きさ区分２、３の甕のみになる。長胴甕は口縁部の形態ｂ３タイプが出現し、また器高の長大化が増して、器高40㎝を超えるものもある。

須恵器系土器の器種は高坏で脚部の形状ｃタイプの他、壺が出現する。全体の出土量は４期と変わらない。脚部や壺の外面には波状文が施されているものが出現する。

製塩土器は小型タイプの出土が途絶え、大型ボールＣのみになる。

５期に共伴する須恵器の年代はⅡ型式２～４段階まで、Ⅱ型式２、３段階が中心である。

第２項　新たな出土資料の検討

第２項は今回報告する管廊等調査区出土資料の検討を行う。今回の資料のうちとくに一括性の高い資料について器種構成の確認、器種分類等の検討・分析を行い、蔀屋北１期～５期に編年区分を行う。検討した内容は、北東居住域、南西居住域、居外の順に記述する。

（１）北東居住域

北東居住域に該当する出土資料はＫ１調査区とＫ２調査区から出土した。Ｋ１調査区から順に出土資料を検討していく。

井戸Ｋ１－１０１４８（第138図－１・２）

図化した資料は２点、１はⅠ型式－１段階に相当する須恵器器台で、２は外面をヘラ磨きで丁寧に磨きあげられた土師器直口壺である。同様の直口壺は蔀屋北１期に該当する一括資料に共伴している例が多く、以上の観察から井戸Ｋ１－１０１４８出土資料は蔀屋北１期に区分する。

土坑Ｋ１－１０１４４（第138図－３～24、第139図－１～41、第140図－１・２、第151図－３）

韓式系土器、土師器、須恵器系土器、製塩土器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は65点である。土器の種類ごとに器種分類する。

138－22は硬質の韓式系土器で陶質土器と思われる。外面格子タタキが施されており、タタキ原体の単位、施術の方向等が鮮明である。軟質の韓式系土器は甑、鉢、移動式カマドがある。138－23は甑、口縁部の形態はＣタイプ、外面の調整は平行タタキを上からナデ消している。138－24は鉢の口縁部、口縁部の形状はａタイプ、外面の調整は138－23と同様、平行タタキを上からナデ消している。140－１・２は移動式カマドでかけ口の形状Ａタイプ、140－２の焚口左右の突帯の形状はｃタイプである。140－１は外面調整平行タタキで部分的にナデ消し、140－２は一見平行タタキのようにみえるが、平行タタキ目の横方直角に１本ラインが走る、単線横走垂直集線文が施されている。以上の甑、鉢、移動式カマドは生駒西麓産の胎土を有する。139－36の甑

は口縁部の形状はｃタイプ、底部の形状ｙタイプ、蒸気孔の形状ｄタイプで外面調整はハケである。Ｕ字形板状土製品は天井部の破片が出土しており（151－３）、突帯の形状はⅢタイプである。

土師器高坏は３点掲載しているが、坏部の形状、接合技法が判明しているのは139－38の無稜直口高坏４－ａ－１タイプ１点のみで、接合技法はａである。中小甕は大きさ指数１と５の甕がある。

製塩土器は小型タイプが多量に出土している。Ａコップ形は総重量2423.2ｇ、平底で外面タタキ調整のＡ－ｙ－２タイプ圧倒的に多く、図化掲載した資料は23点となる。Ａコップ形で外面ナデ調整のタイプは１点のみ図化した。小型タイプの製塩土器はＡコップ形の他にＢ鉢形－ｂ浅鉢形も多く出土しており、口縁部片で37個、重量674.4ｇ出土している。

須恵器系土器は２点出土で、138－３が坏部の形状Ｂ、138－４が脚部の形状ｂである。

共伴する須恵器はⅠ型式４・５段階である。

以上の観察の結果、土坑Ｋ１－１０１４４出土資料は蔀屋北３期に区分する。１－軟質の韓式系土器において、生駒西麓産胎土で製作された外面調整平行タタキの甑、移動式カマド、Ｕ字形板状土製品が存在すること、２－小型製塩土器コップ形Ａ、鉢形Ｂが出土していることなどは蔀屋北３期の土器群の大きな特徴を示している。

土坑Ｋ１－１０１３８（第141図－１～24、第142図－１～27）

韓式系土器、土師器、須恵器系土器、製塩土器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は51点である。土器の種別ごと器種分類する。

軟質の韓式系土器は甑、移動式カマドの小片、鍋口縁部の小片がある。141－20～24は甑で、口縁部の形状がＣ・Ｄタイプがある。141－24は底部の形状ｙ、蒸気孔の形状ｄである。外面調整は141－20の平行タタキを除き、他はすべてハケ調整で仕上げられている。141－18の移動式カマド片、141－19の鍋口縁部、141－20の甑は生駒西麓産の胎土を使用している。

Ｕ字形板状土製品は突帯の形状Ⅳタイプの一部分が出土している。

土師器高坏は１点のみ図化した。141－16は土師器大型有段高坏の坏部で、接合部分は欠損して技法は不明である。土師器鉢は２点、141－14は椀形３－ａ、141－15は浅鉢形１－ｂ－２である。甕は長胴甕、中小甕ともに口頸部のみの資料で大きさ指数等は不明である。

須恵器系土器は141－17の脚部ｂタイプ１点がある。

製塩土器は小型タイプが多量に出土している。Ａコップ形では平底で外面タタキ調整のＡ－ｙ－２タイプは、総重量は1462.9ｇ、図化掲載した資料は12点となる。Ａコップ形で外面ナデ調整のタイプは658.1ｇ出土している。小型タイプの製塩土器はＡコップ形の他にＢ鉢形－ｂ浅鉢形も多く出土しており、口縁部片で56個、重量で638.6ｇ出土している。

共伴する須恵器はⅠ型式４・５段階である。

以上の観察の結果、土坑Ｋ１－１０１３８出土資料は蔀屋北３期に区分する。とくに軟質の韓

式系土器において、小片ながら生駒西麓産胎土で製作された外面調整平行タタキの甕、移動式カマドが存在すること、小型製塩土器コップ形Ａ、鉢形Ｂが大量に出土していることなどは蔀屋北３期の土器群の特徴を示している。

土坑Ｋ１－１０００３（第142図－28～46、第143図－１～22）

土師器、須恵器系土器、製塩土器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は40点である。土器の種別ごと器種分類する。

土師器は甕、甕等がある。143－22の甕は口縁部の形状Ｄで外面はハケ調整で仕上げられており、土師器の器種としてとり扱っている。中小甕で大きさ指数が判明、もしくは推定できるものは143－13・15・16の3点で、大きさ指数１が１点、４が２点である。長胴甕は、口縁部の形状はｂ－外反する口縁で端部が短く外反する３タイプの出土例が中心である。外面調整がわかる143－21は肩部からタテハケが施されている。

須恵器系土器は高坏脚部が２点（143－９・10）、ａタイプとｂタイプが出土している。

製塩土器は小型タイプが出土している。Ａコップ形は総量で34.5ｇで、図化掲載した資料はない。Ｂ鉢形タイプは、ｂ浅鉢形が口縁部片で20個、292.3ｇで、図化掲載した資料が143－４～７の４点になる。ｃ平底バケツ形は、口縁部片で38個、141.8ｇで、図化掲載した資料が143－１～３の３点である。

共伴する須恵器はⅠ型式５段階である。

以上の観察の結果、土坑Ｋ１－１０００３出土資料は蔀屋北４期に区分する。タタキで仕上げる器種が存在しない、小型製塩土器は、コップ形Ａの出土がほとんど見られず、鉢形Ｂタイプのｂ浅椀形、ｃ平底バケツ形が出土していることは蔀屋北４期の土器群の特徴を示している。

流路Ｋ１－１３（第144図－１～32、第145図－１～14、第146図－１～８、第147図－１～22）

土師器、須恵器系土器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は76点である。土器の種別ごと器種分類する。

土師器は甕、羽釜、移動式カマド、高坏、中小甕、長胴甕等がある。

146－１、４、６の甕はすべて口縁部の形状Ｄタイプ、外面調整ハケである。147－19の羽釜は形状ｃタイプので鍔のみの出土である。移動式カマドは小片のみの出土であるが、147－22は焚口左右の突帯が断面三角形のｂタイプである。これらの甕、羽釜、移動式カマドは細部の形状、外面調整から土師器として取り扱う。

147－17、18は高坏脚部、18の脚柱部の３／２は中実で、内部はナデで仕上げている。

147－５は中小甕で完全な形状、大きさ指数は２となる。長胴甕は、口縁部の形状はｂの外反する口縁で端部が短く外反する３タイプの出土例が中心である。外面調整がわかる146－５、８は肩部からタテハケが施されている。

須恵器系土器は高坏の坏部形状Ｃ、脚部形状ａとｃがある。脚部形状ｃの145－15は裾部に波状文が施されている。

須恵器はⅠ型式の須恵器も混入しているが､主としてⅡ型式２段階～４段階の資料が共伴する。出土量をみると蓋坏が多く、その他の器種では甕、提瓶、高坏、器台、横瓶等がある。

以上の観察の結果、流路Ｋ１－１３出土資料は蔀屋北５期に区分する。なお、流路Ｋ１－１３からは、147－14 ～ 16の円筒形土製品、20の土製支脚が出土している。流路という遺構の性格上、蔀屋北５期の同時期の資料とは断定しにくいが、特筆すべきものといえよう。

竪穴Ｋ２－２（１２０８７）（第128図－１～22）

土師器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は22点である。128－19、20の韓式系土器は覆土からの出土で、混入品と思われる。土器の種別ごと器種分類する。

土師器は鉢、鍋、中小甕、長胴甕がある。128－１はカマド内出土で、深鉢形7－ｂタイプの鉢である。128－17は住居内ピット出土の鍋で口縁部形状Ｂ、舌状の把手がつく。外面調整ハケで土師器鍋として扱う。21･22の長胴甕は全体の形状が判明する。外反する口縁部ｂ－３タイプで、外面タテハケである。

須恵器はⅡ型式４段階の資料が共伴している。蓋坏の他、短頸壺等がある。

以上の観察の結果、竪穴Ｋ２－２出土資料は蔀屋北５期に区分する。

土坑Ｋ２－１２０９６（第129図－７～19、第130図－１）

韓式系土器、土師器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は14点である。

韓式系土器は甑、平底鉢がある。130－１の甑は口縁部の形状Ｃタイプ、底部の形状ｘタイプ、蒸気孔の形状はａタイプで、外面は平行タタキをナデ消して調整している。胎土は非生駒西麓産である。129－15、16の平底鉢は、２点とも全体の形状がＡタイプ、口縁部の形状ａタイプ、外面格子タタキである。129－15は底部にゲタ痕が残る。

土師器は高坏、中小甕、直口壺があり、大型甕は出土していない。129－17は椀形高坏５－ａ－２タイプで、脚部の接合技法はｂ＋である。129－７は大きさ指数３の中小甕、口頸部は布留系の形状を示すものの、端部は丸く終わる。

共伴する須恵器は甕口縁部１点のみで、Ⅰ型式２段階以前のものである。

土師器は甕口縁部や、高坏の種類がやや２期の様相に近いが、直口壺が出土していること、韓式系土器は１期の平底鉢が２個体出土していること、また共伴する須恵器の年代から、土坑Ｋ２－１２０９６出土資料は蔀屋北１期に区分する。

溝Ｋ２－１２０２４（第131図－１～14）

韓式系土器、土師器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は14点である。

韓式系土器平底鉢は、いずれも底体部のみの出土である。131－10の平底鉢は底体部の境にヘラケズリがなく、体部はナデで仕上げられている。

土師器は高坏、大型甕がある。131－７の高坏は接合技法がｂ＋である。

大型甕は全体の形状が判明する資料が２点、131－13・14がある。２点共に布留系の口縁部で口縁端部に面を持つａ－４タイプである。共に器高はほぼ30㎝であるが、外面調整は131－13は肩部ヨコハケ他はタテ、ナナメハケ、131－14は全体がタテハケである。頸部径×器高は、131－13は435、131－14は520.2となり、頸部径×器高が470を超えている131－14は長胴甕と呼称できる。

須恵器はⅠ型式１段階～３段階の資料が共伴する。

以上の観察の結果、大型球胴甕と長胴甕が併存する溝Ｋ２－１２０２４出土資料は、蔀屋北２期に区分する。

（２）南西居住域

南西居住域に該当する出土資料はＫ３調査区から出土した。

竪穴Ｋ３－１（第132図－１～31）

韓式系土器、土師器、須恵器、製塩土器が出土しており、図化掲載した資料は31点である。竪穴Ｋ３－１は井戸Ｋ３－０９１９２が埋没した後に構築されている。整理作業の結果、当初井戸Ｋ３－０９１９２上部層出土と取り上げていた資料も竪穴１出土資料に含めた。

韓式系土器は平底鉢がある。132－19は底径が約10㎝、やや大型の平底鉢で、体部外面は平行タタキである。底体部境にヘラケズリは無い。132－20は口縁部、形状はｂで外面調整は平行タタキを丁寧にナデ消している。132－21は外面格子タタキである。

土師器は高坏、鉢、甕がある。132－23は椀形高坏５－ｂ－２タイプで、脚部の接合技法はｂ＋である。鉢は全体の形状が判明しているものが３点、132－15は鉢形４－２、132－16は浅鉢形１－ｂ－２、132－17は浅鉢形１－ｂ－１となる。甕は口頸部のみの資料ばかりであるが、布留系の口縁部と外反する口縁部の両者が並存する。

製塩土器はコップ形Ａが２点あり、132－6は口縁部のみ外面タタキなし、132－24は器壁が非常に薄く、底体部のみで外面タタキがのこる。両者とも蔀屋北３期に大量に出土するＡコップ形－ｙ－２とは胎土、色調が異なり、器壁が薄い形態である。

共伴する須恵器はⅠ型式３段階前後の資料である。

以上の観察から、竪穴Ｋ３－１出土資料は蔀屋北２期に区分する。

井戸Ｋ３－０９１９２（第133図－１～15）

韓式系土器、土師器、須恵器、製塩土器が出土しており、図化掲載した資料は15点である。出土した資料は井戸上層と下層に分けて取り上げられており、上層出土資料（133－１～５）は井戸

Ｋ３－０９１９２が廃絶した時期を、下層出土資料（133－６～15）は井戸使用時期を示している。

韓式系土器は上層から壺か甕の口縁部が１点出土しており、口縁部の形状はｄタイプ、外面調整は平行タタキである（133－３）。

土師器は高坏、甕がある。133－４は椀形高坏の坏部である。133－５の高坏は、脚柱部を粘土帯巻き上げて製作された痕跡が残存しており、坏部との接合部分に補充されたと思われる粘土が完全になでつけられていない。接合技法はａとなる。

甕は、布留式甕あるいは外反口縁をもつ中小甕といった一定の統一したスタイルからはずれた形状、内外面の調整ともにさまざまなタイプが出土している。

特筆すべきは、下層から口縁部高がやや低い２点を含めて直口壺が６点出土していることがあげられる。外面調整は密な磨きを施しているものやハケ調整のものまでさまざまなタイプが出土している。これまでも１期に区分した土器群、とくに井戸出土資料は直口壺が含まれることが多く、この資料も同様であるといえる。

製塩土器は下層から甕形の資料が１点出土している。

須恵器は上層のみの出土で、Ⅰ型式２段階の甕が共伴している。

以上の観察から井戸Ｋ３－１９２下層出土資料は蔀屋北１期に区分する。上層出土資料は須恵器を含んでおり、井戸廃絶後竪穴Ｋ３－１が構築されたことを考慮すると、２期まで時期区分が下がる可能性が高い。

竪穴Ｋ３－２（第134図－１～18）

韓式系土器、土師器、須恵器、製塩土器が出土しており、図化掲載した資料は18点である。

韓式系土器は甑、平底鉢があるが、すべて覆土からの出土である。134－15は甑の底体部、蒸気孔の形状はａタイプと推定でき、外面調整は格子タタキをナデ消している。134－18は甑の口縁部で、口縁の形状ｃタイプ、外面調整はハケである。134－14は平底鉢の底体部で、体部外面は丁寧なヘラケズリが施されている。

土師器は甕がある。134－10は外反する口縁を持つ中小甕で、大きさ指数は３となる。134－17は長胴甕の口頸部で、口縁部の形状は外反する口縁で端部に面を持つｂ－１である。

製塩土器はＡコップ形が３点出土している。134－11は外面タタキなし、134－12・13は外面タタキのあとをなでけしており器壁が非常に薄く、蔀屋北３期に大量に出土するＡコップ形－ｙ－２とは胎土、色調、器壁の厚み等が異なる形態である。

須恵器はⅠ型式３段階の資料が共伴する。

以上の観察から竪穴Ｋ３－２出土資料は蔀屋北２期に区分する。

落込みＫ３－０９０５０（第135図－１～31、第136図－１～16）

韓式系土器、土師器、須恵器、製塩土器が出土しており、図化掲載した資料は18点である。

韓式系土器は移動式カマドの底体部がある（136－16)。外面平行タタキをナデ消し、生駒西麓産の胎土を有する。

土師器は高坏、鉢、甕、鍋がある。136－５の高坏脚部は報告Ⅰ第492図８と同様の形態で、大型の椀形高坏５－ａ－１タイプの脚部になる。坏部との接合技法はａで、脚部内面は丁寧なヘラケズリが施されている。136－６の高坏は有稜高坏で口縁部が上外方に開き端部が外反する２－ｃ－２タイプで、坏部と脚部の接合技法はｃになる。

鉢は鉢形４－２、浅鉢形１－ｂ－２がある。甕は口縁部の形状が布留系のもの、外反する形状のもの両者が並存する。136－10は外反する口縁部を持つ中小甕で大きさ指数は２である。136－13は布留系の口縁部をもち、やや長胴の甕になる。 136－15の鍋は口縁部の形状Ｂ、把手の形状ｃ、底部の形状ｙである。外面調整はハケで、土師器の鍋として取り扱う。

製塩土器はＡコップ形が１点ある。

須恵器はⅠ型式３・４段階の資料が主体である。

以上の観察から落込みＫ３－５０出土資料は蔀屋北２・３期に区分する。

（３）居外

居外域からの出土資料はＨＴ１区からの出土資料である。

溝ＨＴ１－０６００１（第137図－１～24）

土師器、須恵器が出土しており、図化掲載した資料は24点である。溝ＨＴ１－１の遺物出土状況は、土師器の手づくねの小ぶりの鉢が多数出土していること、土器の他に多量の臼玉、土玉等の玉製品がまとまって出土していることなど、集落中心域の様相とは異なる。

土師器は甑、手づくねの鉢がある。137－24は甑で、口縁部の形状Ｃ、底部の形状ｙ、蒸気孔の形状はｄで周囲の穿たれる円弧状の孔がやや小さく推定６個になる。図化掲載したした手づくねの鉢は８点、一カ所からの出土数としては当遺跡内では多いといえる。

須恵器はⅡ型式２段階の資料が共伴する。

以上の観察から溝ＨＴ１－１出土資料は蔀屋北５期に区分する。

第３項　小結

今回の報告資料のうち一括性の高い土器群について器種構成の確認、器種分類等の検討・観察を行い、蔀屋北１期～５期に編年区分をおこなった。検討をおこなった土器群に加え、本報告書に実測図を掲載した遺構出土資料も編年区分をおこない、それらの遺構出土資料の時期区分を表にしたのが、表９である。表中の太線で囲まれた遺構出土資料は第２項で観察検討を記載した一括資料である。以下土器の種別ごとに注目すべき点をあげる。

表9　遺構時期区分表

	蔀屋北1期	蔀屋北2期	蔀屋北3期	蔀屋北4期	蔀屋北5期
北東居住域	井戸K1－10148 土坑K2－12096	土坑K2－12131 溝K2－12024	竪穴K2－3 土坑K1－10144 土坑K1－10138 土坑K2－12130	竪穴K2－1 土坑K1－10003	竪穴K1－09060 竪穴K2－2 溝K1－09062 溝K2－12011 流路K1－08013
南西居住域	井戸K3－09192	竪穴K3－1 竪穴K3－2 落込みK3－09050	土坑K3－09091		
区画溝		溝K4－3	溝K4－1		
大溝		大溝HT2			
居外					溝HT1－06001

（１）韓式系土器

韓式系土器は、今回の調査区でも多数出土した。図化掲載した資料は29点にも及ぶ。大部分が口縁部や底体部等の一部分であったが、その中で１期に区分した土坑Ｋ２－１２０９６出土の韓式系土器平底鉢と３期に区分した土坑Ｋ１－１０１４４出土の移動式カマドについて注目したい。両者ともに全体の形状が推定でき、細部の形状、及び調整がはっきりしておりそれぞれの時期を代表する良好な資料といえよう。Ｕ字形板状土製品については（２）で詳細を記述する。

１期の土坑Ｋ２－１２０９６出土の韓式系土器平底鉢（第129図15・16）は外面細かい格子タタキ調整で、ほぼ完全な形状を示している。この平底鉢と同様の格子タタキで成形され、色調・焼成が類似した甕・壺を、報告書Ⅰでは１期の韓式系土器として報告している。同じ調整で成形された土器をセットとして集めると、甕・甑とここに新たな器種として平底鉢が加わった。１期は他にも多様な形状、調整の韓式系土器が出土した時期であり、形状や調整を同じくする土器のセットが何種類かあったと思われる。

３期の土坑Ｋ１－１０１４４出土の移動式カマド（第140図－２）は外面に単線横走集線文が施されており、生駒西麓産の胎土を有する。報告書Ⅰでも３期に区分した外面単線横走集線文タタキ調整の甑があり、やはり生駒西麓産の胎土を有する。他にも単線横走集線文タタキが施されている可能性のある資料があり、数点の出土であるがこのタタキ調整は当遺跡では３期に存在することがはっきりした。

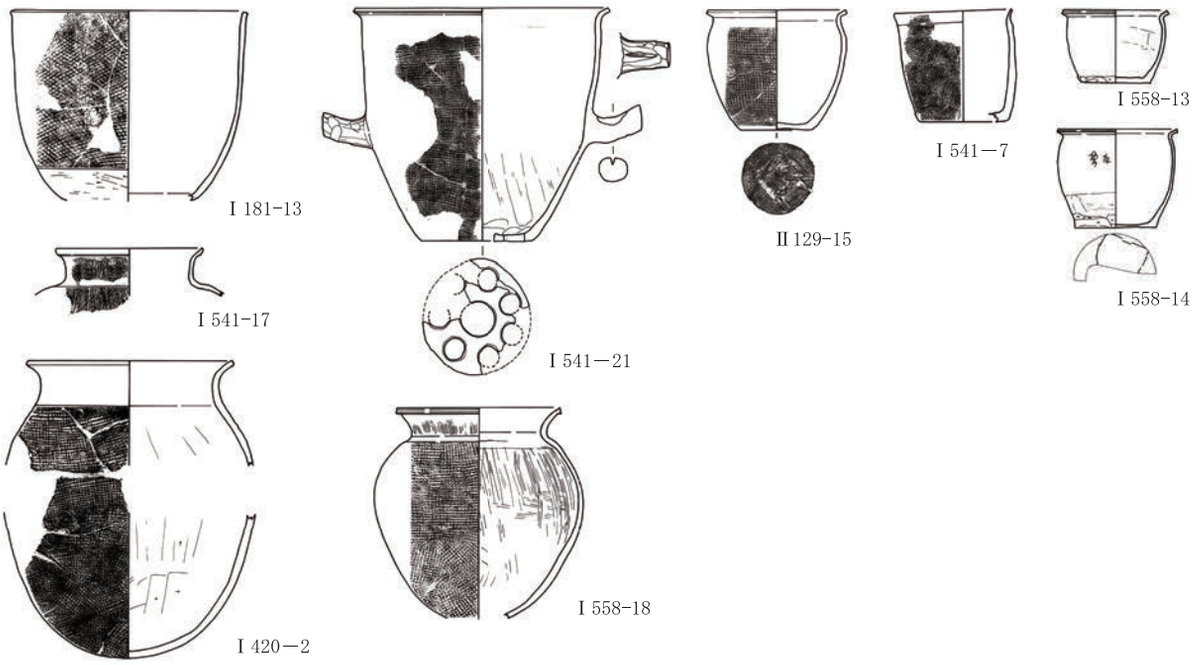
第166図は１期と３期の韓式系土器を比較したものである。１期の韓式系土器は外面調整細かい格子タタキや斜格子タタキのものが多く、密に施されている。３期の韓式系土器は、外面調整平行タタキや単線横走集線文が施されており、タタキをナデ消しているものが多く見られる。また大多数が生駒西麓産の胎土を有する。鍋・甑等の口縁端部の面は１期の資料に比較すると幅広い。図化並列することにより、外面調整、口縁端部等細部の形状など両者の違いがいっそう明らかになったと思われる。

（２）Ｕ字形板状土製品

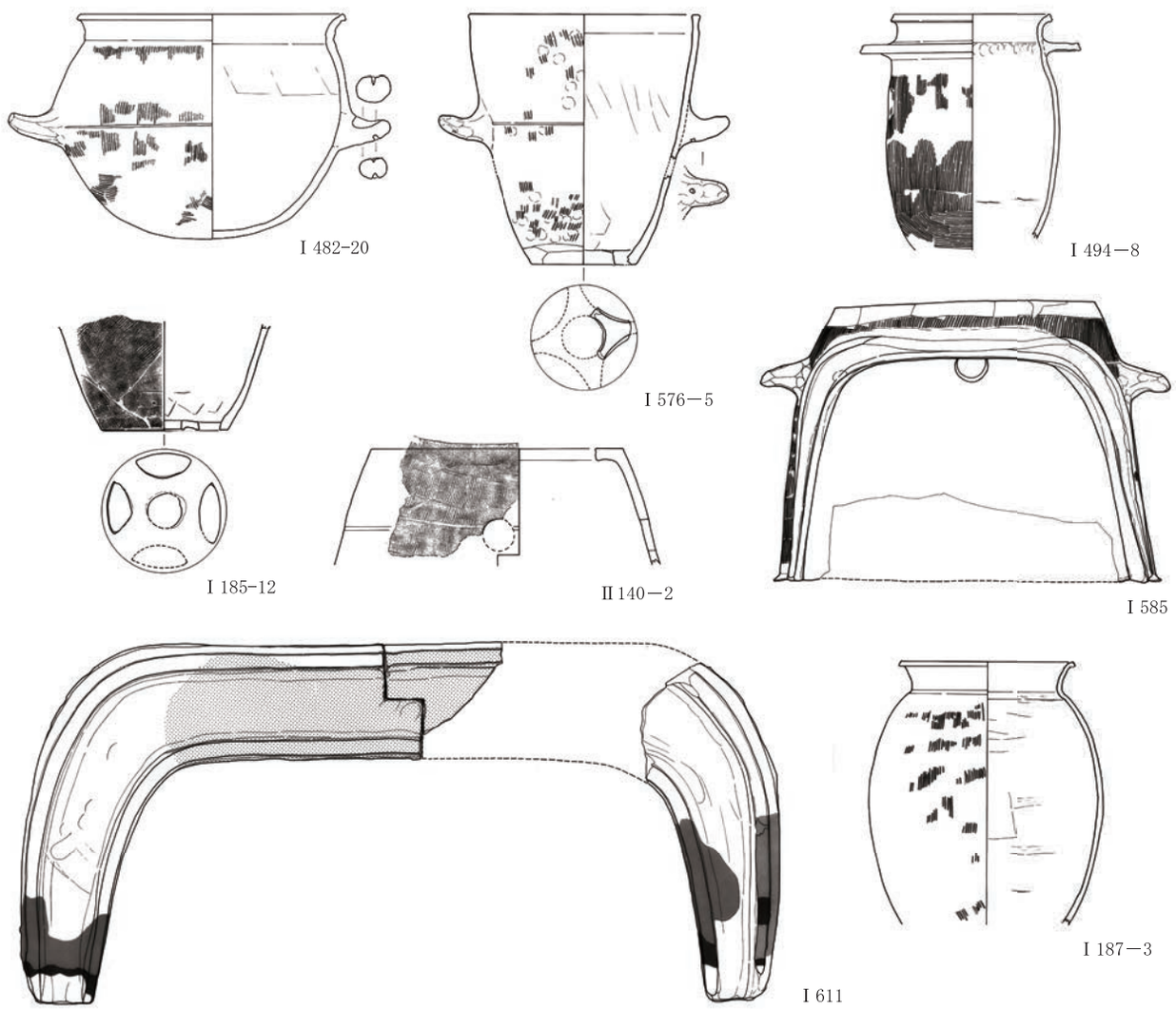
Ｕ字形板状土製品は今回の調査区出土資料点数は32点、報告書Ⅰに掲載した資料と合わせ、蔀屋北遺跡全体では出土資料数322点となった。表10は出土資料の観察表で、報告書Ⅰに掲載した観察表と資料№は連続している。Ｕ字形板状土製品の各部名称等は報告書Ⅰに従う。

出土状況の詳細をみてみる。出土地域は北東と南西の居住域の二ヵ所に分かれ、そのうち３／４にあたる24点が北東居住域から出土している。出土遺構は竪穴住居、土坑、溝など様々であるが、竪穴住居からは覆土での出土であり、今回の調査区でもＵ字形板状土製品の使用状況に直接結び付くような出土状況はなかった。

出土した資料で突帯の形状により分類できたのは16点、Ⅰが２点、Ⅲが13点、Ⅳが１点となる。第151・152図は代表的な出土例の実測図である。第151図１・２は突帯形状Ⅰタイプで、１はコーナー部、２は脚部である。２は表面突帯の間にわずかに格子タタキ痕が残り、当遺跡では初めて



a．１期の韓式系土器群



b．３期の韓式系土器群

第166図　１期と３期の韓式系土器群の比較

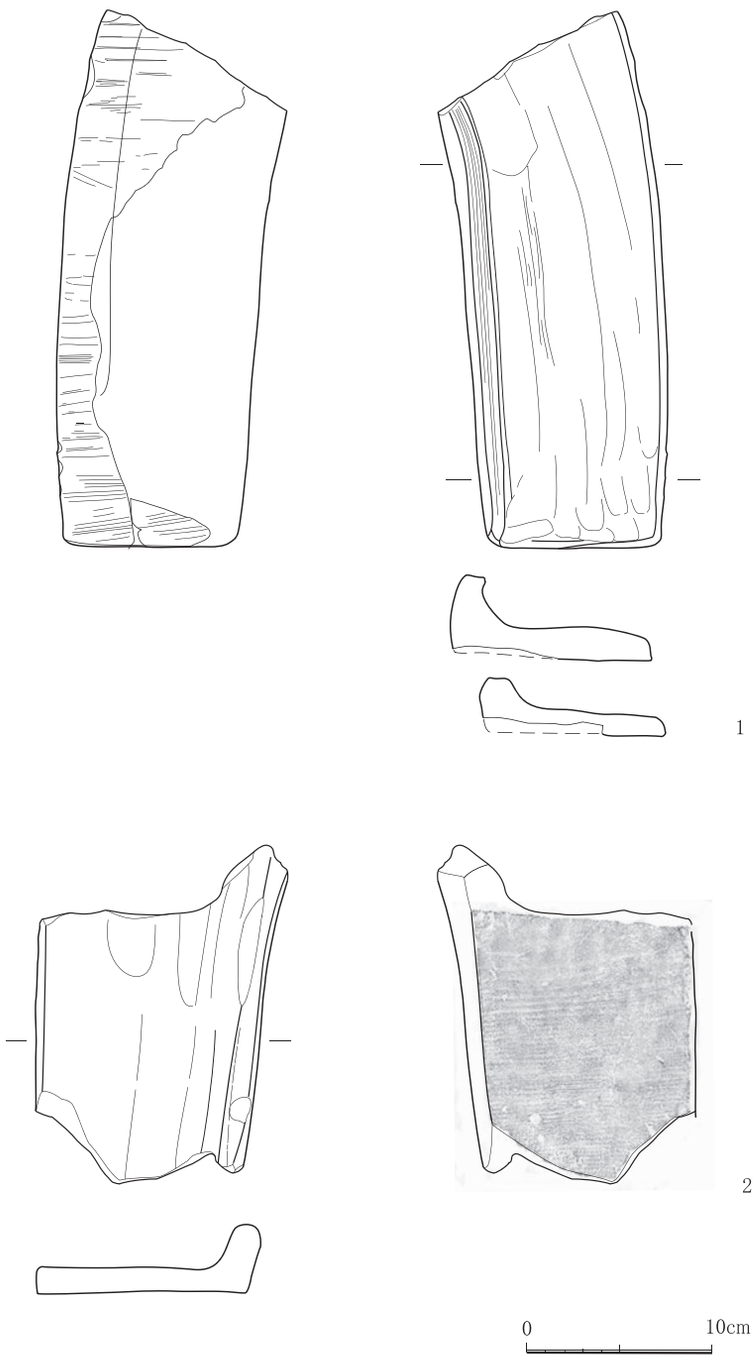
の出土例である。粘土板を平らに延ばす際にタタキ板が用いられたものと思われる。第151図３～５は突帯形状Ⅲタイプですべて天井部の相欠き部分である。Ⅲタイプは、今回の調査でも出土したすべての資料が生駒西麓産の胎土を有し、裏面は木目が明瞭にのこっているものがほとんどである。

第152図１は突帯形状Ⅳタイプの出土例である。このタイプは報告書Ⅰでは小破片２個体のみの出土で、U字形板状土製品の一タイプとするには疑問もあったが、今回の出土例では脚端部と相欠き部の破片が出土し、全体像を復原することができた。この突帯形状Ⅳタイプは報告書Ⅰでは外縁をおりまげて突帯を作ると報告していたが、なお今回の出土例の観察により突帯を外縁にそってはりつけていることが判明した。第152図では報告書Ⅰに掲載したコーナー部の破片（報告書Ⅰ第606図－４）も含めて配置し、全体像を復原して図化した。報告書Ⅰで記述したとおり突帯形状Ⅳタイプは裏面がヘラ状工具ナデで、また今回出土した天井部の破片を観察すると相欠きは端部の厚みを薄くして段を作り出して成形している。このような相欠きは陶邑ＯＮ２３１号窯灰原出土資料[註2]と同様の作り方であるが、当遺跡では初めての資料となる。復原した法量は、全体幅が推定で64㎝、天井部幅が10㎝、高さが推定で43㎝、厚み1.2㎝である。この法量をこれまでに出土した資料の法量を比較してみると、天井部幅、高さ、厚みは大きな差異はないが、全体幅が最も狭いものと比較すると20㎝ちかく小さいことが判明した。胎土は非生駒西麓産である。

以上のように今回の報告資料には突帯タイプⅠとⅣに当遺跡ではじめての出土例がみつかった。当遺跡のU字形板状土製品は突帯タイプⅢが圧倒的に多数を占めるが、その中に少数ながらも製作技法や、形態のことなるものが混入していることが判明した。

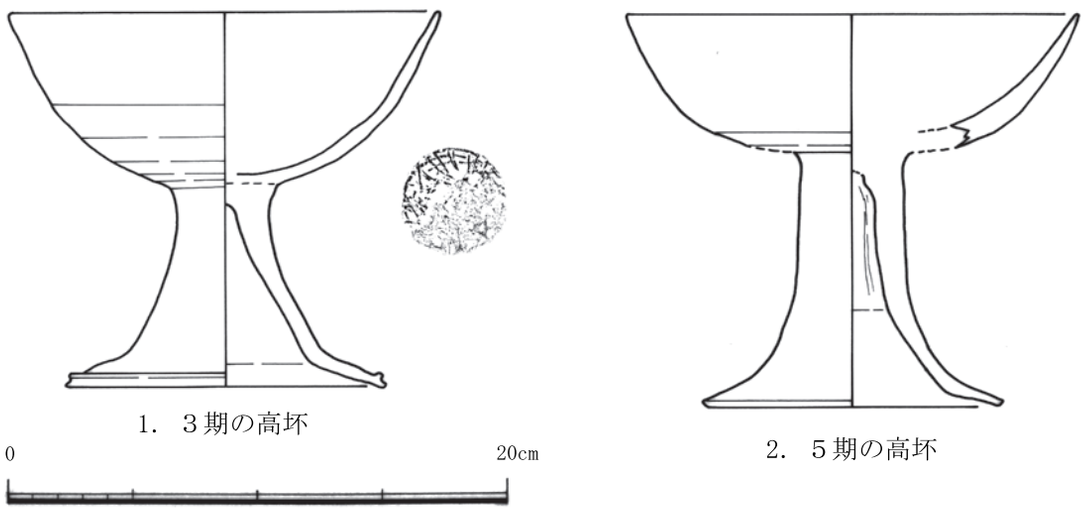
U字形板状土製品は当遺跡での出土例により、一躍注目を浴びた。この土製品の出土状況を明らかにすることは渡来人の動向を知る上でも非常に重要である。とくに当遺跡の出土例は韓半島栄山江流域の出土例と類似していることから、渡来人の故地を探る上での大きな要素となっている。

この視点から渡来系と称される集落の出土資料から、これまで不明土製品と扱われていた資料を見直してみると、大阪府教育委員会が発掘調査を実施した八尾市木の本遺跡の未報告資料に第167図の２点の資料が含まれていることが判明した。大阪府教育委員会の木の本遺跡の調査は平野川の改修工事に伴って実施され、167－１は平野川にかかる鳩川橋地点の立会調査時に出土した。167－２は第２地区の古墳時代包含層からの出土である。２点とも脚部の破片で、突帯は内側に取り付けられており、蔀屋北遺跡の分類ではⅡタイプに該当する。167－１はコーナー部から脚端部までの破片で、幅約10.8㎝、残存高28.7㎝、厚み1.8㎝を測る。突帯の高さは4.5㎝、幅１㎝前後で、表面はタテ方向のナデ、裏面は大部分が表面剥離しているが、成形時に粘土を広げ押し付けたと思われる土台の板の木目が残る。色調はにぶい橙色で非生駒西麓産の胎土である。167－２は幅約12㎝、厚み1.4㎝を測る。突帯の高さは3.7㎝、幅1.5㎝前後で表面はタテ方向のナデ、

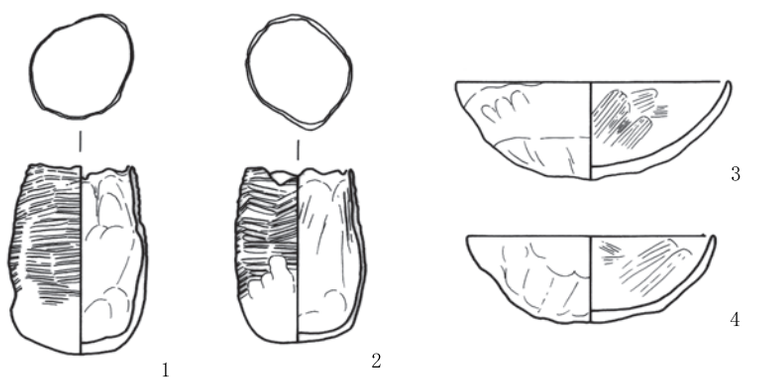


第167図　木の本遺跡出土Ｕ字形板状土製品

裏面は１と同様の木目が残る。色調はにぶい橙色で生駒西麓産の胎土製作されている。共伴する須恵器は陶邑編年Ⅰ型式－３・４段階で、このＵ字形板状土製品は古墳時代中期のものと思われる。２点の資料の出土地点は直線距離で200ｍ程離れており、木の本遺跡内でＵ字形板状土製品を使用する集団が広範囲に広がっていた可能性もある。今後さらなる資料の蓄積を待ちたい。

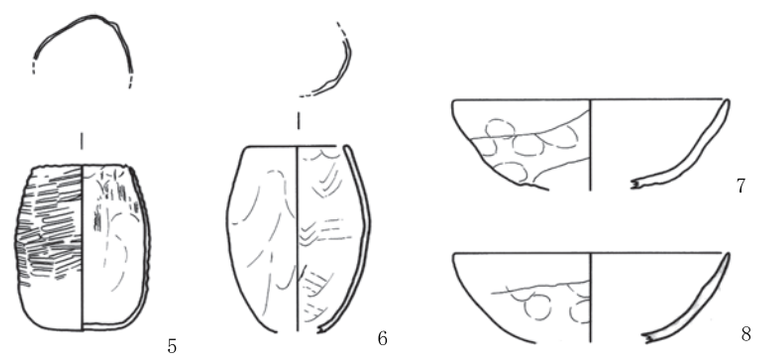


第168図　３期と５期の須恵器系土器



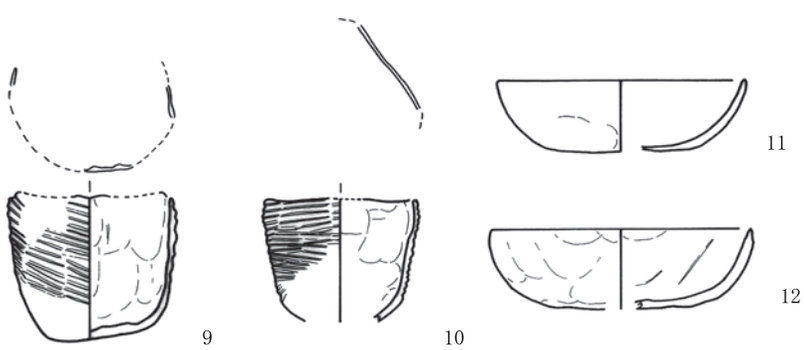
a. 土坑10144

・Ａコップ形
　１・２　→Ａ－ｙ－2
・Ｂ鉢形
　３・４→ｂ浅椀形



b. 土坑10138

・Ａコップ形
　６→Ａ－ｘ－2
　５→Ａ－ｙ－2
・Ｂ鉢形
　７・８→ｂ浅椀形



c. 土坑10003

・Ｂ鉢形
　11・12→ｂ浅鉢形
　９・10→ｃ平底バケツ

第169図　各土坑における小型製塩土器の組み合わせ

（3）土師器

土師器では土師器鉢で浅鉢形１－ｂタイプとした資料について、若干の知見を述べたい。当遺跡では口縁部が内湾する鉢、浅鉢形１－ｂタイプを、口径20㎝前後のもの（１－ｂ－１）と口径13㎝前後のもの（１－ｂ－２）の2タイプに分け分類している。１－ｂ－２タイプは報告書Ⅰでは23点図化報告しており、今回の報告でも第130図10、第132図16・17のように３点出土している。しかしこの浅鉢形は同時代の大阪の遺跡からの出土例がほぼ皆無といってよい状態である。そこで他地域で類似例を探してみると、北九州地方で類似の形態の土師器坏報告例を数点確認した。一例をあげると、福岡県大刀洗町西森田遺跡[註3]では、溝内から大量の土師器坏が出土している。西森田遺跡は百済系の陶質土器も出土しており、馬飼い集団とのかかわりも論じられている遺跡である。今後鉢のみならず高坏等他の器種も他地域との関係を検討していく課題が残されたといえる。

（4）須恵器系土器

須恵器系土器は今回の調査区でも15点出土した。出土時期は３期～５期に及び、出土遺構は土坑、流路等である。報告書Ⅰでも記述したとおり、当遺跡では５世紀中頃～６世紀にかけて、継続して使用されている。報告書Ⅰを刊行後、５世紀と６世紀の須恵器系土器は技術系譜が異なる土器ではないかという指摘を受けたので、この点について観察を行い、詳述する。

須恵器系土器の製作技術が時期を経るに従ってどのように変化しているのか、あるいはまったく異なる技術で製作されたのか、出土器種の大半を占める高坏についてみていきたい。観察は器形分類で坏部Ｂ・Ｃ、脚部ｂ・ｃに分類した高坏を対象とした。

第168図１は３期の須恵器系土器高坏で坏部の形態Ｂ、脚部の形態ｂである。製作技法は、坏部の外面は坏底部から器高の１／２位まで回転ヘラケズリ、器高の１／２から口縁端部までは回転ナデが施されている。ただし回転速度は遅いと思われ、その結果特にヘラケズリ部分は胎土中に含まれる小石や砂粒の動きが目立たず、仕上がりは丁寧にみえる。脚部は全体を回転ナデで仕上げている。坏部と脚部の接合方法は、接着部分に刻み目を入れて接合する須恵器と同様の方法をとっている。

第168図２は５期に区分した須恵器系土器で坏部の形態Ｃ、脚部の形態ｃの高坏である。製作技法の詳細をみる。坏部の外面は坏底部から器高の１／４位まで回転ヘラケズリ、器高の１／４位から口縁端部までは回転ナデがほどこされている。168－１と同様やはり回転速度は遅いと思われ、その結果胎土中に含まれる小石や砂粒の動きが目立たない。脚部は全体を回転ナデで仕上げている。坏部と脚部の接合方法は接着部分に刻み目を入れて接合する方法をとっている。

３期と５期の高坏の観察によると形態に変化はあるものの、製作技法は回転ヘラケズリと回転ナデの使用、接合技法も変化はなく、連続して須恵器の製作技法の影響を受けたと思われる。両者ともに、酸化焔焼成ではあるが、硬質でおそらく窯を構築して焼成されたと思われ、胎土も緻密で精製されている。

他地域では窯を使用し、須恵器の製作方法を用いる酸化焔焼成の土器は須恵器が定着する５世紀後半以降は、廃れているようであるが、当遺跡では６世紀に至ってもこのような土器が使用され続けている（それも器種は高坏が圧倒的に多い）。これは当遺跡の出土資料の大きな特徴といえる。今後周辺地域でも資料を探っていきたい。

（５）製塩土器

今回報告分の調査区でも報告書Ⅰと同様小型製塩土器が多量に出土した。とくに北東居住域で検出した３期の土坑Ｋ１－１０１３８、土坑Ｋ１－１０１４４、４期の土坑Ｋ１－１０００３からは多量の小型製塩土器が出土した。当遺跡で製塩土器が出土した主要遺構は26カ所で、コップ形Ａの総重量は132.977kgである。Ａ・Ｂタイプの小型製塩土器の詳しい出土量は、報告書Ⅰの集計分もあわせて表10に示した。

集計表によると今回報告の３基の土坑は、Ａコップ形に加えて、それぞれ数種類の小型器種が出土しており、Ｂ鉢形－ｂ浅椀形の出土量が多い。特に３期に区分した土坑Ｋ１－１０１３８・１０１４４の２基の遺構からは当遺跡全体の出土量の30％近い量の浅椀形が出土している。

Ｂ鉢形－ｂ浅椀形は淡路島貴船神社遺跡（註４）、神戸市上脇遺跡（註５）、吉田南遺跡（註６）等で出土例があり、淡路島や播磨地域特有の製塩土器と指摘も受けている。しかし今回新たな出土資料も含めて当遺跡での浅椀形の出土状況を見てみると、一ヵ所に集中して出土するのではなく、製塩土器が出土するほとんどの土坑で出土しており、しかもＡコップ形と共伴している。出土時期は蔀屋北３期が中心である。当遺跡では煎熬用の石敷き炉は検出していないが、ｂ浅椀形は煎熬用、Ａコップ形は焼き塩用という容器の機能分化があり、ｂ浅椀形は当遺跡周辺で製作された煎熬用製塩土器の可能性が高いと思われる。

註１　中村浩編『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会　1978、中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1981

註２　西口陽一編『野々井西遺跡・ＯＮ231号窯跡』大阪府教育委員会　大阪府埋蔵文化財協会　1994

註３　西村智道編『西森田遺跡２』大刀洗町教育委員会　2000

註４　『貴船神社遺跡』兵庫県文化財調査報告２１９冊　2001

註５　『上脇遺跡Ⅱ　神戸西バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』兵庫県文化財調査報告２３３冊　2002

註６　『吉田南遺跡　第17・18次調査　発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2006

表10　U字形板状土製品観察表

挿図No.	資料No.	出土地点	△接点無	個体No.	調査区	破片No.	実測No.	地区名1	地区名2	遺構種別	遺構番号	層名・土色	突帯のタイプ	部分名	全体幅（ｃｍ）		天井部幅（ｃｍ）		高さ（ｃｍ）		厚み（ｃｍ）	備考
152	291	北東	△	1	Ｋ１	1	243	A19	e2	流路	08013		Ⅳ	相欠き部・脚部	推	64		10	推	43	1.2	蒂屋北報告書Ⅰ第606図－４に掲載資料と同一個体の可能性が高い
		北東		1	Ｋ１	2	242	A19	e1	土坑	10144											
		北東		1	Ｋ１	24		A19	e2	流路	08013											
		北東		1	Ｋ１	25		A19	e1	溝	09062											
		北東		1	Ｋ１	26		A19	e1	土坑	09106											
		北東		1	Ｋ１	27		A19	e1,2	土坑	10138											
		北東		1	Ｋ１	28		A19	e1	土坑	10138											
		北東	△	1	Ｋ１	33		A19	e1	溝	10116											
		北東	△	1	Ｋ１	34		A19	e1	溝	10116											
		北東	△	1	Ｋ１	35		A19	e1,2			10面精査										
		北東	△	1	Ｋ１	14		A19	e1			8面掘り下げ										
151-5	292	北東		2	Ｋ１	5	237	A19	d1	流路	08013		Ⅲ	相欠き部				13.3			1.5	
151-2	293	北東		3	Ｋ１	8	241	A19	d1	流路	08013		Ⅰ´	脚部							1.4	表面に格子タタキ有
	294	北東		4	Ｋ１	16		A19	d3			8面掘り下げ	Ⅲ	コーナー部							1.4	
		北東		4	Ｋ１	17		A19	e1,2	溝	09062											
151-3	295	北東		5	Ｋ１	22	238	A19	e1	土坑	10144		Ⅲ	相欠き部				15.5			1.2	
		北東		5	Ｋ１	23		A19	e2			9面掘り下げ										
	296	北東			Ｋ１	3		A19	e1	竪穴住居	09060	覆土										
	297	北東			Ｋ１	4	28	A19	e1	竪穴住居	09060	覆土	Ⅲ	脚部							1.5	
	298	北東			Ｋ１	6		A19	d1	流路	08013											
	299	北東			Ｋ１	7		A19	d1	流路	08013		Ⅲ	コーナー部								
	300	北東			Ｋ１	9		A19	e2	流路	08013											
	301	北東			Ｋ１	10		A19	e2	流路	08013											
	302	北東			Ｋ１	11		A19	e2	流路	08013											
	303	北東			Ｋ１	12		A19	e2	流路	08013											
	304	北東			Ｋ１	13		A19	e2	流路	08013											
	305	北東			Ｋ１	15	240	A19	e1	流路	08013		Ⅲ	天井部							1.2	
	306	北東			Ｋ１	18		A19	e3	流路	08013	最下層										
	307	北東			Ｋ１	19	239	A19	d2			9面掘り下げ	Ⅲ	相欠き部							1.3	
	308	北東			Ｋ１	20		A19	e2		10051											
	309	北東			Ｋ１	21		A19	e2	土坑	10042		Ⅲ									
	310	北東			Ｋ１	29		A19	e1	カクラン												
	311	北東			Ｋ１	30		A19	e1,2			10面精査										
	312	北東			Ｋ１	31		A19	e1		10110											
	313	北東			Ｋ１	32		A19	de2			8面掘り下げ										
	314	北東			Ｋ１	36		A19	e1	溝	09062											
	315	南西			Ｋ２	1	15	A19	hi23	竪穴住居	12087	覆土	Ⅲ	相欠き部							1.3	
	316	南西			Ｋ２	2		B19	gh4			10面掘り下げ										
	317	南西			Ｋ２	3		A19	h4			10面掘り下げ										
	318	南西			Ｋ３	1	89	B19	d3	落込み	09050		Ⅲ	脚部							1.1	
151-4	319	南西			Ｋ３	2	90	B19	d3	落込み	09050		Ⅲ	天井部				14.5			1.5	
	320	南西			Ｋ３	3	91	B19	d3,4	落込み	09050		Ⅲ									
	321	南西			Ｋ３	4	118	B19		土坑	09091		Ⅲ	天井部							1.3	
151-1	322	南西			Ｋ３	5	135	B19	d3	落込み	09050		Ⅰ	コーナー部							2.0	

表11　小型製塩土器集計表

					Aコップ形							B鉢形－a小椀形		B鉢形－b浅椀形		B鉢形－c平底バケツ形				B鉢形－d深鉢形	
時期	居住域	地区名	遺構名	遺構種別	タタキあり(g)	底部タタキなし(g)	タタキなし(g)	タタキあり口縁(g)	個数	タタキなし口縁(g)	個数	口縁(g)	個数	口縁(g)	個数	タタキあり口縁(g)	個数	タタキなし口縁(g)	個数	口縁(g)	個数
2期	南西居住域	A	1632	土坑	0	0	83.4	2.5	1	432.9	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2期	北東居住域	C	3837	土坑	33.8	21.9	210.9	13.3	2	131.6	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2期	北東居住域	C	製塩土器集中部	製塩土器集中部	4485.7	474.5	7731.7	940.3	316	927.3	431	5.8	1	122.5	6	0	0	0	0	0	0
3期	南西居住域	A	1135	土坑	41603.1	12156	11675.6	13405	6772	3220.2	1169	0	0	28	2	0	0	0	0	0	0
3期	南西居住域	A	1654	土坑	201.9	56.9	145.9	120	42	89.9	26	64.4	6	0	0	0	0	349.3	53	0	0
3期	南西居住域	A	1800	土坑	145.2	23.5	62.6	61.7	27	17.2	6	0	0	48.1	2	0	0	0	0	0	0
3期	南東居住域	A	1540	土坑	181.8	39.2	212.6	126	28	273.2	50	0	0	201.4	10	0	0	0	0	0	0
3期	南西居住域	A	1357	土坑	144.7	16.7	85	63.5	15	49.7	8	0	0	501.7	38	0	0	0	0	190.2	27
3期	南西居住域	A	958	土坑	193.1	34.8	20.8	115	29	35.4	1	0	0	84.9	12	0	0	23.3	4	0	0
3期	南西居住域	A	952	土坑	307.3	41.8	226.3	155.6	55	68.3	28	0	0	48.3	3	0	0	0	0	0	0
3期	南西居住域	B	130567	土坑	3226.5	353.3	526.9	1551.7	564	8.6	3	0	1	52.5	9	35.2	3	0	0	0	0
3期	北東居住域	B	131001	土坑	160.3	97.5	257.1	52.4	19	275.8	60	0	0	0	0	0	0	6.9	1	0	0
3期	北東居住域	C	3485	土坑	1020	124.8	1616.3	344.6	50	624.1	120	0	0	0	0	0	0	37.8	4	0	0
3期	北東居住域	C	4159	土坑	132.3	62.2	264.6	287.8	43	116.4	20	10	1	297.6	9	11.6	1	92.9	8	112.3	11
3期	北東居住域	C	3873	土坑	368.4	59.3	177.9	222.4	30	120.9	21	0	0	63.7	3	0	0	0	0	0	0
3期	北東居住域	C	2415	土坑	762.7	128.8	569.5	232.9	46	175.7	34	96.4	21	0	0	0	0	14.8	2	0	0
3期	北東居住域	D	520	土坑	713.2	187.4	92.1	443	146	107.6	27	0	0	116.4	7	0	0	0	0	0	0
3期	大溝	D	900上層	大溝	86	20.6	216.9	25.6	19	117.2	23	2.4	1	27.6	2	30.9	5	172.6	38	0	0
3期	大溝	D	900下層	大溝	79.2	1.9	123.1	29.2	16	54.4	3	15.4	1	0	0	38.2	4	158.2	28	0	0
3期	南西居住域	E	446	土坑	1193.3	262.8	2	639.1	166	8.4	3	0	0	35.2	2	0	0	0	0	0	0
3期	大溝	H	11下層	大溝	300.7	37.9	424.4	118.1	69	247.1	83	37.5	15	290	29	16.1	6	15.8	6	0	0
4期	北西居住域	D	1617	土坑	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24.9	2	7.5	1	20.4	3	0	0
4期	大溝	H	11上層	大溝	2264	423.2	4202.4	763.7	526	895.9	605	351.1	87	1012.1	252	81.2	19	94.8	33	0	0
3期	北東居住域	K1	10138	土坑	807.3	93.5	241.3	655.6	146	416.8	69	29.2	2	638.6	56	0	0	7.2	2	0	0
3期	北東居住域	K1	10144	土坑	547.7	133.2	152.2	1474.9	130	115.2	29	19.9	3	674.4	37	8.2	3	36.5	13	0	0
4期	北東居住域	K1	10003	土坑	0	0	0	6.7	2	27.8	7	6	1	292.3	20	85.7	20	56.1	18	0	0
合計					58958.2	14851.7	29321.5	21850.6	9259	8557.6	2872	638.1	140	4560.2	501	314.6	62	1086.6	213	302.5	38

Aコップ形の重量　＝　133540 g

第３節　動物遺存体

はじめに

今回の調査（管廊部）によって、10点の動物遺存体を検出している。その内、種まで同定できた資料は８点で、いずれもウマであった。ほかの資料については遺存状況が悪く、種・部位とも不明であった。時期は５世紀、６世紀に大別できる。出土遺構は流路、区画溝、土坑、井戸などで、いずれも保存状態は悪くかなり劣化していた。

同定結果については表12、計測値については表13に掲載している。なお、前回の報告（安部2010）で遺漏していたウマの左下顎骨（E2449）も合わせて報告する。

（出土遺構と出土部位）

前述したように、大型哺乳類の長骨３片を除くと、いずれもウマで、部位は左下顎骨２点、遊離した歯牙６点である。５世紀では、土坑K3－09091から大型哺乳類の長骨片（資料番号K0206、以下資料番号を省略）、大壁建物K3－1から大型哺乳類の長骨片（K0227）、井戸K3－09192から左下顎骨（K0324）、E調査区の大溝E090001から左下顎骨（E2449）が出土している。

６世紀では、流路K1－08013から左下顎第１後臼歯？（K0080）、区画溝K2－12010から下顎臼歯（K0370）と臼歯片（K0129）、竪穴住居K22から臼歯片（K0339）が出土している。時期不明では、土坑K3－09038から右上顎第4前臼歯（K0110）、土坑K1－10194から右上顎第３or ４前臼歯（K0280）が出土している。

（ウマの特徴）

臼歯から年齢が推定できる資料は５点で、３才以下１例（K0324）、３～４才１例（E2449）、６才２例（K0080、K0110）、13才１例（K0280）である。なお、ウマの年齢の推定には西中川編（1991）の臼歯の高径を用いている。時期不詳を除くと５世紀のものは４才以下で、６世紀の資料は６才以降のものである。この結果は、時期が新しくなると老齢個体が増加するという前回の報告例（安部2010）と同じ傾向を示し、興味深い。

左下顎骨（K0324）が出土した井戸K3－09192は、蔀屋北遺跡の南西居住域にあたり、ウマの最小個体数の多いA調査区に含まれる。左下顎骨は井戸の最上層から出土し、井戸廃絶に伴い投棄されたもので、何らかの儀礼的意味合いが想定される。さらに、A調査区は馬埋葬土坑３基、馬埋納土坑１基、そしてウマの骨が多く出土した溝A950の存在等から、ウマに関していえば、ほかの居住域とはやや性格が異なり、祭祀、埋葬空間としての機能を担っていたのかもしれない。今後、詳細な分析や調査が期待される。

（参考文献）

安部みき子　2008「蔀屋北遺跡出土の動物遺体」『蔀屋北遺跡I』大阪府埋蔵文化財調査報告2009－3

西中川　駿　1991「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」『平成２年度文化省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告』

表12 管廊地区出土動物遺存体同定結果一覧

＊一部、E調査区の資料を含む

資料番号	地区	遺構など	層位など	取上番号	種 名	出土部位			備考	図版番号	時期
						左右	部位名	詳細			
0080	A19-e2	流路 K1-08013			ウマ	左	下顎第1後臼歯？		歯冠高55.19mm、歯冠幅13.80mm、歯冠長24.82mm。歯冠高から年齢は6才。	60-3	6世紀
0110	B19-d2	土坑 K3-09038	南端		ウマ	右	上顎第4前臼歯	歯冠の前位、後位は破損。	歯冠高54.34mm、歯冠幅28.23mm。歯冠高から年齢は6才。	60-1	？
0206	B19-d・e3	土坑 K3-09091			大型哺乳類		骨片				5世紀
0219	A19-h4	区画溝 K2-12010			ウマ		臼歯片				6世紀
0227	B19-e4	大壁建物 K3-1	土坑192		大型哺乳類		長骨片	2片。		60-4・5	5世紀
0280	A19-e1・2	土坑 K1-10194			ウマ	右	上顎第3or4前臼歯	歯冠の後位、内側は破損。	歯冠高27.34mmから年齢は13才。	60-2	？
0324	B19-d4	井戸 K3-09192	上層		ウマ	左	下顎骨	下顎骨体の前位、下顎枝は破損。	歯冠部での臼歯列長は残存158.22mm。第4前臼歯および第3後臼歯の歯冠高から年齢は3才以下。	60-6	5世紀
0339	A19-h2・3、i2・3	竪穴住居 K22	12087		ウマ		臼歯片				6世紀
0370	A19-h4	区画溝 K2-12010			ウマ		下顎臼歯				6世紀
05001-E2449	B19-h7	大溝090001	下層		ウマ	左	下顎骨	第2前臼歯より前位の骨体、下顎枝上部は破損。第2前臼歯の前位は一部破損。	第3前臼歯の歯冠高69.4mmから推定年齢は3～4才。	61	5世紀

表13 ウマ下顎骨の計測値

（比較参考資料）

資料番号のアルファベットは調査区の略称

部位	動物名			井戸K3-09192	大溝E090001	包含層	土坑A655		土坑A1483	溝A950下層	土坑A1345		大溝D900	大溝F
	資料番号			K - 0324	E - 2449	A - 0520	A - 1371		A - 1999	A - 2010	A - 2035		D - 3231	F - 2454
	計測項目/左右			左	左	右	左	右	右	左	左	右	左	右
下顎骨	1	下顎骨全長	Id - goc		残存295									
	3	下顎枝長	M後縁よりgoc		125.21					122.18				
	4	歯槽最大長	Id - M後縁					256.85						
		歯槽間隙長	I3 - P2間					64.17						
	6	類臼歯長（P2～M3）	歯槽部				161.69	165.82					170.61	
			歯冠部	残158.22										
	8	前臼歯長（P2～P4）	歯槽部				94.52						88.14	
	7	後臼歯長（M1～M3）	歯槽部		89.74			76.24					84.58	
			歯冠部		85.26			77.97	88.58	79.53		78.88	80.06	
	10	P3（第3前臼歯）	近遠心径		30.11			86.11		28.08	29.40		29.05	31.66
			頬舌径		18.41					15.45			18.23	22.39
			歯冠高		69.40			62.33		72.11				
	11	P4（第4前臼歯）	近遠心径		30.39					24.19	26.92		27.04	28.27
			頬舌径		17.48					16.35			17.32	21.68
			歯冠高	71.12						75.43			約4cm	60.24
	12	M1（第1後臼歯）	近遠心径		28.47				26.11	24.97	25.49		24.28	26.92
			頬舌径		16.19					14.32			15.04	20.56
			歯冠高					63.32		72.99				
	13	M2（第2後臼歯）	近遠心径		21.29	24.75			30.87	26.65	27.92		24.04	
			頬舌径		16.61					14.04			13.87	
			歯冠高							74.61	78.74+			
	14	M3（第3後臼歯）	近遠心径		31.49	27.02		32.85	32.32	30.41			32.45	
			頬舌径		14.01					11.56			14.40	
			歯冠高	88.11						66.10				
	22 a	下顎体高（1）	M1後縁		120.12	125.88								
	22b		P4後縁		85.72									
		下顎切痕最低位と下顎角間の距離								212.30				

単位はmm

第４節　管廊地区出土の木製品

第１項　木製品の概要

本書において報告された菅廊部分の調査区からは、弥生時代および古墳時代に属する木製品が出土している。本章ではこれらの木製品について報告するとともに、「蔀屋北遺跡発掘調査報告書Ⅰ」（以下、本節において「蔀屋北Ⅰ」という。）における未報告資料についても補足として報告を行う。

なお、木製品の器種分類については、「木器集成図録近畿原始篇」（奈良文化財研究所 1993）、「考古資料大観８　弥生古墳時代　木・繊維製品」（山田 2005）を参考に検討した。分類については蔀屋北Ⅰを参照されたい。

第２項　弥生時代の木製品

弥生時代の木製品はＤ調査区とＣ調査区を繋ぐＫ１調査区から出土している。蔀屋北Ⅰにおいて報告されたように、Ｄ調査区の東半部から弥生時代中期前葉～中葉にかけての集落跡が検出されており、Ｋ１区でもその集落の続きが検出されている（第２章参照）。木製品の時期についても弥生時代中期前葉～中葉である。

出土した木製品は、農具（直柄平鍬等）、食事具（匙）等の５点で数量的には多くはない。

１．農具

（1）鍬類

126－１は直柄平鍬である。Ｋ１調査区の土坑１１０３１から出土した。柄孔周囲は緩やかに肥厚し、明確な舟形の隆起を作り出していない。左右辺の一部が欠損しているため元の刃幅は不明であるが、柄孔から左右に向かって急に厚みを減じており狭鍬に属すると考えられる。アカガシ亜属の柾目材を利用している。

126－３もアカガシ亜属の柾目材であることから、農具の一部と考えられるが器種は不明である。比較的扁平で幅が狭いため曲柄又鍬の刃部と考えられる。Ｋ１調査区の土坑１１０５２から出土した。

２．食事具

（1）匙未製品

126－２は匙未製品である。Ｋ１調査区の溝１１０１３から出土した。クワ属の柾目板を縦木取りして作製されている。身は先端に向かって徐々に幅を減じる楕円形に近い形態を呈し、柄の

付け根付近は丸く加工されている。身の彫り込みはされていなが、背面には曲面に成形するための、縦方向の加工痕が明瞭に見られる。柄は身に対して約150°の角度をもって取り付く。柄の上面は欠損している部分もあるがが断面は方形に加工されており、先端部には断面台形の頭部を装飾的に彫り出している。

３．用途不明品

(1) 棒状木製品

126－４はＫ１調査区の溝１１０１３から出土した。シイ属の芯持材を棒状に加工したものである。上端は部分的に欠損するが、全体を緩く尖らせるように加工されており断面は略方形を呈する。また先端部の加工痕のやや下位の左右に直線的な刃物痕が複数みられる。下端は切断痕が明瞭で、この長さが本来の製品としての長さと考えられる。

(2) 板状木製品

126－５はＫ１調査区のピット１３０５９から出土した。クスノキの板目材を利用したものである。板状と称したが、短軸方向に緩やかに曲面をもたせるように加工されているため断面が弧状を呈している。また厚みについても一方へ徐々に減じている。一辺には方形孔の痕跡が２箇所みられる。この部分は二次的な転用のため再加工されており、その延長部分が切り落とされている。厚みの薄い方の辺と、方形孔のある方とは反対側の辺については、端部がやや丸みを帯びている。元の形状や用途等は不明である。

第３項　古墳時代の木製品

古墳時代の木製品はＫ１調査区、Ｋ３調査区、ＵＫ調査区から出土している。これらはいずれも古墳時代中期～後期の集落域における溝やピット等からの出土である。

出土した木製品は容器、建築部材、祭祀具（刀形）等で種類、数量ともに多くない。

１．容器

(1) 刳物容器

154－１はＫ１調査区の流路０８０１３から出土した。アスナロ属の柾目材を利用したもので、長さ71㎝を測る大型の容器である。長軸方向に半裁されていると考えられ、元の幅は30㎝程度を測ったと考えられる。中央を楕円形に彫り込まれており、深さが７㎝程を測る。長辺の立ち上がり部分の内面底部に、細い蟻溝状の窪みが見られる。端部の一方は上下面より斧で切り落とされており、全体に作りが粗い。裏面は平坦に加工されている。針葉樹製の容器は板目材を利用する場合が普通であることや、形態的にあまり見られないことを考慮すると容器とするには若干の疑問も残る。

２．建築部材

（1）横架材

154－２はＫ１調査区の流路０８０１３から出土した。アスナロ属の板目材を利用したもので、中央やや片側寄りに4.5㎝×2.5㎝の方形孔があり、その両側に５㎝×５㎝の正方形孔と５㎝×2.5㎝の長方形孔が並ぶように穿たれている。中央の方形孔は板に対して斜め方向に穿たれている。また正方形孔と長方形孔は板に対して垂直に穿たれており、その間隔は約60㎝を測る。二個一対で機能していたとみられる。両正方形孔から外側に向かって細い蟻溝状の掘り込みがみられる。一方の端部（実測図の左側）は欠損しているものの角状に削り出されている。反対側の端部は二次的に切断されており、本来は角状に削り出されていたと考えられる。

蹴放し材やまぐさ材に構造が似るが、ここでは建築部材のうち水平方向に使用される横架材の一部として考えておきたい。

（2）柱材

155－５はＫ３調査区のピット２１４から出土した。ツガ属の芯持材である。面取りがなされているため、断面が多角形を呈する。径約15㎝を測るが、目視で年輪が100年以上数えることができる。端部は斧による加工痕が明瞭にみられる。

（3）礎板

155－１はＫ２調査区のピット０７１から出土した。スギの板目材を利用しているが、木の軸方向に対してやや斜めに板を取っているため、追柾目のような木取りになっている。礎板として二次的に加工されたため、全体は36㎝×20㎝の板であるが、本来は孔の位置や法量、木取りから、船材（舷側板）であったと考えられる。穿たれた方形孔は６㎝×２㎝程度である。

（４）その他

155－２はＵＫ調査区の大溝００１北肩部から出土した。モミ属の追柾材を利用している。横架材の一部であろうか。端部を角状に作り出している。建築部材の二次的な転用に際してこの部分は不要であるため切断され廃棄されたものと考えられる。

３．用途不明品

（1）棒状木製品

154－３はＫ２調査区の溝１２０１０から出土した。一方の端部に3.5㎝×２㎝程度の楕円形孔が穿たれている。

154－４はＫ２調査区の溝１２０１０から出土した。中央付近に長さ５㎝、深さ２㎝程度の抉りが入れられている。

155－６はＫ２調査区の溝１２０１０から出土した。アカガシ亜属の径20㎝程度の一木から３分の１にみかん割りした素材とも言えるもので、芯が削り取られており、また外面には樹皮が残されたままである。

155－７はUK調査区の大溝001から出土した。エノキ属の芯持材で２㎝程度の小径木を利用している。上端は一段細く削り出されており、下端は垂直に切断されている。

155－８はUK調査区の大溝001より出土した。アスナロ属の板目材を利用している。断面が三角形を呈しているため刀形木製品の可能性もあるが、作りが粗雑であり、また下半部のくびれは加工ではなく材自体の素性によるもののため、製品加工時の残材とも考えられる。

(2) 板状木製品

155－３はＵＫ調査区の大溝００１から出土した。クリの芯にかなり近い部分の板目材を利用している。一方の端部を左右から削り尖らせている。

(3) 二股状木製品

155－４はＫ１調査区の流路０８０１３より出土した。クスノキの柾目材を利用したもので、みかん割り材からの成形途上のものである。全体に遺存状態が悪い。二股の一方は端部を丸く作り出しているが、もう一方は杭状に尖らせている。上端には方形孔が穿たれている。

表14　木製品 観察表

図版	挿図	番号	名称	遺構名	調査区	時期	長さ cm	最大幅 cm	最大厚 cm	樹種	実測番号	登録番号	備考
37	126	1	直柄鍬	土坑11031	Ｋ１調査区	弥生	21.5	6.3	1.4	コナラ属アカガシ亜属	木28		
37	126	2	匙	溝11013	Ｋ１調査区	弥生	29.2	5.1	2.7	クワ科クワ属	木21		未成品
37	126	3	鍬	土坑11052	Ｋ１調査区	弥生	16.1	5.8	1.9	コナラ属アカガシ亜属	木27		
37	126	4	棒状木製品	溝11013	Ｋ１調査区	弥生	12.7	径2.9		ブナ科シイ属	木25		
37	126	5	板状木製品	13057	Ｋ１調査区	弥生	27	15	2.4	クスノキ	木26		
59	154	1	容器	流路08013	Ｋ１調査区	古墳	71	16.2	8.5	ヒノキ科アスナロ属	木30		
59	154	2	建築部材（横架材）	流路08013	Ｋ１調査区	古墳	102	17	2.9	ヒノキ科アスナロ属	木24		
	154	3	棒状木製品	溝12010	Ｋ２調査区	古墳	54	5.7	1.4		木32	377	
	154	4	棒状木製品	溝12010	Ｋ２調査区	古墳	38	3.3	2		木33	374	
59	155	1	礎板	ピット071	Ｋ２調査区	古墳	36.5	19.8	4.2	スギ	木１		舷側板転用
	155	2	建築部材	大溝001北肩部	ＵＫ調査区	古墳	41.3	16.5	2.9	マツ科モミ属	木18		
59	155	3	板状木製品	大溝001	ＵＫ調査区	古墳	46	8.7	3.2	クリ	木19		
	155	4	二股状木製品	流路08013	Ｋ１調査区	古墳	98.5	29.5	7	クスノキ	木29		
	155	5	柱材	ピット214	Ｋ３調査区	古墳	59.8	径15		マツ科ツガ属	木７		掘立Ｋ３－３
	155	6	棒状木製品	溝12010	Ｋ２調査区	古墳	57.0	9.6	6.2	コナラ属アカガシ亜属	木23	375	樹皮つき
59	155	7	用途不明	大溝001	ＵＫ調査区	古墳	8.55	2	1.3	ニレ科エノキ属	木17		
59	155	8	用途不明	大溝001	ＵＫ調査区	古墳	22.0	3.6	1.6	ヒノキ科アスナロ属	木16		

第５節　蔀屋北遺跡出土の準構造船

蔀屋北遺跡では、５箇所の居住域のうちの３箇所で、計６基の井戸から井戸枠に転用された準構造船の船底材が検出されており、さらに他の複数の遺構から舷側板、竜骨や礎板に転用された船底材、舷側板、櫂、アカ取りなども検出されている。ここでは、これまで各地で確認されている準構造船の実物資料を検討し、馬を運んできたであろう蔀屋北集落の準構造船について考える。

木造船の種類とその構造

古墳時代に鉄骨構造の船がなかったことは言うまでもなく、実存したのは木造船であった。そして木造船には、刳り船、構造船、準構造船の３形式があり、古墳時代に属するものとしては、刳り船と準構造船の実物資料が認められている。

刳り船

刳り船は、河川や内海の往来や漁労時の乗り物などとして使用されたと考えられる小型の船である。半裁した丸太を刳り抜いて造られ、１本の丸太材を刳り抜いた単材刳り船と、２本以上の部材を組み合わせた複材刳り船とがある。

単材刳り船は、古くは縄文時代から類例が認められ、北東北・北海道・南九州などの一部地域では、わずかではあるが今でも使用されている地域も認められる。その実物資料は、各時代に属する類例が多数認められる。

これに対して複材刳り船は類例こそ少ないが、中には古墳時代に属する実物資料も認められる。

構造船

構造船は、複数の厚板材を組み合わせて建造した大型の船である。現段階では、古墳時代に属する類例は認められない。

文献資料によれば、推古天皇15（西暦607）年から同22（614）年にかけて、３度にわたり中国の隋に使節団（遣隋使）が派遣されている。その後、618年に隋が滅亡して唐が興きると、そのまま遣唐使として遣使が続行された。遣唐使は894年までの264年間に20回任命され、そのうちの15回は実際に渡唐したらしい。使節団は、多い時には500人を超える人員で編成され、これらが４艘の船に分乗して渡海している。そうであれば１艘の船に150人を超える人員を乗せることになり、全長10m、幅２ｍほどの準構造船では物理的に無理である。したがって、渡航するには、より大型化が可能な構造船の存在が不可欠となる。したがって、実物資料こそ認められていないが、７世紀代には人や物資の大量輸送が可能な大型の構造船が建造されていたと思われる。

準構造船

準構造船は、刳り船を船底材とし、舷側板を複数段継ぎ足して舷を嵩上げすることで、対波性の強化と積載量の増大化を図った船である。土器に描かれた線刻画などから、弥生時代後期には

すでに存在していたことがわかっている。また、古墳時代の装飾古墳壁画、埴輪への線刻画、船形埴輪などにも準構造船を表現したものが認められる。

準構造船の実物資料はいくつか認められているが、いずれも船体の一部分のみで、全容を把握できるものは見つかっていない。そのため分類は、形象埴輪の１種である船形埴輪を基になされている。

船形埴輪に表現された構造上の特徴から、準構造船は西都原式と菩提池西式の２形式に分類されている。

西都原式は、宮崎県西都原古墳群に属する西都原１１０号墳から出土した船形埴輪をもとに設定された形式で、一体構造を呈する。一体構造とは、船底部側面に舷側板を乗せて固定し、船体を嵩上げして人や貨物を乗せる空間を造り出すもので、舳先や艫の部分の船底部が先端に向かって徐々に狭まるのに対し、舷側板はまっすぐに開く。船底部先端は厚みを持たせており、匙状を呈する。舷側板は厚く、貫あるいは丸棒を用いて両側の舷側板を繋ぎ留めているなどの特徴を持つ。他に西都原式に属する類例としては、三重県宝塚１号墳出土、奈良県寺口和田１号墳出土の船形埴輪などがある。また、韓国慶州金塚鈴塚古墳から出土した船型土器は、西都原式を表現したものとされている。舳先と艫の形状が同じもの（西都原１１０号墳出土例）と、異なるもの（奈良県寺口和田１号墳出土例）とがある。実物資料としては、蔀屋北遺跡Ｂ調査区井戸Ｂ１３１０００の井戸枠に転用されていた船材が唯一の類例である。

これに対して菩提池西式は、大阪府菩提池西３号墳から出土した船形埴輪を基に設定された形式で、二股構造を呈する。二股構造とは、船底部の前面と後面に竪板を立て、船底部側面に乗せた舷側板を、船首・船尾ではなく竪板に沿わせて取り付けたもので、刳り船の上部に竪板と舷側板を組み合わせることで、人や貨物を乗せる空間を造り出している。他に菩提池西式に属する類例としては、大阪府長原高廻り２号墳出土、京都府ニゴレ古墳出土の船形埴輪などがある。一体構造と同様に、舳先と艫の形状が同じもの（長原高廻り２号墳出土例）と異なるもの（京都府ニゴレ古墳出土例）とがある。実物資料としては､大阪府久宝寺遺跡から艫付近が見つかっており､これは古墳時代初頭に属する類例である。

弥生時代～古墳時代の準構造船の実物資料

これまで準構造船の実物資料としては、大阪府久宝寺遺跡、兵庫県長越遺跡、福岡県潤地頭給遺跡、滋賀県下長遺跡などから数例が出土しているのみであった。しかし近年、大阪府讃良郡条里遺跡、長保寺遺跡、蔀屋北遺跡などの北河内地域に所在する遺跡から、準構造船の船材が複数検出されるなど、その類例は飛躍的に増加している。

久宝寺遺跡出土資料

出土したのは船底部、竪板、舷側板などで、古墳時代前期の庄内期の遺構面で検出された。

船底部は艫あるいは舳先付近の部材で、先端から約３ｍの部分が残存していた。先端部付近に

船首材をはめ込むための枘孔が１箇所穿たれており、その内側には竪板をはめ込むためのミゾも認められた。竪板は基部の外面を削って段を設け、薄くなった部分の中央を削り取ることで２本の脚を作り出しており、これを船底部に設けたミゾにはめ込んで組み合わせる。竪板の背面の両側端部付近には、幅３㎝、深さ2.5㎝程のミゾが認められた。また、一緒に出土した舷側板は厚さ２㎝程の薄い板材であり、このミゾに舷側板を差し込んだものと考えられる。樹種はすべてスギとされる。

これらの部材を組み合わせると、前面に竪板が立てられ、舷側板を竪板に取り付ける二股構造となることから、菩提池西式の実物資料といえる。

長越遺跡出土資料

出土したのは艫部分の船底材と結合する船首材と櫂の２点で、船首材は先端部に蹴上げの枘孔と竪板の挿入溝が認められるので、こちらも菩提池西式の実物資料とわかる。樹種はクスノキで、４世紀後半～５世紀前半のものとされる。櫂は全長2.5mと大型で、樹種はヒノキとされる。

潤地頭給遺跡出土資料

出土したのは船底部の部材６点と舷側板１点で、船底部の部材は舳先寄り・中央部付近・艫付近の3枚の船板に復元される。樹種はスギとクスノキで、弥生時代後期末のものとされる。

出土部位を基に推定された全体の形状は、尖った舳先と垂直の艫を呈するものと考えられる。朝鮮半島の船型土器に似通ったものがみられる。

下長遺跡出土資料

出土したのは船底部艫部分に装着する船首部分と船底部の側端部分の一部で、船首部には船底部の先端に装着するための出枘と、竪板を装着するためのミゾが認められる。船底部は、舷側板が樹皮と楔で緊縛された状態で出土した。船首部分の出枘、竪板を装着するためのミゾ、舷側板先端部がすべて同じ傾斜角度に仕上げられているなど、竪板自体は出土していないが、こちらも菩提池西式の実物資料といえる。樹種はすべてスギで、古墳時代前期のものとされる。

長保寺遺跡出土資料

大阪府教育委員会が１９９０年度に実施した、府道建設に伴う調査（讃良郡条里遺跡として調査）で、２基の井戸（井戸２･井戸８）の井戸枠に転用された、準構造船の船底材が検出された。

井戸２の井戸枠として、船底材を切断したものが２枚使用されていた。２枚共に両側上縁部の内側を削って段を形成している。この段は舷側板を載せるためのものと考えられ、舷側板を緊縛する枘孔も認められた。樹種がともにスギで形状も極似しているため、両者は同一個体と考えられている。井戸枠内より出土した須恵器から、古墳時代中期のものとされる。形式は不明である。

井戸８の井戸枠として、船底材を切断したものが２枚使用されていた。どちらの部材も上縁部の内側の段が一部残存していた。もともと段があったものが、井戸枠に転用する際に扁平に削られたものと思われる。樹種がともにスギで形状も極似しているため、両者は同一個体と考えられている。井戸枠内より出土した須恵器から、古墳時代後期のものとされる。形式は不明である。

寝屋川市教育委員会が１９９２年度に実施した民間開発に伴う発掘調査（９２－３区）で、１基の井戸枠に転用された準構造船の船底材が検出されている。

井戸１０の井戸枠として、船底材を切断したものが２枚使用されていた。古墳時代後期のものとされるが、形式は不明である。

讃良郡条里遺跡出土資料

（財）大阪府文化財センターが実施した第二京阪道路建設に伴う発掘調査のうちの０３－６区で２基の井戸枠に転用された準構造船の船底材が、そして流路から杭に転用された船底材１点（スギ）、舷側板２点（スギ・ヒノキ）などが検出されている。

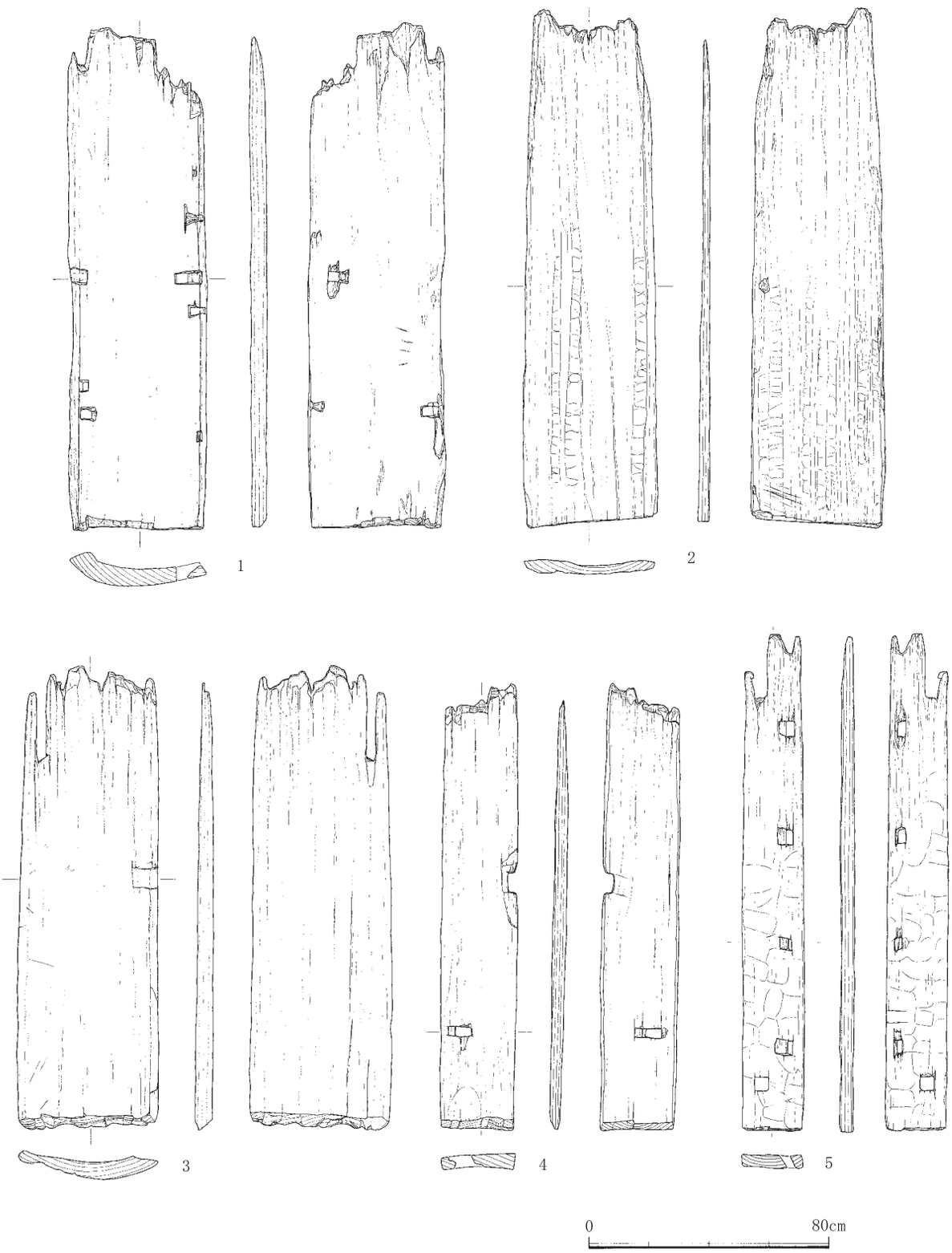
蔀屋北遺跡出土資料

蔀屋北遺跡で検出された船材を井戸枠に転用した井戸は６基で、北東居住域で２基、南東居住域で１基、南西居住域で３基が認められた。出土した土器によって確認できた井戸の掘削時期あるいは廃絶時期から、ある程度の時間幅は考慮せねばならないが、それぞれの船が機能していた時期を想定することが可能である。

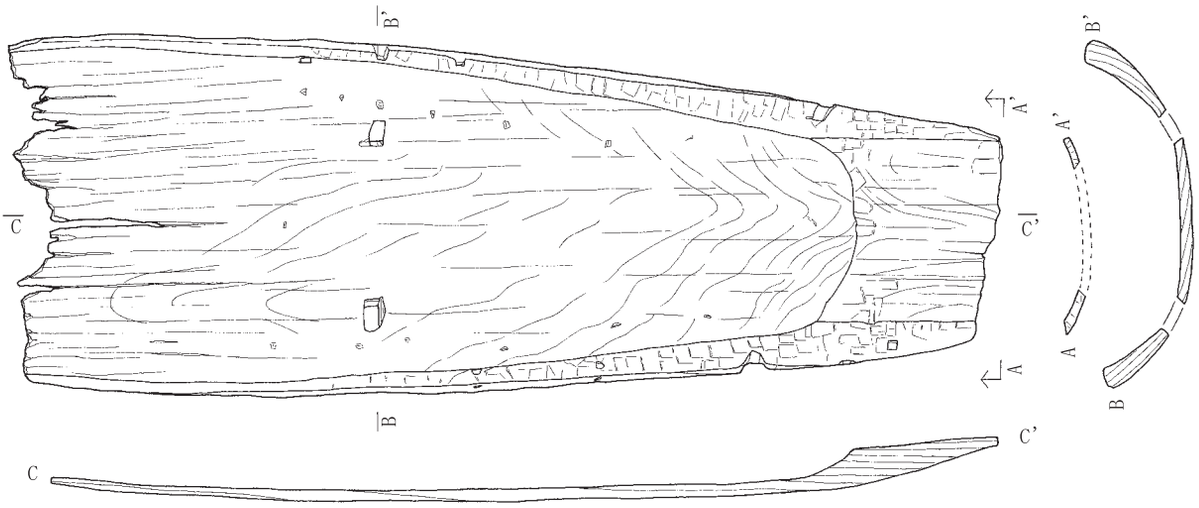
北東居住域の井戸Ｃ２５４９の井戸枠に転用されていたのは船底材が３点（船１　第170図１～３）、舷側板が２点（４・５）の計５点で、船底材はともに中央部付近の部材を横割りしたものをさらに縦割りしたもので、船底材１の側端部には貫通した方形の枘孔１箇所と、内面側を台形状に刳り込んだ枘２箇所が認められた。台形状の枘は船底部と舷側板を楔で留めるための枘で、方形の枘孔は片側が傾斜しており、舷側板の緊縛した後に、埴輪に表現されているフェンダーモールを取り付けるための枘孔の可能性がある。検出部分でこの船が西都原式か菩提池西式なのかは判断し得ない。樹種はすべてスギである。井戸枠内から出土した遺物によって、井戸は５世紀後半に廃絶されたことが判明しているため、船が機能していたのは５世紀中葉～後半と考えられる。

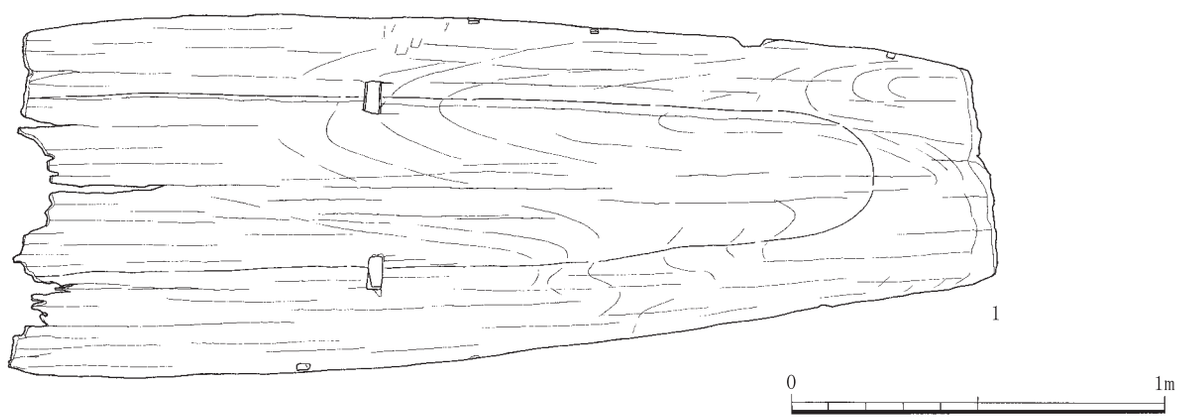
同じ北東居住域の井戸Ｂ１３１０００の井戸枠に転用されていたのは船底材が２点（船２　第171図１・２）で、これらは１艘の船の両先端にあたる舳先と艫の部材を横割りしたもので、樹種はスギである。井戸は５世紀末に廃絶されたことが判明しているため、船が機能していたのは５世紀後半～末と考えられる。井戸枠に転用する際に舷側上端部が削られていたため、上端部をＬ字状に刳り込む仕口加工の有無は確認できなかったが、舷側板を緊縛するための枘孔が先端部にまで存在することが確認できた。仕口加工は舷側板を載せるために施された細工で、仕口部分に舷側板を載せて樹皮で緊縛し、隙間に楔を詰めて固定する。船底部の先端が狭まっていくのに対して、枘孔列はまっすぐのびていることや、先端部に竪板をはめ込むためのミゾが存在しないことなどのような構造は、西都原式準構造船の特徴を示すものであり、本例が西都原式の唯一の実物資料といえる。

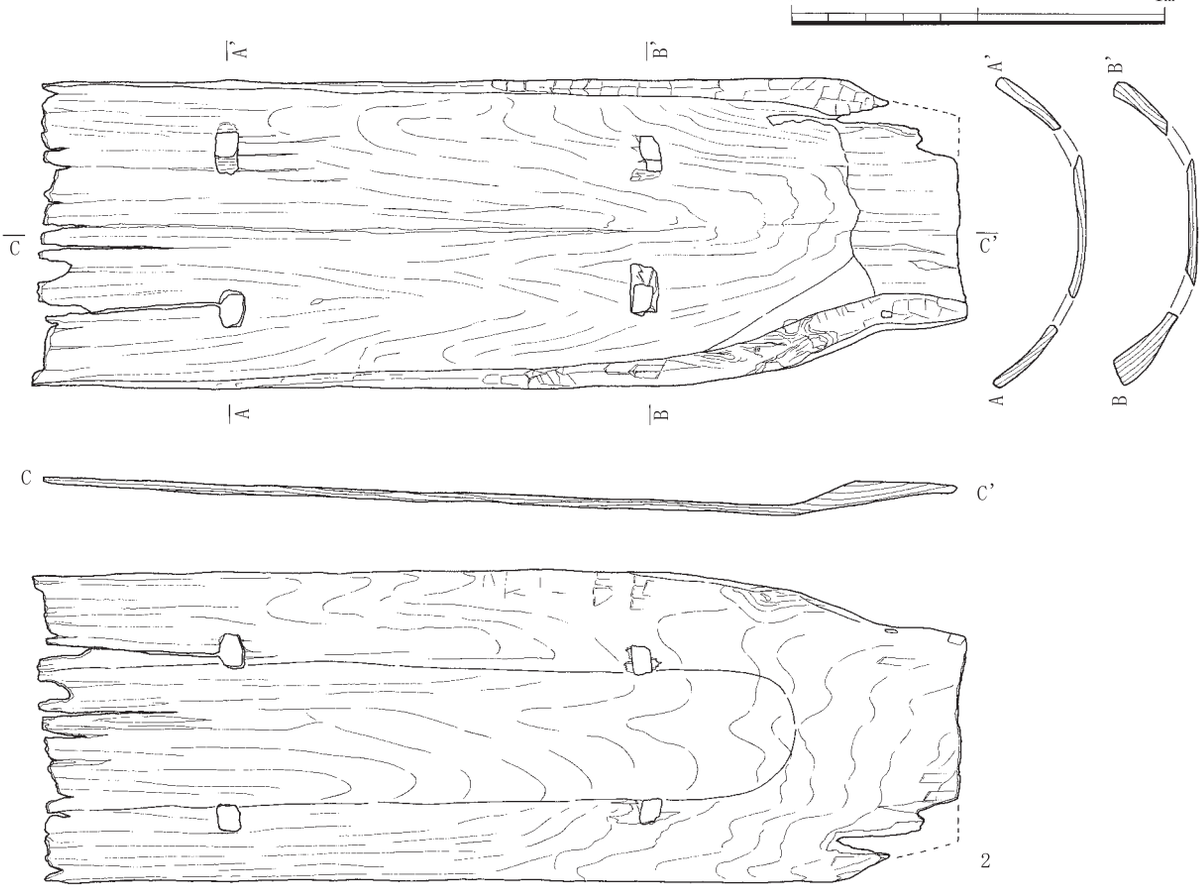
南東居住域の井戸Ａ４９４の井戸枠に転用されていたのは船底材が２点（船３　第172図１・２）で、１には舷側端部に仕口加工がみられ、さらに枘孔が２箇所認められた。２にも同様に、舷側端部に仕口加工がみられた。形状からみて本来同一船体で、船底部の中央部とそれに近い部分と



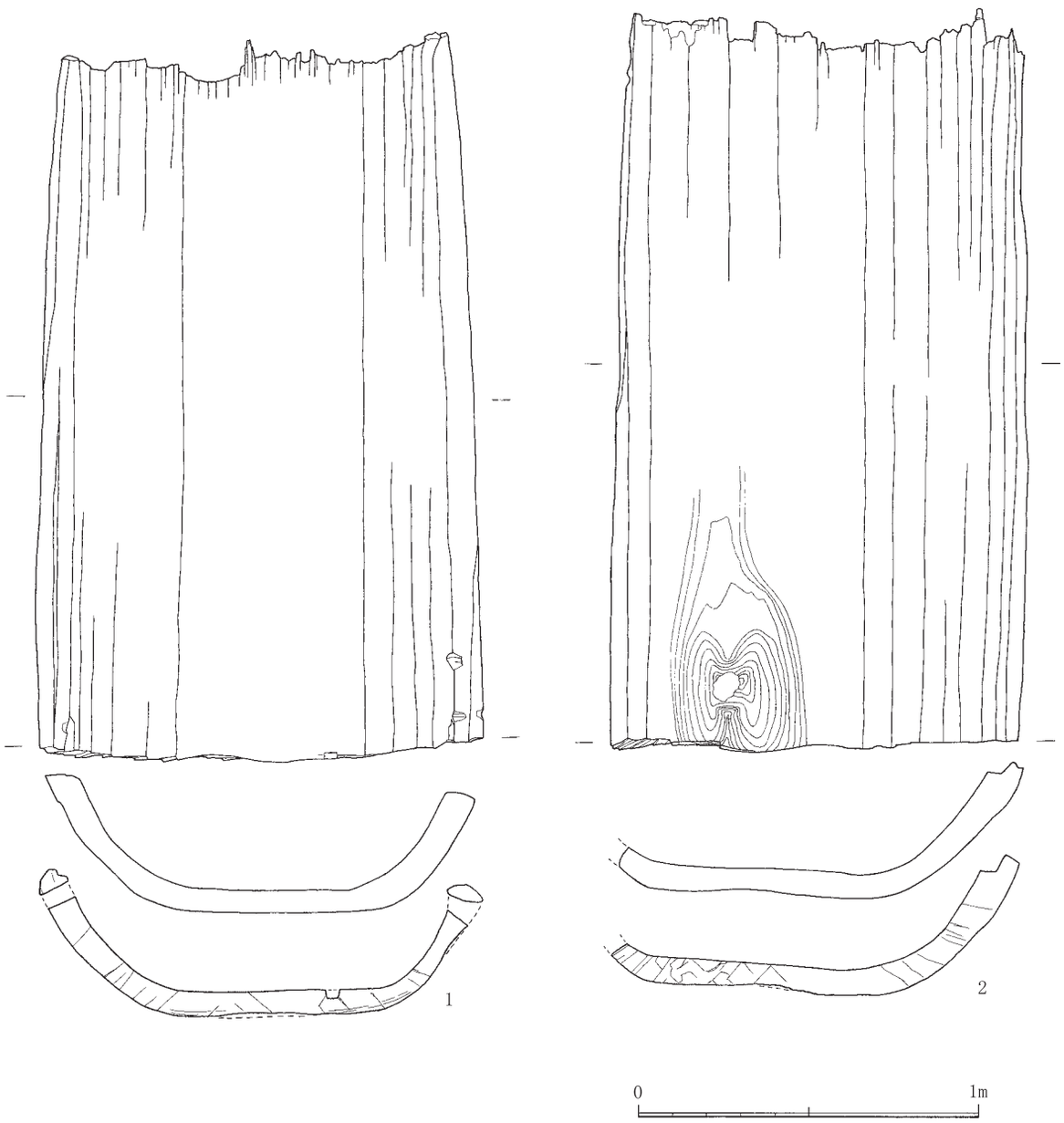
第170図　船１船材実測図







第171図　船２船材実測図



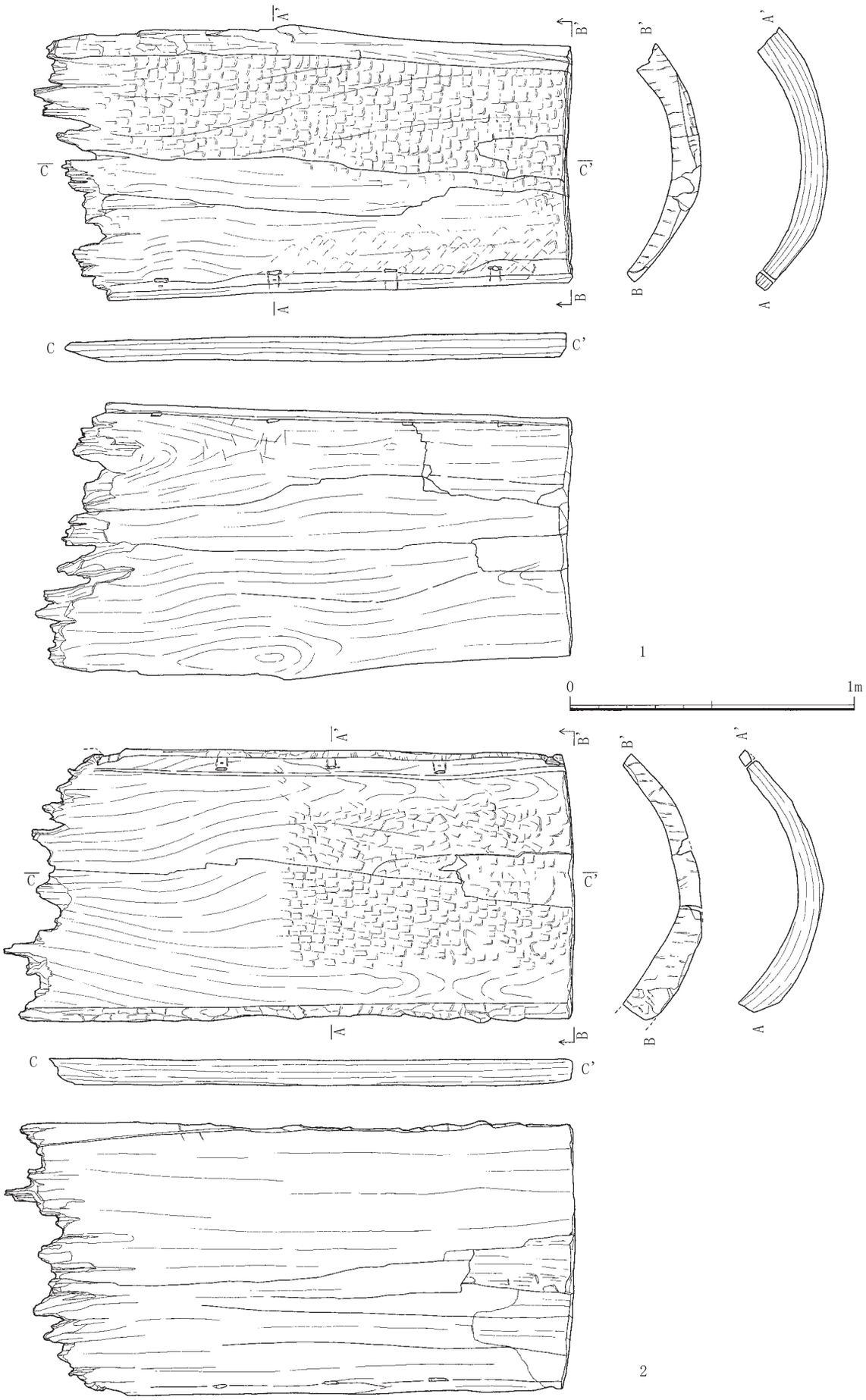
第172図　船３船材実測図

される。樹種はともにスギで、検出部分からでは、この船が西都原式か菩提池西式なのかは判断し得ない。井戸は５世紀後半に掘削されたことが判明しており、船が機能していたのもほぼ同時期と考えられる。

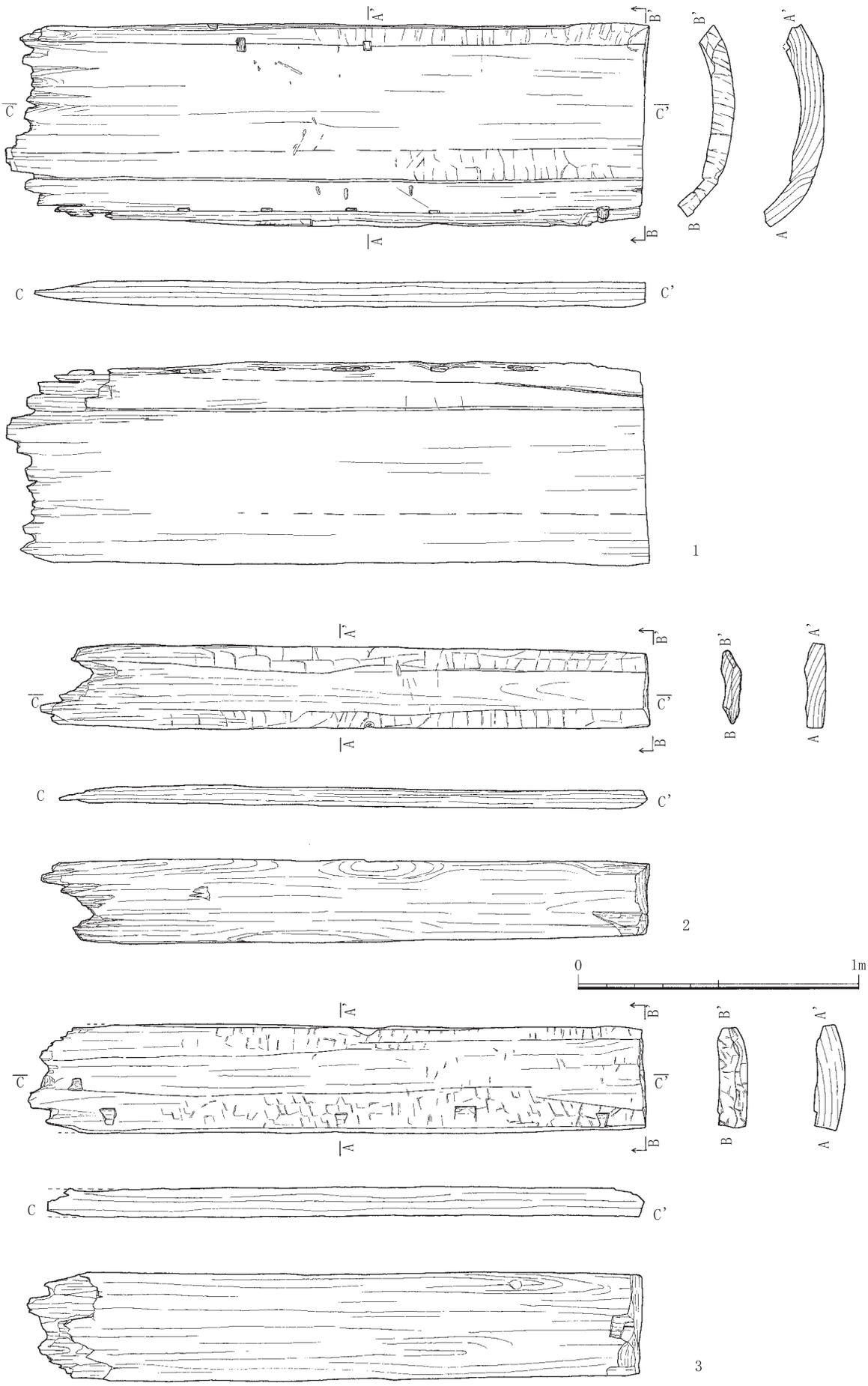
南西居住域の井戸Ａ１５０１の井戸枠に転用されていたのは複数枚の船材（船４）である。12枚の船材を１ｍほどに切断して井桁状に組んでおり、個々の詳細はわからないが、内２点は舳先部に近い反りを有する部材で、端部に枘孔が認められる。樹種はすべてスギで、検出部分からでは、この船が西都原式か菩提池西式なのかは判断し得ない。井戸は５世紀後半に廃絶されたことが判明しているため、船が機能していたのは５世紀中葉～後半と考えられる。

同じ南西居住域の井戸Ｅ０９０８０５と井戸Ｅ０９０８０６は、お互いの掘方が重複する状態（８０６が８０５を切る）で検出された。

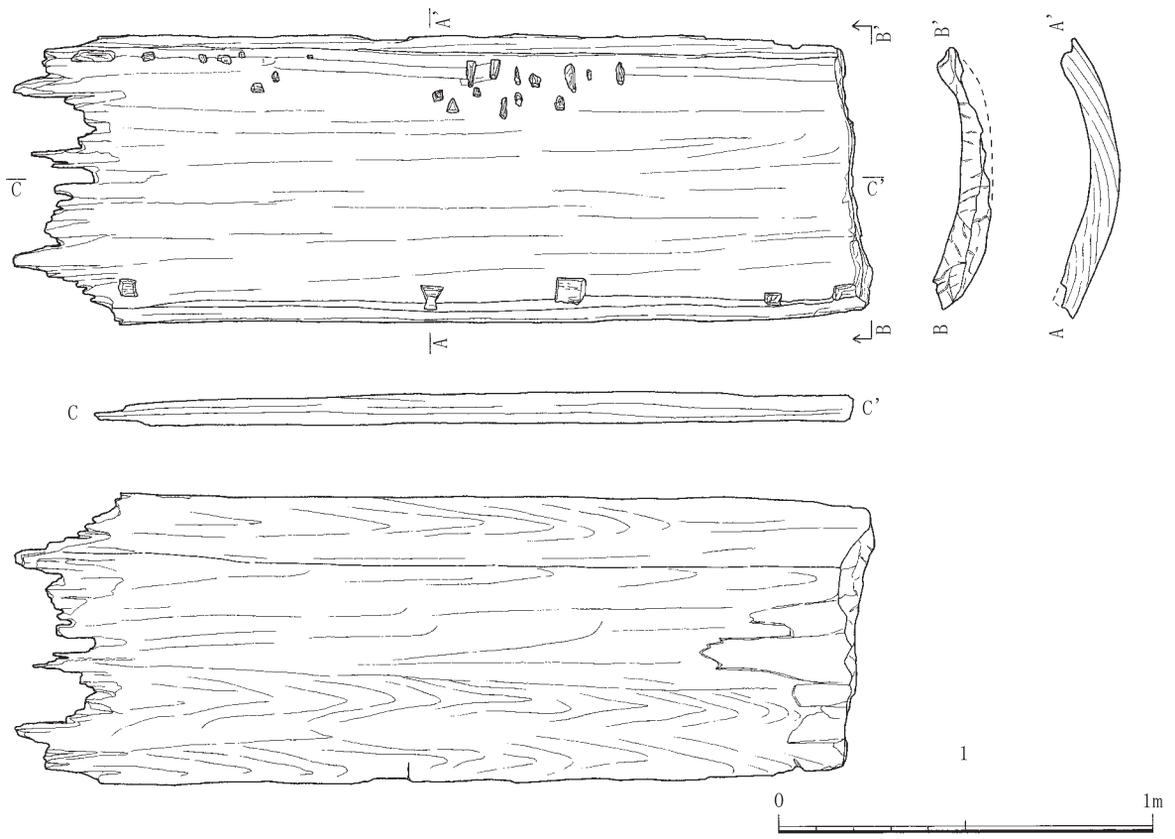
井戸Ｅ０９０８０５の井戸枠に転用されていたのは船底材が２点（船５　第173図１・２）で、



第173図　船５船材実測図



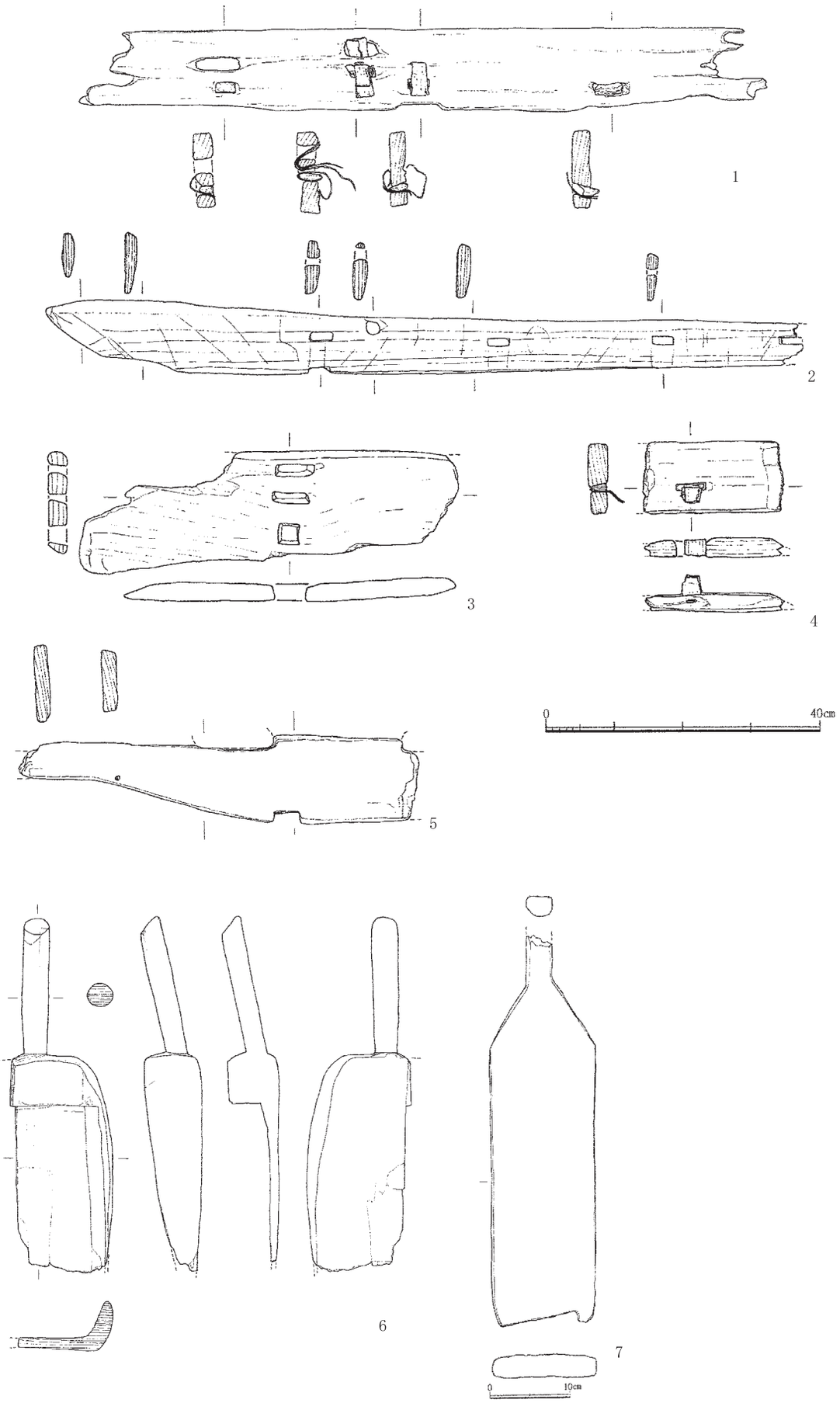
第174図　船６船材実測図（1）



第175図　船６船材実測図（2）

１艘の船底材を横に切断した後に、中央部付近で縦割りしている。完璧に合致はしないが、２点は本来ひとつの船底材であったものを縦割りして井戸枠に転用したものといえる。また、形状に他とは異なった特徴がみられる。各資料の船底材の断面を比較すると、他のすべてがほぼ均一に近い厚みを示すのに対して、こちらは舷側部の６㎝に対して船底部が12㎝と極端に分厚い。また、ほぼ完存する舷側上端部には仕口加工がみられないため、ほぼ40㎝間隔で舷側上端部付近に穿たれた枘孔を用いて、上端部に載せた舷側板を緊縛したものと考えられる。枘孔のいくつかに桜の樹皮と楔が残っていたことから、これらを使って緊縛していたことが判明した。検出部分からでは、この船が西都原式か菩提池西式なのかは判断し得ない。樹種はモミ属で、かなりの大木であったことが窺われる。井戸は５世紀中頃に廃絶されたことが判明しているため、船が機能していたのは５世紀前半～中葉と考えられる。一連の調査で検出された船のうちで最も前出のものである。

井戸Ｅ０９０８０６井戸枠に転用されていたのは船底材が３点（船６　第174図１・３、第175図１）と舷側板が１点（第174図３）の計４点である。船底材174－１、175－１は、舷側部から船底部までの部材を横に切断した後に中央部付近で縦割りしたもので、174－１には舷側端部付近に舷側板を緊縛するための方形の枘孔が７箇所みられ、そのうち５箇所には桜の樹皮と楔が残っていた。また、175－１にも舷側端部付近に方形の枘孔が３箇所と台形の不貫通の枘孔が１箇所みられた。174－３については一見舷側板とも思える部材であるが、外側が丸みを帯びていることと厚みがあること、内面の片側に台形の不貫通の枘孔が３箇所認められることなどから、



第176図　舷側板、櫂、アカ取り、竜骨実測図

船底材の舷側部材と考えられる。樹種はすべての部材がスギで、検出部分からではこの船が西都原式か菩提池西式なのかは判断し得ない。井戸は５世紀後半に掘削されたことが判明しているため、船が機能していたのもほぼ同時期と考えられる。

これらの他に、集落西限の大溝から舷側板、竜骨、アカ取りなどが、また、いくつかの掘立柱建物の柱穴から、礎板に転用された船底材や櫂などがみつかっている（第176図１～８）。

蔀屋北集落が保持した船

これまでに、発掘調査によって古墳時代の準構造船が完全な形で見つかった例はない。蔀屋北遺跡では６艘分の準構造船が見つかっているが、いずれも例外ではない。しかし、これらの船はいずれも機能していた時期が把握できるものであり、中には他とは異なる特徴を有するもの（船５）や、出土した部位から船の形式が判明したもの（船２）もある。

船５は船底部12㎝、舷側端部６㎝の厚みで、他の船が10㎝以下のほぼ均一であるのに対して船底部から舷側部に向かって肉薄になること、舷側端部上端の内側に、舷側板を載せるための仕口加工が認められないこと、船材の樹種がモミ属であることなどの点で、他と異なる特徴を持つ。５世紀前半～中葉のもので、これは蔀屋北の古墳時代集落が営まれ始めた頃にあたるとともに、百済から馬やその飼育技術が伝えられたとされる時期とほぼ合致する。さらに樹種がスギではなくモミ属であることも注目すべきで､船５以外の実物資料はすべてスギを用いて造られているが、日本には準構造船の船底材に用いることが可能なスギの大木が自生しており、入手が比較的容易であったといえる。対して朝鮮半島では、船底材を造りだすことができるようなスギの大木は自生しないとされている。したがって、スギの大木を刳り貫いた船底材を用いた船は日本で造られたということになる。一方、モミ属は朝鮮半島に自生しており、モミ属の大木を刳り貫いた船底材を用いた船は、朝鮮半島で造られたものの可能性がある。

次に、船２は前項で触れた構造上の特徴から、西都原式の準構造船と考えられた。西都原式は竪板を持たない構造のため、舳先あるいは艫付近で左右の舷側板をつなぎとめている貫や丸棒を外すことで、舳先や艫の前側からの乗降もできるという利点があり、馬を乗降させることも比較的容易にできたのであろう。

次に、それぞれの船が機能していた時期を見比べてみると、まず最も古いと考えられる5世紀前半～中葉の船５があり、続く５世紀中葉～後半の船４、さらに５世紀後半の船３と船６、５世紀後半～末の船２まで、蔀屋北集落では、初現期から最盛期にわたって継続して外洋航海が可能な大型の準構造船を保持していたことが分かる。

朝鮮半島の準構造船資料について

前項において、船５が朝鮮半島で建造された可能性があるとした。そのためここで、朝鮮半島の先史・古代船資料についても若干触れておく必要がある。

表15　蔀屋北遺跡出土の準構造船一覧

	図番号	種別	樹種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	出土遺構名	船の機能時期	備考
船１	1	船底材	スギ	153	46	3.7～5.8	井戸C2549	5世紀中～後	
	2	船底材	スギ	166.4	45.8	5.4～6.2	井戸C2549	5世紀中～後	
	3	船底材	スギ	171	44.8	2.2～4.3	井戸C2549	5世紀中～後	
	4	舷側板	スギ	147.6	25.4	4～5.3	井戸C2549	5世紀中～後	
	5	舷側板	スギ	165	20.5	3.7～4	井戸C2549	5世紀中～後	
船2	1	船底材	スギ	263.5	96.5	3～6.5	井戸B131000	5世紀後～末	舳先
	2	船底材	スギ	249.5	82	2～7.5	井戸B131000	5世紀後～末	艫
船3	1	船底材	スギ	210	125	6～9	井戸A494	5世紀後	
	2	船底材	スギ	214	120	7～10	井戸A494	5世紀後	
船4	1		スギ	100	20	8	井戸A1501	5世紀中～後	
	2		スギ	100	20	8	井戸A1501	5世紀中～後	
	3		スギ	120	20	8	井戸A1501	5世紀中～後	
	4		スギ	120	20	8	井戸A1501	5世紀中～後	
	5	船底材	スギ	80	60	4	井戸A1501	5世紀中～後	舳先
	6	船底材	スギ	80	60	4	井戸A1501	5世紀中～後	舳先
	7		スギ	90	25～35	3	井戸A1501	5世紀中～後	
	8		スギ	90	25～35	3	井戸A1501	5世紀中～後	
	9		スギ	90	25～35	3	井戸A1501	5世紀中～後	
	10		スギ	90	25～35	3	井戸A1501	5世紀中～後	
	11		スギ	90	25～35	3	井戸A1501	5世紀中～後	
	12		スギ	90	25～35	3	井戸A1501	5世紀中～後	
船5	1	船底材	モミ属	190	94	6～12	井戸E090805	5世紀前～中	
	2	船底材	モミ属	200	96	6～12	井戸E090805	5世紀前～中	
船6	1	船底材	スギ	228	74	6～10	井戸E090806	5世紀後	
	2	船底材	スギ	230	76	6～80	井戸E090806	5世紀後	
	3	船底材	スギ	220	38	10	井戸E090806	5世紀後	
	4	舷側板	スギ	220	30	7	井戸E090806	5世紀後	

朝鮮半島における木造船の発達は、単材刳り船から複材刳り船や準構造船へ、そして構造船へと流れを辿る。これは日本列島におけるそれと同じものであり、同じ変遷を辿るのは単に木造船のみならず、多くの項目に認められる傾向といえる。

ここでは対象を古代の木造船に限定したため、朝鮮半島でも実物資料が極めて少ないことは例外ではなく、さらに準構造船に絞れば、１例が認められたのみという状態であった。したがって検討する手段としては、墳墓に埋納された副葬遺物の船型土器に頼ることになる。

船型土器はＡＤ５～６世紀のものが中心で、これは日本の船形埴輪や蔀屋北遺跡出土の実物資料とほぼ同時期にあたる。また船形埴輪と同様に、船型土器の準構造船にも一体構造と二股構造の２種がみられるが、船形埴輪と同様に、舳先と艫の形状がほぼ同じものと、明らかに異なるも

のがある。

最後に朝鮮半島でみつかった準構造船の実物資料としては、唯一半島の南東端部にあたる慶尚南道昌寧市の、松峴洞７号墳主体部の木棺に転用された船底材がある。やや丸みを帯びた形状と両側側端部付近に一定間隔で穿たれた枘孔の存在は、準構造船の船底材そのものの形状といえる。樹種はクスノキとされている。

おわりに

ここまで、蔀屋北遺跡でみつかった実物資料などから古墳時代の準構造船についてみてきた。これらを基にして想像を逞しくすれば、蔀屋北集落では朝鮮半島と直接往来することが可能な準構造船を、少なくとも５世紀全般にわたって保持し続けていたといえる。それらのうち最も前出の船５は、朝鮮半島（百済）で建造された船とも考えられ、百済からはじめて馬とその飼育技術が伝えられ、当地に初期の「讃良の牧」が形成された時期の5世紀前半頃に機能していた船と言える。朝鮮半島からは、玄界灘・瀬戸内海を経由して難波津へ着く。難波津につながるのが河内湖で、その北東端の湖岸付近に位置する蔀屋北集落は、運んできた馬を最初に上陸させた場所であった。そして大和あるいは難波への往来が容易であるなどの立地条件が整っていた当地一帯に牧が形成されたが、そのなかで蔀屋北集落は、河内湖から難波への水路と大和への陸路を直接繋ぐ位置にあるため、牧で生産・飼育した馬を管理し、中央王権に供給する窓口の役割を担っていたと考えられる。そのため輸送手段としての準構造船の保持が必要不可欠であった。

蔀屋北遺跡付近一帯は低湿地帯で、木製品が良好な状態を保って残存する条件が整っており、この環境が状態の良い木製品を大量に遺存せしめる要因となった。木製品のなかには井戸枠に転用された、船体構造の把握が可能なものを含む6艘分の準構造船の船材が認められ、そのなかに朝鮮半島で建造されたものの可能性がある船や西都原式と判明した船が含まれていたのは特筆すべきことで、これらが見つかったことは、実物資料が希少なため停滞していた古代船舶の研究が進展する大きな一因となったといえる。

（参考文献）

福岡市立歴史資料館　1988　特別展図録「古代の船－いま蘇る海へのメッセージ－」

寝屋川市・寝屋川市教育委員会　1997　歴史シンポジウム資料「失われた古代の港～北河内の古墳時代と渡来人を考える～」

大阪府立近つ飛鳥博物館図録　43　発掘された日本列島　20006　地域展「河内湖周辺に定着した渡来人－５世紀の渡来人の足跡－」

第６節　大溝出土の初期騎乗用馬具

はじめに

蔀屋北遺跡では、下水管渠竪坑地区（Ｈ地区）からＤ調査区、Ｆ調査区、Ｅ調査区に跨って検出された大溝から馬具が出土した。内訳は木製輪鐙２点、鉄製鑣轡１点（銜、引手、遊環、鑣、立聞金具からなる）、鑣１点、立聞金具１点、環状金具１点、木製漆塗鞍１点の計７点である。いずれも遺存状態がきわめて良好で、本来の形状が明瞭に確認できるものである。

蔀屋北遺跡のように、木製輪鐙・鉄製鑣轡・木製漆塗鞍という初期の実用的な騎乗用馬具が、同一遺構からそろって出土したことは他に例をみないが、単独では、それぞれの比較対象となる資料が列島各地で報告されている。したがって本稿では、種別に他例との比較検討をおこなった上で、これらの馬具の出土から窺われる「讃良の牧」の様相についても考えてみたい。

蔀屋北遺跡出土の初期馬具と日本列島出土の類例

蔀屋北遺跡の調査で出土した馬具は、木製輪鐙２点、鉄製鑣轡１点、鑣１点、立聞金具１点、環状金具１点、木製漆塗鞍１点の計７点である。

蔀屋北遺跡出土の木製輪鐙（第１図１・２）

平成13年度のＨ地区から２点が出土した。

１は、内側が広い断面梯形の楕円形状の平面を呈する輪部と、上部が広く厚く下部が狭く薄い上開き状を呈する軸部からなるもので、輪部の下半部分である踏込部の一部を欠くが、他はほぼ原形を留めている。高さ20.06㎝、幅15.65㎝で、内径縦7.3㎝×横10.6㎝を測った。軸部の上端付近に1.5㎝×1.8㎝の長方形の鐙鞅孔を穿っている。材質は樫（アカガシ亜属）で、木取は柾目である。鐙鞅孔や輪部の摩滅の痕跡からみて右足側の鐙と考えられる。また、軸部の上縁と鐙鞅孔の上部が著しく磨耗しているが、これらは鐙鞅が結ばれていた痕跡と考えられ、実際に使用されていたものであることが窺われる。

２は、断面と平面がともに隅丸長方形状を呈する輪部で、軸部全体と輪部上端を欠損している。残存高13.3㎝、幅14.5㎝で、内径縦約8.1㎝×横9.7㎝を測った。材質は樫（アカガシ亜属）で、木取は柾目である。

これらはともに大溝３層からの出土で、概報では時期を５世紀後半（Ⅰ型式４段階）としていたが、その後の出土遺物の詳細な検討と、Ｅ・Ｆ地区で検出された大溝の埋土と比較検討した結果、現在は５世紀中葉（Ⅰ型式３段階）に廃棄されたものと考えている。

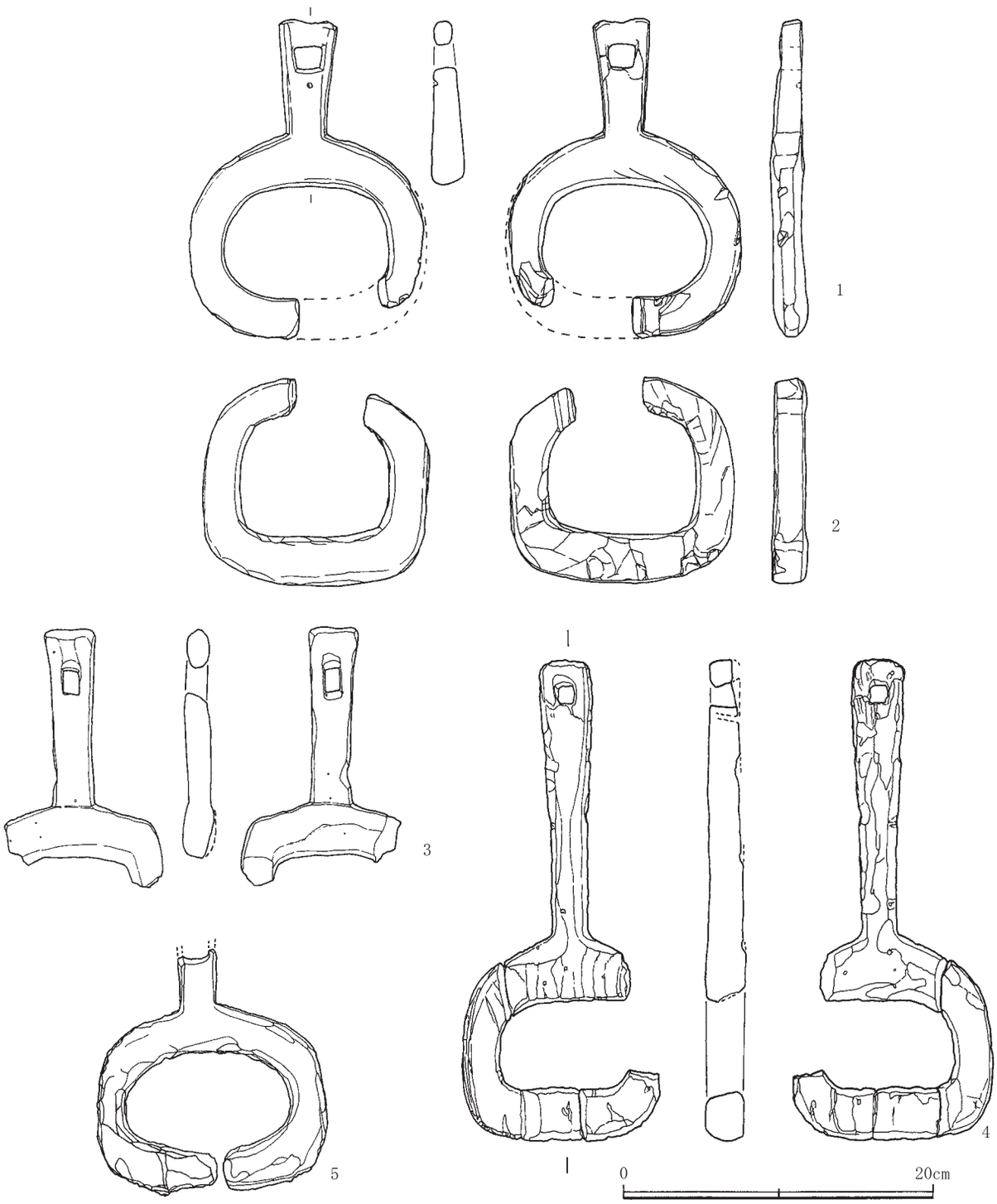
鐙は本来左右一対で一式であり、同一遺構のごく近接した地点から出土していることなどから、この２点で一式とも考えられるが、平面形や断面の形状にかなり相違点がみられるため、別物の

可能性も考えられる。

木製輪鐙の類例（第177図３～５）

木製品は腐食しやすいため出土例が少なく、木製輪鐙は蔀屋北遺跡出土の２例を含めた６例が知られているにすぎない。

他の４例とは、奈良県桜井市箸墓古墳周濠出土の１例（177－３）、宮城県仙台市藤田新田遺跡出土の１例（177－４）、滋賀県長浜市神宮寺遺跡出土の１例（177－５）、大阪府寝屋川市讃良郡



第177図　木製輪鐙の類例

条里遺跡出土の１例である。

177－３は４世紀初頭の堆積層から出土している[註1]。これが後世の混入でないとすれば、形状的に類似する他例より１世紀あまりも前出ということになる。ただし、出土位置が堆積層の上方部分とのことであり、直上層が６世紀の堆積層であること、そして柄部が長いという新相の特徴を示していること、また、朝鮮三国伽耶や倭の古墳時代馬具の直接の祖型にあたる中国慕容鮮卑三燕の馬具に、輪鐙が出現したのが４世紀初頭とされており[註2]、それとほぼ同時期にすでに輪鐙が存在していたことになる。これらの事例を鑑みれば、４世紀初頭という年代には再検討の余地もあろう。

177－４は、調査報告書によると供伴出土した土器から５世紀代のものとされている。鐙靼孔の傾きなどの形状的な特徴から、左側に下げられたものとし、そして柄部の長い華奢な作りで、馬上で足を掛けて身体の自由を確保するためには耐久性に欠けるものであることなどから、騎乗時の足踏みとして使用された可能性があるとしている[註3]。

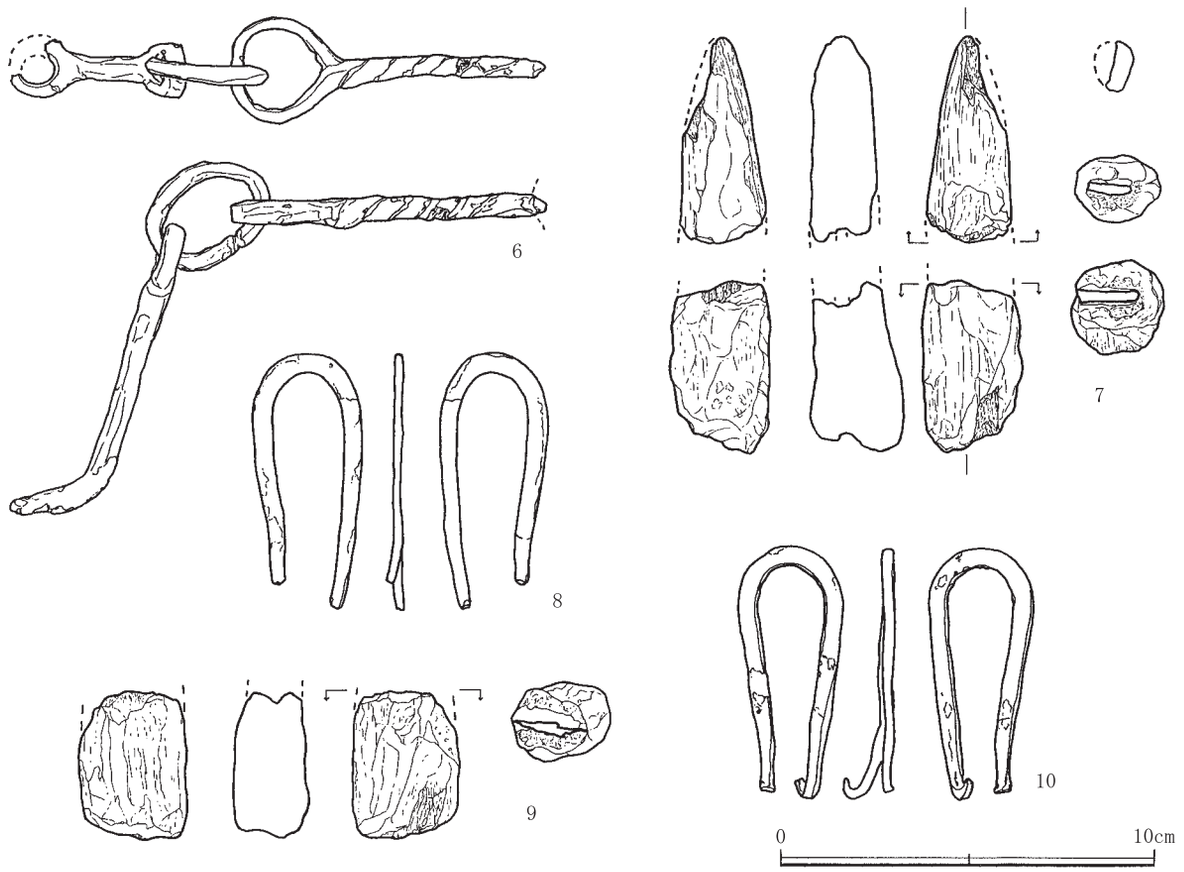
177－5は、調査報告書によると供伴出土した土器から５世紀後半のものとされている。輪部は踏込み部の一部を欠損してはいるが、概ね原形が把握できる。柄部は鐙靼孔の下半が残るが、それ以上は欠損しており、全体の形状はわからない。しかし鐙靼孔の位置から推測すると、３・４に比して柄部長が短く、全体の形状は１に類似する。両面に黒漆が塗布された痕跡が残る[註4]。

この他に大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡から、輪部の破片が１点出土している。５世紀のものとされる。

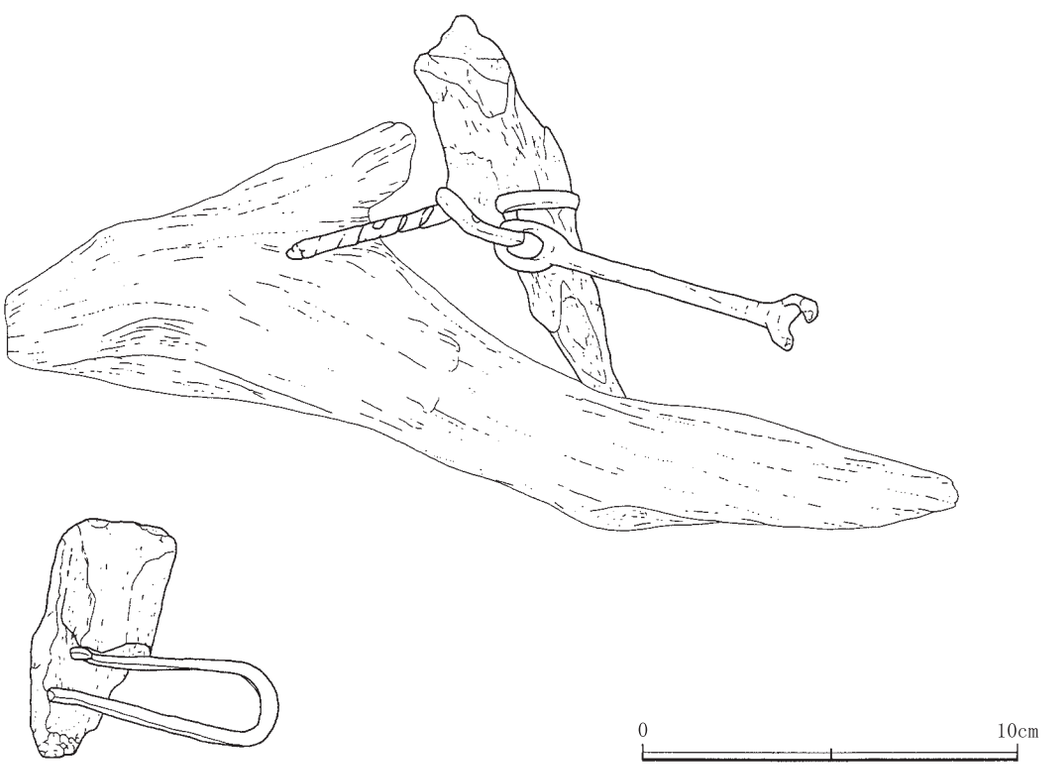
蔀屋北遺跡出土の鉄製鑣轡（第178図６～10）

平成16・17年度のＥ調査区で検出した、大溝の中層から４点出土した。

轡は銜、引手などの複数の属性を連結して完成する馬具である。178－６は銜、遊環、引手で、鑣178－７、立聞金具178－８も連結した状態で出土したが、取り上げの際に鑣178－７が破損したため分離した。出土したのは左右２連一対のうちの左側半分で、銜外環に銜留の鑣が差し込まれ、銜外環と引手内環が遊環を用いて繋がれていた。そして、立聞金具は銜外環を跨いだ状態で鑣に打ち込まれていた（第179図）。銜は、長方形状の断面を呈する棒をＵ字形に曲げ、基部に外環部分を確保してその先を捩る、いわゆる２条捩り技法で形成している[註5]。銜内環が欠損しているため、鍛接の手法や連結状況は不明である。残存長8.4cm、銜外環径2.8cm、内径2.25cmを測った。引手は、銜と同様に角棒の両端を曲げて鍛接することで引手内環と外環を形成しており、外環の内側で約60°外側へ折り曲げている。引手外環の半分を欠損している。全長8.7cm、引手内環径1.5cm、外環復元径1.7cmを測った。捩りはみられない。遊環を介して銜と引手を連結している。遊環は、角棒を曲げて形成された楕円形環で、長径3.4cm、短径2.6cmを測った。178－７は鹿角製の鑣で、鹿角の先端部付近を切断したものである。復元全長11cm、最大幅2.6cmを測った。取り上げの際に、銜外環と立聞金具の間の部分が崩壊し、２個体に分離した。178－８は立聞金具で、



第178図　蔀屋北遺跡出土の鉄製鑷轡



第179図　蔀屋北遺跡大溝０９０００１鉄製鑷轡出土状況

断面長方形状の薄い角棒を、薄い面をＵ字形に曲げたもので、２ヶ所の先端部分はともに欠損している。残存長6.7㎝、幅2.85㎝、厚み0.2㎝を測った。厚みは鑷178－７に残る溝の幅と一致する。

178－９は鑣で、残存長3.95㎝、最大幅2.9㎝を測った。立聞金具178－10の先端の一ヶ所が刺し込まれた状態で検出された。178－７と同様に鹿角の先端部付近を利用したものと思われるが、先端側が欠損した状態で検出された。

178－10は立聞金具で、断面長方形状の薄い角棒を、薄い面をＵ字形に曲げたもので、一方の先端は鑣を貫通したあと潰され、他方は折り曲げられている。全長6.7㎝、幅2.8㎝、厚み0.2㎝を測った。検出状況から鑣178－９と一連のものであり、178－６～８と一対となる部品と思われる。

これらはいずれも大溝の中層から出土しており、５世紀中葉（Ⅰ型式３段階）に廃棄されたものといえる。

鉄製鑣轡の類例（第180図11 ～ 18、第181図19 ～ 27、第182図28 ～ 31）

鹿角製や木製の鑣が検出時に残存していた例はごく僅かであるが、鉄製鑣轡とされる類例は列島でもかなり報告されている。これらは金官伽耶、百済、高句麗、新羅などの、朝鮮半島各地からの系譜を辿れるものであるが、本稿では、蔀屋北出土例にもみられる特徴である、遊環を有する類例を中心に鉄製鑣轡をみてゆく。

鉄製鑣轡の初現の例は捩り銜で無引手の形状を呈するもので、福岡県甘木市池の上６号墳出土例（180－11）と福岡県福岡市老司古墳３号石室出土例の２例があり、ともに５世紀初頭のものとされる（註６）。さらに、兵庫県加古川市行者塚古墳出土例（180－12）もほぼ同時期のもので、こちらも捩り銜で無引手のものである（註７）。

これらに続くのが５世紀前半（Ⅰ型式１段階）のものとされる兵庫県姫路市宮山古墳３号主体出土例（180－13）で、こちらは捩り銜に１条線引手を直接連結するものである（註８）。

遊環は、百済地域の轡を特徴づける属性で、銜と引手を連結する際に用いられた。百済では、５世紀前半の新段階から中葉にかけての時期（Ⅰ型式２段階～３段階併行）に遊環付の轡が出現したとされ、各地で類例が散見されるが、特に清州新鳳堂からは多くの類例が出土している（註９）。

日本列島では、５世紀前半（Ⅰ型式２段階）に比定される兵庫県姫路市宮山古墳２号主体から出土した鑣轡（180－14）があり、こちらは捩り銜と１条線引手が遊環を介して連結されるもので、大きな板状立聞金具を伴っていることから、初期の類例といえる（註10）。これらから、遊環付轡は百済での出現後、比較的短期間で列島に移入されたものといえる。

蔀屋北出土例は、２条捩りの銜と１条線の引手にＵ字形鋏の立聞金具を伴うという古式の様相を呈し、遊環付鑣轡の初期の類例とされる百済清州新鳳堂72号墓出土例（180－15）に極似する。

兵庫県加古川市池尻２号墳出土例（180－16）は、遊環を介して無捩り銜と１条線引手を連結するものである。５世紀前半（Ⅰ型式２段階）とされているが、単孔式二脚の小さな立聞金具を伴っているため後出の要素が強い（註11）。

これらの遊環付鑣轡と相前後する時期のものと考えられるのが、長野県飯田市物見塚古墳出土の無遊環鑣轡（180－17）で、無捩り銜に２条線引手を直接連結した形状が、吉林省輯安好太王

碑付近出土の鑣轡と類似することから、こちらは高句麗系の可能性があるとの指摘がある(註12)。供伴の須恵器から、５世紀前半（Ⅰ型式２段階）のものと考えられる。

百済系の無遊環鑣轡で同時期と考えられる類例には、大阪府枚方市小倉東Ｅ１号墳出土例（180－18）がある。こちらは左半が２条線捩り銜と２条線引手で、右半が１条線捩り銜と１条線引手であり、これらを直接連結した特異な形状を呈する。本来は左半の２連一対であったものが、何らかの理由で欠損し、補修された際に右半のセットと組み合わされたものとされている(註13)。そして静岡県藤枝市西ノ宮１号墳出土例（181－19）があり、こちらは捩り銜と１条線引手が直接連結されるもので、鋏状の立聞金具を伴っている(註14)。

遊環付鑣轡の５世紀中葉（Ⅰ型式３段階）の類例としては、岡山県総社市随庵古墳出土例（181－20)がある。こちらは無捩り銜と１条線引手を、遊環を介して連結するものである(註15)。そして、福岡県甘木市小田茶臼塚古墳出土例（181－21）があり、こちらも同様に無捩り銜と１条線引手を、遊環を介して連結するものである(註16)。

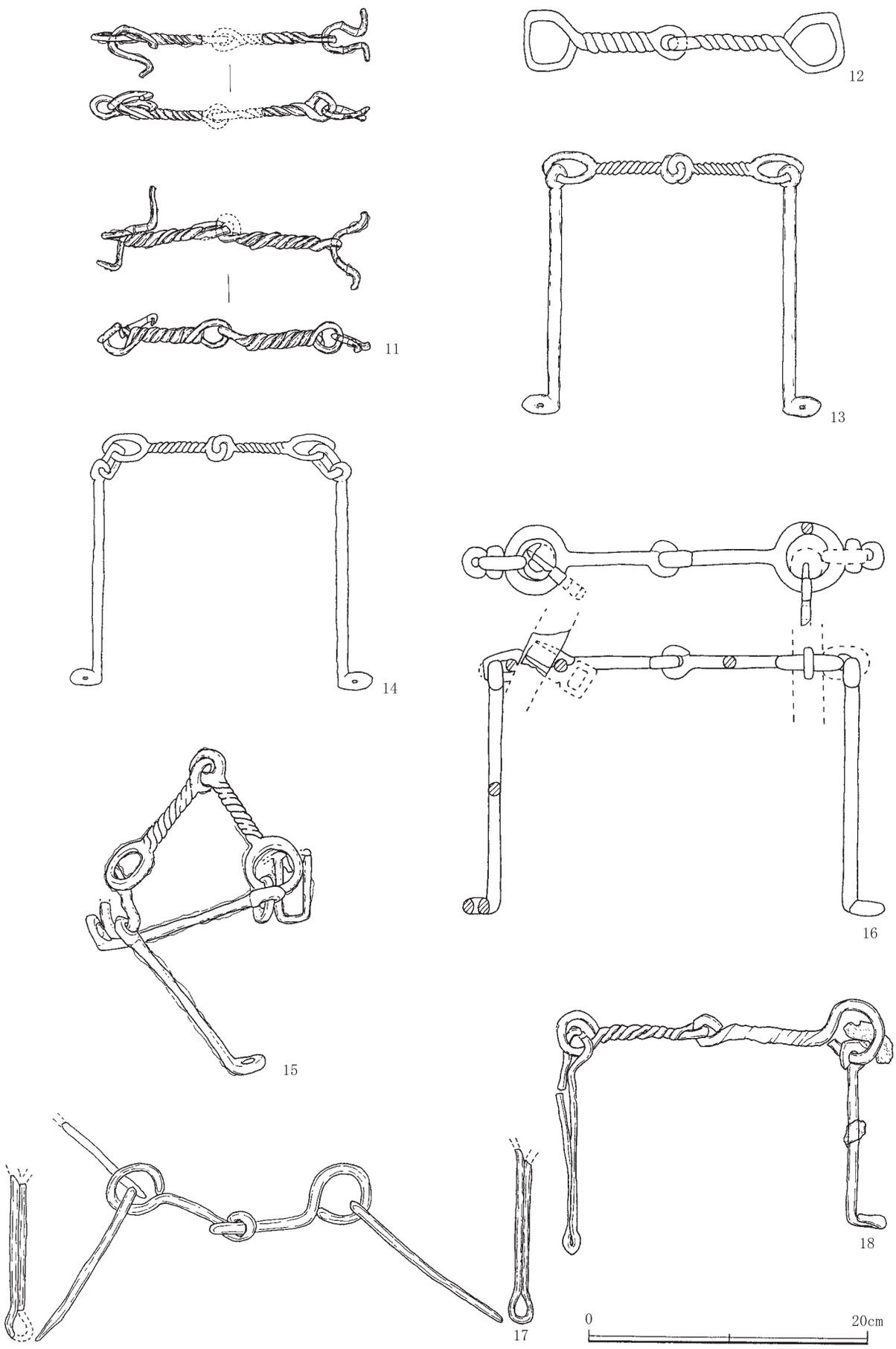
無遊環鑣轡でほぼ同時期と考えられる類例には、奈良県大字陀市後出３号墳第１主体出土例（181－22）があり、こちらは捩り銜と１条線引手が直接連結されるもので、鋏状の立聞金具を伴っている。鑣は欠損しているが、立聞金具本体に繊維が付着した痕跡がみられることから、木製であったとされている(註17)。そして、福岡県行橋市稲童21号墳出土例（181－23）がある。捩り銜と１条線引手が直接連結されるもので、単孔式二脚の立聞金具が伴う(註18)。また、岡山県津山市一貫西３号墳出土例（181－24）があり、こちらは捩り銜と１条線引手を直接連結したもので、銜、引手ともに左右の長さが異なり、立聞金具も左半が鋏状であるのに対し、右半は単孔式二脚である。前述の小倉東Ｅ１号墳出土例と同様に、補修された可能性がある。５世紀中葉から後半（Ⅰ型式３段階～４段階）のものと考えられている(註19)。

遊環付鑣轡の５世紀後半（Ⅰ型式４段階）の類例としては、群馬県甘楽町西大山１号墳出土例（181－25）がある。遊環を介して捩り銜と１条線引手を連結するもので、単孔式二脚の小さな立聞金具を伴っている。鹿角製の鉄鑣が残存しており、銜外環に挿し込まれた鑣に、立聞金具が打ち込まれた様子が実見できる貴重な資料である(註20)。そして、香川県綾川町岡の御堂１号墳出土例（181－26）があり、こちらは遊環を介して無捩り銜と１条線引手を連結するものである。鑣と立聞金具は出土していない(註21)。

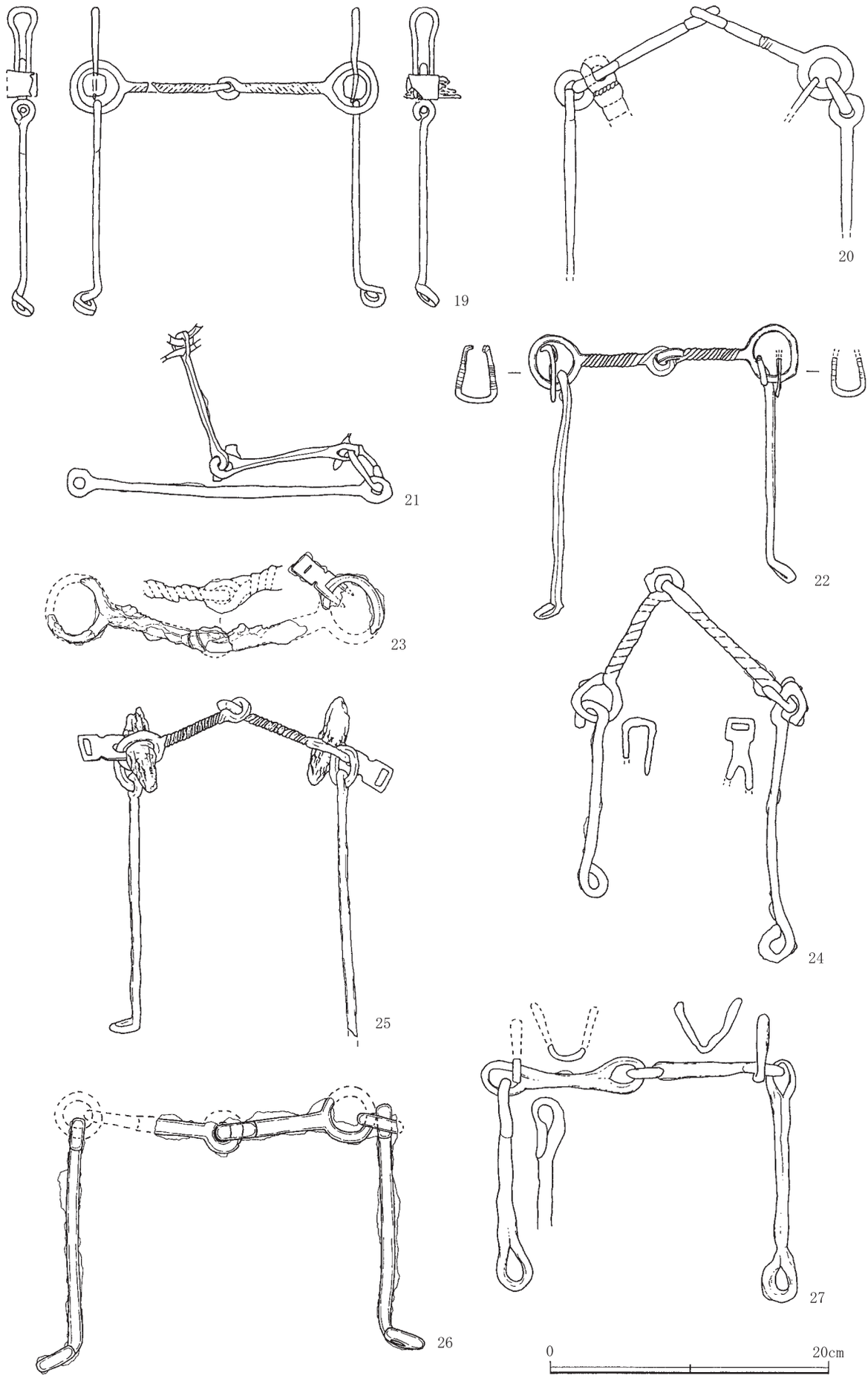
無遊環鑣轡でほぼ同時期と考えられる類例としては、長野県飯田市高岡４号墳出土例（181－27）がある。

遊環付鑣轡５世紀末～６世紀初頭（Ⅰ型式５段階）の類例としては、栃木県矢板市十三塚遺跡６号住居址出土例（182－28)、宮崎県宮崎市下北方地下式５号横穴出土例（182－29)、愛媛県松山市桧山峠７号墳出土例（182－30）などがある。いずれも遊環を介して無捩り銜と１条線引手を連結するものである(註22)。

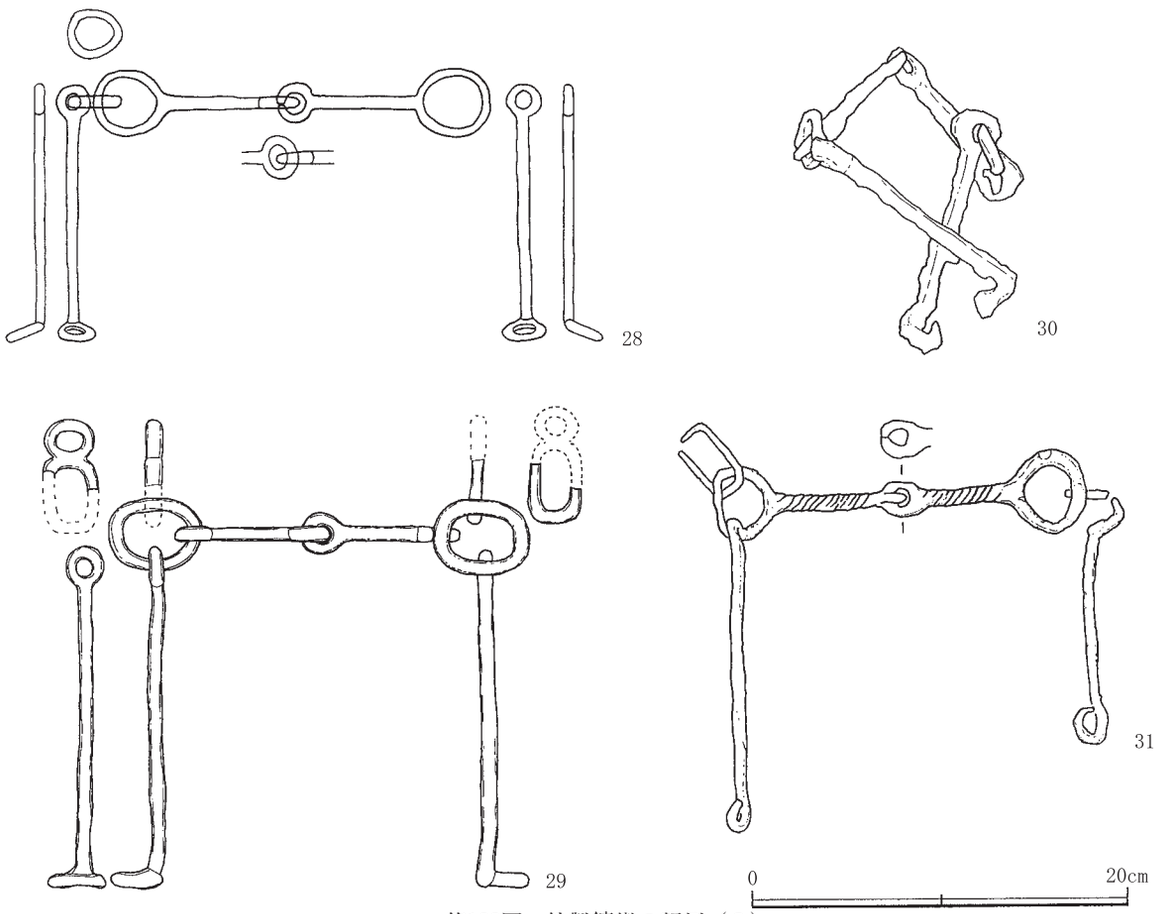
無遊環鑣轡でほぼ同時期と考えられる類例としては、長野県長野市上池の平５号墳出土例（182



第180図　鉄製鑣轡の類例（1）



第181図　鉄製鑣轡の類例（２）



第182図　鉄製鑣轡の類例（３）

－31）がある。捩り銜と１条線引手を直接連結したもので、左右の引手の長さが異なるという特徴を示す(註23)。

蔀屋北遺跡出土の木製鞍（第183図32）

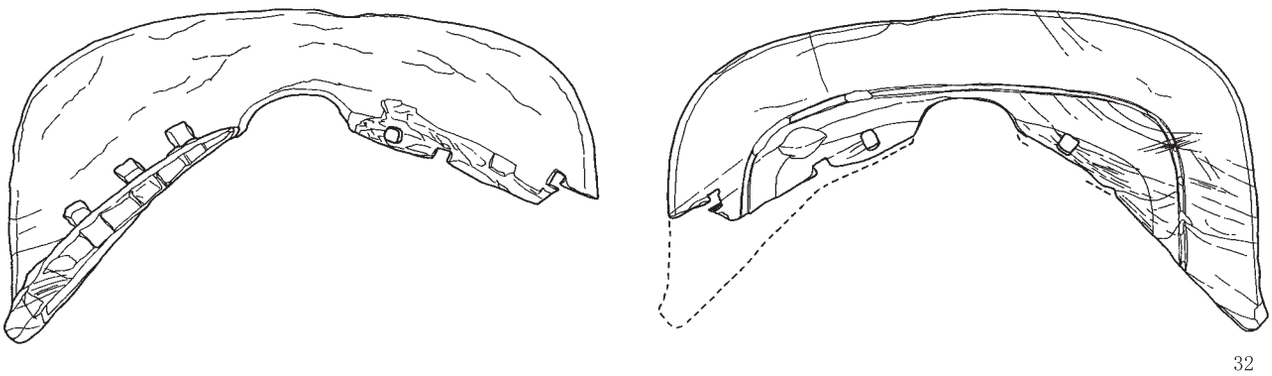
平成17・18年度のＦ調査区で検出された、大溝の中層から１点出土した。

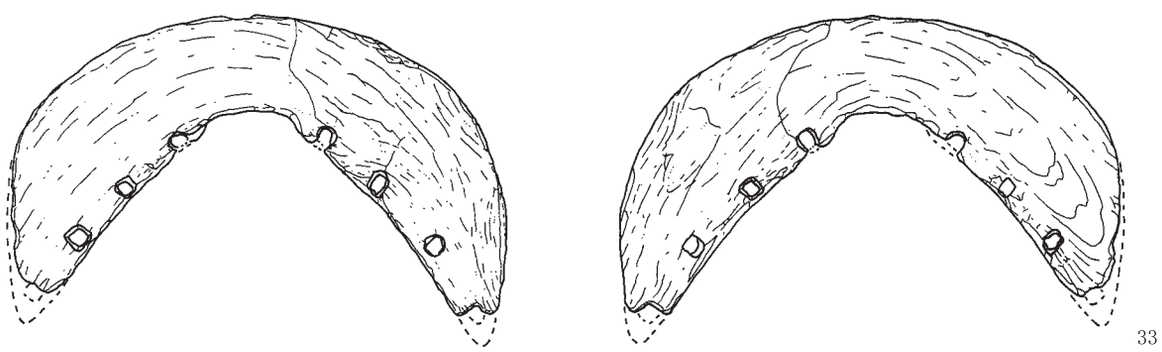
183－32は鞍橋で、後輪と考えられる。右側の磯端部、雉子股、爪先の部分を欠損しており、左側は覆輪、海、磯、爪先などの部位がほぼ完存している。残存幅46.6㎝、高さ27㎝を測った。材質はトチノキである。内外面ともに黒漆が塗布されているが、外面の遺存状況が良好で、光沢が見られるのに対し、内面は光沢が鈍く、剥落も目立つ。これは使用の際に擦れたものと思われ、このことからも本品が実用品であったことがわかる。前述の鉄製鑣轡と同様に、大溝の中層から廃棄された状態で出土しており、廃棄時が５世紀中頃（Ⅰ型式３段階）と確定できる(註24)。

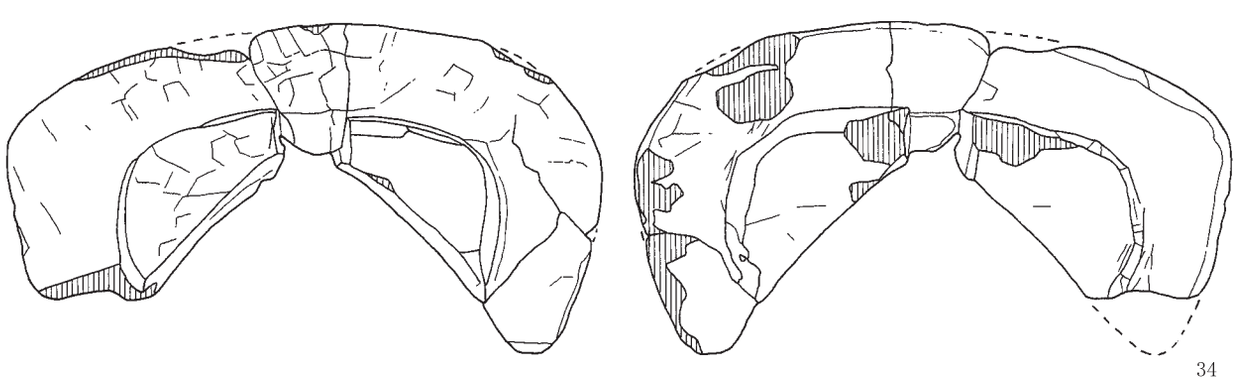
木製鞍の類例（第183図33 ～ 35、第184図36 ～ 38、第185図39 ～ 41）

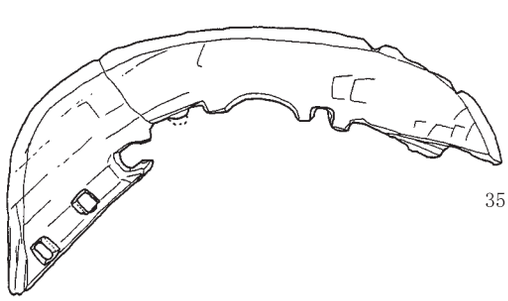
木製輪鐙や鉄製鑣轡などと初期の馬装を構成する木製鞍の出土例は、蔀屋北遺跡出土例を含めて全国で16例（15遺跡）が知られている。

木製鞍の類例が日本列島に出現するのは５世紀前半（Ⅰ型式２段階）で、これまで３例が報告されている。 ひとつは大阪府八尾市八尾南遺跡出土例（183－33）で、前輪が井戸から出土して

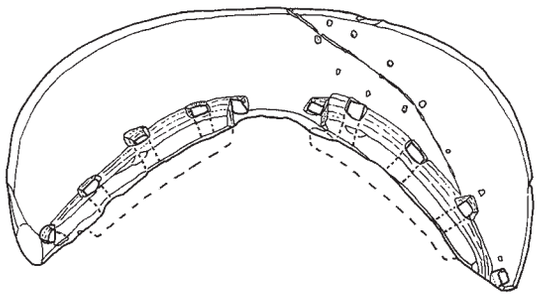


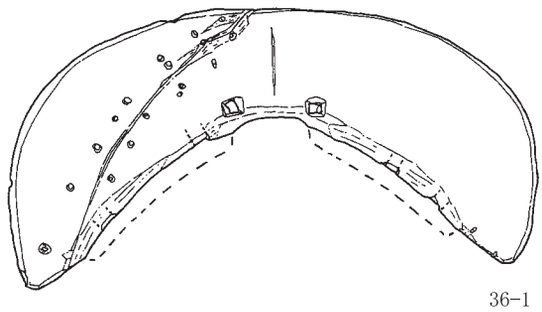




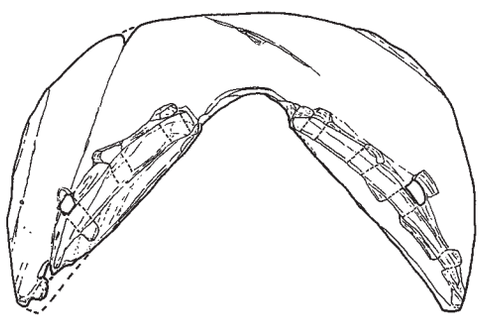


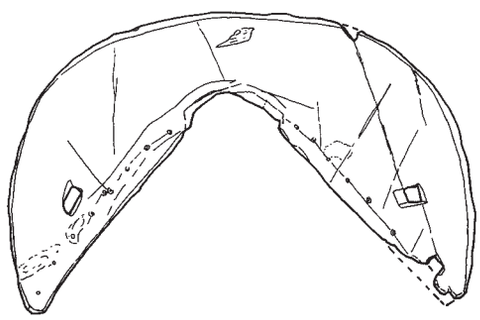
第183図　木製鞍の類例（１）



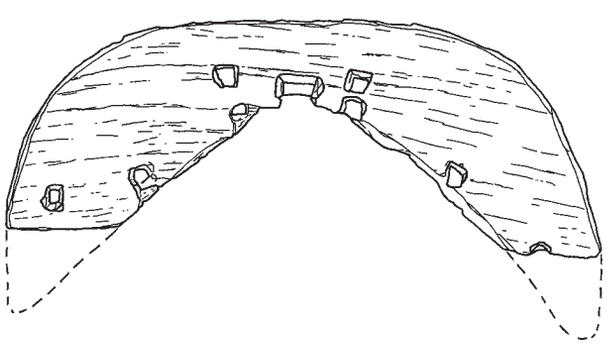


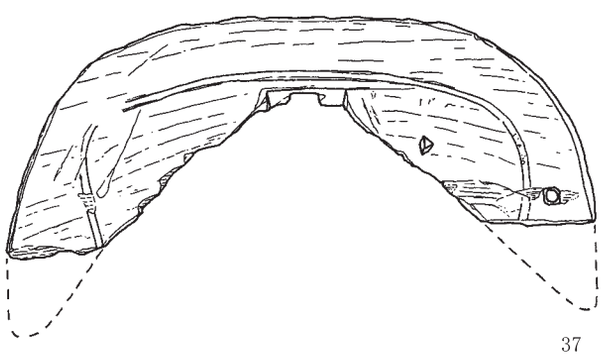
36-1



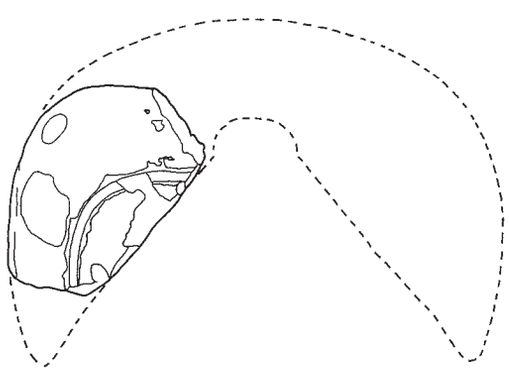


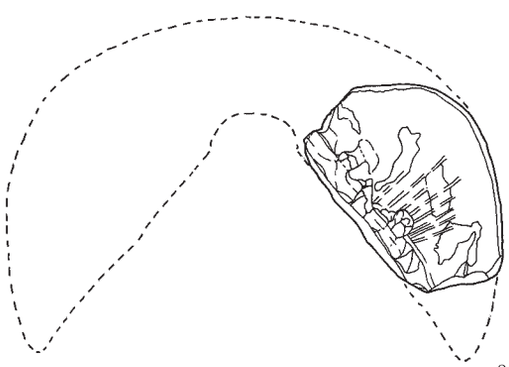
36-2





37

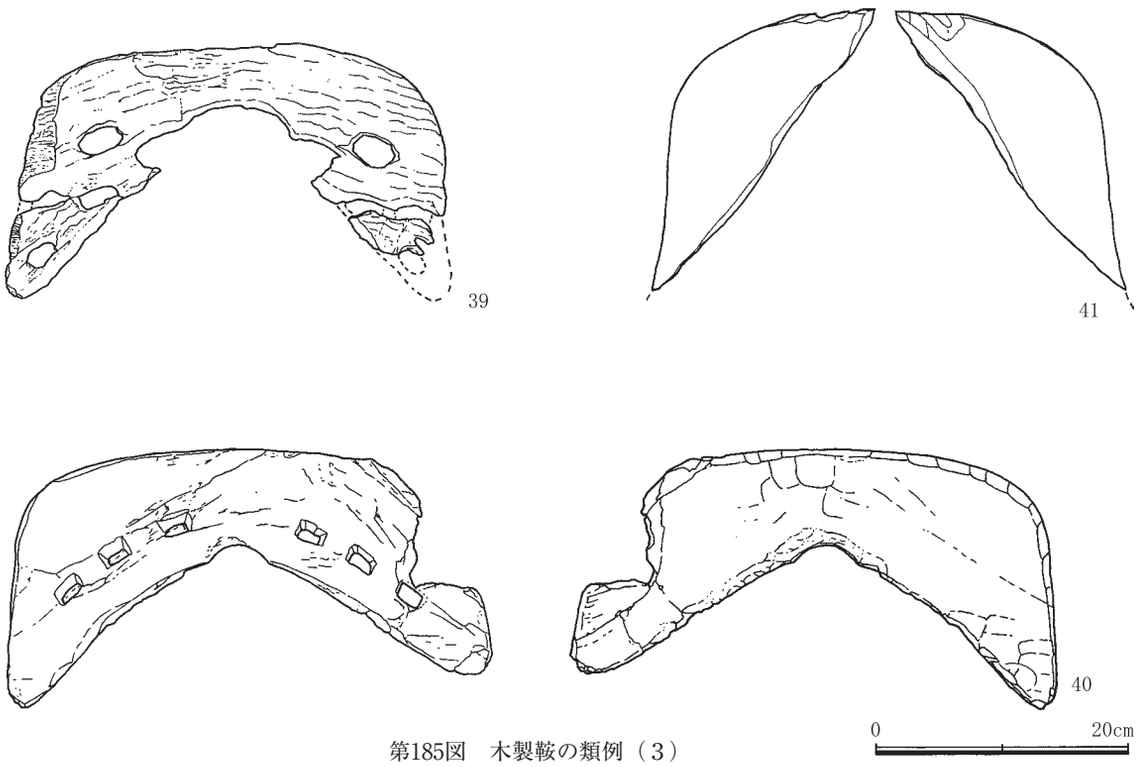




38

0 20cm

第184図　木製鞍の類例（２）



第185図　木製鞍の類例（３）

いる。こちらは、裏面を除く各面に黒漆の痕跡が認められるものである(註25)。次に奈良県香芝市下田東遺跡出土例があり、こちらは後輪のみが河川から出土した(註26)。そして、長野県長野市榎田遺跡出土例（183－34）は後輪で、未製品とされている。河川からの出土である(註27)。

５世紀中葉（Ⅰ型式３段階）としては、福岡県福岡市吉武遺跡出土例（184－35）があり、こちらは、前輪が溝から出土している(註28)。そして、蔀屋北遺跡大溝中層から出土した後輪も、この時期のものである(註29)。

５世紀後半（Ⅰ型式４段階）の類例は、６例（５遺跡）が認められている。まず、大阪府堺市陵南北遺跡出土例（184－36）がある。前輪と後輪が溝から出土している。居木は出土しなかった(註30)。ともに黒漆の塗布がみられる。次に奈良県大宇陀市谷遺跡出土例（184－37）がある。こちらは後輪で、黒漆の塗布がみられる(註31)。河川からの出土である。また奈良県御所市名柄遺跡出土例がある。こちらも後輪で、居館の濠からの出土である(註32)。そして滋賀県長浜市神宮寺遺跡出土例(184－38)がある。こちらは前輪で、黒漆の塗布がみられる(註33)。河川からの出土である。さらに群馬県太田市下田遺跡出土例がある。こちらも前輪で、河川からの出土である(註34)。

５世紀末～６世紀初頭（Ⅰ型式５段階）の類例としては、大阪府寝屋川市長保寺遺跡出土例（185－39）がある。こちらは前輪で、河川からの出土である(註35)。

６世紀前半（Ⅱ型式１段階）の類例としては、佐賀県小城市石木遺跡出土例（185－40）がある。こちらも前輪で、黒漆の塗布がみられる(註36)。河川からの出土である。

６世紀中葉（Ⅱ型式２段階）の類例としては、京都府福知山市石本遺跡出土例(185－41)がある。前輪とされており、黒漆の塗布がみられる。大溝からの出土である(註37)。

これらの他に、大阪府寝屋川市讃良郡条里遺跡出土例があり、これは後輪で、５世紀のものと

される。河川からの出土で、木製輪鐙がともに出土している[註38]。また群馬県前橋市二之宮宮下東遺跡出土例は前輪で、6世紀のものとされる。谷からの出土である[註39]。

輪鐙の起源と日本列島における木製輪鐙の受容

鐙の起源については、紀元前4～3世紀に出現した[註40]、4世紀初頭（晋代）に出現した[註41]、紀元前2～1世紀（前漢代）に出現した[註42]などの諸説がみられるが、輪鐙の型式の発展過程が註40に掲げたKyzlasov提唱の「形が自由な輪（革紐、縄）→補強された輪（踏込部だけ硬い）→木製→木芯金属張り→金属製」という流れを辿ることは、これまでに認められているいくつかの実物資料や間接資料からみても明らかである。

その出現時期については、間接資料からは革鐙が中国で紀元前2～1世紀に、木製が中国で4世紀初頭に、実物資料では中国で4世紀中葉に銅製や木芯金銅張りが[註43]、朝鮮半島で木芯金属張りが4世紀中頃にという年代が想定されており、したがって鐙の出現時期は紀元前2～1世紀といえよう。

輪鐙の受容が日本列島で確認されているのは、木製が4世紀初頭、木芯金属張りが5世紀前半であり[註44]、これらは中国から直接、あるいは朝鮮半島を経て伝播したものと考えられる。

馬具は遊牧民族の所産であって、後述するが鑣轡や鞍の起源は遊牧民族にある。馬具の一種である鐙についても同様に考えられがちであるが、鐙の出現時やその後も長期にわたって遊牧民族は鐙を使っていなかったようで、遊牧民族社会では類例がみられない。これは、騎乗の術に長けた遊牧民族には鐙が必要なかったからと考えられる。

匈奴を通じて乗馬が伝えられた中国では、紀元前2～1世紀の前漢代の間接資料に革鐙の存在が認められ、これが鐙の起源と考えられる。最初は騎乗に不慣れな漢人が、騎乗の際の足踏みとして鐙を考え出し、そのため鐙は片側（左側）にのみ装着されていた。それが騎走時に身体を安定させるのに効果的だったことから、両足の足掛けとして使われるようになった。4世紀初頭には、革より安定感があって耐用度の強い木製や木芯金属張りのものが出現し、これらが比較的短期間に朝鮮半島や日本列島にも伝わったものといえる[註45]。

遊牧民族が騎走の際に鐙を使用するようになったのは、朝鮮半島や日本列島より遥かに遅く、7～8世紀のものとされる間接資料に鐙の表現が認められ、この頃には騎走に際しての足掛けとして確実に鐙が使われていた。騎馬による戦闘を常とした遊牧民族にとって、鐙は有効な道具であることが認識されたことで、広く普及したと考えられる[註46]。

8世紀に突厥がペルシアへ侵攻した際に、鐙が使われ有効であったとされ、この頃にペルシア、古代ギリシア、ローマなど西方世界へも鐙が急速に広まっていった[註47]。

類例からみれば、日本列島で鐙の受容が認められたのは4世紀初頭ということになるが、前項で触れたように、鐙の普遍的な受容の時期は、現段階では5世紀前半であると考えたい。そして

その経路は、中国から朝鮮半島を経由したものであった。

轡の起源と日本列島における鉄製鑣轡の受容

轡の起源は、遥か紀元前10世紀にも及ぶとされる。現在最も初現の例とされているのが、トゥバのアルジャン１古墳から出土した銜で、さらに中央カザフスタン、アルタイ、スキタイ文化以前の遺跡からも出土例がみられる[(註48)]。

紀元前９世紀～７世紀頃､ユーラシア草原地帯において成立した初期遊牧民文化は､騎馬によって牧畜を行なった最初の文化と考えられている。銜や銜留金具（鑣、鏡板など）の馬具が広く用いられた。黒海沿岸のスキタイ文化、南シベリアのアルタイ地方のパジリク文化、中国北方の内蒙古東部と遼寧省を中心とする夏家店上層文化などが、初期遊牧民文化の代表的なものとしてあげられる[(註49)]。そして初期遊牧民文化では、鑣轡の類例が多数出土している[(註50)]。

中国北方地域で乗馬に関する資料が出現するのは夏家店上層文化からで、銜が出現した時期もこの頃とされる。

ここでは、中国からどのような経路を辿って日本列島に伝播され、さらにどのように展開していったのかを概観する。

前漢代には、北方遊牧民の匈奴が、外敵として漢と抗争を続けた。紀元48年に匈奴が南匈奴と北匈奴に分裂し、その後、南匈奴が漢に降伏して、長城線内部のオルドス、陝西省北部に移住した。匈奴を介して馬具が華北へ伝播されたのはこの頃とされる[(註51)]。

その後の魏晋南北朝時代における北方遊牧民の中心は鮮卑族であった。鮮卑族は、戦国時代に内モンゴル東部に住んでいた東胡の一部族として、大興安嶺山脈一帯に居住していたが、前漢初期に東胡が匈奴の攻撃を受けると匈奴の支配下に入り､遼河上流のシラムレン川流域に移動した。匈奴の分裂後は自立し､２世紀中頃には諸部族を統合して大勢力を築いた。そして３世紀の初め、西晋の衰えに乗じて他の遊牧民族とともに鮮卑系の諸部族も華北に侵入し、多くの国家を樹立した。

４世紀初頭に匈奴が西晋を滅ぼして前趙を樹立する。４世紀前半になると、匈奴系の羯族が前趙を滅ぼして後趙を建国したが、４世紀後半（352年）の後趙の滅亡によって五胡十六国時代となる。鮮卑系の国家としては、慕容部族が前燕、後燕、南燕、北燕を、乞伏部族が西秦を、禿髪部族が南涼を、拓跋部族が代国を樹立した[(註52)]。

五胡十六国のうちの慕容鮮卑三燕（前燕、後燕、北燕）の馬具が、朝鮮三国伽耶や日本列島各地から出土した古墳時代馬具の直接の祖型にあたるとされる。慕容鮮卑墓に金属製轡の副葬が認められるのは、４世紀中葉の鮮卑の中原進出頃であり、まず銅製鍍金轡が先行し、鉄製轡・鉄地金銅張轡が後出する[(註53)]。これらをもとに三燕馬具の編年が試みられ、特定階層による金銅装馬具の独占所有の段階から､乗馬階層の拡大および鹵簿（王や貴族の出行時の儀仗や護衛の隊列）

制度を背景にした階層分化が計られ、そして実用的鉄製馬具が普及したと想定されている(註54)。

朝鮮半島では、半島南部で三燕馬具に類似する鏡板付轡、鐙、金属装鞍などの馬具が出土しており、これらから、三燕製品の受容や模倣が行なわれていたことが窺われる(註55)。そして初期の模倣から、次第に独自の地域色が加味された馬具が形成されていく。

日本列島では、慕容鮮卑三燕製の馬具が直接、あるいは高句麗を介して、伽耶、新羅、百済などの朝鮮半島南部地域を介して、という複数の経路で伝播されていることが窺われた。そのうち初期の段階では、三燕製品そのものや模倣品の受容が認められるが、その後は半島各地での地域色が加味された、いわゆる半島製ともいえる製品の受容が中心となる。

三燕からの直接受容もしくは高句麗製とされる類例としては、大阪府誉田丸山古墳出土の鉄地金銅張轡、長野県鳥羽山洞窟出土の鉄製鏡板付轡などがある(註56)。

４世紀後半に伽耶に伝播された鑣轡が、５世紀初頭には列島で受容されている。その類例としては、福岡県甘木市池の上６号墳出土あるいは福岡県福岡市老司古墳３石室出土などの、捩り銜で無引手の無遊環の鉄製鑣轡、奈良県橿原市南山４号墳出土の捩り銜に２条線引手の鑣轡などがある(註57)。ほかには群馬県剣崎長瀞西13号墳出土のＸ字形環板轡や、宮崎県六野原10号地下式横穴墓出土のＸ字形環板轡などが伽耶経由の伝播例とされる。

これらの鏡板付轡は、伽耶では青銅製ないしは鉄製であるのに対し、新羅には金銅製がみられる。そして５世紀前半には新羅を介して列島に伝播されており、その類例には大阪府鞍塚古墳出土や滋賀県新開１号墳出土の鉄地金銅張鏡板付轡がある。また、長野県物見塚古墳出土の鉄製鑣轡も同様の経路で伝播された可能性がある(註58)。

百済では、４世紀前半頃から慕容鮮卑三燕製馬具の受容・模倣が始まるが、５世紀に入ると遊環付轡という地域色がみられるようになり、遊環付の鑣轡や鏡板付轡が認められる(註59)。

百済を介して列島に受容された鉄製轡のうち、最も初現と考えられるのは兵庫県加古川市行者塚古墳出土の捩り銜で無引手の無遊環の鉄製鑣轡であり(註60)、梯形立聞付鏡板付轡も出土している。そして、百済製の轡の特徴といえる遊環付轡の受容の初現と考えられるのが、５世紀前半の兵庫県姫路市宮山古墳２号主体出土の鑣轡で、蔀屋北遺跡出土の鑣轡もほぼ同時期のものと考える。

鞍の起源と日本列島における木製鞍の受容

最も古式の鞍の形態は軟式鞍で、これは２つのクッションを馬の背の上で革帯によって綴じ合わせたもので、鞍橋の二対の飾り板（クッションの前後に各２枚ずつ付けた木製や角製の文様薄板）や、覆輪の二対の装飾品（クッションの縁の上に被せられる薄い弧状の縁飾り）で装飾されていた。紀元前９世紀～７世紀頃のアルタイの出土品のなかに、軟式鞍の存在が知られており、紀元前７～４世紀のスキタイでも、軟式鞍のみが使われていた。また、紀元前３世紀の秦始皇帝

陵の兵馬俑に、軟式鞍の表現が顕著にみられ、漢代の壁画にも軟式鞍の表現が認められる[註61]。

モンゴルのノイン・ウラから出土した鞍は、垂直の鞍橋に３～４本の棒からなる格子状の居木が嵌め込まれたものである。紀元前後のもので、ラクダ用の鞍とされる。朝鮮半島や日本列島の初期乗馬用鞍とは構造が異なるが、この鞍から硬式鞍が創造されたと考える説もある[註62]。

前項でも触れたように、三燕で金属製馬具の副葬が認められたのは４世紀中葉頃と思われる。硬式鞍の出現も、木製の類例の初現がほぼこれに相当し、慕容鮮卑三燕の鞍は、①木製鞍→②海金具が金属装→③海金具と磯金具が金属装→④磯金具が金属装、という順序で出現する。①の類例としては遼寧省朝陽市南郊袁台子石室壁画墓、②は遼寧省安陽市孝民屯154号墓、遼寧省北票県北溝Ｍ８号墓、喇嘛洞ⅡM202号墓など、③は遼寧省朝陽市十二台郷磚廠88Ｍ１墓、④には遼寧省北票県章吉営子西溝村墓、喇嘛洞ⅡM101号墓、喇嘛洞ⅡM226号墓出土例などがある[註63]。

そして、伽耶、新羅、百済などで鮮卑系鞍の受容が認められたのは、鐙や轡と同様に４世紀後半以降の、三燕のうちの後燕あるいは北燕代とされる[註64]。

列島への伝播経路は、金属装については大阪府誉田丸山古墳出土の２号鞍、大阪府鞍塚古墳出土、滋賀県新開１号墳出土などの、伽耶あるいは新羅と共通する特徴を示す類例や、誉田丸山古墳出土の１号鞍のように、百済の製作を推定させる特徴を示すものもあるが、木製鞍については、朝鮮半島での出土例が報告されておらず、列島出土の類例の系譜を特定することができないのが現状であり、現段階では、４世紀中葉頃に三燕で出現した硬式鞍（木製鞍）が、５世紀前半には列島各地で受容が認められるということに尽きる。今後、特に朝鮮半島南部での類例の出現が待たれる。

出土馬具からみた蔀屋北遺跡の古墳時代中・後期集落

ここまで検討してきた結果、日本列島で本格的な馬具の受容が認められたのは、古墳時代中期の５世紀前半頃と考えられた。

古墳時代の馬具は、硬式鞍、轡、鐙の三種で構成されるのが基本であり、鞍橋に金属製の鞍金具を張った鞍、装飾を施した鏡板付轡、木芯金属板張輪鐙など、そして杏葉、辻金具などの各種飾りを施した煌びやかな装飾馬具が、各地の古墳から副葬品として出土している。ただし、硬式鞍、轡、鐙の三種が一括して出土している例はごく稀で[註65]、単独あるいは二種が出土している場合が多い。そしてその出土状況は、鞍の場合は木製の芯が腐食して消滅し鞍金具のみが残存していることが多く、鐙についても木芯が消滅して金属部分のみが認められる場合が多い。

煌びやかな装飾馬具に対して、木製鞍、鉄製鑣轡、木製輪鐙などからなる馬装が存在するが、前者に比べて装飾性が乏しいもので、こちらは実用的な馬具といえる。その類例は鉄製鑣轡が多数を占め、主に副葬品として各地の古墳から出土している。木製鞍や輪鐙は轡に比べて類例が少ないが、これは本来存在したはずの木製の鞍や鐙が、遺存条件が整わなかったために消滅し、

表16　列島出土の初期騎乗用馬具

時期	有遊環鑣轡		無遊環鑣轡	木製輪鐙	木製鞍
	古墳	集落	古墳		
布留Ⅰ式				箸墓古墳周濠（奈良県）	
ＯＮ２３１			池の上６号墳（福岡県） 老司古墳３号石室（福岡県） 行者塚古墳（兵庫県）		
ＴＫ７３			宮山古墳３号主体（兵庫県）		
ＴＫ２１６	宮山古墳２号主体（兵庫県） 林畦１号墳（長野県） 池尻２号墳（兵庫県）		小倉東１号墳（大阪府） 西ノ宮１号墳（静岡県） 物見塚古墳（長野県）		八尾南遺跡（大阪府） 榎田遺跡（長野県） 下田東遺跡（奈良県）
ＴＫ２０８	随庵古墳（岡山県） 飯綱山10号墳（新潟県） 小田茶臼塚古墳（福岡県）	蓿屋北遺跡（大阪府）	後出３号墳（奈良県） 稲童21号墳（福岡県）	蓿屋北遺跡（大阪府）	蓿屋北遺跡（大阪府） 吉武遺跡（福岡県）
ＴＫ２３	寺山７号墳（岡山県） 向田Ⅲ－１号墳（福岡県） 岡の御堂１号墳（香川県） 西大山１号墳（群馬県）		一貫西３号墳（岡山県） 高岡４号墳（長野県）	神宮寺遺跡（滋賀県）	神宮寺遺跡（滋賀県） 百舌鳥陵南北遺跡（大阪府） 谷遺跡（奈良県） 名柄遺跡(奈良県) 下田遺跡（群馬県）
ＴＫ４７	下北方地下式３号横穴（宮崎県） 桧山峠７号墳（愛媛県）	十三塚遺跡６号住居（栃木県）	上池ノ平５号墳（長野県）		長保寺遺跡（大阪府）
ＭＴ１５					二之宮宮下東遺跡（群馬県） 石木遺跡（佐賀県）
ＴＫ１０					石本遺跡（京都府）

鉄製の轡のみが残った結果であると推定される。そして鑣轡も、銜や引手など金属部分が遺存こそしてはいるが、錆化が進行して肉眼では原形がわからないようなものが多く、鹿角製あるいは木製の鑣については消滅してしまっているものが大多数を占める。そしてこちらも装飾馬具の場合と同様に、単独あるいは二種が出土している事例が圧倒的に多い。そのなかで蔀屋北遺跡大溝出土の馬具は、木製鞍、鉄製鑣轡、木製輪鐙の三種が同一の遺構から出土した唯一の例として、特筆すべき事例といえる。

次に出土場所についてであるが、前述のように、鑣轡は蔀屋北遺跡出土例と十三塚遺跡出土例の２例以外はすべて古墳から出土したものであった。これに対して木製鞍と木製輪鐙は、すべて古墳以外から出土したものであり、この傾向が生じた要因としては、古墳の埋葬施設内部が有機物の遺存する環境に適さなかったことが考えられる。

信州の伊那地方の古墳から出土した鉄製鑣轡のなかには、古墳の周濠付近などに掘られた土壙から馬骨とともに出土する例がかなりみられ、これらの土壙は馬の殉葬土壙と考えられている。馬を埋葬した例は蔀屋北遺跡でも認められているが、こちらは古墳に伴うものではない(註66)。

古墳時代中・後期の馬を殉葬した土壙の類例は、長野県飯田市を中心とした下伊那地方の古墳に集中するが(註67)、群馬県高崎市を中心とした上毛野地方の古墳(註68)、あるいは蔀屋北遺跡周辺に所在する北河内地方の古墳(註69)などでも類例が認められている。

下伊那、上毛野、北河内の各地方は、古墳時代中期から後期にかけて下伊那の牧、上毛野の牧、讃良の牧などの経営を行って大和政権に馬を供給する、馬飼い集団の所在する地域であった。鉄製鑣轡などの実用性の高い馬具を伴う、馬の殉葬土壙がこれらの地域の古墳に伴うことは、馬飼い集団の墓域という性格を如実に表わす事例と考えられよう。

蔀屋北遺跡の周辺では、これまでにも馬の祭祀遺構の検出(註70)や馬の飼育道具の出土(註71)など、地域と馬の関連を強く印象付ける事例が認められていたが、蔀屋北遺跡で集落内に丁寧に埋葬された複数の馬や、大量の製塩土器を埋納した複数の土坑が検出され、さらに木製鞍、鉄製鑣轡、木製輪鐙の実用的な馬具の三点セットが出土したことで、当地が牧（讃良の牧）の一角であったことがより明確になった。そして、馬具およびその他の出土遺物を検討した結果(註72)、朝鮮半島の百済あるいは伽耶から渡来した人々が形成した集落であること、馬匹生産および飼育を行う牧の経営が主たる生業であったこと、そして牧の経営が開始された時期が５世紀前半まで遡る可能性が高いことなどが判明した。

註

註１　春季特別展馬と馬具の考古学図録　「古墳時代の馬との出会い」 2003　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

註２　桃崎裕輔　「東アジア騎馬文化の系譜―五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系統論をめざして－」

註 3　宮城県文化財調査報告書第 163 集　「藤田新田遺跡」 1994　宮城県教育委員会・日本道路公団

註 4　長浜市埋蔵文化財資料第 54 集　「神宮寺遺跡（1992年）－マンション建設に伴う発掘調査報告書－」滋賀県長浜市教育委員会

註 5　諫早直人　「朝鮮半島南部三国時代における轡製作技法の展開」 古文化談叢第 54 集 2005　九州古文化研究会

註 6　甘木市文化財調査報告第５集　「池の上墳墓群」 1979　甘木市教育委員会
「老司古墳調査概報」 1969　福岡市教育委員会

註 7　「行者塚古墳発掘調査概報」 1997　加古川市教育委員会

註 8　姫路市文化財調査報告Ⅳ　「宮山古墳第２次発掘調査概報」 1973　姫路市文化財保護協会

註 9　桃崎裕輔　註 2 文献に同じ

註10　桃崎は註 2 文献のなかで、立聞金具の変遷について、（古）大きな板状立聞、U字形鋲の立聞→（新）単孔式二脚の小さな立聞への移行を指摘している。

註11　「加古川市史」 第４巻　1996　加古川市

註12　桃崎裕輔　註 2 に同じ

註13　諫早直人　「Ｅ１号墳周溝内出土の鑣轡について」『小倉東遺跡Ⅱ』 2006　財団法人枚方市文化財研究調査会

註14　桃崎裕輔　註 2 に同じ

註15　鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葭子　「随庵古墳」 1965

註16　甘木市文化財調査報告第４集　「小田茶臼塚古墳」 1979　甘木市教育委員会

註17　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 61 冊　「後出古墳群」 2003　奈良県立橿原考古学研究所

註18　行橋市文化財調査報告書第 32 集　「稲童古墳群」 2005　行橋市教育委員会

註19　桃崎裕輔　註 2 に同じ

註20　桃崎裕輔　註 2 に同じ

註21　「岡の御堂古墳群調査概報－香川県綾歌郡綾南町所在の古墳群と中世遺跡の調査－」 1977　綾南町教育委員会

註22　栃木県埋蔵文化財調査報告書第 115 集　「十三塚遺跡」 1991　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
宮代栄一　「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学第70号』 1995九州考古学会
松山市文化財調査報告書第 61 集　「桧山峠７号墳」 松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

註23　桃崎裕輔　註 2 に同じ

註24　「蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅶ」 2008　大阪府教育委員会

註25　財団法人八尾市文化財調査研究会報告47　「八尾南遺跡」 1995　財団法人八尾市文化財調査研究会

註26　発掘された日本列島２００６地域展 「河内湖周辺に定着した渡来人－５世紀の渡来人の足跡－」2006　大阪府立近つ飛鳥博物館

註27　上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12　「榎田遺跡」 1999　日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター

註28　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 911 集　「吉武遺跡ＸⅧ」 2006　福岡市教育委員会

註29　大阪府教育委員会　註24 に同じ

註30　神谷正弘　「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元」『考古学雑誌』 第72巻第３号　1987　日本考古学協会

註31　橿原考古学研究所成果第３冊　「大和木器資料Ⅰ」 2000　奈良県立橿原考古学研究所

註32　財団法人八尾市文化財調査研究会　註25 に同じ

註33　滋賀県長浜市教育委員会　註 4 に同じ

註34　財団法人八尾市文化財調査研究会　註25 に同じ

註35　「讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ」 1991　大阪府教育委員会

註36　佐賀県文化財調査報告書第 35 集 「石木遺跡」 昭和51年　佐賀県教育委員会

註37　京都府遺跡調査報告書第８冊（1987）　「石本遺跡」 1987　財団法人京都府文化財調査研究センター

註38　発掘された日本列島２００６地域展 「河内湖周辺に定着した渡来人－５世紀の渡来人の足跡－」 2006　大阪府立近つ飛鳥博物館

註39　財団法人八尾市文化財調査研究会　註25 に同じ

註40　I.L.Kyzlasov著　林俊雄訳　「鐙の起源について」『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』 1988　根岸競馬記念公苑

Kyzlasovは多方面にわたる多くの資料を検討した結果、「鐙の出現は紀元前４～３世紀である。初期の鐙は有機質の素材で作られていた。鐙の型式の発展過程が、形が自由な輪（革紐、縄）→補強された輪（踏込部だけ硬い）→木製→木芯金属張り→金属製となる。初期の型式の鐙がきわめて広く分布しているとともに、違った慣習をもつ民族のもとには独特な地方的な形のものが存在することから（朝鮮の円形・台形木製鐙、日本の壺鐙、南シベリアの「孔が内側にある」鐙など)、鐙の発明者がいかなる民族であったかを探し求めることは困難であり、おそらくいろいろな中心地で発生したものと考える。」と結論付けている。

註41-1　A.K.Ambroz著　林俊雄訳　「編年基準としての中世初期（４－８世紀）の鐙と鞍」『中世初期ユーラシア草原における馬具の発達』 1988　根岸競馬記念公苑

註41－2　樋口隆康　「鐙の発生」『青陵』№19　昭和47年　橿原考古学研究所

Ambrozは各地における鐙の出現について、古代ギリシャ・ローマ世界には鐙は存在せず、マウリキオス帝（在位582－602年）のものとされている文書をもとに、ビザンツ人や、古代ギリシャ・ローマ世界とかって関係を持っていたスキタイ人、ペルシャ人などが鐙の存在を知ったのは600年頃であったとの見解を示し、また、中国では湖南省長沙で発掘された４世紀初頭の晋代の墳墓で出土した馬俑に、左側にのみ足がかりが見られるものがあり、輪鐙が使われるようになったことが窺われるとし、さらに４世紀後半から５世紀には、一対の木製鐙が朝鮮と日本の富裕な墓にはごく普通の副葬品となると指摘し、鐙の起源が４世紀の中国であるとする。

また樋口隆康は鐙の出現について、スキタイ文化の各地の騎馬像、２、３世紀のドウラ・ユウロポスのパルチア時代の線描き図にみられる鎧馬、イーラーンのタンギ・サルワク（A. D. 200）の鎧馬武人像、サルマティアの墓の壁画（A. D. １－２世紀）騎馬騎兵、匈奴のパズイルク第５号墳出土のフェルト壁掛けにある騎馬人像、サーサーン朝のターク・イ・ブスターンのベローズ王の騎馬に乗った浮彫像（A. D. ５世紀）、銀器の図文であるサーサーン王の狩猟図（４－６世紀）などに鐙がみられず、鐙の表現がみられるのは７－８世紀になってからで、中国では漢代や後漢代の画像石や画像磚にみられる騎馬の図には鐙の表現が認められず、永寧２年（A. D. 302）の紀年磚が出土した湖南省長沙金盆嶺第21号墓から出土した騎人俑に鐙が認められ、これが最古の鐙の例であり、中国では鐙は４世紀初まで遡ることができるとする。

註42　菅谷文則　「革鐙の新例と、鐙の発生」『青陵』№84　1994　橿原考古学研究所

菅谷は、青陵の第19号に掲載された樋口の「鐙の発生」に最新の資料による補訂を加えるとして、第84号に「革鐙の新例と、鐙の発生」という論文を発表している。

それによれば、1993年に上海博物館で開催された第３回中国文物精華展に出展された、雲南省江川県李家山59号墓出土の青銅製貯貝器の蓋に鋳出された34体の人物像のなかに騎馬像が２体みられ、ともにこれまで実物資料或いは、それを表現した間接資料の出土がなかった「革鐙」の表現が明確に認められる資料である。展示図録では前漢とされているが、菅谷は貯貝器の年代を他類例との形状比較をもとに、前漢中頃の比較的新しい時期（紀元前２～１世紀）と考え、鐙の起源がおおよそ400年以上遡ることを指摘している。

註43　遼寧省の朝陽南郊の袁台子壁画墓から木芯革張り輪鐙が、安陽孝民屯M154号墓や朝陽南郊十二台郷磚廠88M１墓から銅製鍍金の輪鐙が出土している。また、北票県北溝Ｍ８号墓から木芯金銅張輪鐙が出土している。４世紀中頃のものとされる。

註44　千賀久　「付論　日本の馬具の系譜を考える」　註１奈良県立橿原考古学研究所附属博物館文献2003

註45　千賀久　註44に同じ

註46　A.K.Ambroz　註41－1に同じ

註47　樋口隆康　註41－2に同じ

註48　樋口隆康　註41－2に同じ

註48　「東京国立博物館蔵中国北方系青銅器」 2005　東京国立博物館

曽布川寛　「漢唐期の東西南北の文化交流」『china crossroads of culture　中国☆美の十字路展』 図録2005－2006

註50　枡本哲氏のご教示による。

註51　曽布川寛　註49に同じ

註52　曽布川寛　註49に同じ

註53　桃崎裕輔　註２に同じ

遼寧省朝陽南郊十二台営子磚厰88M１墓から、鋳銅製の十字形鏡板付轡が銅製鍍金の輪鐙とともに出土している。また北票県喇嘛洞ⅠM202号墓からも同様の轡が出土しており、これらは４世紀後半のものとされる。

鉄製轡としては章吉営子西溝村墓から龍文の線刻がみられる鏡板付轡が、喇嘛洞西16号墓から梯形立聞付楕円形鏡板付轡が出土している。さらに北票倉粮窖墓から二孔式立聞金具付鑣轡などがある。

註54　桃崎裕輔　註２に同じ

註55　桃崎裕輔　註２に同じ

新羅では、慶州月城路カ13号墓から二条線毛抜状引手を伴う銅地金銅張円形鏡板付轡が出土しており、これは縁金を鋲留する鏡板という特徴から、遼寧省本渓小市晋墓の出土例に類似するもので、５世紀初頭のものとされる。

百済では、天安斗共洞Ⅰ－５号墳から短い二条線毛抜状引手で二股の立聞金具を伴う鑣轡と、長い二条線毛抜状引手を伴う円形鏡板付轡が出土している。円形鏡板付轡は遼寧省北票県北溝Ｍ８号墓や喇嘛洞ⅡM196号墓などに類似するもので、５世紀前半のものとされる。

伽耶では、金海大成洞57号墓から二条線毛抜状引手の鉄製鏡板付轡が、伽耶の在地的要素の強い捩引手の鉄製鏡板付轡とともに出土している。また、金海良洞里107号墓では、短い二条線毛抜状引手を伴う円形鏡板付轡が出土しており、ともに400年前後のものとされる。

註56　桃崎裕輔　註２に同じ

誉田丸山古墳出土の鉄地金銅張轡は、喇嘛洞西16号墓から出土した梯形立聞付楕円形鏡板付轡と類似しており、鳥羽山洞窟出土の鉄製鏡板付轡は、遼寧省王子墳山腰而営子M9001墓出土の鉄製鏡板付轡と類似している。ともに慕容鮮卑もしくは高句麗製と

される。

註57　桃崎裕輔　註 2に同じ

註58　桃崎裕輔　「日本列島における騎馬文化の受容と拡散―殺馬儀礼と初期馬具の拡散に見る慕容鮮卑・朝鮮三国伽耶の影響－」『渡来文化の受容と展開－５世紀における政治的・社会的変化の具体相（２）－』 1999　埋蔵文化財研究会

無捩銜に二条線引手を伴う物見塚古墳の鑣轡は、吉林省輯安好太王碑付近出土の鑣轡に類似することから、高句麗系の可能性があり、新羅を介した三燕馬具の受容品である。

註59　銜と引手を遊環を介して連結するのは百済の他に大伽耶、多羅、安羅などの轡にも類例がみられるが、百済のものが多数を占めており、百済の轡にみられる地域的特色といえる。

註60　捩銜の無引手鑣轡は、金海大成洞39号墓出土のものと類似することから、当初は金官製とされていた。しかし百済の清州鳳鳴洞Ａ35号墓などから同様の類例が出土しており、これに形状が極似することから、近年、行者塚古墳出土例を百済製とする見方が強くなった。

註61　A.K.Ambroz　註41－１に同じ

註62　A.K.Ambroz　註41－１に同じ

註63　桃崎裕輔　註 2 に同じ

註64　桃崎裕輔　註 2 に同じ

註65－1　「斑鳩藤ノ木古墳概報」 1988　奈良県立橿原考古学研究所

奈良県藤ノ木古墳から二組の馬具が出土している。一組は金銅装で、心葉形鏡板付轡、壷鐙、鞍金具のセットに障泥の縁金具、歩揺付辻金具、杏葉などがみられる。他の一組は鉄地金銅張りで、素環鏡板付轡、木芯鉄板張り壷鐙、鞍金具のセットに杏葉、辻金具、雲珠などがみられる。

註65－2　「宮垣外遺跡高屋遺跡」 2000　長野県飯田市教育委員会

宮垣外遺跡で検出された土壙ＳＫ64は古墳ＳＭ03の墓域内に存在し、古墳の築造と同時に埋葬された馬殉葬土壙と判明している。ＳＫ64内に概ね原形を留めた位置で鉄製ｆ字鏡板付轡、木芯鉄張輪鐙、木装鞍のセットが検出された。

註66　「蔀屋北遺跡発掘調査概要・Ⅰ」 2004　大阪府教育委員会

蔀屋北遺跡では、南西居住域で２基の馬埋葬土壙が検出されているが、そのうちの１基には、馬１頭が横たえられて埋葬されており、馬１頭の全身骨がほぼ遺存していた。５世紀後半（ＴＫ２３）のものと考えている。

註67　特別展図録　「伊那谷の馬科野の馬－古墳時代における受容と広がり－」 1997　飯田市美術博物館。　飯田市上郷考古博物館

馬殉葬土壙としては、下伊那地方の高森町北林５号墳で１基、飯田市新井原２号墳で２基、同12号墳で１基、高岡４号墳で１基、物見塚古墳で１基、茶柄山９号墳で６基、同２号墳で２基、宮垣外遺跡で３基などが認められており、類例のほとんどが下伊那地方に集中する。

一方、蔀屋北遺跡の２基の例のように、古墳に伴わない馬埋葬土壙についても宮垣外遺跡で２基の類例がある他、科野地方の更埴市生仁遺跡１号祭祀遺構、同市五輪堂遺跡４号土土壙墓などの類例が認められる。

註68　橿原考古学研究所附属博物館　註１に同じ

上毛野地方の群馬県高崎市剣崎長瀞西遺跡で、馬殉葬墓が１基検出されている。

註69　開館20周年記念特別展図録　「馬と生きる」 2004　四條畷市立歴史民俗資料館

北河内地方の四條畷市清滝２号墳で馬の周溝内埋葬例が、また、更良岡山古墳群に属する円墳の１号墳で、周溝の外側に馬の埋葬土壙が認められた。

註70　四條畷市立歴史民俗資料館　註69 に同じ

四條畷市奈良井遺跡、鎌田遺跡などで馬のまつり場と考えられる遺構の検出が報告されている。奈良井遺跡では、一辺約40ｍで、周囲を溝で区画した隅丸方形周溝状遺構が検出され、周溝内に板の上に横位に寝かされた状態のものや、馬飼いのまつりでいけにえとして首を切られたと考えられる、頚椎部分で切断された頭骨などを含む、６頭以上の馬が検出されるとともに、滑石製臼玉36点を内蔵した須恵器の壺、手捏土器、ミニチュアの人形土製品と馬形土製品などが出土した。出土遺物から古墳時代中期～後期に比定される。また鎌田遺跡では、一辺14ｍの方形周溝状遺構が検出され、溝内から馬骨、須恵器、土師器、製塩土器、滑石製臼玉、ガラス玉、スリザサラ、木製鏃、木製刀、飾り台、手捏土器などの遺物が出土した。馬のまつり場とされ、古墳時代中期に比定される。

註71　四條畷市立歴史民俗資料館　註69 に同じ

四條畷市奈良井遺跡で検出された、馬のまつり場と考えられる隅丸方形周溝状遺構の周溝内から、祭祀に関わる遺物に混じって木製のブラシ柄と鞭が出土した。馬の飼育に使用した道具と考えられる。

註72　出土した陶質土器に見られる特徴や、鉄製鑣轡に遊環が認められることなど、出土遺物のなかに百済との関連を特徴づける遺物が複数含まれている。そして馬そのものや、馬の飼育に関わる遺物が数多く出土しており、蔀屋北遺跡検出の集落が、牧の経営に携わった「河内の牧」の中核を成すものであったと考えられる。さらに、馬具が出土した大溝の中層は、出土遺物から５世紀中葉に埋没したと考えられるが、鉄鑣轡自体は５世紀前半のものと思われ、また、出土した須恵器のなかにＴＫ７３型式、ＴＫ２１６型式のものが相当数含まれることから、集落が形成された時期を５世紀前半と

考えている。井戸枠に転用された準構造船の船底材のなかには、５世紀前半の船と考えられるものが１艘あり、これらをふまえれば、河内に馬や飼育技術が伝えられ、牧の経営が開始された時期が５世紀前半であった可能性がある。

挿図出典文献

挿図で掲載した資料については、一部を以下の文献より転載あるいは再トレースして掲載した。なお、資料の多くはそれぞれの発掘調査報告書より再トレースして掲載した。

図1－3　橋本輝彦　「纒向遺跡第109次出土の木製輪鐙」『古代武器研究』 第３号　2002　古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室

図4－14　桃崎裕輔 「東アジア騎馬文化の系譜－五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系統論をめざして－」

図4－15　車勇杰　「韓国中北地域出土の武器と馬具－清州清鳳洞百済古墳群出土遺物を中心に」『古代武器研究』第３号　2002　古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室

図4－19　桃崎裕輔 「東アジア騎馬文化の系譜－五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系統論をめざして－」

図4－24　桃崎裕輔 「東アジア騎馬文化の系譜－五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系統論をめざして－」

図4－25　桃崎裕輔 「東アジア騎馬文化の系譜－五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系統論をめざして－」

図4－29　宮代栄一 「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学第70号』 1995　九州考古学会

図4－31　桃崎裕輔 「東アジア騎馬文化の系譜－五胡十六国・半島・列島をつなぐ馬具系統論をめざして－」

図5－36　神谷正弘 「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元」『考古学雑誌』 第72第３号　1987　日本考古学協会

第７節　蔀屋北遺跡出土古墳時代木製品について

第１項　古墳時代の木製品補足

本節では、蔀屋北遺跡のA調査区～F調査区の発掘調査報告書『蔀屋北遺跡Ⅰ』（大阪府埋蔵文化財調査報告2009－３。以下、本節において「蔀屋北Ⅰ」という。）に掲載できなかった古墳時代の木製品を報告する。なお、器種分類については「蔀屋北Ⅰ」に準じている。

なお「蔀屋北Ⅰ」において報告した古墳時代木製品および本章第４節において報告した菅廊部分の調査によって出土した木製品、ならびに本節で報告する木製品は合わせて338点となる（註１）。

１．農具

補１は曲柄平鍬である。E調査区大溝090001上層から出土した。アカガシ亜属の柾目材を利用している。遺存状態が悪く全長、刃幅については不明である。身部から刃部にかけての加工のあり方から、鉄製U字刃先を装着したものと考えられる。いわゆるナスビ形曲柄鍬である。

２．容器

補２は遺存状態が良くないが、脚付きの槽の底部と考えられる。E調査区大溝090001から出土した。樹種は不明であるが板目材を利用している。脚は１箇所のみ残存している。残存長で約42㎝を測るため、本来はかなり大きな槽であったと考えられる。

補３は盤である。E調査区大溝090001谷７層より出土した。針葉樹の柾目材を利用している。口縁部の立ち上がりは短く浅い。楕円形の長軸両端を耳状の持ち手のように方形に加工した平面形を呈していたと考えられる。内面には線状の刃物痕がみられる。また外面は低い円形の脚を削り出しているが、加工が粗いため刃物痕が明瞭にみられる。遺存状態から脚は４箇所設けられていたと考えられる。

補４はヒョウタンを加工した容器である。A調査区の井戸695から出土した。この井戸に設けられた木製枠内の最深部より、これより小さいヒョウタンが入れ子になった状態で検出された。「蔀屋北Ⅰ」では自然遺物として把握していたが（「蔀屋北Ⅰ」写真図版編　図版262 下段２～３）、小さいヒョウタンを入れ子にするため、大きいヒョウタンの側面部分を抉るように切り落として口縁としている。当初この部分全体が欠損部と考えていたが、欠損している破断面とは異なり、加工によるものと認められる部分があること、小さいヒョウタンを入れ子にしていたことを考慮し、口縁と判断した。またヒョウタンの「へた」の部分は、表裏面ともに垂直方向に抜けており、円形に切り取られていると考えられる。そうであれば柄が差し込まれていた、もしくは紐を通していたと考えることもでき、この場合容器というよりは杓子ないしは釣瓶としての機能が考えら

れる。ここではそれらを想定しつつ出土状態を考慮し、容器として報告しておく。

なお、奈良県御所市長柄遺跡で出土しているヒョウタン容器は、木製の柄が貫通しており、また容器の形態が本例に酷似しており注目される（註２）。

３．武具

補５は弓である。F調査区の大溝中層より出土した。針葉樹の板目材を利用している。弓弭部分は外面から削り込み、凸状に作り出している。下半部は裂かれたように欠損しており全長は不明である。下端部分が弓の中央部分にあたり、この部分が最も太く加工されているとみられ、上方に向かって徐々に太さを減じるように削り込んでいる。なお外表面には漆等の塗彩は認められない。

４．建築部材

補６は杭に転用された建築部材と考えられる。F調査区の大溝中層より出土した。針葉樹の板目材を利用している。上端から約12㎝の部分で抉りが入れられ、また下端から36㎝の部分にも抉りがみられる。もとは柄穴と考えられる。柄穴が穿たれた角柱が縦方向に分割された後、杭に加工されたものである。

表17 木製品（補足）観察表

挿図	番号	名称	遺構名	層位	長さ cm	最大幅 cm	最大厚 cm	樹種	実測番号	登録番号	備考
186	補１	曲柄平鍬	大溝 E090001	上層	22.9	7.6	1.2	アカガシ亜属	木 113	3086	
187	補２	容器（槽？）	大溝 E090001	－	41.8	10.2	5.2	－	木 176	3784	
186	補３	容器（盤）	大溝 E090001	谷７層	22.5	6.4	0.7	針葉樹	木 31	1364	
186	補４	容器	井戸 A695	最下部	20.2	17.6	9.1	ヒョウタン			
187	補５	弓	大溝 F	中層	87.0	3.0	2.8	針葉樹	木 79	511	
187	補６	建築部材	大溝 F	中層	92.9	4.1	4.0	針葉樹	木 66	233	杭に転用

註１　井戸枠に転用された船材（船体および舷側板）を含む。

註２　奈良県立橿原考古学研究所付属博物館　2006『葛城氏の実像葛城の首長とその集落』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館特別展示図録第65冊

第２項　古墳時代木製品について

蔀屋北遺跡から出土した古墳時代の木製品は、集落内の井戸や土坑からも出土しているが、ほとんどが集落の西端を限る大溝（以下「大溝」という。）からの出土である。これらは集落の存続時期と同様に、古墳時代中～後期に属し、集落を営んだ人々の生活の具体像を知る上での良好な資料群ということができるほか、後述するように、この集落を最も特徴づける「渡来系集団」や「馬飼集団」と関連付けて分析を行うことにより、同時代における木製品のあり方に関する歴史的特質に迫ることのできる重要な資料群ということもできよう。

「蔀屋北Ⅰ」および前章で報告した古墳時代木製品は計338点を数える。本項ではこれらについて、「蔀屋北Ⅰ」において設定された時期区分（蔀屋北１期～蔀屋北５期）ごとに器種構成を概観することを通じて、本遺跡の古墳時代木製品の特徴の一端を明らかにしてみたい。時期区分については「蔀屋北Ⅰ」総括編第15表を基本とし、「蔀屋北Ⅰ」観察表10の各木製品の出土層位を踏まえて所属時期を判断した。なお個別に出土状況等を考慮して時期を判断したものもある。

また「蔀屋北Ⅰ」では、農具、工具など用途不明品も合わせて18の大分類のもと、器種名を示す中分類（鍬、鋤、槽、鞍など）を用いて報告した。以下では時期ごとに数量を検討できるほど各器種の出土数がないため、大分類を木製品の組成として把握することとし、その傾向を検討していくこととする。

１．時期ごとの木製品数

「蔀屋北Ⅰ」において報告した木製品（「蔀屋北Ⅰ」観察表　表10）および前項で補足的に報告した木製品（表17）等、計338点のうち、その所属時期が判明したものは304点を数える。この時期ごとの内訳は、１期：36点、２期37点、３期91点、４期：58点、５期：82点となり、集落が拡大期をむかえる３期、および再び拡大期をむかえる５期に点数が多くなる傾向にある。

１期から４期までの木製品は、そのほとんどが大溝（H区溝11の２～５層、D調査区溝900の３～７層、E調査区大溝09001の谷７、上層～谷３、下層、F調査区大溝上～下層）から出土しており、井戸やその他の遺構等からの出土は少ない。一方５期については、大溝が埋没した後の谷状地形（H区溝11の１層、D調査区溝900の１・２層、E調査区谷６、F調査区谷１・谷２）からは木製品の出土は顕著ではなく、ほとんど（82点中62点）は北東居住域の井戸D474からの出土である。１～４期において木製品を大溝に廃棄していた状況が、5期には踏襲されていないことが分かる。

２．蔀屋北1期の木製品（第188図）

１期の木製品は大溝からの出土が大半を占め、この他に西居住域井戸F944、南東居住域井戸A542出土のものがある。

農具では、曲柄又鍬、鎌柄、鋤柄、目盛板、大足横桟がみられる。工具では袋状鉄斧柄、刀子柄、紡織具、容器では槽、曲物底板がみられる。

武具では刀剣装具、束頭、祭祀具では鏃形、剣形、刀形、サシバ形、楽器では琴板、筑状弦楽器、船材では舷側板がみられる。

１期は蔀屋北遺跡において集落が形成された時期にあたる。この時期には韓式系土器が調査区全域から検出されていることから、集落開始期から渡来系集団の存在が指摘されているものの、２期以降ほどの本格的な渡来人の居住ではないという（註１）。

この時期の木製品は、農工具や容器等の生活用具類と、武具、祭祀具等の非生活用具を木製品の基本的な組成として備えていることがわかる。詳しくみると、①農具、工具、容器、紡織具などの日常生活に供する道具類と、②武具、祭祀具、楽器の非日常的（日常生活に供する道具ではないという意味で）である道具類が基本的なセットとして存在するものと考えられる。②のうち武具である刀剣装具には、漆の塗彩は認められず、白木のまま利用されたのか、加工途中の未製品であるかは判然としないが、武具についても集落が保有する木製品としてここでは考えておく。

また工具の存在から、集落内で木材加工が行われていたことが伺える。ただし未製品の出土例が少ないため、木製品の製作を確実にいえる資料に乏しい。

３．蔀屋北２期の木製品（第189図）

２期も１期と同様に木製品は大溝からの出土が大半を占める。

農具では曲柄平鍬（鉄製U字刃先装着用の加工あり）、鎌柄、竪杵、エブリ、大足足板、工具では袋状鉄斧柄、紡織具では緯打具、タタリ台、容器では槽、家具では椅子、運搬具では背負子、発火具では火錐臼がみられる。

武具では鞘、鞘尻、弓、祭祀具では舟形木製品、ササラ状木製品、馬具では鞍（後輪）、船材では準構造船船体、および船の付属品であるアカ取りなどがみられる。

２期の本遺跡は、溝により各居住域が区画され、集落が本格的に成立した時期である。区画溝に方向を規制されるように建物が配置されており、計画的に集落が形成された様子がうかがえる。またこの時期にはすでに、北東・南東・南西居住域と北西・西居住域とにおいて、建物規模等に格差が看守できる。遺物には韓式系土器が多くみられ、渡来系集団が集落形成に関与したことが指摘されているとともに、馬歯・馬骨の出土、さらに鑣轡や鞍の出土により、馬の飼育を営んでいたことが指摘されている（註１）。

この時期の木製品の組成は、基本的には１期にみられる傾向を踏襲している。すなわち農具、工具、容器、家具等の日常生活に供する道具類、楽器については２期の資料はないものの、武具、祭祀具という非日常的な道具類のセットとして木製品が存在する。ただし祭祀具に武器形がみられず、舟形がみられることや、ササラ状木製品があるなど、内容的には若干の差異も認められる。また鞍（後輪）は、黒漆を塗布していること、意匠が金属装の鞍を模していることからして、馬

の飼育という日常的な実用馬具というよりは、非日常的な（祭祀的な）性格をもつことから、非日常的な道具類の中で捉えるべきものであろう。日常的な道具類と非日常的な道具類が、基本的な集落保有の木製品としてよいと考えられる。ただし、各居住域における組成については大溝出土という制約上、検討は難しい。

なお１期と同様に工具がみられることから、集落内で木材加工が行われたことが伺えるが、未製品の出土例が少ないため、やはり木製品の製作を確実にいえる資料に乏しい。その一方で準構造船の船体を井戸枠に転用している例（E調査区井戸E090805）からは、これらの工具を用いて船体の解体を行っていたことが考えられ、また集落域から多数検出されている竪穴住居や掘立柱建物の建築に際して、木材を加工したことも考えられる。

４．蔀屋北３期の木製品（第190図・第191図）

３期も前時期までと同様に木製品は大溝からの出土が大半を占め、この他に西居住域の井戸F1168、北東居住域の井戸C2549などから出土している。また後述の通り、井戸枠に転用された準構造船船体が、北東・南東・南西の各居住域から出土している。

農具では曲柄平鍬（鉄製U字刃先装着用の加工あり）、曲柄又鍬、鋤、反柄、鎌柄、横槌、木錘、目盛板がみられ、前時期にくらべて耕起、収穫、調整等の農作業の段階で使用される道具がみられるようになる。特に木錘は前時期までは認められず３期から登場する感が強い。形態的にも芯持材を用いるヨコ型で括れを持つ１類（註２）が、利用頻度が高かったものと考えられる。

工具では鉄斧柄はみられないものの、４期にも袋状鉄斧柄があることからこの時期にも存在した可能性は高い。一方この時期には工具として用いられた横槌もあり、鑿等を用いた木材加工を行っていたと想定できる。

紡織具では桛（腕木）、カセカケ（支え木）、タタリ（台）、紡錘車がみられる。緯打具はみられないものの、糸を紡ぎ、紡いだ糸を巻き取る道具が認められる。

容器には槽、指物（箱）、曲物底板がみられる。また家具には椅子脚、運搬具には背負子、発火具には火鑽臼など日常生活に供する道具類が認められる。また建築部材には枘孔のある柱材、扉など、およびこれらを転用した杭などもみられ、建築部材の転用時に廃棄された残材と考えられる蟻溝や枘孔をもつ板材や棒材（用途不明品）も前時期に比べて多く出土している。

馬具には輪鐙、祭祀具には刀形、舟形、楽器には琴板、琴柱がみられ、非日常的な道具類についてもみられるが、琴柱が認められるなど前時期と比べて内容的には若干の差異がある。

また船材では井戸枠に転用した準構造船の船体や舷側板（井戸C2549、井戸B131000、井戸A494、井戸A1501、井戸E090806）がみられる。前時期には井戸枠への転用が１基であったのが、この時期には５基に増加している。この他大溝からも舷側板や竜骨と考えられる板状の製品が出土している。また船の付属品であるアカ取りもみられる。

３期の本遺跡は、集落の最盛期をむかえ、竪穴住居や掘立柱建物が増加する時期である。溝で

区画された各居住域は、前時期にもみられる建物方位の統一性が一層強化されているとともに、建物規模等の比較からは、前時期から認められた居住域の格差について、北東居住域の他居住域に対する優位性がより一層看守できる時期でもある。

馬埋葬土坑が検出された南西居住域を中心に馬歯・馬骨の検出数も多く、この時期に大量に検出されたコップ型でタタキ目をもつ製塩土器の存在と合わせて、本遺跡において馬の飼育は盛期をむかえる。またこの時期における生駒西麓産胎土をもつU字形板状土製品や移動式カマド等の登場により、新たに再編された渡来系要素を備えた馬飼集団であることも指摘されている（註１）。

集落の最盛期を迎える３期に木製品の出土数が最も多くなることは先述したが、木製品の組成としては、農具、工具、容器、紡織具等の日常的な生活道具類と、武具がみられないものの、４期に鞘尻がみられる点を踏まえ、３期においても武具を保有していたと考えれば、祭祀具や楽器という非日常的な道具類を備える基本的な組成として、前時期までのあり方と異なることはないと言えよう。

５．蔀屋北４期の木製品（第192図）

４期もまた前時期までと同様に、木製品の大半は大溝からの出土であり、それ以外には北東居住域の土坑B130764等で出土している。

農具では直柄又鍬、曲柄平鍬、曲柄又鍬、横槌（工具への転用含む）、大足横桟、木錘、目盛板、田下駄がみられる。工具では袋状鉄斧柄、掛矢、容器では槽、盤、発火具では火鑽臼、建築部材がみられる。また武具では鞘尻、祭祀具ではササラ状木製品、楽器では琴板、琴柱がみられる。

船材では舷側板がみられるが、この時期には船体を枠に転用した井戸がみられない。

４期の本遺跡は、前時期に比べ竪穴住居や掘立柱建物の数が減少し、集落としては停滞ないしは規模縮小していると考えられる。木製品の検出数が３期と５期の間で数を減らしていることは、この時期の集落規模の縮小と整合的である。

木製品の組成としては、農具、工具、容器等の日常生活に供する道具類、武具、祭祀具、楽器という非日常的な道具類のセット関係は維持されている。ただし祭祀具には武器形や舟形がみられないという内容的な差異が認められる。

６．蔀屋北５期の木製品（第193図・第194図）

４期まで、木製品の出土遺構が大溝であったのに対し、５期の木製品の出土はその大半が、北東居住域の井戸D474からである。他に北東居住域の溝C2276等から出土しているが小数であり、大溝の埋没後に形成された谷地形からも出土はほとんどない。

農具では、曲柄平鍬、一木鋤（未製品）、エブリ、大足（横桟・横枠・足板）、木錘、目盛板がみられる。容器では、槽（大型）、舟形容器、曲物側板・底板がみられる。３～４期にみられた全長30～40㎝程度の一般的な槽は５期ではみられなくなる。それに変わるように曲物側板が登

場しており興味深い。ただし曲物底板については１期・３期などにも存在しており、曲物自体は一定使用されてきたようである。紡織具ではカセカケ（支え木）、緯打具、タタリ（軸部）がみられる。建築部材には横架材を転用した梯子などがみられる。

祭祀具では刀形、斎串がみられる。とくに斎串は井戸出土の一括資料であるが、前時期までにはほぼみられなかったものであり、５期に登場するものとして理解してよいであろう。

服飾具では下駄がみられる。４期に田下駄が存在したが、歯を作り出すいわゆる下駄は５期に登場する。大溝や北東居住域内の溝から出土している。

その他船材としては船体や舷側板等の明確な部材はないもののアカ取り、櫂未製品がみられる。

５期の本遺跡は４期における集落の停滞・縮小傾向から転じて、竪穴住居や掘立柱建物等の遺構の数が再び増加し盛期をむかえる。とくに前時期まで集落規模等で優位性を保っていた北東居住域では、竪穴住居がみられなくなり、建物は比較的規模の大きな掘立柱建物（住居）および総柱の掘立柱建物（倉庫）のみで構成されるようになる。他の居住域は竪穴住居および総柱の掘立柱建物（倉庫）で構成される居住域であり、明らかに北東居住域が集落として他より卓抜する様子が看守される。

一方韓式系土器はほとんど土師器化しており、新たな渡来系の要素が把握しにくい状況となる。また馬歯・馬骨については前時期までと比べ減少しているものの一定検出されており、馬の飼育にある程度関与した集落であることはいえよう。

木製品は先述のとおり、他の居住域よりも優位性をもっている北東居住域の井戸から出土したものが大半であるため、居住域を越えた遺跡全体の傾向であるとは言いにくい。

日常的な道具類については、工具がみられないものの、農具未製品や建築部材の転用がみられることから、集落内において工具を用いた木材加工は行われていたと解することが可能であり、農具、容器、紡織具等を含め、前時期までのあり方を踏襲しているということができる。ただし容器については、一般的な槽がみられず曲物がみられるようになる。

一方で非日常的な道具類については、武器形、斎串の祭祀具のみとなり楽器、武具が欠落する。特に斎串については、５期に本遺跡に登場する新たな祭祀具として捉えてよい。祭祀のあり方に変化が生じたことを示していると考えられる。

また武具および楽器が伴わなくなる点については、弥生・古墳時代の出土木製品の組成と集落の階層性について検討した樋上昇氏によれば、一般集落ａ（竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落）に対して、それよりは劣位にある一般集落ｂ（竪穴建物のみで構成される集落）では武器・楽器が木製品の組成から欠落し、本稿でいう祭祀具を含めた「日常生活の道具」しか出土しないと指摘されている（樋上2010）。

５期の木製品の組成を本遺跡の集落全体の傾向として捉えた場合、武器・楽器の欠落という現象は、４期から５期への移行の中で、集落の相対的な位置関係が低下したと解することもできる。一方で北東居住域における傾向として捉えた場合、掘立柱建物（しかも大型を含む）のみで構成

されている北東居住域は、上記の一般集落には当てはまらず、むしろ首長居住空間に近い性格という理解になるため、５期におけるこの現象については、他の遺跡における集落構成と出土木製品の組成について、別の検討を行い、それを理解する必要が出てこよう。

７．おわりに

以上、蔀屋北１～５期における本遺跡の出土木製品について居住域のあり方を踏まえて検討してきた。１～４期については、木製品の組成として、内容の差異がみられる部分もあるが、基本的には農具、工具、容器、紡織具等の日常生活に供する道具類と、それらに対して非日常的な道具である武具・楽器・祭祀具がセットとして集落で保有される状況を確認することができた。

前項の樋上氏による出土木製品の組成と集落の階層性についてのモデルによれば、威儀具としてサシバ形木製品（奈良県立橿原考古学研究所付属博物館2000）や蓋（鏡板）も存在しているものの、１～４期の本遺跡は一般集落ａの木製品のあり方に類似していると言える（樋上2010）。ただし北東居住域については、特に２～４期において他の居住域と比べ建物規模等において卓抜しており、一般集落ａの中でも大型掘立柱建物や方形区画を有する首長居住空間に近しい集落構成として理解することができるかもしれない。

この時期は「河内の馬飼」と称されるように、渡来系集団の強い関与による馬の飼育が行われていた。馬歯・馬骨に加えて輪鐙や木製鞍がそれを直接示す木製品であるが、上記の木製品の組成のあり方について、渡来系要素を抽出するまでには至らず今後の課題として残される。むしろこの木製品の組成のあり方（特に刀剣装具などの武具、琴などの楽器、威儀具が本稿でいう非日常的な道具の組成として存在すること）は弥生時代以来、歴史的に形成されてきた事象として理解できる（樋上2010）。

５期については、その項で述べたとおり、前時期と比べて武器・楽器が組成から欠落することについて、遺跡全体の評価とするならば、集落全体の相対的な位置が低下する可能性を踏まえつつ、北東居住域の集落構成と木製品のあり方については、今後他の遺跡の状況とあわせさらに検討を行うこととしたい。

註１　「蔀屋北Ⅰ」総括・分析編の第１章「蔀屋北遺跡古墳時代出土土器と遺構の検討」による。

註２　「蔀屋北Ⅰ」総括・分析編の第２章第６節「木製品」による。

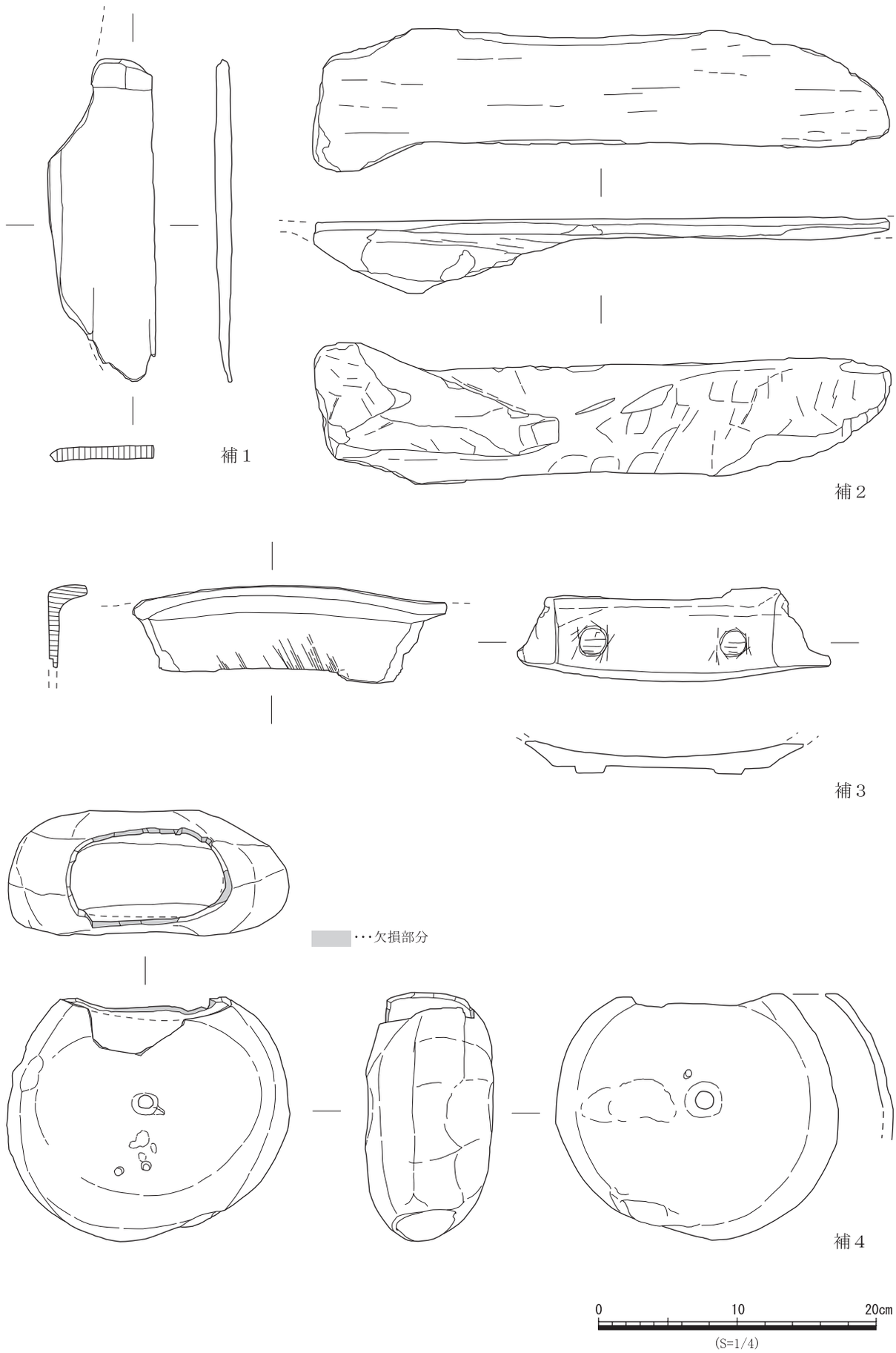
【引用・参考文献】

橿原考古学研究所付属博物館　2000　『権威の象徴－古墳時代の威儀具－』

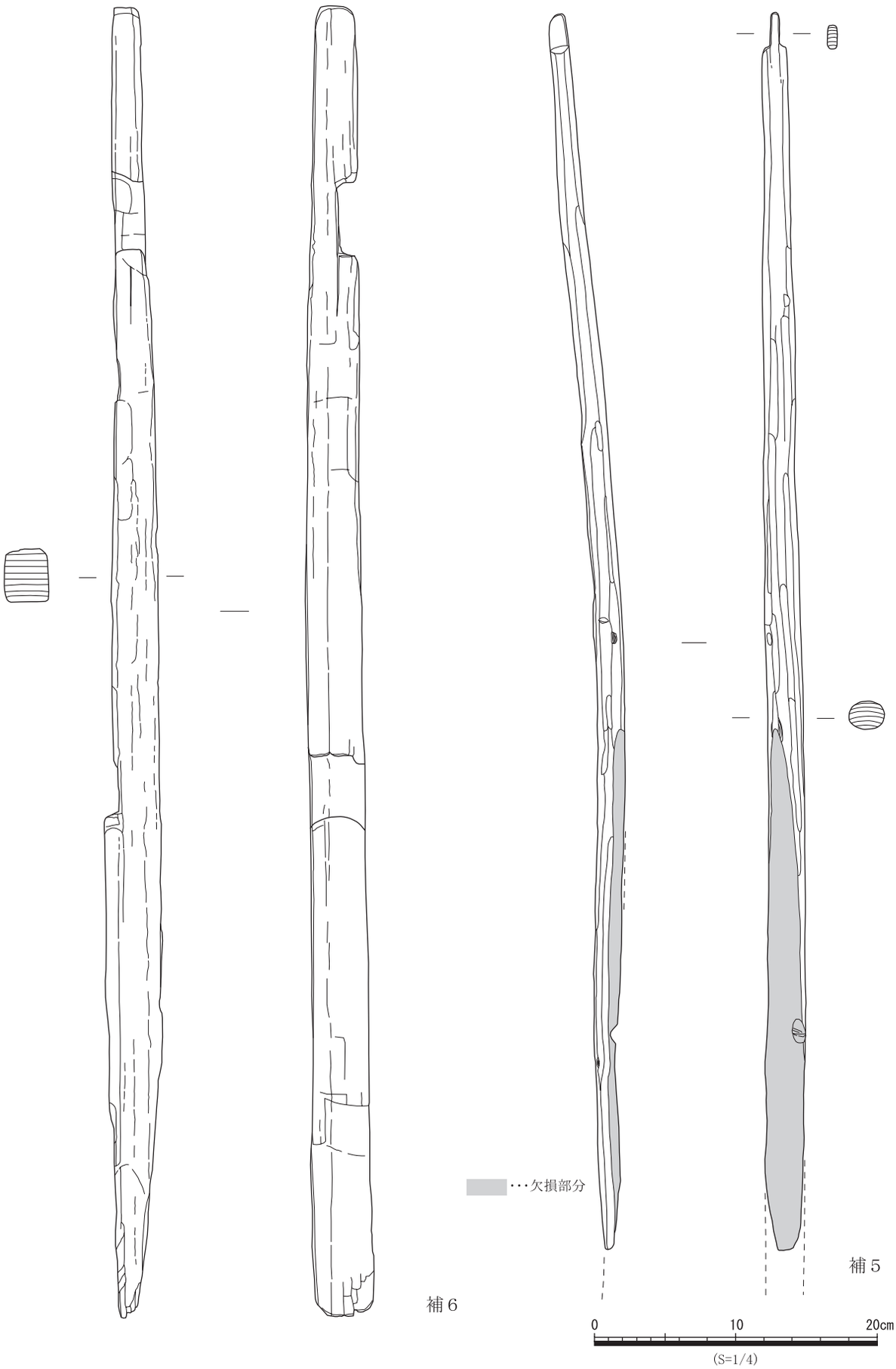
奈良文化財研究所　1993　『木器集成図録近畿原始篇』

樋上昇　2010　『木製品から考える地域社会－弥生から古墳へ－』雄山閣

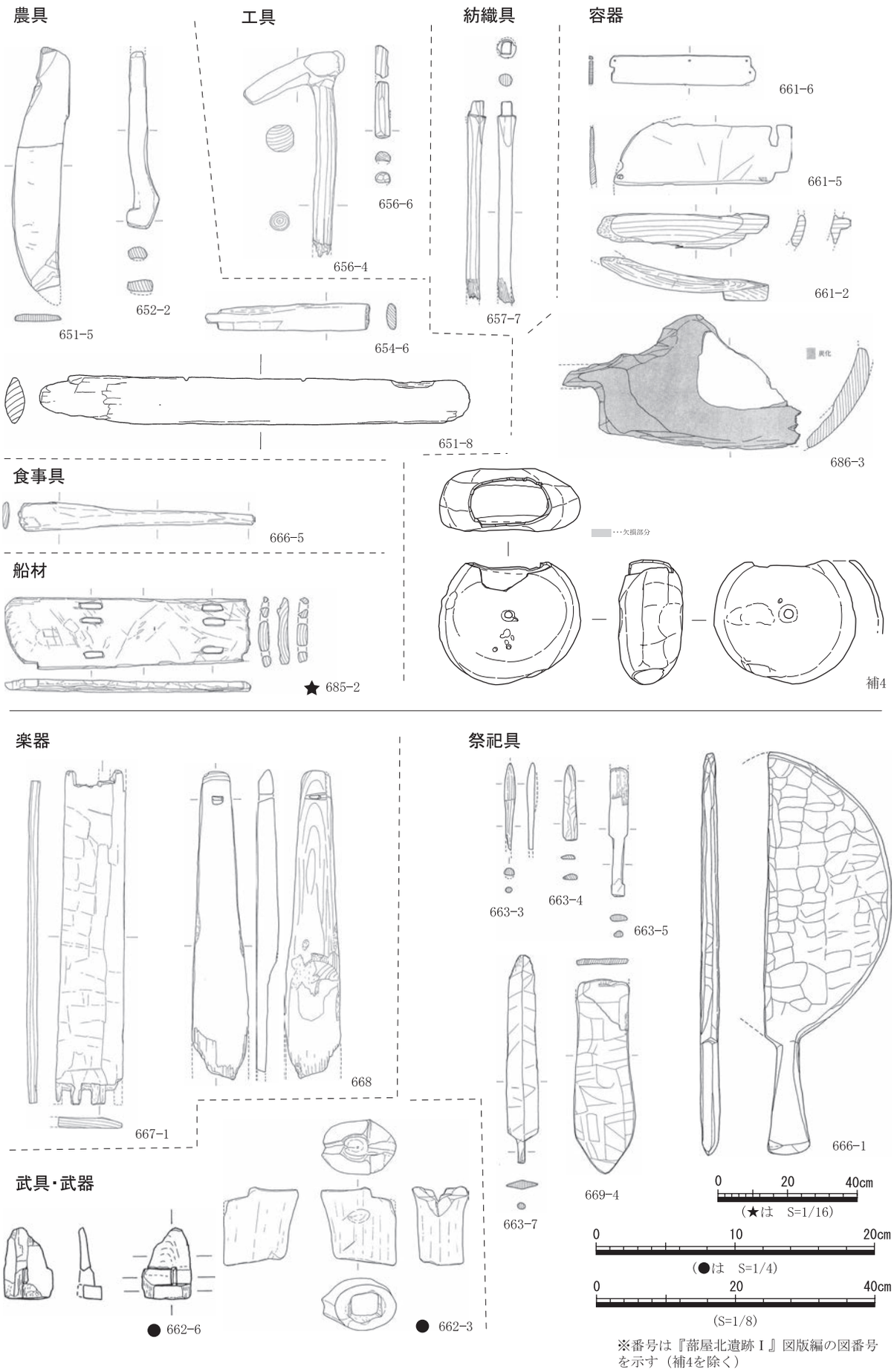
穂積裕昌　2000　『六大A遺跡発掘調査報告書（木製品編）』三重県埋蔵文化財調査報告115－17



第186図　蔀屋北遺跡出土木製品（補足１）

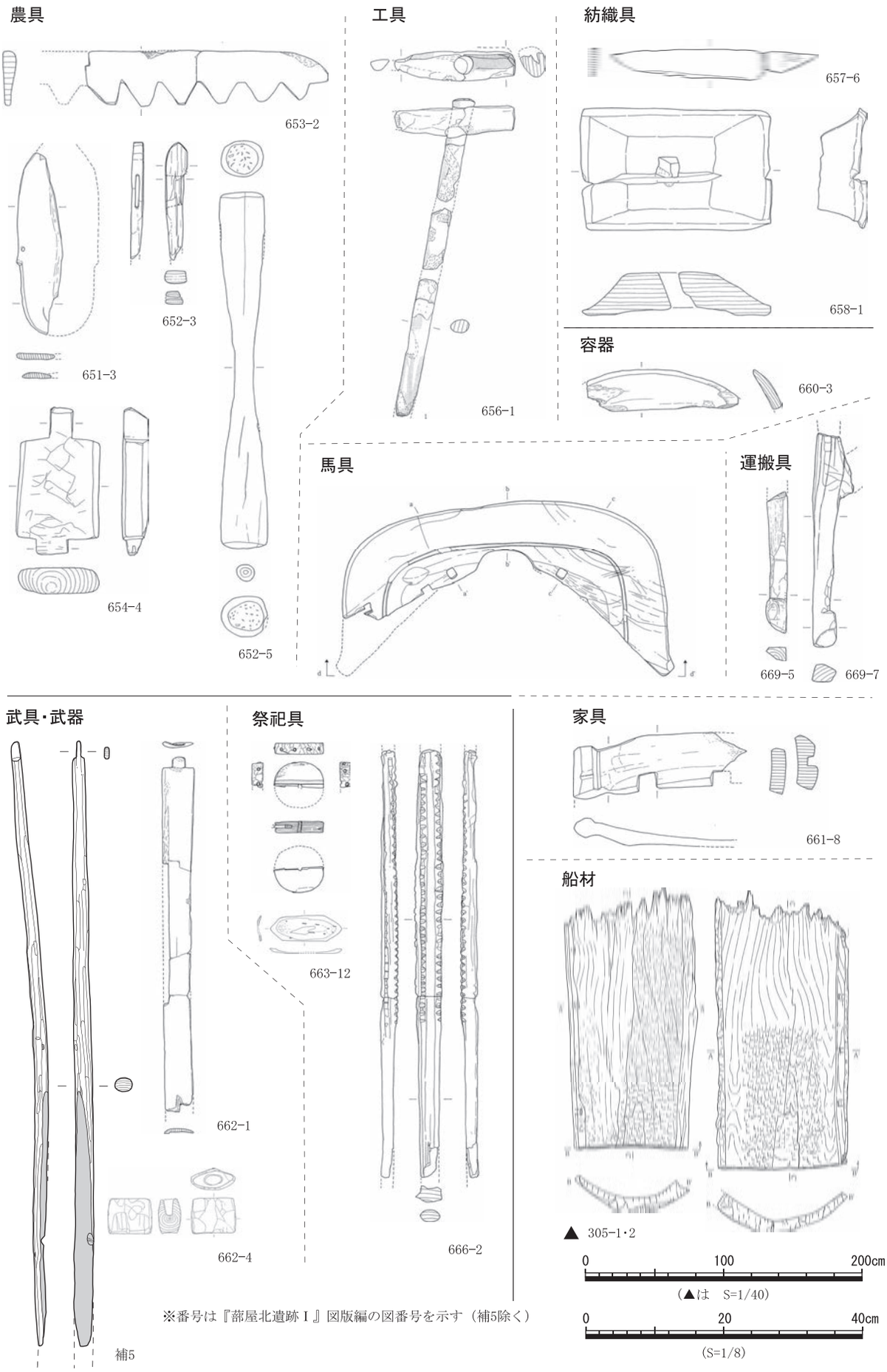


第186図　蔀屋北遺跡出土木製品（補足２）



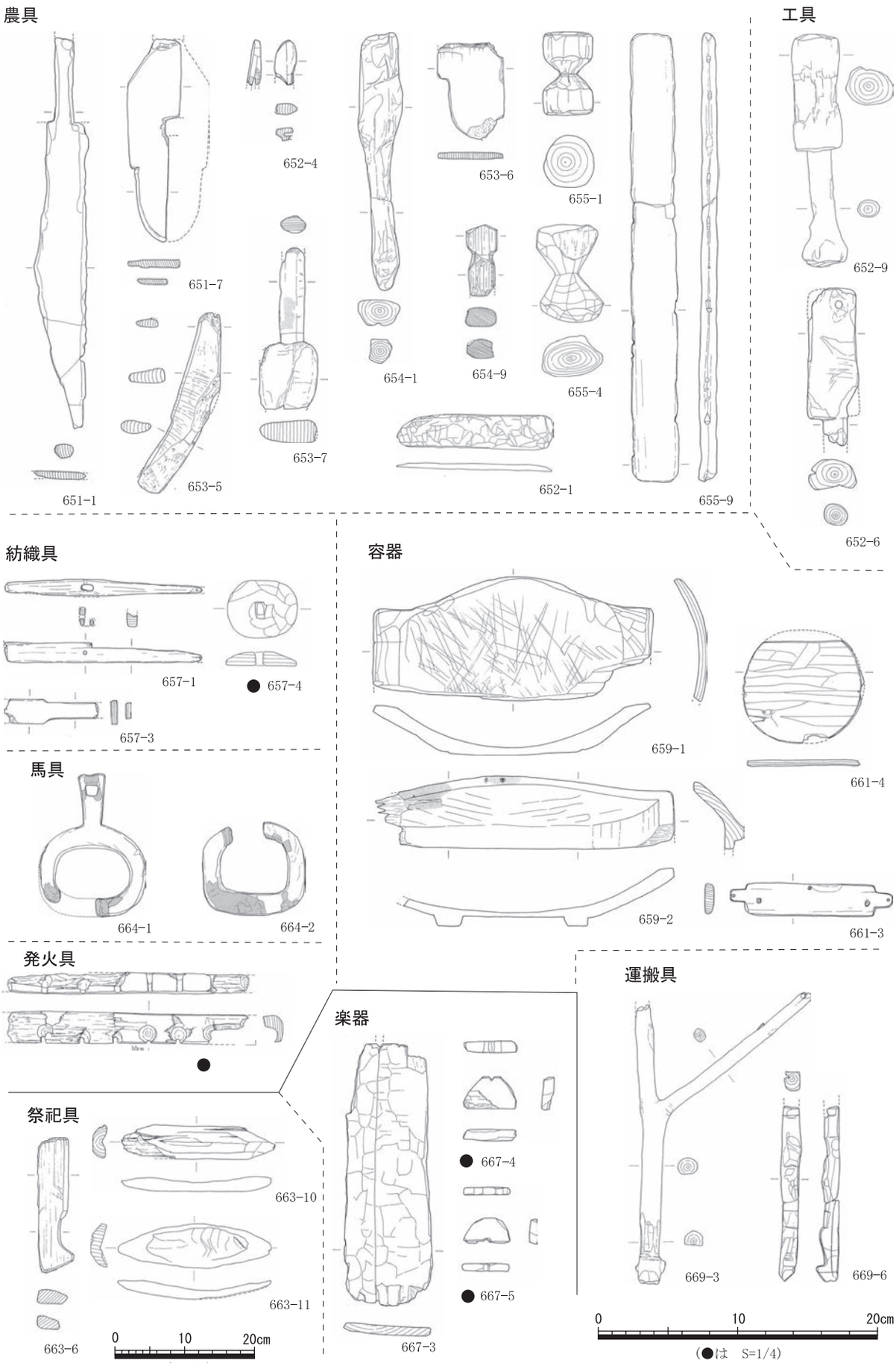
※番号は『蔀屋北遺跡Ⅰ』図版編の図番号を示す（補4を除く）

第188図　蔀屋北１期の木製品



※番号は『蔀屋北遺跡Ⅰ』図版編の図番号を示す（補5除く）

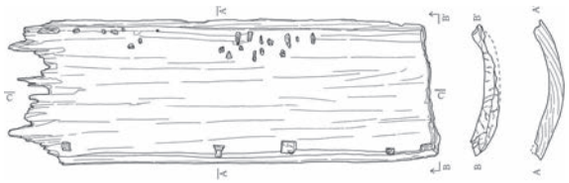
第189図　蔀屋北２期の木製品

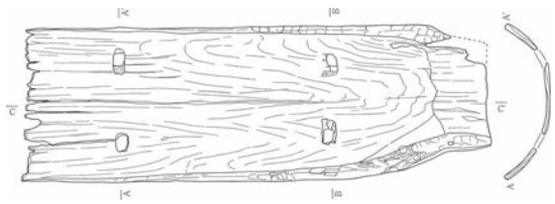


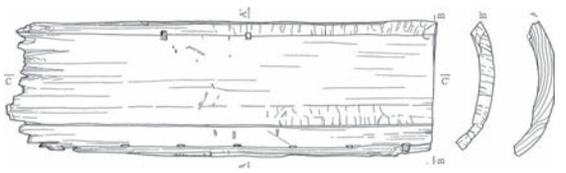
※番号は『蔀屋北遺跡Ⅰ』図版編の図番号を示す

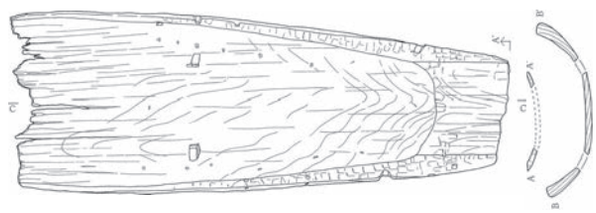
第190図　蔀屋北３期の木製品・１

船材

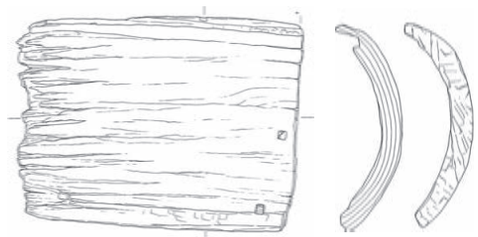

307

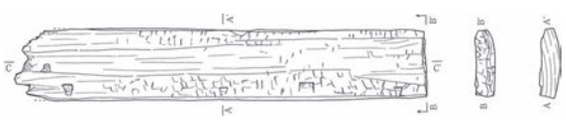

137-2


306-1


137-1

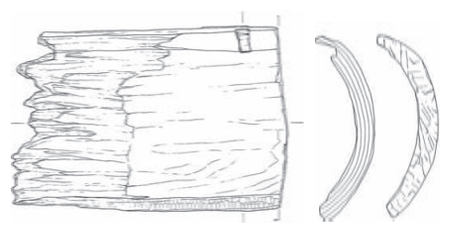
306-2


135-3


306-3

132-4

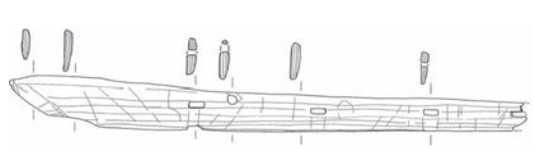
132-5


135-2

132-3

132-1

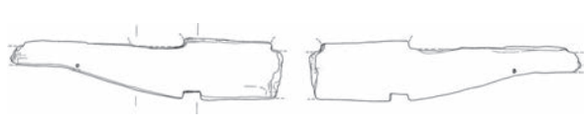
132-2


★ 671-2

漁撈具

670-2

0 10 20cm
(S=1/8)

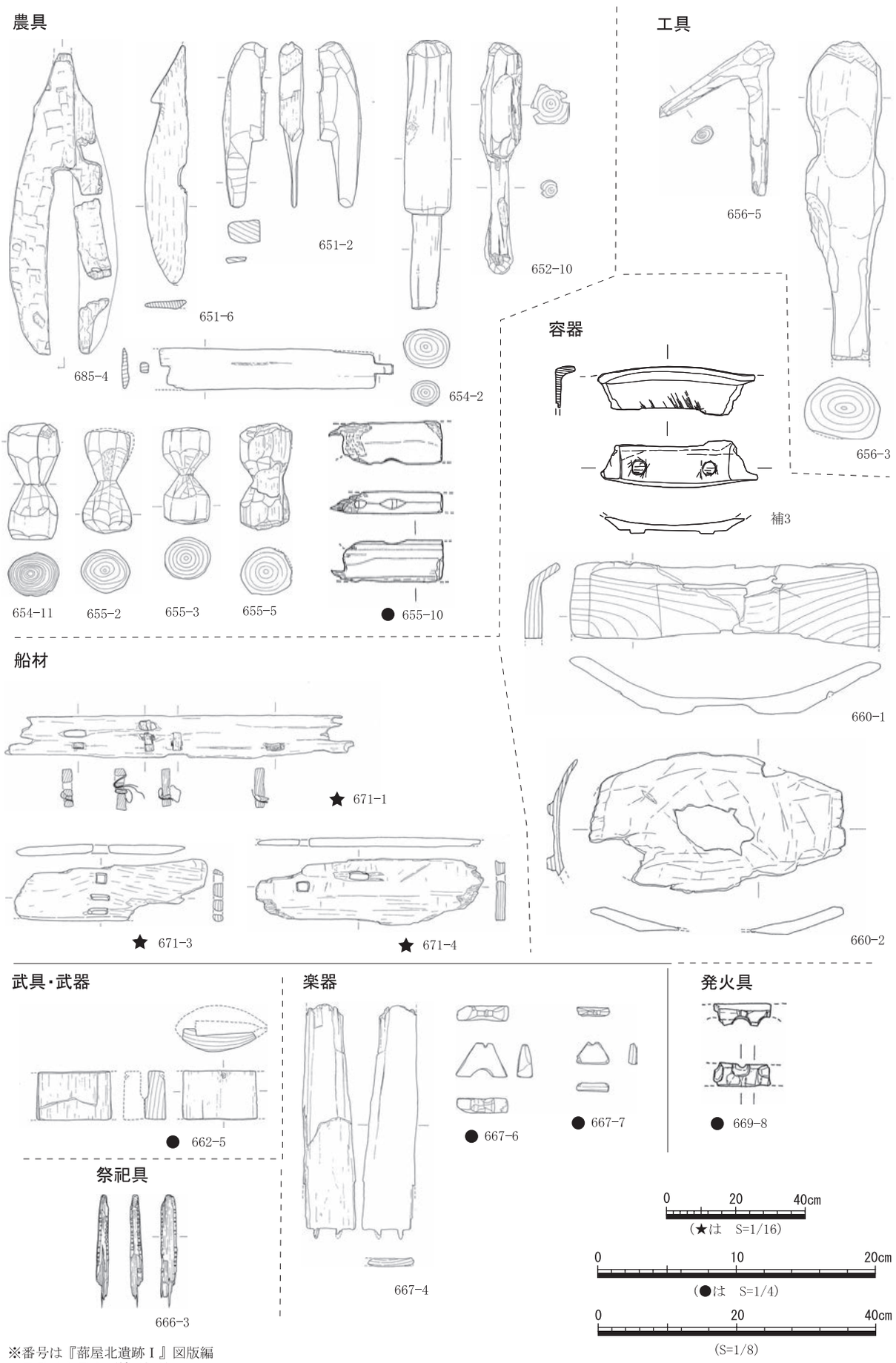

★ 671-6

0 20 40cm
(★は S=1/16)

0 100 200cm
(S=1/40)

※番号は『蔀屋北遺跡Ⅰ』図版編の図番号を示す

第191図　蔀屋北３期の木製品・２



※番号は『蔀屋北遺跡Ⅰ』図版編の図番号を示す（補3除く）

第192図　蔀屋北４期の木製品

農具

653-1

680-9

680-3

680-7

680-4

651-4

680-5

680-8

680-6

681-8

左より681-1～6

紡織具

657-10

679-4

容器

★ 682-7

★ 682-1

服飾具

669-2

682-2

686-1

669-1

0 20 40cm

（★は　S=1/16）

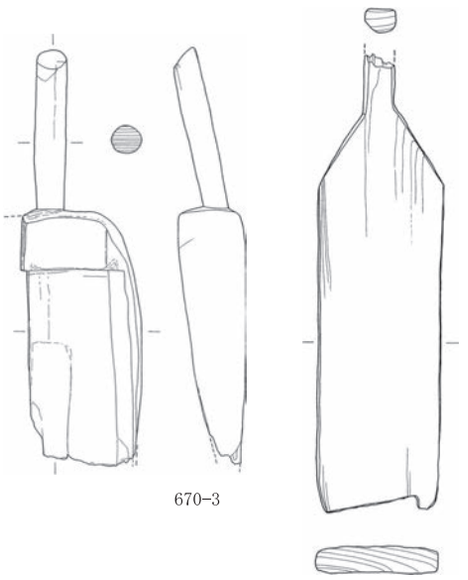
0 20 40cm

(S=1/8)

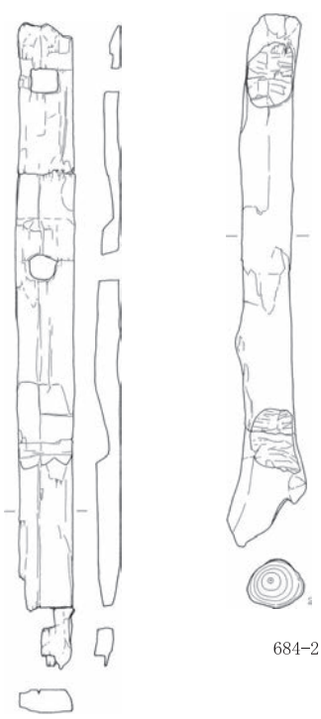
※番号は『蔀屋北遺跡Ⅰ』図版編の図番号を示す

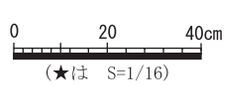
第193図　蔀屋北５期の木製品・１

漁撈具



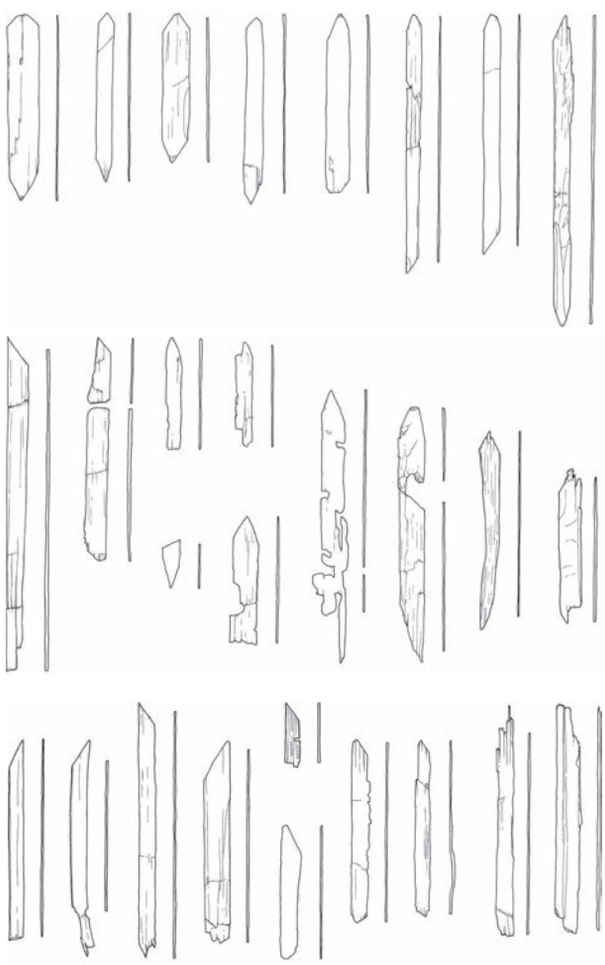
建築部材

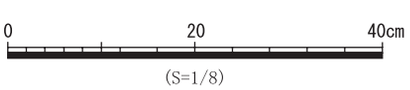




（★は　S=1/16）

祭祀具





(S=1/8)

※番号は『蔀屋北遺跡Ⅰ』図版編の図番号を示す

第194図　蔀屋北５期の木製品・２

第４章　分析

１．蔀屋北遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析

１．はじめに

須恵器のように高温で焼成する土器では胎土中に含まれる鉱物は破壊されている場合が多く、胎土研究には顕微鏡観察による鉱物分析よりも、元素分析のほうが有効な場合が多い。ただ、須恵器の産地問題を研究するためには、全国共通に地域差を示す元素を見つけ出しておくことが必要である。そのために、完全自動式の装置による蛍光Ｘ線分析が圧倒的に有利である。全国各地の窯跡出土須恵器や花崗岩類が大量に分析された。その結果、母岩を構成する最も重要な造岩鉱物である長石類に由来するとみられるK，Ca、Rb、Srの４元素が有効に地域差を示すことが実証された。地域差は通常、Ｋ－Ca、Rb－Srの両分布図上に目に見える形で表示される。環太平洋火山帯の一角を占める日本列島の地質の基盤を構成する岩石は花崗岩類である。各地の花崗岩類も両分布図上で地域差を示すことが実験的に証明されている。花崗岩類に比べて、窯跡出土須恵器の地域差は小さいので、両分布図上で地域差があることを確認した上で、データ解析に入る。

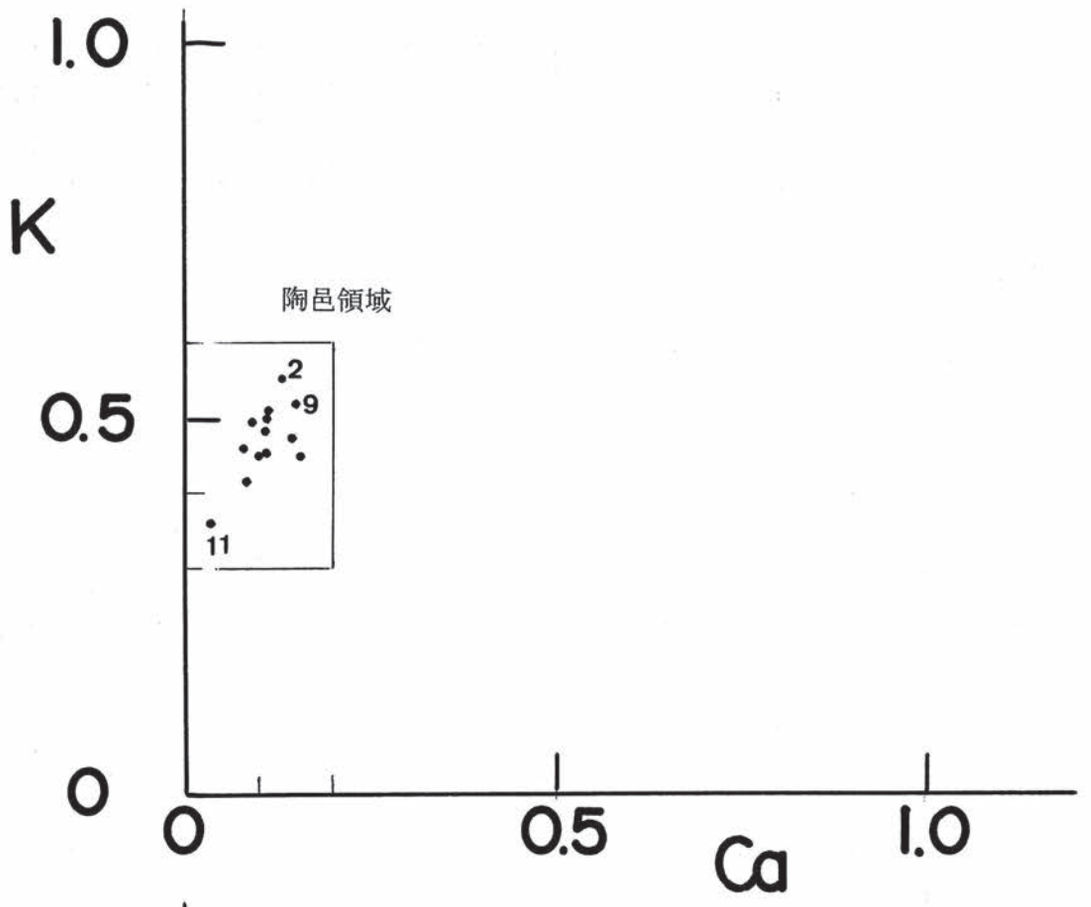
古墳時代の最大の須恵器生産地である和泉陶邑には５世紀代、６世紀代には100基を超える窯跡が発見されている。Ca、Srが比較的少ないという特徴を持っている。今回分析した須恵器もまず、陶邑的特徴を持っているかどうかを確認する作業から開始された。ついで、朝鮮半島の伽耶地域の窯との間で２群間分析を行い、今回分析した須恵器が陶邑産か、それとも、伽耶地域からの搬入品かという２群間判別分析を行った。

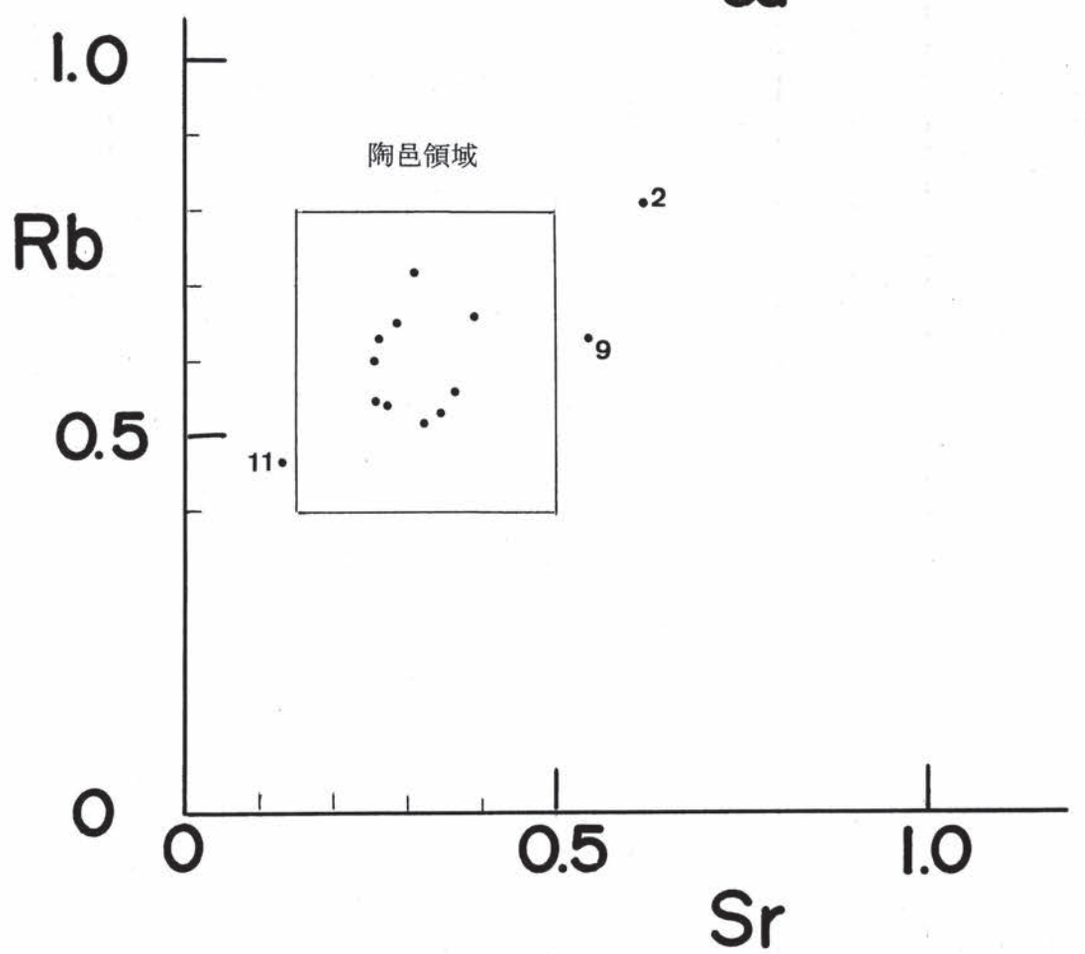
２．分析法

須恵器資料は表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で、100メッシュ以下に粉砕された。粉末資料は塩化ビニル製リングを枠にして、電動プレッサーで高圧をかけプレスし、内径20㎜、厚さ5㎜の錠剤資料を作成して、蛍光Ｘ線分析用の試料とした。

蛍光Ｘ線分析には理学電機製RIX2100（波長分散型）を使用した。使用Ｘ線管球はRh管球（3.0㎾）であり、使用条件は50㎸、50㎃である。この条件で須恵器中の微量元素Rb、Srは十分定量分析できることが確認されている。この装置はＴAP、Ge、LiFの３枚の分光結晶とガスフロー比例計数管とシンチレーションカウンターが装填されており、コンピュータの制御によって、完全自動分析ができる装置である。また、この装置には同時に50試料が搭載できる自動試料交換機が連結されており、完全自動分析が可能である。土器類の生産と供給問題の研究には大量の土器試料の分析処理が必要であり、このタイプの蛍光Ｘ線分析装置は不可欠である。現在、このタイプの蛍光Ｘ線分析装置は大阪大谷大学と鹿児島国際大学にしか設置されていない。

分析値は同じ日に測定された岩石標準試料ＪＧ－１による標準化値で表示された。この表示法がデータ解析には便利であり、有効である。必ずしも、岩石研究におけるように、％やppm表示





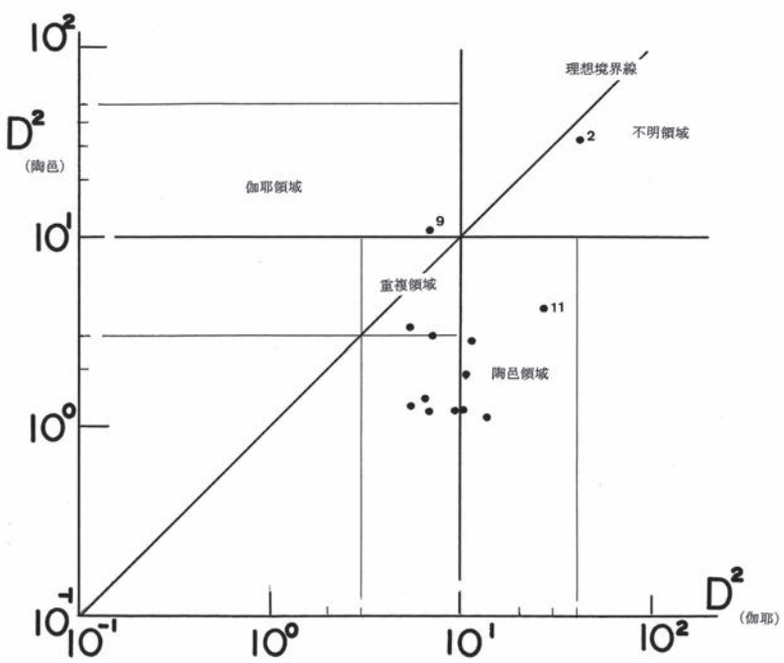
第195図　蔀屋北遺跡出土須恵器の両分布図

する必要はない。この点が岩石学研究と土器の胎土の地域差に関する分析化学研究との違いである。

３．分析結果

分析結果は表17にまとめられている。この結果に基づいて、まず、両分析図を作成した。その結果を第195図に示す。この図には多数の陶邑産須恵器の分析値を殆ど包含するようにして、陶邑領域を描いてある。この領域は定性的にしか領域を示さないが、比較対照する上には有効である。第195図から、両分布図で今回分析した殆どの試料は陶邑領域に分布し、陶邑産の須恵器であることを示している。ただ、№２、９、11の３点の試料はRb－Sr分布図で陶邑領域をずれるので、K、Ca、Rb、Srの４因子を使った判別分析で陶邑に帰属するかどうかを確認する必要がある。

第196図には伽耶群と陶邑群間の判別図上で今回分析した試料をプロットした結果を示してある。両軸にとったD^2（陶邑）、D^2（伽耶）はそれぞれ、陶邑群、伽耶群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値であり、K、Ca、Rb、Srの分析値を使って計算された。５％危険率をかけたホテリングのT^2検定に合格する条件はD^2（母集団）＜10であった。これが母集団に帰属するための必要条件である。また、実際に両母集団の試料をこの判別図にプロットして、十分条件も求められた。その結果、第196図ではそれぞれ、陶邑領域と伽耶領域が設定された。第196図より、№２と№９の２点は陶邑領域をずれることがわかる。判定結果は表17にも示されている。D^2（陶邑）＜10の陶邑への帰属条件を満足しないのは、№２、９であることがわかる。しかし、これら２点の試料のうち、№２は伽耶群への帰属条件も満足しておらず、産地不明となった。ただ、№９はD^2（陶邑）＜10を満足しなかったが、伽耶群への帰属条件は満足しており、伽耶産の可能性も考えられる資料である。№２のみは陶邑産の可能性は少ない。土器型式を再度点検することが必要である。



第196図　蔀屋北遺跡出土須恵器の産地推定（K、Ca、Rb、Sr）

表18　蔀屋北遺跡出土須恵器の分析データ

No.	三辻研No.	報告書挿図No.	出土場所	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(陶邑)	D^2(伽耶)	推定産地
1	22-245	144-12	流路K1－08013	坏蓋	0.475	0.144	2.04	0.658	0.388	0.198	1.2	6.8	陶邑
2	22-246	144-13	流路K1－08013	坏蓋	0.554	0.132	1.61	0.811	0.616	0.259	32.5	40.5	不明
3	22-247	144-9	流路K1－08013	坏蓋	0.454	0.155	2.06	0.559	0.36	0.232	1.4	6.3	陶邑
4	22-248	144-11	流路K1－08013	坏蓋	0.454	0.106	2.67	0.543	0.271	0.149	1.2	9.4	陶邑
5	22-249	144-5	流路K1－08013	坏蓋	0.479	0.109	2.08	0.72	0.307	0.18	2.8	11.2	陶邑
6	22-250	144-31	流路K1－08013	高坏	0.457	0.077	2.25	0.631	0.262	0.093	1.2	10	陶邑
7	22-251	138-10	土坑K1－10144	坏身	0.496	0.085	2.57	0.517	0.324	0.241	3	7.1	陶邑
8	22-252	138-8	土坑K1－10144	坏蓋	0.496	0.111	2.36	0.533	0.399	0.258	1.3	5.4	陶邑
9	22-253	138-22	土坑K1－10144	甕	0.523	0.153	2.14	0.63	0.541	0.264	10.6	6.7	不明
10	22-254	142-34	土坑K1－10003	坏蓋	0.416	0.08	2.16	0.597	0.255	0.166	1.1	13.7	陶邑
11	22-255	142-32	土坑K1－10003	坏身	0.363	0.029	3.24	0.467	0.13	0.069	4.1	26.7	陶邑
12	22-256	142-45	土坑K1－10003	壷	0.51	0.111	2.56	0.564	0.28	0.262	3.3	5.3	陶邑
13	22-257	144-11	流路K1－08013	坏蓋	0.451	0.105	2.68	0.545	0.255	0.145	1.9	10.5	陶邑

蔀屋北遺跡出土・土器・土製品・石製品観察表

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
34	121	1	縄文土器	A19		—	K1	流路	15001		縦4.3 横4.4 厚0.8	内・外・断：10YR5/2	密 焼成良 口縁部の小片	突帯文土器
34	121	2	縄文土器	A19		—	K1	流路	15001		縦4.5 横4.2 厚0.5	内・外・断：2.5Y3/2	密 焼成良 口縁部の小片	突帯文土器
34	121	3	縄文土器	A19		—	K1	流路	15001		縦4.6 横4.8 厚0.7	内・外・断：10YR6/3	粗 焼成良 口縁部の小片	突帯文土器
34	121	4	縄文土器	A19		—	K1	流路	15001		縦4.3 横4.4 厚0.8	内・外・断：2.5Y3/2	密 焼成良 口縁部の小片	突帯文土器
34	121	5	縄文土器	A19		—	K1	流路	15001		縦5.7 横3.6 厚0.6	内・外・断：10YR5/2	密 焼成良 口縁部の小片	突帯文土器
34	121	6	縄文土器	A19		—	K1	流路	15001		縦3.3 横4.2 厚0.6	内・外・断：10YR5/2	密 焼成良 体部の小片	突帯文土器
34	121	7	弥生土器壺	A19		—	K1	流路	15001		推14 残6.5	内・外・断：10YR4/1	密 焼成良 口30%	遠賀川式土器
34	121	8	弥生土器鉢	A19		—	K1	流路	15001		縦4.5 横6.7 厚0.8	内・外・断：7.5YR6/3	密 焼成良 口縁部の小片	遠賀川式土器
34	121	9	弥生土器甕	A19		—	K1	流路	15001		底8.2 残7.1	内・外・断：2.5Y6/2	粗 焼成良 底部完存	遠賀川式土器
	121	10	弥生土器壺	A19	d1・d2・ e1・e2	—	K1	竪穴住居	12122		推19.2 残5	内：10YR7/2 外：10YR6/2	密 焼成良 口10%以下	
	121	11	弥生土器甕	A19	d1・d2・ e1・e2	—	K1	竪穴住居	12122		推20 残6.3	内：2.5Y7/1 外：2.5Y7/2	密 焼成良 口体10%	
	121	12	弥生土器甕	A19	d1・d2・ e1・e2	—	K1	竪穴住居	12122		推15 残5	内：10YR6/2 外：10YR3/2～1.7/1	密 焼成良	
	121	13	弥生土器甕	A19	d1・d2・ e1・e2	—	K1	竪穴住居	12122		底6 残4.1	内・外：7.5YR4/1	密 焼成良 底部完存	
	121	14	弥生土器甕	A19	d1・d2・ e1・e2	—	K1	竪穴住居	12122		底5.1 残4.1	内：N2/0 外：2.5Y7/2～2/1	密 焼成良 底部完存	
	121	15	弥生土器壺	A19		—	K1	土坑	12105		底6.2 残11.9	内：5YR3/1 外：5YR1.7/1　5YR6/4	粗 焼成良 20%	
	121	16	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	12014		推17.4 残7	内：7.5YR6/3 外：N1.5/0	密 焼成良 口体の一部	
	121	17	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	12014		推19 残14.2	内：10YR7/2 外：10YR4/1～1.7/1	密 焼成良 30%	
	121	18	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	12014		底5.8 残15.3	内・外：10YR4/3～2/1	密 焼成良	
	121	19	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	12014		底6.6 残11.5	内・外：10YR6/2	密 焼成良	
	121	20	弥生土器壺	A19		—	K1	溝	12008		推19 残15.2	内：10YR8/2 外：10YR4/1	密 焼成良	
35	121	21	弥生土器壺	A19		—	K1	溝	12008			内：2.5Y7/2 外：2.5Y7/3～3/2	密 焼成良 体部上半の破片	
	121	22	弥生土器甕	A19		—	K1	溝	12008		底6.8 残6.2	内：10Y7/2 外：5YR7/3	密 焼成良 底部のみ	
	121	23	弥生土器鉢	A19		—	K1	溝	12009		推13 残4	内：2.5Y5/1 外：2.5Y4/1 断：2.5Y6/3～2.5YR4/1	密 焼成良	
	121	24	弥生土器甕	A19	e3	—	K1	溝	12015		20 残14.5	内：10YR5/1 外：10YR7/3 断：10YR7/1～2.5YR6/3	密 焼成良 口体60%	
35	122	1	弥生土器壺	A19		—	K1	竪穴住居	11034		推27 残12.7	内：10YR6/2 外：10YR7/2～5/2 断：10YR6/2	密 焼成良	
	122	2	弥生土器壺	A19		—	K1	竪穴住居	11034		底6.6 残4	内：5Y5/1 外：2.5Y6/2	粗 焼成良	
	122	3	弥生土器甕	A19		—	K1	竪穴住居	11034		推13.2 残2	内・外：10YR7/2～3/1	密 焼成良 口縁部の一部	
	122	4	弥生土器甕	A19		—	K1	竪穴住居	11034		推12.9 残7	内・外：2.5Y7/2	密 焼成良 口縁部の一部	
35	122	5	弥生土器甕	A19	e2・e3	—	K1	竪穴住居	11060		15.4 26	内：5YR6/4 外：7.5YR8/1 断：N2/0	密 焼成良 80%	
	122	6	弥生土器壺	A19	d3・e3	—	K1	方形周溝墓	11010		推34.8 残2.9	内・外：10YR5/3	密 焼成良 口縁部の一部	
35	122	7	弥生土器壺	A19	d3・e3	—	K1	方形周溝墓	11010		推底6.4 残5.2	内・外：2.5Y7/2	密 焼成良 底部の一部	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
35	122	8	弥生土器壺	A19	d2	—	K1	土坑	11031		底5.1 残2.5	内：N2/0 外：10YR6/3	密 焼成良 底部	
	122	9	弥生土器甕	A19	d2	—	K1	土坑	11031		推15.8 残3.5	内：10YR8/2 外：10YR7/3～1.7/1	粗 焼成良 口縁部の一部	
35	122	10	弥生土器甕蓋	A19	d2	—	K1	土坑	11031		推20.2 残5.1	内：5YR3/2～N2/0 外：5YR3/2～2/1	密 焼成良 口縁部の一部	
	122	11	弥生土器壺	A19	e2	—	K1	土坑	11051		14 残11.2	内・外：5Y8/1	密 焼成良 口頸部完存	
	122	12	弥生土器壺	A19	e2	—	K1	土坑	11051		19.6 残10.7	内・外2.5Y7/2	密 焼成良 口縁部完存	
	122	13	弥生土器水差し	A19	e2	—	K1	土坑	11051		9.8 23.7	内：5Y6/1 外：2.5Y6/1 断：2.5Y7/1	密 焼成良 80%	
	122	14	弥生土器甕	A19	e2	—	K1	土坑	11051		推10.4 残14	内：10YR6/2～4/2 外：10YR7/2	密 焼成良 50%	
	122	15	弥生土器甕	A19	e2	—	K1	土坑	11051		16.4 20.8	内：7.5YR6/1～1.7/1 外：5YR6/6	密 焼成良 90%	
	122	16	弥生土器甕	A19	e2	—	K1	土坑	11051		5.6 残12.2	内：10YR7/3 外：10YR71.7/1	密 焼成良 25%	
	123	1	弥生土器壺	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推14.8 残9	内・外：2.5Y5/2	粗 焼成良 頸部の一部	
	123	2	弥生土器甕	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推12.8 残6	内・外：10YR7/3	密 焼成良 口縁部の一部	
	123	3	弥生土器甕	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推13.6 残9.6	内：10YR7/3 外：10YR6/2 断：10YR7/2	密 焼成良 50%	
	123	4	弥生土器甕	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推13.6 残8.2	内：10YR5/3 外：10YR6/2 断：7.5YR6/3	やや粗 焼成良 30%	
	123	5	弥生土器甕	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推15.8 残7	内：7.5YR6/3～2/1 外：N2/0	密 焼成良 口縁～体部の一部	
	123	6	弥生土器甕	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推14 残4.7	内：10YR7/2～5/2 外：2.5Y5/2～2/1	密 焼成良 口縁部の一部	
	123	7	弥生土器鉢	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推15 残5.5	内：10YR4/1 外：10YR4/3 断：10YR4/1	やや粗 焼成良 30%	
36	123	8	弥生土器鉢	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11052		推17.8 9.6	内・外：2.5Y6/2～2/1	密 焼成良 70%	
	123	9	弥生土器甕蓋	A19	d3・e2	—	K1	土坑	11058		推底13 2.7	内・外：10YR6/2～1.7/1	密 焼成良 25%	
36	123	10	弥生土器甕	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		推10.4 18.6	内・外：10YR4/1～1.7/1	密 焼成良 50%	
36	123	11	弥生土器甕	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		12.2 残10.1	内：10YR7/2～2/1 外：5YR6/3～3/1	密 焼成良 50%	
	123	12	弥生土器甕	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		推13.4 残8	内・外：2.5YR5/6～1.7/1	密 焼成良 25%	
	123	13	弥生土器甕	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		推18.8 残14	内・外：10YR4/1	密 焼成良	
	123	14	弥生土器甕	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		推17.2 残4.8	内：7.5YR6/4 外：N2/0	密 焼成良 口縁部の一部	
	123	15	弥生土器甕	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		推14.6 残2.8	内：10YR4/1 外：10YR6/3～2/1	密 焼成良 口縁部の一部	
	123	16	弥生土器甕	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		底6 残4.8	内・外：10YR5/2～1.7/1	粗 焼成良 底部のみ	
36	123	17	弥生土器台付鉢	A19	d2・e2	—	K1	土坑	11058		推15.8 12.1	内・外：2.5Y6/2～2/1	密 焼成良 70%	
	123	18	弥生土器壺	A19		—	K1	土坑	11059		推11.6 残4.9	内：5YR6/4 外：5YR6/4 断：5YR5/4	密 焼成良	
	123	19	弥生土器甕蓋	A19		—	K1	土坑	11059		推底18 残3.3	内：10YR6/3 外：2.5YR5/4 断：10YR6/2	密 焼成良	
	123	20	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	11059		推16 残11.6	内・外：10Y6/3～2/1	密 焼成良 10%	
	123	21	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	11059		底8.4 残2.8	内：10YR6/3 外：2.5Y6/2 断：10YR6/3	粗 焼成良	
	123	22	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	11059		底4.8 残3.1	内：7.5YR4/2 外：5YR4/2 断：10YR6/3	粗 焼成良	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	123	23	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	11027		推8 5.8	内・外：2.5Y7/2～6/1	密 焼成良 25%	
	123	24	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	11054		推13 残9	内：2.5Y6/2 外：2.5Y2/1	密 焼成良 14%	
	123	25	弥生土器甕	A19		—	K1	土坑	11044		底6.2 残11.3	内：2.5Y7/2 外：10YR7/2～1.7/1	粗 焼成良	
	124	1	弥生土器壺	A19	e1・e2	—	K1	溝	11013		推21 残3.7	内・外：10YR6/2	密 焼成良 口縁部の一部	
	124	2	弥生土器甕	A19	e1・e2	—	K1	溝	11013		推30.6 残6.5	内：2.5Y8/2～4/2 外：5Y7/1	密 焼成良	
	124	3	弥生土器甕	A19	e1・e2	—	K1	溝	11013		推14.8 残7.1	内：10YR3/2 外：10YR1.7/1	密 焼成良	
	124	4	弥生土器甕	A19	e1・e2	—	K1	溝	11013		推16.4 残7.1	内：10YR5/2 外：10YR7/2	密 焼成良	
	124	5	弥生土器甕	A19	e1・e2	—	K1	溝	11013		推16.4 残9.5	内：10YR5/2 外：2.5YR4/1	粗 焼成良	
	124	6	弥生土器壺	A19		—	K1	溝	11047		推20 残4.4	内・外：2.5YR6/6～5YR4/1	密 焼成良 口縁部の一部	
	124	7	弥生土器壺	A19		—	K1	溝	11008		推7.6 残9.5	内：5Y3/2 外：10YR6/3～3/1	密 焼成良	
	124	8	弥生土器甕	A19		—	K1	溝	11008		推17.8 残2.2	内：10YR7/2 外：10YR6/3～3/1	密 焼成良 口縁部の一部	
	124	9	弥生土器甑	A19		—	K1	溝	11009		底5.7 残3.8	内・外：10YR6/2	粗 焼成良	
	124	10	弥生土器甕蓋	A19		—	K1	包含層			底17 7.6	内：7.5YR3/1 外：10YR6/3 断：10YR6/3	粗 焼成良	
	124	11	弥生土器甕	A19		—	K1	包含層			推22 残12.6	内：10YR5/3 外：7.5YR5/2 断：7.5YR6/2	粗 焼成良	
	124	12	弥生土器甕蓋	A19		—	K1	包含層			底8 残5.3	内：10YR7/2～N3/0 外：10YR～N3/0 断：N5/0	密 焼成良	
	124	13	弥生土器甕	A19		—	K1	包含層			推10 残3.7	内：10YR4/1 外：10YR4/2 断：10YR7/1	密 焼成良	
	124	14	弥生土器甕	A19		—	K1	包含層			推18.4 残13.3	内：10YR6/2 外：7.5YR6/2 断：7.5YR7/3	密 焼成良	
36	124	15	弥生土器壺	A19		—	K1	包含層			9 21.4	内：10YR4/1 外：10YR4/1	粗 焼成良 完形	
34	125	1	石鏃	A19	d1		K1		13058		長さ残3.4 巾1.4 厚0.5		90%	
34	125	2	石鏃	A19	d2		K1		11037		長さ残3.4 巾2.2 厚0.4			
34	125	3	石槍	A19	d1		K1			中期 包含層	長さ残6.2 巾2.7 厚1.3		先端部欠損	
36	125	4	磨製石斧	A19	e3		K1		11056		長さ7.5 巾6.0 厚1.7			
34	125	5	石包丁	A19	e2		K1		11013		長さ残9.8 巾3.9 厚0.6			
	127	1	須恵器坏蓋			区画溝	K4	溝	09001		推13.0 残3.8	内：2.5Y8/1灰白～7/1灰白 外：N7/0灰白 断：2.5Y7/1灰黄	密 焼成良 10%	
	127	2	土師器甕			区画溝	K4	溝	09001	アゼより西	推14.4 残4.3	内：7.5YR6/2灰褐 外：5YR6/4にぶい橙 断：7.5YR6/1褐灰	密 焼成良 5%	
	127	3	土師器甕			区画溝	K4		09001		推19.4 残6.0	内：10R5/6赤 外：5YR7/4にぶい橙～5YR4/1褐灰 断：10YR5/1褐灰	密 焼成良 5%	
	127	4	土師質円筒埴輪			区画溝	K4	溝	09001		推18.4 残4.2	内・外・断：2.5Y7/4浅黄	密 焼成良 口径、傾き不確か	
38	127	5	土師質円筒埴輪			区画溝	K4	溝	09001		推17.8 残12.7	内・外・断：7.5YR6/4にぶい橙	密 焼成良	
	127	6	須恵器甕			南西	K4	溝	09002		推23.8 残6.2	内・外：N4/0灰 断：N7/0灰白	密 焼成良	
38	127	7	須恵器坏身			区画溝	K4	溝	09003		推11.0 4.8	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 66%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
38	127	8	須恵器壷			区画溝	K4	溝	09003		推7.5 残8.65	内・外：N6/0灰 断：N6/0灰に5YR5/1褐灰のサンド	密 焼成良 体部完形	
	127	9	土師器鉢			区画溝	K4	溝	09003		推14.0 残3.15	内・外：10YR8/3 断：2.5Y6/1	密 焼成良 5%	
	127	10	土師器甕				K4				推14.8 15.2	内・断：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙に10YR3/2黒褐	やや密 焼成良 30%	
38	127	11	土師器甕			区画溝	K4	溝	09003		推12.9 15.8	内：10YR7/4にぶい黄橙～10YR2/1黒 外：10YR7/2にぶ黄橙～10YR2/1黒， 2.5YR6/6橙 断：5YR7/4にぶい橙～5YR5/2灰褐	密 焼成良 80%	
38	127	12	須恵器甕			区画溝	K4	溝	09003		推26.2 残14.3	内：N6/0灰 外：N5/0灰 断：5Y5/1灰	密 焼成良 口頚部40%	
38	127	13	須恵器甕			区画溝	K4	溝	09003		23.2 残8.2	内：N5/0灰 外・断：N6/0灰	密 焼成良 口頚部100%	
	127	14	須恵器坏蓋				K4			第9面精査	推15.2 残2.9	内：N5/0灰 外：N6/0灰～4/0灰 断：5YR5/3にぶい赤褐とN6/0灰	密 焼成良 5%	
	127	15	須恵器坏身				K4			25層アゼ	推12.0 残2.3	内・外：N6/0灰 断：7.5Y7/1	密 焼成良 3%	
	127	16	須恵器坏身				K4			暗茶褐色粘土	推14.4 残2.3	内：7.5Y6/1灰 外：5Y5/1灰 断：7.5Y5/1灰	密 焼成良 5%	
	127	17	土師器甕				K4			暗灰色砂質土⑱	推21.6 残3.1	内・外・断：10YR6/3にぶい黄橙	密 焼成良 5%	
	127	18	須恵器甕				K4			暗灰色砂質土⑰	推30.2 残2.0	内・外：5Y5/1灰 断：5Y7/1灰白	密 焼成良 5%	
	127	19	須恵器坏蓋				K4			25層掘り下げ	— 残3.5	内・断：N7/0灰白 外：N6/0灰	密 焼成良 30%	
	127	20	須恵器坏身				K4			25層掘り下げ	推14.6 残3.4	内・外・断：N5/灰	密 焼成良 5%	
	127	21	須恵器甕				K4			暗茶褐色粘土	推20.0 残2.55	内・外・断：5Y7/1灰白	密 焼成不良 10%	
	127	22	須恵器甕				K4			暗茶褐色粘質シルト	推18.6 残4.2	内：N7/灰白 外：N6/灰 断：7.5YR6/1灰	密 焼成良 5%	
	128	1	土師器鉢	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴 カマド内	12087		— 残9.5	内：7.5YR6/3にぶい褐 外：10YR6/2灰黄褐～1.7/1黒 断：10YR5/3にぶい黄褐	粗 焼成やや軟 80% 上部欠損のため残存率不明	カマドの支脚
	128	2	土師器甕	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴 カマド	12087		推12.2 残3.0	内・外・断：2.5Y5/2暗灰黄	密 焼成良 口縁部の一部のみ	
	128	3	土師器甕	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴 カマド内	12087		推15.2 残2.7	内・外・断：7.5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 口縁部の一部のみ	
	128	4	土師器甕	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴 カマド内	12087		推18.8 残2.8	内・外・断：10YR6/3にぶい黄橙	密 焼成良 口縁部の一部のみ	
	128	5	土師器甕	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴 カマド内	12087		推18.8 残11.4	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：5YR7/4にぶい橙 断：5YR6/4にぶい橙	密 焼成良 10%	306-竪穴087① 332-竪穴087② 388-カマド内
39	128	6	須恵器坏蓋	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		14.4 4.8	内：5Y7/1灰白 外・断：N7/灰白	密 焼成やや軟 ほぼ完形	取No.1
39	128	7	須恵器坏蓋	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推14.5 4.1	内・外・断：N6/灰～5/灰	密 焼成良 50%	
	128	8	須恵器坏蓋	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推14.4 4.3	内：7.5Y7/1灰白 外：N7/灰白～N4/灰 断：—	密 焼成良 50%	取No.4
	128	9	須恵器坏蓋	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推13.8 4.3	内・外・断：7.5Y6/1灰	密 焼成良 33%	
39	128	10	須恵器坏蓋	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推14.2 3.9	内・外・断：N6/灰　外面に自然釉	密 焼成硬 66%	取No.2
39	128	11	須恵器坏身	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		12.7 3.8	内：N5/灰 外：N7/灰白～N6/灰 断：10YR4/1褐灰	粗 焼成良 ほぼ完形	取No.5
39	128	12	須恵器坏身	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		12.2 3.9	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 ほぼ完形	取No.5
39	128	13	須恵器短頸壷	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		— 残8.9	内・外・断：N7/灰白～4/灰	密 焼成良 66%	取No.2
	128	14	須恵器壷?	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推13.4 残3.5	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 口縁部の一部のみ	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成 ・残存率	
39	128	15	須恵器坏蓋	A19	i3	北東	K2	竪穴 ピット	12087		14.2 4.0	内・断：5Y7/1灰白 外：N4/0灰 5Y8/1	密 焼成やや軟 口縁部の一部欠損	
	128	16	土師器甕	A19	i2	北東	K2	ピット	12179		推9.3 残2.7	内・外・断：2.5Y6/2灰黄	密 焼成良 口縁部の小片	
40	128	17	土師器把手付鍋	A19	i2	北東	K2	竪穴 ピット	12087		推23.8 残23.0	内：10YR3/1黒褐 外・断：10YR6/2灰黄褐	やや密 焼成良 33%	
	128	18	土師器鉢	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推14.0 残2.9	内・外・断：5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 口縁部の一部のみ	087-②
	128	19	韓式系土器壷	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推17.5 残6.35	内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：5Y5/1灰	粗 焼成良 底部少片	
	128	20	韓式系土器甕	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴	12087		推19.2 残2.6	内・外：10YR8/2灰白 断：7.5YR7/3にぶい橙	粗 焼成良 底部少片	
39	128	21	土師器長胴甕	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴 カマド内	12087		19.4 残33.4	内：10YR5/2灰黄褐 外：2.5Y6/3にぶい黄、3/2黒褐 断：2.5Y6/2灰黄	密 焼成良 50%	カマド内 取No.2
39	128	22	土師器長胴甕	A19	h2・3 i2・3	北東	K2	竪穴 カマド内	12087		18.2 残32.1	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR6/2灰黄褐,10YR1.7/1灰白 断：10YR6/3にぶい黄橙	密 焼成良 80%	カマド内 取No.2
39	129	1	土師器甕	A19	h1	北東	K2	竪穴	12097		13.7 15.5	内・外・断：7.5YR7/2明褐灰～7/6橙	密 焼成良 80%	
40	129	2	土師器甕	A19	h3・4	北東	K2	竪穴	12024		10.6 8.5	内・外・断：2.5Y7/2灰黄	やや密 焼成良 完形	かまど
40	129	3	土師器甕	A19	h3・4	北東	K2	竪穴	12024		10.8 10.4	内・外・断：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 66%	かまど
40	129	4	土師器甑	A19	h3・4	北東	K2	竪穴	12192		24.4 残22.3	内・外・断：7.5YR8/2灰白	密 焼成良 66%	かまど
40	129	5	土師器壷	A19	h3・4	北東	K2	竪穴	12192		— 残11.3	内・外・断：10YR8/2灰白～ 7/2にぶい黄橙	密 焼成良 口縁部欠損	カマドの支脚
41	129	6	土師器甕	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		推10.6 9.4	内：7.5YR8/3浅黄橙～3/1黒褐 外：7.5YR7/2明褐灰～ 5/4にぶい褐、1.7/1黒 断：—	密 焼成良 50%	取No.2
41	129	7	土師器甕	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		12.6 13.4	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：N1.5/0灰,10YR5/2灰黄褐 断：10YR6/2灰黄褐	密 焼成良 底部の一部欠損	取No.3
41	129	8	土師器壷	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		— 残12.9	内：7.5YR7/2～10R6/4 外：7.5YR8/3浅黄橙～10R6/6赤橙 断：7.5YR7/2明褐灰、5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 66%	取No.1
41	129	9	土師器壷	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		— 残15.8	内・外：10YR7/2にぶい黄橙 断：10YR7/1灰白	密 焼成良 口縁と体部の 一部欠損	取No.5
	129	10	土師器壷？	A19	hi3	北東	K2	土坑	12096		推13.2 残2.5	内・外・断：10R6/6赤橙	密 焼成良 口縁部の一部のみ	
	129	11	土師器甕	A19	hi3	北東	K2	土坑	12096		推16.4 残3.1	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR8/1灰白	密 焼成良 口縁の一部のみ	
	129	12	土師器甕	A19	hi3	北東	K2	土坑	12096		推12.4 残3.8	内・外：2.5Y6/2灰黄,4/2暗灰黄 断：2.5Y3/1黒褐	密 焼成良 口縁の一部のみ	
	129	13	土師器甕	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		推18.2 残3.8	内・外・断：2.5Y7/3浅黄	やや粗 焼成良 口縁部の25%	283-取No.2 232(溝12024上層)と 接合
	129	14	須恵器甕	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		推26.3 残8.8	内・外：10YR5/2灰赤～N5/0灰 断：N5/0灰	密 焼成良 口縁の75%	取No.7
41	129	15	韓式系土器 平底鉢	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		推14.6 12.9	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：2.5YR6/3にぶい橙,2/1赤黒 断：7.5YR6/3にぶい褐	密 焼成良 66%	取No.5
41	129	16	韓式系土器 平底鉢	A19	hi3	北東	K2	土坑	12096		推14.6 残13.3	内：10YR7/2にぶい黄橙,3/1黒褐 外：10YR6/3にぶい黄橙, 2.5YR5/6明赤褐、1.7/1赤黒 断：—	密 焼成良 50%	285は取No.4 235は溝12024上層
	129	17	土師器高坏	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		推13.4 残10.3	内・外・断：10YR8/3浅黄橙	密 焼成良 33%	取No.8
	129	18	土師器高坏	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		— 残6.4	内：5YR7/3にぶい橙 外：2.5YR7/4淡赤橙 断：10YR7/2にぶい黄橙	密 焼成良 脚部の50%	取No.6
	129	19	土師器高坏	A19	h3	北東	K2	土坑	12096		推22.2 残5.8	内：2.5YR7/6橙 外：10YR8/2灰白 断：10R6/6赤橙	密 焼成良 坏部の口縁の一部 のみ	取No.2
	130	1	韓式系土器甑	A19	hi3	北東	K2	土坑	12096		推24.0 残21.9	内・外・断：10YR8/2灰白～4/1褐灰	粗 焼成良 40%	口縁部1 底部2のパーツを図面上 で合成

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	130	2	須恵器坏蓋	A19	h1	北東	K2	土坑	12130か 12131		推14.2 残5.0	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 50%	
	130	3	須恵器坏蓋	A19	h2	北東	K2	土坑	12130		推12.8 残3.3	内・外・断：7.5Y7/1灰白	密 焼成弱 口縁部の小片	
	130	4	須恵器甕	A19	h1	北東	K2	土坑	12130		推18.8 残4.7	内・断：5RP6/1紫灰 外：5P6/1紫灰、N1.5/0黒	密 焼成良 口縁部の小片	
	130	5	土師器甕	A19	h1	北東	K2	土坑	12130		推18.6 残3.0	内・外・断：10YR7/4にぶい黄橙	密 焼成良 口縁部の小片	
	130	6	土師器高坏	A19	h1	北東	K2	土坑	12130か 12131		推13.4 残5.4	内・外・断：5YR6/6橙	密 焼成良 25%	
42	130	7	須恵器坏蓋	A19	h4	北東	K2	溝	12011		推15.5 6.3	内・外・断：N6/0灰～5/0灰	やや粗 焼成良 50%	
	130	8	土師器甕	A19	h4	北東	K2	溝	12011		推12.2 残10.8	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい黄橙 断：10YR7/3にぶい橙	密 焼成良 15%	
	130	9	須恵器甕	A19	h4	北東	K2	溝	12011		推21.6 残7.4	内：2.5Y8/1灰白～7.5Y6/1灰 外：7.5Y6/1灰～7.5YR5/4にぶい褐 断：5Y7/2灰白	密 焼成良 口縁の一部	
	130	10	土師器鉢	A19	h2	北東	K2	溝	12066		推12.4 残4.8	内・外・断：7.5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 15%	
	130	11	須恵器坏身	A19	h2	北東	K2	溝	12010		推12.4 残3.3	内・外・断：N6/0灰～5/0灰	密 焼成良 25%	
	130	12	須恵器高坏	A19	h4	北東	K2	溝	12010		— 残3.5	内・断：N4/0灰 外：5PB4/1暗青灰	密 焼成良 脚部の一部	
	130	13	土師器鉢	A19	h4	北東	K2	溝	12010		推18.4 残5.5	内・外・断：7.5YR7/3にぶい橙	密 焼成良 小片	
41	130	14	製塩土器	A19	h4	北東	K2	溝	12010		4.0 6.5	内・外・断：7.5YR7/4にぶい橙, 10YR5/1褐灰	密 焼成良 完形	
	130	15	土師器把手	A19	h4	北東	K2	溝	12010		— 残5.0	内・外・断：10YR7/3にぶい橙	粗 焼成良 把手のみ	
	130	16	須恵器高坏	A19		北東	K2	ピット	12008		— 残4.4	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 脚部の小片	
	130	17	須恵器坏蓋	A19		北東	K2	ピット	12008		推12.6 残4.3	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 25%	
	130	18	土師器鉢	A19	i3・4	北東	K2	落ち込み	12178		推10.0 残3.3	内・外・断：10YR7/2にぶい黄橙	密 焼成良 口縁部の小片	
	130	19	須恵器坏身	A19	h4	北東	K2	ピット	12022		推10.8 残4.6	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 25%	3片が接合されて、そのうち一片は355か356か注記不明瞭
	130	20	韓式系土器甕	A19	h2	北東	K2	土坑	12052		推25.4 残8.8	内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR7/2にぶい黄橙	粗 焼成良 底部25%	
	130	21	韓式系土器甕	A19	h3	北東	K2			12面 精査	推19.6 残5.3	内・外：10YR8/2灰白,10YR5/1褐灰 断：10YR8/2灰白	やや粗 焼成良 底部10%	
	130	22	韓式系土器 平底鉢	A19	g4	北東	K2			10面 掘り 下げ	— 残5.7	内：10YR6/3にぶい黄橙,10YR4/1褐灰 外：10YR4/1褐灰 断：10YR8/1灰白,10YR4/1褐灰	粗 焼成やや不良 底部60%	
	130	23	朝顔形埴輪	A19	g5,g4,h4 h4 h5	北東	K2			5c 包含層 第11面 掘り 下げ	推32.8 残9.8	内・外：5YR7/6橙,7.5YR8/4浅黄橙 断：5YR7/6橙、2.5Y5/1黄灰	やや密 焼成良 突帯部20%	
	130	24	韓式系土器 平底鉢	A19	g5	北東	K2			10面 掘り 下げ	— 残4.0	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR3/1黒褐,2.5YR6/4にぶい橙 断：10YR7/3にぶい黄橙	粗 焼成良 底部20%	
	131	1	須恵器坏身	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推10.5 残5.4	内：N6/0 外：N6/0灰～4/0灰 断：5R4/1	密 焼成良 33%	
	131	2	須恵器蓋	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推8.8 残4.4	内：5Y3/1オリーブ黒に8/1灰白 外：N3/0暗灰 断：5RP6/1紫灰	密 焼成良 小片	
	131	3	須恵器坏蓋	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推16.4 残3.4	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 口縁の小片	
	131	4	須恵器高坏	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推16.6 残5.1	内：N7/0灰白～5/0灰 外：N4/0灰 断：2.5YR3/2暗赤褐	密 焼成良 15%	
	131	5	須恵器甕	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推20.4 残5.5	内：N7/0灰白 外：N5/0～4/0灰 断：N6/0灰	密 焼成良 口縁の一部のみ	
	131	6	土師器高坏	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推9.7 残3.9	内・外・断：2.5YR6/6橙	密 焼成良 25%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成 ・残存率	
	131	7	土師器高坏	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		— 残5.7	内・外・断：10R6/6赤橙,N2/0黒	密 焼成良 50%	
	131	8	韓式系土器 平底鉢	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		— 残1.2	内：10YR8/2灰白 外：10YR8/2灰白,7.5YR4/3褐 断：10YR7/1灰白	やや粗 焼成良 底部25%	
	131	9	韓式系土器 平底鉢	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		— 残3.7	内：7.5YR7/3にぶい橙 外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR8/1灰白	密 焼成良 底部少片	
	131	10	韓式系土器 平底鉢？	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		— 残9.0	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR6/2灰黄褐,4/1褐灰、 1.7/1黒、5YR6/6橙 断：10YR6/3にぶい黄橙	粗 焼成良 底部と胴部の一部	
	131	11	土師器甕	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推18.0 残3.5	内・外・断：7.5YR8/3浅黄橙	密 焼成良 口縁の小片	
	131	12	土師器甕	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		推19.0 残3.8	内・断：7.5YR7/3にぶい橙 外：7.5YR8/3浅黄橙	密 焼成良 口縁の小片	
	131	13	土師器甕	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		17.8 残30.3	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 33%	
42	131	14	土師器長胴甕	A19	h3 i3	北東	K2	溝	12024		19.6 31.1	内：10YR5/3にぶい黄褐 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：5YR5/6明赤褐	やや粗 焼成良 66%	
	132	1	須恵器坏身	B19	d4	南西	K3	竪穴１	09133		推12.8 残3.8	内・外・断：5Y7/1灰白	密 焼成良 25%	
	132	2	須恵器高坏	B19	d4	南西	K3	竪穴１	09133		— 残2.7	内：5Y7/1灰白 外：N6/0灰 断：5Y6/1灰	密 焼成良 脚一部	
	132	3	須恵器壷	B19	e4	南西	K3	竪穴１	09133		推10.8 残8.5	内・外：N6/0灰 断：7.5R5/1赤灰	密 焼成良好堅緻 口縁部20%	頸径（7.2） 体部最大径（14.4）
	132	4	土師器甕	B19	e4	南西	K3	竪穴１	09133		推12.4 残3.2	内・外：7.5YR8/3浅黄橙 断：10YR8/2灰白	密 焼成良 口縁一部	
	132	5	土師器甕	B19	d4	南西	K3	竪穴１	09133		推18.2 残4.0	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 口縁一部	
	132	6	製塩土器	B19	d4 e4	南西	K3	竪穴１	09133		推4.0 残4.6	内：7.5YR6/1褐灰 外：2.5Y5/1黄灰 断：2.5YR7/1明赤灰	やや密 焼成良やや瓦質 25%	
	132	7	土師器高坏	B19	d4 e4	南西	K3	竪穴１	09133		推15.0 残3.9	内：5YR7/4にぶい橙 外：5YR7/6橙 断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 口縁一部	
	132	8	須恵器高坏	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推14.0 残5.0	内：7.5Y5/1灰 外・断：7.5Y6/1灰	密 焼成良 10%	
43	132	9	須恵器坏蓋	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推12.6 4.6	内・断：N5/0灰 外：N6/0灰	やや密 焼成良 50%	取No.１
43	132	10	須恵器坏蓋	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推13.6 5.15	内・外・断：N6/0灰	密 焼成良 50%	
	132	11	須恵器坏身	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推9.3 4.25	内：N4/0灰 外：N4/0灰～3/0暗灰 断：7.5R4/2灰赤	やや粗 焼成良 20%	取No.１
	132	12	須恵器坏身	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推10.8 残4.75	内・外・断：N4/0灰	密 焼成良 20%	
	132	13	須恵器坏身	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推10.6 残4.9	内・断：N6/0灰 外：N5/0灰	密 焼成良 30%	
43	132	14	須恵器坏身	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推10.4 4.3	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 75%	底部にヘラ記号×あり
44	132	15	土師器鉢	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		11.3 6.1	内：7.5YR8/4浅黄橙 外：5YR7/6橙 断：5YR4/3にぶい赤褐	やや粗 焼成良 完形	取No.１
	132	16	土師器鉢	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推13.0 残5.3	内：10YR3/１黒褐 外：7.5YR7/4にぶい橙,一部2.5YR7/6橙 断：10YR7/1灰白	良 焼成良 50%	
	132	17	土師器鉢	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推19.4 残4.8	内・外：7.5YR7/4にぶい橙 断：10YR8/2灰白	密 焼成良 30%	
	132	18	土師器高坏	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推18.0 残3.4	内・断：5YR7/4にぶい橙 外：2.5YR7/4淡赤橙	密 焼成良 10%	
	132	19	韓式系土器 平底鉢	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		— 残9.0	内：7.5YR7/3浅黄 外：7.5YR7/3にぶい橙 断：10YR7/2にぶい黄橙	粗 焼成良 30%	取No.２
	132	20	須恵器系土器？ 甕	B19	d4 e4	南西	K3	井戸	09192		推10.0 残4.0	内・外：7.5YR7/6にぶい橙 断：5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 15%	
	132	21	韓式系土器 平底鉢	B19	d4 e4	南西	K3	井戸	09192		— 残2.9	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：7.5YR4/1褐灰 断：7.5YR4/1褐灰,7.5YR8/2灰白	やや密 焼成良 底部10%	
	132	22	土師器高坏	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		— 残7.5	内・外・断：5YR6/6橙	やや密 焼成良 45%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
44	132	23	土師器高坏	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		13.3 10.5	内：2.5YR6/8(一部10R5/8) 外：2.5YR6/8～2.5YR6/6 断：7.5Y5/1	密 焼成良 80%	取No.3
	132	24	製塩土器	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		— 残4.65	内・断：2.5Y8/1灰白 外：10YR8/2灰白	密 焼成良 50%	取No.3
	132	25	土師器底部	B19	d4 e4	南西	K3	井戸	09192		— 残3.1	内：5YR7/6橙 外：10YR4/1褐灰 断：10YR6/1褐灰	密 焼成良 底部一部	
	132	26	土師器甕	B19	d4 e4	南西	K3	井戸	09192		推15.0 残2.9	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR8/1灰白 断：2.5Y6/1黄灰	密 焼成良 口縁一部	
	132	27	土師器甕	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推18.4 残4.4	内：10YR7/2にぶい黄橙 外・断：10YR7/1灰白	密 焼成良 口縁一部	
	132	28	土師器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推20.0 残4.7	内・外：7.5YR7/4にぶい橙 断：5YR7/6橙	やや密 焼成良 20%	
	132	29	土師器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		15.4 残6.4	内・外：2.5Y7/3浅黄 断：2.5Y7/3浅黄（N5/0灰のサンド）	密 焼成良 10%	取No.8
	132	30	土師器甕	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推18.6 残4.2	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR5/2灰黄褐 断：7.5YR6/3にぶい黄橙	密 焼成良 口縁一部	
	132	31	土師器甕	B19	e4	南西	K3	井戸	09192		推20.6 残11.3	内・断：10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 20%	
	133	1	須恵器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推17.4 残6.0	内・断：N4/0灰 外：N7/0灰白	やや粗 焼成良 5%	取No.7
	133	2	土師器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推16.8 残5.85	内・断：10YR8/2灰白 外：10YR8/3浅黄橙	やや粗 焼成良 10%	
	133	3	韓式系土器 甕か壷	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推18.2 残7.5	内：10YR6/2灰黄褐～2.5YR6/4にぶい橙 外・断：7.5YR7/3にぶい橙	やや粗 焼成良好 20%	口縁部1/4程
	133	4	土師器高坏	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推13.7 残3.5	内・断：2.5YR6/6橙 外：2.5Y7/6橙	密 焼成良 20%	
	133	5	土師器高坏	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		— 残8.1	内・外：5YR8/4浅黄褐 断：10YR8/3浅黄褐	密 焼成良 50%	
44	133	6	土師器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		10.8 18.15	内：10YR7/3にぶい黄橙(口縁内部) 外：5YR7/3にぶい橙～10YR8/1灰白 断：10YR7/2にN3/1のサンドにぶい黄橙	密 焼成良 ほぼ完形（口縁かけている）	
45	133	7	製塩土器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		10.6 18.95	内・断：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 完形	取No.2
	133	8	土師器直口壷	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		推8.0 13.5	内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR8/3浅黄橙 断：10YR6/2灰黄褐	密 焼成良 70%	
44	133	9	土師器直口壷	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		10.2 15.6	内：2.5YR3/1黒褐 外：N3/暗灰～10YR6/4にぶい黄橙 断：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 ほぼ完形	
44	133	10	土師器直口壷	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		9.4 15.8	内：10R3/3暗赤褐（口縁） 外：10R4/6赤～2.5Y8/3淡黄 断：10R5/4赤褐（体部）	密 焼成良 ほぼ完形	
44	133	11	土師器直口壷	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		11.1 17.1	内：2.5Y7/2灰黄～2.5YR3/1黒褐 外：2.5Y7/2灰黄 断：10YR5/1褐灰	密 焼成良 ほぼ完形	取No.1
44	133	12	土師器直口壷	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		9.2 16.5	内：2.5YR6/5(口縁) 外：5YR6/6橙～10YR7/2にぶい黄橙 (2.5YR6/6橙一部) 断：5YR6/6橙(胴部)	密 焼成良 完形	
44	133	13	土師器直口壷	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		10.2 16.6	内：2.5YR3/1黒褐 外：10YR7/3にぶい黄橙,N1.5/0黒 断：10YR6/4にぶい黄橙	密 焼成良 完形	取No.2
45	133	14	土師器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		11.1 20.3	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/3浅黄～2.5Y4/1黄灰 断：2.5Y7/2灰黄,2.5Y6/1黄灰のサンド	密 焼成良 80%	取No.4
45	133	15	土師器甕	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		13.8 20.2	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙～2.5YR6/6橙 断：2.5Y8/1灰白	密 焼成良 完形	
43	134	1	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		11.4 4.7	内・外・断：5B6/1青灰	密 焼成良 85%	取No.5
43	134	2	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		12.45 4.4	内・外・断：N5/灰	密 焼成良 75%	取No.2
43	134	3	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		11.85 4.75	内・外・断：N6/灰	密 焼成良 70%	取No.2
43	134	4	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		12.35 4.0	内・断：5PB5/1青灰 外：5PB6/1青灰	密 焼成良 75%	
43	134	5	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		推11.4 残5.0	内・外：N4/灰 断：10YR4/2灰赤	密 焼成良 70%	
43	134	6	須恵器坏身	A19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		9.45 4.9	内・断：N6/灰 外：7.5Y7/灰白	密 焼成良 90%	取No.5

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	134	7	須恵器甕	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		— 残4.7	内：N5/0灰 外：N4/0灰 断：10R5/1赤灰	密 焼成良 体部30%	頸径（6.6）cm
	134	8	須恵器高坏	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		推18.0 残4.0	内・外：N5/0灰 断：10R5/1赤灰	密 焼成良 口縁一部	
	134	9	須恵器高坏	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		— 残5.5	内・外：N5/灰(N8/灰白) 断：N6/灰	密 焼成良好 脚部80%	
43	134	10	土師器甕	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		21.1 15.9	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 80%	取No.4
	134	11	製塩土器	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		推4.8 残5.6	内：2.5Y6/2灰黄 外：2.5Y5/1黄灰 断：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 20%	
	134	12	製塩土器	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		— 残6.2	内：2.5Y8/1灰白 外・断：N3/0暗灰	密 焼成良 40%	
	134	13	製塩土器	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		推3.8 残6.0	内・断：2.5Y8/1灰白 外：10YR8/1灰白	密 焼成良 25%	
	134	14	韓式系土器甑	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		— 残4.45	内：7.5YR8/3浅黄橙 外・断：7.5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 底部30%	
	134	15	韓式系土器 平底鉢	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		— 残7.0	内・外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR8/2灰白	やや密 焼成良 底部15%	
	134	16	土師器甕	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		推12.0 残3.5	内・断：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	やや密 焼成良 口縁一部	
	134	17	土師器甕	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		推21.6 残4.7	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙 断：10YR7/2にぶい黄橙	やや密 焼成良 口縁一部	
	134	18	土師器甑	B19	d3	南西	K3	竪穴2	09108		推26.4 残7.6	内：10YR7/3にぶい黄橙 外・断：2.5Y7/3浅黄	やや粗 焼成良 口縁一部	
	134	19	土師器高坏	B19	d3	南西	K3	土坑	09091		推14.0 残4.0	内・外・断：2.5YR6/6橙	密 焼成良 口縁一部	
	134	20	土師器高坏	B19	e3	南西	K3	土坑	09091		推16.6 残4.1	内：10YR5/1褐灰、10YR6/2灰黄褐 外：10YR5/1褐灰,5YR6/4にぶい橙 断：10YR5/1褐灰	やや粗 焼成良 口縁部25%	
	134	21	土師器鉢	B19	d3	南西	K3	土坑	09091		推12.0 残4.1	内・断：5YR6/6橙 外：5YR7/6橙	密 焼成良 25%	
	134	22	ミニチュア土器	B19	d3	南西	K3	土坑	09091		— 残2.2	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/2灰黄 断：5Y3/1オリーブ黒	やや密 やや不良 40%	
	134	23	土師器長口壺	B19	d3 e3	南西	K3	土坑	09091		10.0 残5.8	内：2.5YR6/6橙 外：2.5YR6/4にぶい橙 断：2.5YR4/1赤灰	密 焼成良 口縁一部	
48	134	24	土師器甕	B19	d3 e3	南西	K3	土坑	09091		推13.5 残19.7	内：5YR6/3にぶい橙 外：10YR7/4にぶい黄橙 断：10YR7/1灰白	密 焼成良 50%	
	134	25	土師器鍋	B19	e3	南西	K3	土坑	09091		推29.0 残12.2	内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR6/2灰黄褐,10YR4/1褐灰 断：10YR6/2灰黄褐	粗 焼成良 口縁部15%	
	134	26	土師器甕	B19	d3 e3	南西	K3	土坑	09091		23.6 残3.8	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：2.5Y6/3にぶい黄	やや密 焼成良 口縁一部	
45	135	1	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		12.1 5.2	内・断：N5/0灰 外：N6/0灰	密 焼成良 70%	
	135	2	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推12.8 4.75	内・外：N5/0灰 断：5YR5/1褐灰	密 焼成良 45%	
	135	3	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推12.5 残4.2	内・断：N6/0灰 外：N5/0灰	密 焼成良 30%	取No.7
	135	4	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推12.0 残4.35	内・断：N7/0灰白 外：N6/0灰	密 焼成良 40%	
45	135	5	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		13.3 残5.4	内：10YR4/1褐灰 外：N5/0灰 断：7.5YR6/3にぶい褐	やや粗 焼成やや良 70%	
	135	6	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推13.7 残4.2	内・断：N6/0灰 外：N7/0灰白	密 焼成良 10%	取No.20
	135	7	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推13.2 残4.2	内：5YR4/1暗赤灰 外：N4/0灰 断：10R4/2赤灰	密 焼成良 10%	
	135	8	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推12.8 残4.5	内・外・断：N6/0灰	密 焼成良 30%	
45	135	9	須恵器坏蓋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		11.3 4.9	内・外・断：N5/0灰	密 焼成良 70%	
	135	10	須恵器坏蓋	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		推11.4 残5.05	内・断：N5/0灰 外：2.5GY6/1オリーブ灰	密 焼成良 55%	
	135	11	須恵器坏蓋	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		推11.5 残4.1	内・外：N6/0灰 断：10R5/2灰赤	密 焼成良 10%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	135	12	須恵器坏蓋	B19		南西	K3	落込み	09050		推12.2 残3.3	内：N6/0灰 外・断：N7/0灰白	密 焼成良 10%	
	135	13	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推12.0 残4.6	内・断：N7/0灰白 外：N4/0灰	密 焼成良 35%	
45	135	14	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		10.8 5.05	内・断：N6/0灰 外：2.5GY6/1オリーブ灰	密 焼成良 95%	取No.13
	135	15	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推11.1 5.15	内・外：N5/0灰 断：N6/0灰	密 焼成良 50%	ミガキあり
	135	16	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推10.2 残5.05	内・外：N5/0灰 断：N6/0灰	密 焼成良 30%	取No.14
45	135	17	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		9.95 5.15	内：7.5YR5/3にぶい褐 外：10Y5/1灰 断：N5/0灰	やや粗 焼成良 ほぼ100%	取No.18
	135	18	須恵器坏身	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		推11.2 5.15	内・外・断：N6/0灰	密 焼成良 60%	
45	135	19	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推11.0 5.25	内・外・断：N4/0灰	やや粗 焼成良 80%	
	135	20	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推9.7 残4.15	内・外・断：N7/0灰	密 焼成良好 25%	
	135	21	須恵器坏身	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推11.4 残4.45	内・断：5Y7/1灰白 外：N7/0灰白～ 7.5Y7/1灰白	密 焼成良 20%	取No.19
	135	22	須恵器坏身	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		10.2 4.5	内・断：N7/0灰白 外：N6/0灰	密 焼成良 60%	
46	135	23	須恵器脚付鉢	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		推10.2 残4.8	内：N6/0灰,N8/0灰白 外：N4/1灰 断：5YR5/2灰褐	密 焼成良 40%	
	135	24	須恵器把手付き鉢	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推11.0 残3.8	内・外・断：N5/灰	密 焼成良好堅緻 口縁部少片	
	135	25	須恵器高坏	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		— 残4.7	内・外・断：2.5Y8/2灰白	密 焼成不良 50%	脚部つけ根径7.9cm
46	135	26	須恵器高坏	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		— 残4.6	内・外・断：N6/0灰	密 焼成良 60%	
	135	27	須恵器甕	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推20.0 残5.7	内：N8/0灰白 外：5PB4/1暗灰 断：10R4/1暗赤灰	密 焼成良 口縁部20%	取No.14
	135	28	須恵器甕	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推21.4 残7.25	内・外：N6/0灰 断：N5/0灰	密 焼成良 10%	
46	135	29	須恵器堤瓶	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		— 残14.8	内：N6/0灰 外：N6/0灰,N4/0灰 断：—	やや密 焼成良好 50%	
	135	30	須恵器甕	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推17.4 残12.3	内・外：2.5Y7/2灰黄 断：2.5Y7/1灰白	やや粗 焼成やや不良 35%	写No.1
46	135	31	須恵器壷	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		— 残27.3	内：N6/0灰 外：N6/0灰～N8/0灰白 断：N7/0灰白	密 焼成良 50%	要拓本
	136	1	土師器鉢	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推10.8 残5.4	内：7.5YR6/3にぶい褐 外：5YR5/6明赤褐 断：2.5Y6/6橙	密 焼成良 30%	
	136	2	土師器鉢	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推13.4 残3.2	内：5YR6/6橙 外：5YR6/8橙 断：5YR6/3にぶい橙	密 焼成良 10%	
47	136	3	土師器鉢	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		12.2 5.15	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR8/4浅黄橙 断：—	やや粗 焼成良 完形	取No.12
	136	4	土師器鉢	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推12.0 残4.6	内・断：5YR6/6橙 外：7.5YR8/4浅黄橙	密 焼成良 10%	取No.20
	136	5	土師器高坏	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		— 残9.75	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：5YR6/6橙 断：2.5YR6/8橙	密 焼成良 50%	
47	136	6	土師器高坏	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		13.6 12.4	内・外・断：5YR7/6橙	やや密 焼成良 90%	取No.3
	136	7	土師器甕	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		16.2 残5.9	内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：5Y5/1灰	やや密 焼成良 口縁部95%	
	136	8	土師器甕	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推16.6 残5.1	内・外：10YR8/3浅黄橙 断：2.5Y5/１黄灰	やや粗 焼成良 口縁部25%	
	136	9	土師器甕	B19	d3・4	南西	K3	落込み	09050		推14.4 残9.3	内：5Y7/2灰白 外：2.5YR6/3にぶい黄 断：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 10%	
	136	10	土師器甕	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推10.3 残9.9	内：10YR7/3にぶい黄橙 外・断：10YR7/2にぶい黄橙	やや粗 焼成良 45%	取No.20
47	136	11	土師器甕	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推11.0 残4.5	内：7.5YR7/3にぶい橙 外：7.5YR7/4にぶい橙 断：7.5YR8/2灰白	やや粗 焼成良 10%	
48	136	12	製塩土器	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		3.1 残7.5	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙 断：—	やや粗 焼成良 65%	取No.19

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
47	136	13	土師器壷	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推12.4 残17.7	内・断：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/4にぶい黄橙,2.5YR6/8橙	密 焼成良 80%	
	136	14	土師器鍋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		推23.4 残12.45	内・断：10YR8/2灰白 外：10YR7/2にぶい黄橙～7/3にぶい黄橙	やや粗 焼成良 30%	取No.19
47	136	15	土師器鍋	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		24.0 24.0	内：7.5YR8/2灰白～8/4浅黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙 断：7.5YR8/3浅黄橙	粗 焼成良 80%	取No.7
	136	16	韓式系土器 カマド	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		— 残16.5	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR5/3にぶい黄褐 断：7.5YR6/4にぶい橙	やや粗 焼成良 10%	底部
49	137	1	須恵器坏蓋	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推15.2 5.3	内・断：2.5Y7/1灰白 外：10YR7/3にぶい黄橙	やや密 焼成弱 70%	取No.11,12
	137	2	須恵器坏蓋	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推15.4 残4.8	内・外・断：N7/0灰白	やや粗 焼成良 50%	取No.12
49	137	3	須恵器坏蓋	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		15.8 4.3	内：N5/0灰 外：N4/0灰 断：—	やや粗 焼成良 50%	
49	137	4	須恵器坏蓋	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		14.6 5.0	内：N5/0灰 外：N4/0灰 断：5YR5/3にぶい赤褐	やや密 焼成良 70%	取No.12
49	137	5	須恵器坏身	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推12.2 5.0	内：N5/0灰 外：N4/0灰 断：5YR5/3にぶい赤褐	粗 焼成良 66%	取No.7
	137	6	須恵器坏身	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推13.2 4.6	内・外・断：N5/0灰	粗 焼成良 50%	取No.6
49	137	7	須恵器坏身	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推14.2 4.7	内：7.5Y6/1灰 外：N6/0灰 断：—	粗 焼成良 66%	取No.12
49	137	8	須恵器坏身	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		12.4 5.1	内・外・断：N5/0灰	粗 焼成良 90%	取No.5
49	137	9	須恵器坏身	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		13.55 4.3	内：N5/0灰 外：N4/0灰 断：N6/灰	密 焼成良 ほぼ完形	No.1～51のうす玉が入っていた 取No.4
	137	10	須恵器坏身	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推13.0 残4.6	内：N7/0灰白 外・断：N6/灰	やや粗 焼成良 16%	取No.7
	137	11	須恵器坏身	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		— 残3.4	内：5Y7/1灰白 外：N3/0暗灰 断：10YR7/1灰白	密 焼成やや不良 16%	取No.12
49	137	12	須恵器坏身	A17	d3	居外？	HT1	溝	06001		推13 4.4	内・外・断：N4/0灰	密 焼成良 66%	取No.1
50	137	13	須恵器高坏	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		10.2 9.4	内・外・断：2.5Y6/1黄灰	密 焼成良 80%	取No.9
50	137	14	須恵器高坏	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推9.8 8.15	内：7.5Y6/1灰 外：7.5Y7/1灰白 断：—	密 焼成良 75%	取No.7,12
50	137	15	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		8.0 4.9	内・外・断：10YR7/4にぶい黄橙	やや密 焼成良 80%	取No.12
50	137	16	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		6.8 4.9	内・外・断：2.5Y5/1黄灰～6/2灰黄	やや密 焼成良 50%	取No.3
	137	17	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		9.5 残4.0	内・外・断：7.5YR7/2明褐灰	やや密 焼成良 75%	取No.12
50	137	18	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推8.6 4.9	内・外・断：5YR7/4にぶい橙	やや密 焼成良 66%	取No.12
50	137	19	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		8.8 5.6	内・外・断：10YR7/2にぶい黄橙	密 焼成良 80%	取No.12
50	137	20	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推9.0 5.6	内・外・断：2.5Y7/1灰白～6/1黄灰	やや密 焼成良 66%	取No.12
50	137	21	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		推9.6 5.8	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/1灰白 断：—	やや密 焼成良 75%	取No.9
50	137	22	土師器 ミニチュア鉢	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		10.5 6.4	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：—	やや密 焼成良 80%	取No.7
	137	23	土師器高坏	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		— 残8.3	内・外・断：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 脚部80%	取No.9
51	137	24	土師器甑	A17	c3	居外？	HT1	溝	06001		25.0 残25.5	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 60%	取No.13
49	137	25	土師器高坏	A17	d3	居外？	HT1	土坑	06006		10.5 11.0	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 脚部一部欠損	
49	137	26	須恵器甕	A17	C3	居外？	HT1	土坑	06003		— 残8.2	内・外・断：5B4/1～N8/0	密 焼成良 口縁部欠損	
50	137	27	土師器高坏	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		14.6 残6.0	内・外・断：5YR7/4にぶい橙	粗 焼成良 坏部の90%	坏部のみ
52	138	1	須恵器器台	A19	d3	北東	K1	井戸	10148		— 残30.1	内：N4/0　5Y5/4 外：N4/0 断：10YR6/2	密 焼成良 50%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
52	138	2	土師器直口壺	A19	d3	北東	K1	井戸	10148		推9.2 12.8	内：2.5Y7/3 外：5YR7/4～10YR8/2 断：2.5Y8/1	密 焼成良 90%	
	138	3	須恵器系土器 高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推19.8 残3.7	内・外：10YR7/2にぶい黄橙, 10YR5/2灰黄褐, 5YR7/3にぶい橙 断：10YR5/2灰黄褐5YR7/4にぶい橙	やや粗 焼成良 口縁部10%以下	反転復元
	138	4	須恵器系土器 高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		— 残2.5	内・外：2.5Y8/1灰白 断：2.5Y5/1黄灰	やや粗 焼成良 底部20%	反転復元 8.4g
52	138	5	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		10.8 5.5	内・断：N6/0灰 外：N6/0灰, 自然釉2.5GY7/1明オリーブ灰	密 焼成良 70%	
52	138	6	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		12.2 4.8	内・断：N6/0灰 外：N7/0灰白	密 焼成良 80%	
52	138	7	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		11.8 4.5	内・外・断：N6/0灰白	密 焼成良 70%	
	138	8	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推12.2 残4.2	内・断：N5/灰 外：N5/灰,N6/灰	やや密 焼成良好堅緻 25%	反転復元 三辻No.22-252 陶邑産
	138	9	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		12.0 残3.8	内：N4/灰 外：N6/灰 断：5RP5/1紫灰	密 焼成良好堅緻 70%	
	138	10	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推10.0 残4.2	内・外：N5/灰 断：5RP4/1暗紫灰	やや粗 焼成良好堅緻 25%	反転復元 三辻No.22-25 1 陶邑産
	138	11	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推10.4 残4.7	内：N4/灰 外：N5/灰,N8/灰白 断：5RP4/1暗紫灰	密 焼成良好堅緻 40%	反転復元
	138	12	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推12.8 残3.6	内・外：N6/灰 断：N5/灰	やや密 焼成良好堅緻 10%以下	反転復元
52	138	13	須恵器短頸壷	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推8.8 残6.1	内・外・断：N5/灰	やや密 焼成良好堅緻 口縁部30%	反転復元
53	138	14	須恵器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推10.8 9.1	内・外・断：N6/0灰白	密 焼成良 70%	一部反転復元
53	138	15	須恵器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推10.0 9.6	内・断：N6/0灰 外：2.5GY5/1オリーブ灰	密 焼成良 70%	一部反転復元
	138	16	須恵器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		— 残6.3	内・外・断：N6/灰	密 焼成良好堅緻 脚部完形	一部反転復元
	138	17	須恵器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		— 残5.3	内・外：N6/灰 断：5YR4/8赤褐	密 焼成良好堅緻 脚部完形	一部反転復元
	138	18	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推20.0 残5.7	内：N4/灰 外：N4/灰,N6/灰 断：5RP5/1紫灰	やや粗 焼成良好堅緻 口縁部10%以下	反転復元
	138	19	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推17.2 残3.9	内：N2/黒（自然釉） 外：N5/灰 断：N4/灰	密 焼成良好堅緻 口縁部10%以下	反転復元
	138	20	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推21.4 残6.8	内・外：N6/灰 断：5R5/1赤灰	やや密 焼成良好堅緻 口縁部10%以下	反転復元
53	138	21	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		21.9 残10.0	内：N6/0灰 外：N5/0灰,自然釉5GY8/1灰白 断：N7/0灰白,2.5YR5/1赤灰	密 焼成良 20%	
54	138	22	陶質土器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		17.0 残25.2	内・外・断：N5/灰	やや密 焼成良 口縁部60%,体部30%	三辻No.22-253 伽耶産か 一部反転復元
	138	23	韓式器系土器 甑	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推19.0 残5.1	内・外：7.5YR5/2灰褐,7.5Y3/1黒褐 断：7.5YR7/2明褐灰	やや密 焼成良 口縁部10%以下	反転復元 8.4g
	138	24	韓式系土器鉢	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推16.0 残5.7	内・外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	やや粗 焼成良 口縁部10%以下	反転復元
	139	1	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.2 7.0	内：5YR7/4にぶい橙,10YR6/3にぶい黄橙 外：5YR7/4にぶい橙,10YR6/3にぶい橙,　N4/灰 断：10YR6/3にぶい黄橙	密 焼成良 80%	48.2g 取No.5
	139	2	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推4.5 6.6	内・断：5Y4/1灰 外：5Y4/1灰、7.5YR5/4にぶい褐	やや密 焼成良瓦質 60%	一部反転復元 37.3g 取No.5
	139	3	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.2 7.6	内・断：2.5Y6/2灰黄 外：2.5Y6/2灰黄,10YR5/2灰黄褐, 2.5Y3/1黒褐	やや密 焼成良瓦質 60%	一部反転復元 40.1g 取No.5
	139	4	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推4.2 7.5	内：7.5YR6/4にぶい橙 外・断：7.5YR6/4にぶい橙, 2.5Y5/2暗灰黄	密 焼成良やや瓦質 60%	45.3g 取No.5
	139	5	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		3.9 7.8	内・外：7.5YR6/2灰褐,N3/暗灰 断：7.5YR6/2灰褐	やや粗 焼成良 70%	51.0g 取No.5
	139	6	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.3 7.1	内・断：2.5YR5/6明赤褐 外：2.5YR5/6明赤褐, 7.5YR5/3にぶい褐,2.5Y7/1灰白	やや粗 焼成やや不良 80%	44.3g 取No.5
	139	7	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.0 7.3	内：7.5YR5/4にぶい褐,2.5Y5/1黄灰 外：7.5YR5/4にぶい褐, 10YR5/3にぶい黄褐 断：2.5Y5/1黄灰	やや密 焼成良瓦質 70%	43.6g 取No.5
	139	8	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.3 7.4	内・断：N6/灰 外：N6/灰,N2黒	やや密 焼成良やや瓦質 60%	32.9g 取No.5
	139	9	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.0 7.65	内・断：7.5YR5/2灰褐 外：7.5YR5/4にぶい褐、N2/黒	密 焼成良やや瓦質 80%	49.1g 取No.5

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	139	10	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.45 6.95	内・断：5Y5/1灰 外：5Y5/1灰、10YR4/2灰黄褐	密 焼成良瓦質 60%	36.9g 取No.5
	139	11	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.2 7.75	内・外：7.5YR6/3にぶい褐,2.5Y3/1黒褐 断：7.5YR6/3にぶい褐	密 焼成良瓦質 60%	43.4g 取No.5
	139	12	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.5 7.1	内・断：5Y5/1灰 外：5Y5/1灰、7.5YR5/2灰褐	やや密 焼成良瓦質 50%	一部反転復元 34.8g 取No.5
	139	13	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.0 7.5	内・外：7.5YR6/4にぶい橙 断：7.5YR6/4にぶい橙,10YR6/1褐灰	密 焼成良 70%	39.9g 取No.5
	139	14	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推3.7 7.35	内・外・断：5Y6/1灰～5/1灰	やや密 焼成良瓦質 50%	一部反転復元 34.2g 取No.5
	139	15	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		3.8 7.2	内・外・断：N4/灰～N5/灰	やや粗 焼成良瓦質 50%	34.3g 取No.5
	139	16	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.6 残7.6	内：10YR6/2灰黄褐,7.5YR6/4にぶい橙 外：10YR6/2灰黄褐,7.5YR6/4にぶい橙,N2/黒 断：10YR6/2灰黄褐	密 焼成良 70%	39.0g 取No.5
	139	17	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.2 7.75	内：5YR5/6明赤褐、10YR6/2灰黄褐 外：5YR5/6明赤褐,N5/灰 断：5YR5/6明赤褐	密 焼成良やや瓦質 50%	一部反転復元 29.7g 取No.5
	139	18	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		3.8 7.05	内・断：10YR5/2灰黄褐 外：10YR5/2灰黄褐,7.5YR5/3にぶい褐,N3/暗灰	密 焼成良やや瓦質 60%	37.7g 取No.5
	139	19	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		3.9 7.4	内・断：5Y6/1灰 外：5Y6/1灰、5Y4/1灰	やや粗 焼成良やや瓦質 60%	一部反転復元 39.3g 取No.5
54	139	20	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推4.0 6.6	内：5Y5/1灰 外：5Y4/1灰、10YR7/3にぶい黄橙 断：5Y6/1灰	密 焼成良 50%	一部反転復元
54	139	21	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推5.4 7.3	内：7.5YR5/4にぶい褐 外：5YR6/4にぶい橙,5YR6/1褐灰 断：7.5YR6/１褐灰	密 焼成良 30%	反転復元
54	139	22	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推4.6 残6.7	内：5YR6/6橙 外：7.5YR6/4にぶい橙 断：5YR5/6明赤褐	密 焼成良好 20%	反転復元
	139	23	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		4.3 7.1	内・断：5Y5/1灰 外：5Y5/1灰、N3/暗灰	やや粗 焼成良瓦質 60%	一部反転復元 36.1g 取No.5
	139	24	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推4.0 残7.0	内・外・断：2.5YR6/6橙	やや密 焼成良好堅緻 15%	反転復元
53	139	25	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		10.9 4.0	内：10YR7/2にぶい黄橙,5YR6/6橙 外・断：10YR7/2にぶい黄橙	やや密 焼成良 95%	
53	139	26	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		9.8 3.6	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	やや密 焼成良 95%	
	139	27	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推9.7 残3.1	内：10R5/4赤褐 外：10R5/4赤褐、5YR7/4にぶい橙 断：10R6/6赤褐	やや粗 焼成良好 25%	反転復元
	139	28	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推10.2 残3.7	内：10Y6/4にぶい赤橙、10YR7/1灰白 外：2.5Y7/2灰黄、2.5YR6/6橙 断：N3/暗灰	やや粗 焼成良好 30%	反転復元
53	139	29	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		9.5 3.7	内：5YR7/4にぶい橙 外：5YR7/3にぶい橙,2.5YR6/6橙 断：2.5Y7/1灰白	やや密 焼成良 100%	
53	139	30	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		9.6 3.5	内：10YR7/1灰白,10YR5/2灰黄褐 外：10YR6/1褐灰,10YR7/1灰白 断：10YR7/1灰白	やや密 焼成良 90%	
	139	31	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推9.8 残3.9	内：10R6/1赤灰、10R6/6赤橙 外：10YR7/2にぶい黄橙、10R5/6赤、7.5YR7/3にぶい橙 断：10R6/2灰赤、10R7/1灰白	やや粗 焼成良好 40%	反転復元
58	139	32	製塩土器	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		10.2 3.6	内：7.5Y5/1灰 外：7.5Y7/1灰白、スス7.5Y4/1灰 断：10YR6/3にぶい黄橙	粗 焼成不良 90%	
	139	33	土師器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推14.5 残14.1	内：7.5YR7/2明褐灰，10YR7/2にぶい黄橙、10YR5/2灰黄褐 外：10YR6/3にぶい赤橙、5YR4/1褐灰 断：10R5/2灰赤、2.5Y7/1灰白	密 焼成良好 20%	反転復元
53	139	34	土師器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推8.8 9.8	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR8/2灰白 断：10YR6/3にぶい黄橙	密 焼成良 40%	反転復元
53	139	35	土師器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推8.6 残8.3	内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR6/3にぶい黄橙	密 焼成良 30%	反転復元
54	139	36	土師器甑	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		25.2 残30.5	内：10YR7/3にぶい黄橙、7.5YR7/3にぶい橙 外：10YR7/3にぶい黄橙、7.5YR7/3にぶい橙、N2/黒 断：10YR7/3にぶい黄橙	やや粗 焼成良 口縁部60%	一部反転復元
	139	37	土師器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推14.2 残3.8	内・断：10YR8/2灰白, 外：10YR8/2灰白,7.5YR7/2明褐灰	やや密 焼成良 口縁部20%	反転復元 8.4g

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
53	139	38	土師器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		15.9 残10.7	内：5YR6/6橙 外：5YR6/6橙,7.5YR7/3にぶい橙 断：5YR6/3にぶい橙	粗 焼成やや不良 60%	一部反転復元
	139	39	土師器直口壷	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推8.0 残7.2	内・外：7.5Y7/3にぶい橙 断：2.5Y7/1灰白	密 焼成良 口縁部25%	反転復元 8.4g　取No.10
	139	40	土師器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		— 残8.9	内：2.5YR6/6橙、2.5YR5/1赤灰 外：2.5YR6/6橙、7.5YR6/1褐灰 断：7.5YR5/2灰褐	やや粗 焼成良好 脚部75%	一部反転復元
	139	41	土師器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推21.0 残10.3	内・外・断：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 10%以下	反転復元
	140	1	韓式系土器 カマド	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推25.0 残10.2	内：7.5YR6/3にぶい褐,7.5YR6/1褐灰 外：5YR6/4にぶい橙,5Y6/1灰 断：5Y7/1灰白	粗 焼成良 口縁部15%	反転復元 取No.6
	140	2 −1	韓式系土器 カマド	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		推28.0 残13.2	内：7.5YR6/3にぶい褐 外：5YR6/3にぶい橙, 2.5YR5/4にぶい赤褐 断：7.5YR8/2灰白	粗 焼成良 口縁部20%	反転復元 取No.6
	140	2 −2	韓式系土器 カマド	A19	e1	北東	K1	土坑	10144		— 残17.0	内・断：7.5YR6/3にぶい褐 外：7.5YR6/3にぶい褐,10YR6/1褐灰	やや粗 焼成良 底部25%	取No.6 取No.4
54	141	1	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		12.7 6.3	内：N6/0灰 外・断：N7/0灰白	密 焼成良 100%	
	141	2	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推12.0 残3.9	内：N5/0灰 外：N6/0灰,自然釉7.5Y8/1灰白, 7.5Y5/3灰オリーブ 断：N6/0灰,10R5/1赤灰	密 焼成良好 50%	反転復元
	141	3	須恵器坏蓋	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		推11.6 4.8	内・断：N5/0灰 外：N6/0灰,自然釉10Y8/1灰白	密 焼成良好 50%	反転復元
54	141	4	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	土坑	10138		12.0 4.6	内：N5/0灰 外：N6/0灰 断：N4/0灰	密 焼成良 80%	
	141	5	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		11.8 残4.7	内：N5/0,N6/0灰 外：N6/0灰 断：N7/0灰	密 焼成良好 50%	一部反転復元
	141	6	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推13.0 残5.0	内・外：N5/0灰 断：N6/0灰	密 焼成良好 40%	反転復元
54	141	7	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推10.0 4.3	内：N5/0灰 外：N5/0灰,自然釉5GY7/1明オリーブ灰 断：10R4/2赤灰	密 焼成良 90%	一部反転復元
54	141	8	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	土坑	10138		11.2 5.2	内・外・断：N7/0灰白	密 焼成良 90%	
	141	9	須恵器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推15.0 残4.0	内：N5/0灰,自然釉10Y8/1灰白 外：2.5GY4/1暗オリーブ灰 断：N5/0灰	密 焼成良好 10%	反転復元
	141	10	須恵器高坏	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		— 残5.0	内・断：N5/0灰 外：N5/0灰,N8/0灰白	密 焼成良好 15%	反転復元
	141	11	須恵器高坏	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		— 残3.2	内・断：N6/0灰 外：N6/0灰,自然釉N8/0灰白	密 焼成良好 20%	反転復元
	141	12	土師器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推21.6 残6.7	内：7.5YR7/2明褐灰 外：7.5YR7/3にぶい橙,7.5YR6/1褐灰 断：7.5YR7/2明褐灰	やや密 焼成良好 10%	反転復元
	141	13	土師器甕	A19	e2	北東	K1	土坑	10138		推23.6 残7.0	内・断：7.5YR8/1灰白 外：7.5YR7/2明褐灰	粗 焼成良 口縁部10%	反転復元
	141	14	土師器鉢	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		推13.0 残5.0	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：7.5YR7/6橙 断：7.5YR6/3にぶい橙	密 焼成良 20%	反転復元
	141	15	土師器鉢	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推13.6 残4.3	内：2.5Y7/2灰黄 外・断：2.5Y7/2灰黄,2.5Y3/1黒褐	やや密 焼成良好 20%	反転復元
	141	16	土師器高坏	A19	e2	北東	K1	土坑	10138		推23.8 残7.7	内：7.5YR7/3にぶい橙、7.5YR4/1褐灰 外：7.5YR7/4にぶい橙 断：7.5YR7/3にぶい橙	やや密 焼成良好 10%	反転復元
	141	17	須恵器系土器 高坏	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		— 残5.6	内・外：7.5YR7/2明褐灰 外：2.5Y8/1灰白	やや密 焼成良 小変片	一部反転復元
	141	18	韓式系土器 カマド	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		— — —	内：2.5YR6/4にぶい橙 外：7.5Y7/4にぶい橙 断：7.5YR6/2灰褐	粗 焼成良 少片	
	141	19	韓式系土器鍋	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		推31.0 残2.9	内・外：10YR6/2灰黄褐,N4/灰 断：2.5Y7/1灰白	粗 焼成良 口縁部10%以下	反転復元
	141	20	韓式系土器甑	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		推22.6 残5.7	内：7.5YR5/1褐灰 外：7.5YR5/1褐灰,5YR6/3にぶい橙 断：7.5YR7/1明褐灰	やや密 焼成良 口縁部10%	反転復元
	141	21	土師器甑	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		推22.2 残9.9	内：10YR6/2灰黄褐,10YR3/1黒褐 外：10YR7/2にぶい黄橙 断：10YR6/1褐灰	やや密 焼成良好 10%	反転復元
	141	22	土師器甑	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推25.1 残18.7	内・外・断：10YR6/2灰黄褐	粗 焼成良 口縁部10%把手は先端欠け片方のみ	反転復元 机上合成

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成 ・残存率	
	141	23	土師器甑	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推32.0 残8.5	内・断：10YR6/2灰黄褐 外：10YR6/2灰黄褐,10YR4/1褐灰 断：2.5Y7/1灰白	粗 焼成良 口縁部10%以下	反転復元
	141	24	土師器甑	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推31.0 推27.0	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR7/3にぶい橙、N3/暗灰 断：10YR8/1灰白	やや粗 焼成良 口縁部25%,底部25%	反転復元 机上合成
	142	1	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推4.2 7.1	内・断：5Y5/1灰 外：7.5YR6/4にぶい橙,10YR6/2灰黄褐	やや密 焼成良 40%	反転復元 22.1g
	142	2	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推4.4 6.75	内・断：2.5Y5/1黄灰 外：2.5Y5/1黄灰,10YR6/2灰黄褐, 2.5Y3/1黒褐	やや粗 焼成良 40%	反転復元 24.9g
	142	3	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推3.8 6.65	内・断：5YR6/4にぶい橙 外：5YR6/4にぶい橙,10YR5/1褐灰	やや密 焼成良 40%	反転復元 20.5g
	142	4	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推4.0 6.2	内・断：5Y6/1灰 外：5Y6/1灰、10YR6/2灰黄褐	密 焼成良 口縁部25%	反転復元 15.1g
	142	5	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推3.8 7.5	内・断：N7/灰白 外：N7/灰白,5YR7/3にぶい橙	密 焼成良 20%	反転復元 9.8g
	142	6	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推4.0 残6.7	内：5Y8/1灰白,N4/灰 外：5Y8/1灰白,N4/灰,10R7/1明赤灰 断：5Y8/1灰白	粗 焼成良 20%	反転復元 9.4g
	142	7	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推4.2 残7.05	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：7.5YR6/4にぶい橙,10YR4/1褐灰 断：10YR4/1褐灰	粗 焼成良 口縁部25%	反転復元 16.3g
	142	8	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		3.6 残3.8	内・断：10YR6/2灰黄褐 外：10YR6/2灰黄褐,N3/暗灰	密 焼成良 口縁部60%	一部反転復元 16.6g
	142	9	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推4.2 残7.3	内：2.5Y6/2灰黄 外：7.5YR5/4にぶい褐 断：2.5Y6/1褐灰	密 焼成良 40%	反転復元
	142	10	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推3.8 残5.5	内：5YR6/6橙 外：5YR5/4にぶい赤橙 断：5YR6/2灰褐	密 焼成良 40%	反転復元
	142	11	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		— 残3.2	内：2.5Y7/1灰白 外：2.5Y6/1黄灰,N3/暗灰 断：2.5Y6/1黄灰	粗 焼成良 底部完形	一部反転復元 24.9g
	142	12	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		— 残4.8	内：10YR8/2灰白,5YR7/4にぶい橙 外・断：10YR8/2灰白	粗 焼成良 底部完形	一部反転復元 27.3g
	142	13	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推10.0 残3.3	内：2.5Y7/1灰白,5YR7/3にぶい橙 外：2.5Y7/1灰白 断：2.5Y8/1灰白	密 焼成良 口縁部23%	反転復元
	142	14	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推10.4 残3.6	内：5YR7/3にぶい橙,2.5YR4/1赤灰、 2.5YR5/6明褐灰 外・断：7.5YR7/2明褐灰	密 焼成良好 20%	反転復元
	142	15	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推11.0 残3.6	内：10YR8/1灰白,10YR7/3にぶい黄橙 外・断：10YR8/1灰白	密 焼成良 口縁部25%	反転復元
	142	16	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推11.0 残3.65	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：5YR7/2明褐灰,2.5YR6/4にぶい橙 断：7.5YR7/3にぶい橙	密 焼成良 口縁部10%	反転復元
	142	17	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推9.0 4.2	内・断：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/2灰白,2.5Y5/1黄灰	やや粗 焼成良 口縁部20%	反転復元 14.6g
	142	18	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推10.2 3.3	内：2.5YR7/3赤橙、5Y8/1灰白、5Y5/1 灰 外：5YR7/4にぶい橙、10YR6/2灰黄 褐、5Y5/1灰 断：5Y5/1灰	やや粗 焼成良 20%	一部反転復元 30.1g
	142	19	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推9.7 残3.8	内・断：10YR8/1灰白 外：10YR8/1灰白,10YR5/2灰黄褐	やや密 焼成良 口縁部30%	反転復元 16.3g
	142	20	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		10.3 4.3	内：10YR8/1灰白,5YR7/6橙 外：2.5Y8/1灰白,7.5YR7/3にぶい橙 断：10YR8/1灰白	密 焼成良 75%	
	142	21	製塩土器	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推11.0 残3.8	内：2.5Y8/1灰白,N4/灰 外：2.5Y8/1灰白 断：2.5Y8/1灰白,N6/灰	やや粗 焼成良 口縁部20%	反転復元
	142	22	土師器鉢	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推5.0 残5.8	内・断：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y7/3浅黄,2.5Y4/1黄灰	密 焼成良好 25%	反転復元
	142	23	土師器甕	A19	e1・2	北東	K1	土坑	10138		推6.2 残3.4	内・断：10YR6/2灰黄褐 外：10YR6/2灰黄褐,N3/暗灰	やや粗 焼成良 口縁部30%	反転復元
	142	24	土師器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推7.6 残3.9	内・断：2.5Y7/3浅黄 外：5YR6/6橙、7.5YR7/6橙	やや密 焼成良好 20%	反転復元
	142	25	土師器小型壷	A19	e2	北東	K1	土坑	10138		推7.5 残5.1	内・断：7.5YR8/4浅黄橙,7.5YR6/6橙 外：7.5YR8/3浅黄橙,2.5YR7/6橙 断：2.5YR7/6橙、2.5Y6/1黄灰	密 焼成良 40%	一部反転復元
54	142	26	土師器小型壷	A19		北東	K1	土坑	10138？		6.9 6.5	内：2.5Y7/2灰黄 外・断：2.5Y7/3浅黄	密 焼成良 80%	
	142	27	土師器甕	A19	e1	北東	K1	土坑	10138		推10.2 残4.9	内・断：10YR5/2灰黄褐 外：2.5YR6/4にぶい橙、5YR5/1褐灰 断：2.5YR6/4にぶい橙	粗 焼成良 頸部20%	反転復元
55	142	28	須恵器坏蓋	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推15.7 7.1	内・断：N5/0灰 外：N6/0灰	密 焼成良好 50%	一部反転復元
55	142	29	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		12.2 5.4	内・断：N8/0灰白 外：N7/0灰白	密 焼成良好 90%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
55	142	30	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		11.8 4.7	内・断：N5/0灰 外：N6/0灰	密 焼成良 80%	
	142	31	須恵器坏身	A19	e2 e2・e3	北東	K1	土坑	10003		9.8 5.2	内・断：2.5YR5/3にぶい赤褐 外：N6/灰	やや密 焼成良好堅緻 80%	
	142	32	須恵器坏身	A19	e2 e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推14.0 残6.0	内・外・断：N5/灰	やや粗 焼成良好堅緻 坏部40%	反転復元 三辻No.22-255 陶邑産
55	142	33	須恵器坏蓋	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推10.7 4.7	内・断：N5/0灰 外：N6/0灰,N7/0灰白	密 焼成良好 90%	一部反転復元
	142	34	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		11.8 4.5	内・外：N6/灰 断：N4/灰	密 焼成良好堅緻 70%	三辻No.22-254 陶邑産
55	142	35	須恵器坏身	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		10.1 4.9	内・断：N6/0灰 外：N5/0灰	密 焼成良好 100%	
	142	36	須恵器坏身	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		10.3 5.3	内：N6/灰 外：N5/灰,N7/灰白 断：N7/灰白	密 焼成良好堅緻 75%	
	142	37	須恵器坏身	A19	e2 e2・e3	北東	K1	土坑	10003		10.5 5.7	内・断：N7/灰白 外：N6/灰	密 焼成良好堅緻 50%	
55	142	38	須恵器坏身	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		12.5 5.2	内：N6/0灰 外：N6/0灰,自然釉N8/0灰白 断：N5/0灰	密 焼成良好 100%	
55	142	39	須恵器高坏	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		9.8 9.2	内・断：2.5Y7/1灰白、 赤色顔料5YR7/2明褐灰 外：2.5Y7/1灰白、5YR7/4にぶい橙, ス5Y4/1灰	やや粗 焼成不良 80%	一部反転復元
55	142	40	須恵器高坏	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		10.7 9.0	内・外・断：N7/0灰白	やや密 焼成良 95%	
	142	41	須恵器高坏	A19	d2・d3 e2・e3	北東	K1	土坑	10003		— 残4.4	内：N5/灰,N4/灰 外・断：N5/灰	密 焼成良好堅緻 脚部20%	反転復元 ヘラ記号「×」
	142	42	須恵器高坏	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		— 残5.5	内・外・断：N6/灰	密 焼成良好堅緻 坏部30%、脚部完形	一部反転復元
	142	43	須恵器高坏	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		— 残3.7	内・外・断：N5/灰	密 焼成良好堅緻 脚部完形	一部反転復元
	142	44	須恵器壷	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推11.6 残4.1	内：N7/灰白,N5/灰 外・断：N4/灰	密 焼成良好堅緻 口縁部25%	反転復元 ヘラ記号「×」 三辻No.22-256 陶邑産 (I第213-28,K2-ズ69)
	142	45	須恵器甕	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推17.4 残5.8	内：N7/灰白、N4/灰 外：N5/灰 断：5YR5/1赤灰	密 焼成良好堅緻 口縁部25%	反転復元 ヘラ記号「×」 三辻No.22-256 陶邑産 (I第213-28,K2-ズ69)
55	142	46	須恵器★	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推10.7 10.2	内:N6/0灰,2.5YR5/2灰赤, 自然釉2.5GY8/1灰白 外：N5/0灰,自然釉2.5GY8/1灰白 断：不明	密 焼成良好 90%	一部反転復元
	143	1	製塩土器	A19	e2・3	北東	K1	土坑	10003		推6.4 5.8	内・外：7.5YR7/2明褐灰 外：N7/灰白,N3/暗灰	やや密 焼成やや不良 40%	23.3g 取No.2
	143	2	製塩土器	A19	e2・3	北東	K1	土坑	10003		推6.0 残4.9	内・外・断：2.5Y8/1灰白	密 焼成良やや瓦質 口縁部20%	反転復元 7.7g
	143	3	製塩土器	A19	e2・3	北東	K1	土坑	10003		推8.4 5.05	内：5YR7/3にぶい橙,5YR5/2灰褐 外：5YR8/1灰白,N6/灰 断：N3/暗灰	やや粗 焼成良 口縁部25%	反転復元 8.4g
	143	4	製塩土器	A19	e2・3	北東	K1	土坑	10003		推9.8 2.9	内・断：2.5Y7/2灰黄 外：5YR7/2明褐灰,N8/灰白,N5/灰 断：N8/灰白	粗 焼成良 口縁部10%	反転復元 15.4g
	143	5	製塩土器	A19	d2 ・3 e2 ・3	北東	K1	土坑	10003		推9.4 残2.75	内・外：7.5YR6/4にぶい橙,N6/灰 断：N6/灰	やや粗 焼成良 口縁部25%	反転復元 11.9g
	143	6	製塩土器	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推10.2 残3.2	内：5YR7/2明褐灰 外：5YR7/2明褐灰,5YR5/1褐灰 断：5YR5/1褐灰	粗 焼成良 40%	反転復元 45.8g
	143	7	製塩土器	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推10.6 3.35	内：N6/灰,5YR7/4にぶい橙 外：N6/灰,5YR6/2灰褐 断：N6/灰	粗 焼成良 口縁部25%	反転復元 28.2g
	143	8	土師器鉢	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推13.0 残3.8	内・外：10YR6/2灰黄褐 断：5YR5/3にぶい赤褐	やや粗 焼成良好 10%以下	反転復元
	143	9	須恵器系土器 高坏	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		— 残9.8	内：5YR7/6橙 外：7.5YR7/3にぶい橙 断：7.5YR6/2灰褐	密 焼成良好 脚部60%	一部反転復元
	143	10	須恵器系土器 高坏	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		— 残5.4	内：7.5YR7/3にぶい橙 外：7.5YR7/4にぶい橙、5YR6/6橙 断：7.5YR6/3にぶい褐	やや密 焼成良好 脚部20%以下	反転復元 （スカシ4方向）
	143	11	土師器小型壷	A19	e2 e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推7.6 6.5	内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR5/1褐灰	やや粗 焼成良好 50%	一部反転復元
58	143	12	土師器小型壷	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		7.2 6.5	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR6/1褐灰	やや密 焼成良 95%	
58	143	13	土師器甕	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推8.5 10.8	内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR5/4にぶい黄褐	やや粗 焼成不良 80%	一部反転復元
	143	14	土師器甕	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推10.0 残4.4	内：7.5YR5/2灰褐 外：2.5YR7/2明赤灰,10R6/2灰赤、 断：2.5YR6/1赤灰	やや密 焼成良好 口縁部25%	反転復元
	143	15	土師器甕	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推13.6 残10.6	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y6/2灰黄 断：7.5YR4/6褐	やや粗 焼成良好 口縁部50%, 体部一部	反転復元 外面黒斑

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成 ・残存率	
	143	16	土師器甕	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推14.5 残9.2	内：10YR7/2にぶい黄橙、 外：10YR7/2にぶい黄橙、 10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR7/1灰白	やや粗 焼成良好 口縁部25%, 体部一部	反転復元
	143	17	土師器甕	A19	d2・3 e2・3 e2 e2	北東	K1	土坑	10003		推19.8 残17.5	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙、5YR6/6橙 断：5YR6/6橙	やや密 焼成やや不良 10%以下	反転復元
	143	18	土師器甕	A19	e2・3 e2 e2・3	北東	K1	土坑	10003		推16.0 残6.4	内・外・断：2.5Y8/2灰白	やや密 焼成やや不良 口縁部25%	反転復元
	143	19	土師器甕	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推21.2 残6.2	内：10YR6/3にぶい黄橙,10YR8/3浅黄橙 外：10YR8/3浅黄橙,10YR5/1褐灰 断：10YR7/2にぶい黄橙	密 焼成良好 50%	反転復元
	143	20	土師器甕	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		推20.6 残6.2	内・外・断：10YR7/2にぶい黄橙	やや密 焼成良好 口縁部10%以下	反転復元
58	143	21	土師器長胴甕	A19	e2	北東	K1	土坑	10003		20.3 残30.5	内：10YR6/3にぶい黄橙、 外：10YR7/3にぶい黄橙、 5YR6/4にぶい橙 断：10YR7/3にぶい黄橙	やや粗 焼成良 口縁部60%,体部30%	一部反転復元
	143	22	土師器甑	A19	e2・e3	北東	K1	土坑	10003		推22.8 残15.5	内：5YR5/6明赤褐、10YR6/3にぶい黄橙 外：10R6/2灰黄褐、2.5YR5/8明赤褐 断：2.5YR5/3にぶい赤褐	やや粗 焼成良好 10%以下	反転復元
	144	1	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推14.6 4.0	内・外・断：N5/0灰	やや密 焼成良 50%	
	144	2	須恵器坏蓋	A19	e3	北東	K1	流路	08013		推13.2 3.9	内・外・断：N4/0灰	密 焼成良 50%	
	144	3	須恵器坏蓋	A19	d1	北東	K1	流路	08013		推14.2 4.6	内：N6/0灰 外：10YR5/1褐灰～2/1黒 断：5YR4/1暗赤灰	やや密 焼成良 50%	
	144	4	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推14.6 残3.9	内：2.5Y5/1黄灰 外：7.5YR4/1灰 断：5YR5/2灰褐	やや密 焼成良 66%	
	144	5	須恵器坏蓋	A19	d1	北東	K1	流路	08013		推14.7 4.1	内：N6/0灰 外：N3/0暗灰～6/0灰 断：7.5YR5/1褐灰	密 焼成良 50%	三辻No.22-249 陶邑産
56	144	6	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		13.4 4.2	内：N6/0灰 外：2/0黒 断：7/0灰白	やや密 焼成良 50%	
	144	7	須恵器坏蓋	A19	e2,e3	北東	K1	流路	08013		推14.4 4.4	内：5Y5/1灰 外・断：N6/0灰	密 焼成良 50%	
56	144	8	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		14.5 4.0	内：5Y4/1 外：N3/0暗灰～5/0灰 断：—	やや密 焼成良 50%	
	144	9	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推13.4 4.0	内：N6/0灰 外：N5/0灰～6/0灰 断：5R5/1赤灰	やや密 焼成良 50%	三辻No.22-247 陶邑産
	144	10	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推14.0 4.1	内・断：N6/0灰 外：10Y6/1灰	密 焼成良 50%	
	144	11	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推14.6 残3.8	内・断：10Y6/1灰 外：N5/0灰	やや密 焼成良 50%	三辻No.22-248,257 陶邑産
56	144	12	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		14.2 3.9	内・外・断：N5/0灰～6/0灰	密 焼成良 ほぼ完形	三辻No.22-245 陶邑産
	144	13	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推14.8 残3.9	内：N6/0灰 外：N6/0灰～8/0灰白 断：N5/灰	やや密 焼成良 66%	三辻No.22-246 産地不明
58	144	14	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	流路	08013		15.1 4.6	内・外・断：N7/0灰白	やや密 焼成良 90%	
56	144	15	須恵器蓋	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推9.8 3.4	内・断：N5/0灰 外：2.5YR4/1赤灰	密 焼成良好 50%	
	144	16	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推12.2 5.1	内・外・断：N5/0灰	やや密 焼成良 50%	
	144	17	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推13.0 残4.8	内：7.5YR4/1褐灰 外：N5/0灰 断：5YR5/2灰褐	やや粗 焼成良 25%	
	144	18	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推12.4 4.9	内・外・断：N6/0灰	密 焼成良 33%	
	144	19	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推13.0 4.9	内：10YR5/1褐灰 外・断：N6/0灰	密 焼成良 50%	
	144	20	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推13.0 4.9	内・外・断：N4/0灰	やや密 焼成良 66%	
56	144	21	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		12.5 4.5	内・外・断：N5/0灰	やや密 焼成良 90%	
	144	22	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推12.6 4.3	内・外・断：7.5Y5/1灰	密 焼成良 25%	
	144	23	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推12.7 4.4	内：10Y6/1灰 外：N5/0灰 断：5P6/1紫灰	やや粗 焼成良 50%	
56	144	24	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		12.4 4.0	内・外：N5/0灰～6/0灰	密 焼成良 ほぼ完形	
56	144	25	須恵器坏身	A19	e2	北東	K1	流路	08013		12.1 4.4	内・外・断：N4/0灰	やや密 焼成良 ほぼ完形	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
56	144	26	須恵器坏身	A19	d2	北東	K1	流路	08013		11.8 4.6	内・外・断：N6/0灰白	密 焼成良好 100%	
	144	27	須恵器鉢	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残7.9	内：N4/灰,N8/灰白 外：N4/灰,N8/灰白,N5/灰 断：2.5YR5/1赤灰	密 焼成良好堅緻 底部完形	一部反転復元
56	144	28	須恵器壷	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残9.1	内：N6/0灰 外：N5/0灰+N7/0灰白 断：N6/0灰	密 焼成良 60%	
	144	29	須恵器堤瓶	A19	e2	北東	K1	流路	08013		9.8 残12.5	内・断：N6/灰,5Y8/1灰白 外：N6/灰,N5/灰,5Y8/1灰白、 2.5Y7/1灰白 断：2.5YR6/1赤灰	やや密 焼成良好堅緻 口縁部完形	ヘラ記号あり
	144	30	須恵器器台	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残7.8	内・外：N5/灰,N8/灰白 断：N5/灰	やや密 焼成良好堅緻 底部20%	反転復元
56	144	31	須恵器高坏	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残11.7	内・外：N6/0灰 断：5YR6/3にぶい橙	粗 焼成良 脚部のみ80%	三辻No.22-250 陶邑産
	144	32	須恵器高坏	A19	d1	北東	K1	流路	08013		— 残8.3	内・断：N4/灰 外：N5/灰,N3/暗灰	密 焼成良好堅緻 脚底部35%	一部反転復元
	145	1	須恵器横瓶	A19	d1	北東	K1	流路	08013		12.6 残3.9	内・断：N5/灰 外：N5/灰,2.5YR6/1赤灰	やや粗 焼成良好堅緻 口縁部完形	一部反転復元
	145	2	須恵器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推17.1 残4.6	内・外：5Y6/1灰 断：5Y8/1灰白	密 焼成良好堅緻 口縁部40%	反転復元
	145	3	須恵器甕	A19	d1	北東	K1	流路	08013		推13.0 残6.2	内・外：5Y6/1灰,5Y5/2灰オリーブ 断：7.5YR7/3にぶい橙	密 焼成良好堅緻 口縁部20%	反転復元
	145	4	須恵器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推17.9 残5.8	内：N7/0灰白,N6/0灰 外：N6/0灰,N5/0灰 断：N8/0灰白	密 焼成良 10%	反転復元 拓本
	145	5	須恵器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推19.8 残5.8	内：N6/0灰 外：N5/0灰 断：～N6/0灰	密 焼成良 10%	反転復元 遺物コンテナ３函
	145	6	須恵器甕	A19	e1・2	北東	K1			8面	推21.4 残5.7	内：2.5Y6/1黄灰,N4/灰～N5/灰 外・断：2.5Y6/1黄灰	やや密 焼成良好堅緻 口縁部10%	反転復元
	145	7	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推18.8 残6.3	内・外・断：N7/灰白	やや粗 焼成良好堅緻 口縁部20%	反転復元
	145	8	須恵器甕	b19	e2	北東	K1	流路	08013		推18.0 残8.0	内：N4/灰～N5/灰,N8/灰白 外：N4/灰～N5/灰 断：2.5YR5/1赤灰	やや粗 焼成良好堅緻 口縁部30%	反転復元
57	145	9	須恵器横瓶	A19	d1・2 e1・2	北東	K1	流路	08013		12.2 残31.1	内・外・断：N6/灰	やや密 焼成良好堅緻 口縁部95% 底体部50%	三辻No.22-253 伽耶産か 一部反転復元
	145	10	須恵器系土器 高坏	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推15.8 残4.0	内・外・断：10YR7/4にぶい黄橙	密 焼成良 5%	反転復元 畦より東
	145	11	須恵器系土器 高坏	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推17.8 残4.8	内：5YR7/3にぶい橙 外・断：7.5YR8/2灰白	密 焼成良 5%	反転復元 畦より東
	145	12	須恵器系土器 高坏	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推18.4 残4.3	内：5YR6/6橙 外：5YR7/6橙 断：7.5YR8/1灰白	密 焼成良 5%	反転復元
	145	13	須恵器系土器 高坏	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残11.4	内：7.5YR8/2灰白,7.5YR6/3にぶい褐 外・断：7.5YR8/2灰白	やや密 焼成やや不良 基部ほぼ完形	一部反転復元
	145	14	須恵器系土器 高坏	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残4.9	内・断：5YR7/6橙 外：5YR6/6橙,7.5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 5%	反転復元
	145	15	須恵器系土器 高坏	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残11.4	内・外：5YR7/4にぶい橙,2.5Y7/1灰白 断：2.5Y7/1灰白	密 焼成やや良 基部ほぼ完形	一部反転復元
	146	1	土師器甑	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推25.0 残7.0	内：10YR5/4にぶい黄橙 外：2.5YR6/3にぶい黄 断：10YR6/3にぶい黄橙	やや密 焼成良 5%	反転復元 遺物コンテナ３函
	146	2	土師器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推21.6 残5.3	内・外：2.5Y6/1黄灰 断：N6/灰	密 焼成良 5%	反転復元 遺物コンテナ３函
	146	3	土師器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013	流路13 北肩堀 り残し	推19.6 残9.0	内：7.5YR8/3浅黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙 断：10YR7/1灰白	密 焼成良 5%	反転復元
	146	4	土師器甑	A19	d1	北東	K1	流路	08013		推24.6 残23.2	内：7.5YR6/3にぶい褐 外：5YR6/3にぶい橙、 7.5YR7/2明褐灰、N2/黒 断：7.5YR7/2明褐灰	やや粗 焼成良 口縁部45%	反転復元
58	146	5	土師器長胴甕	A19	e2	北東	K1			第9面 掘り 下げ	推19.5 残31.6	内：10YR7/2にぶい黄橙、10YR4/2灰黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙、10YR4/1褐灰 断：10YR7/2にぶい黄橙	やや密 焼成良 口縁部ほぼ完形, 体部50%	一部反転復元 *流露13より南
	146	6	土師器甑	A19	d1	北東	K1	流路	08013		推25.0 残29.7	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR7/2にぶい黄橙、N2/黒 断：10YR7/2にぶい黄橙	密 焼成良好 口縁部10%以下 底部25%	反転復元
58	146	7	土師器長胴甕	A19	d1	北東	K1	流路	08013		— 残35.2	内・断：2.5Y6/2灰黄 外：10YR4/2灰黄褐、10YR1.7/1黒	やや密 焼成良 底部50%	一部反転復元
	146	8	土師器長胴甕	A19	d1.2e1.2	北東	K1	流路	08013		推19.0 推36.0	内・断：7.5YR6/4にぶい橙, 7.5YR7/3にぶい橙 外：7.5YR6/4にぶい橙, 7.5YR7/3にぶい橙、 2.5YR7/4淡赤橙、10YR6/1褐灰	やや密 焼成良 口縁部75%	一部反転復元
57	147	1	土師器 ミニチュア鉢	A19	e2	北東	K1	流路	08013		6.9 3.4	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/1灰白 断：7.5YR7/3にぶい橙	粗 焼成不良 90%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	147	2	土師器小型壷	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推8.8 残3.0	内・外：10YR6/4にぶい黄橙 断：10YR6/2灰黄褐	密 焼成良 5%	反転復元
	147	3	土師器鉢	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推8.8 残4.3	内・外・断：5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 10%	反転復元 遺物コンテナ３函
	147	4	土師器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推8.8 残5.0	内：2.5Y7/1灰白 外：2.5Y7/2灰黄 断：N6/0灰	密 焼成良 20%	反転復元
57	147	5	土師器甕	A19	d1	北東	K1	流路	08013		推10.6 12.4	内・断:5YR6/6橙、10YR7/2黄橙 外:5YR6/4にぶい橙、10YR7/2黄橙、 N2/黒	やや粗 焼成良 口縁部30% 底体部50%	三辻No.22-253 伽耶産か 一部反転復元
	147	6	土師器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推11.8 残5.3	内：10YR3/1黒褐,10YR5/2灰黄褐 外：10YR4/1褐灰,10YR6/3にぶい黄橙 断：5YR6/3にぶい橙	密 焼成良 5%	反転復元 遺物コンテナ３函
	147	7	土師器壷	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推11.2 残13.5	内・外：7.5YR8/2灰白,5YR6/4にぶい橙 断：7.5YR8/2灰白、10YR5/1褐灰	やや密 焼成やや良 頸部50%	一部反転復元
57	147	8	土師器壷	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残8.7	内：10YR7/2にぶい黄橙、5YR5/6明赤褐 外：7.5YR6/3にぶい褐、5YR5/6明赤褐 断：2.5Y7/1灰白	密 焼成良 底部完形,頸部30%	三辻No.22-253 伽耶産か 一部反転復元
	147	9	土師器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推19.6 残4.3	内：10YR5/2灰黄褐 外：7.5YR7/4にぶい橙 断：7.5YR8/2灰白,2.5Y6/1黄灰	密 焼成良 5%	反転復元
	147	10	土師器甕	A19	e3	北東	K1	流路	08013		推11.8 残4.7	内：7.5YR5/2灰褐 外：7.5YR6/4にぶい橙 断：7.5YR7/4にぶい橙	密 焼成良 5%	反転復元 最下層砂
	147	11	土師器甕	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推15.3 残7.8	内：7.5YR4/1褐灰,7.5YR7/3にぶい橙 外：10YR4/1褐灰 断：7.5YR7/2明褐灰	密 焼成良 10%	反転復元
	147	12	土師器甕	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推19.6 残5.0	内・外・断：10YR6/3にぶい黄橙	やや粗 焼成良 口縁部25%	反転復元
	147	13	土師器甕	A19	e1	北東	K1	流路	08013		推19.6 残4.1	内・外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR8/2灰白	密 焼成良 5%	反転復元 畦より東
	147	14	土師質 円筒状土製品	A19	e2	北東	K1	流路	08013		推10.2 残5.3	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：7.5YR7/4にぶい橙 断：7.5YR6/4にぶい橙	密 焼成良 不明	反転復元
	147	15	土師質 円筒状土製品	A19	e1・e2	北東	K1			9面 流路 残り	推10.2 残5.8	内：10YR7/2にぶい黄橙、 7.5YR7/4にぶい橙 外：7.5YR6/4にぶい橙 断：7.5YR5/4にぶい橙	密 焼成良 不明	反転復元
	147	16	土師質 円筒状土製品	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残14.0	内：2.5Y7/2灰黄 外：10YR6/2灰黄褐,10YR5/2灰黄褐 断：2.5Y8/2灰白	密 焼成良 不明	反転復元
	147	17	土師器高坏	A19	e1	北東	K1	流路	08013		— 残5.8	内：5YR7/2明褐灰,N3/0暗灰 外：10YR7/3にぶい黄橙,N3/0暗灰 断：7.5YR8/2灰白	密 焼成良 10%	反転復元 畦より東
56	147	18	土師器高坏	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残8.7	内：7.5YR6/4にぶい橙, 7.5YR5/3にぶい褐 外・断：10YR6/3にぶい黄橙	粗 焼成良 脚部のみ95%	
	147	19	土師器羽釜	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— 残5.1	内・断：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y6/3にぶい黄,2.5Y3/1黒褐	密 焼成良 5%	反転復元 遺物コンテナ３函
	147	20	土師質支脚	A19	e2 e3	北東	K1	流路	08013 10074		7.6 11.85	内：2.5YR6/4にぶい橙, 10YR6/3にぶい黄橙,N2/黒 外：2.5Y5/1～4/1黄灰、 10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR6/3にぶい黄橙	粗 焼成良 60%	
	147	21	土師質カマド	A19	e1	北東	K1	流路	08013		— — —	内：7.5YR6/3にぶい褐,7.5Y3/1黒褐 外：7.5YR6/3にぶい褐 断：7.5YR7/1明褐灰 内：7.5YR6/2灰褐 外・断：10YR6/2灰黄褐	粗 焼成良 小片	
	147	22	土師質カマド	A19	e2	北東	K1	流路	08013		— — —	内：2.5Y6/1黄灰 外：2.5Y6/2灰黄 断：2.5Y7/2灰黄	粗 焼成良 少片	
	148	1	土師器甑	A19	e1	北東	K1		10118		推21.3 残4.7	内・外：10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR8/2灰白	密 焼成良 口縁部10%	反転復元
	148	2	製塩土器	A19	e1	北東	K1		10118		推12.2 残3.4	内：2.5YR6/6橙、7.5YR6/3にぶい褐 外・断：2.5YR6/1黄灰	粗 焼成良 口縁部10%	反転復元
	148	3	ふいごの羽口	A19	e2	北東	K1	土坑 竪穴	10138 10046		— —	内：10YR7/2にぶい黄橙,7.5YR6/6橙 外：10YR7/2にぶい黄橙,7.5YR6/6橙、 N8/～N7/灰白、N6/灰白 断：10YR7/2にぶい黄橙,7.5YR6/6橙、 2.5Y7/1灰白	密 焼成良 少片	
	148	4	ふいごの羽口	A19	e2	北東	K1		10132		— —	内：5YR7/6橙,10YR8/2灰白 外：N6/灰,N7/灰白,10YR8/2灰白 断：5YR7/6橙、2.5Y6/1黄灰	やや粗 焼成良 少片	
	148	5	ふいごの羽口	A19	d2	北東	K1		09034		— — —	内・断：5YR7/3にぶい橙, 5YR6/2灰褐,10YR8/1灰白 外：N6/灰白、10YR8/1灰白 断：10YR8/1灰白	密 焼成良 少片	
	148	6	須恵器蓋	A19	e1	北東	K1		10136		— 残2.5	内：N4/灰 外：N6/灰 断：5R4/1暗紫灰	やや粗 焼成良好堅緻 つまみ完形	一部反転復元
58	148	7	須恵器坏蓋	A19	d2	北東	K1	掘り方	09064		14.1 3.9	内：N6/0灰 外：N5/0灰 断：5YR5/3にぶい赤褐	やや密 焼成良 70%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	148	8	須恵器坏蓋	A19	d2	北東	K1		09034		推14.0 残4.1	内・外・断：N5/灰白	密 焼成良好堅緻 20%	反転復元
	148	9	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推15.1 残4.8	内・外・断：N5/灰白	やや密 焼成良好堅緻 口縁部20%	反転復元
	148	10	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推11.4 残3.3	内・外・断：N4/灰	密 焼成良好堅緻 口縁部25%	反転復元
	148	11	須恵器坏身	A19	d3	北東	K1	竪穴	09060		推11.8 残4.0	内・外・断：N6/0灰白	密 焼成良 30%	取上げ9 反転復元
	148	12	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推13.4 残4.65	内・外：N5/灰 断：N5/灰,2.5YR5/2赤灰	やや密 焼成良好堅緻 口縁部25%	反転復元
	148	13	須恵器高坏	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		— 残4.9	内・断：N5/灰 外：N5/灰,N7/灰白	密 焼成良好堅緻 脚底部25%	反転復元
	148	14	製塩土器	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推11.6 残5.9	内：7.5YR8/6浅黄橙 外：5YR7/4にぶい橙,2.5YR7/6橙 断：7.5YR8/1灰白,2.5YR7/6橙	やや粗 焼成良 口縁部10%	反転復元
	148	15	製塩土器	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推18.0 残5.9	内：7.5YR3/1黒褐 外・断：7.5YR6/4にぶい橙、 5YR6/4にぶい橙	粗 焼成良 口縁部15%	反転復元
	148	16	土師器甕	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推20.0 残4.6	内・外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR7/1灰白	粗 焼成良 口縁部10%	反転復元
	148	17	土師器鉢	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推13.0 残4.2	内・外：10YR7/2にぶい黄橙 断：10YR7/1灰白	やや粗 焼成良 口縁部20%	一部反転復元
	148	18	韓式系土器甑	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		— 残6.4	内：7.5YR7/3にぶい橙 外：7.5YR7/3にぶい橙,10YR5/2灰黄褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	やや密 焼成良 底部小片	反転復元
	148	19	土師器甑	A19	e1	北東	K1	竪穴	09060		推32.0 残4.6	内：10YR8/2灰白 外・断：10YR8/2灰白,N3/0暗灰	やや粗 焼成良 口縁部少片	反転復元
	148	20	須恵器坏身	A19	d2	北東	K1		09039		推12.0 残3.8	内・外：N5/灰白 外：7.5YR5/1赤灰、 7.5Y4/2灰オリーブ、N8/灰白	密 焼成良 20%	反転復元
	148	21	土師器甕	A19	d2	北東	K1		09039		推12.0 残12.2	内・断：10YR5/2灰黄褐,5YR6/4にぶい橙 外：10YR5/2灰黄褐, 5YR6/4にぶい橙,10YR4/1褐灰	やや粗 焼成良 口縁部25%	反転復元
	148	22	須恵器★？	A19	e2	北東	K1		09061		推12.3 残6.05	内・外：N4/灰,N8/灰白 断：10R5/2赤灰	密 焼成良好堅緻 口縁部少片	反転復元 取No.9
	148	23	須恵器高坏	A19	e2	北東	K1		09061		— 残3.8	内：N5/灰 外：N5/灰,N8/灰白 断：N6/灰	密 焼成良好堅緻 底部40%	反転復元 取No.9
	148	24	須恵器高坏	A19	e2	北東	K1	流路	08013 09061		— 残5.8	内：N5/灰 外：N5/灰,N8/灰白 断：5YR5/1褐灰	やや密 焼成良好堅緻 脚部40%	反転復元 取No.9
	148	25	土師器甑	A19	d2	北東	K1		09039		推25.4 残6.3	内：10YR6/3にぶい黄橙 外・断：2.5Y6/2灰黄	粗 焼成良 口縁部10%以下	反転復元
	148	26	土師器甕	A19	d3	北東	K1	溝	09001		推25.0 残8.3	内：10YR5/2灰黄褐 外：10YR5/2灰黄褐,N3/暗灰 断：2.5Y7/1灰白	やや密 焼成良 口頸部20%	反転復元
	149	1	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推13.6 残4.1	内：N4/0灰 外：5Y5/1灰 断：N6/0灰	密 焼成良 20%	反転復元 畦より東
	149	2	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推13.7 残4.0	内・外・断：N4/0灰白	密 焼成良 20%	反転復元 畦より西
	149	3	須恵器蓋	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推10.2 残3.3	内：N5/0灰 外：7.5YR5/1褐灰 断：2.5YR4/3にぶい赤褐,N5/0灰	密 焼成良 30%	反転復元 畦より東
	149	4	須恵器坏身	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推12.8 残5.8	内・断：N6/0灰 外：N5/0灰	密 焼成良 15%	反転復元
	149	5	須恵器坏蓋	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推13.3 残4.8	内・外：N5/0灰 断：7.5YR5/1赤灰	やや密 焼成良 15%	反転復元 畦より西
	149	6	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推18.8 残4.8	内・断：N5/0灰 外：N6/0灰	密 焼成良 5%	反転復元 畦より西
	149	7	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推21.4 残5.3	内・外・断：N4/0灰白	やや密 焼成良 5%	反転復元 畦より東
	149	8	須恵器甕	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推20.0 残6.9	内：N4/0灰 外：N4/0灰,7.5YR8/2灰白(自然釉) 断：N5/0灰	やや密 焼成良 5%	反転復元 畦より西
	149	9	土師器壷	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推10.2 残4.3	内・外：10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR6/3にぶい黄橙	やや密 焼成良 5%	反転復元 畦より東
	149	10	土師器壷	A19	e1・e2	北東	K1	溝	09062		推13.8 残3.2	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 5%	反転復元
	149	11	土師器壷	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推9.8 残5.7	内・外：7.5YR7/3にぶい橙 外：10YR4/1褐灰 断：7.5YR7/2明褐灰	やや密 焼成良 10%	反転復元 畦より西
	149	12	土師器壷	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推23.6 残6.0	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR6/4にぶい橙 断：7.5YR7/3にぶい橙	密 焼成良 5%	反転復元 畦より東
	149	13	土師器壷	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推25.6 残5.2	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：5YR6/4にぶい橙、 10YR7/3にぶい黄橙 断：10YR8/2灰白	やや密 焼成良 5%	反転復元 畦より東
	149	14	韓式系土器鍋	A19	e1	北東	K1	溝	09062		推32.0 残3.5	内：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR6/4にぶい黄橙 断：10YR6/2灰黄褐	やや密 焼成良 5%	反転復元 畦より東

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	149	15	土師器甑	A19	e1・e2	北東	K1	溝	09062		推21.2 残12.6	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR7/4にぶい橙 断：7.5YR8/1灰白	密 焼成良 10%	反転復元
57	149	16	須恵器坏蓋	A19	e2	北東	K1			西側法面検出時	14.8 4.2	内・外・断：N5/0灰白	やや粗 焼成良 70%	
57	149	17	須恵器坏身	A19		北東	K1			第6面精査	12.3 4.1	内・断：5YR6/2灰褐 外：5Y7/1灰白	密 焼成良 90%	
	149	18	須恵器坏身	A19	d1	北東	K1			第10面の上	12.6 4.2	内・断：N6/灰白 外：N6/灰白、N5/灰白	やや密 焼成良好堅緻 ほぼ完形	
	149	19	土師器甕	A19	e1	北東	K1			第10面	推19.6 残3.5	内・外：10YR6/3にぶい黄橙 断：10YR6/1褐灰	やや粗 焼成良 口縁部20%	反転復元
	149	20	韓式系土器鉢	A19	e1・2	北東	K1			第10面精査	推14.4 残5.2	内・外・断：10YR6/2灰黄褐	密 焼成良 口縁部20%	反転復元
	149	21	土師器鉢	A19	e2	北東	K1			第9面	推14.4 残5.9	内・断：5YR7/3にぶい橙 外：　5YR6/4にぶい橙,10YR5/1褐灰	やや密 焼成良 口縁部10%	反転復元
	150	1	須恵器系土器高坏	B19	e4	南西	K3	土坑	09150		推15.0 残3.5	内：7.5YR7/3にぶい橙 外：7.5YR7/3にぶい橙,5YR5/4赤褐, 10YR4/1褐灰 断：7.5YR7/3にぶい橙,5YR5/4赤褐	やや密 焼成良 口縁部10%以下	
	150	2	土師器鉢	B19	e4	南西	K3	土坑	09150		推14.0 残3.6	内・外：5YR7/6橙 断：5YR7/6橙,10YR8/2灰白	粗 焼成良 口縁部15%	
	150	3	須恵器★	B19	d3	南西	K3	溝	09136		— 残6.7	内：N7/灰白 外：N6/灰 断：5YR5/1褐灰をサンドしたN5/灰	密 焼成良 90%	
	150	4	土師器鉢	B19	d3	南西	K3	溝	09136		推11.4 残4.3	内：5YR7/4にぶい橙 外：5YR6/3にぶい橙,10YR5/2灰黄褐 断：5YR6/3にぶい橙	やや密 焼成やや不良 口縁部20%	
	150	5	土師器高坏	B19	e4	南西	K3	土坑	09149		推13.6 残5.2	内・断：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/4浅黄	やや粗 焼成良 40%	
	150	6	韓式系土器 平底鉢	B19	d3	南西	K3	溝	09134		— 残2.5	内・断：10YR8/3浅黄橙 外：10YR8/3浅黄橙、10YR5/1褐灰	やや密 焼成良 底部30%	
	150	7	韓式系土器 平底鉢	B19	d3・4	南西	K3	ピット	09107		— 残1.9	内：5YR6/6橙,10YR7/2にぶい黄橙 外：7.5YR6/4にぶい橙 断：2.5Y6/1黄灰	粗 焼成良 底部20%	
	150	8	韓式系土器 平底鉢	B19	d3・4	南西	K3			第9面直上	— 残1.8	内：7.5YR6/2灰褐 外・断：7.5YR6/2灰褐,2.5Y6/1黄灰	粗 焼成良 底部25%	
	150	9	土師器鉢	B19	d3	南西	K3	ピット	09136		推13.0 残4.1	内：2.5Y6/2灰黄 外：2.5Y5/2暗灰黄 断：2.5Y6/2灰黄	やや密 焼成良 口縁部20%	
	150	10	土師器甕	B19	d3 e3	南西	K3	土坑	09089		推17.5 残4.2	内・外：10YR6/3にぶい黄橙 断：N4/灰	粗 焼成良 口縁部20%	
	150	11	土師器甕	B19	e4	南西	K3	土坑	09157		推20.4 残4.9	内・外：10YR6/2灰黄褐 断：10YR8/1灰白	粗 焼成良 口縁部20%	
	150	12	土師器甕	B19	d3	南西	K3	ピット	09197		推13.6 残11.8	内・断：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR8/2灰白	やや粗 焼成良 40%	
47	150	13	土師器鉢	B19	d2	南西	K3			包含層	12.8 3.8	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙、 5YR6/6橙（底部） 断：5YR6/4にぶい橙	密 焼成良 90%	
	150	14	韓式系土器 甕か壷	B19	d3・4	南西	K3			第9面直上	推22.0 残3.5	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	粗 焼成良 口縁部少片	
	150	15	須恵器坏蓋	C20	a2・3	大溝	HT2	大溝			推12.9 残4.35	内：N6/灰,N4/灰 外：N6/灰,N4/灰,N7/灰白 断：N6/灰	密 焼成良好堅緻 20%	
	150	16	須恵器坏蓋	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推12.1 5.9	内・外・断：N6/灰白	やや粗 焼成良好堅緻 60%	
	150	17	須恵器坏蓋	C20	a2・3	大溝	HT2	大溝			推16.4 残4.4	内・外・断：N5/灰	やや密 焼成良好堅緻 10%	
	150	18	須恵器坏蓋	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推13.8 残3.2	内・外・断：N6/灰	やや密 焼成良好堅緻 口縁部10%	
	150	19	土師器甕	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推11.8 残5.7	内：2.5Y5/1黄灰,2.5YR3/1黒褐 外：2.5Y5/1黄灰,7.5YR7/4にぶい橙 断：2.5Y5/1黄灰	やや粗 焼成良 口縁部10%	
	150	20	土師器甕	C20	a3	大溝	HT2	大溝			— 残3.9	内・断：10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR6/3にぶい褐	やや密 焼成良 頚部20%	
	150	21	土師器鉢	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推7.2 残3.55	内・断：10YR7/2にぶい黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙,N3/暗灰	やや密 焼成良 30%	
	150	22	土師器甕	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推12.8 残3.35	内：2.5Y4/1黄灰,2.5Y7/2灰黄, 2.5YR6/4にぶい橙 外：2.5YR6/4にぶい橙 断：2.5Y7/2灰黄	やや密 焼成良 口縁部25%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	150	23	土師器高坏	C20	a2・3	大溝	HT2	大溝			推14.2 残8.6	内：2.5YR7/3淡赤橙、2.5Y7/1灰白 外・断：2.5YR7/3淡赤橙、2.5Y5/１黄灰	やや密 焼成良 40%	
	150	24	土師器高坏	C20	a2・3	大溝	HT2	大溝			推15.2 11.7	内・断：2.5Y8/1～7/1灰白 外：2.5Y8/1～7/1灰白、N6/灰	粗 焼成やや不良 脚部90%,坏部10%	
	150	25	土師器甕	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推24.8 残7.5	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	やや粗 焼成良 口縁部20%	
	150	26	土師器甕	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推25.2 残4.1	内・外：7.5YR7/4にぶい橙 断：10YR7/1灰白	粗 焼成良 頚部10%	
	150	27	製塩土器	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推6.0 残3.3	内・断：7.5YR6/3にぶい褐 外：2.5Y7/1灰白,2.5Y4/1黄灰	やや密 焼成やや不良 少片	
	150	28	製塩土器	C20	a3	大溝	HT2	大溝			推9.8 残2.85	内：2.5YR7/4淡赤橙, 10YR7/2にぶい黄橙 外：2.5YR7/4淡赤橙、 10YR6/3にぶい黄橙 断：5Y4/1灰	粗 焼成やや不良 20%	
	150	29	須恵器甕	A20		大溝	UK	溝	001	3層の中より	推38.8 残10.4	内：N5/灰,N4/灰 外：N4/灰 断：N5/灰	粗 焼成良好堅緻 口縁部25%	
	150	30	須恵器坏蓋	A20		大溝	UK	溝	001	主に2層(3も含む)	推11.6 残3.6	内・断：N5/灰 外：N6/灰,N8/灰白	粗 焼成良好堅緻 口縁部10%	
	153	1	紡錘車	A17	d3	居外？	HT1	溝	06001		直径3.7 高さ1.5		50%	
	153	2	石刀？	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		タテ5.2 ヨコ3.0 厚さ0.5		不明	
41	153	3	砥石	A19	hi3	北東	K2	溝	12024		たて8.9 よこ4.3 厚さ2.4			
	153	4	石製品砥石	A19	de2	北東	K1			8面掘下げ	— —		少片	
	153	5	砥石	A19	h3	北東	K2			第４面直上暗灰色シルト	たて9.5 よこ4.8 厚さ1.7			
	153	6	砥石	B19	d4	南西	K3	井戸	09192		タテ16.3 ヨコ11.7 厚さ6.5		100%?	
48	153	7	砥石	B19	d3	南西	K3	落込み	09050		たて 13.4cm よこ 13.1cm厚さ3.5～6.3cm			取No.6
42	156	1	黒色土器椀	A19	h3	北東	K2	溝	04050		15.3 6.0	内・外・断：2/0黒	密 焼成良 口縁部少し欠損	
42	156	2	黒色土器椀	A19	h3・4	北東	K2	ピット	04055		推15 5.3	内・外・断：N3/0暗灰	密 焼成良 50%	
42	156	3	黒色土器椀	A19	h3・4	北東	K2	ピット	04057		推15.4 5.6	内・外・断：2/0黒	密 焼成良 口縁部少し欠損	
	156	4	黒色土器椀	A19	h3・4	北東	K2	ピット	04057		推15.6 残4.4	内・外・断：N3/0暗灰	密 焼成良 20%	
	156	5	土師器高台部	A19	h3・4	北東	K2	ピット	04057		— 残1.5	内・外・断：10YR8/2灰白	密 焼成良 底部のみ	
	156	6	土師器皿	A19	h4	北東	K2	土坑	04049		推15.0 1.9	内・外・断：10YR7/3にぶい黄橙	密 焼成良 口縁部の小片	
	156	7	土師器坏	A19	g5	北東	K2	溝	04010		推15.4 残3.2	内・外・断：2.5YR7/4淡赤橙	密 焼成良好 20%	
42	156	8	土師器皿	A19	h4	北東	K2	土坑	04059		推14.7 3.2	内・外・断：10YR8/3浅黄橙	密 焼成良 50%	
	156	9	黒色土器皿	A20	f2	大溝	UK	溝	16		推13.8 残2.3	内：10YR4/1褐灰 外・断：10YR4/1褐灰、10YR8/1灰白	やや密 焼成やや不良 20%	
	156	10	須恵器蓋	A19	f2	北東	K1			第7面掘り下げ	13.2 2.0	内・外・断：N6/灰白	密 焼成良好堅緻 70%	
57	156	11	須恵器長頸壷	A19	e2	北東	K1	流路	04001		— 残11.4	内・外・断：N7/0灰白, 自然釉7.5YR4/2灰オリーブ	密 焼成良好 胴部のみ100%	
57	156	12	須恵器長頸壷	A19	e2	北東	K1	流路	07001		— 残22.8	内・外：N7/0灰白 断：N8/0灰白	焼成良 98%	

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
	156	13	土師器羽釜	C20	a2	大溝	HT2	大溝			推25.4 残4.7	内：2.5Y5/2暗灰黄 外：10YR6/3にぶい黄橙,2.5YR6/6橙 断：5YR6/4にぶい橙	粗 焼成良 突帯部10%	
	156	14	土師器小皿				K4			灰白色ないし褐灰色砂⑬⑮	推10.0 残1.0	内・外・断：2.5Y7/2灰黄	密 焼成良 小片	
	156	15	土師器皿				K4			⑱⑲掘り下げ第7面精査	推14.4 残2.5	内：5Y7/2 外・断：5Y6/2	密 焼成良 小片	
	156	16	瓦器小皿				K4			灰白色砂	推9.0 残1.7	内：5Y7/1灰白 外：5Y7/1灰白～5/1灰 断：5Y7/2灰白	密 焼成不良 16%	
	156	17	土師器坏				K4			暗茶褐色粘質シルト暗緑灰色粘土(Ca多く含む)	推16.8 残2.3	内・外・断：2.5Y6/3にぶい黄	焼成良	
	156	18	瓦器碗				K4			灰白色砂	推14.6 残3.2	内・外：N4/0灰 断：5YR8/1灰白にN6/0灰のサンド	密 焼成良 12%	
	156	19	瓦器碗				K4			アゼ内暗灰色砂質土⑪⑫	推12.7 残3.8	内・外・断：5Y7/1灰白	密 焼成良 小片	
	156	20	瓦器碗				K4			4面暗灰色砂質土精査中	推14.7 残4.4	内・外：N2/2黒 断：5Y8/1灰白	密 焼成良 小片	
	156	21	瓦器碗				K4			暗灰色砂質土	推15.4 残4.6	内：N5/灰 外：N4/灰 断：N7/灰白	緻密 焼成良	
	156	22	土師器羽釜				K4			暗灰色砂質土	推24.7 残3.5	内：2.5Y4/1黄灰 外：2.5Y5/3黄褐 断：10YR6/4にぶい黄橙	粗 焼成やや不良	
	156	23	瓦質?すり鉢				K4			淡灰黄色粗砂レキ灰色粘土ブロック含む	推30.0 残4.1	内：2.5Y7/3浅黄 外：7.5YR6/3にぶい褐 断：10YR7/2にぶい黄橙	密 焼成不良 小片	
36			甕蓋	A19	e1		K1			第12面掘り下げ時	13.8 7.6	内：10YR6/2灰黄褐 外：10YR7/2にぶい黄橙 断：10YR7/4にぶい黄橙	焼成良 80%	
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径8mm 厚さ5mm	2.5GY6/1オリーブ灰	No.1～53 取No.4	実測No. HT1-1
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5mm 厚さ3mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-2
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7.5mm 厚さ4mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-3
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5mm 厚さ3mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-4
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ5mm	10Y6/1灰		実測No. HT1-5
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5.5mm 厚さ2mm	5Y7/1灰白		実測No. HT1-6
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径4.5mm 厚さ2mm	N4/0灰		実測No. HT1-7
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ4mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-8
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.3mm 厚さ3mm	2.5Y6/1黄灰		実測No. HT1-9
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.8mm 厚さ5.5mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-10
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.3mm 厚さ4mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-11
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.3mm 厚さ4.5mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-12
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径4.0mm 厚さ4.7mm	5G4/1暗緑灰		実測No. HT1-13
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5mm 厚さ3.8mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-14
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5mm 厚さ2.6mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-15
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.2mm 厚さ3mm	5Y7/1灰白		実測No. HT1-16
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5.5mm 厚さ3mm	10Y6/1灰		実測No. HT1-17
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.5mm 厚さ3mm	N6/0灰		実測No. HT1-18

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7mm 厚さ1.5mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-19
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5.8mm 厚さ3mm	10YR6/1褐灰		実測No. HT1-20
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7mm 厚さ4.5mm	10Y6/1灰		実測No. HT1-21
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5mm 厚さ3.5mm	5Y6/1灰		実測No. HT1-22
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5mm 厚さ3mm	5Y6/1灰		実測No. HT1-23
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5mm 厚さ3mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-24
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ4mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-25
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.3mm 厚さ4.8mm	10Y6/1灰		実測No. HT1-26
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.3mm 厚さ3.8mm	5Y6/1灰		実測No. HT1-27
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ3mm	10Y6/1灰		実測No. HT1-28
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.3mm 厚さ3.5mm	N6/0灰		実測No. HT1-29
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.2mm 厚さ3.8mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-30
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径4mm 厚さ3mm	5B5/1青灰		実測No. HT1-31
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5.8mm 厚さ3.8mm	N6/0灰		実測No. HT1-32
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径4.8mm 厚さ3mm	2.5Y7/1灰白		実測No. HT1-33
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.2mm 厚さ5.2mm	N6/0灰		実測No. HT1-34
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径4.2mm 厚さ3.2mm	5Y7/1灰白		実測No. HT1-35
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.2mm 厚さ3mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-36
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ3.6mm	10Y7/1灰白		実測No. HT1-37
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.4mm 厚さ5.2mm	10Y7/1灰白		実測No. HT1-38
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ3.5mm	2.5GY6/1オリーブ灰		実測No. HT1-39
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7.2mm 厚さ3mm	5Y6/1灰		実測No. HT1-40
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ4mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-41
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ3mm	N6/0灰		実測No. HT1-42
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径8mm 厚さ4.6mm	5Y6/1灰		実測No. HT1-43
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7.5mm 厚さ2mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-44
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ5mm	N6/0灰		実測No. HT1-45
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7mm 厚さ3mm	N7/0灰白		実測No. HT1-46
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6mm 厚さ5mm	7.5Y6/1灰		実測No. HT1-47
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7mm 厚さ3.6mm	N7/0灰白		実測No. HT1-48
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径7mm 厚さ3.5mm	N6/0灰		実測No. HT1-49
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径5.8mm 厚さ4mm	N7/0灰白		実測No. HT1-50
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		直径6.5mm 厚さ1.5mm	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-51
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径8mm 高さ7mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-79

図版No.	図面No.	遺物No.	器種	大地区	小地区	居住域等	調査区	遺構種別	遺構No.	層位など	口径 器高 cm	色調	胎土・焼成・残存率	
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.5mm 高さ7mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-80
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.5mm 高さ7.5mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-81
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.2mm 高さ7.0mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-82
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.5mm 高さ6.8mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-83
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.2mm 高さ7.0mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-84
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.0mm 高さ6.2mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-85
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.5mm 高さ6.5mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-86
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径8.0mm 高さ7.0mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-87
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.0mm 高さ6.5mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-88
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.0mm 高さ7.5mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-89
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.0mm 高さ7.5mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-90
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.2mm 高さ6.1mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-91
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.5mm 高さ7.0mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-92
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.5mm 高さ7.0mm	N3/0暗灰		実測No. HT1-93
51			土玉	A17	C3	居外？	HT1	溝	06001		径7.2mm 高さ6.5mm	N3/0暗灰	50%	実測No. HT1-94
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径6.8 厚3.0	7.5GY5/1緑灰		実測No. HT1-95
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径6.5 厚3.5	7.5Y7/1灰白		実測No. HT1-96
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径6.5 厚3.5	7.5GY5/1緑灰		実測No. HT1-97
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径7.2 厚4.0	7.5GY5/1緑灰		実測No. HT1-98
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径6.2 厚6.0	7.5GY5/1緑灰		実測No. HT1-99
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径6.0 厚3.5	5GY5/1オリーブ灰		実測No. HT1-100
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径6.5 厚2.2	2.5GY7/1暗オリーブ灰		実測No. HT1-101
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径5.5 厚3.0	N7/0灰白		実測No. HT1-102
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径7.0 厚2.8	2.5GY5/1オリーブ灰		実測No. HT1-103
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径7.5 厚3.5	7.5GY5/1緑灰		実測No. HT1-104
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径7.5 厚3.0	7.5GY5/1緑灰		実測No. HT1-105
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径4.5 厚2.5	5Y7/1灰白		実測No. HT1-106
51			うす玉			居外？	HT1	溝	06001		径6.0 厚4.0	N7/0灰白		実測No. HT1-107

図　　版

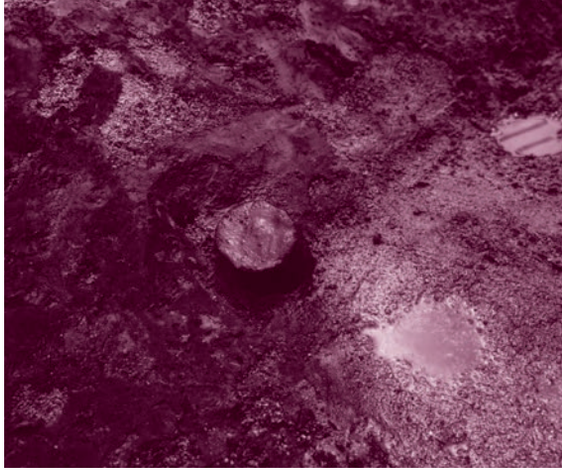
図版1　蔀屋北遺跡全景航空写真

図版2　調査区遠景

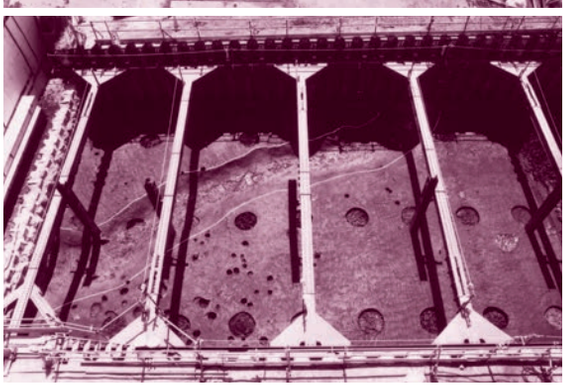
南より

西より

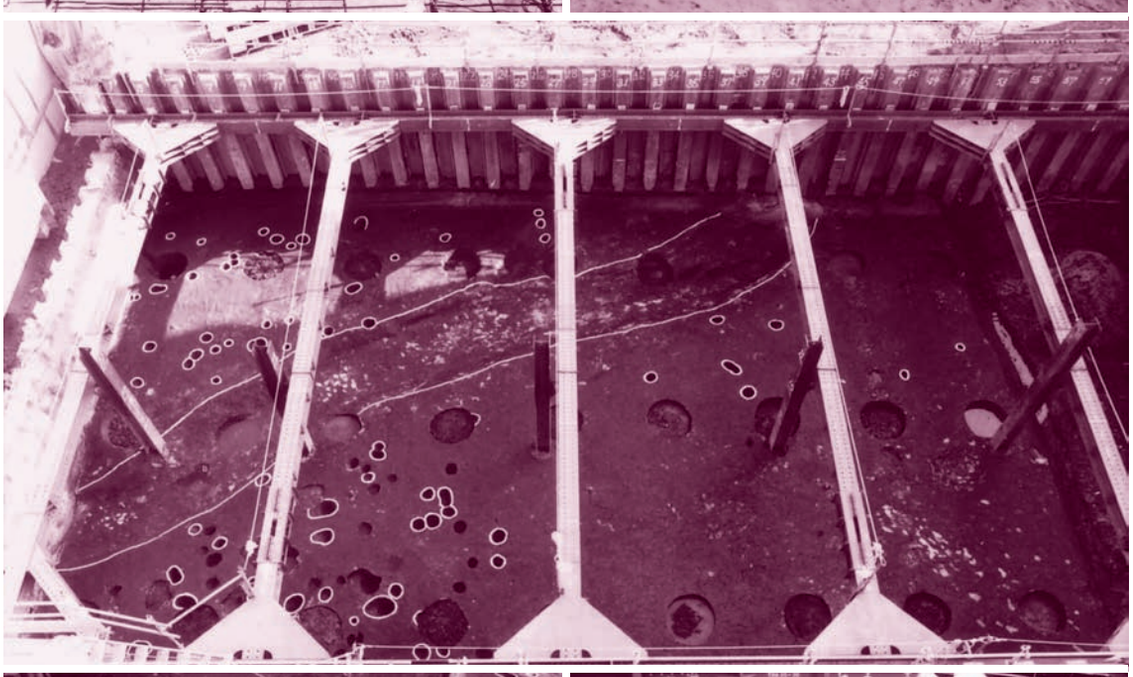
図版3　弥生時代　K1調査区



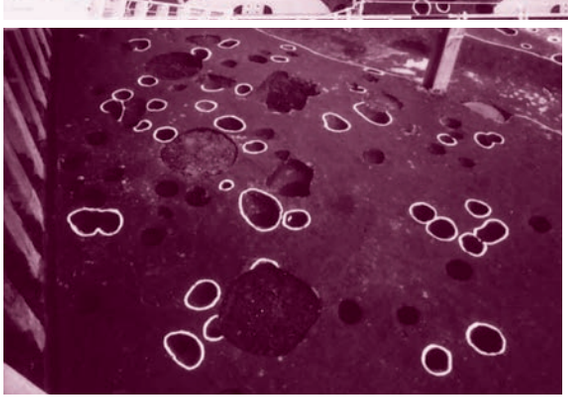
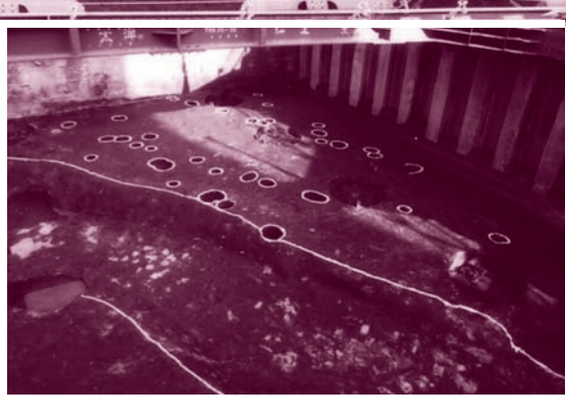
第15面
左:調査区全景
（北より）
右:流路K1-15001
遺物出土状況
（東より）



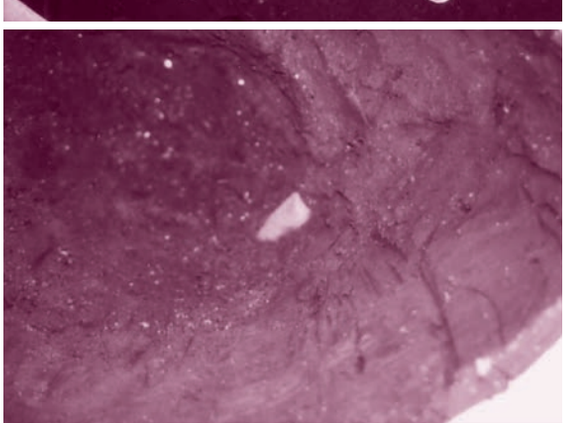
第14面
左:調査区全景
（北より）
右:流路K1-14001
断面（西より）



第13面
調査区全景
（北より）

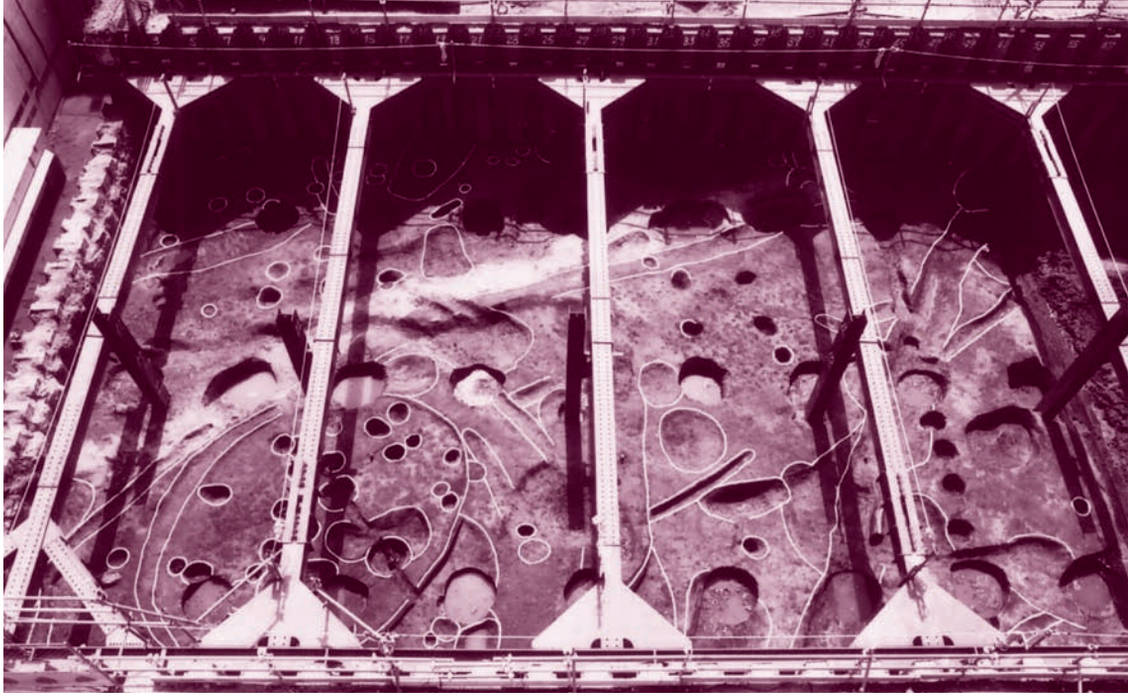



第13面
右:調査区北東半部
（北西より）
左:調査区南東半部
（北西より）

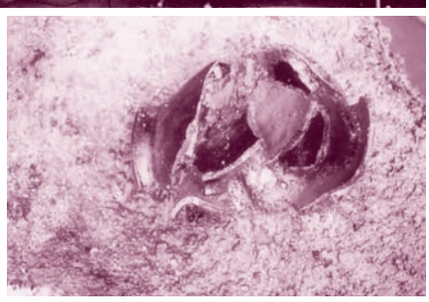


第13面
右:ピットK1-13058
石鏃出土状況
左:調査区北西端部
足跡検出状況
（南東より）

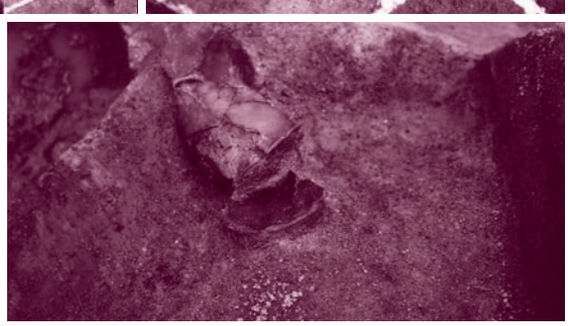
図版４　弥生時代　Ｋ１調査区



第12面
調査区全景
（北より）



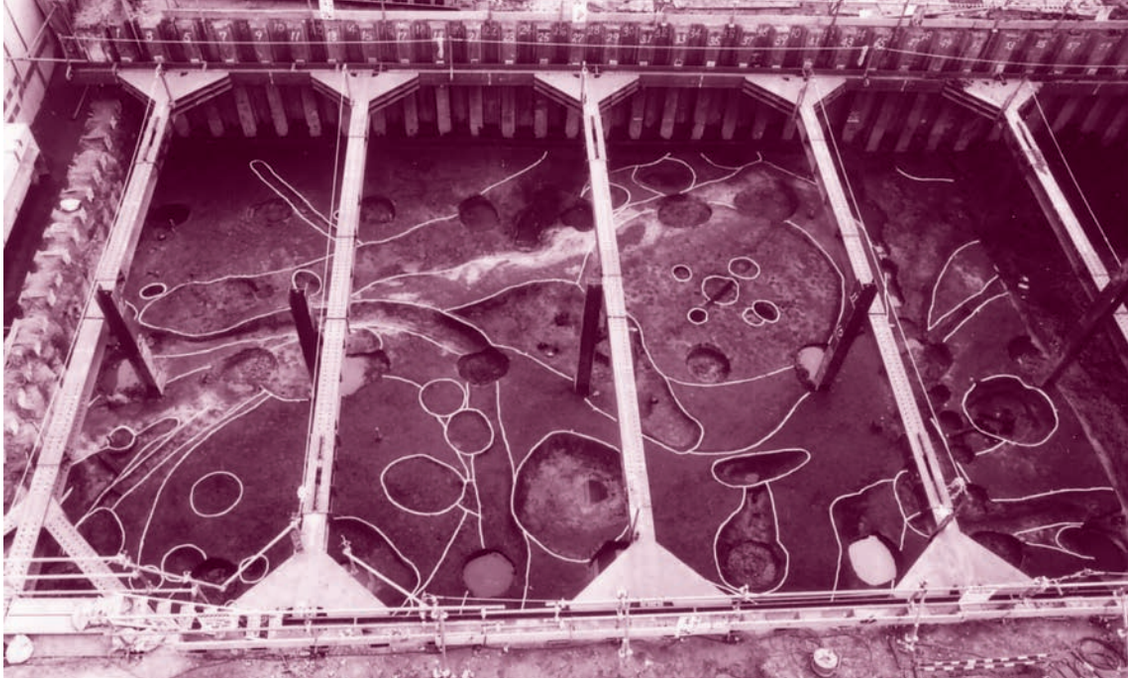
第12面
竪穴住居
Ｋ１−１２１２２
左：全景（南西より）
右上下：遺物出土状況



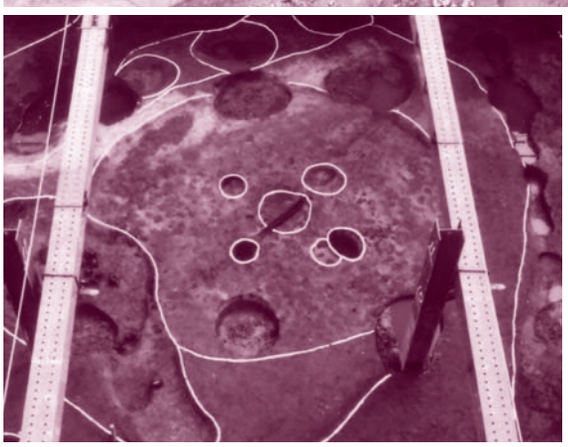
第12面
土坑Ｋ１−１２１０５
左：遺物出土状況
（東より）
右：同　部分拡大

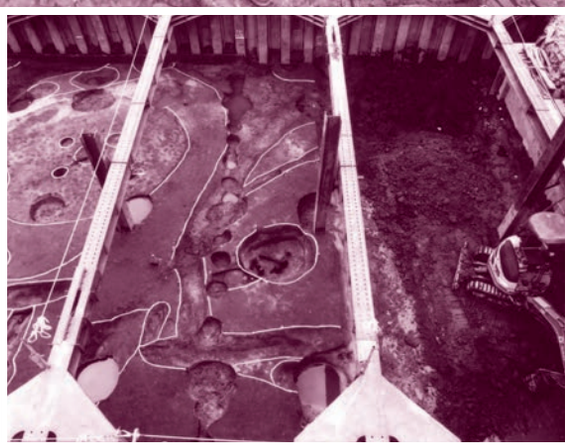
第12面
左上：ピットK1-12052
断面・柱根検出状況
（東より）
左下：ピットK1-12065
断面・柱根検出状況
（南より）
右　：ピットK1-12048
断面・柱根検出状況
（南東より）

図版5　弥生時代　K1調査区

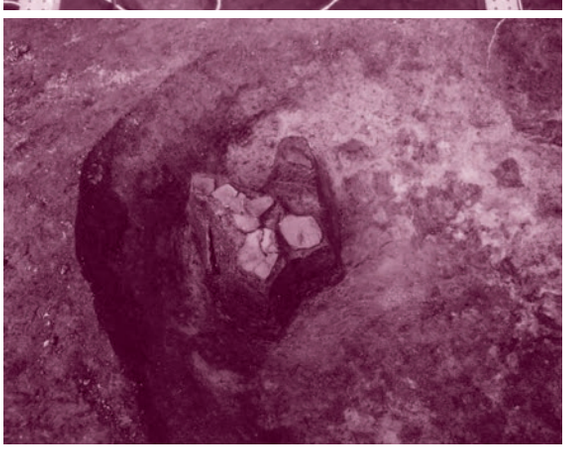


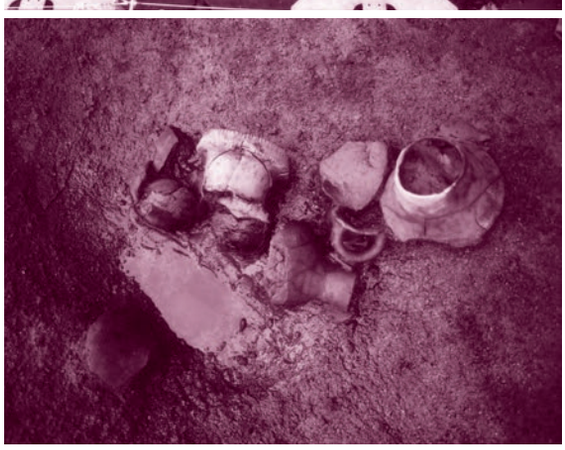
第11面
調査区全景
（北より）



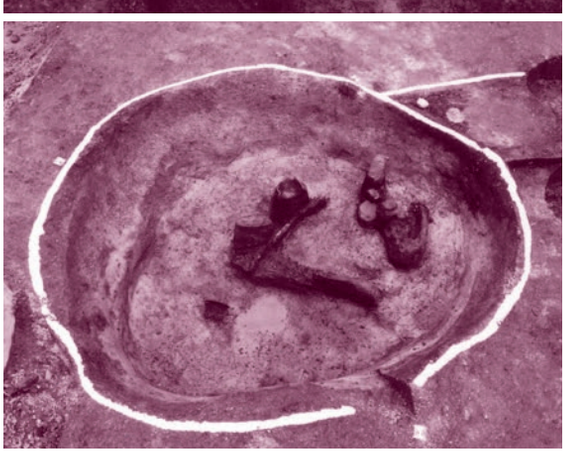


第11面
左：竪穴住居
　　K1−１１０３４
　　全景（北より）
右：方形周溝墓
　　K1−１１０１０
　　全景（北より）

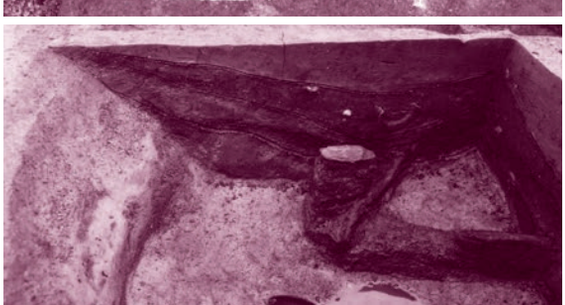


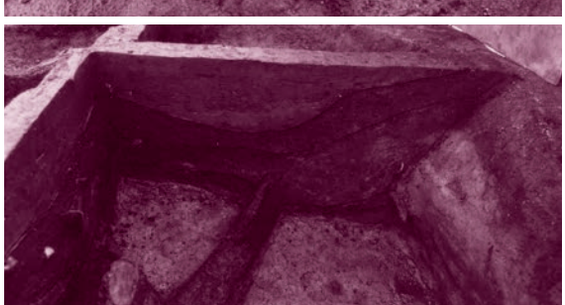


第11面
左：土坑K1-11031
　　遺物出土状況
　　（南より）
右：土坑K1-11051
　　遺物出土状況
　　（北西より）



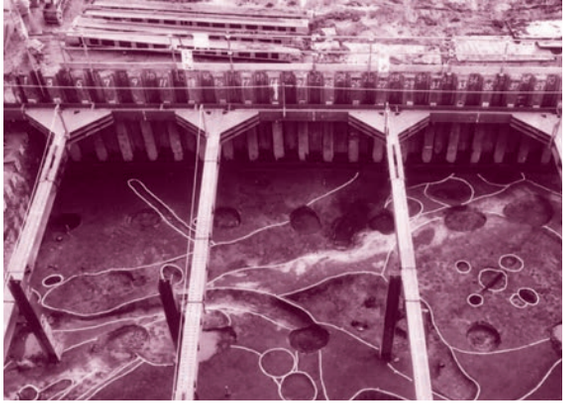
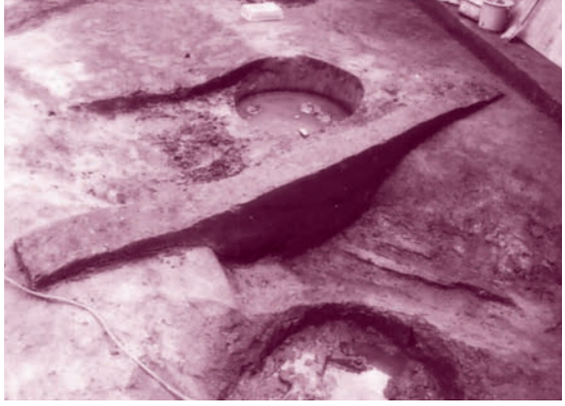
第11面
土坑K1−１１０５２
左：全景（南より）
右：遺物出土状況
　　（南より）



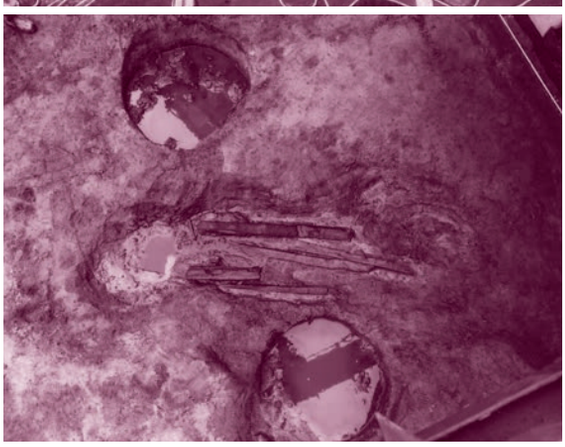
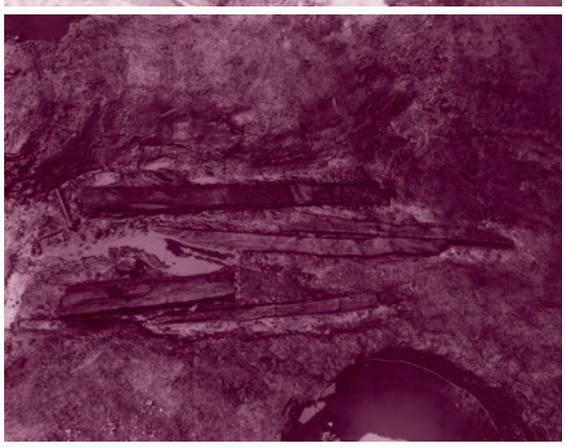


第11面
土坑K1−１１０５２
左：断面（南より）
右：断面（西より）

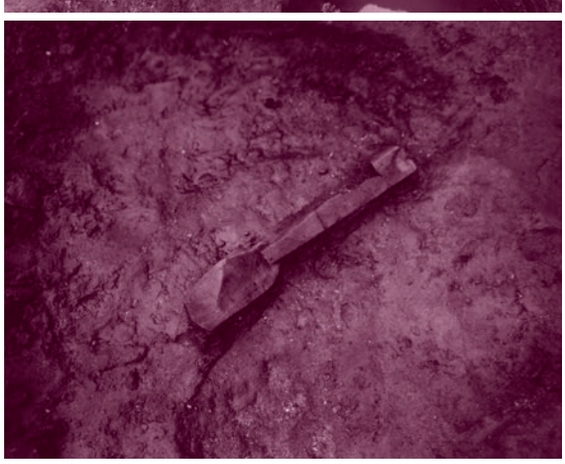
図版6　弥生時代　K1調査区

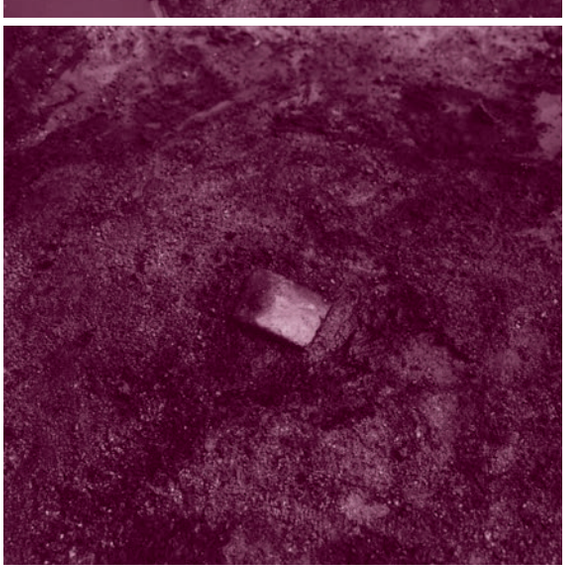
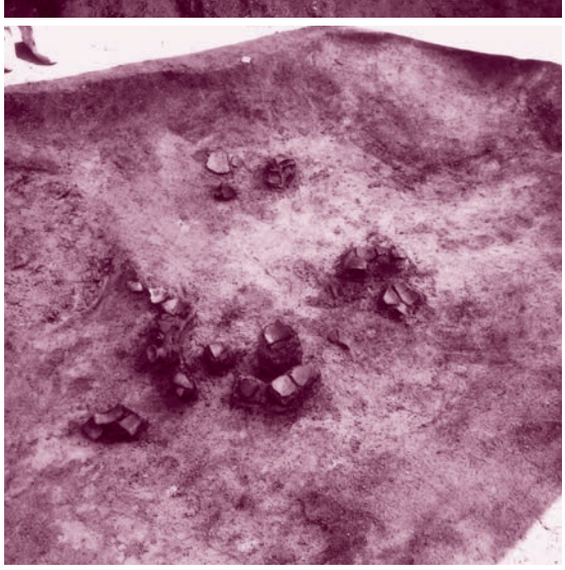
第11面
溝K1−11013
左:全景(北より)
右:断面(西より)

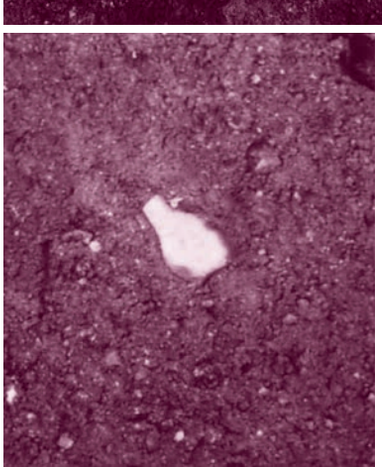
第11面
溝K1−11013
左:木製品出土状況
(西より)
右:同　拡大

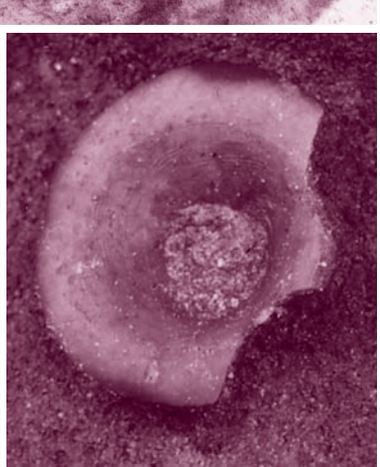


第11面
溝K1−11013
左:石包丁出土状況
右:木製品出土状況

第11面
左:溝K1-11056
石斧出土状況
右:溝K1-11058
遺物出土状況
(北より)

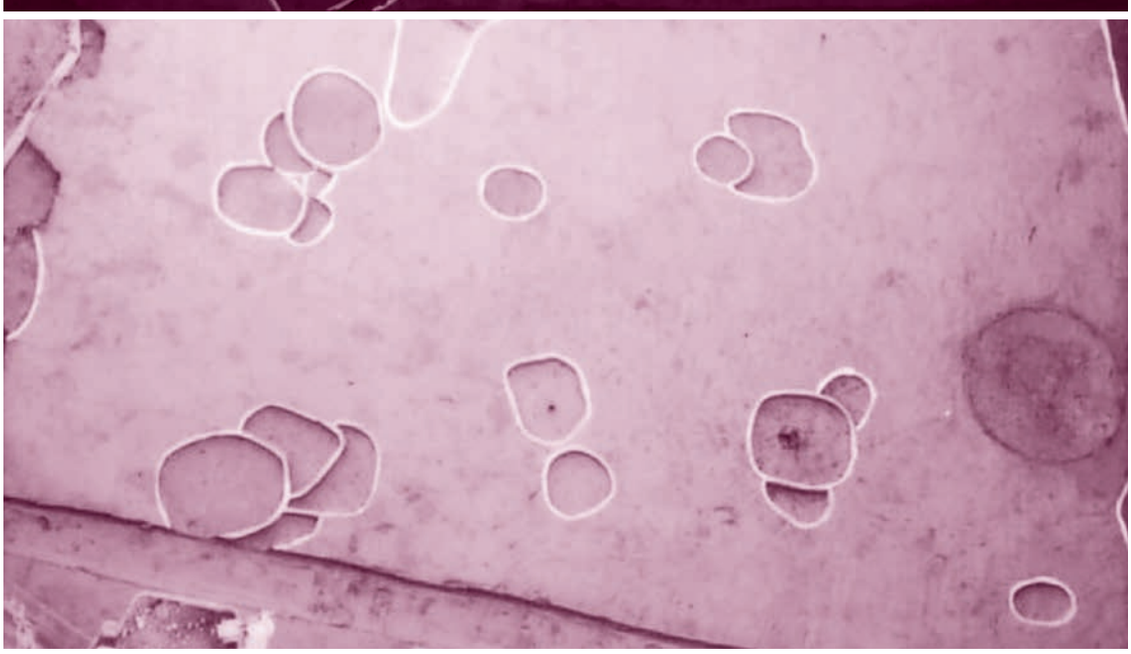




第11面
左:土坑K1-11037
石鏃出土状況
中:ピットK1-11045
礎板出土状況
右:調査区南東部包含層
甕蓋出土状況

図版７　古墳時代中～後期　Ｋ５調査区

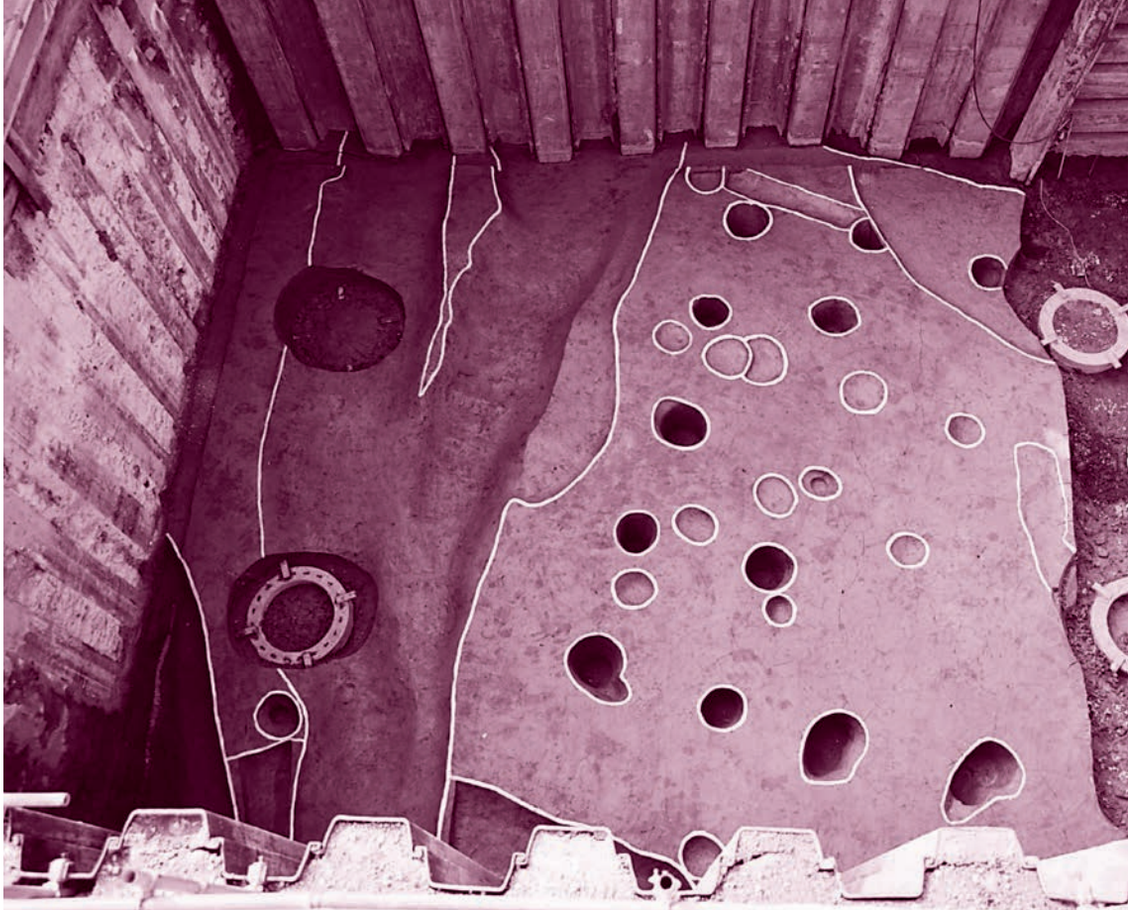
第12面
調査区全景
（西より）



第12面
掘立柱建物Ｋ５－１
全景（西より）

第12面
左：掘立柱建物Ｋ５－２
　　全景（北東より）
右：南東部区画溝
　　Ｋ５－１２０４０
　　全景（北東より）

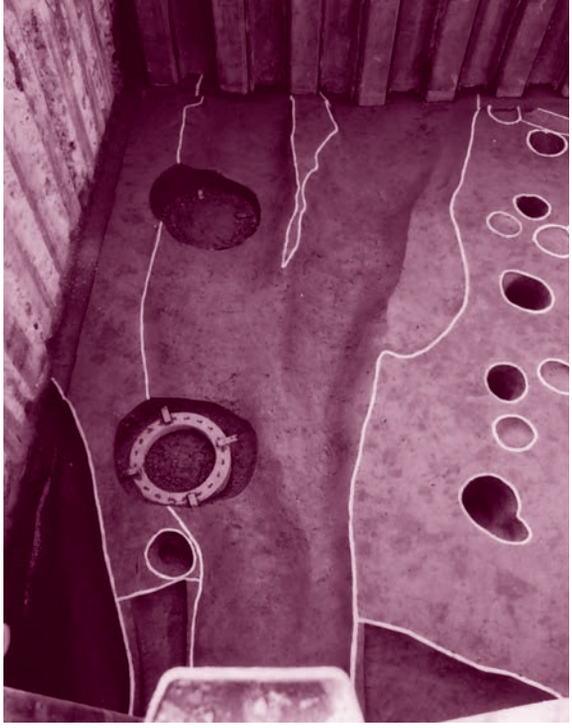
図版８　古墳時代中～後期　Ｋ４調査区



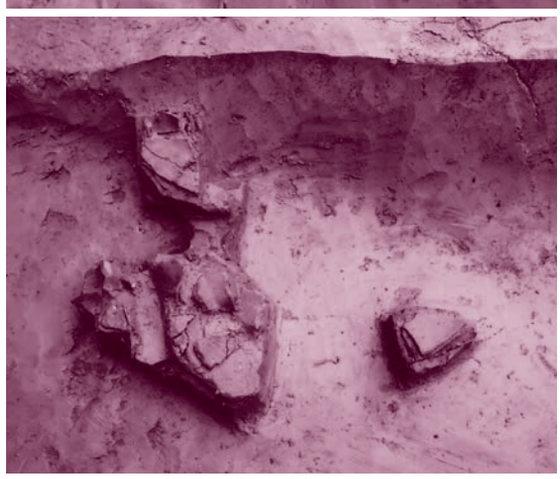
第９面
調査区全景
（東より）

第９面
掘立柱建物Ｋ４－１
全景（西より）

図版９　古墳時代中～後期　Ｋ４調査区



第９面
左:区画溝
　Ｋ4-０９００1左
　Ｋ4-０９００3右
　全景(東より)
右:区画溝
　Ｋ４-０９００３
　遺物出土状況



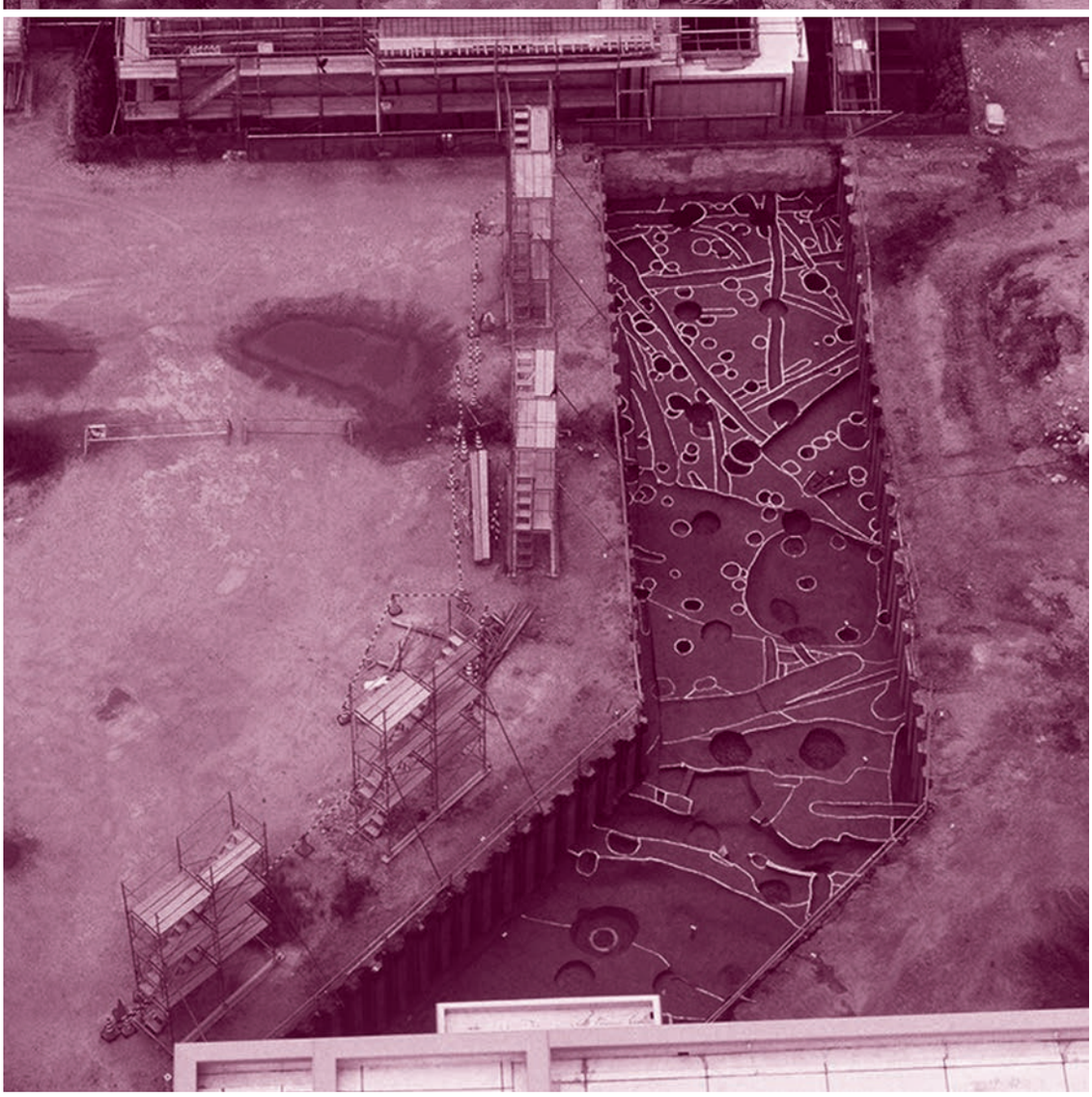
第９面
区画溝
Ｋ４-０９００１
左:埴輪片出土状況
右:遺物出土状況

第９面
溝Ｋ４-０９０３０
全景(東より)

第９面
溝Ｋ４-０９００２
全景(北より)

図版10　古墳時代中～後期　K2調査区

第12面
調査区全景
（南より）

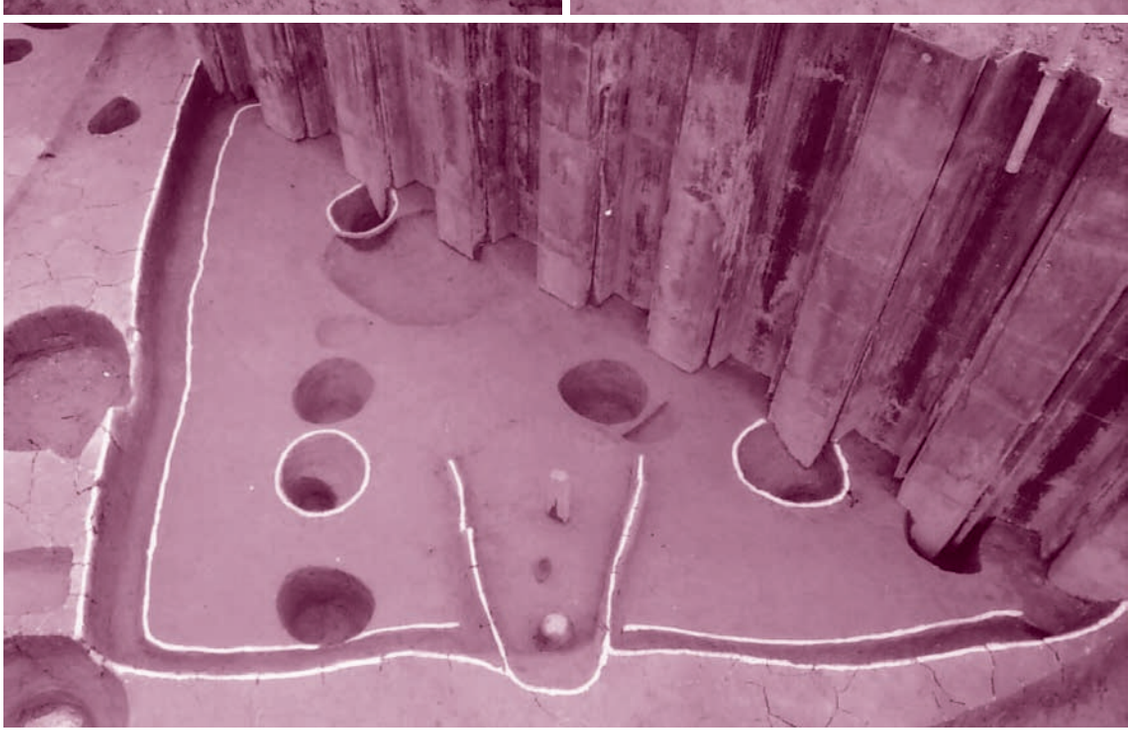


第12面
調査区全景
（西より）

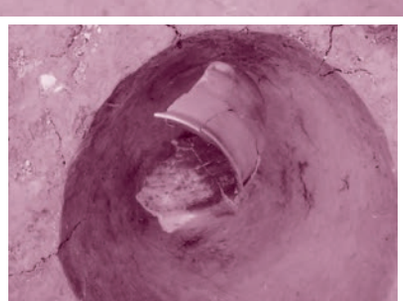
図版11　古墳時代中～後期　K２調査区

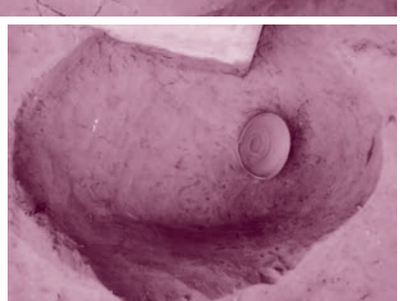
第12面
竪穴住居Ｋ２－１
完掘（北より）

第12面
竪穴住居Ｋ２－１
左：遺物出土状況
（北東より）
右：カマド検出状況
（北西より）



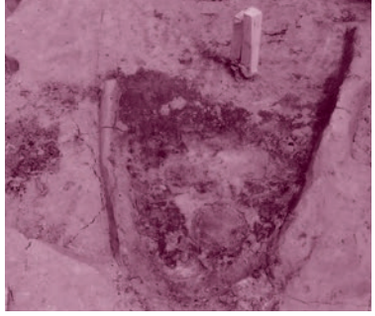
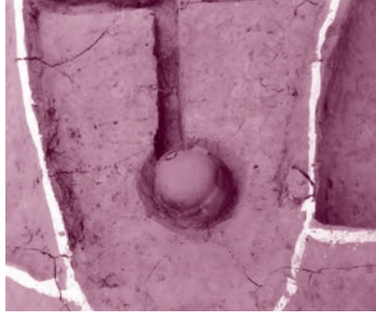
第12面
竪穴住居Ｋ２－２
完掘（北西より）



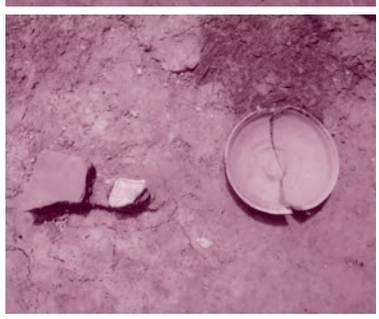


第12面
竪穴住居Ｋ２－２
左：主柱穴K2-12169
左：主柱穴K2-12170
遺物出土状況

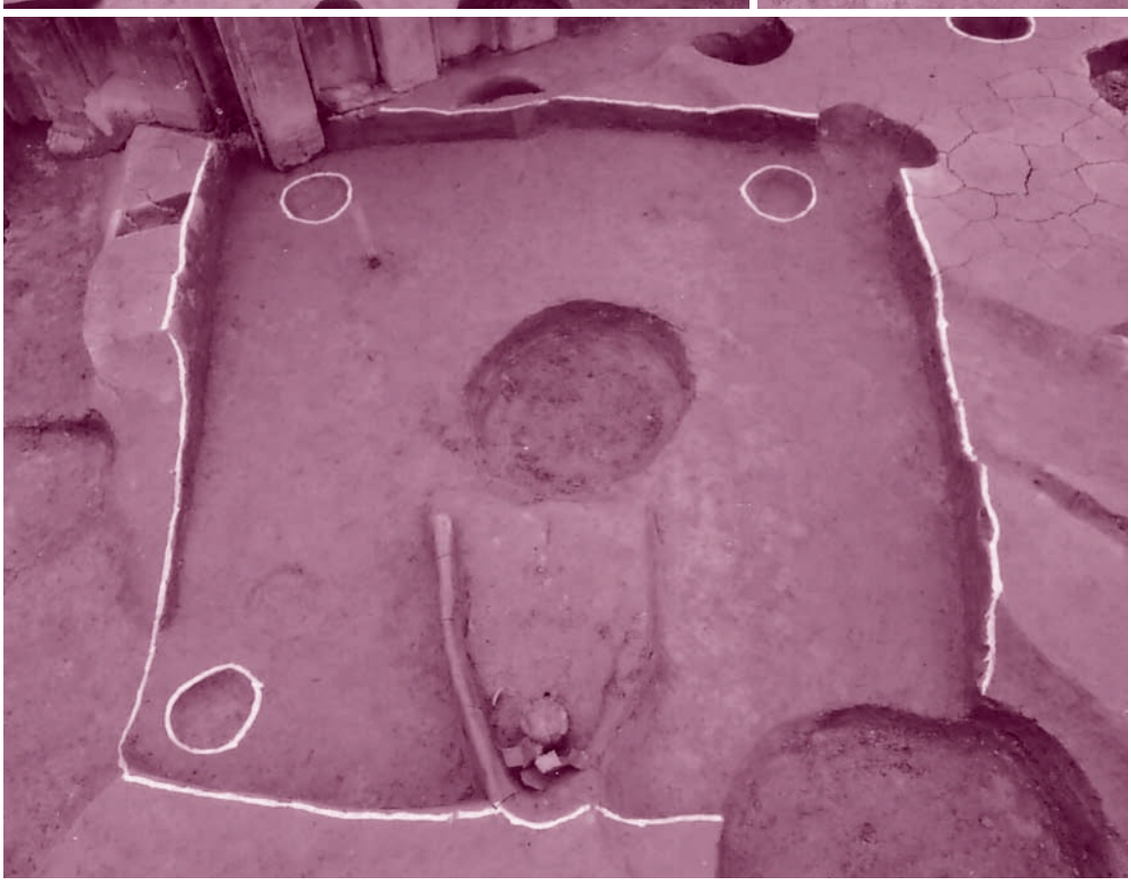
図版12　古墳時代中～後期　K2調査区

第12面
竪穴住居K2-2 カマド
左：遺物出土状況
中：炭層検出状況
右：支脚検出状況



第12面
竪穴住居K２-２
左：炭層検出状況
（北西より）
右上下：遺物出土状況

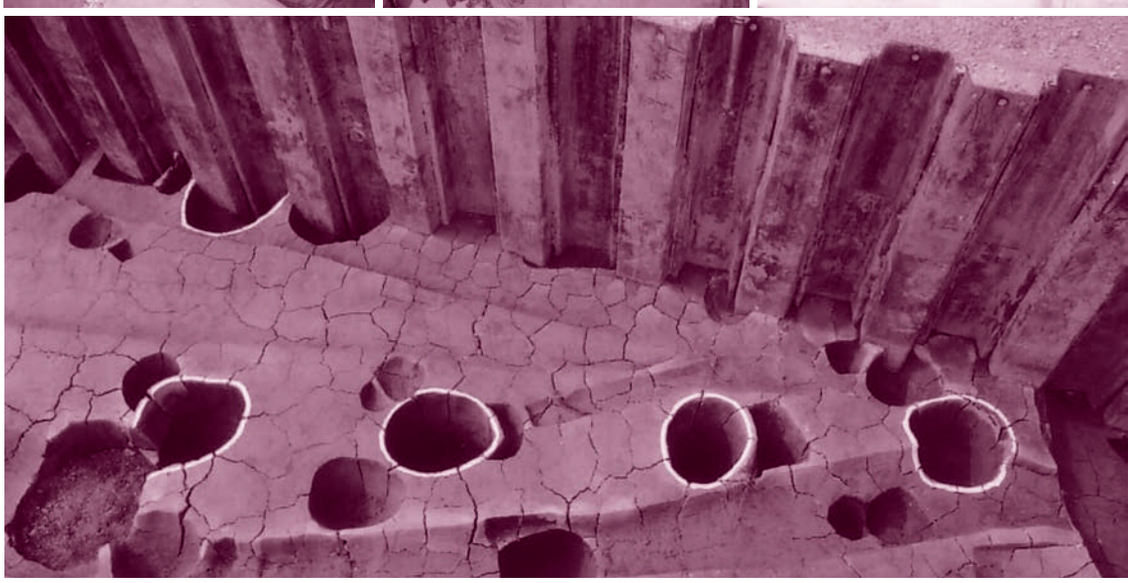


第12面
竪穴住居K２-３
完掘（南より）

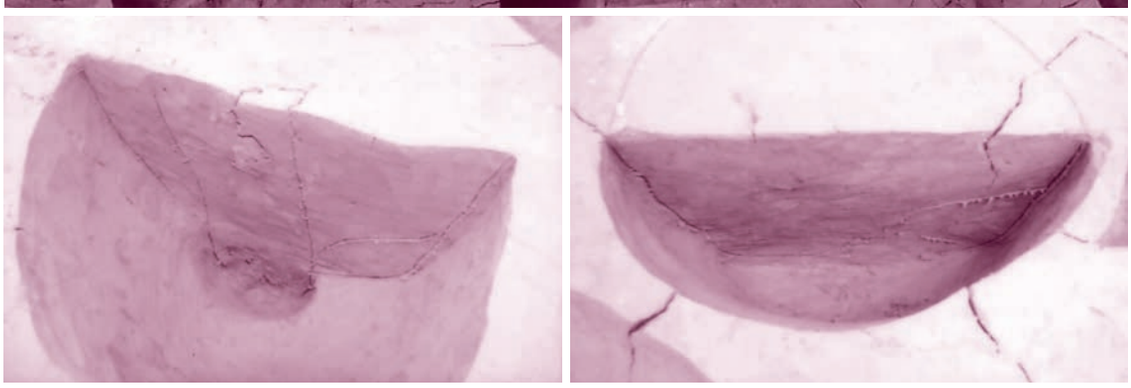
第12面
竪穴住居K2-3 カマド
左：遺物出土状況
右：支脚検出状況

第12面
掘立柱建物K２－１
完掘（西より）

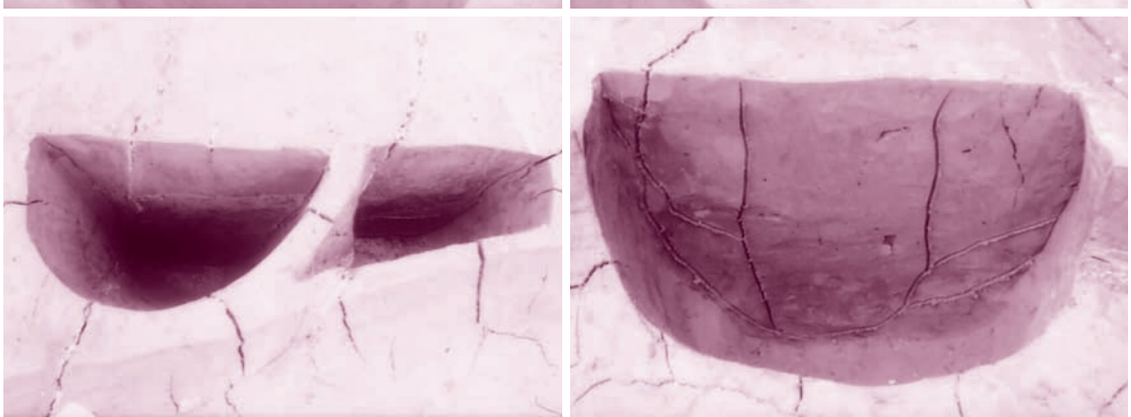
第12面
掘立柱建物K２－１
左:柱穴K2-12077
中:柱穴K2-12121
右:柱穴K2-12122
柱根・礎板検出状況



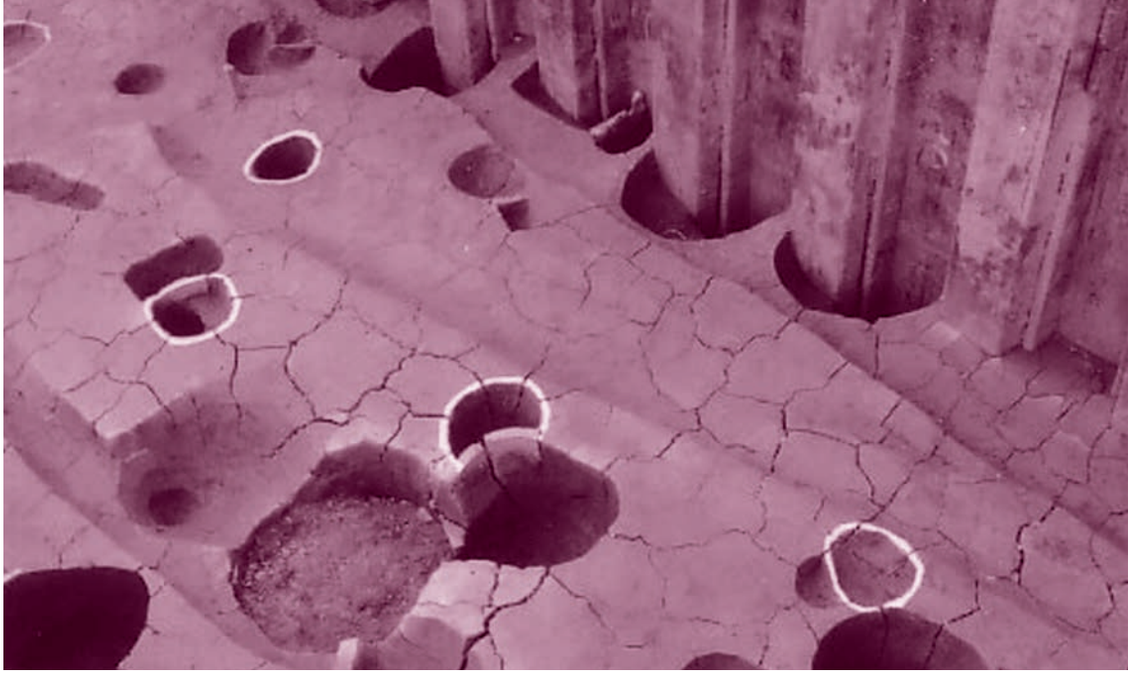
第12面
掘立柱建物K２－２
完掘（南東より）



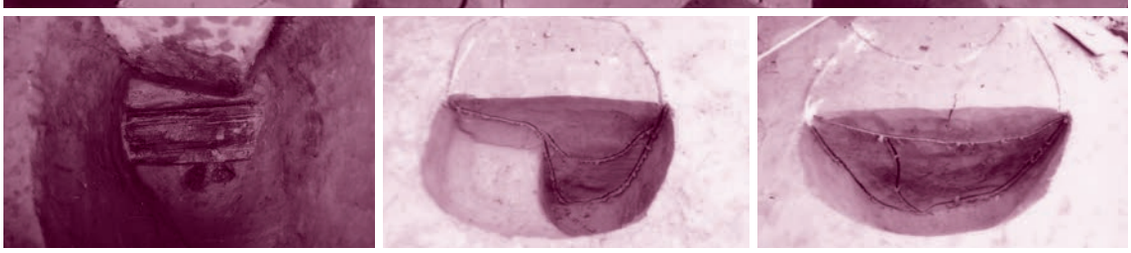
第12面
掘立柱建物K２－２
左:柱穴K2-12050
右:柱穴K2-12099
断面



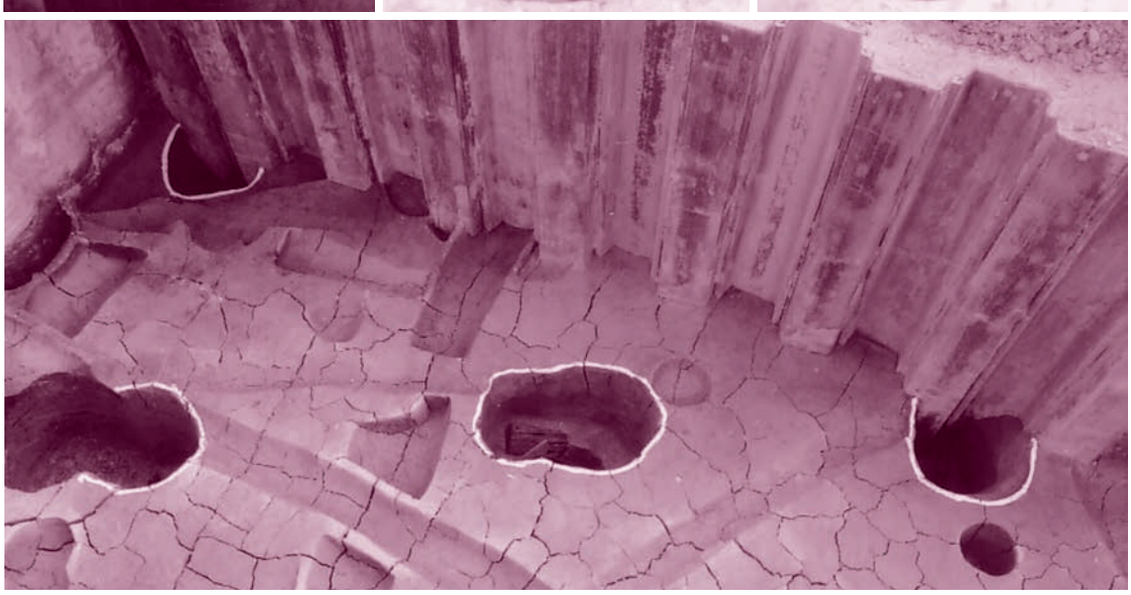
第12面
掘立柱建物K２－２
左:柱穴K2-12094
右:柱穴K2-12108
断面



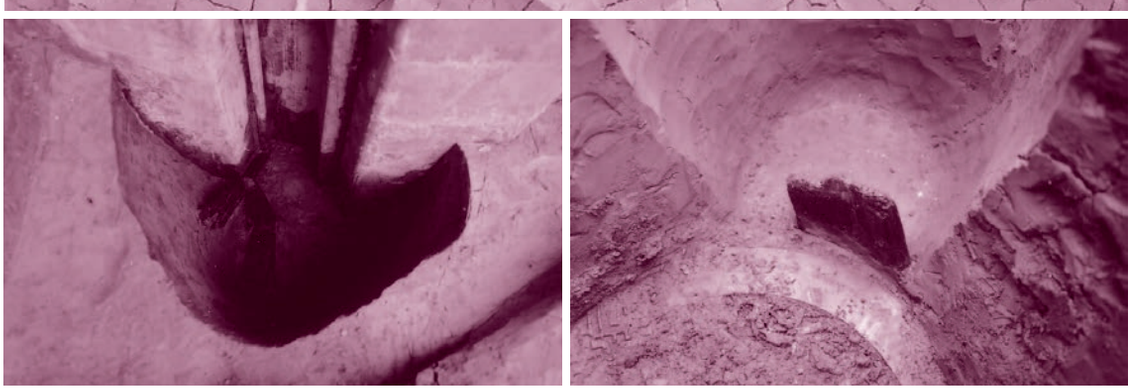
第12面
掘立柱建物K２−３
完掘（南東より）



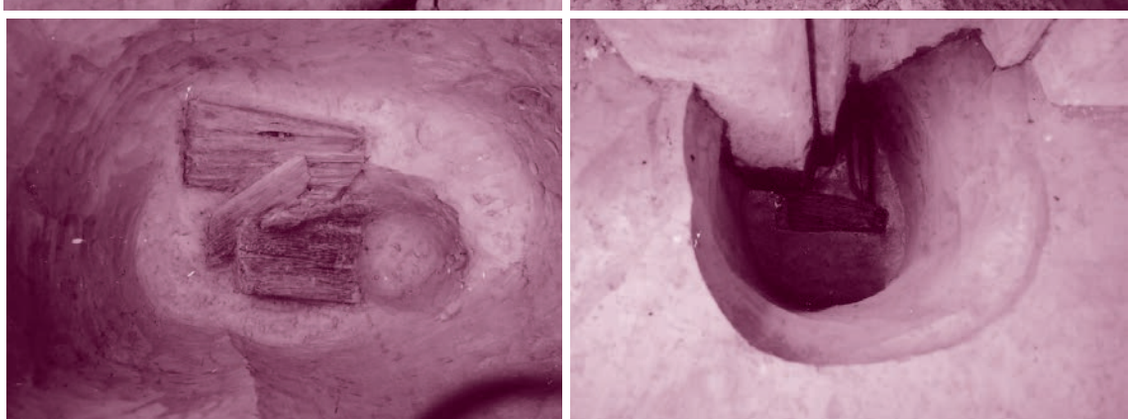
第12面
掘立柱建物K２−３
左:柱穴K2-12116
礎板検出状況
中:柱穴K2-12047
断面
右:柱穴K2-12049
断面



第12面
掘立柱建物K２−４
完掘（北より）

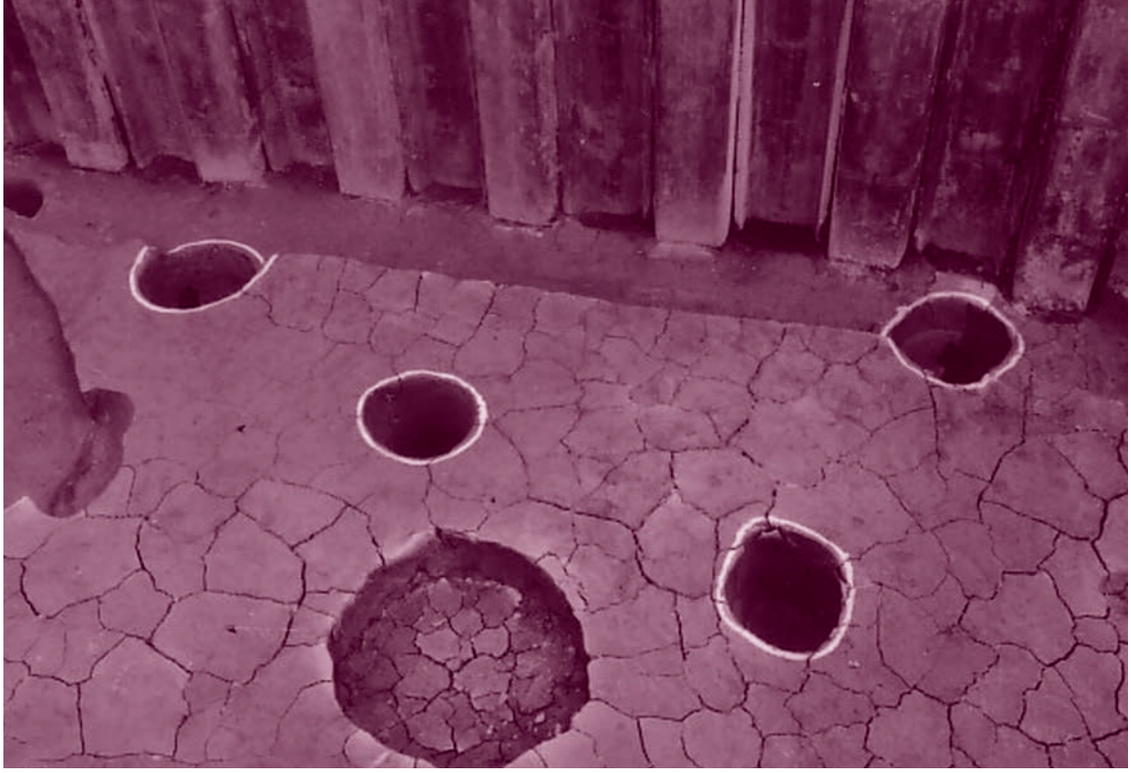


第12面
掘立柱建物K２−４
左:柱穴K2-12194
右:柱穴K2-12074
礎板検出状況

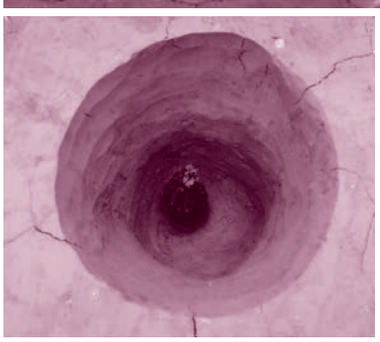


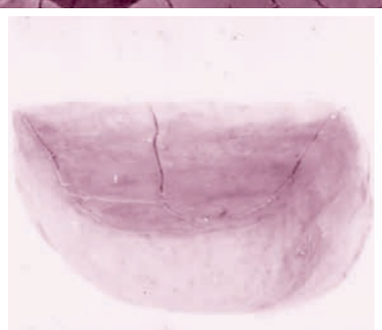
第12面
掘立柱建物K２−４
左:柱穴K2-12070
柱穴K2-12071
右:柱穴K2-12151
礎板検出状況

図版15　古墳時代中～後期　K２調査区

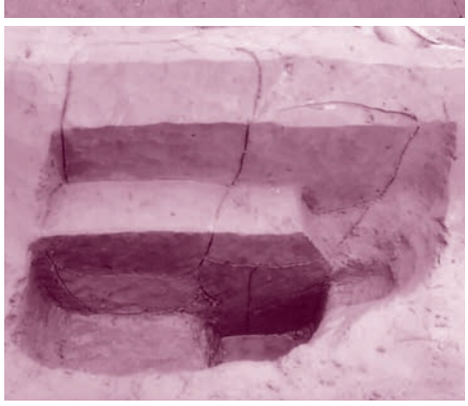


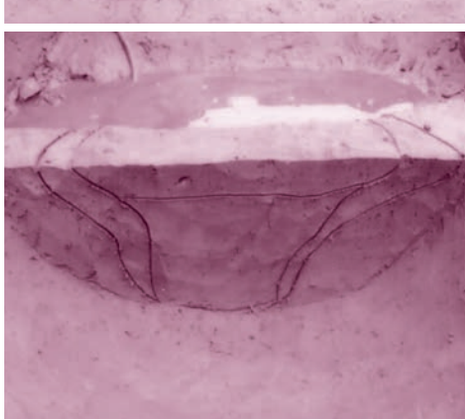
第12面
掘立柱建物Ｋ２－５
完掘（南東より）





第12面
掘立柱建物Ｋ２－５
左：柱穴K2-12036
　　柱根検出状況
中：柱穴K2-12042
　　断面
右：柱穴K2-12114
　　柱根検出状況

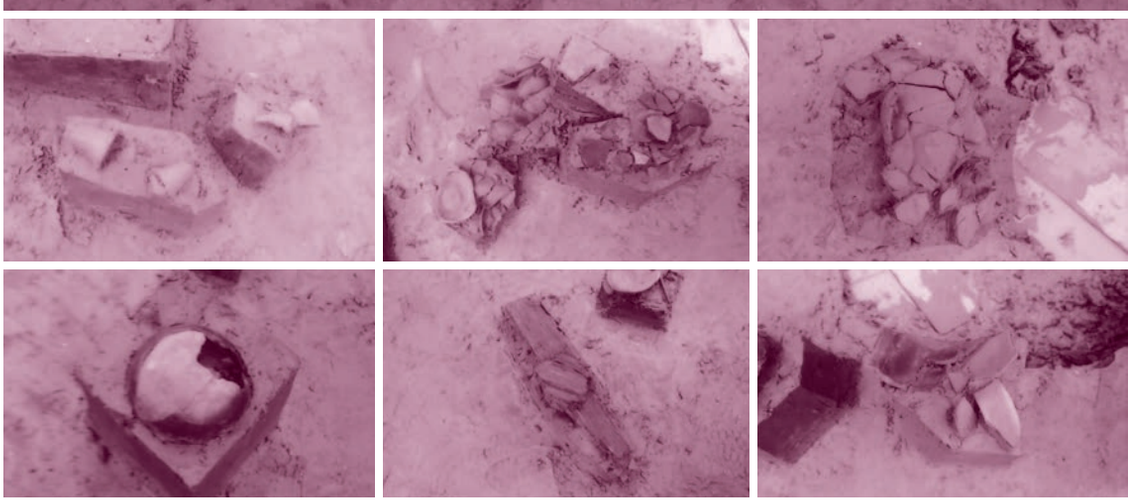




第12面
柵列Ｋ２－１
左：全景（北より）
右上：柱穴K2-12176
　　柱根検出状況
右中：柱穴K2-12022
　　断面
右下：柱穴K2-12019
　　断面

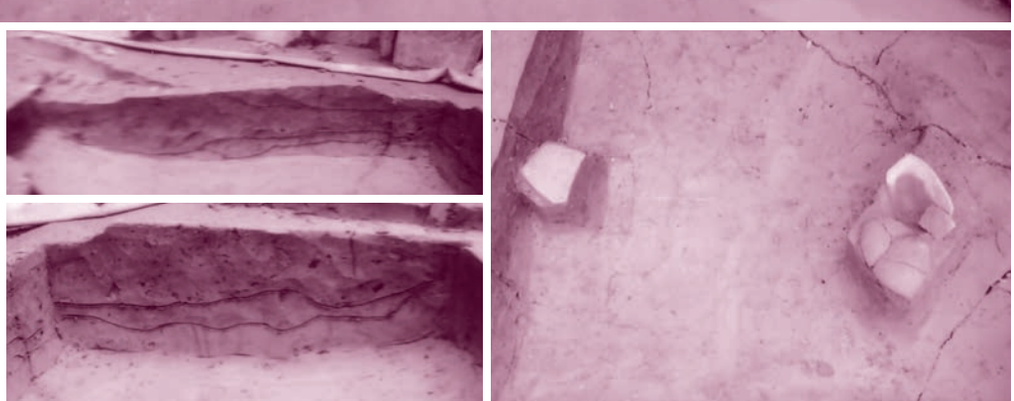
図版16　古墳時代中～後期　K2調査区

第12面
土坑K2-12096
遺物出土状況(北より)



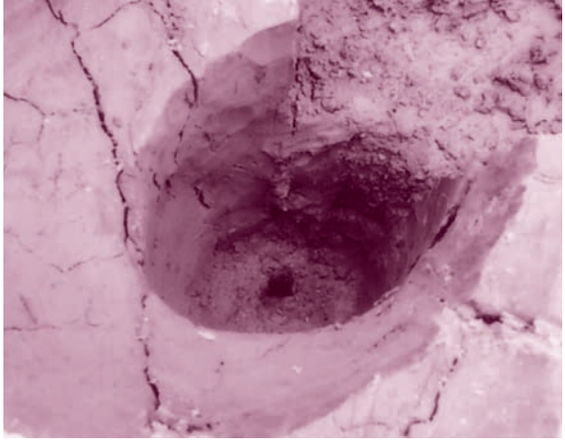
第12面
土坑K2-12096
遺物出土状況
部分拡大

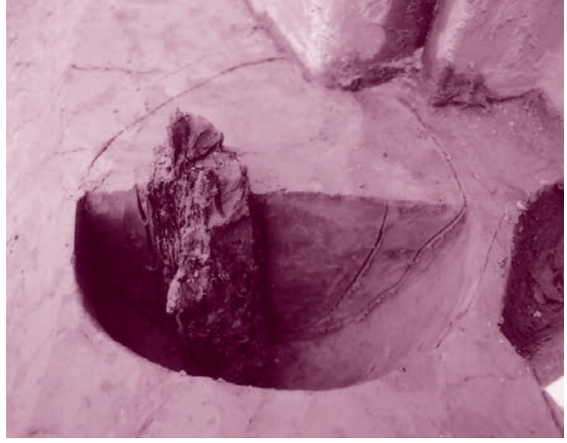
第12面
土坑K2-12096
断面(南東より)



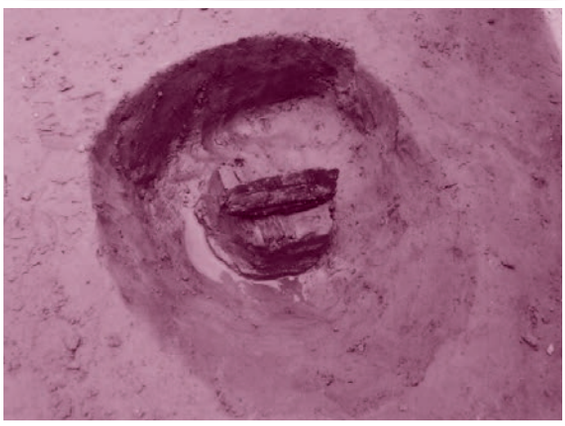
第12面
土坑K2-12130
左上:東西断面
左下:南北断面
右:遺物出土状況

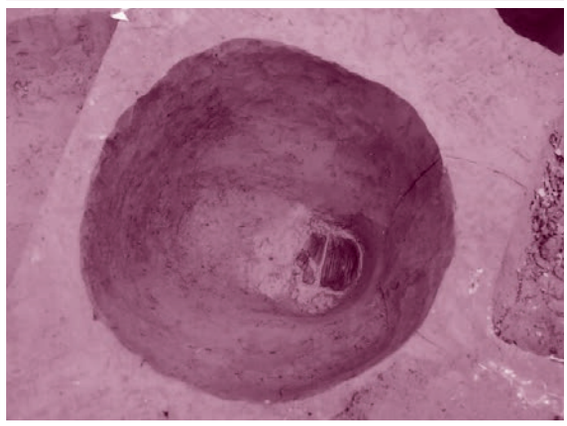
図版17　古墳時代中～後期　K2調査区



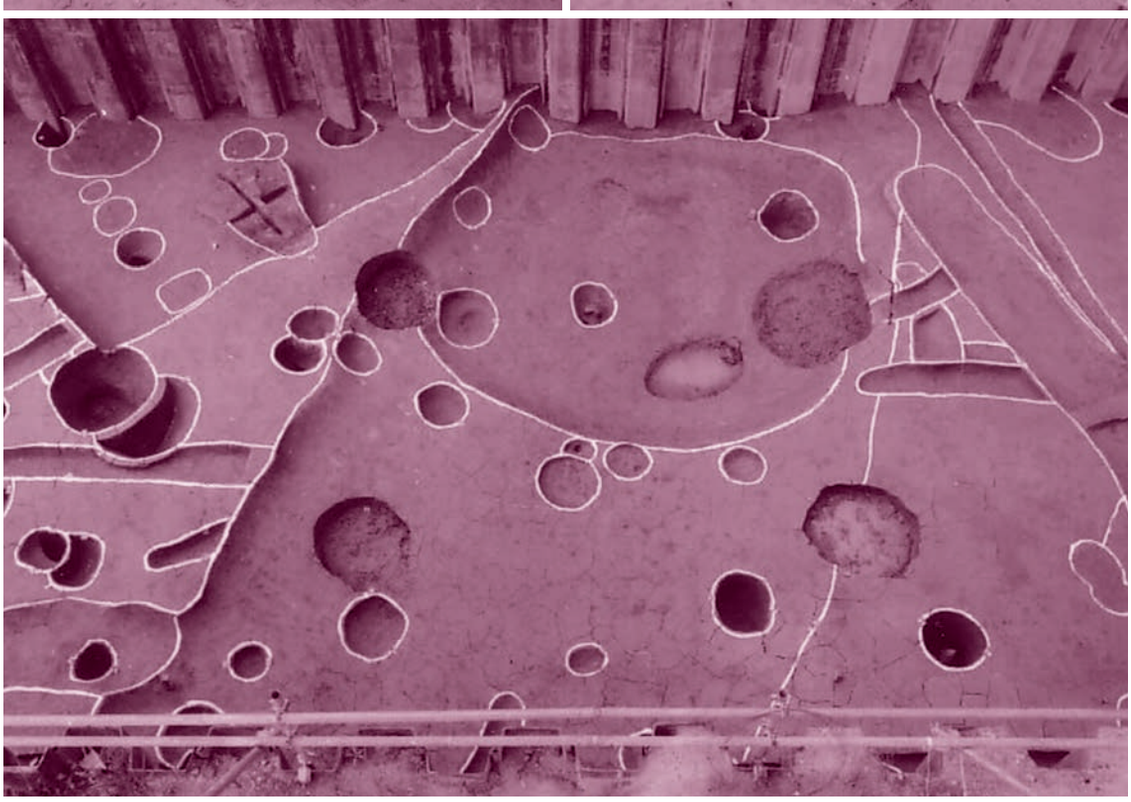


第12面
左:ピットK2-12061
右:ピットK2-12157
柱根検出状況





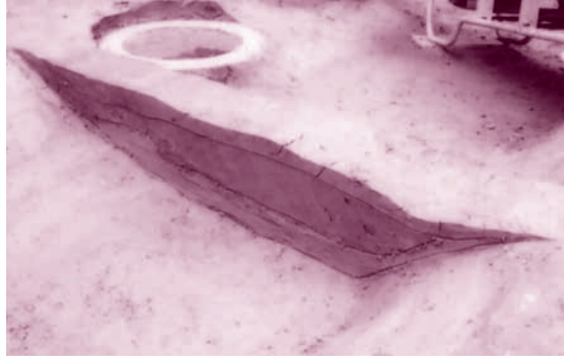
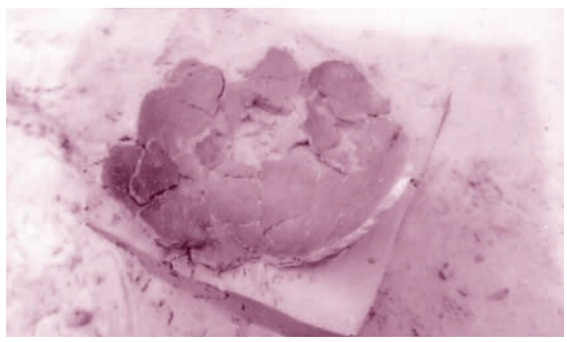
第12面
左:ピットK2-12117
右:ピットK2-12084
礎板検出状況



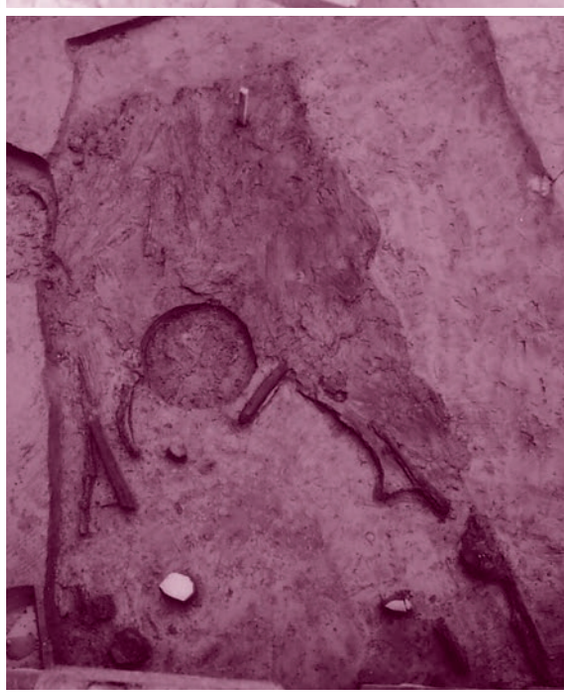
第12面
溝K2-12024
全景(北より)

第12面
溝K2-12024
断面(北東より)

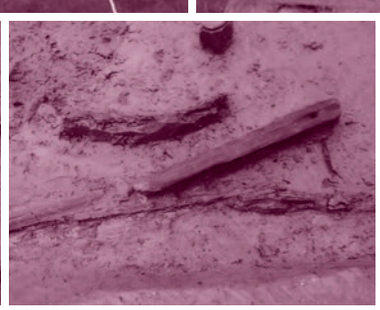
図版18　古墳時代中～後期　K2調査区

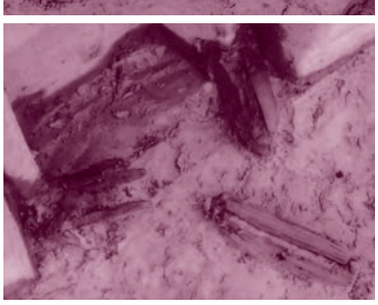
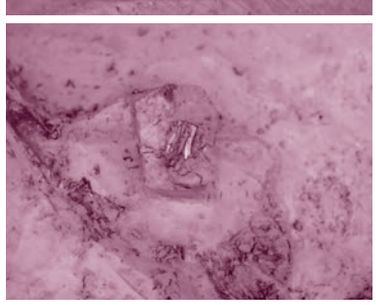
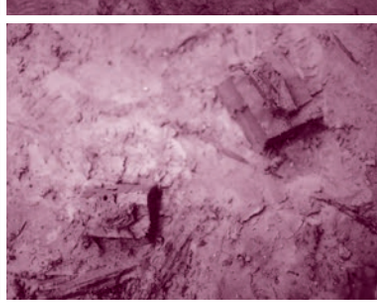
第12面
区画溝K2-12009
左：完掘（北より）
右上：断面
右下：遺物出土状況



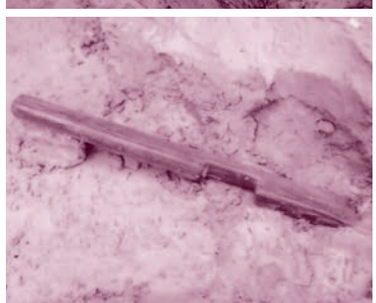
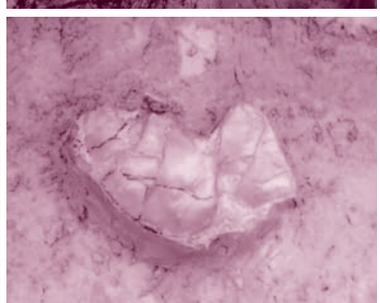
第12面
区画溝K2-12010
左：完掘（北より）
右：樹皮出土状況
（南より）



第12面
区画溝K2-12010
樹皮付近出土遺物
左：製塩土器
中・右：木製品

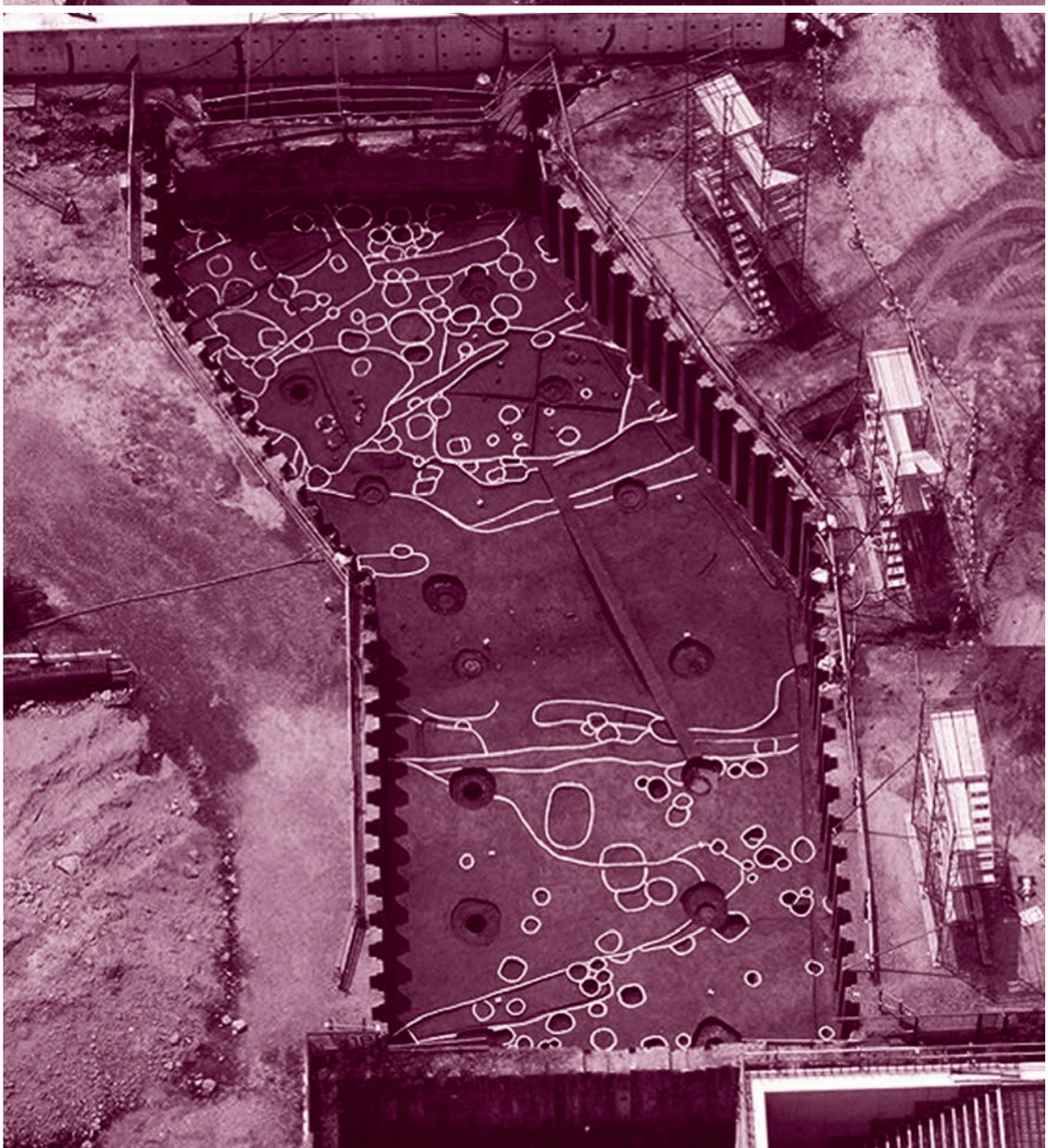
第12面
区画溝K2-12010
樹皮付近出土遺物
左：木製品
中・右：馬歯

第12面
区画溝K2-12010
樹皮下出土遺物
左：木製品
右：土器

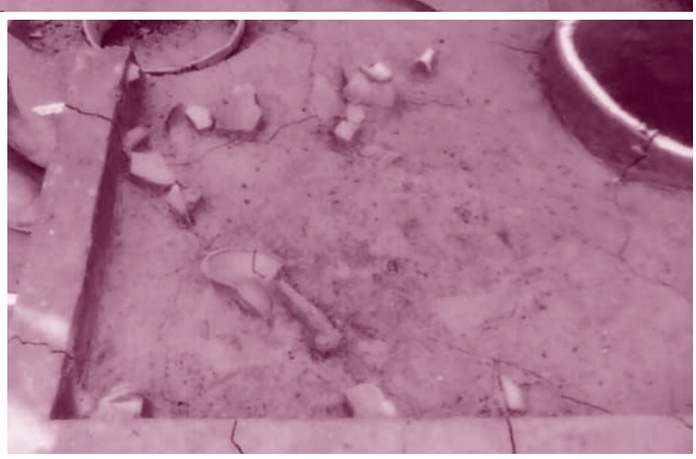
図版19　古墳時代中～後期　K３調査区

第９面
調査区全景
（南より）

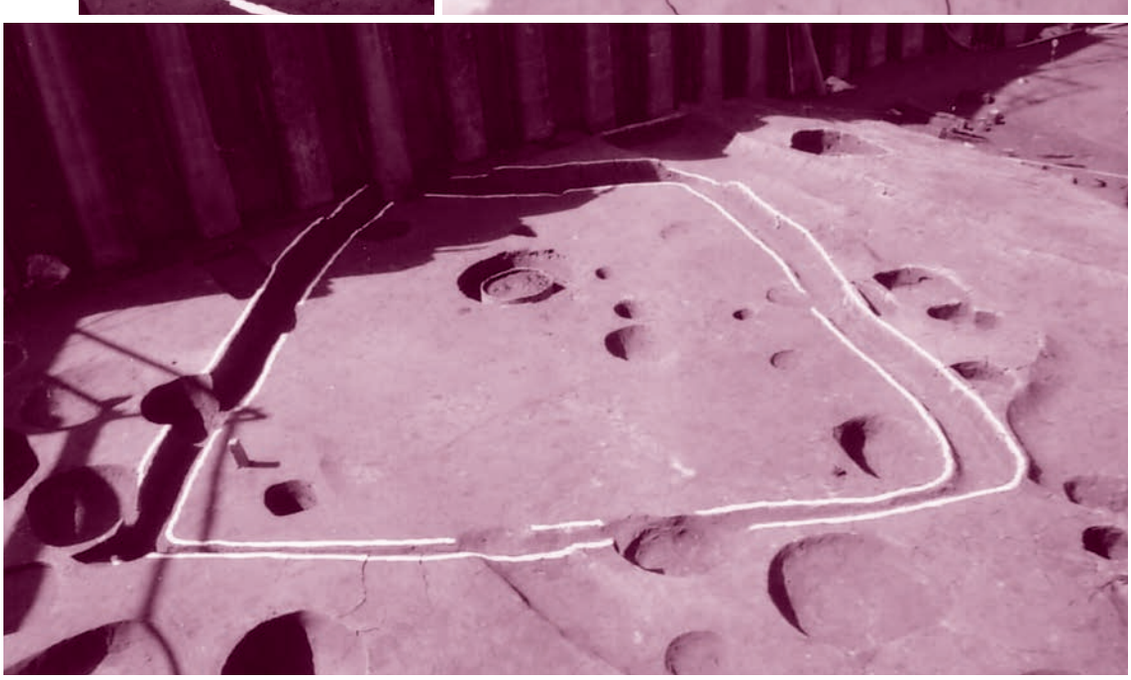


第９面
調査区全景
（東より）

第９面
大壁建物Ｋ３－１
全景（北東より）



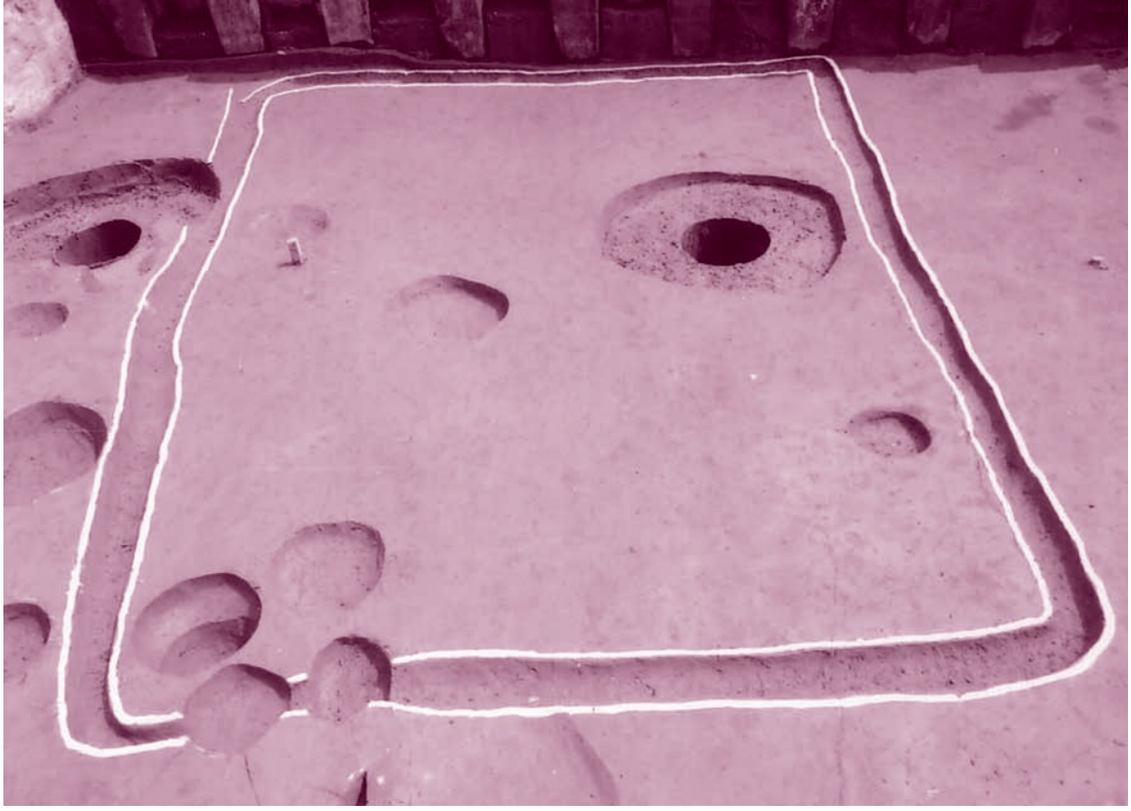
第９面
大壁建物Ｋ３－１
左：柱痕検出状況
（西より）
右：住居内遺物出土状況
（東より）



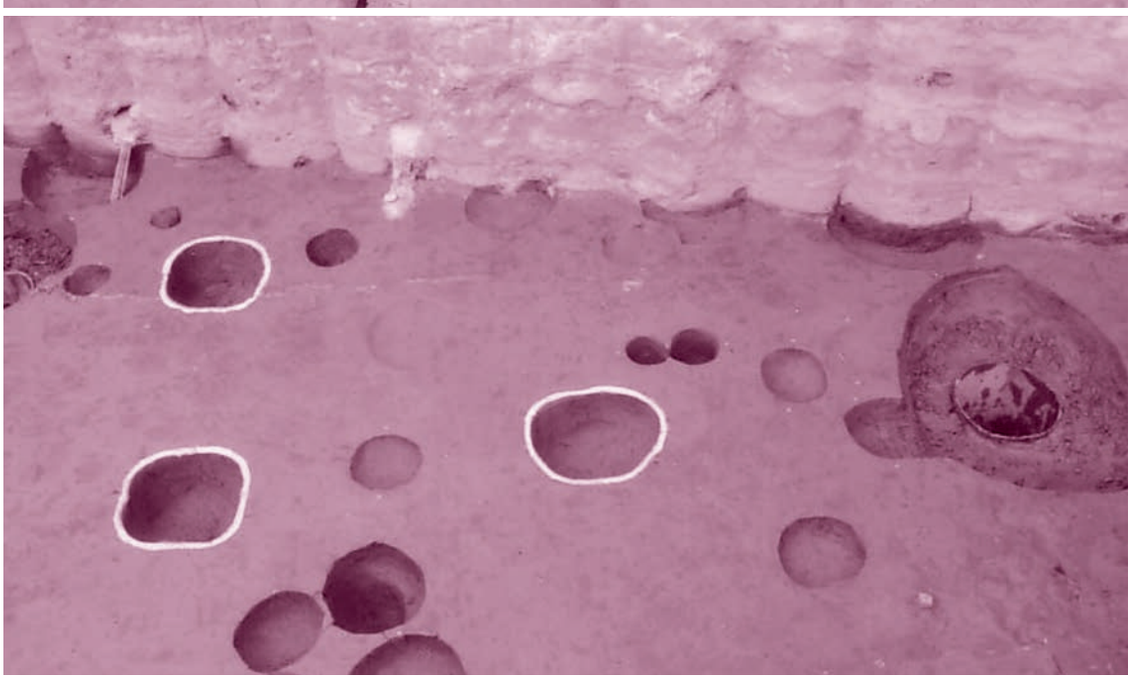
第９面
竪穴住居Ｋ３－２
全景（南より）

第９面
竪穴住居Ｋ３－２
左：住居内遺物出土状況
（南より）
右：同　部分拡大

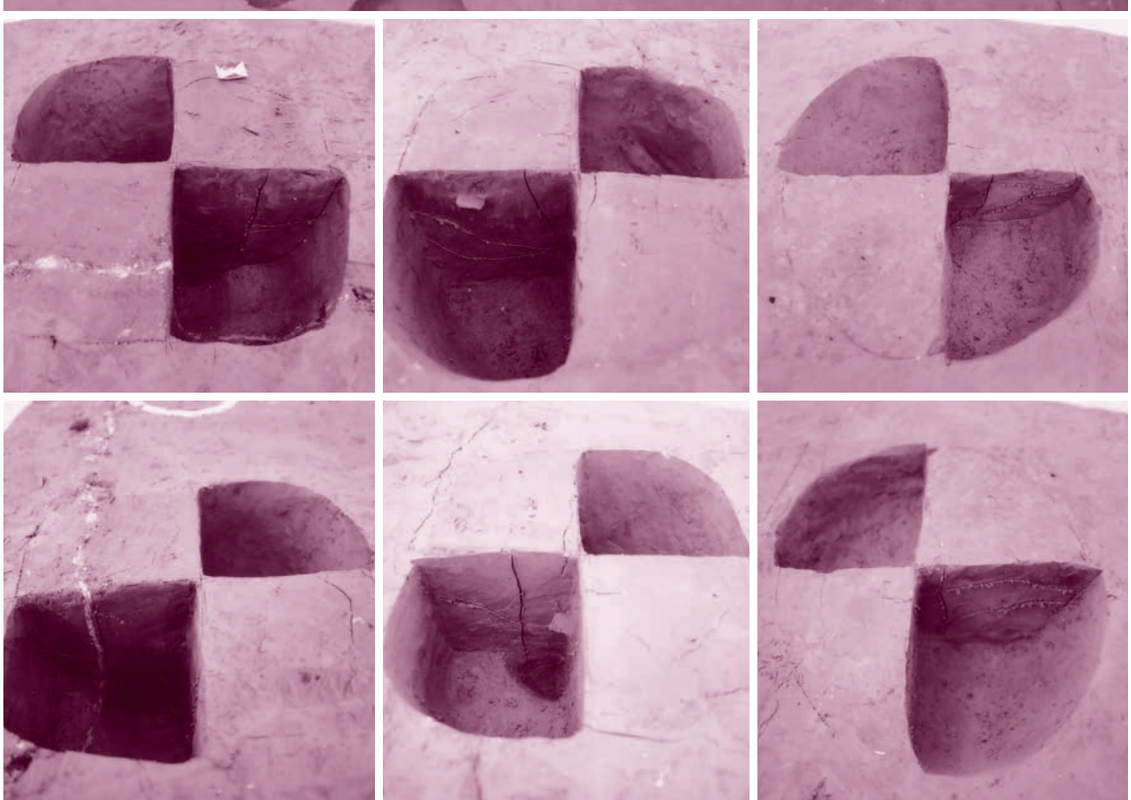
図版21　古墳時代中～後期　K３調査区



第９面
竪穴住居Ｋ３－３
全景（北より）

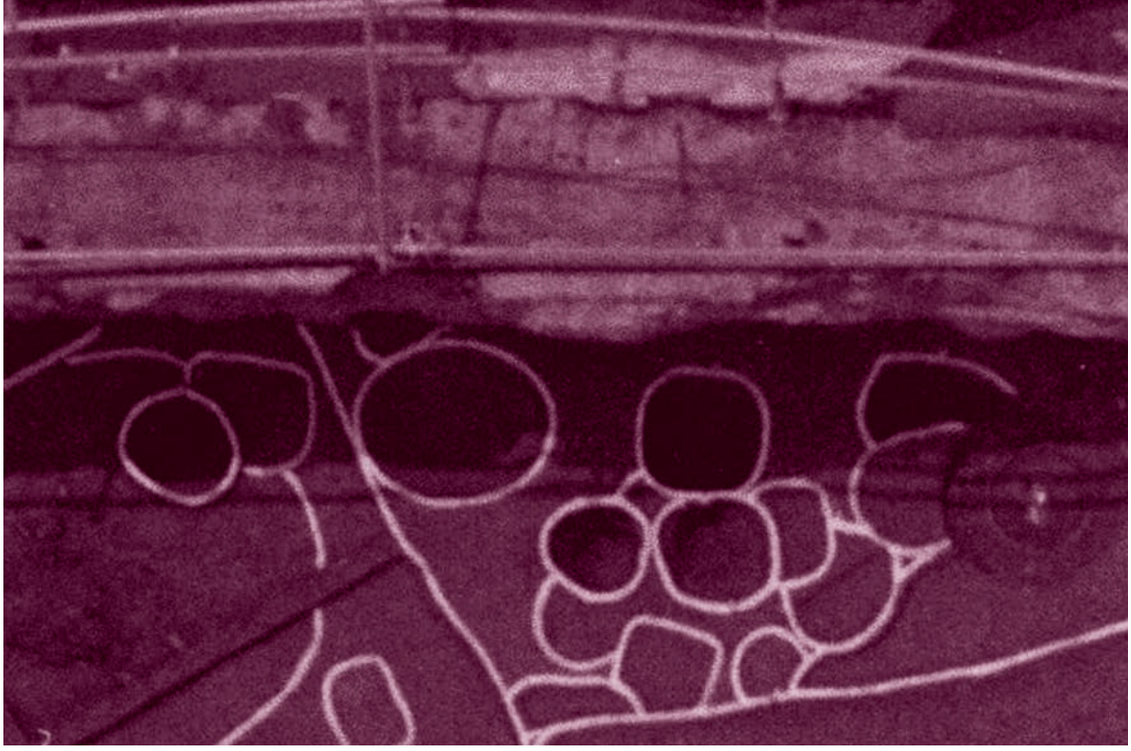


第９面
掘立柱建物Ｋ３－１
全景（西より）

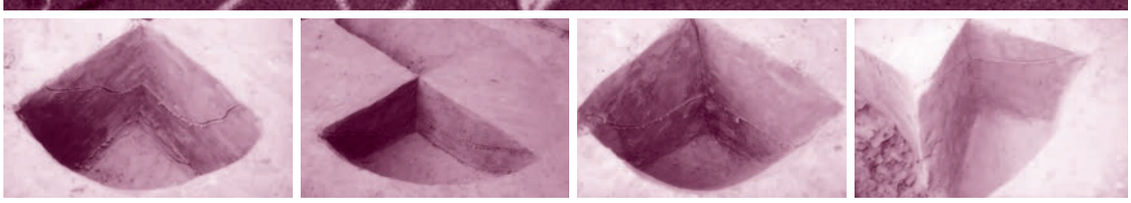


第９面
掘立柱建物Ｋ３－１
左上下:柱穴K3-09006
中上下:柱穴K3-09007
右上下:柱穴K3-09009
断面

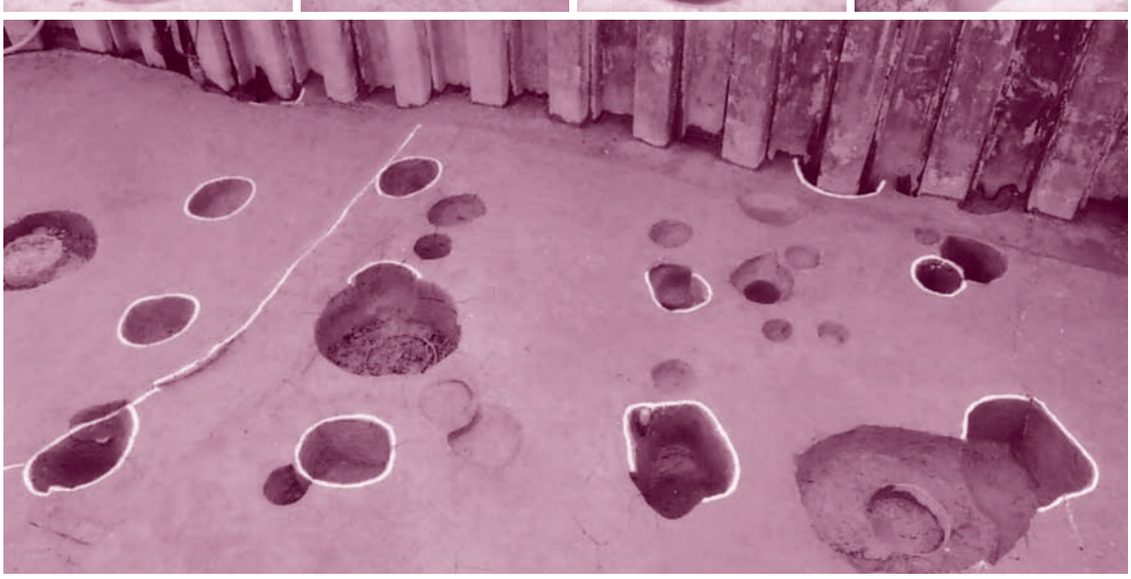
図版22　古墳時代中～後期　K3調査区



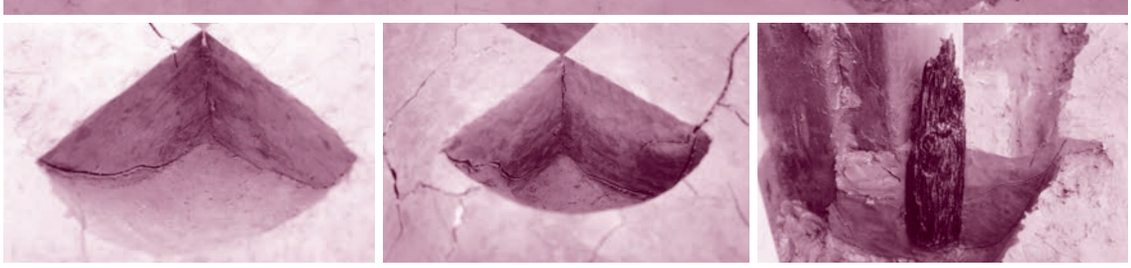
第９面
掘立柱建物Ｋ３－２
全景（東より）



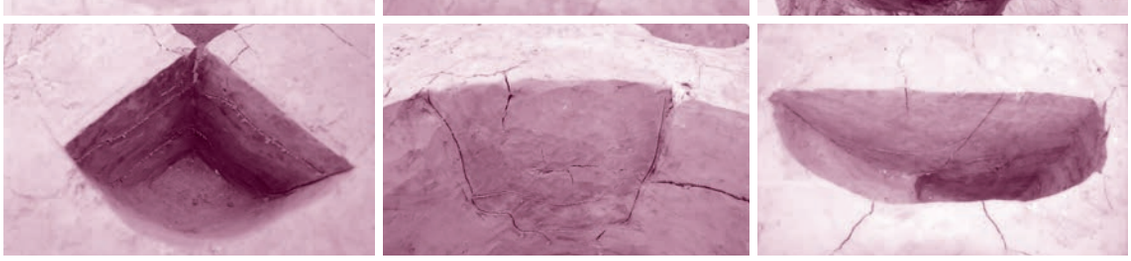
第９面
掘立柱建物Ｋ３－２
左：柱穴K3-09124
中左：柱穴K3-09123
中右：柱穴K3-09122
右：柱穴K3-09131
　断面



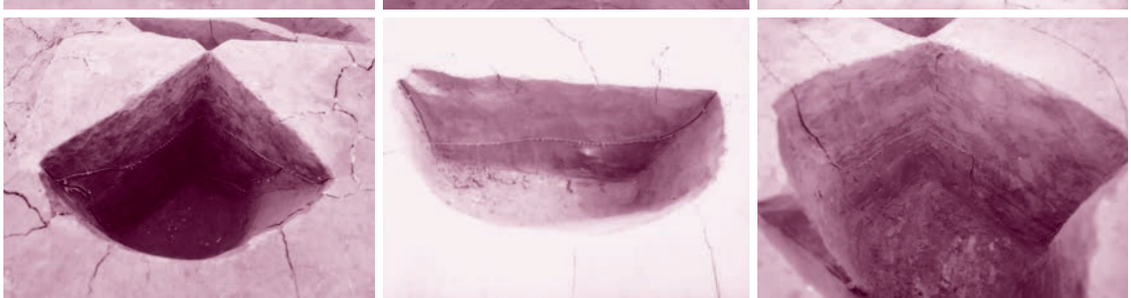
第９面
掘立柱建物Ｋ３－３
全景（南より）



第９面
掘立柱建物Ｋ３－３
左：柱穴K3-09215
中：柱穴K3-09079
右：柱穴K3-09214
　断面



第９面
掘立柱建物Ｋ３－３
左：柱穴K3-09216
中：柱穴K3-09037
右：柱穴K3-09030
　柱穴K3-09031
　断面

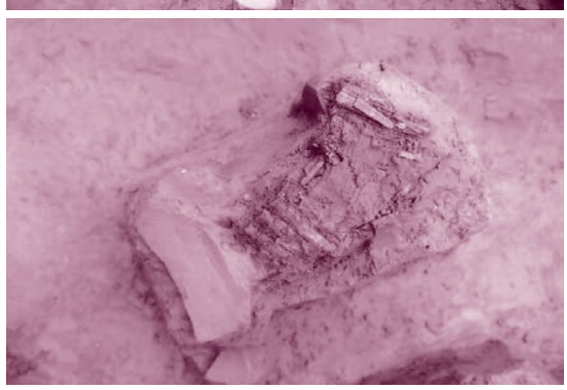


第９面
掘立柱建物Ｋ３－３
左：柱穴K3-09200
中：柱穴K3-09035
右：柱穴K3-09217
　断面

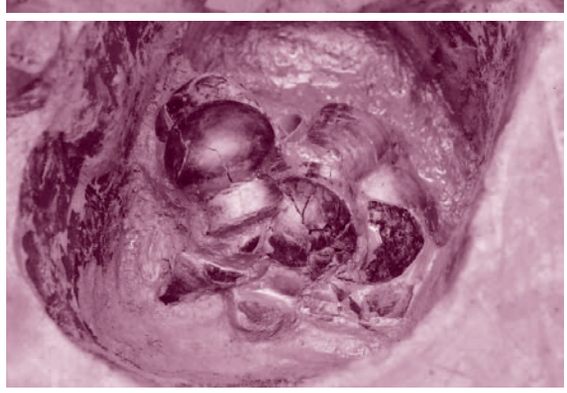
図版23　古墳時代中～後期　K３調査区

第９面
井戸Ｋ３-０９１９２
完掘（東より）

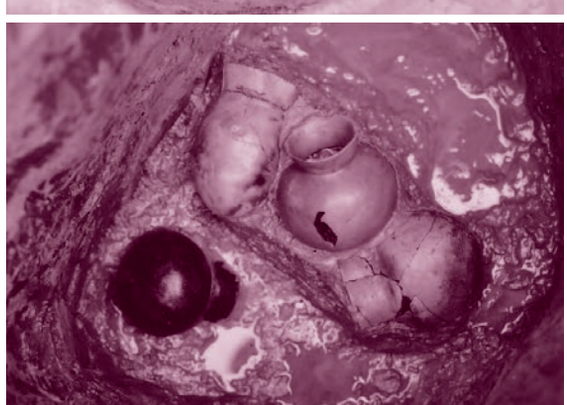
第９面
井戸Ｋ３-０９１９２
取り上げ２回目
左：遺物出土状況
右：同　部分拡大



第９面
井戸Ｋ３-０９１９２
取り上げ４－１回目
左：遺物出土状況
右：同　部分拡大（馬歯）



第９面
井戸Ｋ３-０９１９２
左：取り上げ4-３回目
　　遺物出土状況
右：取り上げ６回目
　　遺物出土状況

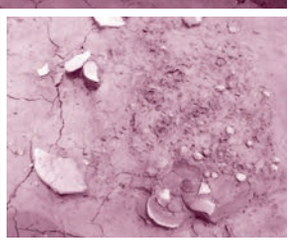
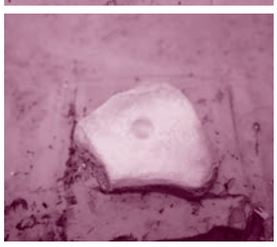


第９面
井戸Ｋ３-０９１９２
左：取り上げ７回目
　　遺物出土状況
右：取り上げ８回目
　　遺物出土状況

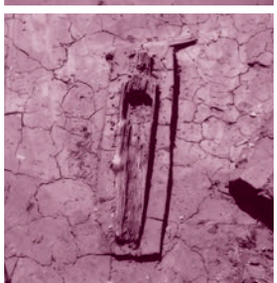
図版24　古墳時代中～後期　K3調査区

第９面
持ち込みK3-09050
左:完掘(北より)
右:遺物出土状況
(北より)

第９面
持ち込みK3-09050
左:南西端部遺物出土状況
(北西より)
右:断面(南東より)

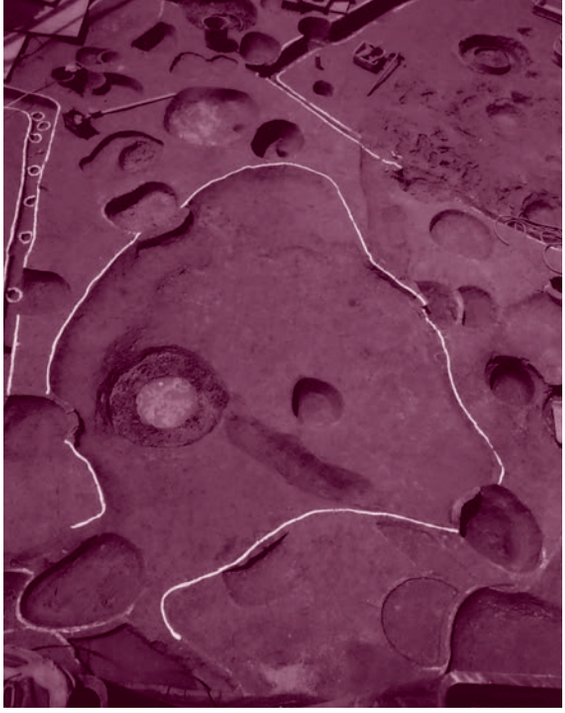



第９面
持ち込みK3-09050
左:南半部(最下層)
遺物出土状況(北より)
右:同　部分拡大
左上:U字形板状土製品
右上:種子溜まり
左下:石製品
右下:木製品

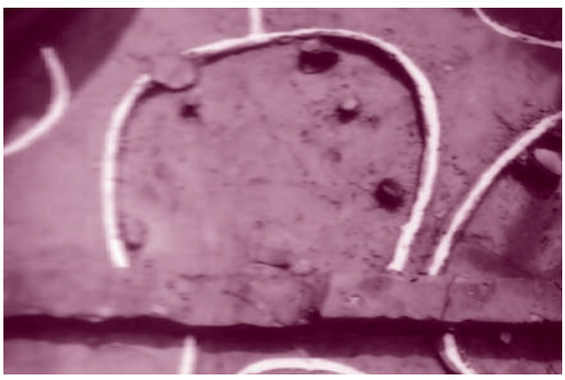


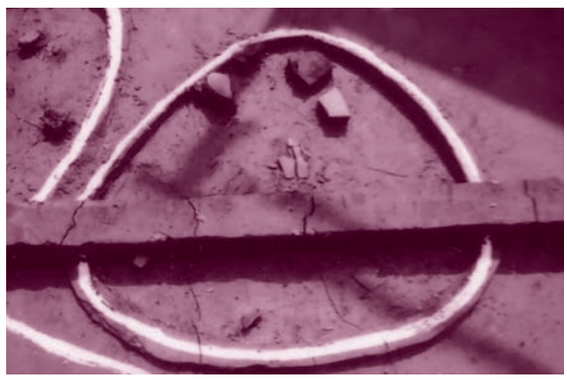
第９面
持ち込みK3-09050
左:北半部(最下層)
遺物出土状況(北より)
右:同　部分拡大
左上:土器
右上:木製品・土器
左下:木製品
右下:須恵器坏身

図版25　古墳時代中～後期　K3・HT1調査区

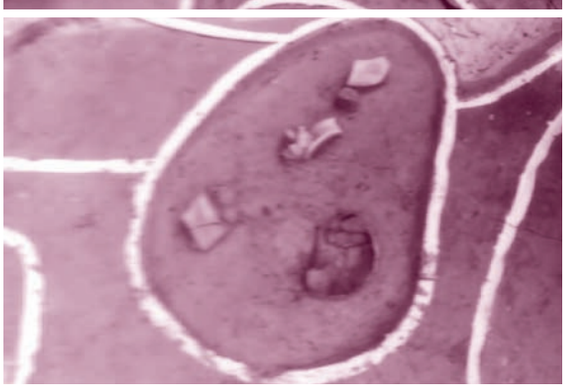


第９面
土坑Ｋ３−０９０９１
左：全景（東より）
右上下：遺物出土状況

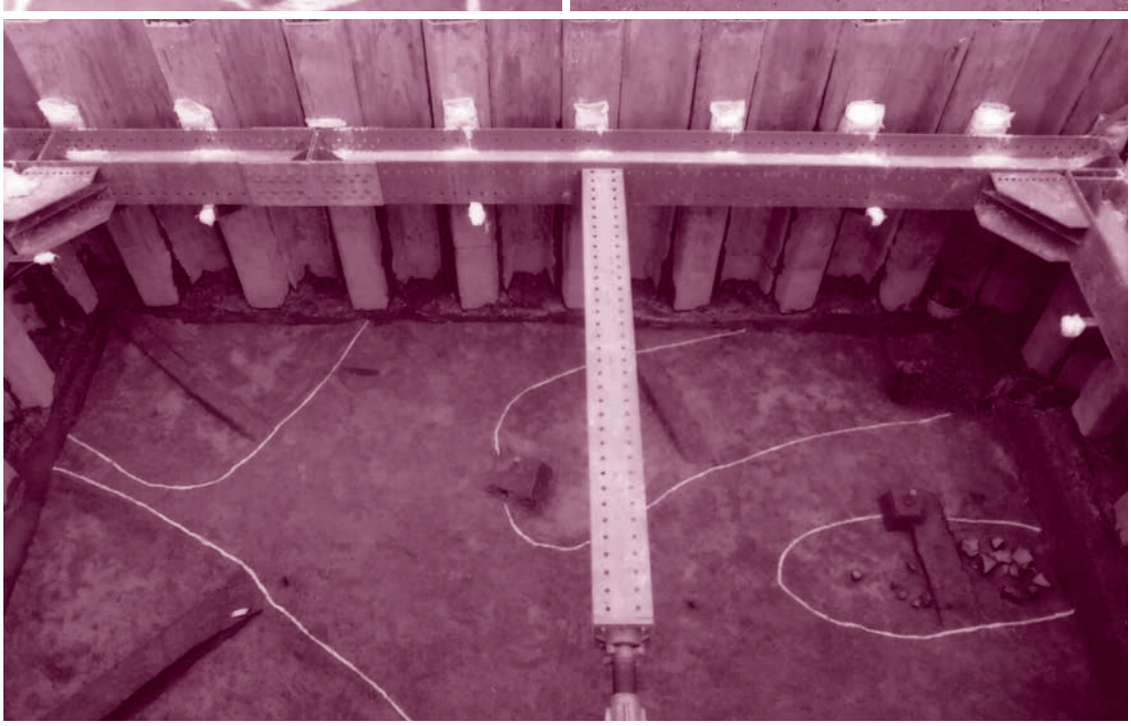




第９面
左：土坑K3-09149
　　遺物出土状況
右：土坑K3-09150
　　遺物出土状況

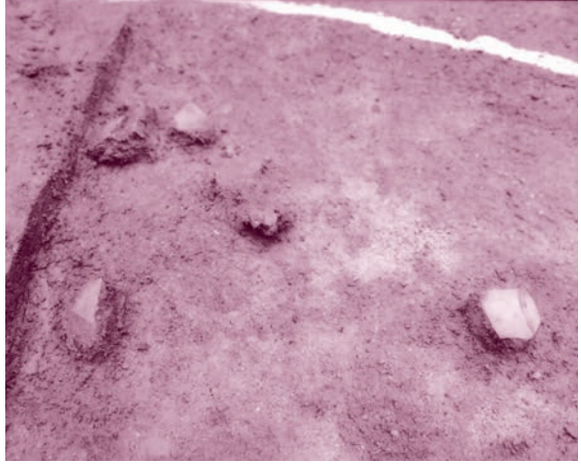


第９面
左：土坑K3-09157
　　遺物出土状況
右：土坑K3-09197
　　遺物出土状況

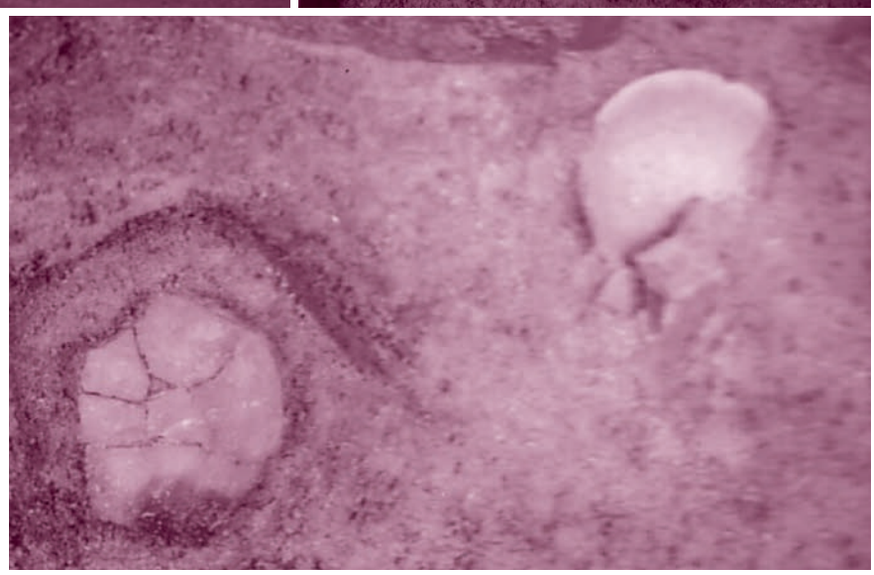


第７面
ＨＴ１調査区全景
（南より）

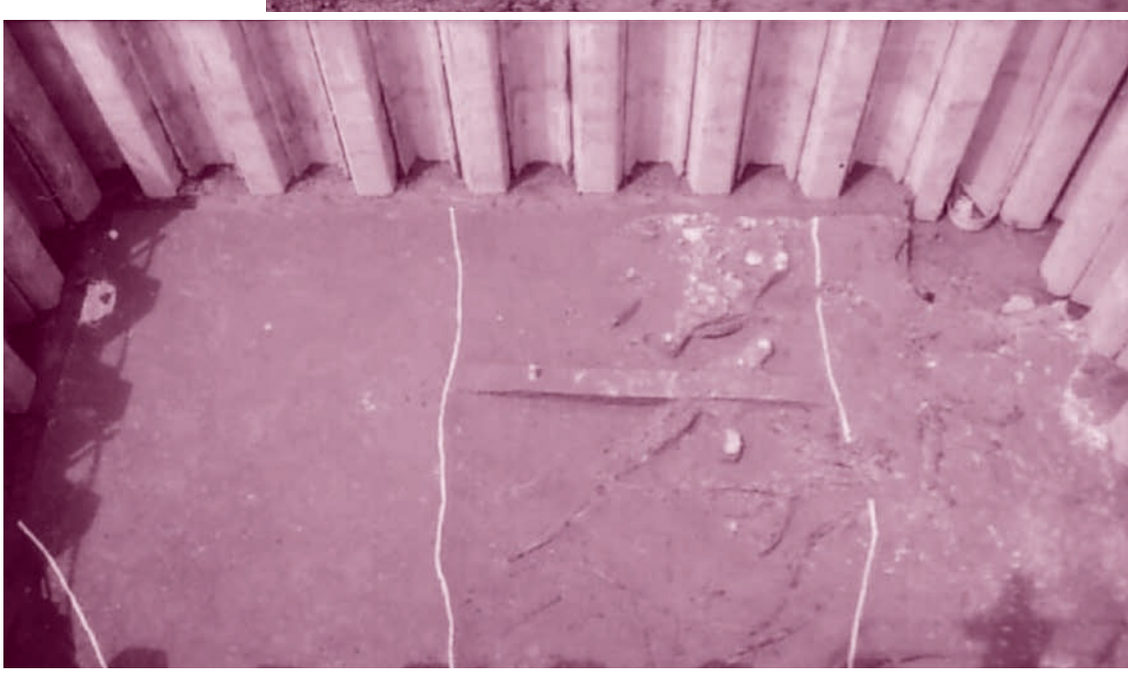
図版26　古墳時代中～後期　HT1調査区



第10面
土坑HT1－07007
左:遺物出土状況
（東より）
右上:同　西半部拡大
（北より）
右下:同　東半部拡大
（南より）

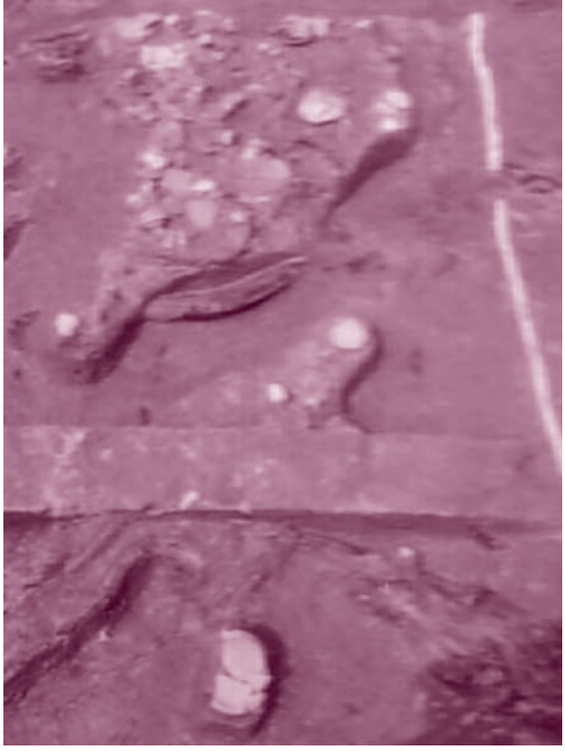


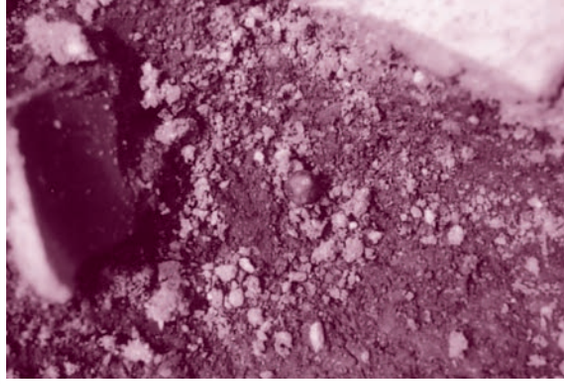
第７面
調査区南壁内
遺物出土状況



第６面
調査区全景
（南より）

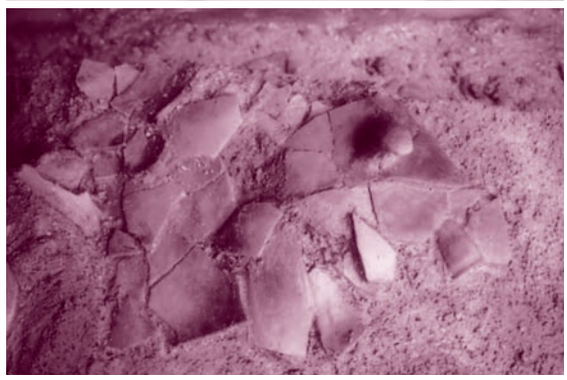
図版27　古墳時代中～後期　ＨＴ１・Ｋ１調査区



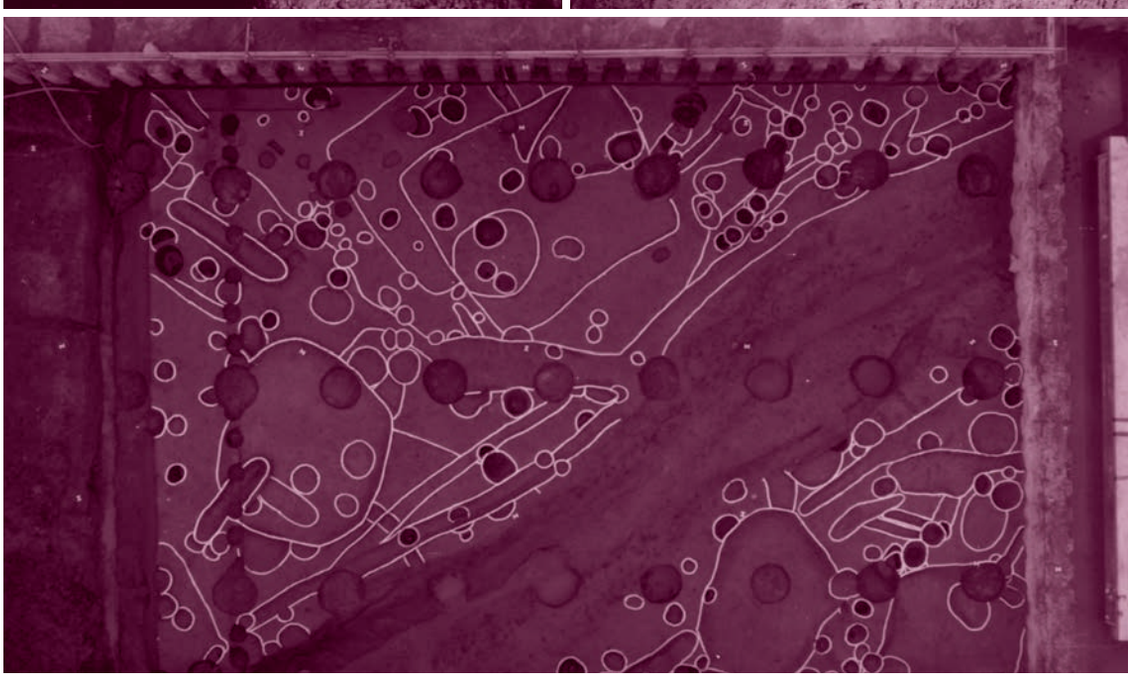


第６面
溝ＨＴ１-０６００１
左:遺物出土状況
右上:同　部分拡大　土玉
右下:同　部分拡大

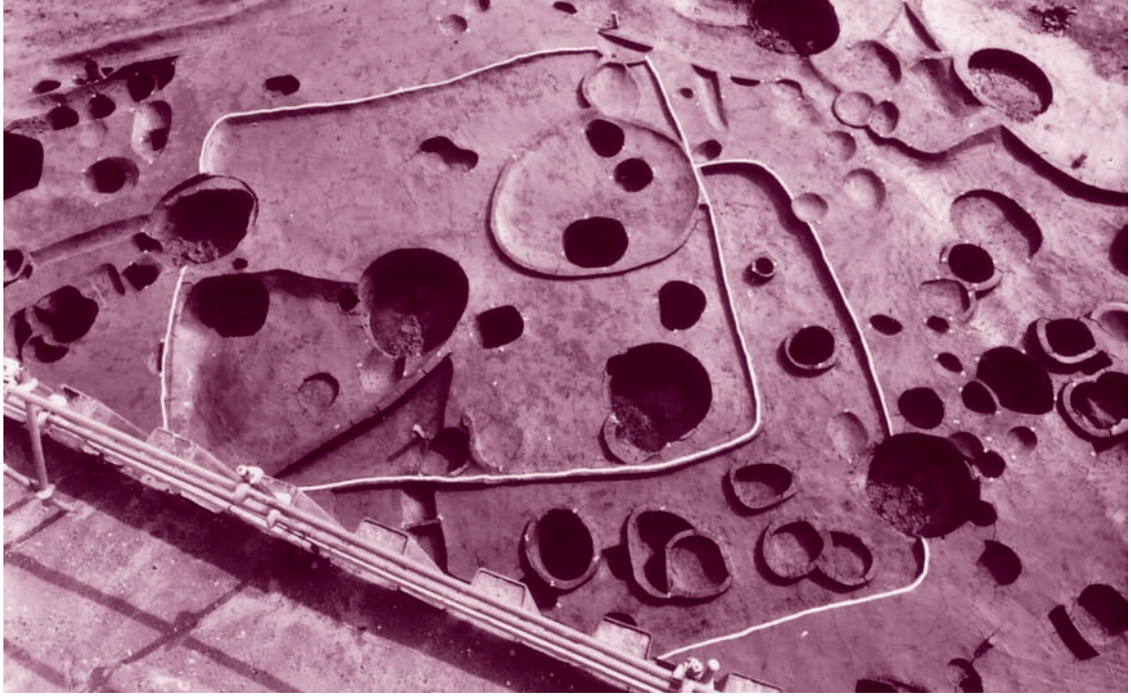
第６面
土坑ＨＴ１-０６００３
遺物出土状況
左:東より
左:北より



第６面
土坑ＨＴ１-０６００３
遺物出土状況
左:部分拡大　壺
右:部分拡大　甑

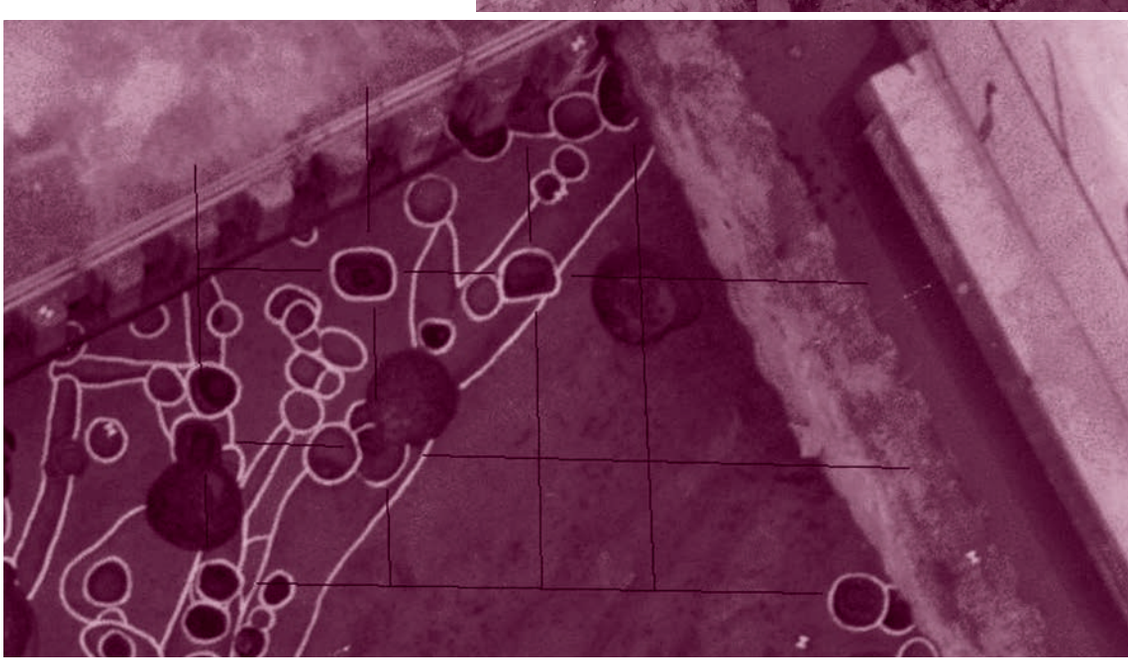


第10面
Ｋ１調査区
全景

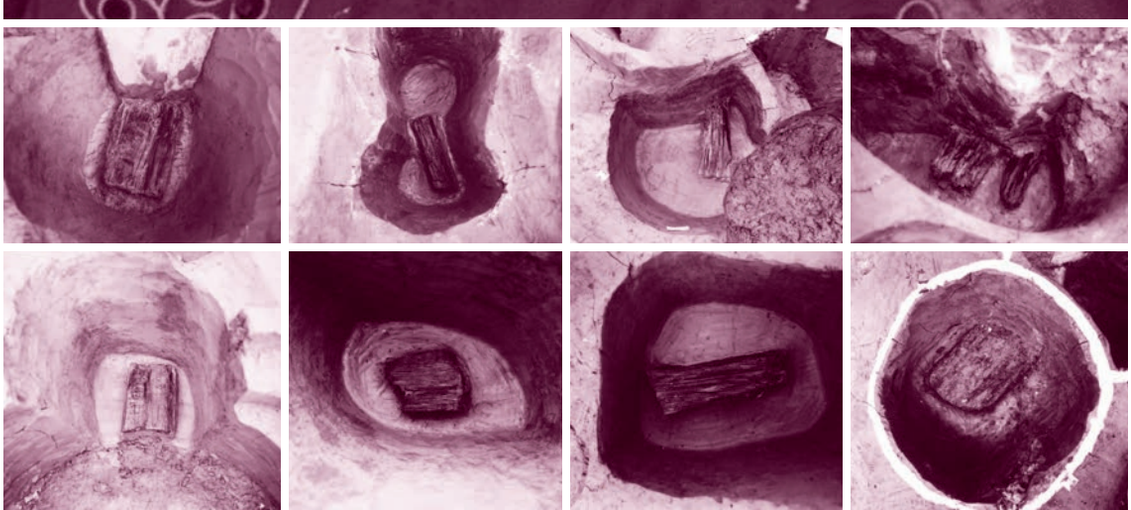


第10面
竪穴住居K1-1･K1-2
全景（北西より）

第10面
竪穴住居Ｋ１－１
カマド検出状況
（北西より）



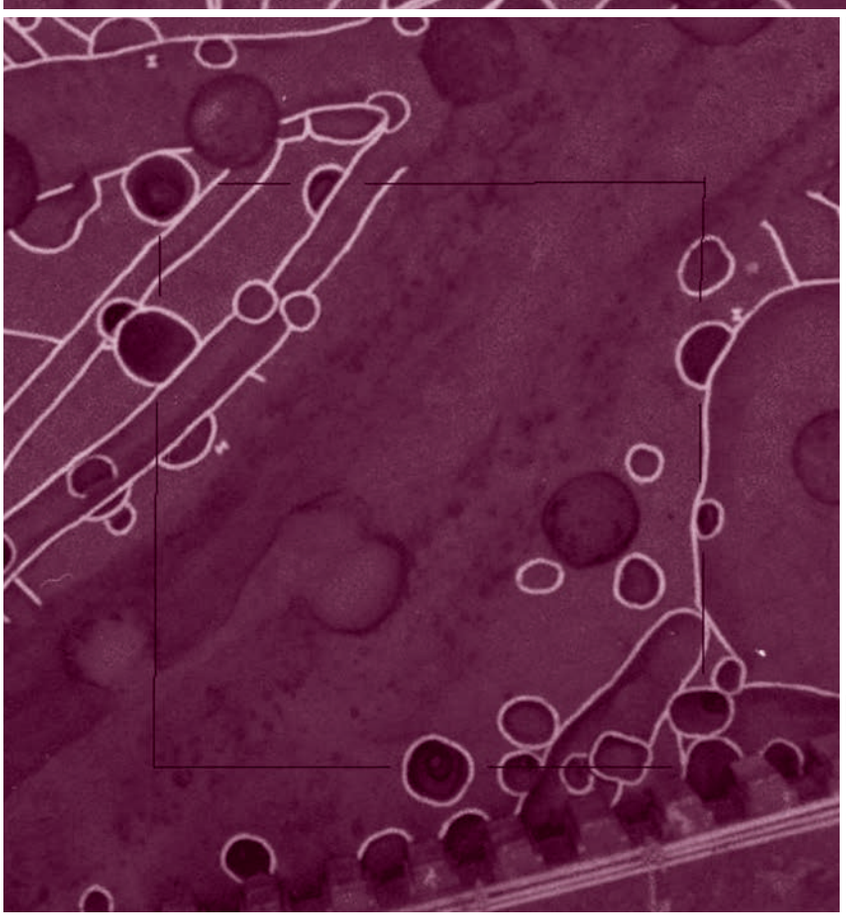
第10面
掘立柱建物Ｋ１－１
全景（南西より）

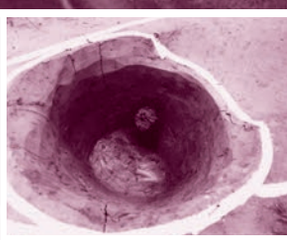


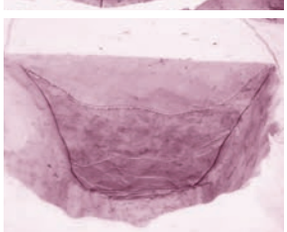
第10面
掘立柱建物Ｋ１－１
左：柱穴K1-10223
中左：柱穴K1-10064
中右：柱穴K1-10168
右：柱穴K1-10243
礎板検出状況

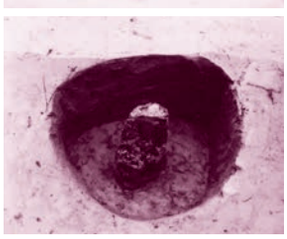
図版29　古墳時代中～後期　K1調査区

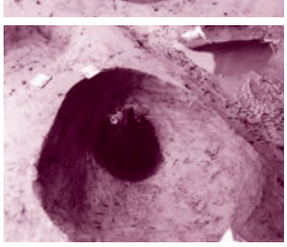
第10面
掘立柱建物K１－２
全景(南西より)



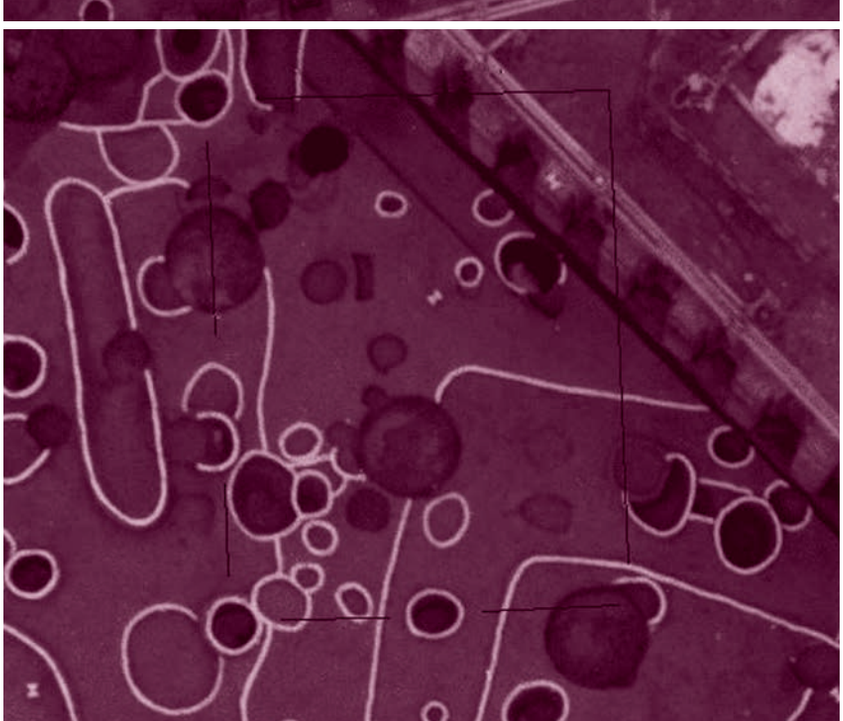


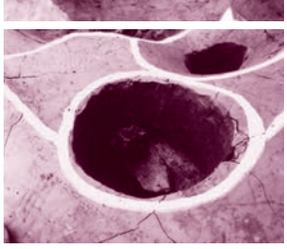


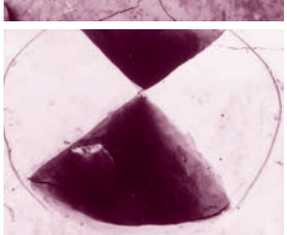


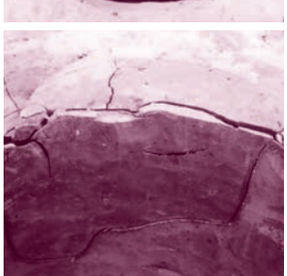


第10面
掘立柱建物K１－３
左:全景(南より)
右:上から
柱穴K1-10044
柱根検出状況
柱穴K1-10083
断面
柱穴K1-10204
柱根検出状況
柱穴K1-10241
柱根検出状況



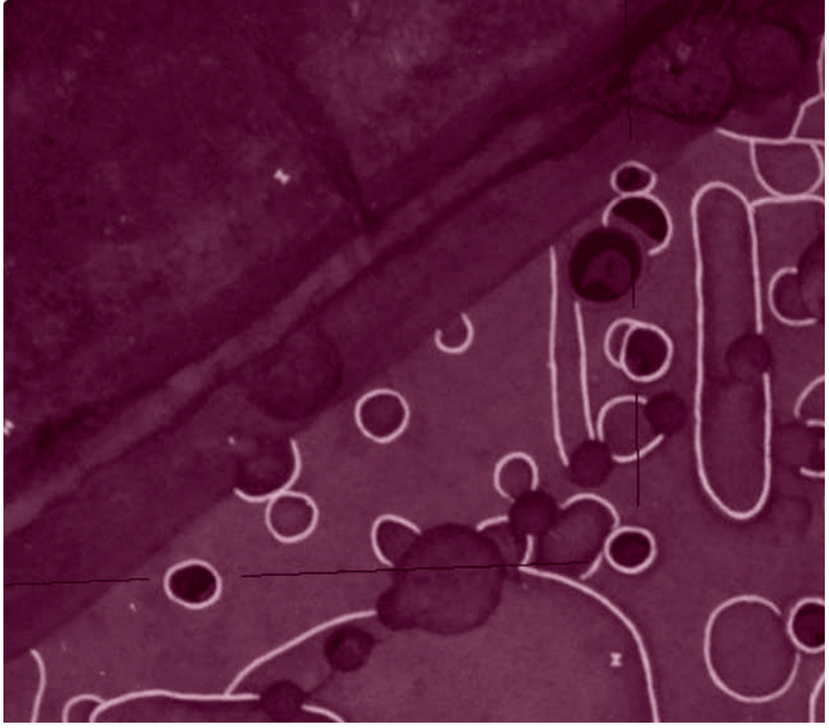




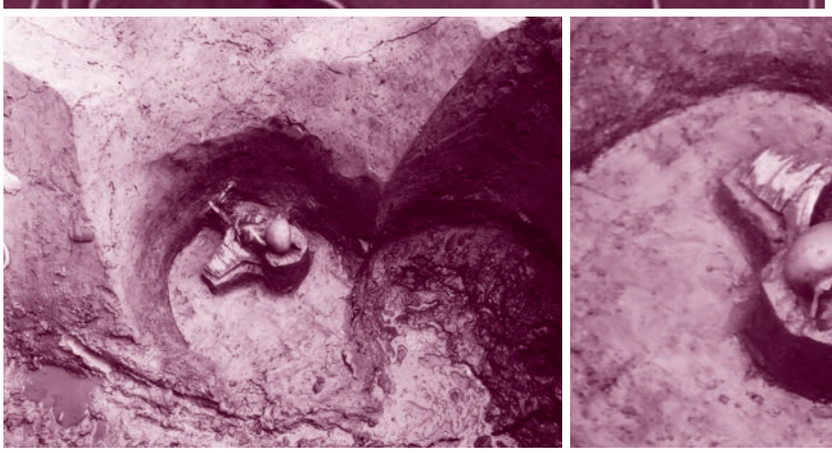


第10面
掘立柱建物K１－４
左:全景(南東より)
左上:柱穴K2-10145
柱根検出状況
右中:柱穴K2-10023
柱根検出状況
右下:柱穴K2-10041
断面

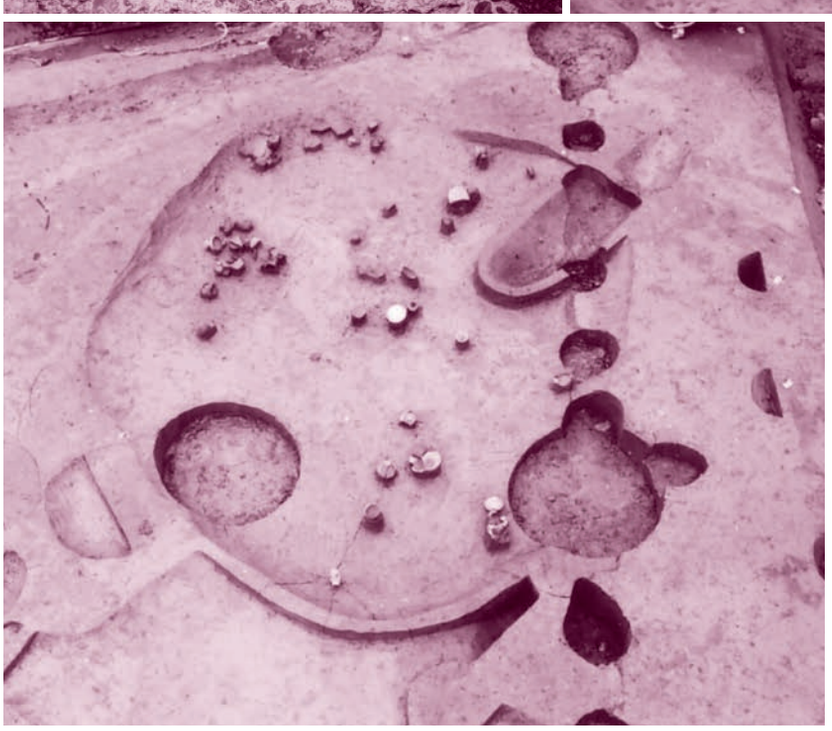
図版30　古墳時代中～後期　K1調査区



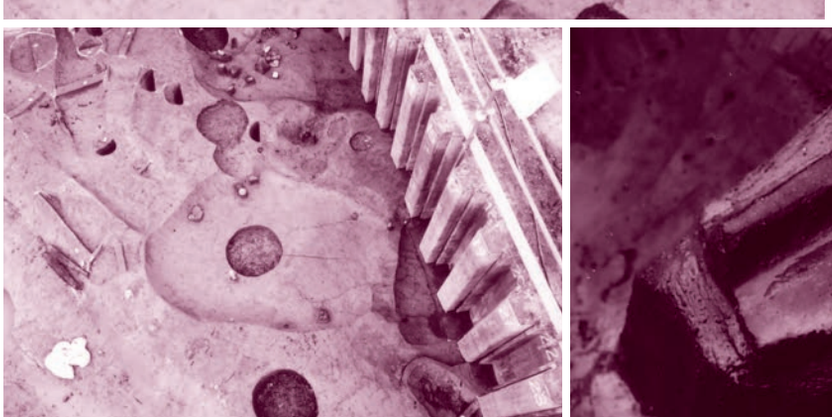
第10面
掘立柱建物Ｋ１－５
左:全景(南東より)
右:柱根検出状況
　上:柱穴K1-10264
　中:柱穴K1-10016
　下:柱穴K1-10021



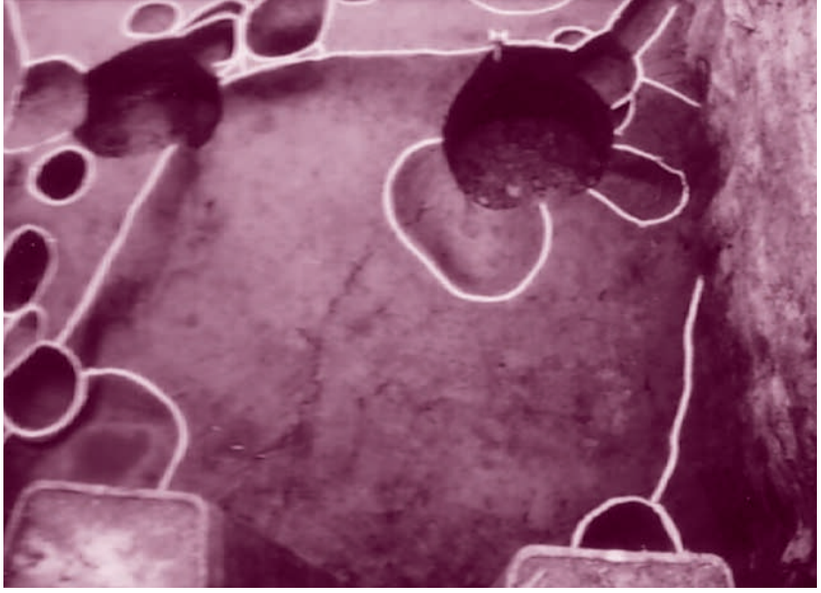
第10面
井戸Ｋ１－１０１４８
左:全景(西より)
右:遺物出土状況



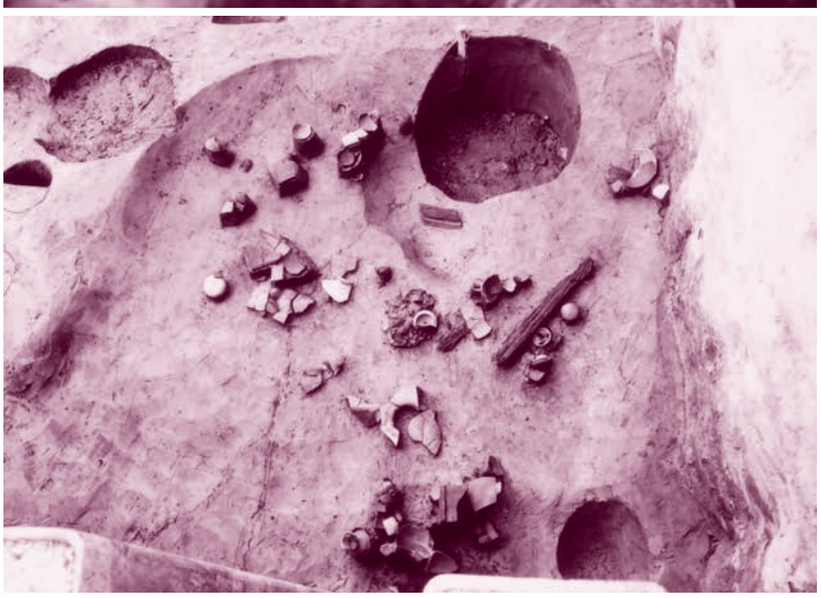
第10面
土坑Ｋ１－１０００３
左:遺物出土状況
　(北より)
右上中下:同　部分拡大



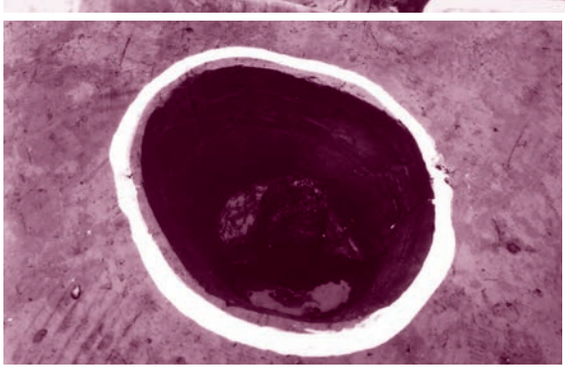
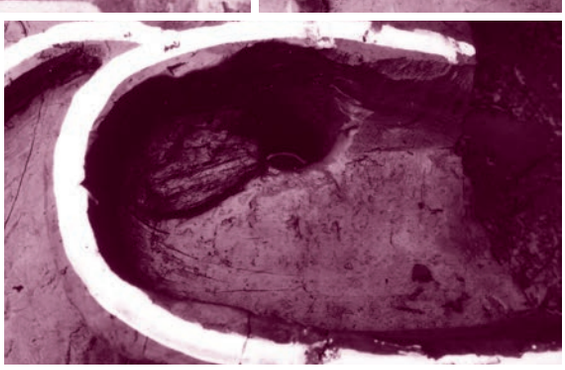
第10面
左:土坑K1-10138
　全景(北西より)
右:土坑K1-10042
　U字形板状土製品
　出土状況



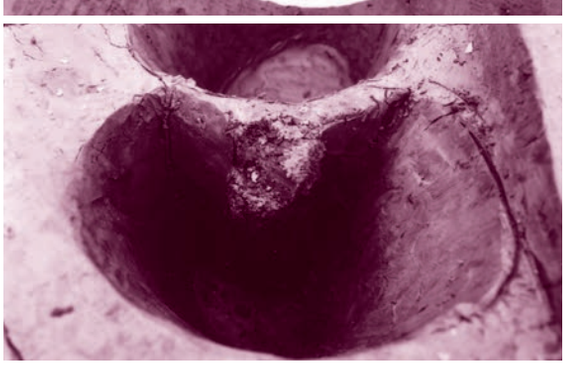
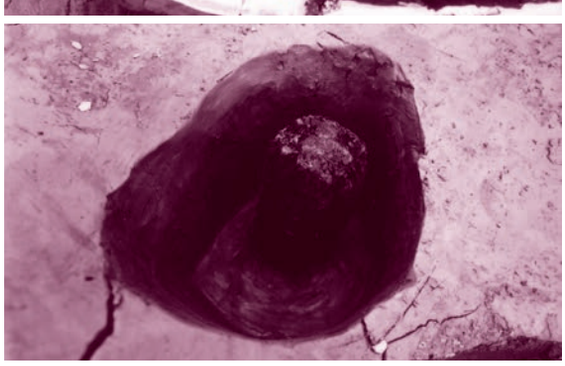
第10面
土坑K1−10144
左：全景（南より）
右：遺物出土状況
　　部分拡大



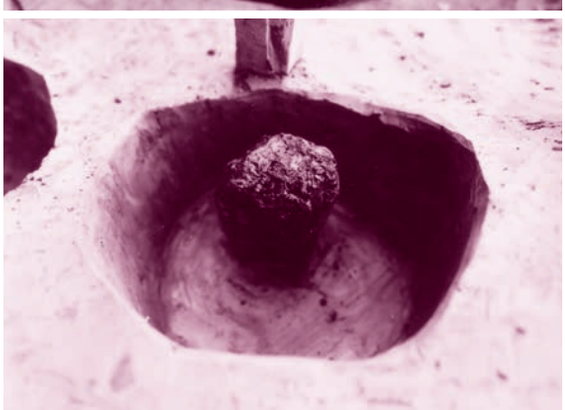
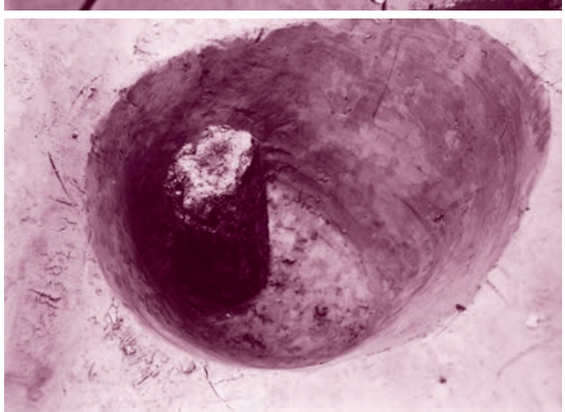
第10面
土坑K1−10144
左：遺物出土状況
右：同　部分拡大

第10面
左：掘立柱建物K1−5
　　柱穴K1-10033
右：ピットK1-10076
　　柱根検出状況

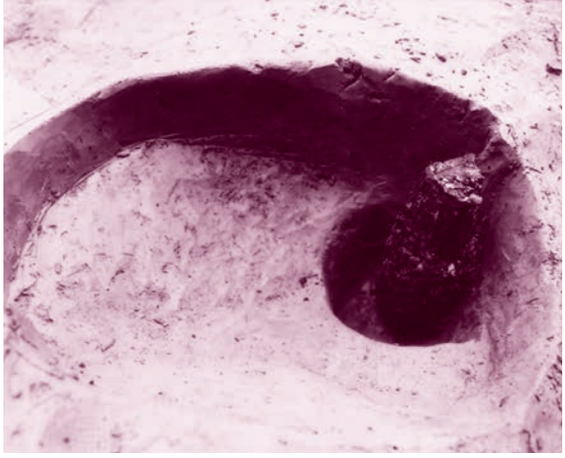



第10面
左：ピットK1-10158
右：ピットK1-10166
　　柱根検出状況

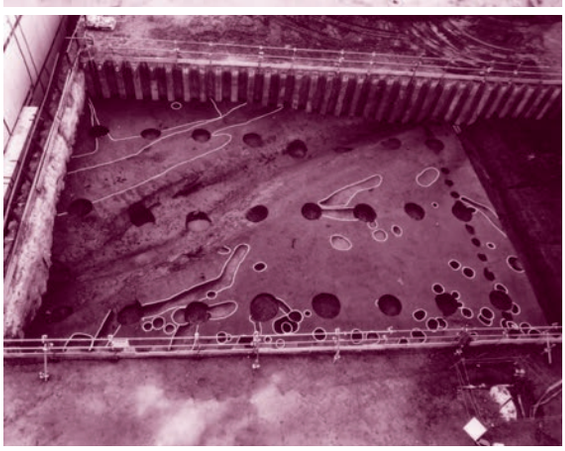
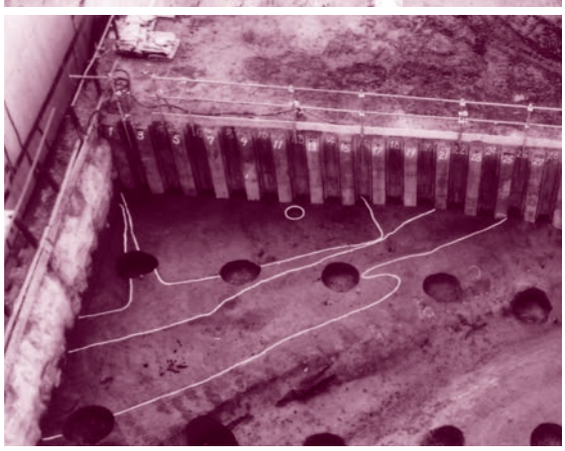



第10面
左：ピットK1-10188
右：ピットK1-10170
　　柱根検出状況

図版32　古墳時代中～後期　K1・UK調査区

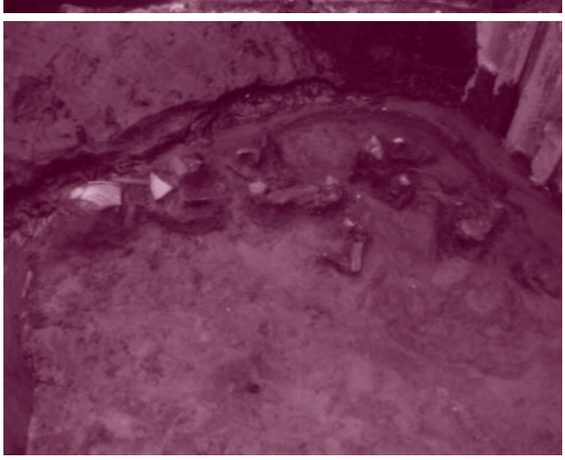
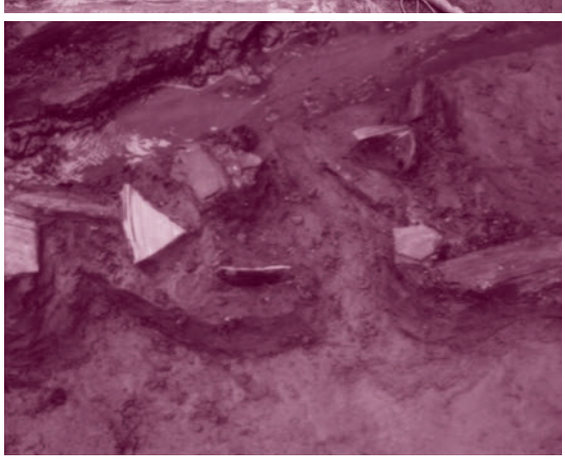


第10面
左：ピットK1-10143
右：ピットK1-10247
柱根検出状況

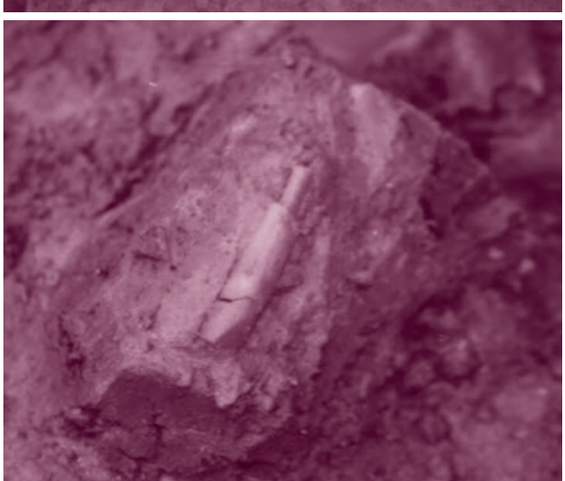



第９面
左：Ｋ１調査区全景
（北より）
右：竪穴住居
Ｋ1－3・Ｋ1－4
全景（北より）

第８面
大溝ＵＫ－００１
左：全景（北東より）
右：遺物出土状況
（北東より）

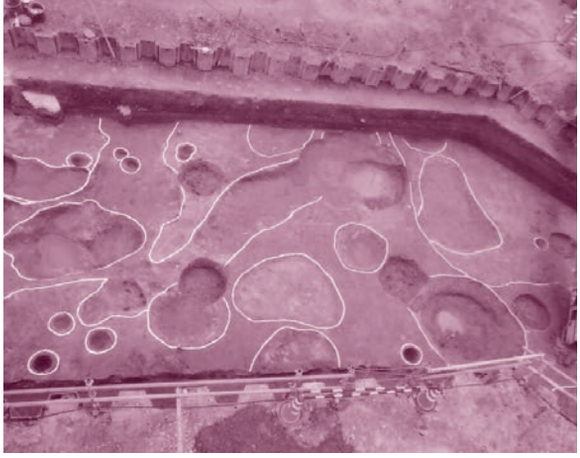
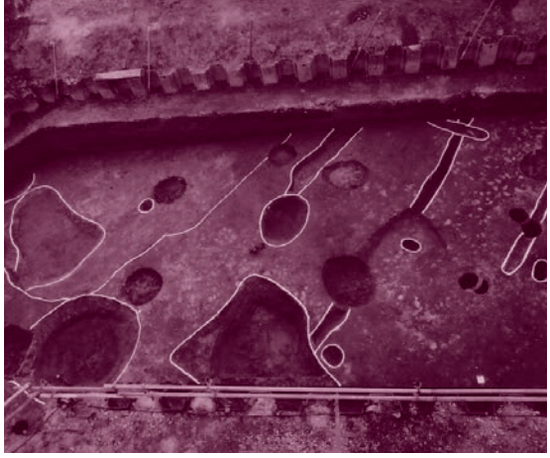



第８面
大溝ＵＫ－００１
左：遺物出土状況
（北より）
右：同　部分拡大

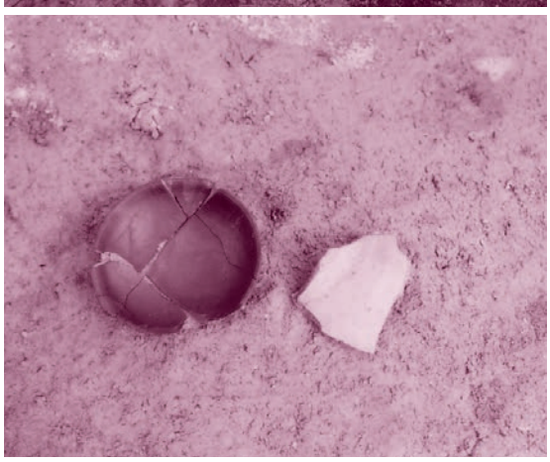


第８面
大溝ＵＫ－００１
左右：木製品出土状況

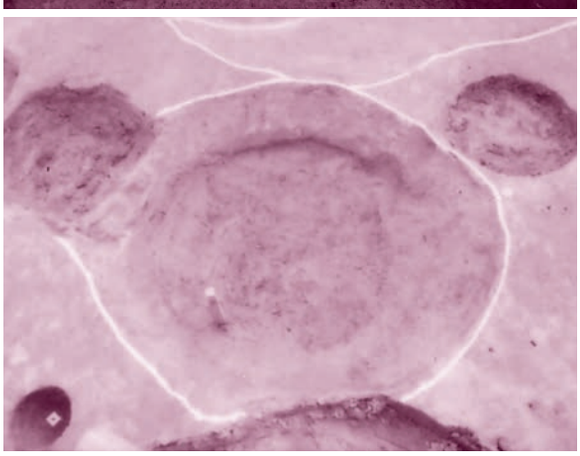
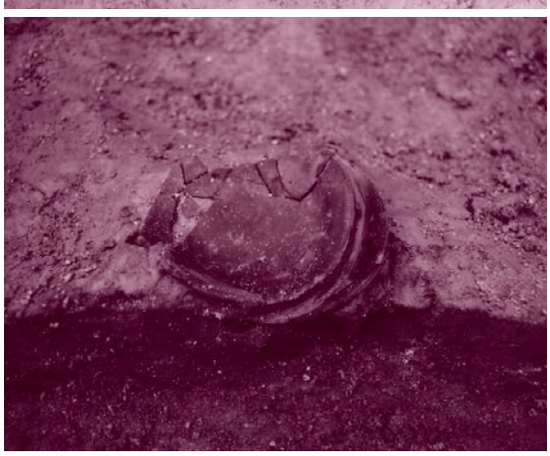
図版33　飛鳥時代以降　K2・K3調査区

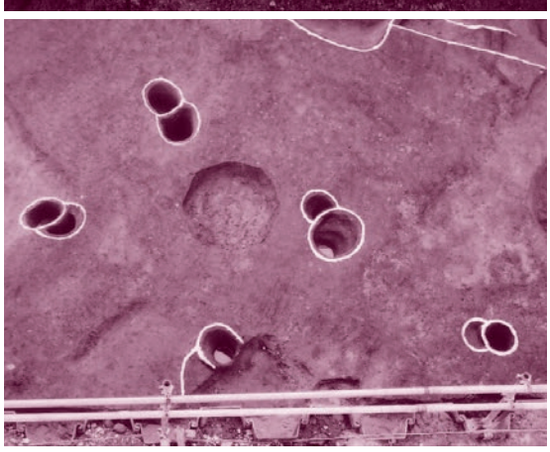
第４面
Ｋ２調査区
左：東部（北より）
右：中央部（北より）



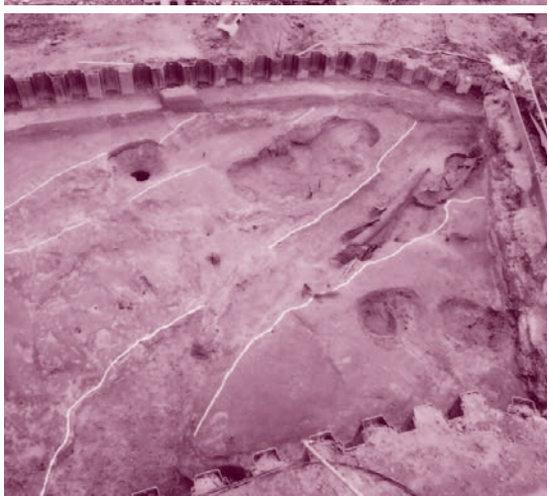
第４面
左：土坑K2-04050
　　断面
　　遺物出土状況
右：同　部分拡大

第４面
土坑Ｋ２−０４０５７
左：全景（北より）
右：遺物出土状況

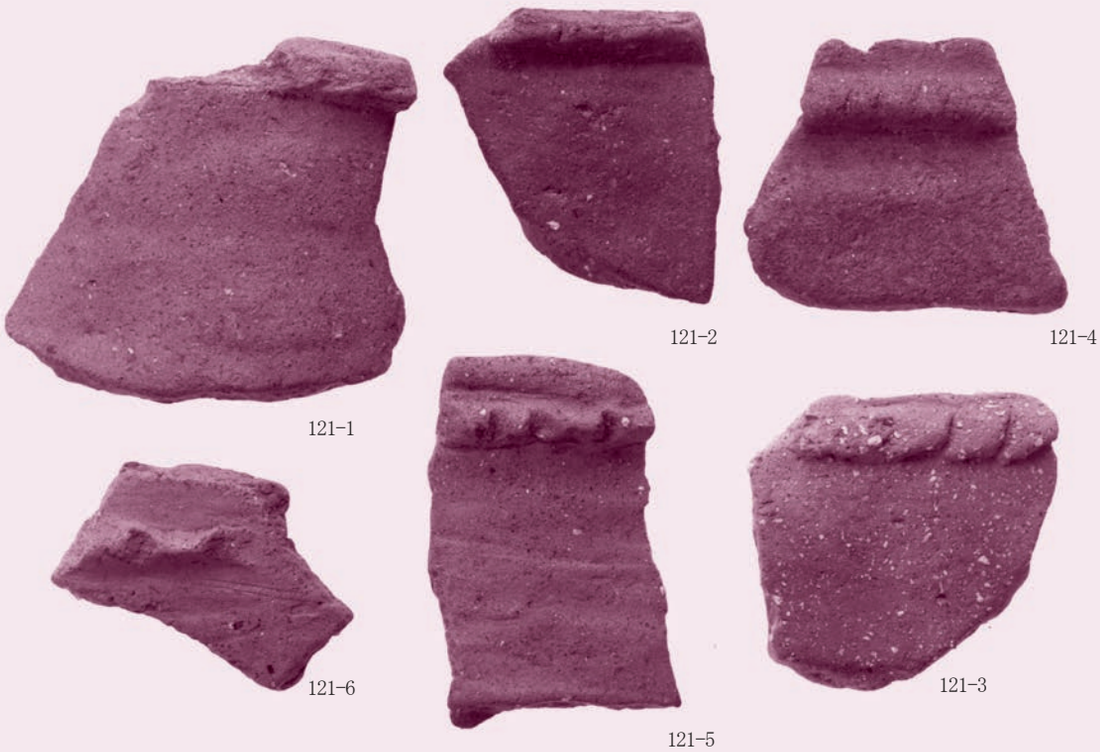


第３面
Ｋ２調査区
左：西端部（北より）
右：掘立柱建物
　　Ｋ２−０３００１
　　全景（北より）



Ｋ３調査区
八丁堤道
左：東半部（北より）
右：西半部（北より）

図版34 弥生時代出土遺物（1） K1調査区



121-1

121-2

121-4

121-6

121-5

121-3

121-7

121-8

121-9

125-1

125-3

125-5

125-2

図版35　弥生時代出土遺物（2）　K1調査区

122-5

121-21

122-1

122-10

122-7

122-8

図版36 弥生時代出土遺物（3） K1調査区

125-4

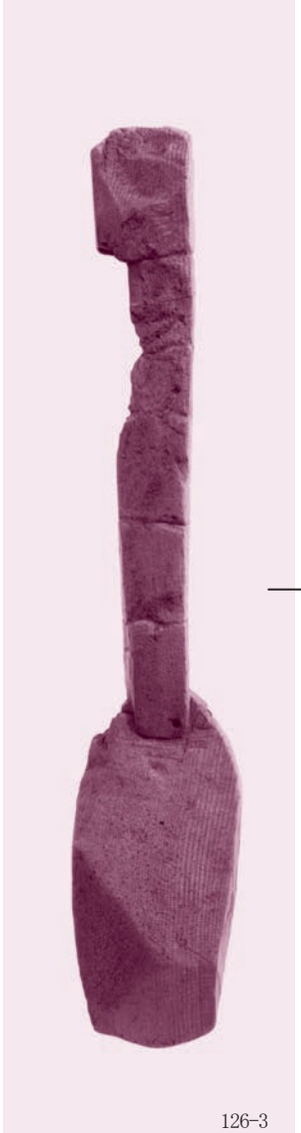
123-8

123-17

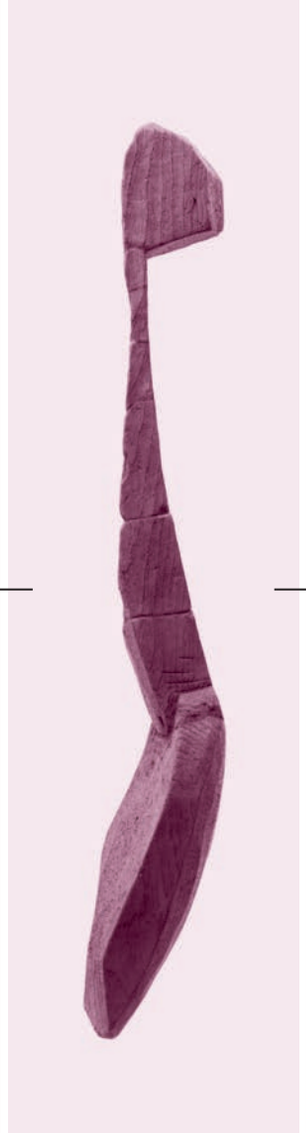
123-10

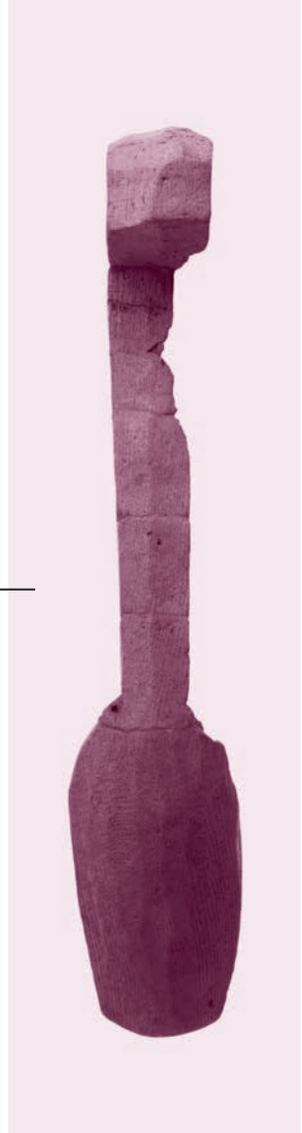
124-15

123-11



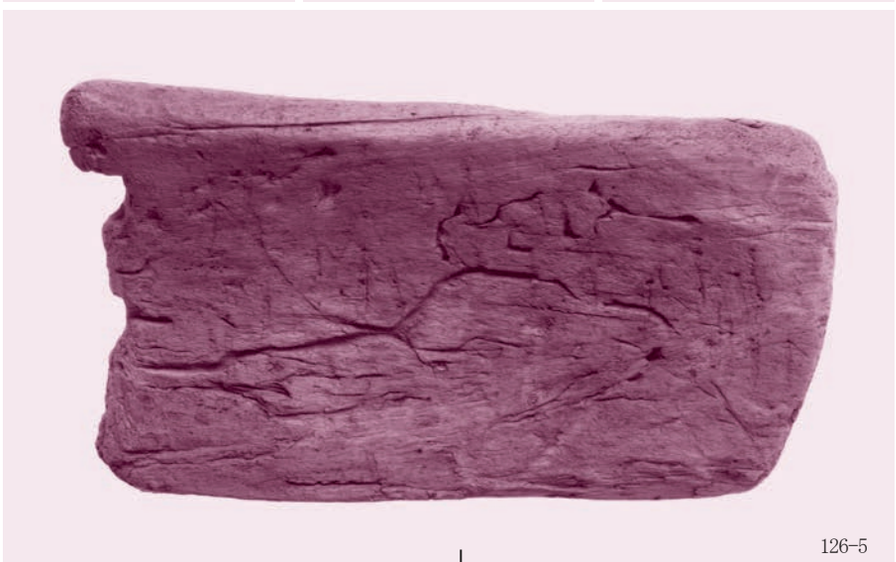
126-3



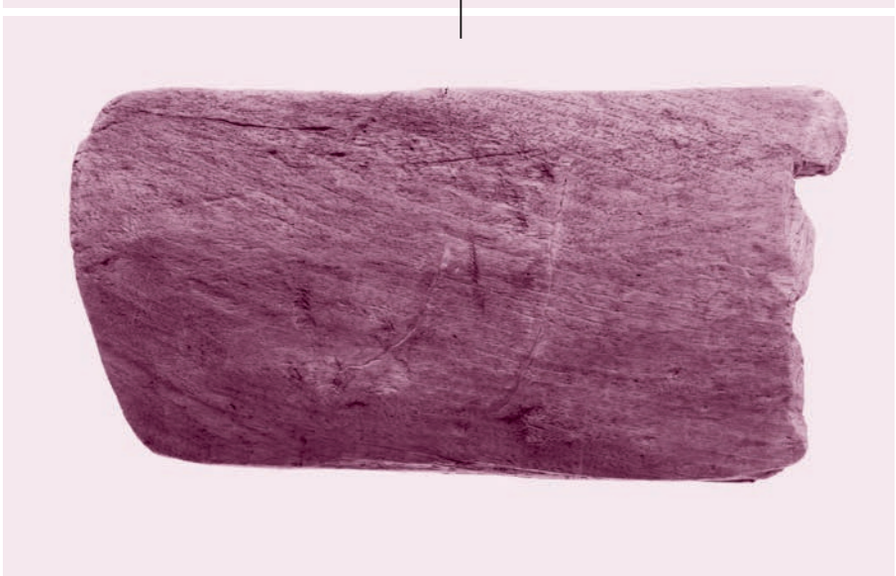


126-2

126-1



126-5

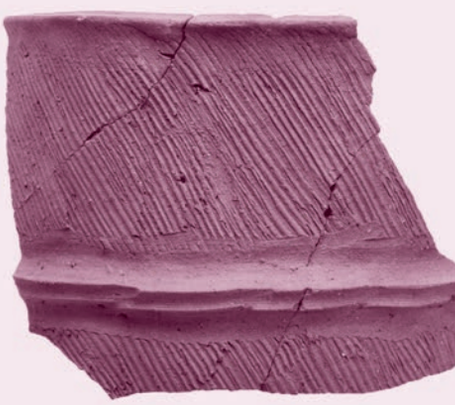


126-4

127-7

127-8

127-11



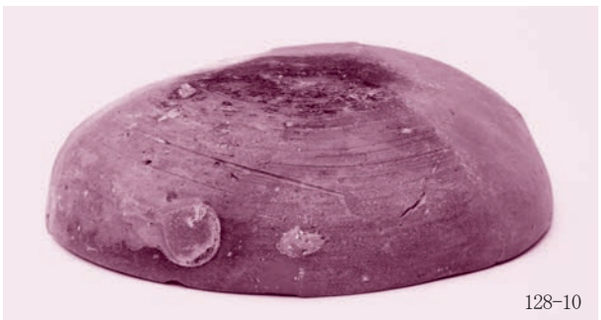
127-5

127-12

127-13

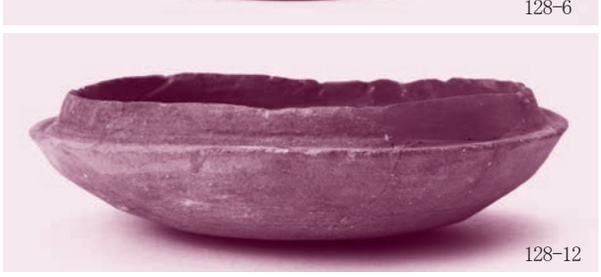
図版39 古墳時代出土遺物（2） K2調査区

128-15


128-10

128-8

128-6


128-12

128-11

128-13

129-1

128-21

128-22

128-17

129-5

129-3

129-2

129-4

129-9

129-8

129-6

129-7

129-15

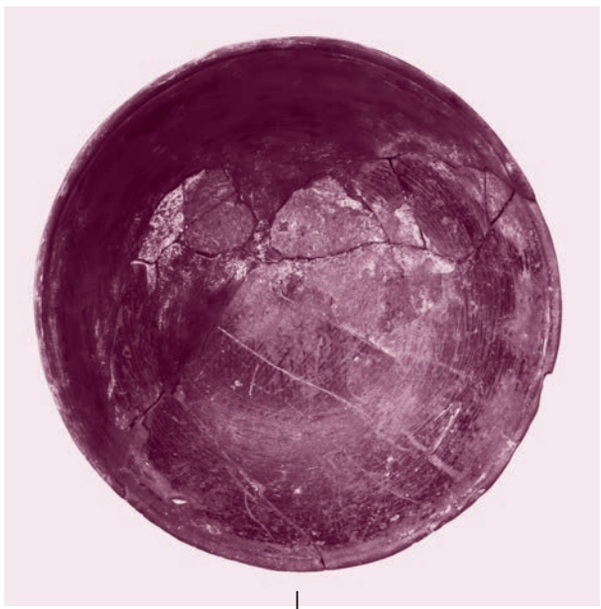
129-16

153-3

130-14

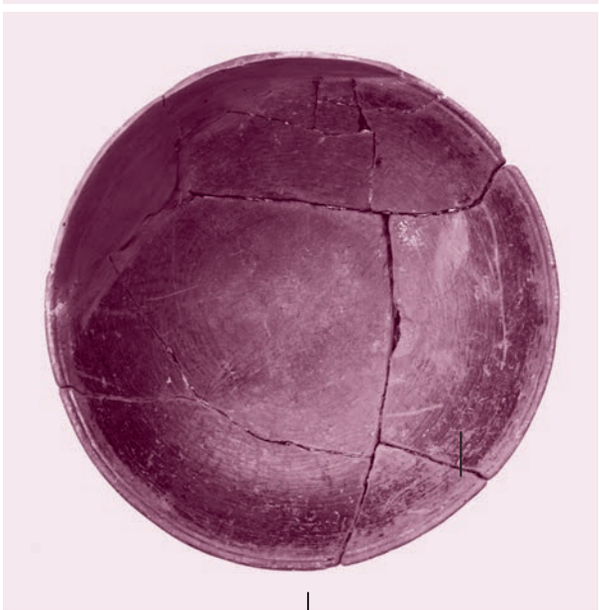
131-14

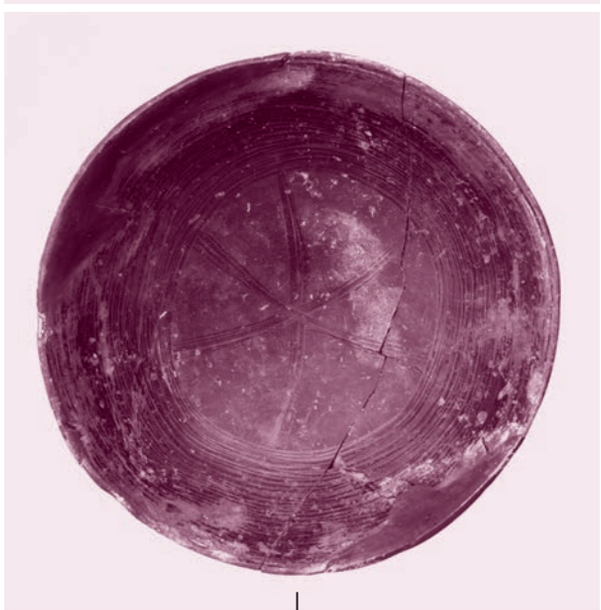
156-8



130-7

156-2





156-1

156-3

134-1

134-4

134-3

134-2

134-6

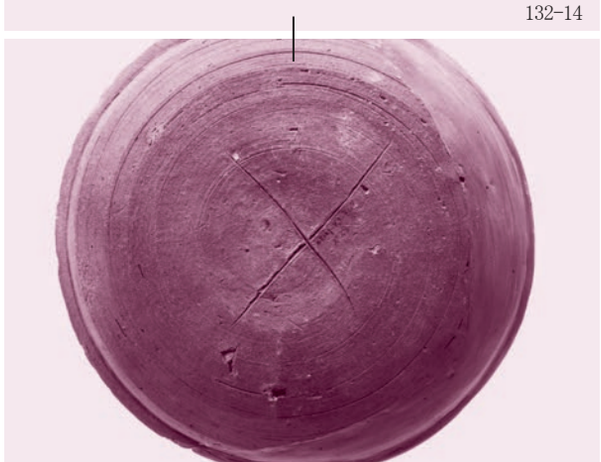
134-5

134-10

132-9

132-14

132-10



132-23

132-15

133-10

133-6

133-12

133-13

133-9

133-11

図版45　古墳時代出土遺物（8）　K3調査区

133-15

133-14

133-7

135-5

135-9

135-14

135-17

135-19

135-1

135-23

135-26

135-29

135-31

136-6

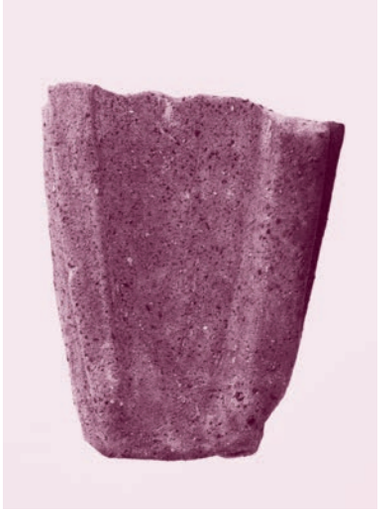
136-3

150-13

136-13

136-11

136-15



151-4

136-12

153-7

134-25

137-26

137-25

137-3

137-4

137-1

137-12

137-8

137-7

137-9

137-5

137-13

137-14

137-27

137-15

137-18

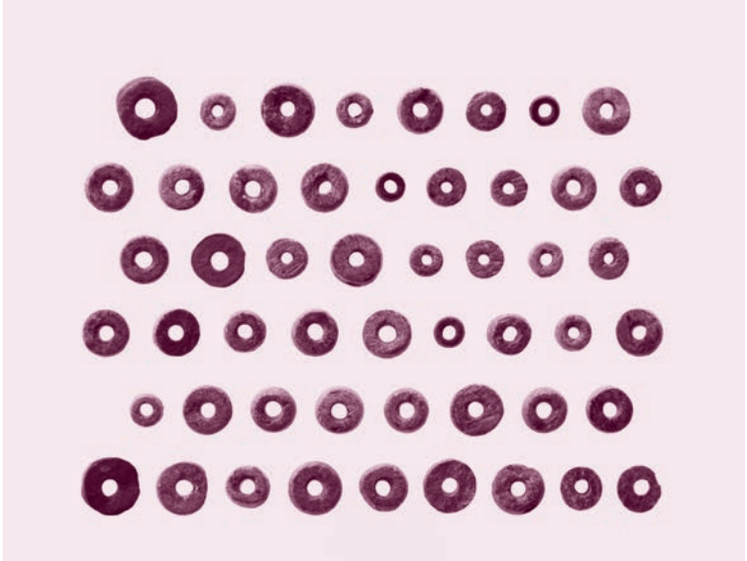
137-19

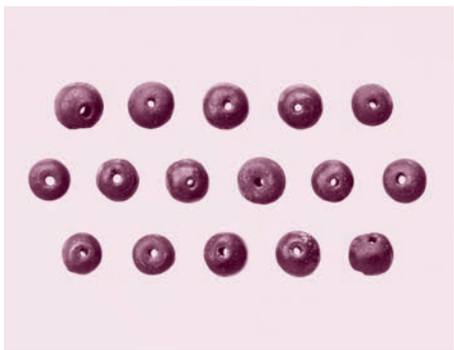
137-21

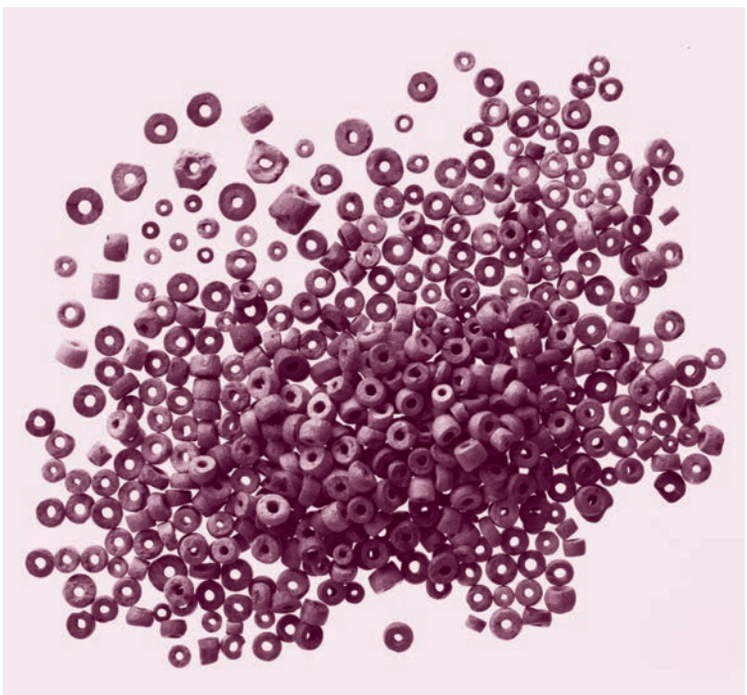
137-20

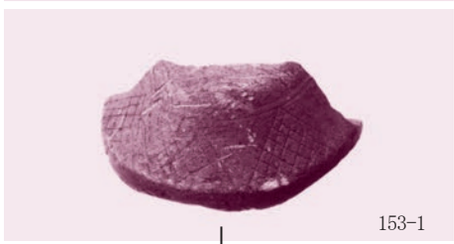
137-22

137-16

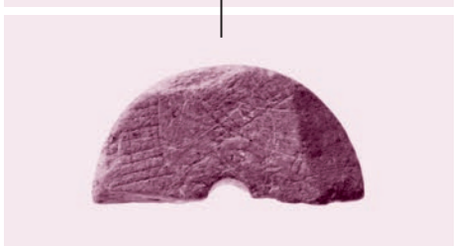








153-1



137-24

図版51　古墳時代出土遺物（14）　HT1調査区

図版52　古墳時代出土遺物（15）　K1調査区

138-1

138-2

138-5

138-6

138-13

138-7

138-14

138-15

138-21

139-38

139-34

139-35

139-29

139-31

139-25

139-30

139-20

139-22

139-21

139-36

138-22

141-1

141-4

141-8

142-26

141-7

142-33

142-29

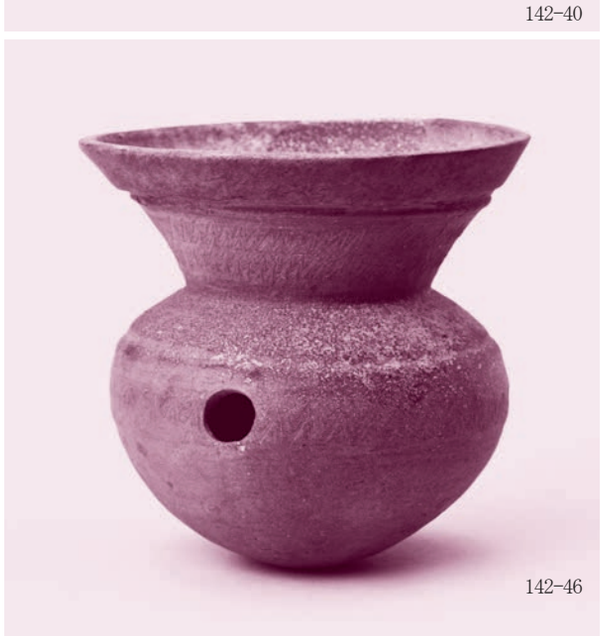
142-28

142-39

142-30

142-40

142-35


142-46

142-38

144-12

144-8

144-6

144-15

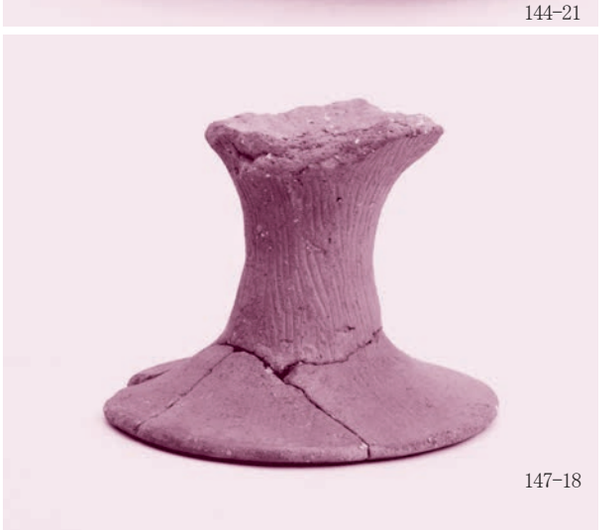
144-26

144-25

144-24

144-31

144-21


147-18

144-28

147-5

147-8

147-1

156-12

156-11

145-9

149-16

149-17

143-13

139-32

143-12

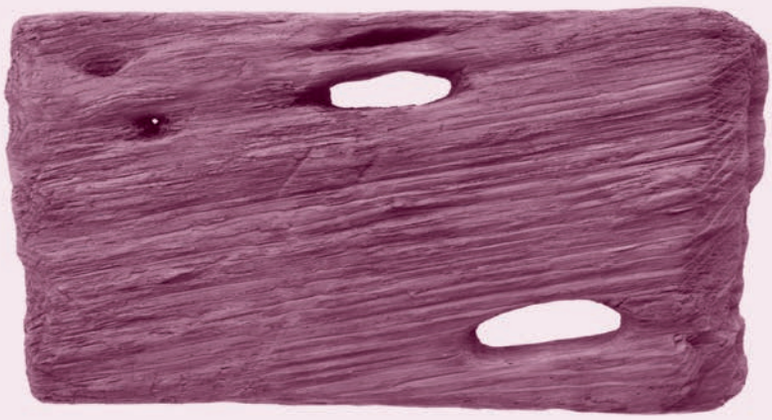
143-21

144-14

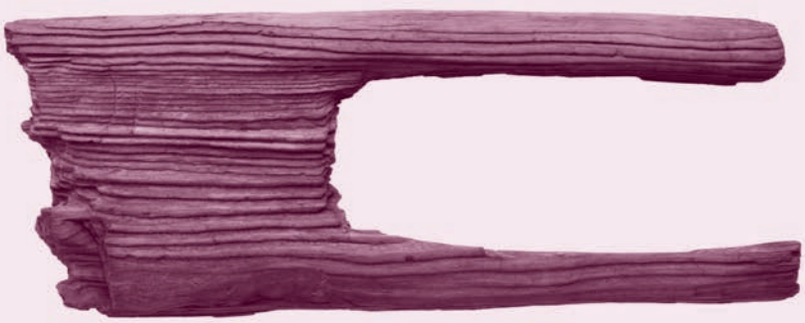
148-7

146-5

146-7



155-1

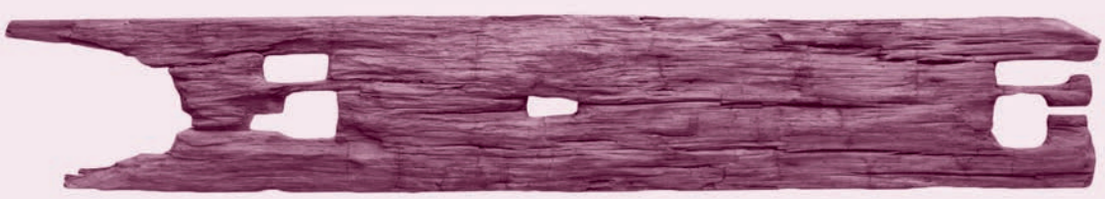


155-2

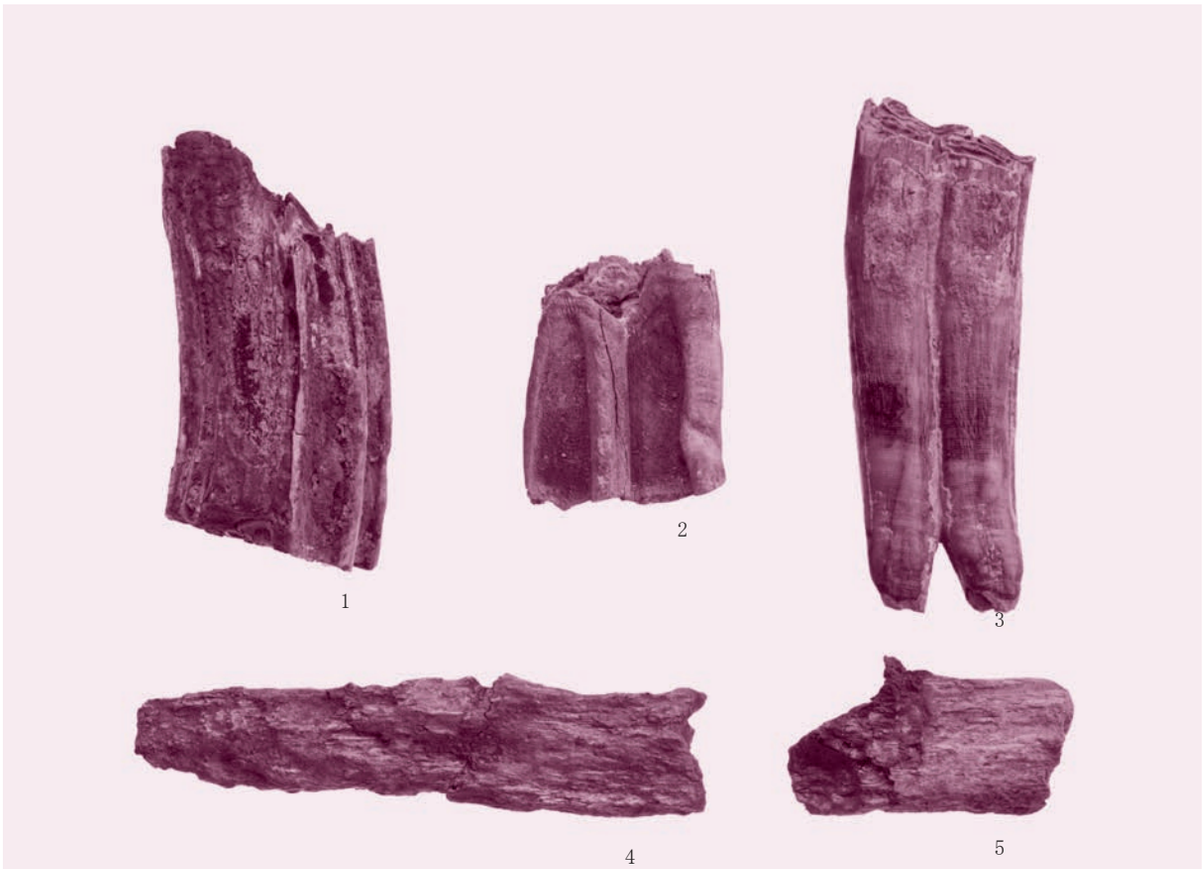
155-7

155-8

154-1

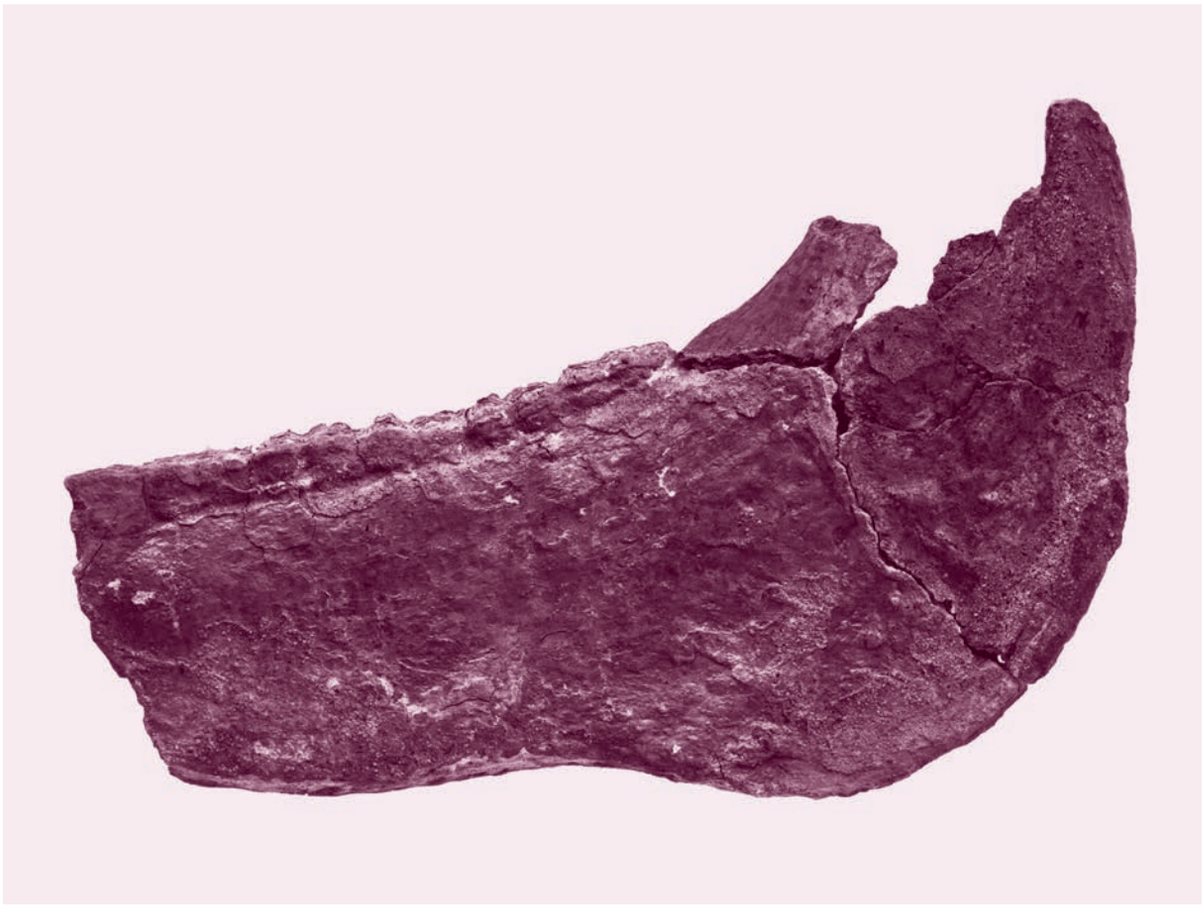


154-2



(1) ウマ上顎第４前臼歯Ｌ　(2) ウマ上顎第３or ４前臼歯Ｒ　(3) ウマ下顎第１後臼歯？
(4・5) 大型哺乳類長骨片 (1. 土坑 K3-09038　2. 土坑 K1-10194　3. 流路 K1-08013　4・5. 大壁建物 K3-1)

ウマ下顎骨Ｌ (井戸 K3-09192)



ウマ下顎骨Ｌ（大溝 E090001）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしとみやきたいせき　に
書名	蔀屋北遺跡Ⅱ
副書名	なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2011－1
編著者名	岩瀬　透、岡田　賢、横田　明、宮崎泰史、藤田道子、三辻利一
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL 06－6941－0351（代表）
発行年月日	2012年3月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
しとみやきたいせき 蔀屋北遺跡	しじょうなわてし 四条畷市 しとみや　すな 蔀屋・砂	27229	7(51)	34° 44′ 25″	135° 37′ 52″	平成18年11月24日から 平成22年3月31日	1,929㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蔀屋北遺跡	集落跡･生産域	弥生時代 古墳時代 古代 中世	弥生時代中期の竪穴住居、方形周溝墓、土坑、溝、古墳時代中･後期の竪穴住居、大壁建物、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、ピットなど	縄文土器、弥生土器、石器、陶質土器、韓式系土器、須恵器、土師器、U字形板状土製品、製塩土器、土玉、臼玉、木製品、黒色土器、瓦器	弥生時代中期の集落の検出、古墳時代中・後期の大壁建物、竪穴住居、掘立柱建物、井戸などの検出 韓式系土器、U字形板状土製品、移動式カマドなどの朝鮮半島との関わりを示す遺物の出土。
要約	調査地の北端部付近で、竪穴住居、方形周溝墓、井戸、土坑、溝などからなる弥生時代中期の集落が検出され、弥生土器、石器、木器などが出土した。 調査地のほぼ全域で、大壁建物、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、溝などからなる古墳時代中･後期の集落が検出され、須恵器、土師器、須恵器系土器、韓式系土器、製塩土器、U字形板状土製品、移動式カマド、石製品、木製品、馬骨などが大量に出土した。蔀屋北遺跡では、これまでに古墳時代中･後期の遺構･遺物が大量に検出され、初現期の河内の牧の様相の一端が明らかになったが、今回の調査では、これらを補填する成果が得られた。				

大阪府埋蔵文化財調査報告2011−1

蔀屋北遺跡Ⅱ

―なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査―

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目
TEL　06(6941)0351(代表)

発行日　平成24年3月30日

印　刷　株式会社中島弘文堂印刷所